サドで邪悪な召喚獣if～サドとちっちゃな幼なじみ～

まあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サドで邪悪な召喚獣ｉｆ～サドとちっちゃな幼なじみ～

【Ｎコード】
Ｎ２５８７Ｐ

【作者名】
まあ

【あらすじ】
もし、世界が繋がっていたら
この世界はどうなるんだろう？
もし、あいつがいてくれたら
俺は変わる事が出来たんだろうか？

この世界は可能性

そんな世界の『ｉｆ』

サドで邪悪な召喚獣のｉｆストーリーです。

本編から『前田理音、怜生』兄弟。
ＧＡＵさんのオリキャラ『支倉ひばり』や他の小説家さんのオリキャラを貸していただき進んでいきます。

楽しんでいただければ幸いです。

自サイト『悠久に舞う桜』でも連載しています。

設定やらいろいろ

この小説は『サドと邪悪な召喚獣』のｉｆの物語です。ＧＡＵさんの小説のオリキャラ『支倉　ひばり』を交えた世界です。彼女がいる事で変わった世界。その中で理音とひばりはどうするんでしょうか？

出演キャラ（予定）

作者の小説

『サドと邪悪な召喚獣』より、前田理音、怜生。

『本と勇気の演劇部』より、本宮葵。

『恋と理性と幼なじみ』より、清瀬大樹。

『秘めた想いと倒錯娘』より、弓永深月。

ＧＡＵさんの小説

『バカと雲雀と召喚獣』より、支倉ひばり。

レフェルさんの小説

『俺と彼女と召喚獣』より、秋月終夜。

ヒョウガさんの小説

『バカと発明と召喚獣』より、海谷陸、マーナ。

マロさんの小説

『バカとテストと優等生？』より、沢渡美咲。

クロさんの小説

『バカとテストと召喚獣～文月学園のカラス～』より、烏丸大貴、沖田静馬。

あづまさんの小説
『バカとテストと報告者』より、保科望、白石沙耶。

ひばりの存在は大きく理音は母親と和解をしております。スタートは明久達が文月学園に入学する少し前からです。

文月学園クラス名簿。（この名簿はキャラクターが登場するたびに更新されます）

１－Ａ
久保利光
保科望
清水美春
玉野美紀
弓永深月

１－Ｂ
秋月終夜
烏丸大貴
清瀬大樹
前田理音
木下優子

１－Ｃ
白石沙耶
支倉ひばり
姫路瑞希
本宮葵

１－Ｄ

木下秀吉

坂本雄二

土屋康太

吉井明久

島田美波

予習問題

「待って、待ってよ。理音くん」

「……」

幼い日の記憶。

自分が全てを失ったと勘違いしていた日の記憶。

「止まって!?　止まってよ!?」

「……」

まだ幼さの残る顔立ちをした理音と呼ばれた少年の腕を小さな少女がつかみ。少年を引き止めようとしているが少女には圧倒的に腕力が不足しているようで少女は少年に引きずられて行く。

「……ひばり、放せ」

「いや。この電車に乗らなくたって、飛行機には間にあうなら、あたしの話を聞いて」

理音は少女をひばりと呼ぶと冷たく感情など混じっていない淡々とした声で言うが、ひばりには退けない理由があるようで理音から手を放す事はない。

「……」

「理音くん、お願いだから、アキくんがおばさんと玲生くんを連れてくるから、日本を離れる前にもう1度、話しをしてお願い」

「……あの人は俺を恨んでいるんだ。くるわけないだろ」

ひばりは旅立つ理音に彼と彼の母親との間にある誤解だけでも解きたいようだが、理音は表情もなく言うと、

「……ダメだよ。ケンカしたままなんて、さびしいよ。悲しいよ」

ひばりは何かを思い出しているのか、理音の腕をぎゅっと握りしめ、瞳には涙を浮かべる。

「……ひばり」

「理音くんだって本当はわかってるんでしょ。おじさんが死んじゃって、おばさんだってさびしいのに、おばさん1人じゃ、理音くんを守れないから、また理音くんが同じ目に遭うかもしれないから留学先の人は理音くんをきちんと守ってくれるって……」

ひばりはボロボロと涙を流し、理音の母親に対する誤解を解こうと必死で理音に言う。

「……」

「お願い」

理音はひばりの様子に困ったようで無表情だった顔が小さく歪み、

「……わかった。次のまで待つよ。アキにも旅立つ前に会って起き

たいしな」

「うん」

理音は苦笑いを浮かべ、ひばりの頭を優しく撫でるとひばりは瞳に涙を残したまま笑顔を見せた時、

「ひばり、リオは？　……良かった。まだいてくれた」

「アキ」

「アキくん、おばさんは？」

2人の幼なじみの1人の明久は全力で走ってきたようで、2人を見つけて苦しそうに言う。

「玲生くんもいるから、走れないし、ボクもひばりに合流しようと思って」

「なら、おばさんは」

「くるよ。ボク1人じゃ、無理だったけど、葵ちゃんや姫路さんもおばさんを説得してくれたんだ」

明久は笑顔で言うと、

「理音」

明久の後ろから、理音の名前を呼ぶ声が聞こえる。

第1問

（……こんな夢を見るなんてホームシックか？）

『前田　理音』は研究所の机の上で眠っていたようで目を覚ますと先ほどまで見ていた夢を分析しようとする。

（……あの日、ひばりとアキが居なければ俺の心は壊れたままだったろうな）

自分が母親の吐いた嘘を信じて母親を拒絶し、外国に旅立とうとした時、幼なじみの『支倉　ひばり』はその小さな体で理音を引き止め、『吉井　明久』は理音に憎まれようとした母親を理音の元まで引きずってきてくれた。

そんな日の夢。

（……会いたいと思うのは疲れてるからか？）

欠伸をしながら、自分の中にある大切な幼なじみ2人の姿を思い浮かべて苦笑いを浮かべる。

（……4月から、あいつらも高校に入学するんだよな。アキが高校に入れる事に驚きだが、ひばりがどうにかしたんだろ）

先日、ひばりから送られてきたひばりと明久が『文月学園に合格した』と言うメールがあり、それには明久、ひばりが着なれない制服を着た写真が添付されており、理音は見た目が別れた日と変わっていないひばりの様子を見てくすりと笑うと、

「ダメですよ。マスター、無愛想で何を考えているかわからない前田博士があんな風に笑ってるって事は爆発程度じゃ済みませんよ」

「黙れ。ポンコツ、行かないなら、俺がお前を爆発させるだけだ」

同じ研究所に所属している『海谷　陸』と陸が作ったロボット『マーナ』の声が聞こえ、

「……希望なら、跡形も残さないでやる」

理音は話の内容に不機嫌そうに言う。

「す、すいません!?　前田博士!?」

「方法は何だ？　やはり、爆発か？」

マーナは理音の言葉に慌てて謝るが、陸は理音がマーナを破壊する手段に興味があるようで楽しそうに笑う。

「爆発は破壊にムラが出るから、パスだ。だいたい、非効率だ」

「何を言ってる爆発はロマンだ」

理音は陸の言葉を効率が悪いと言うが陸には陸のポリシーがあるため、理音に考えを改めろと言う。

「爆発時に起きうる全ての現象を予測するのがロマンなのは納得できるが意味のない爆発は非効率だ。科学の進歩に逆行している」

「前田、お前はわかっていない。飛び散る火花や轟音、破壊された機器から産まれる新たなもの。これが爆発の素晴らしいところだ」

「あ、あの。マスターも前田博士も落ち着いてください」

理音と陸の会話にマーナは何か嫌な予感がしながらも2人を仲裁しようとするが、

「ふ。それなら、勝負だ。勝負方法はどれだけ、このポンコツを破壊できるかだ」

「面白い。その勝負、受けてやる。二度と起動できないようにハードもソフトも破壊しつくしてやろう」

陸は平行線の話に決着をつけると言うと理音の顔は彼特有の何かを企んでいるような邪悪な笑みに変わり、

「面白くないです!?」

マーナは身の危険を感じ逃げ出そうとするが、

「お前みたいなポンコツが俺から逃げ切れると思っているのか?」

「全くだ」

2人のいかれた科学者はマーナを捕まえ、楽しそうに笑っている。

「ま、待ってください!? マスター、マスターは前田博士に用があったはずです!? 本題からずれてます」

「なに、些細な事だ」

「……本題？」

マーナは2人に考えを改めてくれと言うが陸は止める気はないが理音は首を傾げる。

「マスター、マスター、前田博士に渡すものが有りましたよね」

「……前田、後でも良いな」

「いや、先に渡せ。そのポンコツの破壊はいつでもできる」

マーナは必死に陸よりは理音の方が話がわかると思っているのか説得を理音に絞ると理音はマーナの言葉に興味を示す。

「たいした事じゃない。藤堂と言うヤツから、俺と前田にエアメールが届いていたんだ」

「こ、これです」

「……藤堂？　あのばばあか？　ろくな内容じゃないだろうな。だいたい、何でエアメールだ？　電話やメールの方が楽だろ」

理音はマーナから手紙を受け取り、乱暴に開け、

「……文月学園のシステム解析？　海谷、お前のも同じ内容か？」

「あぁ。俺はやりかけの研究もあるし、今のところ受ける気はないがな」

「……そうか」

理音と陸には文月学園学園長『藤堂　カヲル』から、依頼があり、陸は興味なさそうに言うが、理音は先ほどの夢の事もあるため、眉間にシワを寄せる。

「何だ？　行くつもりか？」

「俺は昨日で研究のメドも付いたし、里帰り程度で受けるのもありかな？　とな」

理音は依頼を検討する価値があると言うと、

「海谷、悪いな。俺は部屋に戻るから、俺のラボから出ていけ」

「あぁ」

理音はあくびをすると研究室から陸とマーナを追い出した後、理音が住んでいる部屋に戻る。

第1問（後書き）

どうも、作者です。

ついに始まってしまいました。

ｉｆストーリー。

ヒロインどうしよう？

せっかくのｉｆだし、ひばり？

理音の相手はやっぱり、優子？

理音への片想いの少女、葵？

ＧＡＵさんがひばりヒロインの許可をくれたらアンケートをとってみよう。

第2問

「……召喚システムの解析か？」

理音は自分の部屋に戻りベッドに寝ころばると自分の父親の恩師であり、自分の留学先を探すのに尽力してくれた『藤堂　カヲル』の顔を思い出し、

「……吐き気がしてきた」

気持ちが悪くなったようで顔をしかめる。

「確かに面白そうではあるが、専門外なんだよな。俺は薬学や医療系が専門だし、俺よりは海谷の方が……いや、世界初のシステムを破壊させるわけにはいかない」

手紙を眺めながら、自分の専門外だと言うが、

「……だけど、ガラでもないな」

先ほど見た夢を思い出してひばりと明久に会いたいと思った自分がらしくないと苦笑いを浮かべた時、

「ん？」

部屋に備え付けてある電話がなる。

「……はい」

「くそじゃりかい？　あたしからの手紙は届いたね」

「……」

理音はめんどくさそうに電話に出るとカヲルからの電話であり、理音はとりあえず、電話を切り、

「さてと」

電話線を引き抜こうとするが、当然、直ぐに電話が鳴る。

「……いきなり、何も言わずに切るんじゃないよ」

「……うるさいぞ。くそばばあ」

カヲルは文句を言うが、理音は反省する気はない。

「それで、催促の電話か？」

「あぁ。日本に戻ってきて、あたしの仕事を手伝いな」

「……なぜ、俺だ？　日本にはあんたが抱えている研究所もあるだろ」

理音はカヲルが自分と陸を誘った理由がわからないく聞くと、

「うちは試験校だし、スポンサーの要求とかね。あたしにもいろいろあるんだよ」

「スポンサーに外部から研究者を招き入れろとでも言われたわけか

？」

「そう言う事だよ。一応、そっちの所長にも話を通したし、あんたの専門分野をやるラボくらいは用意するよ」

カヲルは理音を招き入れる準備をしてあると言う。

「いや、あんたが用意したものは遠慮する。何があるかわからないからな」

理音はカヲルに任せる気はないと言うと、

「俺も自分の研究が終わったところだから、1度、そっちに帰る。その時に顔を出す。受けるかはその時だ」

「そうかい。なら、気をつけて帰ってくるんだよ」

理音は1度、日本に帰ると言い、カヲルが気をつけろと言うと、

「ばばあ、あんたに言われるまでもない」

「……訂正するよ。周りに被害を出さずに帰ってくるんだよ。じゃあね。くそじゃり、帰ってくる日が決まったら連絡しな」

理音の言葉にカヲルは何かを感じたようでため息を吐くと、電話を切る。

「さてと……ひとまず、寝るか」

理音はあくびをした眠くなってきたようでベッドの上に倒れ込む。

第2問（後書き）

どうも、作者です。

ばばあとの会話のみ、こんなんで良いのか？と言った感じです。（苦笑）

とりあえずは日本に戻る理音は明久やひばりに連絡を入れるのか？（苦笑）

アンケートです。

ヒロインをどうするか？先日、ＧＡＵさんからひばりヒロイン化計画におっけ～を貰えたので皆さんにご意見をいただきたいです。

1．せっかくのコラボな小説だし、『支倉ひばり』

2．やっぱり、理音には『木下優子』しかいない。

3．理音への片思いな巨乳娘『本宮　葵』

ひばりとの関係でこの話は結末が変わりますからね。割と重要なアンケートですね。（苦笑）

期限は１０問くらいまで？です。

ご協力お願いします。

第3問

「アキくん、おばさんがおかしいんだよ」

明久はせっかくの春休みに惰眠をむさぼっていたのだが、幼なじみのひばりが朝から押しかけてくるなり、まだ頭が起きていない明久に向かい言うと、

「……ひばり、いきなり言われても意味がわからないから」

明久は布団から這い出てあくびをしながら言う。

「……アキ兄ちゃん、おはようございます」

「ん？　怜生くん、おはよう」

ひばりは春休み中は理音の弟の『前田　怜生』を預かっているようで怜生と明久は朝の挨拶をすると、

「それで、おばさんがどうかしたの？」

ひばりに聞き返す。

「朝、怜生くんを預かりに行った時、すごく浮かれてたんだよ。今まで見たことないくらいに……あれは男の人がいるのかな？」

「おばさんが浮かれてるなら、リオが帰ってくるんじゃないの？それにおばさんはおじさんと高校卒業して直ぐに結婚したんだし、まだ若くてきれいなんだから、そう言うのだってあるよ」

ひばりは心配そうに言うが、明久はあくびをしながら言うと、

「でも、理音くん、帰ってくる時はあたしかアキくんに連絡くれるでしょ。アキくんに連絡きた？　それにお付き合いしてる人がいるなら、いるで言って欲しいよ」

「リオから、連絡はきてないけど、おばさんに付き合ってる人がいるかも知れないってのはひばりの勘違いだよ」

ひばりの心配を明久は否定するとテレビの電源をつける。

「怜生くん、リオから家に電話きてた？」

「きてないです。お兄ちゃん、電話はあまりしてきません」

明久は怜生に理音から何か連絡があったかと聞くと怜生は首を振る。

「だいたい、怜生くんがいるところで話す話しじゃないでしょ」

「うん。そうだね。アキくん、朝からごめんね。怜生くん、あたしのお家に行こう」

「お兄ちゃん」

ひばりは頷き、明久に謝った後、テレビの前にいる怜生に声をかけると怜生はテレビの画面を見て理音を呼ぶ。

「えっ！？　リオが出てるの？　またすごい薬を作った……はい？」

「……ハイジャック犯を『若きいかれた天才前田博士』が撃退。乗客にケガは無し？　……理音くんは何をしてるのかな？」

明久とひばりは理音が新しい薬を発明したと思ったようでテレビを覗き込むと2人が予想していたニュースとはまったく違うニュースを放送しており、

『犯人以外にも前田博士も機内に危険物を持ち込んでいたため……』

「煙あがってるね」

「飛行機を壊したらいくらかかるのかな？」

テレビ画面に映る機内から煙があがっている飛行機の映像に明久とひばりは顔をひきつらせる。

第3問（後書き）

どうも作者です。

ひばり、明久の朝の一コマでした。
ニュース番組は気にしちゃいけません。（爆笑）

アンケート

葵3票。

ひばり1票。

優子0票。

まさか、出だして葵に好スタートをきられるとは思っていなかった。
（苦笑）

葵はノリで書いたんですけどね。
話し考えつくかな？（苦笑）

後、感想のユーザー指定を外すのを忘れてました。すいませんでした。

第４問（前書き）

今回はマロさんの『バカとテストと優等生?』から沢渡美咲に参加していただきました。

第４問

（……迎えがきてると言う話だったが、さすがに飛行機も遅れたしな。いるわけないか）

理音は日本に着くとカヲルから迎えがあると聞いていたため、周りを見回すとすぐに空港を出て行こうとすると、

「ちょっと、前田博士、１人で行かないで」

「ん？」

１人の少女が理音を見つけて駆け寄ってくる。

「お前がばばあの言っていた。迎えか？　外見から推測すると俺と同い年くらいに見えるが」

「同じ年よ」

「そうか。迎えがくると言うから、車でも用意してると思ったんだけどな。気が利かないばばあだ」

理音はカヲルの人選にため息を吐く。

「仕方ないのよ。迎えに行く前にあんな映像を見せられたら、誰も迎えになんか行きたくないでしょ」

「なら、お前もくる必要はない。毎年、何日かは帰ってきてるんだ。迷子になどならん」

理音の態度に少女はため息を吐くが、理音は気にする事なく、歩き出す。

「ちょっと、待ちなさいよ。前田博士」

「……大声で呼ぶな。博士もいらん」

少女は理音を呼び後を付けてくると、理音はうるさいと言いたげに言う。

「えーと、それなら、理音君で良いのかな？　同じ年だし」

「好きに……ん？」

「名前言ってなかったわね。アタシは『沢渡　美咲』。主任……藤堂博士には昔からお世話になっているわ」

美咲は自分の名前を名乗るとカヲルと関係を簡単に説明する。

「ほぅ。その年でばばあを主任と呼ぶと言う事は沢渡は研究所員か？　なかなか、優秀なようだな」

「そうでも無いわよ。ちょっとした縁でね。それにそれを言ったら、すでに第一線で成功している。理音君や海谷博士はどうなるのよ？」

理音は美咲に興味を持ったようで感心した用に言うと美咲は少し小バカにされたように感じたのかムッとすると、

「ん？　すまない。気に障ったようだな」

理音は美咲に頭を下げる。

「あれ？」

「どうした？」

「いや、理音君みたいな人は軽々しくアタシみたいな人間に謝らないと思ったから」

美咲は理音の行動に驚いたようでキョトンとすると、

「……沢渡は俺を何だと思ってるんだ？」

「えーと」

理音は表情を変える事なく聞き返し、美咲は理音から視線を逸らし気まずそうに笑い、

「……ゴメン」

小さな声で謝る。

「謝るなら言うな。それに俺も悪いようだしな。表情が乏しいから勘違いされるとよく言われる」

「理音君にそんな事を言う人間がいるんだ？　意外かも……ひょっとして、彼女とか？」

理音の言葉に美咲は理音の弱点を見つけたと思ったのかニヤニヤと

笑うが、

「幼なじみだ」

「女の子？」

「男と女。１人ずつ」

理音は隠す必要などないとあっさり答える。

「なんかつまらないわね」

「お前を楽しませるために生きてなどいない」

美咲は理音の表情につまらないと言うが、理音は表情を変える事なく言う。

第４問（後書き）

どうもです。

研究所員から避けられた理音。

まぁ、ニュースになればね。（苦笑）

美咲と一緒にばばあの元へ。どうなるでしょう？

第5問

「……くそじゃり、あんたは何をやってるんだい？」

「正当防衛だ」

美咲とともに文月学園学園長室を訪れるとカヲルは理音の顔を見るなり、ため息を吐くが理音は悪い事はしていないと言い切る。

「……飛行機1台、ダメにして言う言葉じゃないだろ」

「主任、その件なんですけど、ただの煙幕みたいで飛行機には被害はなかったみたいです。海外でのニュースだったので日本にはまだ正確な情報が伝わってなかったみたいです」

カヲルは呆れたように言うと美咲は学園までくる途中で理音から事の詳細を聞いたようで苦笑いを浮かべて言う。

「……本当かい？」

「俺は海谷とは違う爆発に魅力は感じない」

「……ハイジャックに遭遇したのがあんたで良かったのか。わからないねぇ」

カヲルは美咲の言葉を確認すると理音は興味なさそうに言い、カヲルはため息を吐く。

「それより、俺は無駄話をしにきたわけじゃないんだ。さっさと詳

しい話を聞かせろ」

「その前にあたしからも聞きたい事があるんだけど良いかい？」

理音はすでにハイジャック事件はどうでも良いと言うとカヲルは真剣な表情になり、理音に何かを聞こうとする。

「最近あった外部からの召喚システムのデータ改ざんなら俺だ。少しずつ証拠を残してやったからな。気づける人間がいるなら合格だ」

「……くそじゃり、あんたね」

「えーと、主任、理音君、どう言う事？」

理音はカヲルの言いたい事を言い当てるとカヲルは頭が痛いと言いたげに頭を押さえ、美咲は意味がわからないようで2人に聞き返す。

「研究所の所長から、ここ数日、学園と研究所の召喚システムに不正アクセスがあるとは聞いてなかったかい？」

「そう言えば、それで研究所員は忙しそうにして……理音君が犯人！？」

カヲルがため息を吐きながら美咲に聞くと、美咲はそこで話が繋がったようで驚きの声をあげるが、

「改ざんと言ってもたいした事はしてない。基本的に不正アクセスに対応するための防衛システムの強化しかしてないからな。だいたい、世界初のシステムと言う割には防御がお粗末すぎる」

理音は悪いことをした気はなく、学園と研究所の召喚システムの防衛システムはザルだと言う。

「……研究所でも防衛システムには力を入れてるはずなのに簡単に侵入できるんだ」

「まぁ、俺が侵入者で良かったな。海谷なら自爆プログラムを散布して行くぞ」

「……天才って変わり者ばかりって言うけど、ここまで変わってるのね」

美咲は顔をひきつらせて言うが、理音は気にする事なく、

「ばばあ。俺を招き入れると言うなら、俺はやりたいようにやるが問題ないな」

「……いじった場合はそれをレポートとして提出してくれれば問題ないよ」

「わかった」

理音はカヲルの答えを聞くとすでに用はないと学園長室を出て行こうとするが、

「待ちな。くそじゃり、あんたは一応、この学園の新入生として席を置いて貰う事になるよ。問題ないかい？」

「……俺に今更、学生に戻れと言うのか？」

カヲルは理音の立場を文月学園生徒とすると言うと理音は眉間にシワを寄せる。

「あたしにもいろいろと考えがあってね。生徒達の召喚システムの考えを聞くのにはちょうど良いだろ」

「……俺に向く作業とも思えないが」

「大丈夫さね。うちにはあんたの幼なじみ2人も入学してるからね」

カヲルはニヤリと笑うと、

「……それで、アキが入学できたわけか？」

「吉井明久……確かにひどい成績だったけど、あたしが無理やり合格させたわけじゃないよ。さすがにそんな事はできないからね」

理音は明久が文月学園に入学できた理由をカヲルが力添えしたと言うが、カヲルは苦笑いを浮かべて否定すると、

「……わかった。条件を飲ませて貰う。入学式までには日本に戻ってくる」

理音は学園長室を出て行き、

「主任、あんな条件を出して良いんですか？」

「心配かい？　なんなら、あのくそじゃりを監視するのにあんたも文月にくるかい？　希望するなら所長に話を通しておくよ」

美咲は理音の背中を見送った後、カヲルにつかみかかるように言うがカヲルは苦笑いを浮かべる。

第5問（後書き）

どうもです。

明久、餌疑惑？（爆笑）

実際、ひばりのような面倒見の良い幼なじみがいたら、明久はFクラスになるのかな？とか思いますね。（苦笑）

アンケートは

ひばりが2票になりました。

他は変わらず、

葵が3票。

優子が0票。

やはり、巨乳か。（爆笑）

第6問（前書き）

今回はレフェルさんの『俺と彼女と召喚獣』より、『秋月　終夜』の登場です。まぁ、お互いに名乗りませんがね。（苦笑）

第6問

（……さてと、急ぐか。日本に着く便が遅れたから、あいつらに会って行く時間はないな。墓参りを済ませてさっさと帰るか）

理音は文月学園をでると時間を確認し、父親の眠る墓地に向かって歩いていると、

「……スイマせん」

1人の少女が理音にぶつかる。

「いや、悪い。こっちも急いでいたからな」

「？」

理音は少女の手を取り、少女を立ち上がらせて謝るが、少女は日本語がわからないようで戸惑っているように見える。

「英語はわかるか？」

「……わかリマせん」

理音は少し考えてから英語を話せるかと少女にも聞き取りやすいようにはっきりと区切り聞くが少女は自信なさそうに首を振る。

「何なら話せる？」

「ドイツご」

「ドイツ語か」

理音は少女からの返答を聞くと、

『ぶつかって、すまなかった。俺も急いでいたから、気がつかなった』

『私こそ、ごめんなさい。引っ越してきたばかりでよそ見してたから』

ドイツ語で少女に話しかけると少女は理音がドイツ語を話す事に驚いたような表情をして答える。

『ん？　どうかしたか？』

『ドイツ語を話せる人がいると思ってなかったから』

理音は少女に驚いている理由を聞くと少女は苦笑いを浮かべる。

『まぁな。俺も日本人相手に英語ならまだしもドイツ語で話すとは思ってなかった。それで、引っ越してきたばかりだと言っていたが、迷子にでもなったか？』

『……恥ずかしながら』

理音は少女に向かい聞くと少女は気まずそうな表情で言う。

『……交番に連れて行っても言葉が通じないしな。どこに行きたいんだ？』

『連れてってくれるの？』

『わかるところならな。俺も年に数日しか帰ってこないから、わからないところもあるしな』

理音は苦笑いを浮かべると、

『良いの？』

『あぁ。知らない土地で1人でいるのは不安だろ。それくらいはわかるつもりだ』

『ありがとう』

少女は理音の言葉に礼を言った時、

『美波、こんなところにいた』

『終夜？』

少女の知り合いらしき少年が少女を『美波』と呼び駆け寄ってくると少女は少年を『終夜』と呼ぶ。

『……ったく、どこに行ってたんだよ。あれだけ、離れるなって言っただろ』

『あんたの歩くのが速すぎるのよ』

終夜と呼ばれた少年は呆れたように言うと少女は頬を膨らませる。

『彼氏が迎えにきたようだな』

『ちが！？　違うわよ！！』

『えーと、あんた誰だ？』

理音は2人の様子に少年が少女の恋人だと思い言うと少女は全力で否定し、少年は理音の言葉に悪い気はしていないようで笑顔を見せて聞く。

『いや、名乗るほどの者じゃないが、余所見をしていたせいか、ぶつかってしまってな。聞くと言葉がわからない土地で迷子だと言うからな』

『そうか。すまなかった。もう大丈夫だ』

『ありがとうございました』

理音は簡単に状況を説明すると少年は理音に頭を下げると続いて少女も頭を下げ、

『あぁ。こちらこそ。ぶつかってすまなかった。俺はこれから用があるから、これで失礼する』

理音はもう1度、少女に頭を下げると先を急ぐと言い、歩き出す。

『なんか、特殊な空気を持ったヤツだったな？』

『そうね……あっ！？』

『どうかしたか？』

『名前を聞くのを忘れたわ』

『まぁ、縁があればまた会うだろ。それより、早く買い物済ませて帰るぞ。葉月も待ってるだろうしな』

『そうね』

2人はそう言うと並んで歩き出す。

第7問（前書き）

2話続けての更新です。

作者の『恋と理性と幼なじみ』より『清瀬　大樹』の登場です。

ヒョウガさんの『海谷　陸』とは幼なじみな関係になりますね。（苦笑）

第7問

「怜生くん、夕飯は何が食べたい？」

「お姉ちゃんが作るご飯ならなんでも良いです」

ひばりは怜生と手を繋いで商店街で夕飯の買い物をしていると、

「ん？　怜生くんに支倉、買い物か？」

怜生が４月から通う幼稚園の先生の息子の『清瀬　大樹』が２人を見つけて声をかけてくる。

「ヒロ先生」

「清瀬くんもお買い物？」

大樹はヒマな時は幼稚園の手伝いもしているため、この辺の小さな子供に懐かれており、怜生は大樹に駆け寄り、ひばりは怜生の様子に苦笑いを浮かべながら大樹が商店街にいる理由を聞く。

「あぁ。うちの両親、２人で泊まりで出かけたからな。夕飯と朝飯の買い物……ったく、息子の飯くらい用意していけよな」

「それだけ、清瀬くんは頼りになるんだよ」

大樹は怜生の頭を撫でた後、面倒だなと言いたげに頭を掻くとひばりは苦笑いを浮かべる。

「あぁ。そう言えば、支倉、今朝のニュースの前田博士って、俺の勘違いじゃなかったら、怜生くんの兄貴だよな？」

「……恥ずかしながら」

大樹は理音の事を知っているようでひばりに聞くとひばりは大樹から視線を逸らして笑う。

「いやいや、責めてないから、むしろ、おかしな幼なじみがいる身としては前田博士で良かったと思う。俺の幼なじみだったら、飛行機は大破、乗客も何人に被害が出てたかわからないしな。ヘタしたら、家にまで取材がくる」

「えーと、そんな人が居るの？」

大樹は幼なじみの陸の顔を思い出して苦笑いを浮かべながら言うとひばりは大樹の言う人間が想像つかないようで顔をひきつらせる。

「前田博士から聞いてないか？　陸からは良く前田博士の話を聞くんだけどな」

「陸？」

「俺の幼なじみ。前田博士と同じ研究所にいるって言ってたけど」

大樹は陸から理音の話を聞いているようで話をするが、

「……ごめんね。理音くん、帰ってきてもあまり研究所の話をしないから」

ひばりは理音から聞いた事はないと謝る。

「まぁ、知らない人間に話しても仕方ないしな。俺としては陸の相手をしてくれる人間がいてくれて嬉しいんだけどな。陸はなんと言うか性格破綻してるから」

「あはは。でも、清瀬くんには大切な幼なじみなんでしょ？」

「まぁな」

大樹は陸の事を思い出してため息を吐くがひばりは大樹の表情に大樹にとって幼なじみの陸がどれだけ大切かわかるようで笑顔で聞くと大樹は照れくさそうに笑うと、

「ヒロ、助けて！！」

「ミハル、マチナサイ。ドウシテニゲルンダイ？」

大樹に助けを求めながらこちらに爆走してくる少女と背後に黒いものを垂れ流した中年男がこちらに向かい走ってくる。

「えーと？」

「悪いな。怜生くん、支倉、俺はちょっとやる事ができた」

ひばりはこちらにかけてくる2人の様子に顔をひきつらせるが、大樹はなれているのか疲れたようなため息を吐く。

「警察、呼ぼうか？」

「いや、ただの娘ラブが行き過ぎた父親だから、気にするな」

「ヒロ先生、気をつけてください」

「あぁ。気をつけるよ」

ひばりは目の前で行われている異常さに携帯電話を取り出しながら大樹に言うが怜生の頭を優しく撫でた後、2人を追いかけて行く。

「……世の中にはいろんな人が居るんだね」

「……」

ひばりは大樹の背中を見てつぶやくと怜生は何かに気づいたのか大樹が走って行った方向とは逆側に走り出し、

「えっ!?　ちょっと、怜生くん、どこに行くの?」

ひばりは慌てて怜生の後を追いかけると、

「お兄ちゃん」

「ん?　怜生、どうした?」

怜生が少年を『お兄ちゃん』と呼び、少年のズボンをつかむと少年は怜生に気づき優しい声で怜生を呼んだ後、怜生を抱きかかえる。

第7問（後書き）

どうも、作者です。

ひばりの目の先に映る理音。

2人の再会は？感動的？　……ないな。（爆笑）

第8問

「嘘？　なんで？　……」

ひばりの目の前には怜生を抱き上げた理音が立っており、ひばりは信じられない光景に言葉をつまらせると、

「ん？　ひばり」

理音はひばりに気づき、怜生を抱きかかえたまま、ひばりのもとに歩き、

「しばらく、見ない間に縮んだな」

「縮んでないよ！？」

表情を変える事なく言い切り、理音のあまりに失礼な言葉にひばりは声をあげるが、

「怜生、ひばりの声は聞こえるが、ひばりがいないぞ。どういう事だ？」

「絶対に見えてるよね！？　あたし、そんなにちっちゃくないよ！？」

理音は、もう1ボケするとひばりは頬を膨らませて反論する。

「冗談だ。人混みで騒ぐな」

「理音くんが言う事じゃないよ」

理音は見なれたひばりの反応にくすりと笑うがひばりはせっかくの再会に優しい言葉1つない理音を見て不満そうな表情をすると、

「悪かったな。ひばり」

「……子供扱いしないでよ」

理音は優しげな声で言い、ひばりの頭をそっと撫でるがひばりは理音の態度が不満なようで頬を膨らませる。

「……訂正する。身長は伸びてはいないが、成長したな」

「どこを見てるの!?」

理音は頬を膨らませるひばりをフォローする事なく、彼女の身長の割に育っている胸を見た後、マイペースに話し、ひばりは顔を真っ赤にする。

「お兄ちゃん、お姉ちゃんが困ってます」

「ん？　そうだな。ひばり、悪いな。相変わらず、かわいいからからかいたくなった」

「……っ!?」

怜生は理音がひばりをからかうのを止めると理音は苦笑いを浮かべて言い、ひばりは今まで見た事のない理音の反応に慌てる。

「ん？　どうかしたか？」

「な、なんでもないよ。それより、理音くんはどうして帰ってきてるの？」

理音はひばりが慌てている姿に声をかけるとひばりは理音がこの街にいる理由を聞く。

「ちょっとした仕事だ。滞在する時間もなかったしな。連絡は入れなかったんだ」

「そうなんだ。それじゃあ、直ぐに帰るの？」

理音は時間がないと言うとひばりは残念そうな表情をするが、

「まだ、少しくらい時間あるよね？　アキくんと葵ちゃんや瑞希ちゃんに連絡するからお茶くらい飲もうよ」

すぐに切り替えて、理音をお茶に誘う。

「悪いな。いろいろあって時間がないんだ。次の電車に遅れるわけにはいかないから、お茶は今度だ」

「そうなんだ」

理音は時間を確認すると本当に時間がないため、ひばりの誘いを断るとひばりは残念そうに頷き、

「怜生、かあさんやひばりの言う事を良く聞くんだぞ」

「はい」

理音はひばりの表情に苦笑いを浮かべた後、怜生を地面におろすと怜生の頭を優しく撫で、怜生は名残惜しそうに理音の顔を見て頷く。

「それじゃあ、行ってきます」

「うん。行ってらっしゃい。理音くん」

ひばりは当たり前のように理音を見送り、理音も当たり前のように歩き出し、

「それじゃあ、怜生くん、買い物して帰ろ」

「はい」

ひばりと怜生は買い物を再開する。

（……ん？　そう言えば、ひばりに4月から帰ってくる事を言えば良かったか？　まぁ、良いか）

理音はひばりに街に帰ってくる事を伝え忘れるが気にする事はない。

第8問（後書き）

どうも、作者です。

ひばりをからかう理音はどうなんでしょうか？（苦笑）

ひばりの前で少しだけ子供じみた行動をする理音は萌えるのか？（爆笑）

アンケート

ひばり、５票

葵、４票

優子、０票

ひばりが逆転しました。

貧乳には日が当たらないのか？

対決はロリとメガネに絞られたのか？（爆笑）

第9問

「海谷、土産だ」

「ん？　あぁ」

理音は日本からの土産を持って、陸の研究室を訪れる。

「……ん？　ポンコツはどうした？」

「うるさいから、そこだ」

理音はマーナの姿が見えない事に首を傾げると陸はめんどくさそうに研究室の隅を指差す。

「前田博士、聞いてくださいよ。マスターは酷いんですよ」

「……黙れ。ポンコツ」

研究所の隅では破壊されたマーナのボディがつまれており、その隣においてある小さなディスプレイから、マーナが理音に助けを求めるが、陸がマーナを怒鳴りつける。

「また、余計な事を言ったわけか？」

「余計な事なんて、言ってないですよ。この間、マスターの幼なじみのヒロさんとのメールを読んでる時の嬉しそうなマスターの映像を録画して見ていたら、マスターが激怒して」

「……充分に余計な事だ」

理音はマーナが余計な事をしたと決めつけると、マーナは否定するが充分に余計な事であり、

「余計な事を言うな。ポンコツ！！」

陸は感情的にマーナを怒鳴りつける。

「で、この状況か」

「前田博士、動けないのは不便です。ボディを直してください」

理音は呆れたようなため息を吐くとマーナは理音に助けてくれと言うが、

「知るか。自業自得だろ」

理音はどうでも良いと言う。

「それで、前田、決めたのか？」

「あぁ、しばらくは日本に戻ってくる。専用のラボの場所を探したり手続きもあるから近日中に戻るつもりだ」

陸はマーナの声を聞いてるのも不快だと言った感じで不機嫌そうな表情で理音にこれからの事を聞くと理音は日本に帰る事を告げる。

「そうか」

「前田博士、マスターが寂しがってますよ。慰めてあげてください」

陸は一言だけ言い頷くとマーナは横から茶々を入れ、

「えぇ!?　マスター、止めてください!?　それ以上やるとボディの修復は無理です!?」

マーナは陸の怒りを買い積んであるマーナのボディが爆発する。

「海谷、破壊するのに爆発は非効率だと言ってるだろ。この薬品なら、金属を一瞬でサビさせる事ができる。効率的だ」

「サビ？　面白みにかける。却下だ」

理音はその様子を見て言うが、陸は理音の薬品では不満だと言う。

「うぅぅ。ボディがボディが」

しばらく、陸の破壊活動が続くとマーナのボディは見る影もなく、マーナはディスプレイのなかで涙を流している。

「それで、土産と帰ると言う報告だけか？」

「あぁ、後は俺の研究データのコピーだ。何かあったら使え」

理音はもったいぶる事なく、陸に研究データを渡す。

「……ふむ。やはり、薬品のデータが多いな」

「そっちが本職だからな」

陸は理音の行動に疑問を持つことなく覗き込むと、

「仕方ない。代わりに俺の研究データもくれてやる」

陸も理音と同じ事を考えていたようで、理音に研究データを渡す。

「また、何かあったら頼む」

「それに見合うデータは貰うがな。それより、研究の邪魔だ。用が済んだらさっさと出てけ」

理音と陸のなかでしかわからない何かがあるのか、2人は何かを話すわけでもなく、陸は理音を追い払い、

「あぁ。邪魔したな」

理音も陸の研究室を出て行き、

「前田博士、助けてください」

マーナの泣き声だけが響く。

第１０問

（……ここか？）

『いらっしゃいませ』

理音は日本に帰ってくると陸から頼まれた荷物を持ち、喫茶店『ラ・ペディス』のドアをあけるとこの喫茶店の店主らしき男性が理音をカウンター席に案内する。

（……とりあえず、飯か）

理音はサンドイッチセットを頼み、

（……海谷はこの店は面白いと言っていたが、何が面白いんだ？）

陸が含みのある笑い方をしていた事を思い出し首を傾げていると、

『どうかしましたか？』

「いや、知り合いから聞いていた店の雰囲気と違うから」

『知り合い？　うちは以前から変わりませんよ』

店主は理音にサンドイッチセットを渡しながら柔らかな笑みを浮かべる。

「そうですか……ん？　そうだ。この店にくれば、『清瀬　大樹』と『清水　美春』に会えると聞いたんですが」

理音はサンドイッチセットを食べながら、陸の荷物を引き取って貰おうと陸から聞いた彼の2人の幼なじみの名前を口にした時、

（ん？）

清水美春と言う名前が出た瞬間に店主の笑みが消え、背後からは黒い殺意（もの）がはみ出してくる。

『ウチノマイエンジェルニナニヲスルキダ。ワカゾウ』

「ん？　知り合いから、その2人に渡してくれと言われたものが……何をする？」

店主の背後からは溢れ出る殺意のすべてが理音に向けられるが理音がそれにひるむわけはなく、店主から理音に向けてナイフが投げられるが理音は表情を変える事なく、そのナイフを交わす。

『ワタシノカワイイミハルヲタブラカソウトスルワケダナ。ワカゾウ、ココカライキテカエレルトオモウナヨ』

「ほう？　確かにこれは面白い」

店主は理音に向け純度の高い殺意を向け、店主の変貌に他のお客さんやスタッフが慌て始めたなか、理音は1人、邪悪な笑みを浮かべる。

『コロス。コロス。コロス』

「頭に血が上りすぎだ。単調でつまらん」

店主の攻撃はまがまがしく、一撃でも喰らえば終わりのようにも見えるが理音は表情を変える事なくつまらないと言い、その攻撃を交わし続けて行く。

「……騒ぎになったって、聞いてきたら、これは何ですか？」

『ヒロ、トメルナ。コノオトコハマイエンジェルニテヲダソウトシテイル。フラチナブタダ。ワタシノメノクロイウチハ、ワタシノカワイイミハルヲコンナブタヤロウニチカヅケサセルワケニハイカナイ』

騒ぎを聞きつけたのか1人の少年が喫茶店に入ってくるなり、店主を止めるが店主が止まるわけはなく、理音に向かい攻撃を続けているが、

「……海谷が言うほど面白くもないな」

『ナ、ナンダ？』

理音はつまらないと言いたげにため息を吐くと、店主は理音に投げ飛ばされる。

「おじさん！？　……はどうでも良いか。悪い。迷惑をかけて」

「別に構わない」

店主が吹き飛ばされた様子に少年は苦笑いを浮かべて、理音に声をかけるが、理音は何も気にしていないと言いながらも、

「ひとまずは鎮静剤を撃っとくか?」

「ちょっと待て!?　それはなんだ?」

懐からピストルのような形のものを取り出すと躊躇する事なく、店主に向かい引き金を引こうとすると少年から邪魔が入るが、

「鎮静剤だ。尋ね人が居るんだが、話を聞いたとたんにこれだからな。少し黙らせる」

理音は気にする事なく、店主を撃ち抜き、

「さぁ、清瀬大樹と清水美春について知っている事を洗いざらい吐いて貰おうか?　……ちっ、量が多かったか」

店主に聞くが、鎮静剤の量が多かったようで店主はぐったりしており、話など聞けそうもなく、理音は舌打ちをする。

第１０問（後書き）

どうも、作者です。

一回目の『いかれた科学者対人外（美春父親）』は理音に軍配があがりました。（爆笑）

ヒロインアンケート結果。

ひばりが1位と言う事でひばりで話を考えていきます。

アンケートにご協力ありがとうございました。

第11問

「えーと」

「お前は清瀬大樹と清水美春を知らないか？」

舌打ちをしている理音を見て、少年は顔をひきつらせていると理音は少年に声をかける。

「念のために聞くけど、その2人を見つけてどうするつもりだ？」

「ん？　知り合いから頼まれた荷物を渡すだけだ」

少年の疑問に理音は隠す必要を感じないため、ありのままを答えると、

「知り合い？」

「ん？　ひょっとして、お前が清瀬大樹か？」

少年は首を傾げ、理音は少年の反応に何かを感じたようで少年に聞く。

「あぁ。俺が清瀬大樹だ。それで、あんたの知り合いってのは？」

「あぁ、海谷陸と言ういかれた科学者だ」

少年は理音に向かい名乗ると理音は陸から預かりものを取り出そうとカバンをあさり始めると、

「陸から？」

「あぁ……どこやったかな？　これは違うし」

「……あんた、手品師か？」

大樹は思ってもいなかった幼なじみの名前に首を傾げている目の前で、明らかにカバンのサイズからは考えられない荷物が積み上げられていくため、顔をひきつらせて理音に聞く。

「……何をわけのわからない事を言ってるんだ？」

「いや、明らかにおかしいだろ」

「……わけのわからない事を言うな……ん？　これだな」

大樹は顔をひきつらせているが、理音は興味もなくカバンをあさり続けて目的のものを見つけると大樹の前に小箱を2つ出す。

「何か聞いてるか？」

「いや、しかし、海谷の事だ。開けたら爆発するだろうな」

「だろうな」

大樹は目の前の小箱を見て疑問を口にすると理音はその小箱は爆発すると言い切ると大樹も同じ意見のようで頷く。

「……なぁ。あんた、爆発物とわかってるものをどうやって持って

帰ってきたんだ？」

「ん？　あの程度の金属探索機で俺や海谷が作る物を発見できるわけがないだろ」

大樹は単純な疑問を理音に聞くと理音は当たり前の事を言うなと言い切ると、

「それじゃあ、目的のものは渡したぞ。俺は用があるから、これで失礼する。飯代はここに置いておく」

「あぁ。おじさんには言っておくよ」

サンドイッチセットの代金を置くとカバンを持って喫茶店を出て行く。

「……しかし、これはどうしたら良いんだ？　とりあえず、１個は美春に渡してくるか？」

大樹は残された小箱を見てため息を吐くと、ぐったりしている店主の体を揺すり、

「ヒロくん、私はどうしたんだい？」

「まぁ、気にしないでください。片付け、俺も手伝いますけど、ちょっと待っててください。荷物置いてきますんで」

起きた店主に頭をさげると陸からの荷物を持って、１度、大樹は喫茶店を出て、

「……さてと、ひとまず、これをどうするかだな」

理音に渡された小箱を手にため息を吐いた時、

「ヒロ、それ、何？」

「ん？　美春？」

大樹と陸のもう1人の幼なじみである『清水　美春』が大樹の手の小箱を手に取る。

「あぁ。さっき、俺と美春に渡してくれと……」

「美春の何かな？」

「待て。美春、危ない！？」

大樹は美春に陸からの荷物だと言おうとするが、美春は大樹の言葉を聞く前に小箱を開け、

「な、何なのよ！？」

小さな炸裂音とともに煙りが上がり、

「……送り主は陸だ」

「何がしたいのよ！？　あの爆発野郎は！？」

美春は迷惑な幼なじみの顔を思い出して、額に青筋を浮かべて叫ぶ。

「さあな。それより、1個開けたなら、2個も一緒だろ。これも開けてくれ」

「開けるわけないでしょ！？」

大樹は美春に自分の小箱も開けるように言うが、当然、美春は断る。

（……あいつ、開けたな。あれでなかなかのチャレンジャーだな。確かに面白い幼なじみだ）

理音は後ろから聞こえた炸裂音と立ち上っている煙りを見て、いつもと違う優しげな笑みを浮かべて幼なじみの事を話す陸の顔を思い出して苦笑いを浮かべる。

第１２問

「遅いわよ。普通、人に頼み事しておいて、時間に遅れる？」

「悪かったな。こっちにもいろいろあったんだ」

理音が向かった先には、美咲が待っており、遅れてきた理音に文句を言うが理音が気にするわけがない。

「それで、ちゃんと完成したんだろうな？」

「知らないわよ。あたしは建築とか改築の事なんて知らないんだから、理音君が見てよ」

理音は日本に戻るにあたり、自分の研究所を準備するために美咲に立ち会いを頼んだようだが、美咲はいきなりの事で不満気な表情をして言いながら、理音の代わりに預かった研究所の鍵を理音に渡すと、

「そうか？　お前も自分のラボを建てる時に必要になるから勉強しておけ」

理音は受け取った鍵で研究所のドアを開けてなかに入って行くと美咲は理音の後を追いかける。

「アタシは理音君とは違うわよ。研究所持ちになんかなれないわよ。それにアタシは理音君と違って１つの分野しか手が回らないわよ」

「そう思ってると本当に持てないぞ。自分の専門以外にも頭に知識

をいれろ。あんまり、専門分野しか見ていないと柔軟な考えが出来なくなるぞ」

部屋を見て周りながら、美咲は先ほどの理音の言葉にため息を吐くと理音はそんな美咲の姿に少しムッとした表情で言う。

「そんなものかな？」

「あぁ。ばばあが俺と海谷に声をかけたのも同じ理由だろ。まったく、余計なお世話だ」

美咲は首を傾げると理音はカヲルの考えをくだらないと言う。

「くだらなくはないんじゃないの？」

「ばばあに言われるまでもなく、そんな事は理解している」

美咲は理音からカヲルの考えを聞き言うが、理音は興味なさそうに言うと、

「今のお前が所属している研究所は召喚システムの解析など各分野のシステム解析がメインの研究だろ。他にも、１つ、２つやって見ろ。興味がある分野があるなら、俺の持ってる研究データを見せてやる」

美咲に協力してやると言う。

「良いの？　科学者に取って研究データってかなり大切なものよ。簡単に他人に見せるものじゃないでしょ？」

「俺達、科学者は顔も知らない誰かのために新たな技術を探すんだ。絶対に1人じゃ、手も回らない。知識の共有は必要な事だが、変なプライドを持ってるヤツが多いからな。実際、それができる科学者ってのはわずかだ」

美咲は理音の言葉を信じられないと言う表情をするが、理音は興味なさそうに当たり前の事だと言い切ると、

「……なるほどな。お前が俺を迎えにきたのは俺が起こした事件のせいだけじゃなさそうだ」

カヲルの性格から、理音と美咲を引き合わせたのはカヲルの考えだと言う。

「どういう事？」

「ばばあがお前に期待してるって事だ」

美咲は理音の言葉の意味がわからずに首を傾げると理音は表情を変える事なく答え、

「……まぁ、日本で揃えられるのなら、こんなものか？　後は荷物が届かないとどうしようもないな」

「ねぇ。1人で研究するのにこんな設備いるの？」

完成した研究所の設備を見終えて頷くと美咲は必要以上の設備に顔をひきつらせるが、

「必要かどうかは俺が決める」

理音は言い切り、

「と言うか、いつから用意してたのよ？　この間、帰ってきてから用意できる設備じゃないでしょ？」

「ん？　ばばあから連絡あった日からだ。如月グループに連絡して土地を見つけて貰って、すぐに着工した」

「……ずいぶんと用意周到ね」

美咲は理音の言葉にため息を吐くと、

「まあな。召喚システムは俺から見れば興味深い玩具だ。やるなら、徹底的にやらないといけないだろ」

理音は新しい玩具を手に入れた時の子供のような無邪気な笑みを浮かべる。

第13問

「アキくん、おばさんがおかしいんだよ」

「……ひばり、春休みなんだから、もう少しゆっくり寝かせてよ」

明久は春休みのため、昼まで寝ようと思っていたのだが、先日と同じようにひばりに起こされ、

「……だいたい、いくら、幼なじみだって言っても、同じ年の男の部屋に入ってこないで」

明久は警戒する事なく、自分のベッドにちょこんと座るひばりを見てため息を吐く。

「アキくん、冗談を言わないで、それより、聞いてよ」

「……わかったよ。おばさんがどうしたんだよ。と言うか、この前も怜生くんがいるところで話す事じゃないって言ったよね」

明久はひばりがまだ理音と怜生の母親に男がいると疑っていると思いため息を吐くが、

「……あれ？　怜生くんは？」

今日はひばりが怜生を連れてきていない事に気づく。

「そうなんだよ。今日から3日間、おばさん、出張になるって言ってたから、怜生くんを預かる予定だったんだけど、昨日の夜に電話

があって怜生くんを預かってくれる人がいるって」

「それは確かにおかしいね」

理音が帰ってきている事はひばりと明久には伝わっておらず、2人は少し不安そうな表情をする。

「でも、男の人って決まったわけじゃないだろ。おばさんの友達かも知れないし」

「だけど、いきなりだよ。本当に親しいか、怜生くんに取り入ろうって言う男の人かも知れないじゃない？」

怜生は理音が自分の研究所の一室に連れて行っているのだが、事情を知らないひばりの頭の中ではあるはずのない男がいると完全に思い込んでいる。

「……なら、どうするのさ？　おばさんは出張中だし、それにそんな事は聞けないだろ」

「それは……」

明久は結局は理音の母親しだいだと言うとひばりは納得がいかなさそうな表情をし、

「理音くんに聞いてみよう。理音くんなら、何か聞いてる可能性も」

「あるかも知れないけど、リオはリオで、『かあさんの決めた事なら、俺は何も言わない』って一言だけだよ」

「……確かにそうかも」

ひばりは理音に話を聞くと言うが明久はあくびをしながら言うと、ひばりは理音の顔を思い出し、思いとどまる。

「結局はおばさんしだいだし、僕らが言う事じゃないよ」

「でもさ……あれ？　アキくん、携帯なってるよ」

明久の言葉にひばりがしぶしぶ頷いた時、明久の携帯電話が鳴り始める。

「……こんな朝から誰だろう？　……知らない番号だ。どうしようかな？」

「誰かが電話番号を変えたんでしょ」

「まぁ、そうだよね……もしもし」

明久は知らない電話番号からの電話に少しだけ躊躇するが、ひばりのため息混じりの言葉に通話ボタンを押す。

「……アキ、俺の質問に答えろ。トイレットペーパーや生活雑貨はどこが1番安い？」

「えーと、どちら様？」

明久はいきなりの所帯じみた言葉に一瞬、呆気にとられた後、聞き返すが、

「……もう良い」

電話の相手は急いでいるのか、すぐに電話を切る。

「誰から？」

「……わからない」

明久はいきなり切れた電話に唖然とし、ひばりは明久に誰からか聞くが、明久には答えられない。

「イタズラ？」

「かも知れないけど、聞いた事のある声だったような……ひばり、携帯なってない？」

明久は電話の相手がすぐにわからないようで首を傾げていると今度はひばりの携帯電話が鳴る。

「あたしも知らない番号だ」

「僕にかけてきた人と一緒だね」

ひばりと明久は携帯電話のディスプレイに映る電話番号に首を傾げながらも、

「もしもし……どちら様ですか？」

「ひばり、トイレットペーパーや生活雑貨が1番安いところはどこだ？」

ひばりは相手に名前を尋ねるが、相手は自分の用件だけを言う。

「……アキくん、これ、間違いなく、理音くんだよ」

「うそ!?」

ひばりは電話の内容としゃべり方から、相手が理音だと言うと明久は驚きの声をあげる。

「ひばり、聞いてるのか?」

「聞いてるよ。それより、いきなりの電話が生活雑貨の特売って、だいたい、理音くんはアメリカにいるんだから、あたしが……あれ? 理音くん、あのさ。今、どこ?」

ひばりは理音の態度にため息を吐くが、理音の電話の内容に何かが引っかかり、理音の居場所を聞く。

「商店街だ」

「どこの国の?」

「お前は何を言ってるんだ?」

理音の言葉にひばりは理音がこの街に帰ってきてると確信すると、

「何で帰ってきてるの!?」

「……電話で大声をあげるな」

驚きの声をあげるが、理音の反応は冷たい。

第１４問

「ちょっと、何で？　何で、日本に帰ってきてるの？　って言うか、久しぶりなのにその反応は何？」

「……騒ぐな。だいたい、ひばり、お前にはこの間、会ってるだろ」

理音の冷たい反応にひばりはいろいろ聞きたいとまくし立てるが、

「……お兄ちゃん」

『さあ、朝のタイムサービス、まずはもやし……』

電話の向こうから怜生の声とタイムサービスのお知らせの途中で電話は切れる。

「……」

「ひばり、リオはどうしたの？」

ひばりは切れた携帯電話を手に唖然としていると明久はひばりに声をかけると、

「……アキくん、商店街に行こう」

「え？　リオは帰ってきてるんだろ。それなら……」

「アキくん」

「わ、わかったよ。着替えるから、待ってて」

ひばりは自分や明久との再会より、タイムサービスを優先したであろう理音の行動にめったに怒らないはずのひばりのこめかみにはピクピクと青筋が浮かんでおり、明久はひばりの様子に慌てて頷き、着替えると2人は急いで商店街に向かう。

「電話から聞こえたのはこの辺り何だけど……」

「リオも怜生くんもいないね」

ひばりと明久は商店街に着くと周りを見ながら歩くが理音も怜生も見つからない。

「ホントに、リオは帰ってきてるの？」

「間違いないよ。さっき、電話の向こうから聞こえてきたのはここのタイムサービスの声だったんだから」

明久がひばりに聞くとひばりは間違いないと言いながら、理音を探している。

「ねぇ。ひばり」

「見つかった？」

「さっきの番号に電話してみたら？」

明久は理音を探すひばりの様子に苦笑いを浮かべると冷静に言う。

「そうだね。あたしは電話して見るから、アキくんは理音くんがいないか見てて」

「うん」

ひばりは携帯電話を取り出すと先ほどの番号に電話をかけると、

「なんだ？」

ひばりの頭の上から、理音の声が聞こえる。

「リオ！？」

「アキ、お前は1人で買い物か？」

明久は現れた理音に驚きの声をあげるが、理音はひばりは視界に入っていないのか明久と話を始めようとする。

「何で、あたしを無視するの！？」

「……アキ、ひばりの声が聞こえるんだが、姿が見えないんだ。時差ボケで疲れてるせいか？」

「リオ、わかっててやってるよね？」

ひばりは頭の上から聞こえる理音の声に頬を膨らませるが、理音はひばりをからかいに入り、明久は変わらない2人の様子に苦笑いを浮かべる。

「当然だ。リアクションが良いからな。ひばりを見るとからかいた

くなるんだ」

「そんな事を言い切らないで！？」

理音は明久の言葉に表情を変える事なく言い切り、ひばりは理音に手をのばそうとするが、理音はひばりの頭を手で押さえ、ひばりの手は理音には届かない。

『さあ。次は豚肉切り落としが１００グラム……』

「アキ、怜生を頼む」

「ちょっと、理音くん、あたしの話は終わってないよ」

「えっ！？　ちょっと、リオ！？　ひばり！？」

理音は新たなタイムサービスが始まると怜生を明久に預けて人波のなかに飛び込んで行き、ひばりは理音の後を追いかけて行く。

「……怜生くん、リオって、タイムサービス好きだったっけ？」

「タイムサービスは戦場だから、男なら命がけで向かわないといけないそうです」

「……でも、基本的にタイムサービスって、主婦の戦場だよね」

明久は理音の様子にため息を吐くと、

「アキ、これも売り物だと思うか？」

「……」

理音は無表情なまま、手に入れた豚肉と人波につぶされたひばりを手に明久と怜生のもとに戻り、

「……違うから」

「お姉ちゃん、大丈夫ですか？」

明久は理音の言葉にため息を吐き、怜生は心配そうにひばりの顔を覗き込む。

第１４問（後書き）

どうも、作者です。

本編や特別問題で、よく書いてますが理音は『タイムサービスが大好き』です。（爆笑）

なぜかはわからないですが、血が騒ぐようです。表情は変わらないけど。（苦笑）

つぶれたひばり?.を明久と怜生に託し、理音は戦場に向かう。（爆笑）

第１５問（前書き）

どうもです。

今回からクロさんの小説『バカとテストと召喚獣～文月学園のカラス～』より、『烏丸　大貴』、『沖田　静馬』兄弟に参加していただきます。

第１５問

「ちなみにその娘が売り物だったら、どうするつもりだ？」

「兄さん、いきなり、知らない人に声をかけないでください！？」

「もちろん、食う」

理音達のやりとりに兄弟であろうか理音達と同年代の少年と小学生くらいの少年が理音に声をかけると弟だと思われる少年は声をあげるが、理音は無表情ではあるが何の迷いもなく言い切ると、

「……小学生に手を出すのは犯罪だろ」

少年はひばりを小学生だと思ったようで止めろと言いたげにため息を吐く。

「何を言ってる？　確かに見た目は小さいが身長ではなく、この身長に不釣り合いなくらいに育った果実を見ろ」

「……なるほど、なかなか、育っているな。最近の小学生は侮れないと言うのは本当のようだ」

理音は表情を変える事なく、目を回しているひばりを少年の前に出しひばりの胸に注目するように言うと少年は感心したように頷いている。

「……ひばり、目を覚ましたら絶対に怒るよね」

「……はい。お姉ちゃん、気にしてますから」

「えーと、兄さんが迷惑をかけてすいません」

明久と怜生はひばりが目を覚ました時の事を考えてため息を吐くと少年は申し訳なさそうに兄の非をわびると、

「気にしないでよ。もともとはリオに問題があるわけだし、それより、こっちの方こそ、ごめんね」

「いえ、こちらの方こそ。すいません」

明久は苦笑いを浮かべると頭をさげる。

「……しかし、この破壊力を持っていようが、小学生相手はマズいだろ。性犯罪は捕まると恥ずかしいぞ」

「ん？　忘れていたな。こいつはちっちゃくて信じられないとは思うが、俺と同じ年だ」

「同じ年？　最近の小学生は発育が良いな」

理音の言葉を聞いて少年は理音も小学生だと思ったようで感心したように言うと、

「あたし、そんなにちっちゃくないよ！？　４月から高校生だよ！？」

ひばりは目を覚ましたようで理音に抱えられた状態で声をあげる。

「嘘だろ？　知ってるかい。高校生はもう少し大きくならないとなれないんだ。早く高校生になりたいのはわかるけど、もう少し待とうね」

「……えーと、ひばりの言ってる事は本当だよ」

少年はひばりの言葉を信じそうにないが、明久は苦笑いを浮かべたまま、少年にひばりの言う事は正しいと言うと、

「……いくら、この俺でも、これ以上、そのボケは拾えないぞ」

「ボケてないよ。あたし、本当に４月から高校生だよ！？」

少年は明久に向かい笑いの基本ができてないと言いたげな表情をし、ひばりは頬を膨らませる。

「まぁ、ひばりが小さい事は否定しない。と言うか、誰が何と言おうが事実だ」

「あたし、そんなにちっちゃくないよ！？」

理音はひばりをフォローする気はなく、ひばりが声をあげている隣りで、

「一応、身分証だ」

「……ホントにタメかよ」

理音は財布から生年月日を確認できるものを出すと少年も理音達と同じ年のようで、ひばりと言う奇跡に驚いている。

「……あぁ。見た目は小学生だが、本当に春から高校生だ」

「あたしはそんなにちっちゃくない！？」

少年の言葉に理音が頷いた時、ひばりが声をあげると同時にその場には『スパーン』と言う小気味の良い音が響き、

「……ひばり、何をする？」

「理音くんがあたしをいじめるから悪いんだよ！！」

理音の頭には軽い衝撃があり、ひばりに視線を移すとひばりの手のなかにはなぜか『ハリセン』が握られており、ひばりはハリセンの先を理音に向けて言う。

「なんで、ハリセン？」

「なぜだ。『小烏丸』。俺を見捨てるのか？」

明久はひばりの手のなかにあるハリセンに顔をひきつらせるが、少年はひばりがハリセンを取り出した事が衝撃的だったようで、その場に膝を付く。

第16問

「お姉ちゃん」

「えっ!?　怜生くん、どうしたの?」

ひばりが突然、取り出したハリセンを見て、怜生は目を輝かせながら、ひばりに駆け寄る。

「それ、僕にも貸してください」

「それ?　……何で!?　ハリセン!?」

怜生の言葉でひばりは初めてハリセンを手にしている事に気づき、驚きの声をあげているなか、

「……大丈夫か?」

「……あぁ。体は大丈夫だ。しかし、小烏丸が戦友の俺を見捨てたんだ」

理音は少年に声をかけると少年は悔しさがこみ上げてきているのか唇を噛みしめている。

「……違うな。あいつはお前の成長を信じて距離を置いたんだ」

「!?　そ、そうなのか?　小烏丸」

理音はそんな少年に適当な事を言うと少年もよほどノリが良いよう

で、理音の言葉を拾う。

「……えーと、怜生くん、ちょっと待っててね」

「……はい」

理音と少年の小芝居にひばりは大きなため息を吐くと、

「お店のまん中でおかしな事をやらないで、人が集まってきてるでしょ！！」

理音と少年の頭をハリセンで叩きつけ、

「……良い腕だ。小烏丸が認めるわけだ」

「ダメだ。先ほどより、音が悪い。腕の振りの角度が5度、下がっていた」

少年は床に倒れ込むが、理音はハリセンの音が気に入らないと言う。

「……兄さん、恥ずかしいから、あんまり、おかしな事をしないで」

「静馬、何を言ってるんだ。ここまで、場が温まってるんだ。芸の道に生きるものとし……」

『さあ、今度は卵、卵がお一人様、1パック限り……』

少年は弟に向かい何かを言いかけるが、その場にタイムサービスの声が響き、

「兄さん!?」

「ちょっと、リオ!?」

理音と少年はタイムサービスの声に駆け出す。

「……これ、どうしたら良いんだろう?」

「お姉ちゃん、貸してください」

ひばりは2人の後ろ姿に顔をひきつらせていると怜生はハリセンが欲しいようで手を伸ばす。

「ダメだよ。怜生くん、あたしが言うのもなんだけど、あの人の大切なものみたいだし」

「……そうですね」

ひばりは怜生の様子に苦笑いを浮かべると怜生を諭すように言い、怜生はよほどハリセン『小烏丸』が気に入ったようで寂しそうな表情をすると、

「えーと、怜生くんだったよね。良かったら、どうぞ」

持ち主の弟は怜生にハリセン『小烏丸』を譲ると言う。

「良いんですか?」

「うん。街中であんな事をされても困るし」

怜生は目を輝かせると少年が頷くなか、

「貴様、その卵を俺に渡せ！！」

「……悪いな。戦場での読み間違いは命取りだ。自分の失敗を悔いろ」

理音は手に卵を4パック持ち、卵を1パック持った少年とにらみ合いをしている。

「……怜生くん、初仕事だよ。あの2人を思いっきり、叩いてきて」

「はい」

ひばりは2人の様子に大きなため息を吐くと怜生に2人を懲らしめてきてと言うと怜生は大きく頷き、ハリセン『小烏丸』で理音と少年を叩く。

「小烏丸！？」

「怜生、どうしたんだ？」

「お兄ちゃんがくれました」

怜生から振りおろされた相棒を見て、少年は目を見開くが理音は怜生に聞くと怜生は嬉しそうに言う。

「静馬、どう言う事だ！？」

「良いよね。兄さん」

少年は弟に駆け寄るが弟は少年の今までの行動にだいぶ、お怒りの様子である。

「しかし……」

「怜生」

「はい」

弟の言葉に少年はまだ小烏丸に未練があるような表情をすると理音は怜生の名前を呼ぶと、

「わがままを言ってすいませんでした」

怜生は少年の前に行き、ハリセン『小烏丸』を返そうと少年の前に差し出す。

第１６問（後書き）

どうも、作者です。

大貴の名前、いまだ出ず。（爆笑）

理音と大貴の２人の絡みはわりと楽しいんですが、これで良いのか？とも思います。

第17問

「いや、しかし……」

少年は差し出されたハリセン『小烏丸』に手を伸ばそうとするが、弟のお怒りの様子と怜生の表情に若干、後ろめたさを感じているようで躊躇するが、

「あまり、ボケが続くと飽きられるぞ」

「返してくれてありがとう」

理音の一言に少年はハリセン『小烏丸』を手に取るとどこかにしまい込み、

「？」

突如、視界から消えた小烏丸に怜生は小さく首を傾げると、

「静馬、この子はなんだ？　お前のちっちゃい時みたいにかわいいじゃないか！！」

「……兄さん、怜生くんが戸惑ってるから、落ち着いて」

少年は怜生を抱きしめて、弟に向かい言うと弟は呆れたようにため息を吐く。

「……ひばり、この状況って何なのかな？」

「わからないけど、あの人が理音くんと同種の人だって事はわかるかな」

「……そうだね」

ひばりと明久は目の前の少年の行動が理音とにているとため息を吐くが、

「勘違いするな。あいつは計算で動くタイプで俺は本能で動くタイプだ。一緒にするな」

「つまりは天然だな」

「そう言う事だ」

理音は別タイプだと言い切る。

「……あのさ。リオ、自分で言い切るのもどうかと思うよ。と言うか」

「そうだ。本物の天然とは自分を天然だと理解しない。貴様は紛い物だ！！」

少年は理音の考えに納得がいかないと言うとどこからともなく、ハリセン『小烏丸』を取り出して、小烏丸の先を理音に向けて言うと、

「……ほぅ。面白い。俺にそれを向けるか？　死ぬ覚悟はできてるんだろうな」

「ふっ、面白い。まさか、ここにも俺と同じ能力を持ったヤツがい

るとはな。だが、俺と小烏丸の敵ではない。すべて、叩き落としてくれる」

「……花火とハリセンだとハリセン燃えるよね」

「はい」

理音は邪悪な笑みを浮かべながら、懐から大量の花火を取り出すと少年の口元は小さく緩み、2人が攻撃に移ろうとした時、

「いい加減にしなさい！！　小さい子が真似するでしょ！！」

再び、小気味よい音が響く。

「……なぜだ？　小烏丸はここにあるのに、まさか、この子も同じ能力を」

「小さい子？　ひばり、真似をするのか？」

「あたし、ちっちゃくないよ！？」

ひばりが小烏丸とは違うハリセンを持っている事に少年は驚きの表情をするが、理音は表情を変える事なく、ひばりをからかうと、

「まったく、お店のなかで花火なんか使ったら火事になるでしょ」

ひばりはもう1度、理音をハリセンでひっぱたいた後、バナナの叩き売りをしていた店員にハリセンを返すと理音を叱るように言う。

「怜生がいるんだ。勝負を挑まれて退けるか」

「いや、根本的に間違ってるから」

理音は怜生の前では逃げられないと言うと明久は苦笑いを浮かべるが、

「そうだ。俺は静馬が望む。オムライスのために貴様からその卵を奪いとらなければいけないんだ」

「……兄さん、別にオムライスじゃなくて良いから、恥ずかしい事は止めて」

少年は理音との勝負のきっかけを思い出すと弟は恥ずかしいようでため息を吐く。

「何を言ってるんだ。オムライスだぞ。卵3つを使ったとろとろ半熟卵をのせないといけないだろ……何より、ここで卵を持って帰らなかったら、じじいに何を言われるかわからん」

「……ほら、1つ持ってけ」

少年にも譲れない何かがあるようで理音を見据えると理音は少年に卵1パックを差し出す。

「い、良いのか？　お前にも譲れない何かがあったんじゃないのか？」

「あぁ。俺も怜生のリクエストでオムライスを作る予定だったんだ。お前の気持ちは良くわかる」

「……これ、何なんだろうね？」

「本当に申し訳ありません」

明久は目の前で行われる小芝居に苦笑いを浮かべると弟は申し訳なさそうに謝るなか、

「お前、良いヤツだな。俺は烏丸　大貴だ」

「前田　理音だ」

2人の間には誰も入ってはいけない空気になっている。

「……卵1パックで繋がれる友情？」

「なんか、安そうだね」

ひばりはため息を吐き、明久は苦笑いを浮かべる。

「それじゃあ、理音、遠慮なく、貰うぞ」

「あぁ」

大貴が理音から卵のパックを受け取ろうとした時、

『あら、ここにあったわ』

買い物かごを持ったおばちゃんが理音の手から卵を強奪していき、

「「……ばばあ！！」」

理音と大貴の声はきれいに合わさる。

第17問（後書き）

どうも、作者です。

卵1パックで繋がれた友情？

……安い。（爆笑）

しかし、それも通りすがりのばばあの手により崩れ去る。

割と好戦的な理音と大貴をひばりは止められるんでしょうか？

第１８問

「ちょっと！？　理音くんも烏丸くんも落ち着いて！！」

「……止めるな。ひばり、俺はあのばばあを新薬の実験台にしないと腹の虫がおさまらん」

ひばりは理音の様子に理音の腕をつかむが、理音は懐から怪しげな薬瓶を取り出し邪悪な笑みを浮かべ、

「兄さんも抑えて！？」

「止めるな。静馬。俺は受けた恩も恨みも忘れないんだ。あのばばあは理音から受けた恩を踏みにじった。必ず、小烏丸のさびにしてくれる！！」

その隣では同じように大貴の弟が大貴を止めようとしている。

「ダメだって言ってるでしょ！？　それはダメ！？　殺人は犯罪だよ！？」

「「大丈夫だ。上手く殺る！！」」

「だから、いい加減にしなさい！！」

ひばりが叫んだ時、ハリセン『小烏丸』はひばりの思いに呼応し、ひばりから２人に向けて小烏丸が振りおろされる。

「……何なんだろうね」

「……僕にも小烏丸出せないかな？」

その様子に明久は苦笑いを浮かべ、怜生は自分にもハリセン『小烏丸』を取り出せないか自分の両手を見て言う。

「２人とも、卵１パックで何をするつもりなの！！」

「待て。確かに卵も大切だが、俺はあのばばあが理音の好意を横からかっさらって行ったのが許せないんだ」

ひばりは小烏丸でしばかれ正気に戻った２人に向かい言うと、大貴には大貴の譲れないものがあると言う。

「だいたい、卵１パックでそんなに熱くならないで……理音くん、今度は何を出す気？」

「……ちっ」

ひばりはため息を吐くと、理音が次の行動に移ろうとしている事に気づき理音を睨みつけて言うと、理音は舌打ちをする。

「良い？　２人とも、あんまりおかしな事をやるとこのお店にこれなくなるでしょ？　それじゃあ、２人とも困るよね」

「……確かにこの店のタイムサービスを落とす事になるのは避けたい」

「……仕方ない。ひばりとタイムサービスに免じて、今回はあのばばあの命は助けてやる」

ひばりのタイムサービスに参加できなくなると言う一言に2人はタイムサービスがよほど好きなのかしぶしぶ納得すると、

「大貴、これを持って行け」

「良いのか？　お前の卵がなくなるぞ」

理音はもう1パック、大貴に卵を渡す。

「俺にはまだ2パックある。それに今の状態ではひばりはレジに並んでくれない」

「わかった。恩に着る。しかし、悪かったな。俺が最初に卵を2パック取れなかった事でお前の彼女を怒らせてしまったようだ」

大貴は今度はすぐに卵を受け取ると理音とひばりが付き合っていると思ったようで苦笑いを浮かべて謝り、

「ちがっ！？　違うよ！？」

ひばりは大貴の一言に顔を赤くして慌てる。

「そうか？　理音は……あれ？　名前を聞いてないな」

「あ、あたし、『支倉　ひばり』です。で、こっちが『吉井　明久』くんと理音くんの弟の『怜生』くん。あたし達は『幼なじみ』だよ」

大貴は未だに理音以外の名前を知らない事に気づくとひばりは理音との関係を勘違いされたくないようで『幼なじみ』を強調して言う。

「そうか。俺は『烏丸　大貴』にこっちは……」

「『沖田　静馬』です」

大貴は改めて、名前をなのり、大貴の弟も続けて頭を下げる。

「あれ？　２人って兄弟じゃなかったんだ？」

「あぁ。正確に言えば静馬は俺の甥っ子にあたる」

「そうなんだ」

明久は大貴と静馬が名字が違う事に首を傾げると大貴は苦笑いを浮かべて言い、ひばりと明久が頷いている隣で、

「……烏丸に沖田？」

理音は２人の名字に何か引っかかっているようで眉間にシワを寄せる。

「……お兄ちゃん、どうかしましたか？」

「いや、何でもない」

怜生は理音の様子に何か感じたのか心配そうに理音の服をつかむと理音は優しく怜生の頭を撫でると、

「ん？　悪い。俺と静馬はそろそろ帰らないといけない。うちには口うるさいじじいがいるからな」

「そうなんだ。それじゃあ、烏丸くん、また機会があったら」

「あぁ。またな」

「今日はすいませんでした」

大貴と静馬は目的の物がそろったため、先に帰ると言いレジに向かい。

「怜生、どうする？　昼も近いし、飯を食ってから行くか？」

「……お兄ちゃんのご飯が良いです」

「ひばり、アキ、レジを通してくるから、少し待っててくれ」

理音は怜生の返事に怜生の頭を優しく撫でると明久とひばりに待ってくれと言いレジへ向かう。

第１８問（後書き）

どうも、作者です。

長く続いた理音、大貴、ひばりの漫才もひとまず終結です。

こんなに長くなるとは考えてなかった。（苦笑）

しかし、話が全く進まないのは良いのかな？と思いながらも気にしない方向で。（爆笑）

第１９問

「それで、理音くん、詳しい話を教えてくれるかな？」

「わかったから、小烏丸をしまえ」

理音が会計を済ませるとひばりは理音にハリセン『小烏丸』を向けて理音が帰ってきてる意味を聞くと理音は表情を変える事なく言うと、

「返し忘れた！？」

ひばりは今、気がついたようで声をあげる。

「まぁ、今度あったら返せば良いんじゃないかな？　それに同じ年って言ってたし、高校も文月かも知れないしね」

「だな。それより、立ち話も何だし、移動するか？　昼も近いしな」

明久は苦笑いを浮かべると理音は移動を提案する。

「そ、そうだね。それじゃあ、理音くん家？」

「いや、俺と怜生は今日は家に帰らない」

「えっ！？　どういう事？」

理音は自分の研究所での整理もあるため、実家には帰らないと言うと明久は研究所の事を知らないため、首を傾げる。

「ん？　こっちに戻ってくるに当たっていろいろとあってな。まぁ、詳しくはそこについてからの方が早い」

「そうなの？　それなら行こうか。理音、僕も荷物持つよ。その代わりにさぁ……」

「飯だろ。昼も近いのに食わせないわけにも行かないだろ」

理音の両手が買い物袋で埋まっている様子に明久は気を利かせたようだが、理音には明久の魂胆は見え見えのため、ため息を吐く。

「怜生、ひばりも行くぞ」

「はい」

「う、うん」

理音が明久に買い物袋を1つ渡し歩き出すと怜生はひばりの手をつかみ理音の後を付いて歩き出す。

「しかし、アキ、お前は相変わらず、飯も食わずに仕送りを使い込んでるのか？」

「し、仕方ないんだよ。僕を惑わすものが世界には溢れてるんだから」

理音は明久に向かい言うと明久は自分は悪くないと言うが、

「理音くんからもアキくんに言ってよ。あたしがいくら言っても聞

いてくれないんだよ」

ひばりは明久の自堕落な生活を正したいようで理音に言う。

「本気で正したいなら簡単だ。玲さんに帰ってきて貰えば良い。幸い、玲さんからアキの生活がおかしかったら直ぐに連絡をくれと言われてるしな」

「止めて!?　改めるから、すぐには無理だけど、少しずつ直すから!?」

理音はひばりの言葉に明久の生活を明久の姉『吉井　玲』に報告するように言うと明久は慌てて謝るがまだ逃げようとしているため、

「そうか。その手が有ったね」

「1番の手だろ。早速、かけるか?」

ひばりは理音の言葉に納得すると理音は携帯電話を取り出し、

「玲さんのメールアドレスはこっちに入れてないんだったか……ひばり、登録してあるか?」

「うーん。あたしは聞いてないんだよね」

「なら、着いてからだな」

玲に連絡を取ろうとするが、玲のアドレスが見つからず後にすると言うと、

「お願い！！　直ぐに改めるから、姉さんには姉さんにだけは報告しないで！！」

明久は本気で玲には知られたくないようで今度は本気で言う。

「まぁ、高校にもなれば生活環境も変わるだろうしな。少しだけ待ってやる。朝はまだしも昼と夕はしっかり食え」

「う、うん。頑張るよ」

理音は明久に準備期間をやると言うと明久は納得はいかなさそうだが頷き、

「後は勉強もする事、アキくんが進級できなくなるとかあたしはイヤだからね」

「確かに幼なじみが留年は恥ずかしいな」

ひばりは明久に向けて言うと理音はくすりと笑い、

「わからないところがあれば教えてやるが少しは自分で努力をしろよ。お前はもともと頭の回転は悪くないんだからな」

「リオに言われてもバカにされてる気しかしないんだけど」

明久に言うと明久はため息を吐き、

「そう言われたくないなら、少しは真面目に何かしてみろ」

理音は明久の様子を見てため息を吐く。

第１９問（後書き）

どうも、作者です。

……小烏丸、返し忘れました。（爆笑）

幼なじみな会話ですね。

理音と明久、ひばり。

３人はバランスが取れているんでしょうか？（苦笑）

第２０問

「り、理音くん、ここって何？」

「ん？　見ればわかるだろ」

「いや、わからないって」

理音の研究所の前に着くとひばりと明久は顔をひきつらせるが、理音は気にする事なく、研究所のドアを開け、

「さっさと入れ」

ひばりと明久に中に入れと言う。

「ここって、研究所？」

「あぁ。ひとまず、俺は昼飯を作るから、お前らは座ってろ」

ひばりは理音の後をついて歩きながらも周りを見て、ここが何か気づいたようで理音に聞くと居間のような場所に着き、理音は食材を持ったまま隣りの部屋に移動する。

「理音くん、あたしも手伝うよ」

「……いや、ひばり用の踏み台がないからキッチンに手が届かないだろ」

「あたし、そんなにちっちゃくないよ！？」

ひばりは理音の後をついて行き、手伝うと言うが理音にからかわれて声をあげる。

「冗談だ」

「まったく、理音くんはどうしてあたしを……理音くん、やっぱり、あたしをバカにしてるよね？」

理音は表情を変える事なく冗談だと言い、ひばりは頬を膨らませて理音に文句を言おうとするがキッチンの前には『ひばり用と書かれた踏み台』が用意されており、ひばりは頬を膨らませたまま理音を睨みつけるが、

「……もう少し、高い方が良いか？」

理音は表情を変える事なくひばりと踏み台を見比べて言う。

「あたし、そんなにちっちゃくないよ！？」

「なら、いらないか？」

「……いる」

ひばりは声をあげるが、身長のある理音用に作られたキッチンはひばりの身長では少し高く肩を落として使うと言う。

「最初から、素直に言え」

「だって」

理音はひばりの頭を優しく撫でるとひばりは悔しそうに理音を見上げ、

「……始めるぞ」

理音はひばりの表情に少し照れたのか視線を逸らすと買ってきたお米を洗い、ひばりは理音に文句を言いながらも理音の隣りで料理を始め出す。

「あの2人は相変わらずだね」

「はい」

明久は怜生と一緒に居間のソファーに座りながら、キッチンの2人を見て苦笑いを浮かべると怜生は頷き、

「怜生くん、テレビでも見てようか？」

「はい」

明久はソファーの前に置いてあるテレビの電源を入れる。

「アキ、ヒマならそこにＤＶＤとか開けてないのあるから、繋いどいてくれるか？」

「うん。良いよ……って、これ、何？　見たことのないゲームがこんなに？」

理音はキッチンから明久に声をかけると明久は頷くが置いてあるも

のを見て驚きの声をあげる。

「ん？　あっちにいる間に仲間内で作ったハードだ。それなりにこった話のＲＰＧもあるはずだぞ」

「本当？　やって良い？」

「別に構わないが気をつけろよ。中に爆発するのも混じってるから」

明久は目の前にあるお宝の山に目を輝かせて言うが、理音はなかに『陸が作ったもの』もあると言うが、

「爆発って、冗談言わないでよ。これなんか、面白そうだな」

明久は怜生を放置してゲームの電源を入れると、

「……最初から当たりを引いたか」

「……アキ兄ちゃん、大丈夫ですか？」

小さな爆発音がし、明久の持っていたコントローラーが爆発し、理音はため息を吐き、怜生は心配そうに明久に声をかける。

「……理音くん、あれって、何？」

「ん？　あっちの研究所の仲間が作ったものだな。爆発が好きな迷惑なヤツでな」

「……理音くん、そんな危ないものを持ち込まないでよ」

ひばりは爆発音を聞いて顔をひきつらせながら理音に言うが理音は表情を変える事なく言うとひばりはため息を吐く。

「まぁ、そこまでの破壊力もないからな。あいつにしては抑えた方か」

「……理音くん、反省って言葉知ってる？」

理音は明久のダメージに表情を変える事なく頷くとひばりはため息を吐くが、

「別にこの爆発は俺のせいじゃないからな。怜生、俺の部屋から服を取ってきてやれ。アキ、廊下の先に風呂場あるから、ススを落としてこい」

「う、うん。ちょっと行ってくる」

理音は明久に風呂場へ行けと言うと明久は立ち上がり、フラフラと風呂場まで歩き出し、怜生は理音の部屋に明久の着替えを取りに行く。

第２０問（後書き）

どうも、作者です。

専用の踏み台を用意する理音は優しいのか意地が悪いのか微妙です。

（爆笑）

そして、陸の爆発物が混じっている理音の研究所から、ひばりと明久は無事に帰れるんでしょうか？

第２１問

明久は濡れた頭をバスタオルで拭きながら居間に戻ってくると理音が怜生のリクエストのオムライスと付け合わせに作ったスープをテーブルに並べており、

「ずいぶんと時間がかかったな」

「うん。だって、久しぶりの温水での……リオ、待った!?　直す。直すから、姉さんにだけは連絡しないで!?」

明久が長くシャワーを浴びていた理由を聞くと明久はガスを止められているようで温水に感動したように言うと理音は携帯電話を取り出し、明久は床に頭を擦り付けて土下座をして謝り、

「……アキくん、ガスまで止められてるんだ」

さすがにひばりも呆れたようで言葉が出てこないようである。

「まぁ、アキのせいで飯が冷めるのもバカらしいからな。さっさと座れ」

「う、うん……ねぇ。リオ」

理音はため息を吐くと明久に席につけと言い、明久は嬉しそうに席に着くが明久の座った席にはカップラーメンが１つだけ置いてあり、明久は悲しそうに涙を流して理音の顔を見る。

「なんだ?」

「理音くん、さすがにもう良いでしょ」

「お兄ちゃん」

理音は文句があるかと言いたげに言うとひばりは苦笑いを浮かべ、怜生は理音を呼ぶ。

「たまには本気で思い知らさないと、アキは反省しないんだ」

「……もう充分すぎるくらい反省したよ」

「反省したなら、ちゃんと生活を改めろよ」

理音はため息を吐きながら、明久の前にも自分達と同じメニューを置き、

「ひばり、イスは怜生と同じものが良いか？」

「あたし、そんなにちっちゃくないよ！？」

ひばりいじりも忘れない。

「それで、理音くん」

「あぁ」

昼食を食べ始めてしばらくするとひばりは今度はごまかさせないと言いたげな表情をして理音が帰って理由をもう1度聞くと、理音は小さく頷き、

「期限は今のところ未定だけどな。文月学園からの依頼で召喚システムの解析やその他にもいろいろと手伝う事になったんだ」

「文月学園の依頼？　どうして、理音くんに」

簡単な説明をするとひばりは理音が帰ってきた事に一瞬、嬉しそうな表情をした後、理音に白羽の矢が立った事に首を傾げる。

「2人が覚えてるかはわからないが、文月学園の学園長は俺が今の研究所に行く事を薦めた人間だ。それで、手伝えって言われた。この間、ひばりと会ったのは依頼内容を確認しにきてたんだ」

「あぁ。この間、ひばりがリオが仕事で戻って……ねぇ。リオ、飛行機の弁償っていくらしたの？」

理音は文月学園の学園長のカヲルとの繋がりを話すと明久は納得しかけるが、理音がニュースに出ていた事を思い出し、顔をひきつらせながら聞く。

「ん？　弁償も何も乗客の命を救ったんだ。お礼金やら、研究所への新規探知機の製作依頼とかがきてたな」

「で、でも、あんなに煙が上がってたんだよ。飛行機は壊れてないの？」

理音は質問の意味がわからないと言いたげに首を傾げるとひばりはニュースで見た煙りが上がる飛行機の映像を思い出して顔をひきつらせるが、

「お前らは何を言ってるんだ？　爆発や炎上は俺の趣味じゃない。あの煙りはただの煙幕だし、犯人グループにはこれで制裁を与えただけだ」

「……理音くん、どうやって、これをしまってたの？」

理音は煙幕だと説明した後、懐から『ピコピコハンマー』のような物を取り出すと、ひばりは明らかに懐から出てくるはずのないサイズに顔をひきつらせたまま言うが、

「……何を言ってるんだ。キチンと整理整頓をすれば、これくらい、簡単に持ち運べるだろ」

理音はひばりの言いたい事がわからずに眉間にシワを寄せる。

「……烏丸くんもだったけど、常識なのかな？」

「……僕にもできるのかな？」

明久は先ほど、何もない空間からハリセン『小烏丸』を取り出した大貴を思い出してため息を吐くと怜生は理音の隣で自分のポケットの中を覗いている。

「でも、これでどうやって犯人グループを捕まえたの？　叩いたって……理音くん、これ、物凄く重いんだけど」

「当たり前だ。ピコピコハンマー風に仕上げているが１０キロの鉄アレイだからな。ぶっちゃければただの鈍器だ」

ひばりはピコピコハンマーらしきものを持とうとするが非力な彼女

には持ち上がらず、理音に聞くと理音は表情を変える事なく答え、

「そんなものを振り回したらダメだよ！？」

「他にもこのボタンで柄の部分から分銅付きの鎖がでたり」

ひばりは当然、声を上げるが、理音は楽しそうに解説をしていく。

「そんな危ないものを持ち歩かないで、危険でしょ！？」

「大丈夫だ。音はちゃんと『ポコ』となるように」

「そんな事は言ってないよ！？」

ひばりは理音の言葉に慌てて理音に注意するが、理音には変なこだわりがあるのかすでにひばりの話を聞いていない。

「……とりあえず、理音が戻ってきたって事で良いのかな？」

「はい」

明久は理音とひばりの姿を見て苦笑いを浮かべて言うと怜生は理音が帰ってきた事がよほど嬉しいようで笑顔で頷く。

第２２問

「で、他に何かあるか？」

「何かあるかも何も……ちょっと、考える時間をちょうだい」

「リオは文月学園で召喚システムの解析をするの？　文月学園でなら、お昼は一緒に食べれるよね」

理音は改めて聞くとひばりはいろいろ頭のなかを整理したいようで頭を押さえる隣りで明久はあまり深くは考えずに言うと、

「そうだな。位置的には一般生徒として入り込むから、飯くらいは……」

「ど、どういう事？」

「何がだ？」

理音の学生として文月学園に籍を置くと言う言葉にひばりは慌てて理音に詰め寄るが理音は意味がわからずに首を傾げる。

「それって、理音くんも文月学園に入学するって事？」

「最初からそう言ってるだろ」

「へぇ。リオも文月かぁ。姫路さんも葵ちゃんも何だよ」

ひばりは理音に確認すると理音は何度も言わせるなと言いたげな表情をし、明久は楽しそうに自分とひばり以外にも『姫路　瑞希』、

『本宮　葵』と言った理音の旧友が文月学園に入学すると言う。

「ほぅ。あいつらもか？　あの２人の成績なら、他の私立にいけたんじゃないのか」

「……理音くん、瑞希ちゃんはあれだよ。アキくんが原因」

理音は懐かしい名前を聞き、頷くが２人の成績では文月はレベル下だと言うとひばりが瑞希が文月を選んだ理由は明久だと耳打ちをする。

「……相変わらず、進展はないわけか？」

「だって、アキくん鈍いし、瑞希ちゃんも奥手だから」

理音は瑞希が明久の事を好きだと知っているようでひばりの言葉に苦笑いを浮かべるとひばりは進展しない明久と瑞希を思ってかため息を吐く。

「まぁ。あいつらに会うのも久しぶりだしな。だいぶ、成長したんだろうな」

「うん。２人とものすごく」

理音は２人のある１部分の成長を思い浮かべて言うと明久は理音の言いたい事がわかったようで真面目な表情で頷くと、

「……それはおさわり、おっけ～か？」

「流石にダメだと思うよ」

理音は目つきを鋭くして言うと明久は苦笑いを浮かべるが、

「ダメに決まってるでしょ！？」

ひばりの言葉と同時に理音の頭にハリセン『小烏丸』が振り下ろされ、小気味の良い音が響き、

「……ひばり、それ、使い慣れてきたね」

「あはは」

明久は理音の頭がハリセン『小烏丸』でしばかれたのを見て苦笑いを浮かべるとひばりは明久から目を逸らして笑う。

「何をする？」

「何をする？　じゃないよ。女の子の大切なところを簡単に……おさわり……とか」

理音はひばりの行動に眉間にシワを寄せて聞くとひばりは理音を叱ろうとするがいろいろと恥ずかしいのかどんどん声が小さくなって行く。

「なんだ？」

「だ、だから、そう言うのは好きな相手とじゃないとダメなの！！」

理音はひばりの声が聞こえないため、聞き返すとひばりは顔を真っ赤にして言う。

「ふむ。なるほど……」

「わ、わかってくれた？」

「あぁ……」

理音はひばりの言葉に何か考えるように頷くとひばりは顔を赤くしたまま聞き返すと理音は邪悪な笑みを浮かべると、

「なら、ひばりのなら揉んで良いか？」

「……な、な、何をいきなり言い出すの！？」

ひばりの耳元で囁くとひばりは一瞬、呆けた後、驚きの声をあげる。

「なんだ？　好きな相手とじゃないとダメなんだろ？　俺はひばりが好きだぞ」

「ちがっ！？　違うよ！？　お互いに好きな相手とじゃないとダメなんだよ！！」

理音はひばりの新しいいじり方を発見したようで楽しそうにひばりに言うとひばりは顔を真っ赤にして慌てる。

「ひばりは俺が嫌いか？」

「そ、それは……」

「幼なじみ、友人としてとか半端な答えはなしだぞ」

理音はひばりの反応を見て楽しそうに笑っているが、ひばりは理音からの告白にすでにテンパっている。

「リオ、そこまでにしたら？」

「そうだな。ひとまずはちゃんと男と見られてるとわかっただけで良しとするか」

明久は2人の様子に苦笑いを浮かべると理音はくすりと笑い、

「……理音くん、あたしをからかったの？」

ひばりは理音にからかわれたと思ったようで頬を膨らませるが、

「ん？　俺もこんな事を冗談で言うほどヒマじゃない」

「……」

「あれ？　ひばり、リオがひばりの事を好きだって気づいてなかったの？」

理音は表情を変える事なく言うとひばりの頭は処理ができなくなったようで固まり、明久はひばりの反応に苦笑いを浮かべる。

第２２問（後書き）

どうも、作者です。

小烏丸馴染みすぎ。（爆笑）

そして、理音のひばりへの告白。

まさかの明久が理音の想いに気づいていると言うサプライズ。でも、瑞希の気持ちには気づかない。（爆笑）

処理落ちしたひばりは理音に食べられてしまうのか？（悪笑）

第２３問

「なんだかんだ言ってもひばりもアキと変わらないわけか？」

「えっ！？　ボクとひばりが変わらないってどういう事？」

明久でさえ気づいていた事実に気づいていなかったひばりを見て、理音がため息を吐くと明久は首を傾げるが、

「まぁ、瑞希には言うなと言われてるしな。簡単に言えば天然は強いって事だ」

理音は流石に瑞希の気持ちを自分が言うわけにはいかないと言う。

「姫路さんがどうかしたの？」

「……ここまで言われても気づかないのはどうなんだ？」

明久は理音の言葉の意味がわからないようで首を傾げたままうなっていると理音は大きなため息を吐く。

「お姉ちゃん、大丈夫ですか？」

「ど、ど、どういう事！？　理音くんもだけど、どうしてアキくんも気づいてるの？」

そんななか、怜生は固まっているひばりを服を引っ張ると、ひばりは慌てて明久が自分への理音の想いを気づいている事を聞く。

「え？　どうしてって、リオが帰ってくる時の連絡って、ひばり、おばさん、ボクでしょ。ボクには連絡こない時もあるし、何より、昔から理音が女の子から告白された時の断るセリフって」

「ひばりが好きだから付き合えないだ」

「……ふ、ふぇぇっっっ！！！！？？？」

明久はひばりの様子に苦笑いを浮かべながら自分が気づいていた理由と理音の言葉にひばりはしばらく固まった後、顔を真っ赤にして奇妙な声をあげる。

「けっこう噂になってたけどね」

「本人の耳にはなかなか入らないものなんだろ」

明久はひばりの普段見ることのない反応に苦笑いを浮かべるが理音は表情を変える事なく立ち上がり、

「アキ、インスタントしかないがコーヒー飲むか？」

明久にコーヒーを飲むか聞く。

「うん。飲むけど……ひばりはあのままで良いの？」

「ん。大丈夫だろ。ひばりはお前と違って不測の事態には対応するのは苦手だからな。再起動するまで３０分から１時間かかる」

明久は理音の行動に苦笑いを浮かべたまま言うが理音は気にする事はなく、

「怜生、オレンジジュースとアップルジュースどっちが良い」

「オレンジジュースが良いです」

「ん。わかった。待ってろ」

お湯を沸かしている間に怜生に飲むものを聞く。

「でさ。理音はここから登校するの？」

理音と明久は理音が淹れたコーヒーで一息入れながら話をしていると明久がこれからの理音の生活を聞くと、

「状況しだいだな。日本に戻ると言う話をしたら、いろいろと研究依頼がきてな。泊まりになるような研究ならここで寝泊まりするし、休む時は家に帰る」

「そっか。それなら、片付けないとね。ひばりもあんな状態だし、手伝うよ」

明久はまだ片付いていない研究所を見て苦笑いを浮かべると理音に片付けの手伝いをすると言う。

「ん。珍しいな。早く帰ってゲームの続きをしなくて良いのか？」

「……帰ると理音の言う通りゲームしそうだから、少しずつでも生活を直さないと姉さんが」

明久はよほど玲が怖いようで生活を改める1歩だと言うと、

「なら、少し手伝ってくれ。居間やキッチンを頼めるか？　俺は薬品類が置いてある部屋にいるから、何かあったら……」

「へぇ。内線とかも置いてあるんだ……秘密基地みたいだね」

理音は簡単に明久に研究所の設備を説明すると明久は楽しそうに笑い、

「確かにな。ガキの頃に見た戦隊ものの基地だな」

理音は明久の言葉に無邪気な笑みを浮かべる。

第２３問（後書き）

どうも、作者です。

やはり、明久は鈍かった。（爆笑）

そして、理音と明久は男の子な会話。

少し子供っぽいけど、理音と明久のこの距離が好きです。（苦笑）

第２４問

「な、なんで！？」

「ん。２８分か？　予想より早かったな」

「……いや、充分だと思うよ」

ひばりがしばらくして大声をあげると理音は表情を変える事なく言い、明久は理音が言っていたひばりの再起動時間を言い当てた理音を見て苦笑いを浮かべる。

「な、なんて事を言って断ってるのよ！？　そ、それって、葵ちゃんも知ってるの？」

「まぁ、あいつはそれなりに鋭いから知ってるだろ」

「えっ！？　葵ちゃんって、リオの事が好きだったの？」

ひばりは理音のクールすぎる反応にまくしたてるように余計な事を言い、明久は驚きの声をあげる。

「……あっ！？　ア、アキくん、今の事は聞かなかった事にして」

「大丈夫だろ。アキのメモリーは容量が少ないから、直ぐに忘れる」

ひばりはまずい事を言ったと思い明久から視線を逸らすと理音は表情を変える事なく言い切り、

「それで、答えはどうするつもりだ？」

「そ、それは……いや、あの……」

ひばりに告白の答えを聞くと、ひばりは固まってた時間は何も考えていなかったようで理音の顔を直視できないようで顔を真っ赤にして理音から視線を逸らす。

「えーと、あの……」

「アキ兄ちゃん、お姉ちゃんはどうしたんですか？」

「えーと、怜生くん、今は静かにしてた方が良いよ」

ひばりの様子に怜生は意味がわからないようで首を傾げると明久は苦笑いを浮かべるが、

「お姉ちゃん、何かあったんですか？」

怜生は今の状況についていけないようで純粋な目でひばりの顔を覗き込む。

「えと、えーとね」

「テンパってるな」

「まぁ、本当にひばりは知らなかったみたいだしね。でも、リオも冷静すぎない？」

ひばりは怜生の質問になんと答えて良いかわからないようであたふ

たとしているがひばりを困らせる原因となった告白をした理音は冷静な口調で言うと明久は真逆の反応の2人の様子に苦笑いを浮かべたまま、理音に聞くが、

「ん？　今さら慌てる事でもないだろ。事実は事実として認めるしかないんだからな」

理音はやはり冷静である。

「しかし、そろそろ。どうにかしないといけないか。あのままだとオーバーヒートする」

「処理落ちにオーバーヒート？　ひばりも忙しいね」

「ひばり」

理音は完全にテンパってるひばりを見てため息を吐くと明久も同じ意見のようで頷くと理音はひばりの名前を呼ぶと、

「ふぁい！？　……」

「……舌噛んだな」

「……そうだね」

ひばりは慌てて返事をして舌を噛む。

「そんなに慌てるなら保留で良い。別にすぐにひばりの処……」

「怜生くんがいるところで何を言うの！？」

理音はひばりに無理に答えを出さなくて良いと言うが、言い方に問題があり、ひばりから小烏丸が放たれる。

「……何をする？」

「何をする？　じゃないよ。理音くんはもう少し言葉を選べないの！！　怜生くんだっているんだよ！！」

理音はひばりにハリセンを喰らう意味がわからんと言いたげだがひばりは頬を膨らませると、

「だいたい、理音くんはデリカシーがないんだよ。告白にしたって、もう少し……雰囲気とか……いろいろとさ。そりゃ、理音くんは男の子だから気にしないかも知れないけど、女の子にはいろいろと大事にして欲しいものがあったり」

告白は嬉しかったようだが理音にデリカシーがないと言う。

「デリカシー？」

「そう！！」

理音はひばりの言葉に意味がわからないと言いたげに首を傾げるとひばりは小烏丸の先を向けて言う。

「お兄ちゃんとお姉ちゃんケンカはダメです」

「怜生くん、良いんだよ。あれはいちゃついてるだけだから」

怜生は理音とひばりがケンカを始めたと思ったようで2人を止めようとするが明久は苦笑いを浮かべながら怜生を捕まえる。

「ケンカじゃないんですか?」

「うん。リオとひばりはとっても仲が良いんだよ。だから、邪魔しちゃいけないよ」

「はい」

明久は怜生に言い聞かせると理音とひばりの痴話喧嘩を無視して怜生とソファーに座り、テレビを見始める。

第２４問（後書き）

どうも、作者です。

理音のひとまず保留で良いの一言にひばりは安心したかわからずに『小烏丸』。（爆笑）

第２５問

「リオ、夕飯までごちそうになってごめんね」

「いや、片付けも手伝って貰ったしな。気にするな」

ひばりと明久は理音の研究所の片付けを手伝った後、夕飯を４人で食べてから解散になる。

「理音くん、怜生くんにおかしな事を教えないでよ。わかった」

「あぁ。わかってる」

ひばりは口を開ければ下ネタを言うふしのある理音に口止めすると理音は頷き、

「アキ、ちゃんとひばりを家まで送り届けるんだぞ」

「わかってるよ。それじゃあね。リオ、怜生くん」

「お姉ちゃん、アキ兄ちゃん、今日はありがとうございました」

４人は別れを告げた後、ひばりと明久は自分の家に向かい歩き出す。

「……」

「ねぇ。ひばり」

「えっ!?　な、何、アキくん」

明久は理音からの告白を思い出しているのかどこかぼーっとしているひばりに声をかけるとひばりは慌てて返事をする。

「リオの告白。どうするつもり？」

「……どうしよう」

明久はひばりに聞くとひばりは困ったように笑う。

「ひばりはリオがキライ？　……なわけないよね」

「う、うん。理音くんの事は好きだよ。でも、今まで男の子として考えてなかったから、それに……」

ひばりは理音からの告白に動揺の色は隠せないようで顔を赤くしてうつむくが何か引っかかるのか肩は小さく震えている。

「ひばり、リオは昔からひばりの事が好きなんだよ。あの時のあのクズとは違うよ」

「うん。わかってるよ。だけど……怖いよ。不安だよ。理音くんが先輩みたいな理由であたしを好きだって言ってたらって考えちゃうんだよ」

明久はひばりの不安の意味が理解できるようで優しい声で言うがひばりは不安だとうつむいている。

「ひばりはリオを信じられないの？」

「そんな事ないよ。理音くんは昔と変わらずに口は悪いし、あたしの事をすぐにからかうし……それにエッチだし」

「あはは」

ひばりは理音のスケベな発言が何かに引っかかっているようで背後には一瞬、黒い殺意（もの）が見え、明久はひばりの様子に苦笑いを浮かべる。

「リオはあのクズとは違うよ。だってさ」

「何？　どうして、アキくん笑うの？」

明久は何かを思い出したようでクスクスと笑うとひばりは意味がわからないようで明久に聞く。

「えーとね。ひばりにあのクズからラブレターを貰った時の話をリオにした時の事を思い出したんだよ」

「それの何が面白いの？」

明久の言葉にひばりは意味がわからないと言いたげに言うと、

「あの後、リオは仕事があるからって日本に帰ってきただろ。おばさんに聞いたんだけど日本で仕事なんかなかったらしいよ」

「！？　そ、そうなんだ……」

明久から聞かされた理音の行動にひばりは顔を真っ赤にしてうつむく。

「その後、あのクズ相手に戦ったらしいしね。聞いた話だけど、あのクズ、リオの名前を聞くと今でも顔をひきつらせて逃げ出すって」

「……そうなんだ」

「リオの火力は圧倒的だしね」

ひばりが耳まで赤くしている隣りで明久はひばりの様子を見て笑うと、

「リオも言ってたけど、すぐに答えは出さなくて良いんじゃないかな。少し幼なじみじゃないひばり自身の目でリオを見たら良いよ。まぁ、ひばりの出す答えなんて決まってるだろうけど」

明久はひばりの頭を優しくなでて言う。

「う、うん。それで良いよね」

「うん。それが良いよ。リオもボクもひばりが笑ってるのが1番好きなんだから」

ひばりは理音の告白を一先ず、後回しにすると決めると笑顔を見せ、明久は優しい笑みを浮かべて言う。

第２５問（後書き）

どうも、作者です。

ＦＦＦ団結成前のため、明久に嫉妬心が見えません。２人が大切だからか、ＦＦＦ団に毒されてないからかは不明ですね。（苦笑）

明久から聞かされる理音の過去の行動に真っ赤なひばり。彼女にはしっかり悩んで貰おうと思ってます。（悪笑）

第２６問

「……見えない」

「ひばり、踏み台いるか？」

ひばりは文月学園入学式の朝、クラス分けで自分の名前を探すが彼女の身長では自分のクラスが確認できないでいると後ろから手に『ひばり専用の踏み台』を持った理音が声をかけてくる。

「あたし、そんなにちっちゃくないよ！？」

「えーと、前田くん、ひばりちゃんをあまりからかわないであげてくださいね」

ひばりは理音の言葉に反応すると理音と一緒に２人の友人の『姫路瑞希』がおり、瑞希は変わらない２人の様子に苦笑いを浮かべる。

「あっ、瑞希ちゃん、おはよう」

「はい。おはようございます。ひばりちゃん」

ひばりと瑞希が挨拶をしているのを見て、

「ん？　ひばり、アキはどうした？」

理音は明久がいない事に気づく。

「アキくん？　あたし、ここ２、３日はは生活時間もまともになっ

てきてたから、あたしは朝は顔出してこなかったよ」

「……そうか。なら、確実に寝てるな」

ひばりは理音からの脅しで明久の生活時間は変わってきたため、安心していたようだが、理音は明久は寝坊してると言い切ると『ひばり専用踏み台』を懐にしまい代わりに携帯電話を取り出す。

「……ひばりちゃん、あれって、どうやってるんでしょうか？」

「……瑞希ちゃん、あれは触れてはいけない事だよ」

理音の様子に瑞希は顔をひきつらせてひばりに聞くがひばりはただ首を横に振る。

「……リオ？　朝からどうかした？」

「アキ、お前はいつまで寝てるつもりだ？」

「あれ？　何かリオと約束してたっけ？」

明久は理音の電話で目を覚ましたようであくびをしながら言うと、

「……今日は入学式だ。さっさとこい」

「……ウソ！？　も、もうこんな時間！？」

「クラスは確認したらメール送るから急げよ」

「う、うん。ありがとう」

理音は明久のある意味予想通りの状況にため息を吐くと電話を切り、

「と言う事でアキは遅刻だ」

「……顔を出すべきだったね」

「そうみたいですね」

ひばりと瑞希に言うと2人は苦笑いを浮かべる。

「さてと、なら、クラス確認でもしてくるか、お前らはそこで待ってろ」

「良いんですか？」

「あぁ。お前ら2人ともあそこまでたどり着けないだろ。本来なら、あの群がる愚民どもを四散させたいところだが……」

「理音くん、危ない事はダメだよ！？」

理音はクラス発表に群がる生徒達を蹴散らしたいと邪悪な笑みを浮かべて言うが流石にひばりから止められ、

「……ちっ、わかってる。初日から目立つのは俺の本意ではない」

「なら、その舌打ちは何！？」

理音は舌打ちをするとひばりは声をあげるが、

「瑞希、ひばりがうるさいから、押さえといてくれ」

「悪いの。あたし!?」

理音は瑞希にひばりを引き渡して人波をかき分けて行く。

「相変わらず、前田くんは優しいですね」

「どこが？　理音くんは意地悪だよ」

瑞希は久しぶりに見る理音とひばりのやりとりに昔を懐かしむようにクスクスと笑うがひばりは頬を膨らませている。

「それはひばりちゃんが相手だからですよ。前田くんは少しだけ歪んでるから、ひばりちゃんをいじめたくなるんですよ。小さい子供が好きな子をいじめるみたいに」

「……」

瑞希も明久と同じように理音の気持ちを知っているようで優しい笑みを浮かべるとひばりは先日、理音から告白をされているせいか、顔が真っ赤に染まって行き、

「ひばりちゃん、どうかしましたか?」

「な、な、何もないよ!?　理音くんから告白なんかされてないから!?」

瑞希はひばりの様子に首を傾げて聞くとひばりはごまかそうと声をあげるがよほど、慌てていたようで自分で理音から告白された事を

暴露し、

「そうなんですか？　ひばりちゃん、おめでとうございます♪」

瑞希はひばりが理音からの告白の返事を保留にしている事をしらないため、笑顔でひばりと理音を祝福する。

第27問

「違う！？　違うの。た、確かに理音くんからは告白されたんだけど！？」

「ひばりちゃん、わかりましたから、落ち着いてください」

ひばりはテンパっているため、顔を真っ赤にしているとひばりの様子に瑞希は苦笑いを浮かべてひばりを止める。

「……ごめんね。瑞希ちゃん」

「気にしないでください。それで違うと言うのは？」

「う、うん……」

瑞希はひばりを落ち着かせるとひばりは理音からの告白が嬉しかった事、保留で良いと言われた事、明久から聞いた理音の行動を瑞希に話す。

「そうですか」

「……うん」

瑞希はひばりの話を聞いて頷くとひばりはどうしたら良いのかわからないようで俯き、

「ひばりちゃんは何が引っかかってるんですか？　話を聞く限りは両想いですよね？」

「そ、それは!?　……葵ちゃんが理音くんの事を好きだってあたしは知ってるし……」

瑞希は優しい声で聞くとひばりは理音からの告白の後、理音が好きだと自覚はしたようだが友人の『本宮　葵』が昔から理音を好きだと知っいてるため、どうしたら良いかわからないようである。

「……そうですね。葵ちゃん」

「ん?　本宮ならここにいるぞ」

「きゅ～」

「あ、葵ちゃん!?」

瑞希はひばりの悩みを理解したようで少し困ったように笑った時、涼しい顔をした理音が戻ってくるが、両手には目を回している『本宮　葵』と男子生徒が抱えられており、ひばりは驚きの声をあげる。

「前田くん、葵ちゃんとその人はどうしたんですか?」

「人波につぶされてたから、拾ってきたんだ」

「……確かにあの中だからね」

瑞希は慌てて理音に駆け寄り、2人の状況を聞くと理音は途中で2人を拾ったと言うとひばりは先日、自分も人波に潰されて目を回したせいか顔をひきつらせるが、

「とりあえずはひばり、瑞希、本宮はCクラスだ。アキがDクラス。俺はBだ」

理音は表情を変える事なく、この場にいる全員と明久のクラスを言う。

「えーと、前田くん、相変わらず、マイペースですね」

「ん？　そうか？　まぁ、どうでも良いだろ。それより、行くぞ。ここに居ると邪魔だからな」

瑞希は昔と変わらない理音の様子に苦笑いを浮かべるが、理音が気にするわけもなく、2人を抱えたまま歩き始め、

「待って!?　理音くん、そっちの人はどうするの!?」

「……邪魔なら戻してくるか？」

ひばりは理音を呼び止め、男子生徒の事を聞くとなぜか理音は人波に戻してくると言う。

「……えーと、保健室で良いんじゃないですか？」

「そうだね」

「保健室だな」

瑞希は理音の言葉に苦笑いを浮かべて言うとひばりは頷き、理音が歩きだそうとした時、

「秀吉？　あんた、こんなところで何してるのよ」

理音が抱きかかえている男子生徒と瓜二つの女子生徒が声をかけてくる。

「えーと、この人のお知り合いですか？」

「えぇ。それで」

「クラス分けを見に行った時になかで拾ったんだ」

「そうですか。弟がお世話になりました……ったく、相変わらず、秀吉は役に立たないわね」

理音が男子生徒を拾ったいきさつを話すと女子生徒は理音に頭を下げた後、理音達に聞こえないように舌打ちをする。

（……なるほど、猫かぶりか。まぁ、本性は隠しきれないようだな）

理音は女子生徒の様子を見て苦笑いを浮かべると、

「弟なら、任せても良いのか？」

「……うーん？　ワシはいったいどうしたのじゃ？」

女子生徒に男子生徒を引き渡そうとしると男子生徒は目を覚まし、理音の脇に抱えられている今の状況に首を傾げ、理音は男子生徒を地面に下ろす。

「目を覚ましたわね」

「あ、姉上、すまないのじゃ！？　す、すぐにクラスを見てくるのじゃ！？」

男子生徒は目の前に映る姉の姿に何かあるのか顔をひきつらせる掛けだそうとするが、

「待て。お前が行っても、また、同じ事だぞ。さっきより人も増えてるしな」

理音は男子生徒を引き止める。

「しかし……」

「理音くん、また行ってくるの？」

「行く必要などない。顔と名前は一致しないがクラス分けは全て覚えた。教えてやるから、名前を言え」

男子生徒は姉を怖がっているようで急いで人波に飛び込もうとするが理音は引き止めると平然と新入生全員の名前とクラスを覚えたと言う。

第２７問（後書き）

どうも、作者です。

理音はマイペース。（爆笑）

葵と秀吉を拾ってくる理音の行動パターンが読めません。（苦笑）

ひばり、瑞希、葵はＣクラス。
明久達本編メインはＤクラスです。
理音はＢクラスですが、優子、翔子、美春、友香、恭二、利光、美紀の原作メンバーや大貴、終夜、美咲と言ったメンバーをどう振り分けよう？

第２８問

「そ、そうなのか？　ワシは『木下　秀吉』、こっちがワシの姉上の……」

「秀吉、バカな事を言ってるんじゃないの。そんな事ができるわけないでしょ！！」

男子生徒は理音の言葉を信じて、理音達に自分の名前を名のるが姉の方は理音の突拍子のない言葉を信じるわけがない。

「理音くん、本当にあの短時間で覚えてきたの？」

「ん？　覚えたのは冗談だが、記録には取ってきたぞ」

ひばりも姉と同様の意見なようで理音に聞くと理音は冗談だと良いながらも懐から小さなディスプレイが付いた怪しげな機械と携帯電話を取り出し、

「添付して送信……木下秀吉を検索」

クラス分けを記した表を携帯電話で写真を撮っていたようでメールで写真を添付すると怪しげな機械で秀吉の名前を検索する。

「……Ｄクラスだな」

「吉井くんと一緒ですね」

ディスプレイはクラス分け全体からクラス毎の検索を始め、秀吉の

名前はDクラスと映し出され、

「すごいのぅ。こんなものがあるのか」

「……それ、本当に信用できるの？」

秀吉は感心したように言うが姉は信用する気がないようで理音に疑いの視線を向けて言う。

「あ、姉上、そんな風に疑うのは失礼じゃ」

「秀吉、あんたは何でこんな怪しげな機械を信用できるのよ」

秀吉は姉の態度に慌てて言うが、普通に考えて理音の怪しげな機械は信用出きるわけもなく、声をあげるが、

「まぁ、落ち着け。『木下　優子』」

理音は揉めている姉弟の間に割って入り、姉を『木下　優子』と呼ぶ。

「……ねぇ。あんた、どうしてあたしの名前を知ってるの？」

「ん？　学園の在学者名簿にハッキングして弟の名前から同姓を検索した木下姓は2人だけだったからな。しかし、失敗したな。在学者名簿にはすでに新入生のクラス分けが記されていた。最初からこちらにくるべきだった。そうすれば朝からあんな男どもの集まるむさ苦しいところに行く必要はなかったのに」

『木下　優子』は理音が自分の名前を呼んだ事に信じられないと言

った表情をするが理音は表情を変える事なく言い切ると、

「……ん？　なるほど、あいつ以外にも、こんな人間も紛れ込んでいるとはな。それなりに面白い事にはなりそうだ」

目を通していた在学者名簿に何かを見つけたようで彼特有の邪悪な笑みを浮かべる。

「……えーと、前田くん、何かあったんですか？」

「ん？　少し面白い名前を見つけてな。ひばり、大貴は俺と同じクラスにいる」

「ホント、良かったよ。烏丸くん、すごく大切にしてたから」

瑞希は理音の様子に苦笑いを浮かべて聞くと理音は何もないと言いながらも、先日、会った『烏丸　大貴』の名前を見つけたようでひばりに大貴と同じクラスだと告げる。

「……秀吉、話についていけないのはあたしが悪いのかしら？」

「わからぬのじゃが、少なくとも、あのものの持っておる技術はワシらでは想像できぬものじゃ」

理音達の会話に秀吉と優子はついていけないようで表情をひきつらせていると、

「……ん？　忘れていたな。木下優子、お前も俺と同じＢクラスだ。まぁ、信じるかは任せる。ひばり、瑞希、そろそろ行くぞ」

理音は優子にクラスを教え、懐に怪しげな機械を戻すと葵を脇に抱えたまま歩き出し、

「えーと、木下さん、理音くんは冗談は言うけど、嘘は吐かないから、信じて欲しいかな」

「そうですね」

ひばりは疑いの視線を向けている優子に頭を下げると瑞希は頷き、理音の後を追いかけて行き、

「姉上、ワシは信じても良いと思うのじゃが……」

「……そうね。あの男はうさんくさいけど、他の2人は信じれそうね」

秀吉の言葉に優子は頷くと、

「あたし達も行くわよ。初日から遅刻するわけには行かないからね」

「うむ」

2人とも理音から教わった教室に向かう。

第２９問

「へぇ。４人は同じ小学校出身なんだ」

「うん。学区の関係で中学は葵ちゃんは別に行って、理音くんは……」

秀吉と優子が合流して教室に向かい歩いていると、

『居たぞ。今日こそはカラスの首をとるんだ！！』

「何で、初日からこれなんだよ！？」

こちらに向かって少し気合いの入れた男子生徒５人に追われた大貴が走ってくる。

「烏丸くん！？」

「ひばり」

「ひゃう！？」

ひばりは大貴が追いかけられているのを見て声をあげると理音は表情を変える事なくひばりの背中に手を突っ込み、ひばりは驚きの声をあげるが、

「大貴、受け取れ」

「理音、助かった」

理音はひばりの背中からハリセン『小烏丸』を取り出し、大貴に向かい投げると大貴は空中で小烏丸をキャッチし、

「……小烏丸、また一緒に戦ってくれるか？」

追いかけられてる事など気にする事なく、小芝居に入ると小烏丸を構え、

「……お前ら、俺の相方になりたいならもう1度、ボケを学んでこい」

追いかけてきた男子生徒5人を小烏丸でしばき倒す。

「……これはなんなの？」

「……わからんのじゃ」

秀吉と優子は目の前で行われている小芝居にため息を付いている隣で、

「り、理音くん、いきなり何をするの！？」

「ん？　大貴は小烏丸を必要としていたからな」

ひばりは理音が自分の背中に手を入れた事に頬を膨らませて抗議するが理音が反省する事はなく、

「そうじゃない！！　いきなり、あたしの背中に手を入れないで、びっくりするでしょ！！」

「断れば良いのか？　なら、ひばり、背中に手を入れてホックを外し……」

「こんなところで何を言う気!?」

「大丈夫だ。本気になれば制服の上からでもホックくらい外せるから」

「外さないで!!」

ひばりは理音に説教を始めようとするが理音はひばりのブラジャーを外そうとすると大貴は流れるようにひばりに小烏丸を渡し、ひばりから理音に向けて小烏丸が放たれる。

「理音、支倉、相変わらず、いちゃついてるな」

「いちゃついてない!!」

大貴は理音とひばりの様子に苦笑いを浮かべるとひばりは全力で否定する。

「あの。ひばりちゃん、前田くん、この人は？」

「ん？　あぁ、烏丸大貴。俺の戦友（とも）だ。同じ戦場を駆け抜けたな」

「……その戦場で俺と理音は熱い友情で結ばれたんだ」

「……タイムサービスは戦場とは言わないよ。それに2人を結んだのは卵でしょ」

瑞希は3人のやりとりを見て苦笑いを浮かべながら理音とひばりに聞くと理音と大貴は遠くを見つめて言うがひばりは大きなため息を吐いて言う。

「タ、タイムサービスですか？」

「た、卵？」

「……まったく意味がわからんのじゃ」

理音、ひばり、大貴のつながりに全く意味がわからないようで瑞希は苦笑いを浮かべ、優子と秀吉は眉間にシワを寄せている。

「ひばり、勘違いするな。俺と大貴を結んだのは、あのばばあへの殺意だ」

「あぁ。あのばばあ、次に会ったら生かしちゃかえさねぇ」

理音と大貴はまだ卵を奪って行ったおばさんへの恨みが消えていないようで目には怪しい光が灯ると、廊下には小気味の良い音が響き、

「だから、おかしな事を言わない！！」

「支倉、覚えておけ。俺のモットーは『受けた恩も恨みを忘れない』だ。あのばばあを許すわけにはいかないんだ」

ひばりが理音と大貴を小烏丸で叩きつけるが大貴は卵を奪ったおばさんを許さないと口元をゆるませる。

「……あたし、こんなわけのわからないの2人と同じクラスなの」

「だ、大丈夫ですよ。烏丸くんはわからないですけど、前田くんは変に手を出さなければ何もしてきませんから」

優子は先ほど理音から同じクラスだと聞かされたためか頭を押さえると瑞希は苦笑いを浮かべると、

「俺は割と人畜無害だ」

「……そうは見えんのじゃ」

理音は無表情なまま言い切り、秀吉はため息を吐いた時、

「……うーん？」

「ん？　本宮、目を覚ましたようだな」

理音に抱えられていた葵が目を覚ます。

第２９問（後書き）

どうもです。

大貴と優子のファーストコンタクト。

この作品では彼氏彼女になりうるのか？（苦笑）

理音と大貴の友情は卵１パックからばばあへの殺意に変わってました。そしてひばりにつっこまれる。

目を覚ました葵はこの混沌にどうするのでしょうか？

ひばりがいる事で葵は少し明るいと思いますが秀吉との関係はどうなるんでしょうか？（悪笑）

第３０問

「……あれ？　私、確か、クラス分けを見に行って……」

「……」

葵は今の状況に頭がついて行っていないようで記憶をたどり出すと自分を抱えている理音と目が合い。

「ま、ま、前田くん！？　ど、ど、どうしてここに？　えーと、人波に流されてアメリカまで？　そんな事は有り得ないから、それなら、あそこから逃げ出したいと思ったのが空間になんらかの作用をしてテレポーテーション？　それこそ、現実にあるわけないよ」

「……本宮、暴れるな」

「ふぁい！？　……」

目の前に理音がいるわけないと思っている葵はわけのわからない事を言い始め、理音は無表情のまま葵に言うと葵は慌てて返事をしたせいか舌を噛む。

「葵ちゃん、大丈夫ですか？」

「ずいぶんとベタな事を」

下を噛み涙目になる葵に瑞希は声をかけ、大貴は苦笑いを浮かべると、

「理音くん、葵ちゃんに説明するから、葵ちゃんを下ろして、そっとだよ。落としたらダメだからね」

「……わかってる。本宮、立てるな？」

「ふぁい」

ひばりは理音に葵をおろさせ、

「葵ちゃん、えーとね……」

「そうなんですか？　前田くん、助けていただきありがとうございました」

葵に今の状況を簡単に説明し、葵は現状を理解しきれてはいないようだが、理音に頭を下げる。

「気にするな。本宮の成長も……ひばり、何をする？」

「何をするじゃないでしょ！！　葵ちゃんに謝りなさい！！」

「不可抗力だろ。だいたい、気を失っていて反応のない人間を襲う趣味はない」

理音は葵を運んでいる時に葵の成長を確認したと言うとひばりから小烏丸が放たれるが、理音は自分は悪くないと言い切る。

「まぁ、待て。支倉、理音の言う通りだろ。だいたい、あんな兵器（巨乳）を見せられて反応しないのは男として問題ある。良いか？　巨乳は正義だ！！」

「烏丸くん！！」

大貴は巨乳好きなようで真剣な表情で理音を弁護するとひばりは声をあげるが、

「大貴、勘違いするなよ。サイズの問題じゃないんだ」

「……なるほど、確かに最近は美や貧の需要もあると……あれ？いだだだ！？」

「姉上！？　いきなり、何をするのじゃ！？」

「うるさいわよ。秀吉！！　あたしが悪いわけじゃないのよ！！こいつがあたしの胸とあっちの育ちすぎてるのを見比べたのが悪いのよ！！」

理音は大貴の巨乳至高主義発言に反論すると大貴は理音の言葉を聞いて考え直そうとしたのか優子の少し寂しい胸に目を止めると、優子は自分の胸のサイズを気にしていたようで、大貴の言葉にキレ、大貴の肘を曲がってはいけない方向に曲げ、秀吉が慌てて優子を止めようとするが、彼女は止まる事はなく、

「……ねぇ。理音くん、木下さんって」

「猫を被ってたんだろ。まぁ、最初から中身が隠せてなかったけどな」

ひばりは今までは落ち着いた優等生と言うイメージだった優子の変わりように顔をひきつらせるが、理音は気づいていたため、表情を

変える事なく言う。

「えーと、大きいのも良い事ば……」

「瑞希、それはケンカを売ってるのと変わらない」

優子の変わりように瑞希は優子にフォローを入れようとするが理音はそれを遮ると、

「本宮を運び終えたと思ったら、今度は大貴を運ばないといけないわけか？　本来、俺は頭脳労働派なんだが」

「……理音、確かに小さくても柔らかかった」

優子の攻撃に泡を噴いている大貴を見てため息を吐くが、大貴は優子のわずかな感触を味わった言うと幸せそうな表情で気を失う。

「……前田、その変態を引き渡して、二度と目覚めないようにするから」

「残念だが、それはできない。俺と大貴はおっぱい好き（とも）だからな。幸せなまま眠りにつかせてやりたいんだ」

「だから、眠りにつかせてあげるわよ。二度と目覚めない眠りにね」

優子は大貴の発言に背中から殺意（もの）を溢れ出しながら言うが、理音は優子の言う事を聞く気はなく、

「それじゃあ、そろそろ時間だし解散だな。木下姉、行くぞ」

「ちょっと、放しなさい！？」

大貴と優子を引きずってＢクラスの教室に歩き出し、

「あたし達も行こうか？」

「そうじゃのぅ。とは言ってもクラスが違うのはワシだけじゃが」

ひばりは理音の背中を見て苦笑いを浮かべると秀吉は頷き、それぞれの教室に入って行く。

第３０問（後書き）

どうも、作者です。

大貴、優子の逆鱗に触れる。（爆笑）

理音と大貴のエロトーク。周りの目は気にしません。（苦笑）

第３１問

「大樹、なんとかならないか？」

「いや、確かに陸なら作れるかも知れないんだけど……」

『清瀬　大樹』は教室に入り、担任がくるのを待っていると中学からの友人である『秋月　終夜』が声をかけてくるが終夜の頼みに大樹は答える事が出来ずに苦笑いを浮かべる。

「頼むよ。大樹、春休み中に日本語を教えたんだけど、やっぱり、時間が足りなくてほとんど聞き取れないんだよ。お前が前に言ってた幼なじみなら翻訳機くらい作れるだろ」

「ドイツ語の翻訳機。確かに陸ならできそうなんだけど」

大樹は終夜が頭を下げるのを見て苦笑いを浮かべるが陸が作るものは爆発する恐れがあるため、終夜の頼みには頷けない。

「なら、何に問題があるんだ？」

「終夜、言いたくはないが、陸は爆発が大好きなんだ。作ったものは例外なく爆発する」

「……なんだ。そのえらく迷惑な設定は？」

大樹は先日、陸から送られてきた小箱を思い出しながら事実を告げると終夜は意味がわからず、眉間にシワを寄せる。

「そう思うよな。実際、この間、陸から送られてきたものがあるんだが、美春のものは俺の目の前で爆発したし、怖くて開けられないんだ」

「……なら、そんな物騒なものを持ち歩くな」

大樹はため息を吐きながら、カバンから陸が送ってきた小箱を取り出して言うと終夜は大樹から距離を取る。

「大丈夫だ。開けない限りは絶対に爆発しない。どこかに爆発しないで箱を開ける仕掛けがあるとは思うんだけどな」

「……いや、そんな物騒なものを送られてきて、そんなところを信じるなよ」

大樹は小箱を眺めながら言うが終夜は大樹から距離を保ったまま言うと、

「……そう言えば、陸以外に1人だけ、力になってくれそうな人間に心当たりがあるな」

「本当か！！」

大樹は陸の爆発物を持ってきた理音の事を思い出す。

「いや、名前も聞かなかったんだけど、陸の知り合いだったし、何よりも平然とこれを爆発物とわかった上で持ち込んでたんだ。たぶん、あれが前田博士なんだとは思うんだけど……」

「なら、そいつを紹介してくれ」

「残念ながら、連絡先がわからないんだよ。今年からうちの幼稚園に入学した子の兄貴だから……ん？　支倉なら知ってるか？　あいつも文月って言ってたから、後で探して見るか」

大樹はひばりに理音の事を聞こうと決めた時、

「前田くん、放して、あたしは歩けるから！？」

「……黙れ。木下姉」

大貴と優子を引きずった理音が教室に入ってくる。

「「あっ！？」」

大樹と終夜は入ってきた理音を見て驚きの声を上げると、

「ん？　確か、清瀬大樹だったな。海谷の爆発物は何が入ってたんだ？　ん？　……そっちは確か、この間の彼女は元気か？」

理音は大樹と終夜に気づき声をかけてくる。

「いや、開けるのが怖くてな。まだ開けてないんだ……」

「悪い。この間はたいした礼も言わずに……」

大樹と終夜は理音の言葉に返事をした後、お互いに理音と面識があるのに驚き顔を見合わすと、

「……何、見つめ合ってるんだ？　お前らまさか同性愛者か？」

「……美少年2人が見つめ合っている？　……あの2人の場合、どっちが攻めかしら？」

理音は2人から一歩引き、優子は何か考えているのか小さな声でぶつぶつと言い始める。

「待て！？　俺はノーマルだ。勘違いするな！！」

「……頼むから、おかしな勘違いしないでくれ」

大樹と終夜や理音と優子の様子に全力で否定すると、

「悪い。前に名前を聞かなかったんだが、あんた、前田理音で良いんだよな？」

「あぁ。そうだが、それで、こいつの信管でも抜いて欲しいのか？」

大樹は理音に名前を確認すると理音は大樹の机の上に置いてある小箱を手にして言う。

第３１問（後書き）

どうもです。

レフェルさんに許可をいただき、大樹と終夜は友人設定とさせていただきました。
同じ中学出身です。

その関係でつながってしまうであろう美春と美波。（爆笑）
そして、優子から危ないものははみ出しています。（爆笑）

第３２問

「まぁ、確かにそれの信管も抜いて欲しいんだけど、その前に終夜が頼みたい事があるんだ」

「ん？　終夜？」

「この間は美波が世話になった。『秋月　終夜』だ」

「『前田　理音』だ。木下姉、いつまでも妄想の世界に入っていないでお前も名乗ったらどうだ？」

「な、何を言ってるのよ！？」

大樹は苦笑いを浮かべながらも理音に先に終夜の話を聞いて欲しいと言うと理音と終夜はお互いに名乗りあい、理音は終夜と大樹で妄想している優子に名乗るように言う。

「あ～、『清瀬　大樹』だ……」

「『木下　優子』です」

大樹は苦笑いを浮かべたまま名乗ると優子は慌てて頭を下げるが大樹と終夜の視線には理音に引きずられてきた大貴に集中している。

「それで、秋月、俺に頼みたい事とはなんだ？」

「……先にこいつがどうして気を失っているか教えてくれ」

理音は終夜に聞くが終夜は大貴の事が気になるようで理音に聞き返す。

「ん？　こいつは『烏丸　大貴』だ。今は木下姉に落とされて沈んでいる」

「……なかなかの攻撃力だな」

「まったくだ」

「ちょっと、前田！？　おかしな事を言わないで！？」

「事実だろ。それで」

理音は大貴が優子に落とされた事を伝えると終夜と大樹は顔わひきつらせて優子を見ると優子はそんな事実はないと言うが、理音は表情を変える事なく言うと改めて終夜に聞く。

「あぁ。この間、お前に助けて貰った娘がいただろ？」

「……確か、『ミナミ』と言うお前の彼女だな」

「……彼女じゃないから」

終夜が話し始めると理音は話を折り、終夜はため息を吐くが、

「それで彼女がどうかしたのか？」

理音はニヤニヤと笑う。

「……もう良い。美波はこの間、日本に帰ってきたんだけど、ガキの頃からドイツに住んでいたから」

「日本語がわからないわけだな。俺にドイツ語の翻訳機を作って欲しいと言う事だな」

「あぁ。頼んでも良いか？」

終夜の話の途中で理音は話がつながったようで言うと終夜は理音に確認する。

「あぁ。別に構わないが」

「ちょっと、ドイツ語の翻訳機？　あんた、そんな事ができるの？」

理音は終夜の頼みに頷くと理音の正体を知らない優子は首を傾げる。

「まぁ、その程度ならな」

「……あんた、すごいのね」

「そりゃあ、すでに……なぁ、前田博士」

理音は優子の言葉に興味なさそうに頷くと大樹は何かが引っかかり、理音を呼ぶ。

「前田博士？」

「なんだ？」

優子は首を傾げたままだが、理音は大樹に聞き返す。

「そう言えば、どうして、前田博士は文月学園の制服をきてここにいるんだ？」

「ん？　海谷から聞いてないか？」

「あぁ」

優子の疑問に答える事なく、理音と大樹は話を続けて行く。

「そうか？　海谷はお前とのメールは楽しそうだとあのポンコツが言っていたんだがな。まぁ、そこまで話す事ではなかったと言う事か」

「陸が楽しそう？」

「あぁ。俺は見た事はないが、お前とのメールを読んでいる時だけは笑っていると言うからな」

「……」

理音は陸の顔を思い出して笑うと大樹はテレているのか気まずそうに頭を掻く。

「まぁ、今は良いか。妖怪ばばあの依頼で召喚システムの解析や改良等を頼まれたんだ。海谷にも同じ依頼が行っていたが、あいつは自分の研究が途中だったようでな。断ったと言っていた」

「……ったく、断る前に連絡くらいくれよな」

大樹は理音の言葉を聞いてため息を吐くと、

「ちょっと待ってよ！？　研究とか博士とか召喚システムの解析とかなんなのよ」

話に完全に置いて行かれている優子が声を上げる。

「……うるさいぞ。木下姉」

「えーと、前田はこの年で海外の研究所に所属しているらしいんだ」

「……はぁ？」

理音は優子の相手をするのが面倒だと言うと終夜が優子に説明すると優子は処理が追いつかないようで首を傾げた時、

「……水色のシマシマ」

「……死ね！！」

優子の足元から大貴の声が聞こえ、優子は我に戻ると大貴が何を見たか直ぐにわかったようで思いっきり、大貴を踏みつける。

第３２問（後書き）

どうも、作者です。

大貴にとどめ。（爆笑）

これはクロさんに怒られるかな？

理音の過去は広まって行きますが理音は特に気にしません。事実を事実として認めるしかないと思ってますしね。

オリキャラが多い分、人間関係は上手く繋がっているのかな？とか思いますね。

後は葵をどこかに繋げて更に人間関係を広げよう。（悪笑）

第３３問

「おい。木下、やりすぎだ!?」

「放して、この男だけは、この場で殺さないといけないのよ!!」

優子の行動に大樹は慌てて優子を押さえつけるが、優子は止まらない。

「……なぁ、前田。木下を止めなくて良いのか?」

「大貴の自業自得だ。問題ないだろ」

終夜は目の前で行われているやりとりに顔をひきつらせて理音に言うが、理音は大貴の自業自得だと言い切ると、

「……しかし、相変わらず、ムダに精巧に出来てるな。これだけの技術や発想力があるのになぜ、最初は爆発させないと気がすまないんだ?」

懐から大量の工具を取り出し、大勢の生徒がいる教室の真ん中で陸の小箱の解体を始め出す。

「ちょっと待て。前田!?　こんな人が多いところでお前は何をしてるんだ!?」

「ん?　清瀬に頼まれた信管の除去だが、あまり騒ぐなよ。海谷の事だ。普通に箱を開けない場合の爆発は威力を強めてる可能性もあるからな」

終夜は理音の行動に慌てるが理音は気にする事なく、小箱を分解していき、

「ん？　しまった」

「何をした！？」

不吉な言葉をつぶやくと今までの理音達の話が聞こえていた生徒は理音のそばから全力で離れるが、

「……朝の連続テレビ小説を録画するのを忘れた」

理音のつぶやきはどうでも良い事である。

「……清瀬、信管は外したが、これをどうしたらいい？」

「待て、前田博士、当然のように投げて渡すような事はしないでくれ。それにそれを渡されても俺に使い道はないから」

理音は信管を抜くのに成功したようで少し離れている大樹に聞くと大樹は安全に扱えと言うため、

「そうか？　殺傷能力は低いが、少しいじればそれなりの攻撃力になるんだが」

理音はもったいないと言いたげに信管をさらに細かく分解していく。

「……あの男、危険ね」

「……お前の攻撃力もな」

理音の姿に優子は顔をひきつらせて言うと大貴は優子に踏まれた部分をさすりながら言い、

「あ、大丈夫か？　烏丸」

「あぁ、助かった。さすがにあれ以上踏まれるとヤバかった」

大樹は立ち上がった大貴に声をかけると大貴は苦笑いを浮かべる。

「清瀬、後は中身を納めている箱だけだが、これはある程度の爆発に耐えられる作りになっているみたいだから、もう大丈夫だろ」

「あぁ、助かった」

理音は怪しげな機械をまたいくつか取り出して箱の中身を分析をして安全だと判断したようで大樹に手渡すと、

「次は秋月の翻訳機だな……悪いな。一先ず、使えそうなものが今はないから後日で良いか？」

「あ、あぁ」

理音は懐の中に手を入れて使えそうなものを探し机の上にいろいろと積み上げて行くが翻訳機に使えそうなものはないと言うと終夜は本来、懐に入るはずのない量のものが懐から出てくるため、顔をひきつらせて、

「……前田、お前って趣味で手品とかやるのか？」

疑問に思った事を口にする。

「ん？　何をわけのわからない事を言ってるんだ？　だいたい、これくらいの事だれだってできるだろ。なぁ、大貴」

「あぁ……しまった！？　また、小烏丸を支倉に渡したままだ！？」

理音は終夜の言葉に怪訝そうな顔をすると同じように小烏丸を取り出す大貴に話を振ると大貴は小烏丸をひばりに渡したままだと気づき、声を上げると、

「……木下さん、あの2人はどう言う関係なんだ？」

「……あたしに聞かないでよ。あたしもさっきあったばかりなんだから……なんでよりにもよって、こんなわけのわからないヤツらと同じクラスなのよ」

大樹は理音と大貴の様子に苦笑いを浮かべながら優子に言うと優子は首を振った後、周りに聞こえないように小さな声でつぶやくが、

「木下姉、はみ出てるぞ」

「……何もないわよ」

理音は優子を見て事実を指摘すると優子は無駄なくらいの笑顔で理音を睨みつける。

第３４問

「前田、ちょっと良いか？」

「なんだ？」

入学１日目のプログラムを全て終えて、理音が立ち上がった時、終夜が理音に声をかける。

「いや、美波も会えたらお前に礼を言いたいと言っていたからな」

「別に礼などいらん」

終夜は理音と美波を会わせようとするが、理音は礼を言われる事ではないと思っているため、すぐに断った時、

「……えーと、理音くんは」

ひばりがＢクラスの教室を覗いて理音を探す。

『……どうして、小学生が紛れ込んでいるんだ？』

「あたし、そんなにちっちゃくないよ！？」

ひばりの姿を見たＢクラスの生徒が言うとひばりは声をあげ、

「前田博士、支倉が呼んでるぞ」

「あっ、清瀬くんは理音くんと同じクラスなんだね」

大樹がひばりに気づくと知り合いの大樹が見えたため、ひばりは嬉しそうな表情をする。

「清瀬、博士は止めてくれ」

「あぁ。悪い」

理音は大樹の呼びかけに答えるとひばりの近くまで歩き、

「それで、ひばりの声が聞こえたんだが、姿が見えないんだが、清瀬、わかるか？」

「あたし、そんなにちっちゃくないよ！？」

一ボケいれると、ひばりからハリセン『小烏丸』が放たれ教室には小気味よい音が響くが朝に理音の異常性を見せつけられたクラスメート達は凍りつく。

「……な、なぁ。支倉、そんな事をして大丈夫か？」

「大丈夫も何も理音くんがあたしをからかうから悪いんだよ」

大樹は危険人物の理音に躊躇する事なく、ひばりがハリセンを振り下ろす様子に顔をひきつらせるがひばりは頬を膨らませて理音が悪いと言うと、

「……相変わらず、良い腕だ」

大貴はひばりのハリセンさばきに感心したように頷く。

「あ、烏丸くん、ごめんね。あたし、小烏丸をまた持って行っちゃった」

「いや、こっちも忘れて……なぁ、理音、支倉の声が聞こえるのに姿が見えない……良い腕だ」

大貴の姿を見てひばりが大貴に駆け寄ると大貴は理音と同じボケをかまし、ひばりに小烏丸でしばかれ勢い良く吹っ飛ぶ。

「あたし、そんなにちっちゃくないよ！？」

「……ねぇ、前田も烏丸くんもどうして、支倉さんをからかうの？」

ひばりが頬を膨らませているのを見て優子がため息を吐くと、

「支倉のリアクションとハリセンさばきは一流だ。芸人としていじらないといけないんだ」

「ん？　ひばりがかわいいから、からかいたくなるんだ」

大貴は立ち上がりながら言い、理音は表情を変える事なく言い切る。

「……前田、趣味は人それぞれだと思うが、幼女趣味はマズいだろ」

「あたし、そんなにちっちゃくないよ！？　あたしだって今日から高校生だよ！！」

終夜は理音をロリコンと判断して、道を正そうと理音の形に手を置くとひばりは声をあげ、

「……マジか？　大樹」

「あぁ、支倉は同じ年だよ」

終夜を含めたクラスメート達がひばりが同い年と言う事実に驚きの声をあげるなか、

「秋月、勘違いするな。俺はガキには興味ない。ひばり以外なら、こういうのが好きだ」

「理音、お前はやっぱり、俺の戦友（とも）だ」

理音は懐から巨乳系のグラビア雑誌を取り出し、それを見た大貴は理音とガッチリと握手をすると男子クラスメートから賞賛の声が上がる。

「理音くん、烏丸くん、こんなところでそんなものを広げないで！？」

「烏丸大貴。あんたはやっぱり、あたしの敵よ！！」

「木下、ちょっと待て！？　男なら当然の……あだだだ！？」

その様子にひばりからは再度、２人にハリセンが飛び、優子は背後に真っ黒な殺意（もの）がはみ出し、大貴に関節技をかけはじめる。

「……カオスだな」

「ただ、いちゃついているだけじゃないか。前田に至ってはさらり

と告白してるわけだし」

大樹は４人の様子に苦笑いを浮かべると終夜はため息を吐く。

「いちゃついてないよ!?　あたしと理音くんは『幼なじみ』だよ!?」

「今のところはな」

ひばりは終夜の言葉を慌てて否定するが理音の言葉に顔を真っ赤にすると、

「……前田、お前、凄いな」

「……まったくだ。尊敬する」

大樹と終夜は理音の言葉を聞いてつぶやく。

第３５問

「まったく、理音くんはもう少しいろいろと気にしてよ。こんな教室で……グラビアとか女の人」

ひばりは理音の行動を攻めるが理音の出したグラビアを思い出して顔を赤くし、声はどんどん小さくなって行くなか、

「グラビアがダメなら」

「これ以上、おかしなものを出さないで！！」

理音が懐に手を入れるとひばりは小烏丸で理音を叩きつける。

「……ひばり、何をする？」

「何をする？　じゃないよ。今度は何を出す気だったの？」

理音はひばりに叩かれた意味がわからずに首を傾げるがひばりは理音をジト目で見て言うと、

「ん？　写真がダメなら映像を……」

「だから、出さない！！」

理音は再度、小烏丸でしばかれる。

「……前田、お前の懐にはいったい何が入ってるんだ？」

「……まったくだ」

理音とひばりの様子に大樹と終夜はため息を吐くと、

「ん？　万国共通で男子高校生は普通に持ち歩いていると教授に教わったんだが、教授からこれさえ出せばすぐに交友も広がると」

留学時代に理音に余計な事を吹き込んだ教授がいるようで理音は首を傾げながらけっきょく懐からがＤＶＤが出てくる。

『……前田様、こ、これはまさか』

「あぁ、もちろん、無……」

理音の懐から出たＤＶＤにクラスメート達はまるで理音を褒め称えるように盛り上がり、理音が当然だと答えようとした時、

「……理音くん、そろそろ、あたしも本気で怒るよ」

「わ、わるかった。ひばり、おふざけがすぎた」

小烏丸が放たれるわけでもなく、背後に真っ黒な殺意（もの）がはみ出たひばりが笑顔で理音に言うと理音は顔をひきつらせて出したＤＶＤを懐に戻すとひばりに謝る。

「……本当にわかった？」

「あぁ」

「……支倉、最強説」

笑顔のひばりに理音が頷いているのを見て終夜は苦笑いを浮かべ、

「それで、支倉は前田を迎えにきたのか？」

「あたし？　あたしは烏丸くんに小烏丸を……木下さん、ストップ！？　烏丸くんが泡吹いてるよ！？」

大樹がまとめに入り、ひばりは大貴にハリセン『小烏丸』を返しにきたと言い、大貴を見ると大貴は優子から関節技をかけられ口から泡を吹いてる。

「……木下姉、やりすぎだ」

「こいつは死んだ方がいいのよ！！　放しなさい！！　前田！！」

理音は大貴の状況を見て流石にまずいと判断して優子を大貴から引き剥がすが優子はまだ殺りたりないようである。

「止めろと言ってるだろ。それ以上やると大貴はドMだからクセになるぞ」

「誰がドMだ！！　……ピコハンだと！？」

理音は優子を引き剥がして大貴がクセになると言うと大貴は復活し、小烏丸が飛ぶが理音はピコハン型鉄アレイで小烏丸を受け止める。

「芸人はドMかドSに分かれると聞いていたんだが、お前はドMだろ？」

「理音、ふざけるな。芸人はドSかソフトMくらいがちょうど良いんだ！！」

理音の偏った知識に大貴はその言葉は間違っていると吠える。

「……結局、Mなのか？」

「……知らん。それより、ハリセン対ピコハンってのはシュールな光景だな」

大樹と終夜は2人の様子にため息を吐くが、

「理音くん、ストップ！？　それはダメ！？」

ひばりは理音が持っているものがただの鈍器と知っているため、慌てて、理音を止める。

「……あれも何かおかしなものなのか？」

「みたいだな」

ひばりの様子に終夜と大樹は首を傾げた時、

「ヒロ、美春をいつまでまたせるのよ。遊んでるなら、美春は先に帰るわよ」

「……誰だ？」

1人の少女がBクラスに入ってきて『ヒロ』と言う人間を呼ぶと大貴が振り返るが、

「あなたなんか、呼んでいませんわ！！　美春に声をかけないでください。汚らわしい豚野郎！！」

大貴は少女に罵倒される。

第３５問（後書き）

どうも、作者です。

理音、ひばりに謝る。（爆笑）

大貴はＳかＭか、実際はどうなんだろうと思う。

そして、美春の登場に罵倒される大貴。

……カオスだ。

第３６問

「なんだと、このロールパン！！」

「誰がロールパンですか！！」

大貴は自分を罵倒した少女のツインテールの髪型を見て怒鳴りつけると少女は大貴を睨みつける。

「……美春」

「……清水かよ。また、面倒な奴が」

大貴とにらみ合いを始めている少女は大樹と終夜は知り合いのようでため息を吐くと、

「『清水美春』？」

「理音くん、知ってるの？」

理音は聞いた事のある名前に首を傾げ、ひばりは理音に聞く。

「ん？　いや、清瀬以外にもう１人。海谷に幼なじみがいたはずなんだが、その名前が清水美春だったな。と」

「そうなの。清瀬くん」

「あぁ。美春、いらないところでケンカを売るな。烏丸、すまない。そいつは俺を呼びにきたんだ」

理音の言葉を聞いて、ひばりが大樹に確認をすると大樹は少女が幼なじみの『清水　美春』だと言い、大貴と少女のなかに割って入るが、

「ヒロ、止めないで、この豚野郎だけは今日、この手で始末しないといけませんわ！！」

「基本的にロールパンとは考えが合わなさそうだが、その考えだけは賛成だ。貴様をこの小烏丸でしばき倒し、バターを塗りたくってバターロールにしてくれる！！」

大貴と美春は止まらない。

「……ひばり、小烏丸じゃなくて悪いが、止めてこい」

「あたしじゃ、これは重くて使えないよ。と言うか、そんな鈍器は使えないよ」

完全にお互いを敵と見なした大貴と美春は一触即発の空気をだしており、理音はため息を吐きながらひばりの前にピコハン型鉄アレイを差し出すとひばりは自分には扱えないと言うが、

「心配するな。これは本物のピコピコハンマーだ。ひばりが小烏丸を大貴に返すと手元が寂しくなると思ってＨＲ中に用意したものだ。残念ながら、名前はまだない」

「……理音くん、いろいろとツッコミたいんだけど、一先ず、借りるね」

理音はひばり用のピコピコハンマーだと言い切り、ひばりは頭を1度、押さえた後、理音からピコピコハンマーを受け取り、

「2人とも、教室でケンカしない！！」

「ぐはっ！？」

ピコピコハンマーで大貴と美春の頭を叩くと大貴は芸人の性なのか吹っ飛んで行く。

「……音が半音高いな。微調整が必要だ」

「……そのこだわりは何なんだ？」

理音はピコピコハンマーの音が気に入らなかったようで眉間にシワを寄せると終夜はため息を吐き、

「な、なんなんですか？」

美春は目の前で吹っ飛んだ大貴に一瞬、呆気にとられると、

「悪い。烏丸に謝っといてくれ。美春、帰るぞ」

「ちょっと、ヒロ、放しなさい！？　美春はあの豚野郎を地獄に叩き落とすと言う使命が」

「……殺人は犯罪だ」

大樹は美春の首をつかむとカバンを手に持ち、美春を引きずって教室を出て行く。

「……ねぇ。理音くん、これは安全だって言ったよね？」

「あぁ。大貴が吹っ飛んだのは芸人の性だ」

ひばりは大貴の様子に手に持ったピコピコハンマーを手に顔をひきつらせながら言うと理音はただのピコピコハンマーだと言い切る。

「……烏丸くん、生きてる？」

「支倉、良い腕だ……」

優子は勢い良く吹っ飛んだ大貴に少しだけ冷静になったようで、つんつんと大貴をつつきながら言うと大貴は悔いのない笑顔で言った後、力尽きる。

「烏丸くん！？　り、理音くん！？　本当に大丈夫なんだよね？」

「だから……間違えた。渡すのはこっちだった」

ひばりは大貴の様子に理音につかみかかるように聞くと理音はため息を吐いた後、もう1度、ピコピコハンマーを見て間違えたと言い、懐からもう1つピコピコハンマーを取り出すと、

「な、何をしてるの！？」

「冗談だ。これはスペアだ。木下姉、吹っ飛んだ時に頭をぶつけてるかも知れないから動かすなよ」

ひばりは顔を青くするが、理音は冗談だと言うと大貴の様子を見る。

第３６問（後書き）

どうも、作者です。

大樹は苦労人。（苦笑）

大貴と美春は宿敵かも知れない。

そして、ひばりに渡された新たな武器ピコハン♪　名前はまだない。（爆笑）

やっぱり、小烏丸は大貴かな？　なら、ひばりは？

と思ったらピコハンしか思いつきませんでした。だから、前フリの鉄アレイです。

くだらないところではった伏線に気づいた人はいるんでしょうか？

そして、ひばり専用ピコハンの名前募集。（爆笑）

第37問

「……これはマズいな」

「おい。ずいぶん深刻な表情だけど大丈夫か？」

理音は大貴を見て、眉間にシワを寄せると終夜が聞くと、

「あぁ。とりあえずはこれで、電気ショックだな」

「……前田、心臓は動いていると思うわよ」

理音は楽しそうに懐から怪しげな機械を取り出すが優子はジト目で見て理音を止める。

「……ちっ」

「理音くん！？」

理音は優子に止められて舌打ちをするとひばりは驚きの声をあげるが、

「特に外傷は見られないな……起きろ」

「スリッパ！？」

理音は大貴の状況を見ると特におかしなものはないと判断し、気付け代わりに大貴の頭を懐からだしたスリッパで叩きつける。

「いたっ！？」

「一発かよ」

大貴は頭を叩かれてすぐに目を覚ますと終夜は苦笑いを浮かべる。

「大貴、芸の道に生きるのは勝手だが、少し体に気を使え、打ち所が悪ければ生命は簡単に壊れるぞ」

「ん。あぁ。気をつける」

理音は大貴の返事にくすりと笑うと、

「ひばり、アキのところに行くぞ。早くしないと1人で帰……何をする？」

「時間がかかってるのは理音くんのせいでしょ」

ひばりに明久のところに顔を出すぞと言うがひばりは頬を膨らませながらピコピコハンマーで何度も理音を叩く。

「なんか、和む光景だな？」

「……そう？」

終夜は理音とひばりの様子に苦笑いを浮かべると優子は終夜の意見には納得できないようでため息を吐く。

「行くぞ」

「ひゃう！？」

理音はひばりからピコピコハンマーを取り上げるとひばりの背中にピコピコハンマーを突っ込むとひばりは小さな声をあげる。

「……何で、ピコハンを背中に入れても背中が膨らまないのよ。前田と言い、支倉さんと言いなんなの？」

「やはり、支倉も俺と同じ能力を……」

「……いや、わけがわからないから」

優子は目の前で繰り広げられている状況に頭を抱えるが大貴は真剣な表情をして言うと終夜はため息を吐く。

「だから、理音くん、あたしの背中にどうして腕を入れるの！？止めてって言ってるでしょ！！」

「……しまった。せっかくだから外しておけば良かった」

ひばりは理音のいきなりの行動に顔を真っ赤して理音に詰め寄るが、理音はひばりの背中に手を入れた時に何かをすれば良かったと言うと、

「り、理音くん！！」

「ひばり、アキのところに行くぞ」

ひばりは理音の言葉は1つの答えにしか行き着かず、声をあげるが理音は気にする事なく、ひばりを引きずって教室を出て行く。

「ちょっと、理音くん、引きずらないで!?　まだ終わってないよ!!」

「良いから行くぞ……ん？」

「スイマせん……？」

理音がひばりを引きずりながら明久の教室に向かおうとすると理音に少女がぶつかる。

『……確か、美波だったな？』

『この間の？　……この間はありがとう。助かったわ』

理音はぶつかった少女が先日ぶつかった少女だと気づき、ドイツ語で終夜から聞いた少女の名前を呼ぶと少女も理音に気づき頭をさげる。

「理音くん、えーと」

『ん？　美波、前田も一緒か？』

ひばりは理音と少女の間に飛び交う聞き慣れない言葉に首を傾げると後ろから終夜がドイツ語で声をかけてくる。

『終夜』

『……ほぅ』

少女が終夜の名前を呼んだ時、安心したような表情をし、その様子に理音は邪悪な笑みを浮かべると、

「理音くん、変な事を考えない」

ひばりは理音の考えている事に予想がついたようで理音の制服を引っ張って釘を刺す。

「なぜ、疑う?」

「疑われるような表情をするからだよ。それより、さっきのは?」

「ドイツ語だ」

ひばりの質問に理音はドイツ語を話していたと言うと、

「悪いな。支倉、こいつは『島田　美波』。ガキの頃からドイツ暮らしだったから、日本語が上手く話せないんだ」

終夜は理音とひばりに幼なじみの『島田　美波』を紹介する。

第３７問（後書き）

どうも、作者です。

今更ながら、理音の制服には何が入っているんだろうか？（苦笑）

ひばりが理音をピコハンで叩く姿は和みます。（爆笑）

美波との再会。

そして。

ひばり専用ピコハン名前募集中。

現在

『とーるはんまー』

『ひばりの小槌』

『ひばはん』

の３つをいただきました。

色を変えて３つ出す。（爆笑）

文章じゃわかりません。

名前はまだまだ募集中です。新しい名前と現在の３つの候補への賛

同意見でも受け付けます。

第３８問

「あたしは支倉ひばりよろしくね。島田さん」

『俺は前田理音でこの見た目が小学生なのが支倉ひばりだ』

「シマだミナみでス。よろしくオネガイしまス。ハセくらサんにマエだクン」

ひばりは終夜から美波を紹介されて頭をさげると理音がドイツ語で自分とひばりの名前を美波に教え、美波はなれない日本語で２人に頭をさげる。

「……理音くん、さっき、島田さんにおかしな事を言わなかった？」

「気のせいだ」

３人が挨拶をした後、ひばりは先ほどの理音のドイツ語に悪意を感じたようで聞き返すが理音は表情を変える事なく何もないと言うが終夜はそんな２人を見て苦笑いを浮かべると、

『美波、この後はどうするんだ？　俺はサッカー部を見てきたいんだけど、１人で帰れるか？』

『わたしは帰るわ』

『１人で帰れるか？』

『当たり前でしょ』

終夜はサッカー部に入りたいようで部活見学に行きたいため、美波に1人で帰れるかを聞くと美波は1人で帰れるとは言うが、不安そうな表情である。

「ねぇ。理音くん、2人は何を話してるの？」

「ん？　島田は日本に帰ってきたばかりだから、まだ土地勘がないからな。秋月は心配してるわけだ」

「そうなの？　それなら、あたし達が送ってあげたら良いんじゃない。理音くんが居れば島田さんと会話もできるし」

ひばりは理音から2人の会話を聞いて美波を送って行くと終夜と美波に駆け寄ろうとした時、

「きゃっ！？」

「おい。どこを見て歩いてるんだ？」

廊下を歩いてきた長身の赤髪の少年とひばりはぶつかり、ひばりは床に尻餅を吐き、少年は鋭い目つきでひばりを睨みつける。

「ご、ごめんなさい！？」

「……小学生？」

ひばりはぶつかった少年に頭をさげるとひばりを見た少年は首を傾げると、

「あ、あたし、そんなにちっちゃくないよ!?　高校生だよ!?
みたらわかるでしょ!?」

「いや、まったくわからん」

ひばりは声をあげるが少年は眉間にシワを寄せ、

「小学生はさっさと帰んな!?」

ひばりをバカにして歩き出そうとすると理音が少年をつかみ投げ飛ばす。

「てめぇ、何しやがる!!」

「り、理音くん、何をやってるの。ぶつかったのはあたしなんだから、止めてよ!?」

少年は理音の行動にすぐに立ち上がり理音の胸ぐらをつかむとひばりは自分が少年にぶつかったのが悪いと言い、理音を止めようとするが、

「……まさか、日本語を話すゴリラがいるとは面白い研究材料が見つかった」

理音は少年を失礼にもゴリラと判断したようで邪悪な笑みを浮かべる。

「てめぇ、誰がゴリラだ!!」

「ゴリラの握力はこんなものじゃなかったはずだが、まぁ、文明の

なかで生活して低下したわけだな」

少年は自分をゴリラ扱いする理音を殴りつけようとするが、理音は少年の腕をつかみぶつぶつと失礼な事を考えると、

「まぁ、解剖やいろいろとやってみたい事もあるし、威勢は強いと言う事はすぐには壊れないだろう」

見たものが寒気を感じるくらいな冷たい笑みを浮かべて言う。

「ちょっと待て!?　前田、確かにそいつはゴリラっぽいが人間だ!!　だいたい、そいつより、生活指導の西村の方がゴリラっぽいだろ!?」

「理音くん、ダメ!?　人体実験は犯罪だから!?」

『何?　何なの?』

終夜とひばりは理音の放つ異様な空気に慌てて理音につかみかかり、美波はついていけずに慌てるが、

「何を言ってる?　人類の進化、科学の進歩には犠牲は付き物だ。たかがゴリラ一匹の命で科学の恩恵が受けられるんだ。安いだろ」

すでに理音は自分の知的好奇心を満たすためだけの、『いかれた科学者モード』になっており、邪悪な笑みを浮かべながら懐から怪しげな色をした液体が満ちている注射器を取り出す。

「こいつは何なんだ!?　いかれてるぞ」

「支倉、あれだ。ピコハンだ！！　あれなら、止まる気がする！！」

少年は理音の目が放つ異様な光に後ずさりするがそこには壁しかなく、終夜はひばりにピコピコハンマーを使えと言うと、

「う、うん。理音くん、いい加減にしなさい！！」

ひばりは背中からピコピコハンマーを取り出し、理音の頭を叩くと廊下には『ポコ』と言う音が響く。

第３８問（後書き）

どうも、作者です。

理音、暴走。（爆笑）

ひばりのピコハンで理音は止まるんでしょうか？

そして、少年ぶっちゃけ雄二の運命は？

第３９問

「……まずは細胞サンプルの採取」

「り、理音くん、止まってよ！？」

しかし、ひばりのピコピコハンマーでは理音は止まる事はなく、理音は邪悪な笑みを浮かべたまま少年との距離を縮めて行く。

「支倉、前田を止める方法は何かないのか？」

「ちょっと待ってよ。えっと……これ以外だと……あっ！？」

終夜の言葉にひばりは何かを思いついたようであり、

「何かあるのか？」

「う、うん。えーと……あぁ、あぁ」

終夜はひばりに聞くとひばりは発声練習を始め、

「『お兄ちゃん、人体実験は犯罪です』」

「……ん？　怜生の声」

ひばりは『怜生の声』で理音に言うと理音は止まる。

「良かった。止まってくれたよ」

「た、助かったのか？」

ひばりは理音が止まったのを見て安心したように息を吐くと少年は顔をひきつらせながら言う。

「ひばり、怜生はどうした？」

「いるわけないでしょ。あの声はあたしの『声帯模写』だよ」

理音は怜生を居場所をひばりに聞くとひばりはため息を吐く。

「『声帯模写』？　今のは誰の声なんだ？　聞いた感じだと小さな男の子みたいだったけど」

「今のは理音くんの弟の怜生くんの声だよ」

終夜は止まった理音から手を放し、ひばりに聞くとひばりは苦笑いを浮かべて答えると、

「理音くんが迷惑をかけてすいませんでした。ほら、理音くんも頭を下げて」

ひばりは少年に頭を下げて、理音にも頭を下げるように言うと理音は形だけ、頭をさげるが1度は止まったもののまだ少年を研究材料と見ているようであり、

「お、おう。こっちも良く見てなかったからな。俺こそ、ぶつかって悪かった」

少年はひばりに頭を下げると理音の異常さから逃げるように歩いて

行く。

「……ちっ、せっかくの貴重な研究材料が」

「理音くん！！」

理音は少年に逃げられ、舌打ちをするとひばりは怒っているようで理音をピコピコハンマーで何度も叩いていると、

「リオ、ひばり、何をしてるの？」

明久が教室を出てきて2人に声をかけてくるが、

「「……」」

なぜか、明久は他校の女子の制服を着ており、あまりの光景に理音とひばりは一瞬、固まる。

「……ア、アキくん、それ何？」

「それ？」

「……アキ、お前はいつから女装に目覚めたんだ？」

ひばりは明久の様子に顔をひきつらせて聞くが明久は意味がわからないと首を傾げると理音は無表情なまま明久に言うと、

「……」

明久は1度、自分の姿を確認した後、

「ち、違うんだ！？　これは寝坊して慌ててたから、姉さんの高校の制服を間違えて着ちゃったんだ！？　だから、だから、そんな目でボクを見ないで！？」

自分が女子の制服を着ている事を慌てて弁明する。

「……普通は間違えないよ」

「……まったくだ」

ひばりは明久の言葉に苦笑いを浮かべて言うと理音は頷き、

『……終夜、あいつはそっちの人なの？』

『いや、間違えたらしい』

美波は終夜に明久の事を聞くと終夜は苦笑いを浮かべながら、美波に説明をする。

「……とりあえずはどこかで着替えてこい」

「あ、ありがとう。リオ」

「……理音くん、どうして、懐から制服が出てくるの？」

理音はため息を吐きながら懐から予備の制服を取り出すと明久に手渡し、明久は頷くがどこから出てきたかわからない制服に顔をひきつらせ、ひばりはため息を吐く。

「ん？　気にするな。それより、秋月、島田を1人にするのが心配なら、俺達が家まで送ってやるが、どうする？」

「えーと、いや、部活見学は明日からだし、今日は俺も帰るわ。じゃあな。前田、支倉と……」

理音はひばりのため息を気にする事なく、終夜に美波を送るか聞くと終夜は流石に理音に美波を任せるのが不安なようで今日は美波と帰ると言う。

「『吉井　明久』。俺とひばりの幼なじみだ」

「そうか？　吉井も明日な」

「サヨウなら」

理音が明久を終夜に紹介すると終夜と美波は3人に頭を下げて帰って行く。

「アキ、さっさと着替えてこい。帰るぞ」

「う、うん」

理音は明久に着替えてこいと言うと明久は理音から渡された予備の制服を持って着替える場所を探しに行く。

第３９問（後書き）

どうも、作者です。

明久合流。でも女子の制服。（爆笑）

普通に考えたら、玲はすでに海外なのに玲の昔の制服を引っ張り出した明久はやっぱりおかしいと思います。

まぁ、懐のなかに予備の制服が入ってる理音もおかしいんですが。（苦笑）

第４０問（前書き）

今回は少し短いです。（苦笑）

第４０問

「へぇ、ひばりは姫路さんや葵ちゃんと同じクラスか」

「そうだよ。アキくんは誰か知り合いいた？」

理音、明久、ひばりは3人で下校しているとひばりがDクラスに誰か知り合いがいるか明久に聞くと、

「いないよ。ギリギリに教室に入ったのもあるし、誰とも話もしなかったしね」

「……それはお前があんな格好でくるから誰も近寄りたくなかっただけだろ」

「……そうだね」

明久は苦笑いを浮かべてまだクラスには馴染めなかったと言うと理音は明久が玲の制服を着ていたのが原因だと言い、ひばりは理音の意見に賛成だと頷く。

「……確かにそうかも知れない」

「当たり前だ。俺だって、明久と知らなければ話しかけない」

「……と言うか知り合いだと思われたくないかな」

明久は理音の言葉に頷くと理音とひばりは追い討ちをかけると、

「そ、それより、姫路さんて葵ちゃんは先に帰っちゃったの。せっかく、理音も帰ってきたんだし、みんなで遊びに行きたかったね」

明久は話を替えようと瑞希と葵の2人と一緒に帰りたかったと言う。

「仕方ないよ。2人ともご両親が入学式を見にきてたんだし、この後は家族でお祝いするんだって」

「普通はそうだよね。ボクらくらいじゃないの。入学式の日に幼なじみ3人でうろついてるのは」

ひばりが瑞希と葵がいない理由を言うと明久は苦笑いを浮かべる。

「ん？　アキはおじさんとおばさんに出席して貰いたかったのか？」

「ボクは別に良いけど、ひばりのとこもリオのところも来てなかったけど良いの？」

理音は明久の言葉に聞き返すと明久は自分は気にしないけど理音とひばりはどう思っているか聞く。

「うちは怜生の入園式に出たからな。何日も休みは取れないしな。俺が帰ってくるのはいきなりだったし、怜生を優先して貰った」

「うちはお父さんは楽しみにしてたけど、流石にお仕事を休めなかったよ」

理音は気にする様子はまったくないがひばりは少しだけ残念そうに苦笑いを浮かべると、

「まぁ、入学式の様子は記録してあるからおじさんには後で渡してやれ」

理音は表情を変える事なくおかしな事を言う。

「……理音くん、記録してあるってどういう事？」

「ん？　気にするな。盗撮とか犯罪系には使わない。ただ、少し気になる人間がいるから、監視ようだ」

ひばりは理音のおかしな発言にまた理音がおかしな事をしていると思い、ジト目で聞くが理音は表情を変える事なく言い切り、

「……監視って今度は何をする気？」

ひばりは大きなため息を吐くが、

「前にも言っただろ。うちのシステムは敵もそれなりに多いからな。邪魔な目は相手の能力しだいで早めにつぶさないといけないだろ。まぁ、教頭みたいに裏で他校とつながってる人間の首をきる証拠もつかまないといけないしな」

「……ねぇ。リオ、今の話ってボクやひばりが聞いて良いの？」

理音は気にするなと言うと明久は苦笑いを浮かべて理音に確認する。

「ん？　大丈夫だろ。小物だし」

「……大丈夫なわけないよ」

理音は表情を変える事なく言い切るがひばりは顔をひきつらせて言う。

第４０問（後書き）

どうも、作者です。

理音、やりたい放題。
すでに教頭は小物扱いです。（爆笑）

理音の監視対象は誰何でしょうか？

第４１問

「ん？　清瀬？」

「前田か？　怜生くん、迎えがきたよ」

理音は怜生を迎えに行くと大樹がおり、理音は首を傾げるが大樹は気にする事なく怜生を呼ぶと、

「お兄ちゃん」

「なぜ、清瀬がここにいるんだ？」

怜生は嬉しそうに理音の足元に駆け寄ってきて、理音は怜生を抱きかかえると大樹がここにいる理由を聞く。

「ん？　支倉から聞いてないか。ここはうちの両親がやってるんだ。小規模だから人手は足りないし、昔から時間がある時は掃除とか雑用を手伝ってるんだ」

「そうなのか。これから怜生が世話になる。よろしく頼む」

「まぁ、怜生くんとは以前から知り合いだし、改めて言われると照れると言うか、お前に頭を下げられるのはおかしな感じだな」

大樹は理音の質問に答えると理音は大樹に怜生の事をお願いし、大樹は理音の様子が意外だったようで苦笑いを浮かべると、

「何かおかしいか？」

「いや、今日の様子を見てると違和感がな」

理音は大樹が笑っている意味がわからずに首を傾げ、大樹は学園での理音と今の理音に違和感があると言う。

「ん？　そうか」

「あぁ。学園じゃ、やりたい放題って感じだったからな。流石に怜生くんの前じゃ、あまりふざけられないか？」

理音は首を傾げると大樹は怜生の前だからかと聞くと、

「いや、別にそんな事を考えた事はないな。今は興味が湧くものも、作らないといけないものもないしな」

理音は何も考えた事はないと言う。

「まぁ、確かにいつも全開なわけはないか」

「大樹、瑠衣を呼んでくれ……前田？」

大樹は理音にも普通の時があるんだなと思い苦笑いを浮かべた時、終夜が現れ、理音を見て首を傾げる。

「ん？　秋月か？」

「前田、終夜にも弟がいるんだ。瑠衣くん、終夜が迎えにきたよ」

理音が首を傾げるのを見て、大樹は終夜が弟の『瑠衣』を迎えにき

たと言うと瑠衣を呼びに行く。

「そういえば、前田には弟がいると言ってたな」

「あぁ。怜生、挨拶をしろ」

「前田怜生です。お兄ちゃんがお世話になっています」

終夜はひばりが理音に弟がいると言う話をしていた事を思い出すと理音は怜生に挨拶するように言うと怜生は終夜に頭をさげると、

「秋月終夜だ。よろしくね。怜生くん」

終夜は怜生の頭を撫でる。

「しかし……」

「なんだ?」

「いや、兄貴と違って素直そうな子だな」

終夜は理音と怜生の顔を見て言うとおかしなものが飛んでくると思ったようで1歩後ろに下がるが、理音は何もせず、

「どうかしたか?」

「……いや、何でもない」

終夜に聞き返すと終夜は少しだけ気まずそうに視線を逸らす。

「清瀬と言い、秋月と言い、俺を何だと思っているんだ？」

「あはは……悪い」

終夜が目を逸らすのを見て理音が終夜に聞くと終夜は苦笑いを浮かべて謝る。

「冗談だ。気にするな」

「前田、終夜をあまりからかうなよ」

「人聞きの悪い事を言うな」

大樹は瑠衣の手を引いてきて理音に言うと理音はため息を吐くと、

「お兄ちゃん」

瑠衣は怜生が理音に抱きかかえられているのを見てうらやましいのか自分もと言いたげに終夜に近寄る。

「はいはい。わかったよ。その前に、瑠衣、挨拶をしろ」

「秋月瑠衣です。怜生くんのお兄さん、こんにちは」

「あぁ。よろしく、瑠衣くん」

終夜は苦笑いを浮かべると瑠衣は頭をさげると理音は瑠衣に挨拶をする。

「それじゃあ、清瀬、秋月、俺と怜生は帰るぞ」

「ん？　そうだな。俺達もそろそろ行くか。瑠衣」

「あぁ、２人ともまた明日な」

理音が帰ると言うと終夜も帰ると言い、大樹は４人を見送る。

「怜生、夕飯はどうする？」

「お兄ちゃんのご飯なら何でも良いです」

「そうか」

４人で歩いている途中で理音が怜生に夕飯の事を聞くと、

「ん？　前田、お前が作るのか？」

終夜は意外そうな表情をして聞く。

「あぁ。割と得意だな。秋月はどうなんだ？」

「俺か？　俺も割と得意だぞ」

「お兄ちゃんのご飯は美味しいよ」

理音は頷き、終夜に聞くと瑠衣は終夜の料理を誉める。

「そうか。それはいつか食ってみたいな」

「まぁ、機会があればな」

理音は瑠衣の言葉にイタズラな笑みを浮かべると終夜は苦笑いを浮かべる。

第４２問

「……うまい」

「確かにうまいんだが……」

「お前ら、それ楽しいのか？」

入学式から数日が経ち、文月学園になれてきた日の昼休み、理音、終夜、大樹がそれぞれの弁当を持ち寄りなぜか味比べになっているのを見た大貴があまりの似合わなさに苦笑いを浮かべて声をかけてくる。

「ん？　大貴か、楽しいも何も食事は活動するのに必要なエネルギーを補給する作業だ。楽しい、楽しくないは二の次だ」

「いや、その答えはどうなんだよ」

大貴の質問に理音は表情を変える事なく言うと終夜は苦笑いを浮かべる。

「しかし、男だけで弁当の批評会ってのはやってて、虚しくないか？　……ん？　理音、この肉じゃが、うまいな」

「別に批評会をやるつもりはないけどな。さっきから、女子達がこっちを見てダメージを受けてる気はするな」

大貴はため息を吐きながらも自分の弁当を持ち、３人の座っているなかに混じると理音の弁当に手を伸ばして言うと大樹はこちらを見

てダメージを受けている女子生徒達を見て苦笑いを浮かべると、

「別にほっとけば良いだろ。料理が女の仕事だと言う時代でも無いんだ。できるヤツがやれば良いんだ」

「確かにそうなんだけどなぁ。やっぱり、女の子には女の子の意地ってのがあると思うぞ」

理音は表情を変える事なく言い切り、終夜は苦笑いを浮かべる。

「意地？　あるのか？　木下姉」

「理音、待て。秀吉から聞いたんだが、優子に飯を作ると言う概念がな……待て、優子、俺の腕はそっちには曲がらない！？」

理音は近くにいた優子に話を振ると大貴は余計な事を言い優子からお仕置きをされる。

「しかし、前田がこんなに料理できるのは意外だな。イメージ的には……錬金術？」

「……確かに、料理ってよりはメスシリンダーや天秤で計量してそうだ」

終夜は大貴がお仕置きを受けているのはすでになれているようで理音には料理は似合わないと言うと大樹は頷く。

「メスシリンダーや天秤は料理の計量にはむかなかった」

「……経験済みかよ」

理音は大樹の言葉に表情を変える事なく言うと終夜はため息を吐く。

「流石に冗談だが、何だかんだ言って3年1人暮らしをしてたわけだしな。それに帰ってきた時にはひばりがまともな飯を食ってないだろうと言って、簡単に作れる料理のレシピもくれたしな」

「やっぱり、1人暮らしだと料理は上手くなるのか？」

理音は弁当を口に運びながら言うと家族と暮らしている大樹は理音に聞く。

「けっきょくは人次第だろ。なあ、木下姉」

「……前田、あたしにケンカ売りたいわけ？」

理音は人次第だと言うと優子に同意をもとめるが、優子は大貴からの返り血を拭きながら、笑顔で理音に殺意を向けるが、

「ケンカ？　わけのわからない事を言うな。俺は料理とかはめんどくさいし、コンビニとかの弁当で簡単に済ませれば良いかと言うだろう。お前に料理をする気になるかと聞いているんだ」

理音は表情を変える事なく、優子は料理を覚える気にはならないだろうと言う。

「……前田、ちょっと良いかしら？」

「断る。飯時くらい静かにしろ。大貴、あんまり遊んでいると昼休みが終わるぞ」

「ん？　そうだな」

優子は理音の肩をつかんで言うが理音は気にする事なく、大貴に起きろと言うと大貴は優子に攻撃を受けたダメージなど無いのか平然と席に戻り、

「ふはは。真打ち登場だ。お前らの弁当が霞むものを見せてやる」

得意気に自分の弁当箱を開くが、

「よってるな」

「しまった！？」

「オチに出てくるなんて芸人の鏡だな」

大貴の弁当は片方によっており、オチ扱いにされるが、

「……」

弁当男子４人の姿は優子を含めたＢクラス女子生徒のプライドを粉々に破壊した事は言うまでもない。

第４２問（後書き）

どうも、作者です。

今更ですが内容がありません。（爆笑）

さり気に借りてるオリキャラは料理できるのが多いですね。（苦笑）

わりと何でもできる男性陣は優子のプライドを引き裂きます。（爆笑）

第43問

「秋月」

「どうかしたか？」

放課後になり、部活に行く準備をしていた終夜を理音が呼ぶ。

「忘れてたんだが、この間、頼まれていた翻訳機に必要な部品が昨日、届いたんだ。物は2、3日中にできるだが微調整とかしたいんでな。週末に島田と一緒に俺のラボまで来てくれるか？」

「へぇ。前に言ってたドイツ語の翻訳機とか言うの本当にできたんだ。あんたって本当にすごかったのね」

理音は終夜に美波用の翻訳機が出来そうだと言うと優子は今でも理音が天才だと信じていなかったようで驚いたような表情をする。

「人の話をちゃんと聞け、部品が届いたんだ。日本じゃ、手に入りにくい部品もあって前の研究所のヤツらに送って貰ったんだが」

「……なぁ、前田、大樹の幼なじみに頼んでないよな？」

理音は何度も言わせるなと優子に言うと終夜は理音の言葉に何かイヤなものを感じるが、

「心配するな。海谷だけじゃなく、くせ者は他にもそろっている」

「……それは心配して当然だと思うんだが」

理音は表情を変える事大丈夫だと言い、その一言は終夜の不安を煽る。

「大丈夫だ。爆発はしない。使用者に危害は加えない。部品に何かしらのギミックはついているが危険なものは昨日、外してある」

「……余計な機能は全部外してくれ」

理音は危険なものは外したと言うが終夜はため息を吐いて言う。

「余計な機能？　……ちなみにビームは必要か？」

「必要ない」

「そうか。残念だ」

理音は残念そうに言った時、

「理音、いつまで話してるんだ。今日は特売の日だぞ」

大貴が理音に声をかける。

「あぁ、直ぐに行く。清瀬」

「買い物が終わるまで怜生くんの相手はしてるから頑張ってこいよ」

「頼む」

理音は帰り支度をしている大樹に怜生を頼むと大貴と2人で戦場に

向け歩き出す。

「あの2人って、何か妙になか良いよな？」

「支倉さん曰わく、卵1パックがあの2人の友情を結んだらしいわよ」

終夜は理音と大貴の様子に苦笑いを浮かべると優子はため息を吐き、

「なんか、ずいぶんと安そうな友情だな」

大樹は苦笑いを浮かべて言う。

「なぁ、今日は何が安かったんだ？」

「さあな。言ってみないとわからない。まぁ、個人的には最近は野菜が不足しているからな。何か野菜を使ってだな」

「野菜？　怜生くんは野菜で嫌いなものはないのか？　最近の子供って多いだろ」

理音と大貴の会話はは夕飯のメニューなど、本来の男子高校生の会話ではないが、

「今のところはないな。ひばりが昔から気を使ってくれていたから、特に嫌いなものは無さそうだが、先日、怜生の友人の母親とも話をさせて貰ったが近ごろの子供は本当に偏食が多いらしいな」

「まったくだ。食事は基本なのにな」

2人の会話は完全に主夫である。

「……理音くん、烏丸くん、もう少し、学生らしい会話はないの？」

「そうですね」

そんな2人の会話を聞いてひばりはため息を吐きながら2人に声をかけると瑞希はひばりの隣で苦笑いを浮かべている。

「……理音、どう言う事だ？　支倉の……」

「そろそろ、そのボケは廃れるぞ」

「支倉、姫路、2人も帰るのか？」

大貴はひばりとあった時の定番のボケをしようとするが理音が古いと言うとそのボケをなかった事にして笑顔でひばりと瑞希に声をかけるが、

「あたし、そんなにちっちゃくないよ！？」

ひばり専用ピコピコハンマーに叩かれて大げさに吹っ飛ぶ。

「あ、あの。烏丸くんは大丈夫なんですか？」

「大丈夫だろ。芸人だしな。それより、ひばり、男子高校生らしい会話と言うなら、外して良いか？」

瑞希は豪快に吹っ飛んだ大貴を見て顔をひきつらせるが理音は気にする事なく、ひばりに聞き、

「良いわけないでしょ！？　どうして、理音くんはいつもエッチな事を言うの！？」

「まぁ、待て。せっかくの兵器（巨乳）なのに隠す意味がわからん。と言うか、形が崩れるだろ。無理に押さえつけるな」

ひばりは顔を真っ赤にしてピコピコハンマーで理音を何度も叩くが理音の主張は変わらない。

第４４問

「……なぁ、理音。支倉に謝った方が良いんじゃないか？」

「そうですよ」

ひばりと瑞希が加わり商店街に向かっているが、ひばりは理音の発言に怒っているようで頬を膨らませており、大貴と瑞希は理音に謝れと言うが、

「なぜだ？　俺はおかしな事は言っていない。無理に押さえつけるのは形も悪くなるし、下手すれば体に悪影響を起こしかねない。俺はひばりの体を心配しているんだぞ」

理音は自分は間違っていないと言い切る。

「……そんな事を言って、あたしの胸しか見てないくせに」

「ひばりちゃん、少し落ち着いてください」

ひばりは理音の言葉が信用できないと言いたげに日頃からの理音の言葉に理音は自分の胸しか見ていないと言うと瑞希はひばりを落ち着かせようとひばりに声をかける。

「ん？　胸しか見てない？　ひばり、お前は何か勘違いしているぞ。俺は確かに巨乳は好きだがこの間、アキ、大貴、Ｄクラスの康太と１５時間の討論でサイズに関係なく好きだと言う結論に達した」

「残念ながら、他に用があって、途中で中断になったがな」

「何を討論しているの！？」

理音は理音なりの言葉でひばりが巨乳だから好きだと言う事ではないと言うが、その言葉では伝わるはずはなく、ひばりは声をあげると、

「だから、俺がひばりを好きなのは胸のサイズじゃない」

「ど、どうして、こんなところでそんな事を言うの！？」

理音は表情を変える事なく、『ひばりが好き』だと言い、ひばりはゆでだこのように顔を真っ赤にする。

「理音、お前は表情を変える事なく、良く言えるよな。恥ずかしくないのか？」

「ん？　恥ずかしいも何も事実だからな。事実を事実と認めなければ人は成長しない。自分の中にある良い部分も暗くドロドロした他人に見せたくない部分も認めなければ何も変わらない」

大貴は苦笑いを浮かべて言うと理音は表情を変える事なく言い切ると、

「……」

理音の言葉に一瞬、大貴の表情が凍りつくが直ぐに大貴の表情は元に戻る。

「ひばりちゃん、ひばりちゃん、大丈夫ですか？　前田くん、ひば

りちゃんが動かないですよ!?」

「ん？　また処理落ちしたか。大貴、悪いな。どうやら、特売には行けなくなった」

瑞希は自分の呼びかけに反応しないひばりを見て声をあげると理音はため息を吐き、大貴に謝るとひばりを抱きかかえる。

「あぁ。仕方ないな」

「ま、前田くん!?」

大貴はその姿に苦笑いを浮かべ、瑞希は理音の突然の行動に顔を赤くする。

「瑞希、悪いがひばりのカバンを頼めるか？」

「は、はい。それは良いですけど、ひばりちゃんをどうするんですか？」

「ここに置いて行くわけにも行かないだろ。一先ず、怜生を迎えに行って、うちにでも置いておく」

理音はひばりを連れて帰ると言うと、

「大貴、また明日な」

「あぁ。またな。理音に姫路、支倉にもよろしく言っといてくれ」

「あぁ」

大貴に別れを告げて怜生を迎えに歩き出し、

「烏丸くん、さようなら。前田くん、待ってください」

瑞希は大貴に頭を下げると理音の後を追いかけて行く。

「……『自分の中にある良い部分も暗くドロドロした他人に見せたくない部分も認めなければ何も変わらない』か。口では簡単に言えても実行できる事じゃないよな。理音はそれを認めたのか？　俺は……」

大貴は理音達の背中を見送った後、理音の言葉に何か思う事があるのか唇を噛み締めると、

「ヒロ？　前田は？」

優子が大貴が1人で立っているのを見て声をかける。

「ん？　理音は支倉を連れて帰った」

「支倉さんを？　また、あいつ、支倉さんをからかったの？　まったく子供ね」

大貴は優子の声に表情を元に戻して言うと優子は理音がひばりをからかう姿を目に浮かべたようでため息を吐くと、

「優子、悪い。ちょっと付き合ってくれ」

「な、何よ？　いきなり？」

「カラオケ、何か発散したい気分なんだ」

大貴は理音の言葉を振り払いたいようで歌で発散しようと優子をカラオケに誘い、

「カラオケ？　無理、あたしは行かないわ！？」

「良いだろ。つき合えよ」

優子は顔を真っ青にして断ろうとするが大貴は気にする事なく、優子の手を引っ張って行く。

第４４問（後書き）

どうも、作者です。

ひばり、処理落ち。（爆笑）

理音とひばりの距離は大丈夫ですかね？ひばりはちゃんと理音を意識しているように見えてるんでしょうか？

そして、大貴は理音の言葉にちょっとシリアスモード。気晴らしにカラオケに行ったはずなのに地獄を見るでしょう。（爆笑）

第45問

理音は怜生を迎えに行った後、瑞希と明久や葵も呼んでみんなで夕飯にしようと言う話になり、前田家のキッチンで2人でカレーを作っていると瑞希はどこからか濃硫酸を取り出す。

「……瑞希、お前は濃硫酸で何をするつもりだ？」

「何って、じゃがいもの甘味を増そうと」

理音はどこから取り出したかは気にする事なく、何に使うか聞くと瑞希は理音の質問の意味がわからずに首を傾げる。

「なるほど、デンプンを加水分解させるわけか？」

「はい。そうです」

理音は瑞希の言葉に彼女が何をするつもりか理解したようで頷くと瑞希は笑顔で鍋の中に濃硫酸を入れようとするが、

「ふぇっ！？」

「……そんなもの食えるか」

理音は瑞希から濃硫酸の薬瓶を取り上げると彼女の頭をピコピコハンマーで叩く。

「前田くん、何をするんですか？　せっかく、吉井くんに私の手料理を食べて貰えるチャンスなんです。返してください」

「……瑞希、良い事を教えてやる。料理には薬品は使わない」

瑞希はなぜ、理音が自分から濃硫酸を取り上げたかわからないようで理音に濃硫酸を返して欲しいと言うと理音はため息を吐く。

「でも、甘味が増えるんですよ」

「……安全性を考えてくれ。お前は濃硫酸を飲んで良い薬品だと思うのか？」

「何を言ってるんですか？　飲みませんよ。料理に使うんですから」

「……同じ意味だ。一先ず、これは没収だ」

瑞希は納得がいかなさそうな表情をするが、理音は絶対に使わせないと言うと濃硫酸を懐にしまうと、

「他にも薬品を使う気じゃないだろうな？」

瑞希に他に薬品を持っていないか確認する。

「持ってないですよ」

「そうか。出せ」

瑞希は他に薬品は持っていないと言うが目は泳いでおり、理音は瑞希に向かい手を出す。

「ど、どうして、前田くんは私の邪魔をするんですか！？」

「当たり前だ。俺は薬学を専門にしてて医師資格だって持ってるんだ。人が死ぬかも知れないものを目の前で作られてたまるか」

瑞希は納得が行かないと言うが、理音は表情を変える事なく言う。

「人が死ぬなんて、言いがかりは止めてください。きっと、美味しい料理ができるはずです！！」

「『はずです』でやるな。少なくとも濃硫酸を平気な面して料理に使うヤツには美味いものは作れない。良いか。今、お前がやろうとしている事はこの食材を作った人間への冒涜で毒薬作りだ」

瑞希は理音の言う事を聞く気はないと言うと理音は瑞希の首をつかむと居間まで引きずって行き、

「そのくだらない考えを改めるまではキッチンに入るな。アキやひばり、本宮にもお前が作った料理はわけを話して絶対に口に入れるなと伝えさせて貰う」

「ひどいです。あんまりです。私は吉井くんに美味しいカレーを作ってあげたいんです。そのためにはどうしても必要な事なんです」

キッチンのドアを閉めると瑞希は納得いかないとドアを開けようとするが、理音かわ何か仕掛けたのかドアが開く事はなく、瑞希はドアを叩く。

「えーと、瑞希ちゃん、何があったの？」

「ひばりちゃん、聞いてください。前田くんがひどいんです！！」

ひばりは目を覚ましたようで怜生の手を引いてキッチンのドアを叩いている瑞希に声をかけると瑞希はひばりに理音が横暴だと言うが、

「……ごめん。全面的に理音くんの意見に賛成かな」

「どうしてですか！？」

ひばりは料理に薬品を使おうとする瑞希に顔をひきつらせて言うと瑞希は納得がいかないと声をあげる。

「瑞希お姉ちゃん、濃硫酸は危険なお薬ってお兄ちゃんが言ってました。使ったらダメです」

「ですけど」

「ダメです」

「……わかりました」

怜生はひばりと瑞希の様子に理音から聞いたのか瑞希に使ってはいけないと言うと瑞希は怜生に言われてしぶしぶ納得すると、

「ねぇ。怜生くん、何で濃硫酸が危険だって知ってるの？」

「お兄ちゃんがラボに来た時に絶対に触っちゃいけないって」

ひばりは怜生がなぜ濃硫酸の名前を知っているか聞くと怜生は理音の研究所にあると言う。

「ん？　ひばり、もう良いのか？」

「理音くん！？　怜生くんを危ない部屋に入れないで！？」

理音は居間から聞こえる声にドアを開けるとひばりにピコピコハンマーで叩かれる。

第４５問（後書き）

どうも、作者です。

瑞希は理音の手によりキッチンから排除されました。そして怜生は賢い子に育ってますね。（苦笑）

第４６問

「そんな事があったんだ」

「……アキくん、笑い事じゃないよ」

明久は理音の家にくると瑞希の料理の話を聞き苦笑いを浮かべるがひばりは肩を落として言う。

「で、でも、姫路さんの料理の手際は良かったんだよね。それなら直ぐに」

「人が殺せるな。見た目が良い分、出されたら警戒する事なく食うだろうからな」

明久は何とか瑞希をフォローしようとするが理音は表情を変える事なく、淡々とした口調で言うと、

「……ヒドいです。前田くんもひばりちゃんも」

「瑞希お姉ちゃん、泣かないでください」

瑞希は部屋の隅でさめざめと泣き、怜生になぐさめられている。

「それに理音くんもだよ。怜生くんを危険な部屋に入れないでよ」

「あのなぁ。危険な物を危険だから、関わらせないのは教育じゃない。今の教育がしっかりと扱い方を教えないから、瑞希のように濃硫酸をあんな風に使いたがるのが出てくるんだ」

「それとこれとは話が別だよ」

ひばりは理音の研究所での怜生の行動に問題があると言うが理音は改めるつもりはないと言い切ると、ひばりは納得がいかないようで理音につっかかる。

「ねぇ。リオ、ひばり」

「なんだ?」

「アキくん、どうかした?」

2人の様子に明久は苦笑いを浮かべて、理音とひばりを呼ぶと、

「なんか、2人が怜生くんの教育の話をしてるのを見てると『夫婦』みたいだなぁ。と思って」

「ア、アキくん、突然、何を言い出すの!?」

明久は思った事を口に出し、ひばりは明久の言葉に顔を真っ赤にする。

「……ひばり、落ち着け。アキもおかしな事を言うな。俺はまだ、ひばりの処……」

「だから、おかしな事を言わないで!?」

理音はまだ子供ができる事をひばりにはしてないと言おうとするとひばりから、理音にピコピコハンマーが放たれると、

「えーと、ピコハン？」

「あぁ、小烏丸を大貴に返したからな」

明久はいきなりの状況に呆気にとられた表情で理音に聞き、理音はひばりに叩かれている事など気にせずに明久にひばりがピコピコハンマーを持つ事になった経緯を簡単に話す。

「なるほどね。似合ってると言えば似合ってるけど……」

「だろう？　ひばりの身長では大貴用の小烏丸では振り下ろす時に重心がブレる時があったがこれはひばりの身長、体重、重心、腕力、その他にもいろいろなデータを集めて作り上げたんだ」

明久は体が小さいひばりにピコピコハンマーが妙にしっくりきていると苦笑いを浮かべると理音はひばりを研究した結果だと言い、ノートパソコンからひばりのピコピコハンマーを製作するに至ったレポートを開くとそこにはひばりにピコピコハンマーを装備させるために使ったと思われる膨大なデータがあり、

「理音くんは何をしてるの！？」

ひばりは理音の努力の結晶であるピコピコハンマーを理音に振り下ろす。

「リ、リオ、これはちょっとやりすぎじゃない？」

「何を言ってる。何かを作るためには必要な工程だ」

「でも、これじゃ、ストーカーと変わらないよ」

明久は理音の行動にため息を吐くが、

「心配するな。あくまでそれは計算値だ。以前から、俺の中にあるひばりの仕草やツッコミの際の腕のふりの軌道を春休み中のひばりの行動と重ね合わせて計算値を導き出しただけだ。正確なデータではないため、『ポコ』の音が半音高いんだ。まぁ、それはこれから微調整するから問題ないがな」

「……まぁ、頑張って」

「アキくんも応援しないで!?」

理音は未だにひばりのピコピコハンマーの完成にまだ納得していないと言うと、明久は理音のこだわりがわからないようで苦笑いを浮かべるが、ひばりは理音の言葉に声をあげる。

「半音高いのは胸を押さえつけてるせいで重心がズレてるせいもあるとは思うんだが、外そうとするとピコハンが飛んでくるしな」

「当たり前だよ!?　それにあたしのブ、ブラを理音くんが外して良いわけないでしょ!?」

理音は自分は完璧な物を作りたいと言うがひばりが納得するわけもなく、

「だから、完成にはほど遠いんだ。もう少しでこの……」

理音は何かを考えて眉間にシワを寄せる。

「リオ、どうかしたの？」

「いや、ひばりのピコハンに名前を付けてないと思ってな」

「……」

明久は理音に何かあったかと聞くと理音が考えているのはどうでも良い事であり、ひばりと明久はため息を吐く。

第４６問（後書き）

どうも、作者です。

理音のピコピコハンマー製作にかける情熱は吹っ飛んでます。（爆笑）

理音に取ってひばりのブラを外したい理由は個人的な趣味、ひばりの健康、そして『ピコハン』。（爆笑）

こんな主人公で良いのか？と思いますが気にしない方向で。

名前は次の更新でかな？（苦笑）

第47問

「……リオ、それって重要なの？」

「当たり前だ。武器に名前を付けると言う事はひばりとピコハンとの一体感がでるだろ。大貴の小烏丸が良い例だ」

明久は真剣な表情をする理音に聞くが理音は大貴と小烏丸を例に出して言うと、

「……その割には烏丸くん、小烏丸を忘れてくよ」

「……確かに」

ひばりは大きなため息を吐き、明久は苦笑いを浮かべて頷く。

「……でも、名前を付けるのは有りなのかな。理音がせっかく、ひばりのために作ったんだし、ただのピコハンだと寂しいしね」

「うーん。そうなのかな？」

明久は少し考えて、せっかくだから名前をつけようと言うがひばりは首を傾げる。

「なら、どうする？」

「そうだね……ヒロは名字と重ねて小烏丸だから、ひばりのピコハンだから、『ひばハン』は？」

「なんか安易だな」

「うん。響きは好きだけど、ちょっと可愛くないかな」

明久の言葉に理音は首を傾げると何だかんだ言って、ひばりも真剣に評価をしようとしたようで首を傾げる。

「なら……『ひばりの小槌』？」

「……振ると呪いで小さくなるのか？」

「ならないよ！？」

瑞希が落ち込んでいる隣でしばらく3人はひばりのピコピコハンマーの名前を考えていると、

「なら、『トールハンマー』は？　かっこいいでしょ？」

「……トールハンマーか？　ミョルニルの英名だな。確か『打ち砕くもの』だったな」

「とーるはんまー？」

明久は北欧神話最強の鎚の名前を出すがひばりは意味を知らないようで首を傾げている。

「……ひばりなら、『トールハンマー』より『とーるはんまー』って感じだね」

「確かになひらがな表記の方がらしいな。そっちの方が柔らかい感

じでひばりに合ってる」

「だよね」

首を傾げているひばりの様子に明久が苦笑いを浮かべると理音はくすりと笑う。

「理音くん、アキくん、何で笑ってるの!?　あたし、おかしな事を言ったの!?」

「いや、そうじゃなくてね」

「似合ってると思ってな」

ひばりは理音と明久が自分を見て笑っているため、2人に聞くが2人は気にするなと言う。

「そう言われると気になるよ」

「バカにしてないから、気にするな。……ん?　そろそろ、時間だな」

ひばりは納得がいかないと言うが理音は優しげな笑みを浮かべると時間を確認して立ち上がる。

「リオ、なんか手伝う?」

「いや、カレーを温めるだけだからな。別に良いが……いや、1つ頼みたい事があった」

明久は自分がきた時には準備が終わってたせいか、キッチンに向かう理音を呼び止めると理音は明久に頼みたい事があると言う。

「何？」

「あそこでいつまでも落ち込んでいる瑞希をどうにかしろ」

理音は明久に瑞希を任せると言い、キッチンに入って行き、

「……私だって、美味しい料理を作れるんです。私のＭＰ（瑞希ポイント）は間違ってないんです。そうだよね。怜生くん？」

「……瑞希ちゃん、まだ落ち込んでたんだ」

「あはは」

ひばりと明久は部屋の隅で怜生を抱きしめながら落ち込んでいる瑞希を見て引きつった笑みを浮かべる。

「えーと、アキくん、頑張ってね。あたしは理音くんを手伝ってくるから」

「ボク？　こういうのは女の子同士の方が」

「任せたよ。アキくん」

ひばりは明久に瑞希を押し付けてキッチンに移動する。

第４７問（後書き）

どうも、作者です。

ひばりのピコハンは『とーるはんまー』に決定させていただきました。

やはり、ひばりの生みの親のＧＡＵさんの意見は重要かな？と言うのとひらがなはひばりっぽいと言う理由かな？

他に意見をくれたヒョウガさん、クロさん、ネタ扱いにして申し訳ありませんでした。

そして、話し込んでて瑞希は放置。（爆笑）

怜生は瑞希の胸のなかに埋もれてます。

第４８問（前書き）

今回はもしかしたら、ＧＡＵさんに怒られるかも知れない。（苦笑）

第４８問

「理音くん、あたしも手伝うよ」

「ん？　手伝うと言っても、アキにも言ったがあまりやる事はないんだが、それに今日はひばり専用の踏み台は持ってない」

ひばりは理音の後を追いかけてキッチンに入るが理音は何もやる事はないと言うと、

「あたし、そんなにちっちゃくないよ！？」

「まぁ、うちのキッチンはかあさん用に直したから、少し高いくらいか？」

ひばりは理音がまた自分の身長をバカにするため、声をあげるが理音はひばりのお怒りを気にする事なく、ひばりとシンクを見て大丈夫そうだなと頷いている。

「理音くん、あたしの言ってる事を聞いてるの！？」

「あぁ。聞いてるが、さっきも言った通り、別にやる事もないんだ。使ったものも片付けたしな。付け合わせのサラダやスープも完成している。瑞希も味付けさえさせなければ玲さんと違って、手際は悪くなかったからな」

ひばりは理音の態度に声をあげるが理音が気にする事はない。

「……玲さんは瑞希ちゃん以上なの？」

「まずはキッチンに入る以前の問題だ。食材を買いに行ったはずなのに金ノコやカンナを買ってくるからな」

「……それは何があったのかな？」

「わからん」

ひばりは明久の姉である『玲』の行動に顔をひきつらせなが理音に聞くが理音が表情を変える事はなく、

「さっきも言ったが、ここはやる事もないし、居間にいたらどうだ？」

ひばりに居間に戻っていろと言う。

「いや、あっちにいるのは、あたしは邪魔かな？　と思って」

「そうか？」

「うん。やっぱり、瑞希ちゃんはアキくんがなぐさめるのが良いと思うよ」

ひばりは瑞希に気を利かせているようで苦笑いを浮かべると、

「お前の気づかいでアキがあの毒を食うはめにならなければ良いけどな」

「あはは……ねぇ。理音くん」

理音はため息を吐くとひばりは苦笑いを浮かべているが、少し声のトーンを落として理音を呼ぶ。

「ん？　どうかしたか？」

「えーとね。どうして、あたしなの？」

理音がひばりの声に振り返るとひばりはなぜ、理音が自分の事を好なのかを確かめたいようで不安げな表情で聞く。

「ダメか？」

「そうじゃないよ。だって、あたしは理音くんの幼なじみであって、1番、近くにいただけで、それに……あたし、こんなんだし」

理音はひばりの質問に一言だけ聞くとひばりはやはり自分の体型が気になるようで声を小さくして聞く。

「……いつも言ってるが、俺はロリコンじゃない。俺をあんなクズと一緒にするな」

「で、でも……不安だよ」

理音はひばりの言葉に何度も言わせるなと言いたげにため息を吐くがひばりは過去にあった事がトラウマになっているようで笑顔を見せてはいるがその表情は暗い。

「アキから聞いただろ。俺がひばりを好きなのは昔からだ……まぁ、白状をすれば自覚をしたのは1、2年前だがな」

「最近？　でも、小学校の時からって？」

「あぁ。そうだな。そこから説明するか？」

首を傾げるひばりを見て、理音はくすりと笑うと充分に湯気が上がっている鍋の火を止める。

「当時、俺がひばりを好きだと言って断っていたのはそれが断り安かったからだ。最初は対して話した事のないヤツに告白されてな。実際はどうして良いかわからない状態でいたら、相手が勝手に勘違いした。それでひばりの耳に入ったら説明すれば良いくらいで口実に使ってたんだ」

「……理音くん」

「怒るな。まだ続きがある」

理音の昔話を聞き、ひばりは額に青筋を浮かべると理音は苦笑いを浮かべ、

「まぁ、告白の方も俺が壊れてからは無くなった。知ってるだろ。『あの後』に俺にまともに話しかけるのは教師を含めて、アキ、ひばり、瑞希、本宮くらいだ」

「う、うん」

表情を変える事なく、『自分が壊れた日の事』を話すとひばりは小さく頷く。

「俺はあの日に壊れた。違うな。事実から目を逸らすために『壊れ

ようとした。』それを引き止めたのはお前とアキだ。もしかしたら、お前達に助けて貰った時の感情を恋愛とすげ替えただけかも知れない。これは依存なのかも知れない。だけどな……今の感情(おもい)が偽りだと言われようと俺はこの感情(おもい)を大切にしたい。軽い気持ちでお前を傷つけたクズを許せないし、ひばりのキズが癒えるまで時間が欲しいなら、何年、何十年だって待つ。それくらい、お前は俺に取って最愛の女性だ」

理音の言葉にひばりはどう答えて良いかわからずに顔を真っ赤にしてうつむいてしまう。

「今も言っただろ。俺は何十年でも待つ」

「ホント？」

「あぁ……だけど」

理音が優しい笑みを浮かべて待つと言うとひばりは不安げな表情で下から理音の顔を覗き込み、理音はそんなひばりの頬に軽く口づけを交わす。

「り、理音くん！？　な、何をするの！？」

「あまり、無防備に近づかないでくれ。俺はひばりが思っているほど、クールじゃない。俺も健全なガキなんだ」

「う、うん」

理音の突然の行動にひばりは慌てるが理音自体もかなり恥ずかしかったようでいつも無表情な彼からは考えられないくらいに顔を赤く

染めてひばりから視線を逸らすとひばりは顔を赤くしたまま頷く。

第４８問（後書き）

どうも、作者です。

理音、テレる。（爆笑）

本編、特別編を含めて初めてかも知れません。

そして、明久、瑞希は放置。（爆笑）

待つとは言ったけど、体が動く理音は改めて野獣だと思います。

理音のひばりへの想いは皆さんにはどう映ったんでしょう？
本編とはかなり違う告白でしたが、幼なじみであり彼を支えたひばりは理音にとってかけがえのない女性でした。その想いは今は恋愛とは言えないかも知れません。でも、この想いが報われれば良いなと書いていながら第三者として見た作者もいたりします。この理音の告白を皆さんが応援してくれたら良いなあ。（苦笑）

理音の想いに賛成、反対はあると思いますが、例の如く、ご意見はやさしくお願いします。また、一言でも感想をいただければ幸いです。

第４９問

「そ、そう言えば、葵ちゃん、遅いね」

「電話でもかけてみたらどうだ？」

ひばりは理音の告白から話をそらそうとしたのか、葵が遅いと言うと理音はいつもの無表情な顔に戻り、葵に電話をかけるように言う。

「そ、そうだね……あれ？　葵ちゃんからメール来てるよ。理音くん、夕飯、１人追加しても大丈夫かな？」

「ん？　カレーだし、１人くらいは大丈夫だが、誰がくるんだ？」

ひばりは携帯電話を開くと葵からのメールがきており、理音に聞くと理音は首を傾げる。

「誰がくるかは書いてないんだけど、文芸部の友達じゃないかな？」

「あぁ。本宮は部活に入ったと言っていたな」

葵は文芸部に入ったようで２人は同じ部活の女の子がくると思ったようで頷くと、

「それでも、やっぱり遅いよね」

「……そうだな。と言うか」

「ちょっと、理音くん」

理音は何か考えついたのか玄関に向かい歩き出し、ひばりは慌てて理音の後を追いかける。

「本宮、いつまでも悩んでないでさっさと入って……悪い」

「あ、葵ちゃん、大丈夫!?」

理音は葵がインターホンを鳴らすか悩んでいると思い、ドアを開けるとドアは葵のおでこに当たり、理音は表情を変える事なく葵に謝り、ひばりは慌てて葵に駆け寄る。

「も、本宮、大丈夫か!?」

「ん？　木下弟？」

葵は秀吉を連れてきたようで理音は首を傾げながらも、

「一先ず、中に入れ」

「は、はい」

「そうだね」

「お邪魔するのじゃ」

葵と秀吉に家に入るように言い、４人は居間に移動する。

「あれ？　秀吉、どうしたの？」

「えーと、いろいろあって、私がお誘いしました」

「いきなりきてしまって迷惑ではなかったかのぅ？」

明久は秀吉が葵とともに理音の家を訪れた理由がわからないようで首を傾げると葵は秀吉を連れてきたと言うと秀吉は申し訳なさそうに言う。

「いや、別にかまわんが、どういう繋がりだ？」

「えーと、私が入部した文芸部と木下くんが入部した演劇部が仲が良くて交流があるんですけど」

「帰りにワシが今日は1人でコンビニにでも行くと言う話をしたら、本宮が誘ってくれてのぅ」

理音はドアにぶつけた葵の頭を見て問題ないと言うと葵は秀吉を連れてきた理由を話すと、

「1人？　木下姉はどうした？」

「姉上は友人の家で夕飯をいただく事になってのぅ。やはり、ワシは帰った方が良いかのぅ？」

理音が首を傾げると秀吉は自分は邪魔かと言うが、

「まぁ、気にするな。面識のないヤツがくるかとも思ってたしな。知ってる人間なら全然構わない。今、用意するから、適当に座っててくれ」

「理音くん、あたしも手伝うよ」

理音は気にするなと言うとキッチンに移動するとひばりも理音の後を付いて行く。

「しかし、主達は仲が良いのぅ。少しうらやましいのじゃ」

「まぁ、ボクとリオ、ひばりは幼なじみだしね。姫路さんと葵ちゃんも付き合いは長いし、それでもひばりとは良く一緒にご飯食べてるけど、今回みたいのは久しぶりだよ。リオがいないと他は女の子だから、ボクは入れないしね」

秀吉は理音の家に集まる明久達を見てうらやましいと言うと明久は苦笑いを浮かべる。

「確かにそうじゃのぅ」

「でも、秀吉なら」

「ワシは男じゃ！？」

明久は秀吉なら、自分と理音がいなくても違和感がないと言い、秀吉が声をあげると、

「アキ、わけのわからん事を言うな。木下弟は男だ。間違えるな」

「前田、お主はわかってくれるのじゃな♪」

カレーの入った鍋をテーブルの真ん中に置いた理音がため息を吐き、秀吉は自分を男扱いする理音の腕を取って喜ぶ。

「木下弟、離せ。俺は食い物を運ばないといけないんだ。ひばりが食器につぶされる前に」

「つぶされないよ！？」

理音は秀吉に離せと言いながらもひばりをからかう。

第４９問（後書き）

どうも、作者です。

葵はひばりがいる事で少しだけ明るくなってます。
部活のよしみでつながった葵と秀吉。

この２人もどう変化して行くんでしょうか？

そして、この裏で大貴は優子をお持ち帰り。（爆笑）

第５０問

「しかし、本宮が部活か？」

「リオ、どうかしたの？」

夕飯を食べながら理音は葵が演劇部に入部した事に何か思う事があるようで首を傾げると明久が声をかける。

「ん？　やはり、俺の中にある本宮が部活に入るのは違和感が」

「理音くん、その言い方は失礼だよ」

理音の中にある葵の印象では部活に入る気はしないと言うとひばりはため息を吐く。

「えーと、私だって変わりますよ。３年も経ってるんですから」

「まぁ、確かにそうだな……変わらないのはひばりの身長くらいか？」

葵は理音の言葉に苦笑いを浮かべると理音は頷き、

「あたしだって、少しは大きくなってるよ！？」

「何ミクロンだ？」

ひばりからは『れおしょ　とーるはんまー』と書かれたピコピコハンマーが理音に放たれるが理音が気にする事はない。

「明久、怜生くんはすでに平仮名を書けるのか凄いのう」

「お兄ちゃんに教えてもらいました」

「リオはあまり自分から話すってタイプじゃないから、日本に帰ってきた時の怜生くんとのコミュニケーションって何かを教えるって感じだったからね」

「えーと、今、気にするのはそこじゃないと思いますよ」

秀吉は怜生の書いた字を見て感心したように頷くと明久は理音が怜生に勉強を教えていると説明するが、瑞希は苦笑いを浮かべる。

「しかし、本宮以外は誰も部活には入らんようじゃのう。せっかく、高校生活じゃ。もったいないとは思わんのか？」

「うーん。今まで部活に入ってなかったし。入ろうとは思わないかな」

「私もそうですね」

秀吉は葵以外が帰宅部のため、部活をする気はないかと聞くと明久と瑞希は苦笑いを浮かべ、

「俺は部活などをやっているヒマはない。薬品の調合やいろいろと仕事が入っているからな」

「そうだね」

理音は仕事があると言うとひばりは頷き、

「そうか。残念じゃ」

秀吉は残念そうに頷く。

「うちの学園は部活に力を入れてるわけじゃないから、そんなものだろう。俺の知り合いで部活をやっているのは秋月くらいだしな」

「秋月くん、サッカー部だよね。この間、練習してるの見たけど、かっこよかったよ」

理音とひばりは終夜がサッカー部に入った事を話すと、

「秋月君？　確かに運動神経良いですよね」

「清瀬曰わく、運動馬鹿と言う話だけどな」

「理音くん!?　どうしておかしな事を言うの？」

葵は終夜の事を知っているようで頷くと理音は大樹から終夜の運動神経の話を聞いた事があると言うがひばりはその言い方に問題があると言う。

「あれ？　葵ちゃん、秋月君の事を知ってるの？」

「はい。秋月君と清瀬君とは中学校が一緒でしたから」

葵が大樹と終夜と同じ中学校卒業だと言うと、

「……あの2人と同じ中学校卒業と言う事はあの清水美春とも一緒か？」

「はい。清水さんは清瀬君の幼なじみですよね？」

理音は葵に美春の事を聞くと葵はなぜ、理音が美春の事を聞くかわからないようで首を傾げる。

「理音くん、何かあったの？」

「……いや、あいつは危険な匂いがするんだ」

「それって、リオと同種とか？」

理音の様子に場の空気は冷たくなって行き、

「いや、俺とは違う危険さだ……生命の根源を否定するような」

「それって、どういう事？」

ひばりが息を飲んで理音に聞き返すと、

「簡単に言えば百合臭がする」

「お兄ちゃん、百合臭って、何ですか？」

理音の言葉に周りは呆気にとられるなか、怜生は意味がわからないため、首を傾げて理音に聞く。

「ん？　百合臭ってのは……」

「怜生くんにおかしな事を教えないで！？」

「おかしな事？　知的好奇心を満たすのは人間の欲求だ。怜生が聞いてきた事を教えて何が悪い？」

理音は怜生の質問に答えようとするとひばりは理音をとーるはんまーで叩くと理音は意味がわからないと首を傾げる。

「怜生くんにはちょっと早いかな」

「そうじゃのぅ」

「そうなんですか？　わかりました」

明久と秀吉は怜生には早いと言うと怜生は首を傾げながらも頷く。

「理音くん、さっきも言ったけど、怜生くんにおかしな事を教えないで！！」

「おかしな事も何も怜生の質問に答えるのは兄として当然の義務だ」

「えーと、前田くんもひばりちゃんも落ち着いてください」

ひばりは理音の怜生への教育に問題があると言うが理音は自分は間違っていないと言うのを見て瑞希は苦笑いを浮かべながら、２人を止めようとする。

「……」

「……本宮？」

「な、何でもないです！？」

葵はそんな理音とひばりの様子に何か考え込むと秀吉は葵の様子に声をかけるが葵はすぐに何もないと言う。

第５０問（後書き）

どうも、作者です。

相変わらず、理音は怜生におかしな事しか教えてない気がします。
（苦笑）

理音とひばりの様子に何かを感じる葵。

三角関係に発展するのかな？

……ないな。たぶん、葵は身を引く。

第５１問

夕飯をすませてしばらく雑談をしていたが、時間を見て解散すると言う話になっている。

「後片付け、本当に手伝わなくて良いの？」

「あぁ。食器を洗うだけだからな」

ひばりは理音に後片付けをどうするか聞くが理音は１人でも何とかなると言うと、

「姫路、本宮、行くぞ」

理音は瑞希と葵を送って行くと言うと怜生はすでに外出する準備を終えている。

「えーと、良いんですか？」

「当たり前だ。そんな凶器をちらつかせた女が２人で歩いていたら、危ないだろ。俺なら間違いなく襲うぞ」

「……理音くん、そんな事を言われて、はい。そうですかと言えると思う？」

葵が理音の言葉に聞き返すと理音は表情を変える事なく言うとその言い方に問題があるとひばりは額に青筋を浮かべながら言う。

「ん？　物の例えだ。今は瑞希や本宮の凶器より、ひばりのを揉み

た……何をする？」

「おかしな事を言わないで！？」

理音は現状では何もする気はないと言うとひばりは頬を膨らませてとーるはんまーで理音を叩く。

「前田、支倉、いつまでも遊んでないでそろそろ解散するべきではないかのぅ？」

「そうだね。秀吉はボクが送るからリオ、姫路さんと葵ちゃんをよろしくね」

秀吉は理音とひばりのじゃれあいになれてきたようでため息を吐くと明久は秀吉の意見に同意すると秀吉を女の子扱いしているようで自分が送って行くと言う。

「ワシは男じゃ。明久が送る必要はないのじゃ」

「何を言ってるんだよ。秀吉はこんなにかわいいんだ。１人でこんな時間に歩いたら危ないよ」

秀吉は明久の言葉にため息を吐くが明久は理音が先ほど秀吉は男だと言った事はすでに忘れているようで秀吉を１人で帰すわけにはいかないと言う。

「……アキ、お前はなぜ、木下弟を女扱いしたがるんだ。容姿は確かにかわいい部類だが、容姿でいけば木下姉も同じ……不思議だな。なぜか、姉より、お前の方が色気を感じる」

「……理音くん、木下さんに失礼だよ」

理音は明久の言葉にため息を吐きながら言うが、秀吉に顔を近づけて改めて秀吉の顔を見て優子より、秀吉に異性としての魅力があると言うとひばりは優子に失礼だとため息を吐く。

「り、理音、近いのじゃ！？」

「ん？　別にかまわんだろ。男同士だしな。それとも俺の顔は見るに耐えないか？」

秀吉は理音の顔が近くにある事になぜか顔を赤らめて視線を逸らすと理音は意味がわからないと首を傾げるが、

「まぁ、容姿で見れば木下弟は変質者に襲われる部類だし、アキに送って貰っても良いんじゃないか？　最近はこの国にも同性愛者と言う滅びた方が良い存在も増えてきたしな」

秀吉に明久に送って貰うように言う。

「しかしのぅ……」

「そうですよ。木下くんは男の子ですし、1人で大丈夫ですよ……だから、あの、吉井くん、木下くんではなくて、私を送ってくれませんか？」

理音の言葉に秀吉は納得できないと言う表情をすると瑞希は明久に送って貰いたいようで小さな声で言うが、

「秀吉、あんまり、深く考えないでさ。別に何かするわけじゃない

んだからさ」

明久には瑞希の声は聞こえてなく、秀吉と一緒に行くつもりであり、

「……アキくん、鈍すぎるよ」

「えーと、姫路さん、泣かないでください」

「大丈夫です。吉井くんが鈍いのは私も知ってますから」

ひばりは明久の様子にため息を吐き、葵はさめざめと泣き始めた瑞希をなぐさめる。

「なら、決まりか。木下弟、一応、アキの好みは巨乳系だが、万が一もあるからな。これを預けておく。襲われそうになったら、ここを強く押し当てるんだ」

「うむ。わかったのじゃ」

理音は瑞希の様子を気にする事なく、秀吉に護身用のスタンガンを渡すと秀吉は頷き、

「リオ、さすがにボクだって、秀吉に襲いかかるような事はしないよ」

「アキくん、それなら、どうして理音と木下くんから距離をとってるの？」

明久は理音が秀吉にスタンガンの使い方を教えているのを見て1歩後ろにさがるとひばりはため息を吐き、

「木下くんの方はあたしも付いて行くよ」

「……ワシは男なのじゃ」

明久だけだと心配だと言うと秀吉は明久だけではなく、ひばりからも女の子扱いされたと思ったようで落ち込む。

第52問

「……姫路、睨むな」

「だって、吉井くんが……」

「あはは」

理音は怜生の手を繋ながら瑞希と葵を家に送るために歩いていると瑞希は明久に送って貰いたかったと言いたげに理音を見ているため、理音はため息を吐く。

「さっきだって、ひばりが気を使ったのに無駄にしたのはお前だろ」

「そ、それは怜生くんもいましたし……」

「ぼく、邪魔ですか？」

理音はひばりが瑞希が落ち込んだ時に明久をけしかけた時の事を言うと瑞希は自分の不甲斐なさを怜生のせいにしようとすると怜生は肩を落とす。

「ちがっ、違います。怜生くんがなぐさめてくれて、私、元気がでました」

「良かったです」

瑞希は落ち込む怜生の様子に慌てて言うと怜生は笑顔を見せる。

「アキは鈍いからな。押し倒すくらいしないと気づかないかも知れないぞ。あいつは1人暮らしなんだ。あらかじめ言っておけば、俺は邪魔しないし、ひばりも引き止めておいてやる」

「お、押し倒すなんて、そんな！？」

「そ、そうですよ。わたし達はまだ学生なんですから、そんなのはまだ早いです」

理音が明久を振り向かせるなら、実力行使が手っ取り早いと言うが瑞希と葵は顔を赤くして全力で首を振る。

「まぁ、日本じゃ、そんなもんか」

「そ、そうですよ。それにそう言うのはやっぱり、お互いの気持ちがあってこそであって、前田くんだっていきなり、そんな事に……」

理音は2人の反応にため息を吐くと瑞希は理音の『日本』にと言う部分に何か引っかかる。

「どうかしたか？」

「前田くんはあっちでそんな事してないですよね？」

理音は瑞希の様子に何かあったかと聞くと瑞希はにっこりと笑いながらも背後から『ひばりちゃんを裏切ってないですよね？』と言う意味がつまったであろう黒い殺気（もの）が溢れ出ている。

「……押し倒されかけたが、無実だ。睨むな」

「前田君、不潔です！！」

理音は何もしていないと言うと葵は理音を非難するように声を上げ、

「……本宮、俺は何もしてないんだが」

理音はため息を吐く。

「本当ですね？」

「……話をふっといてなんだが、お前は場所を考えろ」

瑞希は理音の言葉の正否を確認するように聞くと理音は呆れたような表情をし、

「興味はあったが、そんな気分にはならなかった。そんな事をして、ひばりにバレたら何を言われるかわからん」

「……」

興味があった事は素直に認めるが何もしていないと言うと葵は理音の言葉に肩を落とす。

「瑞希、いつまでも話している会話でもないし、付いたからさっさと帰れ。俺はこれから本宮を送らないといけないんだ」

「はい。そうですね……あ、葵ちゃん？」

理音は瑞希の家まできたと言うと瑞希は我に返り、落ち込んでいる葵に気づき声をかける。

「だ、大丈夫です」

「そ、そうですか」

葵は瑞希の言葉に落ち込みながらも何もないと言うと瑞希は葵の気持ちも知っているため、心配そうな表情のまま頷くが、

「本宮、早くしろ。俺も怜生もいつまでもダラダラとしているほどヒマじゃないんだ」

「ふぇっ！？」

理音はあまり時間がないと言うと葵の首をつかむと葵を引きずって歩き出し、

「瑞希お姉ちゃん、さようなら」

「はい。怜生くん、さようならです」

怜生は瑞希に頭を下げると理音と葵の後ろを追いかけて行く。

第53問

「えーと、前田くん？」

「なんだ？」

「な、何でもないです！？」

瑞希と別れた後、聞きたい事があるようで葵は何度か理音を呼ぶが理音が聞き返すと慌てて何もないと言うやりとりが繰り返されている。

「……言いたい事があるなら、さっさと言え」

「お兄ちゃん、葵お姉ちゃんをいじめちゃダメです」

理音は葵の態度に若干、イラつきながら言うと怜生は理音を責めるように言う。

「……さっきから、何なんだ？　言いたい事があるなら、話せ」

「は、はい……あの……えーと、ですね」

理音は怜生の言葉に1度、深呼吸をして自分を落ち着かせて葵に改めて聞くが葵は理音から視線を逸らして言いづらそうにしている。

「さっさと言え！！」

「ひゃう！？」

理音はいつまでも言い出さない葵の様子に抑えきれなくなったようで不機嫌そうに言うと葵は声を裏返し、

「あ、あの。ひば、ひばりひゃ……」

舌を噛み、涙目になる。

「葵お姉ちゃん、大丈夫ですか？」

「らいりょうぶれす」

怜生は心配そうに葵の顔を覗き込むと葵は大丈夫だと答えるが、

「お兄ちゃん」

怜生は理音に葵に謝るように言う。

「待て、怜生。今回は俺は悪くない」

「そんな事ないです。男の子は女の子を泣かしたらダメですって、お姉ちゃんが言ってました」

理音はお怒りの怜生に自分は悪くないと言うが怜生は理音が悪いと言い切り、

「……ひばり、時と場合と言うものも教えておけよ」

理音は怜生の言葉から怜生の融通が効かない部分はひばりのせいだと確信したようでため息を吐く。

「お兄ちゃん」

「わかった。わかった。本宮、悪かったな。それで何があったんだ？」

怜生は理音を叱るように言うと理音は葵に謝り、改めて、葵に聞くと、

「えーと……あの、やっぱり、前田くんはひばりちゃんの事が好きなんですか？」

葵は理音から目を逸らしてひばりが好きなのかと聞く。

「あぁ。今更だな」

「そうですよね……」

理音はため息を吐くと葵は肩を落とす。

「……何か言って欲しいか？」

「……いえ、まぁ。わかってた事なんで、あまりダメージはありませんけど、やっぱり、ショックです」

理音は葵の様子に理音なりに気を使って言うと葵が力なく笑うと、

「……本宮、悪いな。俺はお前の気持ちは嬉しいがお前とはそう言う関係にはなれない。お前と俺は似すぎてるからな」

「……はい。わかってます」

理音は葵の様子に少しだけ申し訳なさそうに彼女の頭を撫でると葵も理音の言いたい事を理解しているようで目を伏せる。

「本宮なら、すぐに良い男が見つかるだろ。自分で言うのも何だが、俺は無愛想で自分勝手で割とダメ人間だしな」

「そんな事ないですよ。前田くんは少し不器用ですけど、優しい人です」

「……」

理音は葵を励ますような事を言うと葵は笑顔を見せると理音は葵から視線を逸らすと、

「後、見かけによらず、テレ屋さんですね」

葵は理音を見てクスクスと笑う。

「……うるさいぞ」

「す、すいません！？」

理音は葵が自分を見て笑ってるのを見て不機嫌そうに言うと葵は慌てて頭を下げる。

「……お前は良い女になったよ。少なくとも、3年前から比べて自分の足で歩こうとしている。俺はまだ立ち止まったままだからな」

「ひばりちゃんや瑞希ちゃん、吉井くんが背中を押してくれましたから……」

理音は葵の様子にくすりと笑うと葵は自分が変われたのはひばり達のおかげだと笑顔を見せ、

「ひばりちゃんは私の大切なお友達です。だから、泣かせるような事は絶対にしないでくださいね」

「……あぁ。約束する」

理音にひばりを泣かせるなと言うと理音は優しげな笑みを浮かべて頷く。

第５３問（後書き）

どうも、作者です。

葵が良い娘に育ってますね。ひばりの影響は大きいなぁ。と思います。

歩き出した葵と立ち止まったままだと言う理音。

２人は明久とひばりに助けられましたが別の道を歩き出しています。

似ているけど違う２人はここではどう成長していくんでしょうか？

第５４問

「お兄ちゃん」

「どうかしたか？」

葵を送り届けてから家に向かい歩いていると怜生が理音を呼ぶ。

「アイスが食べたいです」

「アイスか？　そうだな。そこのコンビニにでも寄って行くか」

怜生は理音にアイスが食べたいとねだると理音は怜生の言葉に頷き、
２人は近くのコンビニに入ると、

「あれ？　前田に怜生くん」

「ヒロ先生」

大樹も買い物に来ていたようで理音と怜生に気づくと怜生は大樹に
駆け寄る。

「清瀬か？　なんで……本宮と同じ中学って事は近所だよな」

「本宮？　……あぁ、本宮さんね。そう言えば支倉さんと友達って
言ってたから、前田と知り合いでもおかしくないな」

理音と大樹はお互いに納得した様子で頷くと、

「ヒロ、何やってるのよ？　……豚野郎！！」

大樹と一緒に美春もコンビニに来ていたようで、美春は理音を見るなり、罵倒するなり威嚇しはじめる。

「清水か？　お前に罵倒される筋合いはないぞ。俺は大貴と違うからな。罵倒されて喜ぶほどヒマじゃない」

「……いや、烏丸は喜んでないだろ。美春もいらないところで敵を作らないでくれ」

理音は美春に向かい言うと理音を威嚇している美春をなだめようとするが、

「ヒロ、放しなさい！！　美春はこの男を血祭りにあげると言う使命が！！」

「血祭りか？　まだ、大貴よりは敵意が薄いようだが、それでも充分に犯罪だな」

「お兄ちゃん、すごいです」

美春は止まる事なく、理音に攻撃を始めるが理音は表情を変える事なく、彼女の攻撃を交わし、怜生は理音の様子に目を輝かせている。

「……美春、あんまり騒ぐな。おじさんに気づかれるぞ」

「……」

大樹は美春の様子にため息を吐き、彼女の父親の事を口に出すと美

春は壊れたおもちゃのような不自然な動きになり、固まる。

「止まったな。清瀬、何かあるのか？」

「あぁ。前田はこの間、喫茶店で1度、マスターに会ってるだろ」

「ん？　喫茶店、あのマスターがどうかしたのか？」

「美春はマスターの1人娘なんだけどな。異常なほど溺愛してるてな」

「あぁ。それであの攻撃か。納得が言ったな」

理音は美春が止まった理由を聞くと大樹は苦笑いを浮かべて、理音と初めて会った日の喫茶店でのマスターが美春の父親だと言うと理音は納得が行ったようで頷くと、

「お姉ちゃん、大丈夫ですか？」

怜生は固まっている美春の顔をのぞき込んでいる。

「しかし、溺愛してると言っても、あそこまでなる理由はあるのか？」

「まぁ……昔、いろいろ有ってな。おじさんを治そうとして陸が作った薬でさらにおじさんが暴走したり、本当にいろいろな……」

理音は美春が固まる理由に納得がいかないようで首を傾げると大樹は遠い目をして陸の薬でとんでもない事が起きたと言う。

「ん？　海谷が薬？　あいつの専門外だろ。何より、薬じゃ、粉末

にして粉塵爆発くらいしか起こせないじゃないか」

「……いや、さすがにそれを起こす意味がわからないからな」

理音は薬など陸らしくないと首を傾げる大樹はため息を吐く。

「まぁ、あいつは自分の専攻分野を決めるのにいろいろと探した質か」

「まあ、ガキの頃は……美春、逃げるぞ！！」

理音はあまり興味がなさそうに頷いた時、大樹は何かに気づき、美春の手を引っ張り、彼女を抱き寄せると、

「ミハル、イエデナンカシナイデカエッテキナサイ。ヒロ、ミハルヲワタスンダ」

「おじさん、落ち着きましょう。ここでは多くの人に迷惑がかかります」

「ヒロ、キサマ、マサカ、ワタシノミハルニテヲダスツモリカ？マサカ、ワタシヲウラギリトハナ」

大樹に殺意を送る男が立っており、大樹は男をおじさんと呼び落ち着くように言うが男の背中から溢れ出る殺意はさらに量を増して行く。

第５４問（後書き）

どうも、作者です。

家に帰る途中でよったコンビニで大樹、美春と遭遇し、それをきっかけに人外との遭遇。（爆笑）

理音対美春父の第２戦目に突入か、大樹が美春を連れて愛の逃避行か？

どうなるんでしょうか？

第５５問

『ヒロくん、お店の外でやってね』

「は、はい。いつもすいません」

コンビニの店員はこのやりとりになれているようで大樹に店外へ移動するように言うと大樹は美春をかばいながら、美春の父親の攻撃を交わしながら、店外へ移動すると、

「マテ、ヒロ、ミハルヲカエセ。マサカ、キサマニウラギラレルトハオモッテイナカッタゾ」

美春の父親は大樹と美春を追いかけて店を出て行く。

「……これはいつもの状況なのか？」

『あれ？　知らないの。この近所じゃ、有名な親娘だよ。娘さんの彼氏の命を狙う父親ってね』

理音はアイスや飲み物を適当に選んでレジに運ぶとなれた様子の店員に話しかけると大樹と清水父娘のやりとりはいつもの事だと聞かされる。

「そうか」

「お兄ちゃん、ヒロ先生を助けてください」

「そうだな。怜生、少し待っててくれるか」

理音は会計を済ませると怜生が店外で美春の父親の攻撃を交わしている大樹を助けてと言うと理音は怜生の頭を優しく撫でた後、怜生にレジ袋を預けると、

「清瀬、手伝ってやる」

「前田、怜生くんを連れて逃げろ！？」

懐から、網を取り出して美春の父親を捕縛するが、大樹は理音に逃げるように叫ぶ。

「キサマ、ワタシノジャマヲスルツモリカ。ジャマヲスルナラキサマモイキノネヲトメテヤル」

「ほう。面白い。殺れるものなら殺ってみろ」

大樹の叫び声の後、すぐに美春の父親は理音にも大樹に向けていた殺意（もの）を向け始めるが理音はそれを見て、楽しそうに笑う。

「……なんだろう。状況は悪い方向にしか進んでない気がする」

「ヒ、ヒロ、あの豚野郎が時間を稼いでいる間に逃げるわよ」

大樹は突如として開かれた理音と美春の父親の対決にため息を吐くと美春は今のうちに逃げようと大樹の手を引っ張るが、

「そう言うわけにはいかないだろ。完全に前田はとばっちりだぞ」

大樹はそれはできないと言う。

「で、でも、捕まったら終わりよ」

「ヒロ先生、お姉ちゃん、大丈夫ですか？」

美春は父親から逃げる事だけを考えていると怜生がレジ袋を手に大樹の元に歩いてくる。

「あぁ。大丈夫だよ。だけど、前田が……余裕そうだな」

「……そうね」

大樹は怜生の頭を優しく撫でた後、理音の様子を見ると理音は息も乱す事なく、邪悪な笑みを浮かべながら、美春の父親の攻撃を交わしている。

「チョコマカトウゴクナワカゾウ！！」

「ほぅ。飛び道具を使うか？　俺はそっちが本職だ」

美春の父親は理音に向けてナイフを投げつけるが理音はニヤリと笑うと懐から花火を取り出してそれを寸分の狂いもなく撃ち落とし、理音の射撃？の精密さに観客は歓声をあげる。

「……なんか、凄く盛り上がってるな」

「……そうね」

「お兄ちゃん、凄いです」

大樹と美春は騒ぎの拡大に顔をひきつらせるが怜生は理音の活躍に目を輝かせている。

「ふむ。前回もそうだったが、頭に血が上り過ぎているから攻撃が単調だな。飽きてきたしな。アイスが溶ける前に終わらせてやる」

「……重要視されるところはそこなんだな」

理音は終わらせると言うと美春の父親から距離を取り、邪悪な笑みを浮かべたまま懐に手を突っ込むが、

「……しまった。制服に入れたままだ」

「何をやっているんですか!?」

使おうと思っていた武器を持ってきていなかったようで無表情のまま言うと、美春は理音の失敗に声をあげる。

「シネ。ワカゾウ!!」

「……まったく、直接攻撃は趣味じゃないんだがな」

美春の父親は理音に向かい一直線に向かってくると理音はため息を吐くと美春の父親の人体の急所と言われる箇所を寸分の狂いもなく打ち抜くが、

「ほぅ。まだ、動くか？　なかなか、貴重なサンプルだな」

美春の父親はまだ動いており、理音は邪悪な笑みを浮かべると先ほど投げた網で美春の父親を捕らえる。

「……なぁ、前田、おじさんをどうするつもりだ？」

「ん？　実験サンプルだ」

大樹は理音の行動に顔をひきつらせると理音は表情を変える事なく言い切った時、

「理音くん、こんなところで何をやってるの！？」

ひばりから理音の頭にとーるはんまーが振り下ろされる。

第５５問（後書き）

どうも、作者です。

本編より、こっちの理音は迂闊な気がします。何か気が抜けてるのはひばりがいるから、柔らかい部分があるせいでしょうか？

しかし、理音や大貴はそれなりに強いはずなのになぜ、ひばりの攻撃は当たるんだろう？（苦笑）

第５６問

「……ひばり、何をする？」

「何をする？　じゃないよ。こんな街中で人を襲って何を考えてるの！！」

理音はひばりの一撃でいかれた科学者モードから元に戻るとひばりは理音が一般人を巻き込んでいると思い込んでいるようで理音に説教を始めようとすると、

「支倉、待った。前田は悪くない」

大樹がひばりを止める。

「清瀬くん？　理音くんが悪くないって言うのはどういう事？」

「清瀬に清水、これはどうしたら良い？　この回復力だと俺の見立てで、１５分くらいで回復するがここで話し込むか？」

ひばりは大樹に何があったか聞くが理音は無表情のまま、美春の父親のダメージから再起動時間を計算すると大樹と美春の顔は引きつって行く。

「……一先ず、移動するか？」

「そうだね。アキくん」

「うん。怜生くん」

「はい」

理音は2人の様子に場所移動を提案するとひばりは頷き、一緒にここまできた明久に声をかけると明久は怜生の手を握り、

「どこに移動するんだ？」

「悪いが、あんな襲撃は家では受けたくないからな。少し遠いが俺のラボだな。ひばりとアキは帰っても良いぞ」

大樹は理音にどこに移動するかと聞くと理音は自分の研究所に行こうと言った後、ひばりと明久に帰るように言うが、

「何を言ってるの。付いて行くに決まってるでしょ！！」

「あはは。ひばりが言い出したら聞かないからね。ボクも行くよ」

ひばりは原因をはっきりさせたいようで付いて行くと言うと明久は苦笑いを浮かべて頷く。

「そうか。あいつの狙いは俺、清瀬、清水の3人だからな。お前達は別の道からこい。怜生を任せるぞ」

「わかったよ」

理音は美春の父親が自分達を追いかけてくると判断し、ひばりと明久に怜生と研究所のスペアキーを渡すと、

「清瀬、清水、付いてこい」

「あぁ。美春、行くぞ」

「わかってるわよ」

理音、大樹、美春の3人は先に研究所に向かい歩き出す。

「……何で、理音くんが行くところは騒ぎが起こるの？」

「さ、さぁ？」

ひばりは3人の後ろ姿を見送った後、ため息を吐くと明久は苦笑いを浮かべるが、

「今日はお兄ちゃんは悪くないです」

怜生は理音は悪くないと言う。

「そうなの？」

「はい。あのおじさんが……」

明久は怜生の言葉に聞き返し、怜生が状況を説明しようとした時、

「……コロス。ヒロニアノワカゾウ。マイエンジェルミハルニテヲダスオトコハワタシノテデヤツザキニシテクレル」

美春の父親は理音の網を素手で引き裂き、外に出ると3人を探しているのか、当たりを見回し始める。

「……えーと、理音くんを止めない方が良かったのかな？」

「そ、そうかも」

ひばりは目の前で理音と大樹に向けた殺意を垂れ流している美春の父親を見て顔をひきつらせて言うと明久は頷いていると、

「……コッチカラ、ミハルノニオイガスル。マッテナサイ。マイエンジェルミハル、オトウサンガスグニタスケテアゲルカラ」

美春の父親は理音達が向かった方向に一直線で駆け出し、

「……ねぇ。アキくん、あたし達が行ったら足手まといかな？」

「そんな気もするかな？」

ひばりと明久は美春の父親の様子に一緒に行くと言った事を後悔しはじめるが、

「お姉ちゃん、アキ兄ちゃん、行かないんですか？」

怜生は研究所に行くつもりのようで2人の顔を見上げており、

「……とりあえずは研究所の前まで行こうか？　あの人がいたら引き返すって連絡しよう」

「そうだね」

ひばりと明久は怜生の様子に断れないと思ったようで顔をひきつらせたまま、一先ず、様子を見に行くと決めて怜生の手を引っ張り、

研究所に向かう。

第５６問（後書き）

どうも、作者です。

逃げる理音、大樹、美春の３人に追う人外。（爆笑）

武器のない理音は人外を撒き無事に研究所に着けるんでしょうか？

（悪笑）

第57問

「……なぁ。清瀬、清水、あれは本当に人間か？」

「そんな事を言うヒマが有ったら走りなさい！！　豚野郎！！」

大樹と美春が息を切らしながら走るなか、理音は呼吸を乱す事なく、2人に質問するが美春は理音を罵倒すると、

「……美春、今、お前は前田に助けて貰ってるんだからな。立場を考えろよ」

大樹は美春に少し考えて話せとため息を吐く。

「マチナサイ。ミハル、ソンナオトコドモニタブラカサレテハイケナイ。ヒロ、マイエンジェルミハルニテヲダシタコトヲシンデコイカイシロ」

「しかし、手を出したとはどこまでだ？　まだ、清水も清瀬も未経験者だろ」

「豚野郎、いきなり、何を言い出すんですか！？」

後ろから聞こえる殺意が混じった声に理音は表情を変える事なく言うと美春は顔を真っ赤にして、理音を怒鳴りつける。

「……確かにそうだが、なぜ、言い切れるんだ？」

「ん？　2人とも異性を知った後の独特の匂いがしないからな」

大樹は理音の言葉に呆れたように聞き返すが理音は当たり前の事を聞くなと言い切ると、

「……お前、あんまりおかしな事を言うとまた、支倉に怒られるぞ」

「ん？　そうだな。ひばりはそっち関係の話をすると怜生の教育に良くないと言って烈火のごとく怒るからな。まったく、性教育をキチンと教えておかないから、中絶だ。性病だ。と言った面倒な問題が出てくるんだ」

大樹は突っ込む事をあきらめ、理音の事をひばりに丸投げするが、理音はひばりの怜生の教育は間違っていると言いたげに言った後、

「清瀬、清水、ちゃんと避妊はしろよ」

悪気もなく、当たり前の事だと大樹と美春に忠告する。

「豚野郎、何を言い出すんですか！？」

理音の忠告に美春は当然、理音を怒鳴りつけるが……

理音の忠告は更なる混沌を呼ぶ事になる。

「ヒロ、キサマ、ミハルニナニヲシタ？」

美春の父親は理音の言葉に１度、その場で立ち止まるがすぐに先ほど以上に黒くまがまがしい殺意を大樹に向ける。

「ま、まだ、何もしてません！？」

「まだ？　と言う事はするつもりではあるんだな？」

大樹は美春の父親の様子に何もしてないと言うが理音は楽しそうに美春の父親に点いている火に大量の油を流し込み、

「……ヒロ、イママデハコロスダケデユルシテヤロウトオモッタガ、ユルサン。コロシタアト、ヤツザキニシテトウケツフンサイシテクレル」

「ほぅ。凍結、粉砕か？　産廃処理の方法の１つだな」

「そんな知識はいらん！！」

美春の父親は大樹を殺すだけでは飽き足らないようである。

「……ヒロ、カクゴハイイナ。ミハルヲケガシタバツヲウケテモラウ」

「めちゃくちゃだ！！　俺は何もしてない！！」

美春の父親がまがまがしい殺意の力を使い一気に大樹との距離を縮めた時、

「大樹、そこを右に入れ」

「お、おう」

理音は大樹に指示をして大樹は理音の言葉に従い、右に曲がると、

「コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス」

殺意を垂れ流した美春の父親は曲がりきれずに真っ直ぐに進んで行き、

「さてと、ここまで来たら、俺のもんだ」

理音は美春の父親の背中を見て、邪悪な笑みを浮かべる。

「豚野郎、何をするつもりですか！？」

「決まってるだろ」

美春は理音の様子に美春の父親とは違う寒気を感じて聞き返すと理音は懐から怪しげな銃器を取り出し、

「これで少しは頭を冷やせ」

「「……」」

なんのためらいもなく、美春の父親を撃ち抜くと、美春の父親は凍りついて行き、大樹と美春は理音の行動に顔をひきつらせるが、

「清瀬、清水、あれはどうやら匂いで判断してるみたいだからな。これでお前達の匂いを一時的に消すぞ」

理音は懐から怪しげな薬瓶を自分に振りかけた後、大樹と美春に振りかけ、

「動き出す前に入るぞ」

「お、おう」

「……こ、この豚野郎は何なんですか？」

研究所のドアを開け、大樹と美春は顔をひきつらせたまま、理音の後に付いて研究所に入る。

第57問（後書き）

どうも、作者です。

理音は大樹と美春を煽る。（爆笑）

煽った事で人外はより、強力になりましたが、理音は冷静に対処しました。

大樹と美春は理音が煽る事で美波になびく事なく、無事に進むんでしょうか？（悪笑）

第５８問

「インスタントしかないが、コーヒーで良いか？」

「あぁ」

「……えぇ」

研究所の居間に着くと理音は大樹と美春にコーヒーを飲むかと聞くと２人は頷くが美春は理音の研究所を見回している。

「……美春、変なものをいじるなよ」

「そこら辺には海谷から貰ったものもあるからな。ヘタにいじると爆発するぞ」

大樹は美春にあまりおかしな事をするなと言うと３人分のコーヒーを持ってきた理音は陸の作った物も混じっていると言うと美春は大人しくソファーに座る。

「支倉達は結局、くるのか？」

「こないと言う連絡もないからな。直ぐにくるだろ」

「豚野郎、砂糖やミルクはないのですか？」

大樹はコーヒーを口に運びながら、理音にひばり達がくるのかと聞くと理音は直ぐにくると言っている隣でコーヒーがブラックな事に美春は不満げに言うと、

「ん？　悪かったな。ここでコーヒーを飲むのは俺だけだから、気づかなかった。今、持ってきてやる」

理音は美春の態度を気にする事なく、キッチンに戻る。

「美春、お前はもう少し遠慮と言うものを覚えろ」

「ヒロ、うるさいわよ。女の子にブラックを薦めるのがおかしいのよ」

大樹は美春の様子にため息を吐くが美春は自分は間違っていないと言う。

「これで良いか？　清瀬も使うなら使ってくれ」

「あぁ。すまな……なぁ、前田、さっきまでの会話じゃ、お前はブラック党じゃないのか？」

理音はテーブルに置いた砂糖を山盛りで４杯コーヒーの中に入れると大樹は余りの砂糖の多さに顔をひきつらせるが、

「ん？　糖分は速効性でエネルギーを摂取するのに手軽だしな。使った分を摂取しようと思ってな」

「……だとしても多いぞ」

理音は気にするなと言うとコーヒーに平然と口を付け、大樹は苦笑いを浮かべる。

「お兄ちゃん」

「「おじゃまします」」

3人がそんなやりとりをしているとひばり達が到着したようで研究所に入ってくると怜生は直ぐに理音の隣に座り、

「無事だったか？」

「……その確認の仕方はどうかと思うけど、無事だったよ」

理音は怜生の頭を撫でながら、美春の父親に追いかけ回されなかったか聞くとひばりは苦笑いを浮かべながら頷き、

「……迷惑をかけてすまない」

「……ごめんなさい」

大樹と美春は身内の不祥事に申し訳なさそうに謝る。

「それで、そっちはどうやって、清水さんのお父さんを撒いたの？」

「ん？　外で凍ってなかったか？」

「凍りつく？　理音くん、何をしたの？」

申し訳なさそうな2人の様子に明久は苦笑いを浮かべながら、美春の父親の事を聞くと理音は外で凍りついてなかったかと聞き返すとひばりは顔をひきつらせる。

「ん？　頭が冷えるようにすぐそこで凍り漬けにしたんだが」

「何をしてるの！？」

理音は平然と言うとひばりは声をあげるが、

「えーと、僕達がきた時は誰もいなかったよ」

「本当か？　……なぁ、清水、清瀬、あれを俺の研究材料にしても良いか？　反応速度やその他もろもろ、データ収集をしたいんだが」

明久は研究所の外には誰もいなかったと言うとその言葉に理音は研究対象として美春の父親に本気で興味が湧いているようであり、２人に聞く。

「あんなもので良ければいくらでも研究に使ってください。四肢を斬って、二度と動けないようにしてくれても……むしろ、殺してしまっても構いませんわ」

「……いや、暴走してない時は気さくな良い人だから、止めてくれ」

理音の提案に実の娘の美春は好きなだけ使って良いと言うが大樹はため息を吐きながら理音の提案を断ると、

「そうだな。お義父さんがいなくなるのはいろいろと問題あるか？」

「理音くん、あんまり、からかっちゃダメだよ」

理音は大樹と美春をからかうように笑うとひばりは理音に２人をからかうなと言う。

第５８問（後書き）

どうも、作者です。

ひばり達が研究所についた時、人外は消えていました。

……襲撃はあるんでしょうか？（悪笑）

第59問

「……しかし、おじさんがいなくなっているって事はここを襲撃してくる事はないよな？」

「流石にそこまではないんじゃない」

大樹は話を変えようと美春の父親が研究所を襲撃しないかと言うと明久は苦笑いを浮かべる。

「まぁ、ここを襲撃するとは答えられないが今のところはないんじゃないか。常識的にもあり得ないからな」

「どうしてそんな事を言えるのですか？　あれはそんな常識は通じませんわ」

理音はあまり興味もなさそうに言うと美春は自分の父親には常識が通じないと言い切り、

「理音くん、どうして言い切れるの？」

ひばりは理音の様子に理音は確証を持っていると思ったようで理音に聞き返す。

「ん？　一応はここから離れて行っているようだしな」

「……なんで、そんな事が言えるの？」

理音はひばりの質問に当たり前のように美春の父親が研究所から離

れて行くと言うとひばりは眉間にしわを寄せながら聞く。

「ん？　コンビニの前で殺りあった時に発信機を付けておいたからな」

「……」

理音は平然と美春の父親に発信機を付けたと言うとその場には微妙な空気が流れるが、

「そうだ。これを渡しておくから、帰る時は見つからないように帰れよ」

「あぁ」

理音は気にする事なく、大樹に美春の父親の居場所が確認できる小さな画像が付いた機械を渡すと大樹は顔を引きつらせて頷き、

「……なんで、こんなものが当り前のように出てくるんですか」

美春はいろいろと認めたくないようでぶつぶつと呟く。

「ん？　清水、お前は海谷の幼なじみなら、珍しくもないだろ。発信機の小型化は海谷の資料を参考に作ったものだからな」

「……その名前は出さないでください」

理音は大樹や美春には見なれているものだろと言うが、美春は陸の名前を聞きたくないようで理音を睨みつける。

「ん？　なぜだ？」

「あんな爆発野郎に関わり合いたくないに決まってるでしょ！！いつも、いつも、おかしな物を作って爆発、大破、身が持ちませんわ！！」

理音は美春の言葉の意味がわからずに首を傾げると、美春は陸のせいで起きたであろう爆発を思い出しているのか拳を握り、怒りで震えている。

「……あの頃の、陸の爆発の原因の2～3割は美春が原因だろ。まぁ、爆発させているうちに爆発の魅力に取りつかれた事も否定できないのがつらいところだけどな」

「えーと、前から聞きたかったけど、海谷くんって、理音くんより、問題児？」

大樹は陸が爆発に取りつかれた原因は美春にもあると言い、ため息を吐く隣でひばりは苦笑いを浮かべると、

「ん？　問題児と言うかはわからんが、あいつが爆発させなければ、研究費は今の5割はカットできるだろうな」

「……まぁ、必ず、爆発するからな」

理音は陸の研究は金がかかると言い、大樹は肩を落としてため息を吐く。

「で、でも、役に立つ事はしてるんだよね？」

「まぁな。あいつのプログラムやロボット工学はうちの研究所でも群を抜いている。その代わりに研究費用も無駄に使うがな。まったく、世の中はエコの時代なのにいくら言っても聞かないんだ」

明久は大樹の様子に陸の誇れるところはないか理音に聞くが、理音は陸の能力の高さは認めているが環境面に対する考えは足りないと言うと、

「お兄ちゃん」

怜生が理音の服をつかむ。

「ん？　どうかしたか？　怜生」

「アイス、融けちゃいます」

理音は怜生に何かあったかと聞くと怜生は買ったアイスを食べたいようで理音にコンビニの袋を見せ、

「そうだな。怜生から好きなものを取れ」

「良いの？」

理音は怜生の頭を撫でると怜生は嬉しそうにコンビニの袋からアイスを取り出して目を輝かせる。

「人数分はあるから、好きなのを取れ」

「理音くんは？」

「俺はあまったので良い」

怜生の嬉しそうな様子に理音は優しげな笑みを浮かべるとひばり達にもアイスを選べと言う。

第６０問

「……なんだ？」

「これは本当に正確なんでしょうね？」

アイスを食べ終えてしばらくすると、美春は理音が作った発信機が信用できるのかと言いたげに眺めている。

「疑うかはお前の勝手だ。発信機に気づいて他の何かにつけてここを狙っている事も否定はできないからな」

「そりゃ、そうだな」

理音は発信機が外される事もあるから何とも言えないと言うと大樹は頷く。

「でも、それって気づきそうなの？」

「いや、普通の人間は気づけないとは思うが、あれは人と判断して良いか。悩む存在（もの）だしな。時に野生は科学を凌駕するからな」

明久は理音と大樹の言葉に苦笑いを浮かべながら聞くと理音は美春の父親の場合はわからないと言うと、

「必要なら、他にもいろいろと持って帰るか？」

「……理音くん、そんな物騒なものを当たり前のように渡さないで」

美春と大樹に護身用だと言いたげにスタンガンや麻酔銃など取り出し、ひばりはため息を吐く。

「まぁ、これを見るとちゃんと家に帰ってるみたいだからな。今は、家の居間で美春の小さい頃の写真を見て泣いているところだろ」

「……清水、お前、愛されてるな」

「……あんな気持ち悪い愛はいりませんわ」

大樹は美春の父親の行動が目に浮かんでいるようでため息を吐くと理音は美春を見て言うが、美春は理音の言葉に嫌悪感しか示さずに、顔をしかめると、

「……美春お姉ちゃん」

怜生が泣きそうな表情で美春の服をつかむ。

「な、何ですか!?」

「……お父さんとケンカは良くないです」

美春は怜生の行動に驚きの声をあげると怜生は美春に父親の事を悪く言って欲しくないようである。

「……しかし、あれはケンカとは」

「……悪いな。清水、うちは片親で母親しかいないんだ」

美春は怜生の様子に困ったようで理音に助けを求めると理音は美春

に謝った後、

「怜生、清水には清水の家の都合があるんだ」

「……はい」

怜生の手を美春の服から放し、怜生を抱きかかえると怜生は小さく頷く。

「……仕方ありませんわね。今日は美春はうちに帰りますわ。ヒロ、帰るわよ」

「そうだな。そろそろ帰るか」

美春は理音の話と怜生の様子に少しだけ父親と歩み寄ってみようと思ったようで大樹に帰ろうと言うと大樹はそんな美春の様子に苦笑いを浮かべ頷き、

「前田、吉井、支倉、怜生くん、今日は迷惑をかけたな」

4人に巻き込んでしまった事を謝る。

「ん？　気にするな。俺的には面白いものも見れたしな。特にあの反応速度や人の稼働域を超えた動きは調査するに値する」

「……理音くん、おかしな事をしたらダメだよ」

理音は気にするなと言うとひばりは理音をジト目で睨む。

「ん？　別におかしな事をするつもりはないぞ。ただ、発信機を付

けたからな。後で監視カメラを追加して行動パターンやスイッチのオンオフを……」

「清水さんのご家族に迷惑がかかるでしょ！！」

理音は誰にも迷惑はかからないと言うが、それは明らかに常識から外れており、ひばりからとーるはんまーが放たれる。

第６０問（後書き）

どうも、作者です。

怜生の説得で家に帰ることを決めた美春、彼女は迂闊です。（爆笑）

そして、父親に追いかけまわされ、怜生のせいにはできないから理音のせいにする。

しかし、理音は気にしない。（苦笑）

第６１問

「怜生くん、寝ちゃったね」

「遅くなったからな。子供は寝る時間……ひばりは寝なくて良いのか？」

大樹と美春と別れ、理音、ひばり、明久、怜生もそれぞれ家に帰ろうとするが、怜生は帰る前に眠くなっていたようで理音に抱かれていたのだが、静かに寝息を立て始めており、理音はひばりをからかいに入ると、

「あたし、そんなにちっちゃくないよ！？」

「ひばり、ストップ！？　怜生くんに当たるから」

ひばりはとーるはんまーを振り上げるが、明久が慌ててひばりを止める。

「……そ、そうだね」

「大分、手に馴染んでるようだな」

「……」

ひばりは自然に取り出したとーるはんまーを止めると理音はくすりと笑いとひばりは
少し納得がいかなそうに理音を睨みつけると、

「まぁまぁ、ひばりも落ち着いてよ。でも、ボクが言うのもなんだけど、とーるはんまーは充分に手に馴染んでると思うよ」

「……そうなんだよね。妙に持ってるとしっくりくると言うか」

明久は苦笑いを浮かべて言い、ひばりはとーるはんまーの柄を持って言う。

「しっくりくるに決まっているだろ。俺がひばりのために作ったんだからな」

「……」

理音は無表情のまま言うとひばりは少し顔を赤くして理音から視線を逸らすと、

「そう言えば、リオ」

明久はひばりの様子に話を変えた方が良いと思ったようで理音を呼ぶ。

「ん？　どうかしたか？」

「怜生くんも小烏丸やとーるはんまーを欲しがってたけど、怜生くんには何も上げないの？」

明久は怜生にも何か作ってあげないのかと聞く。

「あぁ。怜生にはな」

「……理音くん、危ないものじゃないよね？」

理音は明久の質問にニヤリと笑うとひばりは理音の笑みに何かを疑っているようでジト目で見るが、

「危ないものじゃない。今は怜生のデータから最高のものを作るために大貴と計画を立てているところだ。小烏丸にも負けない最高傑作を作る予定だ」

「これ以上、おかしな物を作らないで！？」

理音は大貴と何かを企んでいるようであり、ひばりは声をあげると、

「まぁ、リオの事だから、怜生くんを危険な事に巻き込むわけもないから、そこは心配していないけど」

「まぁ、そうなんだけどさ。ほら、理音くん、烏丸くんが関わってくるといつも以上に暴走するから」

明久はひばりと理音の間に割って入り、理音は怜生が関わった事だとそこまでおかしな事はしないと言うとひばりは明久の言葉もわかるが納得がいかないような表情をして理音をジト目で見る。

「た、確かにそれはあるかも」

「でしょ」

明久はひばりの言葉に苦笑いを浮かべるとひばりはため息を吐くが、

「ん？　大貴は芸人だからな。仕方ないだろ」

理音は表情を変える事なく自分は関係ないと言う。

第６１問（後書き）

どうも、作者です。

理音と大貴は何を企んでいるんでしょうか？

まあ、あれです。（悪笑）

第62問

「だから、お前はデータとかに頼り過ぎなんだよ」

「……悪いな。感覚などと言った曖昧なものを信じるほど俺は暇ではない。必要なのはデータだ。怜生の腕力や手を振り降ろす速度に握力。その他にもいろいろとデータを集めて怜生に合ったものを作るべきだ」

「……お前らは、朝から何をしてるんだ？」

終夜が登校してくると朝から理音と大貴は何か口論をしており、終夜はため息を吐く。

「秋月くん、あの2人を止めてよ。朝から熱くなってて、いつ、暴発するかわからないのよ」

「……遠慮する。前田を止めるのは支倉の仕事だし、烏丸を止めるのは木下の仕事だろ。俺は知らん」

「何で、ヒロを止めるのがあたしの仕事なのよ？」

しかし、終夜の言葉では理音も大貴も止まる事なく、終夜は関わらないように自分の席に座ると優子が終夜に2人を止めるように言うが終夜は自分には止められないと言うと優子は終夜の言葉が気に入らないようで終夜を睨みつけるが、

「そりゃあな。昨日は2人で仲良くカラオケデートみたいだったしな。その後も2人でどっかに行ったみたいだし」

「な、何で、それを!?」

終夜はニヤニヤと笑いながら優子に言うと優子は昨日の大貴とのデートを見られていた事に慌てる。

「ん？　昨日、部活が終わった後に夕飯の買い物をしに商店街に行ったらな。見知った顔、２人が仲良く買い物してるんだからな」

「な、何もないわよ。ヒロがあたしに恥をかかせたから、その罰を受けて貰っただけで、別にそんなんじゃないわよ!?」

終夜は大貴と優子の様子を思い出しながら言うと優子は慌てて否定するが、その顔は真っ赤であり、

「別に否定する必要もないんじゃないのか。俺は割とお似合いだと思ってるんだけどな」

「そ、そうかな？」

終夜は優子の慌てる様子に苦笑いを浮かべて言うと、優子は顔を赤くしたまま少し嬉しそうに終夜から視線を逸らした時、

「美春、ちょっと待て!?　止まれ。前田はまったく悪くないだろ」

「放しなさい。ヒロ、美春はあの危険人物を八つ裂きにしないと気にすまないのよ」

「止めろって、言ってるだろ。だいたい、前田にはおじさんだって敵わないんだ。確実に返討ちだ」

美春に引きずられた大樹が教室に入ってくる。

「えーと、清水さんに清瀬くん？」

「大樹、何かあったのか？」

「説明は後だ。美春を止めるのを手伝ってくれ」

終夜と優子は2人の様子に何があったかわからないような表情をすると大樹は2人に助けを求めるが、

「コロス。コロス。コロス。コロス。コロス。コロス」

美春は彼女の父親と同じように人外化を始め、

「……木下、1時間目は現代文だったよな？」

「……そうね」

終夜と優子は美春から視線を逸らす。

「……ミツケタ。ソレモフタリモ」

「ん？　清瀬、清水は……ほう。どうやら、あの変化は遺伝性らしいな。なかなか、面白いな」

「ロールパン、よく俺の前に出てこれたな」

美春は理音と宿敵の大貴を見て邪悪なオーラを漂わせながら言うと

理音は美春の変化を見て邪悪な笑みを浮かべ、大貴は美春に向けて小烏丸を向ける。

第６２問（後書き）

どうも、作者です。

理音と大貴に向けられた美春の殺意。（爆笑）

大樹は終夜と優子に見捨てられます。

そして、大貴とお似合いと言われて嬉しそうな優子。

しかし、大貴は人外とにらみ合う。

第６３問

「ちょっと待て。前田も烏丸も落ち着いてくれ！？」

「落ち着く？　俺は落ち着いてい……」

大樹は美春を押さえながら理音と大貴に落ち着くように言うが大貴は美春の顔を見て、すでにおかしなスイッチが入ったようで冷静な口調で何かを言いかけた時、理音が思いもよらぬ行動に移る。

「前田！？　あんた、何をしてるのよ！？」

「何？　せっかく、貴重なサンプルが採れるんだ。大貴に渡すわけにはいかないだろ」

優子は理音の行動に驚きの声をあげると理音は邪悪な笑みを浮かべており、その手には怪しい色をした液体の入った注射器が握られており、大貴は床に崩れ落ちる。

「木下、支倉だ。支倉を呼んでこい！！」

「で、でも、ヒロが！？」

終夜は大貴が床に崩れ落ちたのを見て、理音を止めるためにひばりを優子に呼んでくるように言うが、優子は大貴が心配のようで教室から出て行けない。

「ブタヤロウガ……ナゼジャマヲスル？　ブタヤロウモキサマモヤツザキニスルノハミハルナノ二ジャマヲスルナ。ジャマヲスルナ。

ジャマヲスルナ」

「八つ裂き？　やれるものなら、やってみろ。だがな。八つ裂きと言う魅力的な言葉を聞かされて俺が何もしないでいられると思うか？」

美春は懐から、フォークとナイフを取り出すと理音も負けじと懐からメスを取り出す。

「……あいつらの制服には何が入っているんだ？」

「し、知らないわよ。それより、秋月くんも手伝って」

「あぁ」

終夜は飛び交うフォークとナイフ、メスの嵐に優子は大貴を引き寄せ、終夜は優子を手伝って大貴を引き寄せ、

「それで、この人外同士の戦いはどうしたらいいんだ？」

「……とりあえず、前田を止めるのに支倉さんを連れてきたいけど」

「……無理だな」

「そうね」

理音と美春の対決を収めようと終夜と優子は頭を抱え、どうにかしてひばりと連絡を取ろうとするが、教室からは出れそうもない。

「不味いな。いくら、前田といえ、女の清水にあまりおかしな事は

……しそうだな」

「そ、そうね」

終夜はいくら理音でも女の美春にはおかしな事はしないと言いかけるが、理音の様子に顔を引きつらせる。

「前田、お前は何をするつもりだ！？」

「ん？　なかなか素早くてサンプルデータが取れないからな。捕縛するつもりだ。縛り方は……想像に任せる」

大樹は理音の手のなかにある縄を見て声をあげると理音は楽しそうに笑いながら美春を縛りつけると言うとみた目の良い美春が理音にいかがわしい縛り方で縛りつけられると想像したようで男子生徒が騒ぎ始め、

「なるほど、そこまで期待されたら、男として挑まないといけないな」

理音の口元が邪悪に歪んだ時、

「理音くんも清水さんもおかしな事をしないで！！」

騒ぎを聞きつけたひばりがＢクラスの教室に現れ、理音と美春にとーるはんまーが飛ぶが、

「……止まらないな」

「……そうね」

2人の人外は止まる事はなく、

「は、支倉、これを使え」

「う、うん。止まって！！」

大貴の手からひばりに小烏丸が託され、ひばりは小烏丸で再度、理音と美春を討ち抜くと教室内には小気味の良い音が響き、

「……ひばり、お前は朝から何を」

「ふぇっ！？」

理音は正気に戻るが美春は未だに止まらず、自分に2度も攻撃を仕掛けたひばりをも攻撃対象に見据えたようでひばりに向かいフォークを投げつけると理音がひばりを抱きかかえて美春のフォークを叩き落とす。

第６３問（後書き）

どうも、作者です。

大貴、理音にやられる。（爆笑）

美春対理音の対決はひばりの登場により、戦況は変わってきました。

知的好奇心を満たすための戦いから、ひばりを守るための戦いに。

ひばりは理音の腕の中で何を思うんでしょうか？

第６４問（前書き）

今回はＧＡＵさんに怒られます。（苦笑）

第６４問

「り、理音くん！？」

「黙っていろ」

ひばりは理音に抱きかかえられた事で顔を赤くしているが、理音はひばりを抱きかかえたまま、美春から放たれるナイフとフォークを叩き落とし続ける。

「えーと、何があったの？」

「あのロールパン、支倉を敵とみなしたんだよ」

優子は美春の攻撃が理音の腕のなかにいるひばりに集中しはじめたのを見て、顔を引きつらせると大貴は首をならしながら立ち上がる。

「……烏丸、相変わらず、無駄に回復が早いな？」

「そうか」

終夜は大貴の回復の早さに苦笑いを浮かべるが大貴は気にする事はない。

「それで、ヒロ。えーと、清水さんが支倉さんを敵とみなしたって言うけど」

「ただでさえ、頭に血が昇りやすいのが、２回もしばかれたんだ。当然の結果だろ」

優子は美春がひばりを攻撃し始めた理由を聞くと大貴は簡単に説明し、

「問題は理音が支倉を抱えたままで、どこまで、ロールパンの攻撃を凌げるかだな」

「そうだな。清水はあの父親の血を引くだけあって、ああなると手がつけられない」

理音対美春の対決を楽しみだしたようで、大貴は楽しそうに笑うと終夜は美春の父親の事を知っているようで大きなため息を吐くなか、

「さぁ。はったはった。１口１００円」

「ヒロ、そんな事をやってないで、止めなさいよ」

「止めろ!?　優子、俺の関節はそっちに曲がらない!!!!??」

大貴は賭けの胴元になりはじめ、優子をお仕置きを喰らい始め、

「……収集がつかない」

終夜がため息を吐くなか、

「コロス。コロス。コロス」

「清水さん、落ち着いて!?」

美春は相変わらずの殺意を垂れ流し、ひばりに向けて無尽蔵にナイフとフォークを投げつけ、ひばりは美春に落ち着けと言うが彼女が止まるわけもなく。理音はひばりがいるためか防戦一方になっている。

「……不味いな」

「り、理音くん？　大丈夫？」

理音は美春の攻撃を防ぎながらぽつりとつぶやくとひばりは理音に何かあったかと思い理音に何があったかと聞くと、

「……昨日、買い物をして帰らなかったから、洗濯洗剤の買い置きがないんだ」

「それ、今、言う事じゃないよね！？　よそ見しないで！？」

理音はこの状況でも相変わらず、無駄な事を考えており、ひばりは声を上げるが、

「いや、ああ言うものは予備がないと不安にならないか？　怜生も友達と公園で遊ぶようになって泥だらけになって来る時もあるし、買い忘れるといざって時にないのは困るだろ」

「確かにそうだが……」

理音にとっては重要な事であり、真剣に悩んでおり、理音の言葉に理音と同じく弟を持つ終夜は頷くが納得はいかなさそうである。

「それに今から制服は返り血で染まるわけだからな」

「理音くん？」

理音は今までの様子とは異なり、冷たい笑みを浮かべると今までの理音とは違う異質な笑みにひばりは何があったかわからないようできょとんと表情をするが、

「……清水、今までは正気に戻るまで、待っててやったが、これ以上、待っても無駄なようだからな」

「ま、前田、何をするつもりだ！？」

理音は美春の攻撃を叩き落としながらこれ以上は無駄だと言うと理音の様子に大樹は声をあげた時、

「決まってるだろ」

「理音くん、何をするの！？」

「……あれ？」

理音はニヤリと笑うと腕のなかにいるひばりのブラジャーのホックを外し、ひばりは理音のいきなりの行動に耳まで真っ赤にして本気のとーるはんまーを理音に振るい、そのうちの1発が偶然か理音の計算かわからないが美春に当たり、彼女の殺意は四散する。

第６４問（後書き）

どうも、作者です。

とうとう、理音はひばりのブラに手をかけました。ＧＡＵさんにこの件で怒られる可能性がありますが気にしない方向で……嘘です。本当にごめんなさい。

理音がひばりのブラに手をかけた理由は次回。（悪笑）

美春、通常運転に戻ったのかな？

そして、理音は相変わらず、金を持ってるのに庶民派。（爆笑）

第６５問

「な、何があったんだ？」

「……そう言う事か」

「……ヒロ、あんた、本当に頑丈ね」

美春が元に戻ったのを見て大樹は呆気に取られていると大貴は何かに気づいたのか真剣な表情をして頷くと優子は先ほど沈めたはずの大貴が復活しているのを見てため息を吐く。

「簡単な事を言えば、支倉は今まで理音が作ったとーるはんまーの性能を完全に生かしきっていなかったんだ」

「そうなのか？　前田」

大貴は苦笑いを浮かべるが終夜は意味がわからないため、ひばりに叩かれている理音に聞く。

「あぁ。俺はひばりの運動データ、重心などから弾きだした計算値から作りだしたものだが、それをひばりがダメにしていたからな」

「ふぇっ！？　ちょっと、理音くん、何をするの！？」

理音はとーるはんまーの力はこの程度ではないと言いたげに言うと終夜、大樹、優子の３人に今までひばりが抑えつけていた凶器（むね）を見せるようにひばりを３人の前に出す。

「……支倉さん、これはなんなのよ!?　あたしに対する当てつけ!?」

「ちょ、ちょっと、木下さん、や、止めて!?」

優子は目の前にさらけ出された凶器（むね）にダメージを受けておかしなスイッチが入ったようでひばりの胸を揉むと、

「……康太、お前、どこから現れたんだ?」

「……俺の嗅覚を舐めるな」

「……ムッツリーニ、それはカッコよくないからな」

どこからかデジタルカメラを持った少年『土屋康太』が現れ、シャッターが擦り切れる勢いで優子がひばりの胸を揉んでいる姿を写しており、大貴は康太の言葉にため息を吐く。

「それで、前田。この混沌はどうするつもりだ?」

「さあな。とりあえず、木下。これは俺のだ」

「違うよ!?」

終夜はこの状況をどうにかしろと理音に言うと理音は優子の手を取り、優子をひばりから引き離すとひばりは自分の胸を手で隠すような態勢になり言うが、

「ひばり、なぜ、隠す?　もったいない事をするな」

「り、理音くんのバ、バカぁぁぁ！！」

理音はひばりに隠す必要はないと言うと、ひばりは涙目になり、理音の頬をひっぱたくと教室を急いで出て行き、

「……あの。豚野郎。今の状況で美春が言って良い事かはわかりませんが、追いかけ無くてよろしいんですか？」

「あぁ。そうだな」

美春はひばりが怒った原因のなかに自分の暴走もあると薄々感づいていたようで理音にひばりを追いかけろと言うと理音はひばりを追いかけて教室を出て行く。

「えーと、いったい、どういう事？」

「……あぁ。まあ、支倉にもいろいろあってな」

優子は理音とひばりの様子に意味がわからずに首を傾げるとひばりの巨乳と認識していた大貴は苦笑いを浮かべ、

「まぁ、支倉の事は理音に任せるとして、清瀬、結局、このロールパンは何が原因で理音に向かって来たんだ？」

「誰が、ロールパンですか？　豚野郎！！」

「あん？　ロールパンにロールパンって言って何が悪いんだよ？」

大樹に美春が理音に突っかかって行った理由を聞こうとするが、大貴と美春の間には火花が散り、

「……とりあえずは、大樹、あの2人はほっておいてこうなった理由を教えてくれ」

「……あぁ」

終夜は大貴と美春を一先ず、無視して大樹に事の発端を聞く。

第６５問（後書き）

どうも、作者です。

理音、ひばりにぶたれる。（苦笑）

そして、康太、初登場？

康太の登場はこれしかないと思ってたんですよね。

怒って出て行ってしまったひばりに追う理音。仲直りはできるんでしょうか？

そして、始まる大貴対美春。

すでに教室には止める気力はありません。

第６６問

「ひばり、止まれ」

「……」

理音は教室を出てひばりを追いかけると割と直ぐに追いつき、ひばりに止まるように言うが、ひばりは理音の言葉を聞きいれる事なく、全力で走るが理音より運動神経が劣るため、理音は割と余裕そうにひばりに並走している。

「お、追いかけてこないで！？」

「すでに追いつかれてるんだ。息を切らして言うなら、止まったらどうだ？」

ひばりは走りながら、理音に追いかけてくるなと言うが、理音は冷静に言った時、

「きゃっ！？」

「いだっ！？」

ひばりはよそ見をしたせいか前を歩いていた男子生徒にぶつかる。

「……てめぇ、また、お前かよ」

「ご、ごめんさない！？」

男子生徒はひばりを睨みつけるが、男子生徒は入学式の日にひばりをぶつかった生徒でありため息を吐くと、ひばりは慌てて頭を下げるが、

「相変わらず、話しているな。やはり」

理音は相変わらず、男子生徒を日本語を話すゴリラと認識しているようで邪悪な笑みを浮かべると、

「り、理音くん、ストップ！？」

「こ、今度は気をつけるんだぞ」

ひばりは理音の様子に慌てて理音を止めるために理音に抱きつき、男子生徒は慌てて、この場所から逃げるように教室に入って行く。

「……」

「……逃げるな」

「逃げるって、あたしは悪くないよ！？」

ひばりは男子生徒が理音から逃げるのを見送った後、何事もなかったように理音から逃げ出そうとするが、理音はひばりの首をつかんでひばりを引き留める。

「まぁ、良い。ここは人目もあるし移動するか」

「……うん」

「じゃあ、屋上は……もっと人目がつかないところが良いか」

「ちょっと、理音くん、あたし、歩ける!?　歩けるから!?」

理音はひばりを捕まえて歩き出すとひばりは理音に引きずられたまま歩いて行く。

「り、理音くん、人目のつかないとこってここなの？」

「あぁ」

ひばりは理音に学園長室の前まで連れて来られて、顔を引きつらせるが。

「ばばあ。奥の部屋を借りるぞ」

「……くそじゃり、せめてノックくらいして入ってきな」

理音はひばりの様子など気にする事なく、ノックをする事もなく学園長室に入って行くとカヲルは理音の行動にため息を吐く。

「す、すいません。学園長先生!?」

「ん？　あぁ。くそじゃりの幼馴染の支倉だったね。ずいぶんと大きく……なってないね」

ひばりは慌てて理音の行動を謝るとカヲルはひばりにも以前に会っているため、昔より成長していると言おうとするが、記憶のなかにあるひばりと今のひばりがあまり変わらないようで眉間にしわを寄せるが、

「……」

ひばりは流石に目上の人であるカヲルにとーるはんまーを振り下ろすわけにも行かずに肩を落とす。

「ひばり、落ち込んでないで行くぞ」

「くそじゃり、勝手に話を決めるんじゃないよ。それで、なんでこの部屋を使うんだい？　いかがわしい事なら、他でやってくれないかい」

理音はひばりの様子を気にかける事なく、奥に行くぞと言うとカヲルは理音とひばりをからかうようにニヤニヤと笑う。

第６６問（後書き）

どうも、作者です。

ひばり、急いで教室を出て行った割には簡単に捕まる。（爆笑）

運動能力の差です。

そして、ひばりは理音が謝る前に理音のペースに巻き込まれ、引きずられます。

そして、バカテスお決まりの面倒な話は学園長室でと言う定番に……

よく考えたら、学園長室に平然と入っていくバカテスメインキャラは改めてすごいと思います。

第67問

「安心しろ。流石に妖怪が隣にいる部屋で押し倒す気はない。何より、今はいろいろとあってな」

「……」

理音はカヲルの言葉にため息を吐くとひばりは理音を睨みつけている。

「まぁ。あんたの事だ。それなりに信じてるよ。くそじゃり」

「そう思うなら、わざわざ、面倒になる事を言うな。妖怪ばばあ」

カヲルはひばりに睨みつけられて少し大人しくなっているのを見て苦笑いを浮かべると理音は悪態を吐くが、いつものキレはなく、

「行くぞ」

「う、うん」

理音はカヲルから許可も出たため、ひばりを連れて奥の部屋に2人で歩きだす。

「……あぁ。とりあえず、睨まないでくれ。俺にも言い分があるんだ」

「……何があるの？」

「……少し待て。ばばあにはしないと言ったが少し理性で抑えつけるから」

「……う、うん」

理音はひばりの視線に少し困ったように笑うが、ひばりはかなり怒っているようで頬を膨らませて理音を睨みつけているがその姿は酷く可愛く、本能に忠実な所のある理音は頭を押さえ、本能を理性で抑えつけようとするとひばりは何となく理音の言いたい事を理解出来たようで1歩下がって頷く。

「……先に言っておくが、木下姉の行動と康太の登場は予想外だからな」

「……それは何となくわかるよ」

理音はひばりが距離を取ったのを見て少し落ち着いてきたようで、最初に優子と康太の行動の事を言うとひばりはそれは理解しているようで小さく頷き、

「そうか……ひばり、悪かったな。ただ、俺の破壊力だと清水を簡単に病院送りにできるからな」

「……それは何となくわかるよ」

理音は頷くとひばりに一言謝るとひばりは理音の破壊力を理解しているせいか顔を引きつらせるが、

「でもね……」

それでも理音が自分のコンプレックスである胸を人目にさらされた事が納得できないようである。

「……なぁ、ひばり。お前はどうして、そこまで自分の容姿を嫌うんだ？」

「それは……」

理音は改めてひばりのコンプレックスを聞くとひばりは顔を伏せてしまう。

「容姿なんて人それぞれ違うんだ。気にしても仕方ないと言ったって、お前は納得しないだろ。ただな。お前が自分を否定し続けるとお前やアキに力を貰って顔をあげた本宮、お前を仲間だと思っている奴はどうしたら良いんだ？　お前は自分に自信がないから自分自身を否定しようとするがそれはお前を好きだ、大切だと言う人間を裏切っている事にはならないか？」

「……理音くんにはわからないよ」

理音の問いかけにひばりは小さな声で理音にはわからないと言うと、

「何がだ？」

「理音くんは何でもできるし、いつだって当然だ。自分にできない事はないって思ってるんでしょ！！　そんな人にあたしの気持ちなんてわからないよ！！」

理音はひばりの言葉の意味がわからないため、聞き返すとひばりは理音のような人間には自分の事はわからないと言うが、

「……なぁ、ひばり、俺はお前が思っているほど強くはないぞ。俺はたぶん、お前以上に『自分が嫌いな人間』だからな」

「……」

理音は表情を変える事なく淡々とした声で言い、その言葉は理音の真実の言葉である事が付き合いの長いひばりには理解出来たようでひばりは自分が吐き出した言葉を後悔する暇もなく、言葉を失ってしまう。

第６７問（後書き）

どうも、作者です。

いつもながら、どうして番外編やｉｆで本編の伏線を張る人間です。

（苦笑）

理音の言葉はひばりの心に響くのでしょうか？

そして、理音の中にもある闇は？

何より、本能に忠実な理音はひばりに襲いかかるのか？（爆笑）

第６８問

「理音くんが自分を嫌いってなんで？　なんで、そんな事を言うの？」

ひばりは理音が自分の胸を見世物にした事など頭からけし飛んでしまったようで理音につかみかかるように言うと、

「当たり前だろ。俺は『人殺し』だ。俺がいなければとうさんは死ななかった」

「何を言ってるの！？　おじさんが死んだのは理音くんのせいなんかじゃないよ！！」

理音は無表情のまま、自分を人殺しだと言い切るとひばりはそんな事はないと言うが、

「……事実だ。俺がいなければ、俺の頭が普通なら、とうさんは死ななかった。俺は存在してはいけないものだ」

「……」

理音の表情が変わる事はなく、理音は自分の存在を否定するとひばりの顔は青くなって行く。

「そ、そんな事を言わないで！！　なんで、そんな事を言うの？　理音くんはいなくて良いわけがないでしょ！！」

「ひばり、どうした？　俺はお前と同じ事を言ってるんだが？」

ひばりは理音の言葉に不安になったのか声を張りあげるが理音の表情は変わる事なく、『ひばりと同じ事を言っている』と言うと、

「そ、そんな事ないよ。理音くんはあたしと違って多くの人を助けてるよ。理音くんは生きてて良いんだよ。そうじゃないとおじさんが……」

ひばりは理音に向かい涙を流しながら言うと途中で理音の言いたい事が理解出来たようで言葉を詰まらせる。

「……俺のせいでとうさんは死んだ。これは俺がどう足掻いたって変えられない事実だ。俺はその事から逃げ出そうとした。あの日、俺は心を閉ざそうとした。お前やアキがいなければ死んでいただろうな」

「……いやだ。そんな事を言わないでよ」

理音は自分の過去すら冷静に分析しており、感情など全てを排除したかのような淡々とした口調で言うとひばりは涙目になり、理音の制服をつかむと、

「なぁ、ひばり、俺のなかは『後悔で溢れている』。今も昔もな。あの時に自分をもっと早く理解していていれば、とうさんは死ななかったかもしれない。今の知識があれば、とうさんの死は防げなくてもかあさんにとうさんの最後を見届けさせられたかも知れない。今だって自分にもっと力があれば多くの病気やケガで命を失っている人間も救えるかも知れない。俺は無力で何もできない人間だ。ひばりが思ってるほど、強くはないよ」

理音はそんなひばりの様子に先ほどとは違う優しげな声で言う。

「それでも、自分でもできる事があると思うから、顔を上げている……上げようと思った。とうさんが繋いでくれた命だから、お前やアキが手を放さないでくれたから、人は1人じゃそんなに強くない。1人で抱えるよりは助けてと言え、俺やアキ、瑞希や本宮。他の奴だってお前を1人にする事なんてない。だからな」

「……でも、怖いよ」

「当たり前だ。誰だって怖いんだ。お前だけじゃない」

ひばりは理音の言葉を聞いても不安だと言うが、理音はひばりの頭を撫でると不安なままで良いと言うと、

「さてと、授業はサボり決定だけど、戻るか？」

「う、うん」

すでに授業が始まっているため、理音はひばりに授業に戻るかと聞き、ひばりは気まずそうに頷き、

「なら、行くぞ」

2人で学園長室の中に戻る。

「ん？　もう、終わったのかい？」

「あぁ。邪魔したな。ばばあ」

「り、理音くん、ダメだよ!?　学園長先生、ご迷惑をかけてしまって申し訳ありません」

カヲルは2人を見て声をかけると理音の態度に慌ててひばりがカヲルに向かい頭を下げる。

「あぁ。気にしなくて良いよ。このくそじゃりの態度は今更、言っても仕方ないしね。それより、今から、教室に戻るのかい？」

「あぁ」

「それなら、2人ともあたしの仕事を手伝いな。サボりにならないように上手くやるからさ」

カヲルは理音とひばりに仕事を手伝えと言うと、

「む、無理ですよ。学校の仕事にあたしのような1学生が手伝えるわけないです!?」

「そこまで、身がまえなくて良いさね。ただの清涼祭の予算の確認だからね。どうも、最近は何か、色々と面倒になってね」

「小者が予算を使い込んでるからな。さっさと首を切れば良いだろ」

ひばりは無理だと言うが理音はカヲルの机から書類を受け取りながら、平然と言う。

第６８問（後書き）

どうも、作者です。

理音の心の中にあるものにひばりは何を思うんでしょうか？

理音が薬学や医療系に進んだのは父親の死に何もできなかった自分を恥じてですが、まだ、本編で書いてねえよ。（爆笑）

そして、清涼祭の準備期間に入ります。

1年生は召喚大会に出れないだろうし、どんな騒ぎが起こるんでしょうか？

そして、小者の運命は？

第６９問（前書き）

今回はクロさんに怒られるかも知れません。（苦笑）

第69問

「使い込みって、そんなのがわかってるのに、何もしないんですか！？」

「まぁ、言うのは簡単だけどね。うちの学校はスポンサー収入が多いからね。スポンサーが離れるような事はねぇ」

ひばりは理音の言葉に驚きの声をあげるとカヲルは文月学園は弱い立場にあると苦笑いを浮かべる。

「で、でも」

「まぁ、ばばあの言いたい事もわからない事もないな。問題が起きてスポンサーが離れるくらいなら、どうにでもできるが、問題は如月と烏丸。後はここだな」

「そう言う事さね」

ひばりはカヲルのため息に納得がいかないと言う表情をすると理音もカヲルの言いたい事は理解しているようで書類から3つの大手スポンサーを指差すとカヲルはため息を吐く。

「如月は俺や海谷がある程度、繋がりがあるから、離れる事はないと思うが、烏丸は経営権や召喚システム自体を欲しがってるからな。烏丸はまだ、欲が見えているから対応しやすいが、中立を保ちながらもこっちと烏丸の様子をうかがっているここだよな」

「ねえ。理音くん、烏丸って、烏丸くんの知り合い？」

理音は書類を見ながら何かを考え始めるとひばりは理音の言葉に出てくる烏丸と言う言葉に大貴と何か関係があるのかと聞くと、

「ん？　烏丸は大貴の実家だ」

「それなら、別に」

「あぁ。大貴は妾腹だからな。烏丸本家と折り合いが悪い上に、父親との仲も最悪も良いところだ」

理音は隠す事なく大貴と実家の関係を言い、

「そんな事、あっさりと話したらダメだよ!?　だいたい、何で、理音くんがそんな事を知ってるの!?」

ひばりは理音の言葉を聞いて声をあげる。

「ん？　初めて、大貴と静馬に会った後に調べた。それが、どうかしたか？」

「どうかしたかじゃないよ!?」

理音はひばりの驚きの声など気にする事なく言うとひばりは理音の言葉に声をあげると、

「まぁ。落ち着きなよ。2人とも、くそじゃりが言ったようにいろいろと問題があるんだよ。学園の事も家族の事もね」

カヲルは苦笑いを浮かべる。

「で、ですけど」

「……やっぱり、ここを引き込むためには1度、繋ぎを取っておく必要があるか？　しかし、目立たないようにしてるからな。まぁ、あまり関係ないか」

「理音くん、聞いてるの！？」

ひばりはカヲルの言葉に納得がいかなさそうな表情をしていると理音は何かを考えているようでぶつぶつと何か呟いており、ひばりは理音を呼ぶ。

「ん？　どうかしたか？」

「ど、どうかしたか？　じゃないよ。烏丸くんの家族の事、どうにかしないと」

理音はひばりの声に反応するとひばりは大貴のために何かしたいと言うが、

「ひばり、お前やアキの性格だ。知ると暴走しそうだからな。お前の考えもわかるが今は何もするなよ」

「ど、どうして、ダメだよ。ケンカしたままなんて」

理音はひばりを止めるとひばりはそんな事はできないと言う。

「大貴の性格じゃ、お前が突撃しても無駄だ。跳ね返されるか交わされるだけだしな」

「でも」

「キズを癒すのはきっかけも必要だけどな。時間も必要なんだ。あいつに必要なのは今は時間だ。俺の時とは違って時間があるんだ。あいつが顔をあげる時間を待ってやるのも仲間なんじゃないのか？」

「そうかな？」

理音はそう言うとひばりは納得いかなさそうな表情をしているが、

「ばばあ、ここ、借りるぞ。ひばり、これの入力してくれ」

「う、うん」

理音はひばりに簡単な仕事を渡し、自分は書類に目を通して行く。

第６９問（後書き）

どうも、作者です。

理音、悪だくみしつつも、ひばりの手綱を取ってます。

時間がかかる事もあると言うが納得がいかないひばり。

手段は違うでしょうが、理音とひばりはどのように大貴の背中を押すんでしょうか？（悪笑）

第７０問（前書き）

どうもです。

今回からあづまさんの小説『バカとテストと報告者』より、『白石沙耶』に参加していただきます。

第７０問

「……」

「ひばり、教室に入らないのか？」

「ひゃう！？　……」

カヲルの手伝いを終えて理音とひばりは教室に戻ろうとするが、ひばりは授業をサボった事に抵抗があるようで教室に入らないでいるとひばりの様子を見て、理音は後ろから声をかけるとひばりは理音の言葉に驚き、教室のドアに頭をぶつける。

「……り、理音くん、驚かさないでよ」

「ばばあの手伝いをさせられてたんだ。別に後ろめたい事はないだろ」

ひばりはぶつけた頭を押さえながら、目にうっすらと涙を浮かべて言うが、理音は気にするなと言うと、

「Ｂクラス前田理音だ。支倉ひばりと一緒に学園長の仕事を手伝わされていた。詳しくは学園長に聞いてくれ」

Ｃクラスの教室のドアを開けると当たり前のように言い、

「ひばり、俺は戻るぞ」

「う、うん」

ひばりにこれで良いだろと言うと自分の教室に戻って行く。

「す、すいません。船越先生。今、前田くんが言った通りなんですけど」

「……支倉さん。わかりましたから、早く席に着いて下さい」

「は、はい。すいません!?」

ひばりは理音がいなくなった後、改めて、授業を担当している船越教諭に頭を下げると船越教諭は少し不機嫌そうにひばりに席に着けと言い、直ぐに授業が再開される。

「お帰りなさい。ひばりちゃん」

「うぅ。緊張したよ」

ひばりは自分の席に戻ると近くの席の葵がひばりと理音の様子に苦笑いを浮かべてひばりに声をかけるとひばりはよほど恥ずかしかったようで顔を真っ赤にして顔を伏せる。

「ねえねえ。ひばりん、さっきの人、誰？　噂の彼氏さん？」

「ちがっ、違うよ!?　沙耶ちゃん!?」

ひばりの様子に近くにいた女生徒『白石　沙耶』が理音の事をひばりの彼氏かと聞くとひばりは慌てて大声で否定すると、

「……支倉さん、静かにしてください」

「す、すいません」

船越教諭は面白くなさそうにひばりを注意し、ひばりは慌てて頭を下げる。

「……沙耶ちゃん、おかしな事を言わないでよ。理音くんは幼なじみだよ」

「えー、でも、怪しいよね。葵ちゃんもそう思うよね？」

ひばりは沙耶の言葉に顔を赤くしながらも否定するが、沙耶は聞きいれる気もなく、葵に声をかけると、

「はい。ひばりちゃんと前田くんはお似合いだと思いますよ」

葵はまだ吹っ切れてはなさそうだが、理音とひばりはお似合いだと思っているようで頷く。

「ほら」

「だ、だから、ちがっ！？」

「ごほん」

沙耶は葵の言葉にニヤニヤと笑うとひばりは声を上げ、船越教諭は咳払いをし、

「……何度も、すいません」

ひばりは小さな体を一層小さくして船越教諭に謝ると、

「……まったく、あなた達は学生なんです。良いですか？」

船越教諭は何かあるのか不機嫌そうにひばりに説教を始めだそうとした時、

「船越先生、時間ですよ」

「……そうですね」

授業終了の鐘が鳴り、沙耶は船越教諭にここまでにしてくださいと言うと船越教諭は機嫌が悪そうに教室を出て行き、

「うぅぅ。船越先生を怒らせちゃったよ」

ひばりは船越教諭を怒らせてしまった事に落ち込んだように肩を落とすが、

「ひばりん、気にしちゃダメだよ。船越先生は彼氏がいるひばりんが羨ましいだけだから」

「だから、違うよ！？」

沙耶はひばりをからかうように言い、ひばりは全力で否定する。

「……ひばりちゃんも認めちゃえば良いんですけどね」

「えーと」

葵はひばりがからかわれている様子に苦笑いを浮かべると、瑞希は葵が昨夜、理音に正式にふられている事を知らない瑞希はどうしたらいいかわからないようである。

第７０問（後書き）

どうも、作者です。

ひばり、文月学園が誇るオールドミス船越教諭に目を付けられる。

（爆笑）

沙耶はＣクラスに配置しました。

Ｃクラスの女性陣は華やかですね。

第71問

「……福原先生、遅れてすいません。学園長から仕事を手伝うように指示を受けていました」

「……わかりました。席に着いてください」

理音は自分の教室のドアを開けると授業をしていた福原教諭に頭を下げると福原教諭は特に何も聞く事なく、理音に席に着くように言う。

「遅かったな。支倉は大丈夫か？」

「あぁ。落ち着いたと思う」

「何、その中途半端な答えは？」

理音が席に着くと終夜が理音にひばりの事を聞くと理音は頷くが、いつもの理音の回答とは感じが違うと思ったようで優子は理音に聞くと、

「……まぁ。いろいろとあるんだ。あいつの場合は体型だけではなく、いろいろとな」

理音には他にも考える事があるように反応がいつもと違って薄いが、

「……ん？　そう言えば、大貴はどうした？」

教室に大貴がいない事に気づく。

「……ヒロなら、清水さんと生徒指導室に引っ張られって行ったわよ」

「お前と支倉が出てって直ぐに鉄人が入ってきてな」

優子と終夜は理音の質問に大貴の居場所を話すと、

「ん？　なぜ、あいつらが捕まるんだ？」

理音は2人が西村教諭に連れて行かれた理由がわからずに首を傾げる。

「あんた達が出てって直ぐに、ヒロと清水さん、ケンカ始めちゃってね」

「何だ？　……まぁ、大貴と清水なら、わからなくもないな」

「……天敵って言葉しか当てはまらないだろうしな」

優子は大貴と美春がケンカを始めたと言うと理音は察したようで頷き、終夜がため息を吐くと、

「……本当よね」

「……木下、何かいろいろとすまない」

優子はため息を吐き、美春の行動にいたたまれなくなったのか大樹は頭を下げる。

「別に、清瀬が謝る事じゃないだろ。それで、清水は結局、何しにきたんだ？」

「あぁ。昨日、お前に発信機を貰っただろ」

「あぁ。誤作動でもしたか？」

理音は大樹は悪くないと言うと美春が自分を訪ねてきた理由を聞く。

「いや。あれは正常も正常。と言うか、性能、良すぎだ」

「なら、何かあったのか？」

「……美春と離れた時間が長かったせいか、反動がすごくてな」

大樹は美春が家に帰った後にまた、父親と揉めたと言うと、

「……それは俺は関係ないだろ？」

「……まったく、その通りなんだが、昨日はお前のおかげで、逃げ切れそうだったからな。天国から地獄に落とされた気分だったんだろう」

「……それは何て言って良いかがわからんが、あれだ。清瀬、これを渡しておく。何かあったら使え」

美春が父親と揉めた事で因縁をつけられる理由がわからないと言うと大樹は理音の言う通りだと頷くと、理音は大樹に、理音が初めて、美春の父親を沈めた麻酔銃を大樹に渡す。

「いや、流石にこれは不味いだろ」

「そうとは思えんな。清水の父親とは2度、拳を合わせたが、あの程度では３０分程度でも復活する。

「……前田、悪い。やっぱり俺に貸してくれ」

「あぁ」

大樹は最初は断るが何か考える事もあったようで、改めて、理音から麻酔銃を受け取ると、

「使い方は良いな。まぁ、引き金を引くだけだからな。特に難しい事はないだろ」

「あぁ」

理音が大樹に麻酔銃に話をしているのを見て、

「……この学園、本当に大丈夫なのかしら？」

優子は割とまともな大樹に声をかけるが理音が気にする事はない。

第７１問（後書き）

どうも、作者です。

大貴と美春、鉄人に連れて行かれる。（爆笑）

大樹、あまりの大変さに理音の武器に頼る。もう少ししたら、大樹もなれて美春を平然と引きずって歩くことでしょう。

第７２問（前書き）

今回からあづまさんの小説『バカとテストと報告者』から、『保科望』に参加していただきます。

第72問

「……悪い。『保科　望』を呼んでくれるか？」

「保科君？　保科君、えーと……噂の天才……美少女が呼んでるよ」

理音は休み時間になると目的の人間がいるAクラスに顔を出して、近くにいた女子生徒に『保科　望』と言う生徒を呼んで貰おうとすると女子生徒は何故か、理音を『美少女』と呼ぶ。

「……えーと、玉野さん、その人は男だと思うよ」

「何を言ってるの？　保科君、誰がどう見たって、美少女でしょ。だから、保科君もこの美少女と一緒にこれを着て！！」

女子生徒の呼びかけにメガネをかけた男子生徒が苦笑い浮かべながら言うと男子生徒に『玉野さん』と呼ばれた女子生徒は目を輝かせて理音と男子生徒の分の女子の制服を取り出す。

「……着ないからね」

「……」

男子生徒はため息を吐くなか。理音は女子生徒の行動に嫌悪感を持っているようでいつもは無表情な顔のこめかみにはぴくぴくと青筋が浮かんでいるが、

「そんな事を言わないで、お願い」

「……俺はそれを脱がす趣味はあっても着る趣味はない」

女子生徒はすでに自分の欲望で頭がいっぱいなようで目を輝かせて、女子の制服を手に理音との距離を縮めると、理音は己の欲望を暴露しながらも女子生徒に向けて、いつもより、素早い動きで花火を取り出し、女子生徒に向けて撃ち出す。

「ちょっと、こんなところで何をするの!?」

「……のぞみちゃん、私を助けてくれるなんて、あれだね。『女の子の友情』だね」

男子生徒は理音の突然の行動に慌てた素振りを見せながらも女子生徒を自分の元に引き寄せて、彼女を守るとその行動が彼の命取りになり、女子生徒に肩を捕まれる。

「ちがっ!?　違うから、俺は男だから!?」

「大丈夫だよ。すぐに女の子って言えるから♪」

男子生徒は女子生徒に詰め寄られているのを見て、

「……保科、悪いな。また、後にする」

「ま、待って。前田君!?　俺に用があるんだよね?」

理音はこれ以上はあの女子生徒に関わってはいけないと判断したようでそう言うと自分の教室に戻るとすると男子生徒はどうやったかわからないが女子生徒の魔の手から素早く抜け出して、理音に声をかける。

その視線には、『全力でこの場から逃げ出したい』と言う意味が込められており、

「……あぁ。場所は変えた方が良いな？」

「もちろん」

理音は男子生徒の視線に潜む意味を理解して頷くと男子生徒は頷き、2人は廊下に出ると女子生徒に捕まらないように全力で駆け出すが、

「2人とも、どこに行くの？」

女子生徒は理音と男子生徒の全力の走りに息を切らす事なく、女子の制服を手に持ったまま並走する。

「……こいつは何なんだ？」

「そうだ。自己紹介がまだだったよね。りおちゃん。私は『玉野美紀』です。それより、女子の制服が嫌なら、りおちゃんは身長もあるし、凛とした感じの美人さんだから、これとか？」

理音は女子生徒の異質さに声を漏らすと女子生徒は『玉野　美紀』と名乗ると理音に女物のスーツを薦めるが、

「……着るわけがないだろ」

「どうして？　似合うのに」

理音は眉間にしわを寄せたまま、ノーモションで花火を美紀に向か

い撃ち出そうとした時、

「理音くん、女の子相手に何をしてるの！！」

「のっぞむー！！」

理音達の様子を見て、理音にはひばりのとーるはんまーが飛び、男子生徒には沙耶が飛来して行く。

第７２問（後書き）

どうも、作者です。

理音と望にまさかの玉野さん、襲撃。（爆笑）

理音の花火から玉野さんを守った事により、望は玉野さんの獲物に確定しました。彼の学園生活に合掌。

そして、理音にはひばりのとーるはんまー、望には沙耶が飛ぶ。（爆笑）

第73問

「あれ？」

「悪いな。ひばり、今はそれを喰らってやる暇はない」

しかし、いつもひばりの手に残る理音を叩く感覚が今は手に残らず、とーるはんまーは虚しく空を切ると理音はそう言うと全力でひばりの隣をすり抜け、

「酷いよ、望、避ける事ないじゃん！？」

「避けるよ！？　人がぶつかってくる威力って凄いんだから、それに今は沙耶にかまってる暇はないんだ」

「待って。りおちゃん、のぞみちゃん♪」

男子生徒は沙耶を交わすと美紀に捕まるわけにはいかないため、理音と同様に全力で駆け抜けて行く後を、美紀は手にはコスプレ衣装を持ちながら目に怪しげな光をともして2人を追いかけて行く。

「えーと、前田くんはどうしたんでしょうか？」

「わからないです」

理音の様子に瑞希と葵が顔を引きつらせているなか、

「支倉、どうした？　理音が喰らってくれなかったのがさびしかったか？　まぁ、理音が支倉のツッコミを喰らうのは『愛』だからな」

「違うよ！？」

大貴が若干、落ち込み気味のひばりの心情を読み取り、からかうようにひばりに言うとひばりは慌てて声をあげるが、

「……支倉さん、それは肯定と変わらないわよ」

慌てるひばりの様子に優子ため息を吐きながら言う。

「……」

「ちょっと、警戒しないで、さっきはあたしが悪かったから、本当にごめんなさい」

ひばりは優子の登場に先ほど胸を揉まれたためか警戒するように瑞希と葵の後ろに隠れると優子は本当に悪い事をしたと思っていたようでひばりに頭を下げる。

「支倉、許してやってくれ。優子は見た通りない……無理！？　俺の腕はそっちには曲がらない！？」

「……烏丸、どうして、お前は余計な事を言うんだ？」

大貴はひばりに優子を許してやってくれと言うが、その言葉は一言も二言も余計であり、優子に関節技を喰らいだすとその様子に大樹はため息を吐くと、

「美春、支倉に謝りたいんだろ。隠れてないで出てこい」

「わ、わかってますわ」

自分の後ろに隠れている美春に声をかけると美春は申し訳なさそうにひばりの前に顔を出し、

「支倉さん、先ほどはご迷惑をかけてしまい。本当にごめんなさい」

「う、うん」

自分がひばりに迷惑をかけた事に頭を下げるとひばりは美春のいきなりの行動に驚きながらも頷く。

「支倉、美春も反省してるみたいだから、許してくれるか？」

「ちょっと、ヒロ！？　頭を押さえつけないでよ！？」

大樹は美春の頭を押さえつけて言うと美春は大樹の行動に不満げな声をあげるが、別に大樹に頭を押さえつけられているのを跳ねのける様子はない。

「う、うん。あたしは気にしないよ。だけど、謝るなら、あたしだけじゃなく、理音くんや他にも迷惑をかけた人に謝って」

「わかってますわ……あの」

「ほら、自分の非を詫びろ」

ひばりは美春の様子に笑顔を見せて言うと美春は大樹と優子に謝ろうとするが、大貴が余計な事を言い、

「豚野郎、ヒロや木下さんには迷惑をかけましたが、あなたのような豚野郎に迷惑をかけた覚えはありませんわ！！」

「あ？　やるのか？　ロールパン！！」

大貴と美春はガンのつけ合いを始める。

「……支倉、何か、いろいろとすまない」

「う、うん。何となく、あの2人は近づけたら行けない気がするよ」

大貴と美春の様子に大樹は申し訳なさそうにひばりに謝るとひばりは苦笑いを浮かべる。

第７３問（後書き）

どうも、作者です。

理音がひばりの突っ込みを喰らうのは『愛』です。（爆笑）

しかし、それを上回った玉野さんは最強？

そして、始まる大貴対美春。反省はありません。

第７４問

「……それで、あんた達はここで何をしにきたんだい？」

「気にするな。ばばあ」

「えーと、失礼します」

理音と男子生徒は美紀の魔の手から逃げきるために学園長室に逃げ込むとカヲルはため息を吐くが、理音は表情を変える事なく言い、男子生徒は苦笑いを浮かべながらカヲルに頭を下げると、

「だいたい。くそじゃり、あんたは学園長室をなんだと思ってるんだい？」

「ん？　そうだな。俺は要請でここに来てやってるんだから、俺用の部屋があっても良いはずだな。小者の部屋を潰すか」

カヲルは理音の態度にため息を吐くが理音は表情を変える事なく言い、

「まぁ、立ち話もなんだしな。座れ、保科」

我が物顔で来客用のソファーに座り、男子学生に座るように言う。

「えーと、どうして、俺がこんな状況になってるか、わからないんだけど」

「とぼけるだけ無駄だ。そんな事、お前だって理解しているんだろ

？」

男子生徒は自分は学園長室でどうしたら良いんだろうと少し緊張した面持ちで言うが、理音はくだらない三文芝居は止めろと言うと、

「……やれやれ。流石は前田博士、こっちの情報はバレバレか」

男子生徒は伊達メガネだったようでメガネを外すと口元を小さく緩ませ、理音の前のソファーに腰を下ろす。

「……くそじゃり、説明くらいしな」

「ん？　あぁ、こいつは『保科　望』。如水流とか言う家伝の技法を使って裏の仕事を行っている一族の1人。簡単な説明だと……『忍者』と言う言葉が妥当だな」

カヲルは理音と男子生徒の様子にため息を吐くと理音はカヲルに目の前の『保科　望』が忍者だと説明すると、

「……忍者？　このご時世にかい？」

「妖怪だっているんだ。忍者の1人や2人居たって問題ないだろ。だいたい、事実を事実と認めろ。話が進まん」

カヲルは忍者なんか今の時代にはいるはずないとため息を吐くが、理音は時間の無駄だと言いたげに言う。

「俺としては科学者である君のような人間が俺達みたいな人間の存在を知っている事に驚きなんだけどね」

「ん？　以前に、お前の一族以外の三流が研究所に忍び込んでな。海谷の爆発に巻き込まれた事があってな」

「……海谷博士の爆発事故」

望は理音が忍者に興味を持っている事が信じられないのかため息を吐くと、理音は忍者を見た時の事を言うと望もその事故の事を知っているのかため息を吐く。

「不法侵入者だからな。捕まえて、自白剤を飲ませたり、いろいろと死なない程度に実験したんだが、その中で如水流にも行きついたわけだ」

「……あんたは何をしてるんだい？」

理音は表情を変える事なく、平然と捕まえた忍者に尋問やいろいろしたと言うとカヲルは大きなため息を吐くが、

「後は情報化社会ってのはいろいろと調べ安くてな」

「……あぁ。何となく、理解した」

理音は後は簡単だったと言うと望は肩を落として言うと、

「それで、俺に何かようかい？」

何かを諦めたのか、理音に何の用だと聞く。

「用件は簡単だ。お前の雇い主と目的を言え」

「あのねぇ。そんなもの簡単に言えるわけがないでしょ」

理音は望に単刀直入に聞くと望は無理だと言う。

第７４問（後書き）

どうも、作者です。

陸の爆発に巻き込まれた三流忍者に合掌。（爆笑）

理音と望の腹の探り合いはどうなるんでしょうか？

第７５問

「そりゃそうだね」

「ご理解いただけましたか？」

カヲルは流石に理音の用件はめちゃくちゃだとため息を吐くと望は苦笑いを浮かべるが、

「なら、こちらからも交換条件を出そう。如月、烏丸両グループ、その他にも大小問わず、現在のスポンサー陣の召喚システムへの不正アクセス記録だ。お前の雇い主にも有益な情報があるかも知れないな」

「……くそじゃり、何でそんなものを持っているんだい？」

理音は望に取引を要求すると理音の切ったカードにカヲルはため息を吐く。

「……ずいぶんと派手なものを最初から持ってきたね」

「知っているか？　報酬と言うものは正当なものを出すのが礼儀だって事だ。出し渋って状況を悪くするなんて三流の小者がやる事だ。俺はお前にそれくらいの価値はあると思っているんだけどな」

「まぁ、その年でそれくらいの事を言えるとは流石と言うかなんと言うか」

望は理音の思い切った行動にため息を吐くと理音は当然の事を言わ

せるなと言い、望はそんな理音の自分の評価に苦笑いを浮かべると、

「これは独り言だ。『まったく、文月学園に潜入して動向を報告しろだけってなんだよ。依頼人は爺さんの知り合いからだから爺さんは依頼主も教えてくれなかったしな。まぁ単純に試験校としての査定が目的かな？』まぁ、今回は血や硝煙の臭いもないし、平和に過ごせれば良いな」

望は独り言だと言うと自分が文月学園にきた理由を話す。

「……なるほど。今のところはスポンサーと繋がっているかはわからないと言うわけか？」

「これは独り言だから、これ以上は何もないね」

理音は望の言葉を全面的に信じるつもりのようで呟くと望は苦笑いを浮かべ、

「そうか。受け取れ」

「悪いね。独り言に貰う報酬はないよ。それに俺としても前田博士と縁を結べた事はプラスだからね」

理音は望の前にＵＳＢメモリーを置くと望はプロとしてのこだわりもあるようで理音の報酬は過剰報酬だと言ってＵＳＢメモリーを理音の前に戻すと、

「現状で言えば、俺は文月学園の転覆や召喚システムの破壊には関係してない。爺さんからも報告さえしてくれれば割と自由にしていて良いって言われてるしね。だから、前田博士と同じように非日常

を楽しもうって思ってるんだけど」

「……そうか。悪いな。余計な事をしてしまったようだ」

望は自分や理音が文月学園にいる事は異常だと言うと不意に与えられた平和を楽しみたいと口元を緩ませ、理音は望の言葉に望は敵意があって文月学園に入って来たと疑っていた事を詫びる。

「まぁ、気にするな。それにさ。自由にやって良いって言われてるし、それなりに俺にも大切な友達が文月にきてるからさ。余程の事がない限り、おかしな事はしない。前田博士、君と同じだよ」

「……そうか」

望は理音の大切な人間の情報はすでに抑えていると言う意味を込めてくすりと笑うと理音は望の挑発にのる事なく、頷き、

「なるべくなら、保科、お前とは敵になりたくはないな」

「それは俺も同感だね」

2人で顔を合せて笑う。

第７５問（後書き）

どうも、作者です。

理音の望に対する評価は皆さんにはどう映ったでしょう？

まだ、はっきりとしない望の依頼人。どちら側かはまだ決めてません。

これで一先ず、予定していた小説家さんからのキャラとの繋がりはとれましたかね？

後はこれをどう調理するかは作者しだいですが、方向性がないため、ものすごく不安です。（爆笑）

第７６問

「あれ？　大樹に清水？」

「終夜に……えーと、この子は？」

週末になり、終夜は理音に頼んでいた翻訳機の調節のために美波を連れて理音の研究所に向かう途中、大樹と美春を見つけて声をかける。

「あぁ。美波。こっちは俺の中学からの友達の清瀬大樹と幼なじみの清水美春」

「しまだみなみです」

終夜は美波に大樹と美春を紹介すると美波はまだ使い慣れない日本語で自分の名前を名乗り、頭を下げると、

「島田　美波……お姉さま？」

美春は美波を見て、何か思う事があったようで目が輝き出す。

「……終夜、島田を連れて逃げろ」

「ん？　どうかしたのか？」

大樹はそんな美春の様子に彼女の父親と同じ気配（もの）を感じたようで終夜と美波に逃げるように言うが、終夜は意味がわからずに首を傾げた時、

「お姉さま♪」

「えっ！？」

美春は美波に飛びつこうとし、美波はいきなりの美春の行動に身体を強張らせると、

「ひばり、行け」

「う、うん。清水さん、止まって！！」

怜生の手を握った理音とひばりも研究所に行く途中だったようで理音から、ひばりに指示が飛び、ひばりは美春にとーるはんまーを振り下ろすが、

「……ジャマヲスルナ」

「やはり、解放しないと清水は止まらないか？」

「ダメだからね！？」

美春は人外化を始めだし、理音は手をわきわきと動かしながら、ひばりを見て言うとひばりは自分の胸を慌てて隠す。

「大樹、清水はどうしたんだ？」

「わからないが、今の美春はおじさんと同じ状態だ。島田がターゲットっぽい。だから、早く逃げろ！！」

終夜は意味がわからずに大樹に聞くと大樹は美春を取り押さえながら、逃げるように言うと、

「……ヒロ、ジャマヲスルナ。ミハルトオネエサマトノエイエンノアイヲジャマスルナ」

「しゅうや、にげよう」

美春は大樹に向かい禍々しい殺意（もの）を向けながら言い、美波は美春の様子に恐怖しているようで不安そうな表情で修夜の服をつかむ。

「……やはり、清水親子のＤＮＡは調べてみたいな」

「理音くん、おかしな事を言わないでよ」

理音は美春の様子に知的好奇心が湧いてきているようで呟くとひばりはジト目で理音を見るが、

「そう言うな。あれも科学的に解明できれば対応策もできるかも知れないぞ。と言う事で」

「……きゅうううぅ」

理音は楽しそうに邪悪な笑みを浮かべて、大樹と美春の近くまで行くと懐から注射器を取り出すと躊躇する事なく、美春に突き刺すと美春は大樹の腕のなかでぐったりとする。

「ま、前田！？」

「心配するな。ただの麻酔だ。しかし、父親よりは効きが良いよう

だ。やはり、研究するなら父親か？」

大樹は美春の変化に驚きの声をあげるが理音は表情を変える事なく、父親をサンプルにしたいと言いながらも注射器に付着した美春の血液を拭き取り、サンプルとして回収すると、

「清瀬、いつでも良いから、あの親父の髪でも良いから集めておいてくれるか？」

「あ、あぁ」

大樹に美春の父親のデータも解析したいと言い、大樹は顔を引きつらせながら頷く。

「……理音くん、あまりおかしな事はしないでね」

「……ムダだろ」

ひばりは顔を引きつらせながら、理音を止めるが終夜は目の前で邪悪な笑みを浮かべている理音の姿にため息を吐く。

第７６問（後書き）

どうも、作者です。

ついに出会ってしまった美春と美波。

この出会いがどんな騒ぎを起こすことになるんでしょう？

そして、美春の人外化は解放されたひばりのとーるはんまーでしか止まりません。

……解放されたとーるはんまーなら美春の父親も止まるんだろうか？

第７７問

「それで、清瀬はこんなところで何をしてるんだ？」

「……まぁ、いろいろと言いたい事もある気がするが、美春が前田にこの間の事を謝りたいって言ってたんでな。お詫びの品も持ってきたんだ。まぁ、今の騒ぎでずれちまってるかも知れないけどな」

理音は大樹と美春が自分の研究所の周辺にいる事に首を傾げると大樹はため息を吐いた後、自分の腕の中でぐったりとしている美春を抱え直して理音にケーキの入った箱を渡し、

「ん？　すまんな」

「ケーキですか？　ヒロ先生、ありがとうございます」

「どういたしまして、怜生くん」

理音は大樹に礼を言うと怜生は目を輝かせ、大樹は怜生の喜びように優しげな笑みを浮かべると、

「悪いな。美春をこのままにしておく訳にも行かないから、俺は帰るな。終夜、支倉、島田、迷惑をかけたな」

「あたしは大丈夫だよ」

「あぁ。気を付けて帰れよ」

「……」

大樹は美春を背負うと3人に頭を下げ、ひばりと終夜は気にしないと言うが、美波は終夜の背中に隠れて警戒しているようであり、大樹はそんな美波の様子に苦笑いを浮かべて美春を連れて歩き出す。

「……あの状態で帰ると清瀬は清水の父親に襲われるんじゃないか？」

「……理音くん、おかしな事を言わないで、本当に起きそうだから」

「……いや、あの父親なら確実に起きるだろ」

「「？」」

大樹と美春の様子に理音が呟くとひばりはため息を吐きながら理音に不吉な事を言うなと言うが、終夜はひばりの言葉に首を振っているそばで、怜生と美波は状況について行けないため首を傾げていると、

「まぁ、清瀬には麻酔銃を渡してあるし、大丈夫だろ」

「何を渡しているの！？」

「……支倉、今回に関しては大樹の生命の問題にもなるから、前田を許してやってくれ」

理音は大樹に身を守るための手段（もの）は渡してあると言うとひばりは理音の言葉に声をあげるが、終夜は美春の父親の攻撃力を体験した事があるようで理音の味方をする。

「で、でも、一般の人に当たったらどうするの？」

「ひばり、俺を甘く見るなよ。清瀬に渡した物は海谷の研究データを基にした誘導システムを組んである」

「何をしてるの！？」

「……大樹の幼なじみは何を作ってるんだ？」

ひばりは誤爆を心配するが理音はすでに手を打っていると邪悪な笑みを浮かべるとひばりから理音にとーるはんまーが飛び、終夜は陸の研究内容に顔を引きつらせると、

「ん？　海谷の専攻はプログラムやロボット工学と言った機械工学だ」

「……なぁ。前田、支倉を止めなくて良いのか？」

理音はひばりが自分を叩いている事などまるで気にしないと言った表情で陸の専攻分野を言い、その姿に終夜は和んできたようで苦笑いを浮かべる。

「ん？　そうだな。ひばり、そろそろ行くぞ。いつまでも遊んでいるな」

「理音くんが言う事じゃないよね！？」

理音は終夜の言葉に頷くとひばりに止めるように言い、ひばりは声をあげるが、

「怜生、行くぞ」

「はい」

理音はひばりを気にする事なく、怜生の手を引いて歩き出す。

第７８問

「へぇ、キレイにしてるんだな」

「しゅうや、そんなにミまわしタラ、しツレいよ」

終夜は理音の研究所に入ると掃除の行き届いている様子を見て感心したように言うと美波はなれない日本語で終夜をいさめるが、

「当たり前だ。研究にはチリや埃が厳禁なものもあるんだ」

研究所の主である理音は気にする様子はなく、

「俺は翻訳機を持ってくるから、清瀬のくれたケーキでも食っていてくれ。ひばり、何か飲み物出しといてくれ」

「……わかったけど、どうしてだろう。バカにされてる気しかしないんでけど」

理音は翻訳機を取りに行くと言うと懐から『ひばり専用踏み台』を取り出してひばりに渡すとひばりは納得がいかなさそうに言うが、

「お前ら、本当に仲が良いな。前田、飲み物なら、俺が淹れるからキッチン貸してくれるか？」

「ダ、ダメだよ。お客様にそんな事をして貰うわけにはいかないよ」

終夜はそんな2人の様子に苦笑いを浮かべると自分が飲み物を用意すると言い、ひばりは終夜にそんな事はさせられないと言う。

「支倉、あれか？　ここのキッチンはお前専用なのか？　それなら、遠慮するけど」

「ち、違うよ！？」

終夜はひばりをからかうように言うとひばりは声を上げ、

「なら、良いだろ。それにこっちは頼み事をしてる身だからな。一応、手土産でペパーミントリーフを家から拝借してきた」

「ペパーミントリーフ……ハーブティーか」

終夜はニヤリと笑うと持ってきていた鞄から瓶を取り出すと理音は終夜の言葉に瓶の中に入っている物が何か理解する。

「嫌いか？」

「いや、悪くないんじゃないか。ひばり、カップの場所を教えてやってくれ。確か、はちみつやレモン、ミルクも冷蔵庫に入ってるから、好きに使ってくれ」

「へぇ、はちみつもあるのか。お前が料理をするのは知ってるけど、砂糖の方が使い勝手が良いだろ」

「あぁ。怜生は砂糖よりはちみつが入った卵焼きが好きだからな」

「お兄ちゃんの卵焼き、美味しいです」

終夜は理音に聞くと理音は終夜に任せると言い、終夜は研究所にあ

るものじゃないだろと苦笑いを浮かべるが、理音は怜生のためだと言い切り、怜生は笑顔を見せる。

「……何となく、わかってたけど、前田、お前、ブラコンだよな」

「否定はしないが、秋月、お前には言われたくない。清瀬からお前のブラコンっぷりは聞いている」

「……2人ともブラコンだよ」

終夜は理音の答えに苦笑いを浮かべて理音をブラコンと言うと理音は表情を変える事なく、その言葉をそっくり返し、ひばりは理音と終夜の様子にため息を吐くが美波は話が聞きとれていないようで首を傾げている。

「それじゃあ、頼むぞ。俺はちょっと、行ってくる」

「あぁ。支倉、こっちを手伝って貰って良いか？」

「うん。キッチンはこっちだよ」

理音はひばりのため息混じりの言葉を気にする事なく、居間を出て行くと終夜はひばりにキッチンの場所を教えてくれと言うとひばりは終夜をキッチンまで案内し、

「お姉ちゃん、遊んでください」

「……」

「あ・そ・ん・で」

「うん」

怜生は理音もひばりもいなくなってしまったため、美波に遊んで欲しいと言うが、美波は最初は首を傾げるが、怜生は理音から美波の事を聞いていたようで美波に聞きやすいように一字ずつ切って言うと美波は返事をする。

第７８問（後書き）

どうも、作者です。

２人のブラコンに呆れるひばり。

しかし、この作品のひばりと明久も理音と同様に怜生を溺愛している気がしてなりません。（爆笑）

第７９問

「……こんなものか？　島田、聞きとれるか？」

「うん。ドイツごにキコえる」

理音は小さな可愛いピアスを美波の耳につけると美波は理音が話している言葉がドイツ語に聞こえているようで驚いた様子で頷く。

「……前田がピアス風に仕立ててくれた事が意外だ。と言うか、お前が作ったと思うと少しキモイ」

「秋月くんは言いすぎだと思うけど、理音くんにしては意外な形かな」

ひばりと終夜は理音の作った翻訳機の形が意外だったようで苦笑いを浮かべると、

「あぁ。流石に機械的なものじゃ、素気ないと沢渡に言われてな」

理音は翻訳機の形を美咲に相談していたようで表情を変える事なく答える。

「沢渡？」

「ん？　文月学園関連の研究所の所員だ。専攻はプログラムなんだが、最近は他にも何か勉強してみようと思って、俺の資料を見にきている奴がいるんだが、これを見て、そんな形じゃダメだとか言い始めてな」

「それって、女の子？」

理音の口から出た聞きなれない名前にひばりは首を傾げると理音は研究所に美咲が顔を出していると表情を変える事なく言い切ると、ひばりは何かを感じたのか理音に向かい聞く。

「ん？　あぁ。それがどうかしたか？」

「そう。女の子がここにきてるんだ」

「……前田、とりあえず、支倉に謝っておけ」

理音はひばりの質問に表情を変える事なく美咲は女だと言うとひばりの背中からは真っ黒なものが溢れ出し、終夜は理音にひばりに謝るように言うが、

「いや、謝る意味がわからん」

「……お前、必要なところは鈍いのな」

理音は意味がわからないと言うと終夜はため息を吐く。

「とりあえず、聞くのはこれで良いんだが、問題は話す方だな」

「できてないのか？」

「いや、マイクを通して日本語に変換したいんだが、口元にはどうしようもなくてな。一応は1番この形が無難かと思うが、少し、距離があるから拾いきれるかがわからん」

理音はペンダントの形をした翻訳機を取り出し、美波の首にかけると、

「島田、何か話して見ろ」

「う、うん……」

「おい。美波、話せって言ってるだろ。黙ってたら、わかんないだろ」

理音は美波に何か話せと言うが美波はとっさの事で何を言ったら良いかわからないようで考え込んでしまい、美波のそんな様子を見て終夜はため息を吐く。

「うるさいわよ。終夜、いきなり言われたのよ。何を言ったら良いかわからないに決まってるでしょ！！」

「ちゃんと機能してるみたいだね」

「機能はするに決まってるだろ。問題は拾えない時もあるかも知れないって事だ」

美波は終夜の言葉に少し熱くなったようで終夜を怒鳴りつけるとその言葉はしっかりと日本語で聞こえ、ひばりは感心したように頷くが、理音は問題はそこじゃないと言うと、

「まぁ、あくまで日本語を覚えるのまでの補助だから良いか」

「そうだな」

理音はこれでもどうにかなるかと言い、終夜は苦笑いを浮かべる。

「まぁ、そこは秋月の仕事だろうしな」

「理音くん、２人をからかったらダメだよ」

理音はここから先は終夜の仕事だと言うとひばりはため息を吐いた後、

「あれ？　でも、ピアスとペンダントだと校則違反で没収されない？」

文月学園に持って行って良いのかと首を傾げると、

「確かにそうね。可愛く作ってくれたけど」

「まぁ、そこはばばあに多めに見て貰えるように俺から話しては置く」

「頼めるか？」

「あぁ」

美波はひばりの言う通りと言うと理音はカヲルに話を通すと言う。

第８０問（前書き）

今回はレフェルさんに怒られます。（苦笑）

第８０問

「しかし、さっきも言った通り、その翻訳機はあくまで島田の補佐だからな。それに頼りすぎるなよ」

「う、うん。わかってるわよ」

理音は調節を終えたため、精密ドライバーなどの工具をしまいながら終夜と美波に向かい言うと美波は大きく頷き、

「なら、これもプレゼントだ。何かの足しにしろ」

「ちょっと!?　いきなり、何するのよ!?」

理音は美波が頷くのを見てくすりと笑うと懐からＵＳＢメモリを取り出し、美波が受け取れるように軽く放り投げると美波は慌てながらもそれをキャッチすると理音のいきなりの行動に声をあげるが、

「それのマニュアルと後は日常会話によく使う単語をまとめたものだ。まぁ、秋月が居ればあまり必要はないと思うがな。会話はその２つでしばらくはどうにかなるが、読み書きは自分でどうにかするしかないぞ」

「う、うん。ありがとう」

理音は美波の声に反応する事なく、会話が成り立つ事で美波がおろそかにしてしまいそうな部分を埋めるものだと言うと美波は理音の行動に驚いたようで理音に礼を言うと、

「礼を言われるような事はしてない。これは俺の趣味の延長だ。礼なら、お前のために俺や清瀬に頼み込んでいた秋月に言ってやれ」

「理音くん、ちょっと聞きたい事があるんだけど、怜生くんも」

理音は自分に礼を言う前に、終夜に礼を言うように言うと工具箱を持って居間を出て行くとひばりは終夜と美波に気を使ったようで怜生の手を引いて理音を追いかけて行く。

「えーと、終夜、ありがとう」

「あぁ。まぁ、気にするな。最初は葉月のためと思ったんだけど、美波の方が覚えが悪いからな。お前ようになっただけだからな」

美波はひばりが気を使ってくれたためか、照れくさそうに終夜に礼を言うが、終夜も照れくさいのか美波から視線を逸らし、余計な事を言うと、

「そう。それなら、お礼を言わなくても良かったわね」

美波は終夜の言葉に額に青筋を浮かべる。

「おい。美波、何を怒ってるんだ?」

「う、うるさいわよ。終夜なんかに関係ないわよ!!」

終夜は美波の様子にしまったと言う表情をすると美波をなだめようとするがその一言は逆効果であり、美波は終夜を怒鳴りつけ、

「あ……なんと言うか、あれだ。さっき言ったのはさ」

終夜は美波の様子に自分の照れ隠しの事を説明しようとすると、

「秋月、島田。いちゃつくなら余所でやってくれるか？」

「ちょっと、理音くん、どうして戻っちゃうの？　今は2人っきりに……あの。2人ともゴメンね」

工具を置いて戻ってきた理音は平然に居間に入ってきて言い、ひばりは居間の外で終夜と美波の様子を見ていたのか、理音の行動に声をあげると終夜と美波の視線はひばりに集まり、ひばりは理音の後ろに隠れて2人に謝る。

「な、な、何で見てるんだよ！？」

「そ、そうよ」

「ここは俺の研究所だ。お前達に言われる筋合いはないんだが」

終夜と美波は今までのやり取りを見られた事に顔を真っ赤にするが理音の表情は変わる事はなく、

「お兄ちゃん、ケンカですか？」

「ん？　あぁ。怜生、良いか。あれは痴話喧嘩ではなく、夫婦喧嘩と言うんだ。簡単に言えば仲が良いと言う事だ」

「そうですか。良かったです」

怜生は終夜と美波の様子に不安そうな表情をすると理音は終夜と美

波は仲が良いと怜生に教え、怜生は笑顔で終夜と美波に言うと、

「「……」」

2人は怜生の様子に何も言えなくなったようで1度、お互いを見た後、気まずそうに視線を逸らす。

第８０問（後書き）

どうも、作者です。

理音が空気を読まないのはデフォルト。（爆笑）

理音の行動にのぞき見ひばりん。バツが悪そうです。

終夜と美波はこの作品の中じゃ、普通に付き合いだす気がしてなりませんが、２人ともお互いを前にすると素直になれなさそうですから怜生や瑠衣くんに頑張ってもらおうと思ってます。

第81問

「……ん？　悪い。前田、ちょっと、用事ができた。美波はもう少しいるか？」

「終夜、どうかしたの？」

終夜と美波は翻訳機を受け取ってしばらくすると終夜の携帯電話が鳴り、終夜は用事ができたと立ち上がると美波はひばりと話して久しぶりの同年代の少女とまともに話したせいか楽しいようで不満そうに終夜に聞き返す。

「かあさんから、メールがあってな。急な仕事になったから、瑠衣の面倒を見てくれってな」

「瑠衣くんの？　それなら、私も帰るわ」

終夜は苦笑いを浮かべて家に帰ると言うと美波も立ち上がり、

「ひばり、怜生くん、前田、今日はありがとね」

「悪かったな」

「あぁ。さっきも言ったが気にするな。そうだな。秋月、恩義に思うなら、今度は弟でも連れて来てくれ」

2人は礼を言うと理音は終夜と美波が帰るのを寂しそうに見ている怜生の頭を撫でながら、終夜に言うと、

「そうだな。怜生くん、今度は瑠衣と遊びに来るな」

「はい」

終夜は怜生の表情に苦笑いを浮かべてまた来る事を怜生を約束すると怜生は嬉しそうに頷き、終夜と美波は家に帰って行く。

「さてと」

「ねえ。理音くん」

理音は終夜と美波を見送った後、やる事があるのか研究室に移動しようとするとひばりが理音を呼び、

「何だ？　俺はこれから清水の血液の分析をしないといけないから忙しいんだが」

「……本当にするつもりだったんだ」

理音は振り返り、忙しいと言うが、その内容は先ほど手に入れた美春の血液の分析であり、ひばりはため息を吐く。

「当たり前だ。あいつの父親は俺の麻酔や鎮静薬を撃ちこんでも３０分程度で回復するんだ。自分で言うのもなんだが、両薬ともになかなかの効果があるはずなのにな、それをあんな簡単に無効化されるなら、俺はそれ以上のものを作らないといけないじゃないか」

「そんな事にムキにならないで！？」

理音はひばりのため息を吐く様子を気にする事なく、純粋に自分の

知的好奇心を満たす事しか考えておらず、邪悪な笑みを浮かべるとひばりは声をあげるが、

「ひばり、お前は何か勘違いをしてないか？　これはあくまで科学の進歩だ。あの変態親父が大けがをして麻酔が必要になった時、現在の麻酔では役に立たないと困るだろ。薬は体質も関係あるからな。これは必要な事なんだ」

「それなら、そんな企んだように笑わないでよ!?」

理音は必要な事だと言い切り、しかし、ひばりは理音の表情に不安しか感じずに声をあげる。

「ん？　笑い方と言われてもな。こんな知的好奇心を満たせる貴重なサンプルがあるんだ。ん？　待てよ。清瀬が昔、海谷も清水の父親をどうにかしようとしていたと言っていたな。それなら、あいつもあいつなりの研究データを持っているのか？　……まぁ、それは後で良いか。あいつの考えを見てしまうと俺の考えも固定されてしまう恐れもあるしな。いろいろと調べた後だな」

「理音くん、いい加減にして!!　……ふえっ!?」

理音は腕を組んでぶつぶつと考え事を始めだし、ひばりは理音の様子に背中からとーるはんまーを取り出し、理音の頭に振り下ろすが、履いていたスリッパが脱げかけバランスを崩すと床に向かい前のめりに倒れそうになるが、

「……ひばり、お前は何がしたいんだ?」

「あ、ありがとう。理音くん、ゴメンね」

理音がひばりを抱きとめ、ひばりはこの距離が恥ずかしいのか顔を赤くして理音の顔を直視する事なく理音に礼を言う。

「ん？　気にするな。この感触は素晴らしいからな。なぁ、ひばり、外して良いか？」

「……理音くん、どうして、そんなにエッチなの？」

「ひばり、良いか。生物には種の保存と言うものがあってな」

「そうじゃないでしょ！！」

理音はひばりの感触を楽しんだ後、真面目な表情でひばりのブラジャーに手をかけようとするとひばりは頬を膨らませて理音を睨みつけ、理音にとーるはんまーを何度も叩きつけていると、

「……」

「……怜生くん、どうかした？」

怜生が理音とひばりの様子をじっと見ている事にひばりは気づき、怜生に声をかける。

「何でもないです。僕は居間に戻ってます」

「ちょっと、怜生くん！？　どうしたの！？」

怜生はひばりの言葉に何もないと首を振ると1人で居間に戻ろうとするため、ひばりは怜生に何かあったか聞くと、

「お母さんとアキお兄ちゃん、お姉ちゃんのお父さんがお兄ちゃんとお姉ちゃんの邪魔はしちゃけないって」

「……ふ、ふぇぇぇっっっ!!!??? ……ふしゅうぅぅぅぅ」

怜生は意味はよくわかってないようだが、理音と怜生の母親とひばりの父親、明久の3人に余計な事を吹きこまれているようで、今は邪魔しちゃいけない時だと判断し、パタパタと1人で居間に歩いて行き、ひばりはいつの間にか怜生の言葉に一瞬、固まった後、驚きの声を上げ、処理落ちをし、

「……とりあえず、運ぶか」

理音はひばりを抱きかかえると居間に移動する。

第８１問（後書き）

どうも、作者です。

ひばり、いつの間にか家族公認。（爆笑）

理音と怜生の母親は普通に応援してくれるんでしょうが、ひばりの父親は応援してくれるのかな？と疑問に思いながらも気にしない方向で……嘘です。ＧＡＵさん、許可なく書いたことをお許しください。

処理落ちひばりんを抱きかかえる理音はすでにデフォルトな気がします。

そして、終夜と美波以上にこの２人の恋愛はめんどくさいと改めて思った気がします。（苦笑）

第８２問（前書き）

今回はクロさんに怒られる可能性大です。

第８２問

「……大貴、頼みたい事があるんだ」

「理音が？　とりあえず、内容を！？」

終夜と美波が理音の研究所にきた休日から数日が経った日、理音は大貴に頼みごとがあると言うと大貴は理音の言葉に首を傾げ、頼みごとの内容を聞こうとするが、

「……ちっ、避けたか」

「理音、いきなり何をする！？」

理音は大貴の返事を待つ事なく、大貴に注射器を突き刺そうとし、大貴は理音のいきなりの行動に声を上げて注射器を交わし、理音の行動に声を上がるが、

「何？　この間、清水の血液から面白い因子を見つけてな。面白そうだから、お前で試してみようと思ったんだ」

「そんなもん、俺で試そうとするんじゃねえ！？」

理音はあまりに美春の血液が面白い研究材料だったようで邪悪な笑みを浮かべながら言うと、大貴は当然、声をあげる。

「何、お前の頑丈さなら、大丈夫だ。俺の集めたデータで言えば、清水に次ぐ頑丈さ、回復能力の高さはお前だ。ちなみに、その後、大部下に一般人がいる。まぁ、ぶっちゃけるとお前の血液サンプル

も採取して分析をさせろ」

「血液サンプル、そんなものを採らせるわけないだろ。俺は注射が大嫌いなんだからな!!　それ以上、そんな禍々しいものを持って近付いてみろ。理音、お前でも殺すぞ」

理音はすでに『いかれた科学者モード』に入っており、大貴の叫び声など気にする事なく、両手に注射器を持ち、楽しそうに笑うと大貴は余程、注射が嫌いなようで理音に小烏丸の切っ先?を向けて言う。

「……本当にあの2人は友達なのかしら」

「たかだか、卵1パックの友情だしな」

「……あぁ。なんかすまん。今回も元はと言えば原因は美春だ」

理音と大貴の様子に優子はため息を吐くと終夜は苦笑いを浮かべ、大樹は申し訳なさそうに謝る。

「……大樹、お前が謝る必要はないだろ。特に今回は前田の暴走だし」

「そうよ。清瀬くんも自分に関係ないところで謝らなくても良いでしょ」

「だけどな。話を聞く限り、あれは美春の人外化を研究した結果だろうからな」

終夜と優子は大樹に謝る必要はないと言うが、理音の注射器の中の

液体は毒々しい色をしており、大樹はため息を吐くと、

「その年で注射が嫌いだと？　良いか？　男は誰もが立派な注射器を持っているんだ。それなのにそれを否定するなど、お前は不能か？」

「何を言ってる！！　俺のビッグマグナムは……止めろ！？　優子、俺の関節はそっちには曲がらない！！！？？？」

「あんたはこんなところで何を言い始めるのよ」

理音は大貴の注射が嫌いと言う言葉に理音は眉間にしわを寄せて大貴に不能かと言うとその言葉は大貴に火を点け、いろいろと規制が入る言葉を叫ぼうとした時、優子が大貴の腕を絞め上げる。

「木下姉、大貴の注射器はどうだったんだ？」

「知らないわよ！！　そんなもの！！」

「そうか？　静馬から、木下姉が大貴の家に遊びにきていると聞いたから、既成事実があるとは思ったんだが」

理音は表情を変える事なく、優子に大貴との関係を聞くと優子は全力で否定すると、

「冗談だ。お前らは経験者の匂いがしない」

「……前田、わかるのか？」

「ん？　わかるだろ」

「……いや、わからないから」

理音は表情を変える事なく冗談だと言うが、その冗談は笑えない。

第８２問（後書き）

どうも、作者です。

理音が発見した美春の血液に隠されたものはどんな騒ぎを起こすんでしょうか？

そして、どこでつながったか、理音と静馬。大貴と優子は話の裏で進展しているのか？

第８３問

「まぁ、わからないなら、別にどうでも良いか？　それより、今はこれのデータ採取の方が重要だ」

「おい。前田！？」

理音は自分の研究を重要視しているようで優子の関節技で落とされた大貴に何の躊躇もする事なく、注射を突き刺し、怪しげな薬は大貴の身体に吸い込まれて行き、終夜は驚きの声を上げるが、

「さて、どんな変化が起きるだろうな」

理音は楽しそうに笑っている。

「ぐぐぐぐうっぐうっぐぐうう」

「ちょ、ちょっと、ヒロ、大丈夫？」

しばらくの沈黙が続いた後、大貴は唸り声を上げ始め、苦しそうに胸をかきむしり優子は心配そうに大貴の顔を覗き込むと、

「……なぁ、前田、今更かも知れないけどな。美春の血液から何を見つけたんだ？」

「ん？　別に死ぬ、死なないの問題じゃない。ただ、理性のタガが外れやすくなるのと攻撃対象に選ばれた生物が委縮する場合があると言うデータが取れてる」

大樹は薬にどんな影響があるか聞くと理音は邪悪な笑みを浮かべて楽しそうに言うが、

「……なぁ。前田、それって、俺が思うに木下が危険なんじゃないか？」

終夜は何かに気づいたようで顔を引きつらせる。

「ユウコ」

「ヒロ、大丈夫なのね」

大貴は優子の名前を呼び、優子は安心したようでほっと胸を撫で下ろすが、大貴の様子はどこかおかしく、背後には黒く禍々しいものが溢れ出ている。

「……ほう。予想通りだな」

「……なぁ。前田、予想通りって事は木下が襲われる事が前提って事か？」

理音の邪悪な笑みに終夜は顔を引きつらせたまま聞き、

「ん？　別にあの2人なら問題ないだろ」

理音が表情を変える事なく言い切った時、

「ユウコ」

「ちょっと、ヒロ、どうしたのよ!?　前田、ヒロはどうしたのよ

！？」

大貴が優子を押し倒し、優子の制服に手をかけようとし、優子は何とか大貴を押さえて理音にどうにかしろと叫ぶ。

「ん？　木下姉は委縮は無しか？　まぁ、実際は2人っきりで大貴に迫られたらそのまま一線を超えそうだからな」

「そうだな。よく考えたら、別に被害はないな」

「問題大ありよ！？　誰か助けてよ！？」

理音は優子が叫んで拒絶する意味がわからないと首を傾げると終夜も言われれば別に問題はないと頷くと優子は当然、叫び声を上げてクラスメート達に助けを求めるが、

『別にちょっと早く進展するだけだよな』

『あれだけいちゃついてるんだ。変わらないだろ』

『でも、いくら、2人がお似合いだと言っても教室じゃ不味いわよ』

すでに大貴と優子はすでにクラスの中ですでに公認カップル扱いされているようである。

「前田、いくらなんでも教室じゃ不味いから、止めてくれ」

「そうだな。委縮は恋愛感情が一方的だと怒るようだしな。まぁ、良いだろ」

「……前田、それで止める気なのか？」

大樹は流石に限界だろと理音に言うと理音は頷き、懐からスリッパを取り出し、終夜はため息を吐くが、

「正気に戻れ」

理音は躊躇する事なくスリッパで大貴の頭を叩き、教室には小気味の良い音が響く。

「理音、お前、何するんだよ！？　前振りもなく後ろからスリッパでしばかれたってリアクションできないだろ！！」

「……戻るのかよ」

「あのスリッパも支倉のピコハンと同じ能力があるんだな」

大貴は理音のいきなりの行動にいつものように声を上げると大貴が正気に戻ったのを見て、終夜と大樹はため息を吐き、

「た、助かったわ」

優子は大貴に脱がされかけた制服を元に戻しながら安堵のため息を吐く。

第８３問（後書き）

どうも、作者です。

大貴、人外化。（爆笑）

大貴と優子はいつの間にかクラス公認。ＦＦ団がないから追いかけっこは『まだ』存在しません。

そして、理音のスリッパは混乱解除の属性があるのか？

名前はまだない。

第８４問

「おい。理音！！　今のはなんだ？」

「何だと言われると見てわからないのか。スリッパだ」

「それじゃねえ！！」

大貴は理音につかみかかり、理音に言うと理音はため息を吐く。

「そうよ！！　前田、あんな危険なものを作って何が楽しいのよ！！」

「……普通、怒るよな」

優子も大貴と同じように理音に詰めより、終夜はその様子にため息を吐き、

「待て。木下姉、確かに、あの薬はあくまで俺の趣味だが、薬の効果時間くらいは理解しているつもりだが」

「……なぁ、烏丸、どこに行く気だ？」

「いや、別に何も」

理音は表情を変える事なく何かを話しだそうとすると大貴は理音から手を放し、どこかに逃げだそうとするのを見て終夜が大貴に声をかけると大貴は視線を逸らす。

「前田、何かあったのか？」

「ん？　流石に清水親子ほど長時間の人外化はなれない人間には細胞単位で不調をきたす事も考えられるからな。ラットでの実験からの計算値ではあるが、最初の投薬では５分程度しか効果はないはずだ」

大樹は大貴の様子に何かを感じ取ったようで理音に聞くと理音は表情を変える事なく答えると、

「……前田、それってどういう事？」

「簡単に言うとな。途中からは大貴が自分で木下姉の制服を脱がそうとしていたわけだ」

「清瀬、秋月、放せ！？　このままだと俺の命が危ない！！」

優子は理音の言葉に何か気付いたようで理音に聞き返し、理音は平然と優子の制服に手をかけていたのは大貴の意思だと言い切ると大貴は自分の命の危険を察し、全力で逃げだそうとするが、騒ぎに巻き込まれていた終夜や大樹が大貴を許すわけはなく、がっちりと大貴の肩をつかむ。

「……ヒロ、詳しい話を聞かせてくれるかしら？」

「待て。薬には相性があって、俺の場合は薬が効き過ぎただけであって」

「大貴、何を言っている。この薬は俺がお前で実験するために作ったんだ。言わば、お前専用だ。効果時間の誤差があったとしても１

0秒から30秒と言ったところだ」

優子は笑顔で逃げ出そうとしている大貴の肩をつかんで聞くと大貴は理音の薬に全責任を押しつけようとするが、理音は表情を変える事なく、自分の計算に間違えはないと言い切る。

「まぁ、烏丸の態度を見ればどちらが嘘を吐いてるかは明らかだな」

「そうね。ヒロ、覚悟は良いかしら？」

終夜は理音と大貴を見比べてため息を吐くと優子も同じ意見のようで笑顔で大貴の腕をつかみ、

「待て。優子、話し合おう。暴力は何も生まないって事を話し合おうじゃないか!?」

「制服を脱がしてか？」

「リオ、何を言ってる!!　制服は半脱ぎだからこそ良いんだ!!」

大貴は優子に話し合いで解決しようと言うが、理音はぼそりと呟くと大貴はその呟きに反応して叫ぶ。

『だから、制服がはだけるだけだったのね』

『……烏丸君、最低』

大貴の叫び声にクラスの女子生徒達は大貴に冷たい視線を向けるが、

『よく言った。烏丸!!』

『お前はやっぱり同志だ！！』

男子生徒からは賛美の声が響き、

「……これは何なんだろうな？」

「……さあな」

終夜と大樹は異常な教室の盛り上がりにため息を吐くと、

「ヒロ、覚悟は良いわね？」

「ま、待て。優子！？　俺の関節はそっちには曲がらない！！」

大貴は優子にお仕置きの関節技をかけられ、教室には大貴の悲鳴が響くなか、

「まぁ、目的の大貴の血液も手に入ったしな。これで、また面白いものができそうだ」

理音は邪悪な笑みを浮かべながら、手に入れた大貴の血液サンプルを大事そうにしまう。

第85問

「……やはりな。……の因…は…春因…を無効化……。あの2人は……レベルで……だと言う事か？」

「……前田、机の上で怪しいものを培養しないでくれない」

理音が授業中に机の上で怪しげな器具を取り出してぶつぶつと言いながら怪しげな実験を始めていると優子がため息を吐きながら理音に止めろと言うが、

「……別にかまわないだろ。だいたい、俺が授業を受ける意味がわからん。そこのスペル間違っているぞ」

『ほ、本当ですね。前田くん、ありがとうございます』

理音は授業には全く興味がなさそうに言いながらも、授業はしっかりと聞いているようで板書の間違いを指摘すると教師は慌てて板書を直す。

「……そうじゃないでしょ」

「他に何がある？　ばばあの気まぐれで俺はすでに終わらせた授業を受けているんだ」

優子は平然と教師の間違いを指摘する姿に優子はため息を吐くが理音が気にする訳もなく、実験を続けようとすると、

「だとしても、あんたが教室内で怪しい実験を始めるとあたし達が

気になって集中できないのよ」

優子は近くで行われる理音の怪しげな実験が気になって授業に集中できないと言う。

「ふむ。そうか。そうなるとやはり、ばばあに話をするべきだな」

「えっ!?　ちょっと、前田!?」

理音は優子の言葉に頷くと立ち上がり、教室を出て行こうとし、優子は理音を呼ぶが、

『前田くん、今は授業中ですよ』

「ちょっと、学園長もとい妖怪ばばあ長のところに行ってくる。まぁ、俺の事は気にしないでくれ」

理音は優子や教師の言葉など気にせずに教室を出て行くと教室は理音の当然の行動にしばらく、空気が止まる。

「ばばあ、いるか?」

「……くそじゃり、今日は何の用だい?」

「ばばあ、この間も言ったが、俺用の研究室を寄こせ。やはり、俺には授業を受ける意味を感じられない」

理音は教室を出た後、学園長室に向かうとカヲルに向かい学園に研究室を寄こせと言う。

「召喚システムの解析なら、あんた特製のノートパソコンでできるじゃないかい？　授業中にそれをやる事は教師陣には見逃すように言ってあるよ」

「それはそれでやるが、今は面白いものを見つけてな。実用できればそれなりに役に立ちそうなんでな。薬の完成は1分、1秒でも早いにこした事はない。つまらない授業を受けているよりはよほど、社会の役に立つ」

カヲルはため息を吐くが、理音には理音なりに考える事があるようで意見を変える気はなく、

「まぁ、あんたの性格上、こうなるのも予想が付いてたからねぇ。準備はしてあるけど、あまり、おかしな実験はするんじゃないよ、間違っても人体実験とかはなしだよ」

「あぁ。投薬する人間は選ぶから問題ない」

「……まず、投薬実験を無許可でやるのは止めな」

カヲルは予想が付いていたとため息を吐くと引き出しからカギを取り出し理音に投げると理音はカギをなんなくつかみ問題発言をした後、カヲルはため息を吐いて理音に言うが、理音はカヲルの言葉に返事をする事なく学園長室を出て行く。

第８６問

「理音くん、いる？」

「支倉さん？　前田なら学園長先生のところに行くって言って授業中に出て行ったわよ」

休み時間になり、ひばりは理音に用があったのか、Ｂクラスの教室に顔を出すと教室の空気は理音の名前に少し悪くなり、ひばりが居心地の悪さを感じた時、優子がひばりに声をかける。

「……木下さん、また、理音くんが何かしたの？」

「何かしたと言われるとね……」

ひばりは優子に理音が何かしたのかと聞くと優子はため息を吐き、理音がこの程度の授業と言った事がクラスメートは気に入らないようだと話し、

「理音くん、どうして、わざわざケンカを売るように言うのかな？」

ひばりはその時の光景が目に浮かんだようでため息を吐くと、

「まぁ、何か考え付いたみたいだったからな。すぐに行動に移したかったんじゃないか？」

「大樹はずいぶんと前田に好意的だよな」

大樹は理音の味方をするような発言をすると終夜も大樹と同じ意見

のようで苦笑いを浮かべる。

「そりゃあな。俺も前田みたいな人間をよく知ってるからな。それに怜生くんや支倉といるところを見てるとな。そう言う終夜はどうしてだ？」

「まぁ、美波の事もあるし、瑠衣も怜生くんと一緒になって遊んでくれるから前田にも世話になってるからな。確かに周りが見えなくなる事はあるみたいだけど悪い奴じゃない」

大樹は昔の陸の様子と今の理音が重なっているようで苦笑いを浮かべて終夜に理音の味方をする理由を聞くと終夜は苦笑いを浮かべたまま答え、

「清瀬くん、秋月くん、ありがとう」

ひばりは終夜と大樹の言葉にお礼を言うと、

「別にあたしだって、前田が悪い奴じゃないってわかってるわよ。ただ、あたし達が必死にやってる事をあいつは平然とやって行くでしょ。たぶん、それが悔しいだけよ」

「優子は素直じゃないから、支倉、許してやってくれ。ちなみに俺は恨みも忘れないが恩も忘れない男だ。卵の恩は忘れていない」

優子は少し頬を膨らませ、大貴は優子をからかうようにひばりに言う。

「……結構、卵は高かったみたいだな」

「そうみたいだな。それが良品か粗悪品かわからないけどな」

終夜と大樹は大貴の言葉に苦笑いを浮かべていると、

「失礼な。俺ほどの良品はないぞ」

「……怪しいわね」

大貴は自分が良品だと言い切るが、優子は先ほどの件もあるのかジト目で大貴を睨みつける。

「えーと、理音くん、他にも何かしたの？」

「あぁ。まぁな。美春の血液から何か発見したみたいで、烏丸で実験したんだけどな」

大貴と優子の様子にひばりはため息を吐きながら聞くと大樹は苦笑いを浮かべながら言うと、

「烏丸くん、大丈夫なの!?　変な副作用とかってないの!?」

「支倉、落ち着け。副作用も何もないから」

「だけど、今はなくたって……ふぇっ!?　止めて。烏丸くん、頭撫でないで!!」

ひばりは慌てて大貴に体調がおかしくなってないかと聞き、大貴はひばりの慌てように少し驚きながらも何もないと言うが、ひばりは心配そうに大貴の顔を覗き込むと大貴はひばりに心配いらないと言いたいのか彼女の頭を撫でまわす。

「烏丸、あんまり、支倉の頭を撫でるなよ」

「縮むからか？」

「縮まないよ！？」

終夜は大貴とひばりの様子にため息を吐くと大貴はひばりをからかうように言い、ひばりが声を上げる。

「支倉が縮むかどうかはわからないが、そんな事をしてると前田から、花火が飛んできそうだからな」

「流石にないでしょ」

大樹は理音が大貴を狙っている可能性があると言うと優子はため息を吐くが、

「……確かに飛んできそうだ。支倉は理音に愛されてるからな」

「だろ」

「変な事で納得しないで！？」

大貴は顔を引きつらせながらひばりから手を放し、ひばりは顔を真っ赤にして大貴の言葉を否定する。

第87問

「……保科、何かあったか？」

「……いや、ちょっと避難を」

理音はカヲルから文月学園に用意されていた研究室で研究の準備を始めていると望が入ってきて身を隠そうとする。

「……玉野か？」

「……あぁ」

望の言葉に理音は今、何が起きているか理解したようで美紀の名前を出すと望は頷き、理音は直ぐにドアにカギをかけると、

「のぞみちゃん、隠れてないで出てきて。のぞみちゃんに似合う服をたくさん用意してきたの」

望を探して廊下を爆走している美紀の声が聞こえる。

「……助かったよ。前田博士」

「ん？　あぁ、玉野の件に関しては俺も他人事じゃないからな」

望は安心したようなため息を吐くと理音も美紀には関わり合いたくないようでそう言うと、

「ビーカーじゃなくて悪いが、コーヒーでも飲むか？」

「……いや、ビーカーである必要はないから」

「ん？　学校で飲むコーヒーはビーカーだと世界で決まっているルールだと教授に聞いたんだがな」

「……前田博士、その教授の教えは間違えているから」

当然のように望にマグカップに淹れたコーヒーを差し出し、望は苦笑いを浮かべながらも理音からコーヒーを受け取る。

「前田博士はここで何か始めるのか？」

「ん？　あぁ、少し面白い研究材料を見つけてな。早めに分析してみたいと思ってな。本格的なものは自分の研究所でするが、学園にいる時間も無駄にしたくないんでな」

「そんな事を俺に簡単に言っても良いのか？　俺はその情報を売るかも知れないぞ」

研究室の様子に望は首を傾げて聞くと理音は何も隠す気もないようでコーヒーを飲み干すと時間が惜しいのか研究の準備を再開し、望はそんな理音を挑発するように笑うが、

「ん？　必要ないだろ。俺の専攻は薬学だからな。俺の研究を盗んだ奴がいようとそいつがその研究をして、俺と違う結論に達して何かができればそれはそれで誰かの役に立つ。面白い研究材料を見つけて独占するなど無駄な労力でしかない」

「……流石は前田博士だ」

理音の表情は変わる事なく研究が盗まれても大きな問題ではないと言い切り、望は完全に負けたと言いたげに苦笑いを浮かべる。

「保科、言ってる意味がわからんぞ。それと博士と呼ぶな。今は1学生らしいからな」

「……1学生は学園の一室を私有化して研究とかはしないからね」

理音は望の苦笑いの意味がわからないと言うと自分はただの学生だと言うが望はため息を吐く。

「意味がわからん。学生だろうと研究者だろうと興味がある物は調べないといけないだろ。ただ、講義を受けただけのものが何の役に立つ」

「日本の学校じゃ出てこない言葉だよ」

「ん？　そうか」

理音は自分はおかしな事はしていないと言うと望は理音の考えは海外にいたからだと言うが理音は意味がわらならないようで首を傾げ、

「わからないなら良いよ。コーヒーごちそうさま。理音」

「ん？」

「博士は入らないんだろ。それとも問題あるかい？」

「いや、別にかまわん」

望はやはり世間からずれている理音の様子に苦笑いを浮かべると理音にコーヒーの礼を言って研究室を出て行くが、

「のぞみちゃん、見つけた♪」

「た、玉野さん!?」

理音と話をしていたせいで警戒を緩めてしまっていたようで美紀に見つかったようであり、

「……あいつ、どこか抜けているな」

理音は廊下から聞こえる声にくすりと笑い、研究の準備を続ける。

第８８問

「戻ってきたら、支倉が探してたって伝えとく」

「うん。ありがとう。秋月くん」

ひばりは理音が戻ってこないため、学園長室に行こうとも考えたが流石に行く勇気は持てなかったようで自分の教室に戻ろうと廊下に出た時、

「待って。のぞみちゃん♪」

「待たないよ！？　待ってたまるかぁ！！！？？？」

美紀に追いかけられている望がこちらに向かって爆走してくる。

「支倉、出番だ」

「む、無理だよ。知らない人を叩くわけにはいかないよ」

美紀の暴走姿に終夜はひばりにとーるはんまーでしばき倒せと言うと、ひばりは知らない人には叩けないと言うが、

「……支倉、俺は初対面の時からしばき倒されてたんだけど」

「ヒロ、あんたの場合は自業自得でしょ」

ひばりや理音と初めて会った日にひばりにしばき倒された大貴は不服そうに言い、優子は大貴が全面的に悪いからだと決めつけている

ようでため息を吐く。

「待って。のぞみちゃん♪　私、のぞみちゃんにもりおちゃんにも似合う服をいっぱい用意してるの♪」

「俺も理音も女物の服を着る趣味はないから!?」

「……支倉、２人とも関係者みたいだぞ」

「……前田の周りっておかしい人しか集まらないのかしら」

望と美紀が理音の名前を出すと大樹はため息を吐いて言い、優子は頭が痛くなってきたのか頭を押さえると、

「そうみたいだけど、良いのかな?」

「あれ?　ひばり、何してるの?」

ひばりが顔を引きつらせた時、明久がひばりを見つけて声をかけ、

「アキくん……ねえ、アキくん、どうして、また玲さんの制服を着てるの?」

「ちがっ!?　ひばり、違うんだ!?　昨日は久しぶりに期待の新作を買ったからであって、今はちゃんと１１時半には寝るようにしてるんだ。今日はたまたまなんだよ!?　だから、姉さんにだけは」

ひばりが明久の方を向くと明久は何故かまた『玲のセーラー服』を着て登校してきており、明久は姉の玲に連絡される事は避けたいようで慌ててひばりに弁明するが、

「……吉井、支倉が呆れてるのはそこじゃないと思うぞ」

「……そうね」

終夜と優子は明久の姿にため息を吐く。

「……アキくん？　……アキちゃん？」

「止まった？」

そんななか、望を追いかけていた美紀が明久を見て衝撃を受けたようで望を追いかけるのを止め、望は美紀の様子に呆気に取られた時、

「アキちゃん、かわいい♪　これを、これを着てぇぇぇ！！！！」

「えっ！？　ちょっと、この人、何！？」

美紀は望に着せようとしていた服を手に明久に襲い掛かり、明久のセーラー服に手をかけようとし、明久は美紀の突然の行動に声を上げ、何とか美紀の魔の手から逃れようとしている。

「……支倉さん、どうやら、関係持っちゃったみたいよ」

「……そうだね」

優子は明久に襲い掛かる美紀の様子にため息を吐きながらひばりに声をかけるとひばりは顔を引きつらせながら頷き、

「えーと、止まるかな？」

「よく考えると、通常版で止まるのって前田だけだよな」

「何なら、俺が解放して……嘘です！？」

ひばりは背中からとーるはんまーを取り出すが、あまり役に立ってないのを感じているようで首を傾げると大貴が手をわきわきさせながらひばりに言った時、どこからともなく、花火が飛んできて大貴の耳を掠めて行き、大貴は花火が飛んできた方向に向かい謝るがそこには理音は立っておらず、

「……陸、特製の誘導システムか？」

「……凄いな。海谷って奴も前田も」

終夜と大樹は顔を引きつらせる。

第８８問（後書き）

どうも、作者です。

美紀、運命の出会い。（大爆笑）

本当は前回、理音と望が追いかけまわされた時にアキちゃんとの遭遇にしようと思ったんですが、何かが足りないと思ってあとに回しました。

花火も同じです。ひばりの頭を撫でたところで理音は何もしませんが、ひばりの胸は理音の所有物なので、それに手を出そうとしたら、攻撃対象です。嘘です。すいません。ＧＡＵさん、勝手なことを言いました。許してください。

アキちゃんのおかげで助かった望に人間ロケット（さや）は飛んでくるのか？

そして……。（悪笑）

第89問

「……助かった」

「のっぞむー！！」

「沙耶ちゃん！？」

望が美紀の魔の手から脱し、安堵のため息を漏らした時、沙耶が望に向けて飛来するが、

「……避けるんだな」

「……そうね」

望は沙耶を交わし、沙耶は顔面から床に落ち、大樹と優子は目の前に行われたやり取りに顔を引きつらせていると、

「ふえええん！！　酷いよ。望」

「いや、だって危ないし」

「沙耶ちゃん、大丈夫？」

沙耶は望が自分を避けた事に不満だと言うが望は苦笑いを浮かべ、ひばりは慌てて沙耶に駆け寄り、

「酷いよ。沙耶ちゃんの鼻の頭少しすり向けてるよ」

「まぁ、待て。支倉、避ける方も悪いが突撃する方も悪い」

「……小さな子供でも突撃してくると結構な衝撃だしな」

ポケットから絆創膏を取り出し、沙耶の鼻に貼ると望を非難するような視線を向けるのを終夜が止め、大樹は園児の相手をしているせいもあるのか終夜の意見に同意する。

「で、でも」

「……支倉、あれは痛いんだ。背骨が折れるかと思うんだぞ。前田が支倉を受け止めるような愛がなければ無理だ」

「違うよ！？　それにあたしは突撃しないよ！？」

ひばりは終夜と大樹が反対意見を出した事に驚きが隠せないようであり、終夜にどうしてと言いたげな視線を向けると終夜は理音とひばりじゃないと無理だと言うが、ひばりは顔を真っ赤にして否定すると、

「秋月くんもあんな突撃を受けた事があるの？」

「あぁ。葉月……幼なじみの小学生の妹が突撃してくるんだ。俺の場合は頭がちょうどみぞおちにくる高さでな」

優子は苦笑いを浮かべて終夜に聞き、終夜はその突撃を思い出しているのは腹を擦りながら答える。

「そうだよね。小学生でもそれなんだから、全長約１６５ｃｍ、体重およそ５０ｋｇの物体が高速で飛んでくるんだよ。避けないと危

ないよ」

「ちょっと!?　そこで話し込んでないで、助けてよ!?」

望は終夜と大樹が同意してくれた事に苦笑いを浮かべたまま頷くと美紀の魔の手から必死に逃げている明久が助けを求めると、

「アキくん、今助けるね」

ひばりが美紀に向けてとーるはんまーを振り下ろすが、

「アキちゃん、アキちゃん、これを着てぇぇぇ!!!!」

「止まらないな。支倉、これを使ってみるか?」

美紀が止まる事はなく、ひばりは落ち込んでいるのか彼女のポニーテールは少し下がっているように見え、大貴は苦笑いを浮かべながらハリセン『小烏丸』を取り出し、彼女の前に差し出すと、

「良いの?」

「混乱解除は俺の攻撃属性じゃない。出来るとしたら支倉だけだ。とーるはんまーがリミッター解除できないなら、小烏丸の方が性能は良いはずだ」

「……ヒロ、相変わらず、どこからそれを出してるのよ」

「えーと、どこから突っ込めば良いのかな?」

ひばりは遠慮がちに小烏丸に手を伸ばし、大貴は真剣な表情をする

と2人の様子に優子はため息を吐き、望は引きつった笑みを浮かべる。

「それじゃあ。烏丸くん、借りるね」

「あれ？　烏丸？　……ヒロ？」

ひばりが大貴から小烏丸を借り入れるのを見て、望は何か引っかかっているのか首を傾げると、

「止まって……」

「烏丸大貴！！」

「ふぇっ！？」

ひばりは美紀に小烏丸を振り下そうとした時、望が大貴の名前を呼び、ひばりはその声に驚いたようで小烏丸のフリはぶれ、

「いだっ！？」

「アキくん！？　大丈夫！？」

小烏丸は美紀の頭をかすめた後、明久の顔面に直撃する。

第８９問（後書き）

どうも、作者です。

望が沙耶を避けることに葉月の突撃を受ける終夜と園児の突撃にいつもさらされてる大樹は味方する。まあ、この２人は避けませんけどね。

望と大貴の関係は以前、クロさんが書かれたものを参考にしています。

よろしければ、クロさんのバカとテストと召喚獣～文月学園のカラス～カラスと報告者をお読みください。

そして、軌道はずれ、明久に小烏丸が直撃、気を失った明久は美紀の手にかかり。（爆笑）

第９０問

「アキちゃん、さぁ、お着替えしようね♪」

「いや、いやだぁぁぁ！！！？？？」

明久が小烏丸を受けたため、美紀の手は明久の手をすり抜け、明久が叫び声をあげた時、

「そこまで」

「って、おい。大樹！？」

大樹は何を思ったのか理音から預かっている麻酔銃で美紀を撃ち抜き、大樹の突然の行動に終夜は驚きの声を上げる。

「ふ、ふにゃあぁぁぁ」

「た、助かったの？」

美紀は麻酔銃を撃ちこまれて目がとろーんとし寝息を立て始めると明久は安堵のため息を漏らすが、

「き、清瀬くん、突然、何をするの！？」

「いや、流石に不味いとは思ったけど、吉井の方が明らかに被害者だしな。それになんか他人を見てる気がしなくてな」

「……清水と重なったか？」

「……いや、襲われかけた立場から言えば適切な判断だと思うよ」

ひばりは大樹のいきなりの行動に驚きの声を上げると大樹は美紀の暴走が美春の暴走と重なったようで遠くを見つめて言うと終夜は苦笑いを浮かべながら頷き、望は疲れたようなため息を吐くと、

「えーと、俺の名前、呼んだけど誰だ？」

大貴は望に心当たりが無いようで首を傾げる。

「そうか。もう3年も前だし、覚えてないかな。俺は保科望だよ」

「保科？　望？　……保科望！！　如水流の保科望」

望は大貴と会ったのが3年も前だから仕方ないかと苦笑いを浮かべると大貴は少し考え、望の事を思い出したようで驚きの声を上げる。

「ヒロ、この人、知り合いなの？」

「あぁ、保科のじいさんは日野鉄山先生って言って如水流って言う古武術の先生でなとウチのくそジジイが昔からの知り合いで、他流試合をした事があってな」

優子は大貴の様子に望の事を聞くと大貴は懐かしい顔との再会を喜んでいるのか少し興奮気味に言うと、

「俺ももしかしたら、文月でなら再会できるかな？　とは思ってたけど、本当に再会できるとは思ってなかったよ」

「ここでなら？」

望は笑顔で大貴との再会を喜ぶがひばりは望の言葉に首を傾げる。

「何でもない」

「あぁ、ごめん、何もないよ」

大貴はひばりの疑問と望の言葉にいつもとは違う無機質な声を上げると望は何かを理解したようで苦笑いを浮かべると、

「えーと、沙耶ちゃん、この人が保科くん？」

「うん。望だよ。望は私の運命の恋人だよ」

「……違うから、幼なじみだから」

ひばりも大貴の様子に何かを感じたようで少し怯えたような表情をするが、直ぐに空気を変えようと沙耶に望の事を聞くと沙耶は望の事を『恋人』だと紹介するが望はため息を吐きながら否定する。

「酷いよ、望」

「いや、そんな事を言われても事実だからね」

沙耶は望の言葉が不満だと頬を膨らませるが、望は苦笑いを浮かべると、

「えーと、聞いてたとは思うけど、保科望です」

「支倉ひばりです」

ひばりに頭を下げるとひばりも名乗り、

「あれ？　あぁ、君が理音の彼女？」

「違うよ！？」

望はひばりを見て、理音の彼女だと言うとひばりは顔を真っ赤にして否定するが、

「……やっぱり、そう言う認識なんだな」

「そうだね。ひばりも素直になれば良いのに」

終夜と明久はひばりの様子に苦笑いを浮かべる。

「えーと、保科で良いんだよな。前田の知り合いみたいだけど、前田の居場所を知らないか？」

「理音？　理音なら研究室にいるよ」

「研究室？」

大樹はひばりが理音を探していたため、理音の居場所を知っていそうな望に聞くと望は理音が研究室にいる事を話すが誰も研究室の事を知らないため、望と沙耶以外は首を傾げる。

第９１問

「あれ？　知らなかったの？」

「う、うん」

「……と言うか、リオは何しに学校にきてるんだろうね」

望は周りの反応に苦笑いを浮かべると理音の幼なじみのひばりと明久は顔を引きつらせて頷くと、

「ばばあに聞け」

「理音、どうした？」

理音が何かあったようで顔を出すと理音の登場に大貴が首を傾げながら聞き、

「ん？　カバンの中にあるパソコンを取りにきたんだ、データ入力や研究データをまとめないといけないからな」

「……相変わらず、何でそんなものを持ち歩いているのよ」

理音はパソコンを取りにきたと言うと優子は相変わらず、いろんなものを持ち歩いている理音にため息を吐く。

「リオ、今日は制服の予備ってないの？」

「……吉井、いくら、前田でも制服の予備とか無意味なものは持っ

てきてないって」

明久は理音に前に制服を借りた事を思い出して聞くと大樹は流石にそんなものを持ち歩くわけないと言うが、

「……大樹、前田を甘く見るな」

「……そうだね」

ひばりと終夜は1度、理音が懐から制服を出したところを見ているため、大樹の肩を叩いて首を振り、

「……アキ、お前はどうして、また、その格好なんだ?」

「……仕方なかったんだよ。寝坊しちゃって」

「まったく……」

理音はひばりと終夜の事など気にする事なく明久に聞くと明久は理音から視線を逸らし、理音はそんな明久を責める事なくため息を吐くと、

「3度目はないぞ」

「うん。気をつけるよ。ありがとう。リオ」

当然のように懐から制服を取り出し、明久はそれを気にする事なく礼を言う。

「……理音の制服のなかってどうなってるのかな?」

「……あるのかよ」

「あるんだな。これが」

明久が理音から制服を受け取る姿に望と大樹は顔を引きつらせるが終夜は苦笑いを浮かべると、

「前田っち、前田っち、前田っちの制服には何が入ってるの？」

「白石、そんな誰もが知りたかったことを簡単に聞くな！！」

沙耶は興味本位で理音の制服のなかに何が入っているか聞き、大貴はわざとらしく沙耶を止める。

「ん？　今日は特におかしな物は入ってないぞ。制服以外には科学者に必須のアイテムの白衣が３着、注射器が５０本にサンプル採取用の薬瓶、麻酔薬が１０００ｃｃ、ロケット花火が２ダースに着火装置、ひばり専用踏み台が１つとその予備、後は大貴と製作途中の怜生専用ハリセン『獅子丸』と飴があったな。食うか？」

「ありがとう。前田っち」

「……充分におかしいからね」

理音は沙耶の質問の意味がわからないと首を傾げながらも懐からいろいろと取り出して行き、飴玉を見つけて沙耶に渡すと沙耶は笑顔で理音に礼を言うが、目の前で行われる異常な光景に望はツッコミを入れるが、

「そうか？　他には、ここに来る前に承認された治療薬の権利書に陸特製の爆発物が3点、土地の権利書」

「そんな大切なものと陸の爆発物を一緒に持ち歩くな！？」

「何を言ってる。清瀬、あいつの爆発物は取扱注意を守れば基本的には爆発しないぞ」

理音は気にする事なく、懐から危険物を取り出すと大樹は声を上げるが理音は気にする事はなく、

「悪いな。俺はそろそろ戻るぞ。遊んでる暇もないからな。お前らも授業が始まるぞ」

「……理音、お前が言うな」

理音は時計を見て戻ると言うと大貴はため息を吐く。

「理音くん、研究室ってどこにあるの？」

「ん？　あぁ……」

ひばりは研究室に戻ると言う理音に研究所の場所を聞くと理音は隠す事なく答え教室にある鞄からデスクトップのパソコンを取り出して研究室に戻って行ったが、既に誰も突っ込む気力はなかった。

第９１問（後書き）

どうも、作者です。

理音の懐の中身はなぞ。（爆笑）

会話で言えば、理音と沙耶の会話は絶対に着地点が見つからない気がします。

第９２問

「リオ、鞄持ってきたから、帰ろう」

「……ふむ。やはりな」

「……理音くん、今度は何をしてるの？」

ひばりと明久は放課後になり、理音の研究室に顔を出すと理音は怪しげな液体の入った試験管を光に透かして邪悪な笑みを浮かべており、ひばりはそんな理音の様子にため息を吐くと、

「ん？　ひばりにアキか。いやな。清水の細胞に少し面白い変化が有ってな。見てみろ。大貴の細胞を近づけるより早く分裂、再生を繰り返して行くんだ。大貴の細胞も同様にだ」

「いや、見てみろと言われても、元々の状態がわからないから」

「……それを聞いてあたしとアキくんはどう言う反応すれば良いのかな？」

理音は美春から採取した血液から培養したものを眺めていたと言い、面白い変化があると言い、明久に試験管を渡そうとするが明久は受け取る事なく苦笑いを浮かべて断り、ひばりは深いため息を吐く。

「何を言ってる。これを見るだけで、大貴と清水は細胞レベルで天敵だと言う事がわかるだろ」

「……細胞レベルで天敵って、それを聞かされたあたしはあの２人

がケンカを始めるのを黙って見てろって言うの？　と言うか、そんなのあり得るの！？」

「……確かに仲が悪いみたいだけど、それはないんじゃないかな」

理音は２人の様子を見て、なぜ、わからないと言いたげに大貴と美春のケンカはどうにもならないと言い、ひばりと明久は理音の突拍子のない言葉に顔を引きつらせるが、

「あり得る、あり得ないの、問題じゃない。事実、こうやって目に見える形で結果が出ているわけだからな。しかし、娘がこれだとしたら、やはり父親の血液サンプルが欲しいな」

理音は気にする事なく邪悪な笑みを浮かべたまま、美春の父親の血液サンプルが欲しいと言うと大貴と美春の血液サンプルを大事そうに懐にしまい、

「ひばり、アキ、行くぞ」

「えっ！？　えっ！？　ちょっと、理音くん、どこに行くの？」

「決まってるだろ。怜生を迎えに行った後、あの父親の血液サンプルを採取しに行く」

ひばりの首をつかみ、歩きはじめるとひばりは理音の行動に声を上げるが理音は気にする事なく進んで行く。

「……リオ、カギはどうするの？」

「ん？　忘れてたな」

明久は研究室をそのままにするわけも行かないと思うため、理音に声をかけると理音はひばりを引きずったまま戻ってきて、研究室にカギをかけ、

「行くぞ」

「いやね。リオ、血液サンプルをって言うけど、清水さんのお父さんの仕事場って知ってるの？」

「そうだよ」

ひばりを再度、引きずって歩きはじめるとひばりと明久は美春の父親が喫茶店を営業をしている事を知らないため理音に止まるように言うが、

「ん？　清水の家は喫茶店だ。気にする必要はない」

「……それって、あの戦いがお店の中で起きるって事だよね？」

「完全に営業妨害じゃないかな？」

理音は問題ないと言い切るとひばりと明久は先日見た『いかれた科学者対人外』の戦いを思い出したようで顔を引きつらせて心配する。

「営業妨害？　何を言っている。俺達は客として行くわけだ。向かってきた場合は絶好の機会じゃないか」

しかし、理音はその時こそ絶好の機会だと考えているようで邪悪な笑みを浮かべる。

第９２問（後書き）

どうも、作者です。

大貴と美春は細胞レベルで天敵です。（爆笑）

そして、始まるいかれた科学者対人外の３戦目？

何が起きるんでしょうか？

第９３問

「いらっしゃいませ。ん？」

「清瀬くん！？」

「清瀬、どうしたんだ？」

理音達が美春の父親が経営している喫茶店『ラ・ペディス』を訪れると大樹が喫茶店のエプロンをつけて接客をしている。

「まぁ、短期のバイトみたいなもんだ。家の手伝いじゃ、バイト料もでないしな」

「そうなんだ」

大樹は苦笑いを浮かべながら、自分が喫茶店にいる事を話すとひばりは頷くと、

「……後はこの間のおじさんの暴走で新人バイトが辞めて人手不足なんだ」

「……うん。何となく、その人達の気持ちがよくわかるよ」

大樹はそれ以外にも理由があると視線を逸らし、明久は美春の父親の暴走を目の当たりにしたせいか辞めて行ったバイト達の気持ちはよくわかると苦笑いを浮かべる。

「まぁ、今日は落ち着いてるし、おかしな事は起きないと思うから」

「そうか。それは残念だ」

大樹は明久の反応は当然だと言いたげに苦笑いを浮かべながら、今日は心配ないと言うとひばりと明久は安心したようで息を漏らすが、理音は心底残念そうに言い、

「……理音くん、何も起きないからって、自分から騒ぎを起こさないでね」

「あぁ。わかってる。怜生を危険な目に遭わせるわけにもいかないからな」

ひばりは理音をジト目で睨みつけ、理音はひばりの言葉に納得はいかなさそうだが、怜生のために頷くと、

「それじゃあ、お客様、こちらにどうぞ」

大樹は理音とひばりのやり取りに苦笑し、４人を席に案内する。

「結構込んでるんだね」

「そうだな。店主があれだから、敬遠されるとも思ったんだけどな」

「そう言わないでくれ。まともな時のおじさんの料理は評判が良いんだからさ」

大樹に席に案内される間に見た店の様子はお客さんが込み合っており、理音と明久は少し驚いたように言うと大樹は苦笑いを浮かべると、

「そうだよ。噂ではここのクレープ、凄く美味しいって」

「そうなのか？　まぁ、俺はサンドイッチしか食ってないが、確かに味は良かったな」

ひばりは噂になるほどこの喫茶店のクレープは美味しいと言うと理音は依然着た時にはクレープは頼んでないため首を傾げながらも、他の料理は味は悪くなかったと言う。

「それなら、期待しちゃおうかな」

「はい」

明久は楽しそうにメニューを開き、怜生は明久と一緒にメニューを覗き込むが、

「……清瀬くん、水とできれば塩も」

「……アキくん、生活を改めるってあたしと理音くんと約束したよね？」

財布の中身と相談した結果、何も頼む事はできなかったようで涙を流して大樹に『水と塩』を頼むとひばりはため息を吐く。

「ち、違うんだ。ひばり、リオとひばりと約束してから頑張ってるよ。だけど、まだ、仕送りまで時間があるから、ここで使っちゃうと後が辛くなるからであって、仕送りを使い切ったわけじゃないよ！？」

「本当に？」

「本当だよ！！」

明久はひばりと理音に言うがひばりは明久の言葉が良いわけだと思っているようで聞き返すと明久は玲に連絡を入れられたくないため全力で言うと、

「ひばり、俺達がアキに約束させた時はすでに仕送りを使い込んでいたんだ。そこまで考えるようになっただけでも進歩だろ。誘ったのは俺だ。奢ってやる」

「ホント！！」

「理音くん、あんまり、アキくんを甘やかせたらダメだよ」

「そんなつもりはない。清瀬、メニュー決まったら、呼ぶ」

「あぁ。混んでみたいだしな。頼む」

理音は明久をフォローすると大樹にメニューを選ぶ時間をくれと言い、大樹は幼なじみの3人の姿にくすりと笑うとバイトに戻って行く。

第９３問（後書き）

どうも、作者です。

明久はやっぱり、お金がない。（爆笑）

まあ、春休み後半に理音とひばりに脅されましたからね。だいぶ仕送りを使い込んだ後でしょうし、期待していた新作ゲームも買ったようですし。

まあ、水と塩はやらないといけないネタってのもありますからね。（苦笑）

始まらなかったいかれた科学者対人外はどうなるんでしょうか？

第９４問

「……ちっ、何もなかったか」

「理音くん」

理音は会計を済ませて喫茶店を出て舌打ちをするとひばりが理音を睨みつけると、

「ひばりも落ち着きなよ。何もなかったんだし、それに清瀬くんの言う通り、クレープも美味しかったんだしさ。せっかく美味しいものを食べて良い気分なんだしさ」

「それもそうだね。本当に美味しかったよ。あたしもあんな風に作れないかな」

明久は２人の様子に苦笑いを浮かべて、ひばりをなだめるとひばりは美春の父親のクレープを気に入ったようで幸せそうに笑った後、美春の父親のクレープを再現したいと思ったようで拳を握って見せる。

「それなら、再現できてるか確認にこないとね。リオ、また、一緒にひばりときたら」

「ん？　そうだな。他の物を食ってみたいしな。俺は一向に構わない」

明久は明久なりに理音とひばりに気を使ったようで理音に今度はひばりと２人でデートするように言うが、理音は明久の言いたい事を

理解していないようで表情を変える事なく言うが、

「あ、アキくん、何を言ってるの!?」

「ん？　ひばり、何を慌てているんだ？」

ひばりは明久の言葉に慌て、理音はひばりが慌てる意味も理解できていないようで首を傾げ、

「……もう良いよ。それじゃあ、夕飯の材料でも買って帰ろう……あれ？　怜生くんは？」

明久は理音の様子にため息を吐くと理音とひばりに帰ろうと言い、周りを見ると怜生の姿が見えない。

「うそ!?　怜生くん、り、理音くん、どうしよう!?」

「ん？　まぁ、大丈夫だろう。動物には帰巣本能と言うものがあってな」

「怜生くんは動物じゃないよ!?　人間だよ!?」

「ん？　人間も動物の一種だろ。一先ずはまず、落ち着く事を考えろ。清瀬、コーヒーを頼めるか？」

ひばりは顔を真っ青にして理音に言うが理音はひばりに落ち着けと言うと喫茶店のドアを開けて大樹にコーヒーを注文する。

「ん？　どうした？　忘れものか？」

「……リオも落ち着いてね。清瀬くん、怜生くん、店に入ってきてない？」

大樹は3人が再度、喫茶店のなかに入ってきた事に首を傾げると明久は理音も怜生がいなくなった事に動揺していると理解したようで大樹に怜生が喫茶店に戻ってないか確認するが、

「いや。お前達が出て行ってからは店のドアは開いてないな。怜生くんがどうかしたのか？」

「ちょっと、お店の前で話をしている間にどこかに行っちゃったんだよ」

「ちょっと待て！？　ホントかよ。マスター、すいません。ちょっと抜けます。お前ら、怜生くんが行きそうなところに心当たりはないのか？」

怜生は喫茶店の中には戻ってきておらず、明久は怜生がいなくなった事を話すと大樹は慌てて、怜生を探すのを手伝うと言う。

「とりあえずは帰巣本能の件もあるから、ひばりは家に……」

「あたしは怜生くんを探すよ」

理音は少し落ち着いたようでひばりに家に戻ってくれと言うが、ひばりは理音の言う事を聞く気はなく、

「それじゃあ、ボクが戻る？」

明久は確かに家に誰かがいた方が良いと思ったようで自分が戻ろう

かと聞いた時、

「明久、慌てて何かあったのか？」

「みなさん、どうかしたんですか？」

秀吉と葵が理音達を見かけて声をかけてくると、

「2人とも、怜生くん、見なかった！！」

「怜生くん、今日は見ておらんのじゃ。怜生くんがどうかしたのか？」

「怜生くんが居なくなっちゃったんだよ」

「それは大変なのなのじゃ。ワシも探すのを手伝うのじゃ」

「わ、私もお手伝いします」

ひばりは2人に怜生を見なかったかと聞くと明久は2人に怜生が居なくなった事を話すと秀吉と葵も手伝うと言い、

「それじゃあ、葵ちゃんは理音の家に行って怜生くんが帰ってこないか見て、ひばり、リオの事を任せるよ。絶対、理音を暴走させちゃ、ダメだからね」

「う、うん。わかってるよ」

明久は葵に理音の家に行って欲しいと言った後、ひばりに理音の事を頼み怜生を探しに向かう。

第９４問（後書き）

どうも、作者です。

怜生、迷子になる？

理音ポンコツ化にひばりもテンパリ、なぜか明久が冷静です。

怜生はどこに行ったんでしょうか？

第９５問

「おい。がきんちょ、お前は何がしたいんだ？」

「ケンカは良くないと思います」

赤毛の少年『坂本雄二』は今の状況に意味がわからず、首を傾げると怜生は多くの不良に囲まれている雄二の制服のズボンをつかみながら言う。

『流石は悪鬼羅刹様、子供を人質にして逃げる気か？　血も涙もねぇな』

『まぁ、俺達はそのガキがどうなろうと知った事じゃねえけどな』

雄二と怜生を囲んでいる不良は雄二と怜生を見て、雄二がどんな行動に出てもこちらが有利だと思ったようでいやらしい笑みを浮かべており、

「……相手はしてやるから、このがきんちょは避難させろよ。まったく、関係ないガキだしな」

雄二は不良達を睨みつけると怜生をこの囲みから解放しろと言うが、

『いやだね。そのガキがどうなろうと俺たちのしった事じゃねぇんだよ』

『解放するって言うなら、そのガキを守ってみろよ。悪鬼羅刹様よお』

不良達は雄二の言葉を聞きいれるはずもなく、持っていた鉄パイプを怜生に向かい無情にも振り下ろす。

「ぐっ！！」

『おいおい。本気でこのガキを守るのかよ。悪鬼羅刹にも情ってものがあったのか、あれか？　鬼の目にも涙ってやつか？』

『何だそれ？　笑えねえ冗談は止めろよ』

雄二は怜生を抱きよせ、怜生の代わりに鉄パイプで背中を打ちつけられると不良達は雄二の行動に本当に雄二が怜生をかばった事で雄二を好きなだけ痛めつけれると思ったようでゲスな笑みを浮かべると、

「お兄ちゃん、大丈夫ですか？」

「あぁ。こんなもんは何ともねぇよ。がきんちょ、大人しくしてろよ」

怜生は雄二に声をかけると雄二は不良達を睨みつけていた時とは違い優しげな笑みを浮かべて怜生に言う。

『何、古くせえドラマみてぇな事をしてんだよ』

『良いだろ。今からこいつは死ぬだけなんだからよお』

雄二が怜生に声をかけた姿に不良達は面白くないと唾を吐き捨てると怜生をかばい動けない雄二に再度、鉄パイプを振り下そうとする

が、

『ぐわ!?』

『は、花火!?』

『ハリセン!?　て。てめぇは西橋のカラス!?』

鉄パイプを振り下そうとした不良には花火が直撃し、雄二と怜生を囲んでいた不良の一画では不良がハリセンでしばき倒されている。

「西橋のカラス？　……ちっ、状況は最悪か？」

「大丈夫です」

雄二は中学時代に聞いた事があるケンカのめっぽう強いと言われる『西橋のカラス』とまで言われる男が自分の首を取りにきたと思った思ったようで舌打ちをするが、怜生は雄二に向けて笑顔を見せ、

「理音!?　きちんと狙え!!　危ないだろ!!」

「……大貴、何を言ってる。俺の狙いは寸分の狂いもない」

ハリセンと花火で不良を蹴散らしながら、理音と怜生は言い合いを始めており、

『悪鬼羅刹にカラス？　好都合だ。殺っちまえ!!』

『邪魔すんじゃねえよ!!』

不良達は完全に仲間割れを始めている理音と大貴の様子に囲みは理音と大貴、雄二と怜生の2つになる。

「……がきんちょ、大人しくしてろよ」

「はい」

雄二は自分を囲む不良達が少なくなり、余裕が出てきたようで怜生の頭を優しく撫でると怜生は雄二に向かい笑みを浮かべ、

「……てめえら、俺1人ならまだしも、がきんちょを巻き込んだ事の意味、わかるよな」

雄二は不良達を睨みつけると自分が結果として怜生を巻き込んだ事に何かあるのか怒りをあらわにして不良達を殴り飛ばし始める。

第９５問（後書き）

どうも、作者です。

いつの間にか大貴も合流しての怜生捜索隊。
怜生は雄二と一緒でした。
そろそろ、原作キャラと絡ませないといけないかな？と思っていたのもありますが、理音と雄二はすでに関係が悪いので怜生をかませてからの接触です。
理音、大貴、雄二の攻撃力にケンカを売った不良たちに合掌。（爆笑）

第９６問

「……何か凄い事になってるわね」

「……そうだね」

大貴と一緒に優子も怜生捜索隊に加わっていたようで、ひばりと優子は理音が『怜生の匂いがする』と言って理音が大貴と駆け出した後、追いかけてきたのだがその場は不良達が積み上げられており、２人は顔を引きつらせていると、

「お姉ちゃん」

「怜生くん!?　大丈夫？　ケガはない？」

「ないです」

怜生がひばりと優子を見つけて駆け寄ってくる。

『あ、あいつは何なんだ!?　カラスや悪鬼羅刹に負けない攻撃力だぞ!?』

『知るか!!　仲間を集めろ。この人数じゃ足りねえ。せっかくカラスと悪鬼羅刹の首を獲る機会なんだ!?』

理音、大貴、雄二を囲んでいる不良達は人数が足りないと言い、携帯電話で援軍を呼ぶがすでに壊滅状態である。

「……大貴、こいつらはお前にも敵意を向けているが今まで何をや

ってきたんだ？」

「……正当防衛です」

「そう言う事にしておこう」

理音は表情を変える事なく、花火で不良達を撃ち抜き怯んだ不良達を近づいては投げ飛ばしながら大貴に言うと大貴は理音から視線を逸らし自分はあくまでも被害者だと言い、理音はそれ以上は追及する事なく、

「ん？　なぁ、大貴、こいつらで投薬実験をしても良いと思うか？」

「……ロールパンの血液から作った薬なら止めろ。面倒な事になりそうだからな」

「……残念だ」

それ以上に面白い事を思いついたよう彼特有の邪悪な笑みを浮かべて懐から注射器を取り出すが大貴は余計に面倒な事になるとしか思わないようで理音を止めると理音は珍しく素直に従う。

「……おい。カラスって言われてたな？」

「あぁ。そっちは噂の悪鬼羅刹様……ゴリラ？」

雄二は自分を囲んでいた不良達を蹴散らしながら、理音と大貴に合流すると噂で聞いた事がある大貴に声をかけるが、大貴は雄二の顔を見るなり、理音と同様に雄二をゴリラと認識し、

「……ほう。また会ったな。ゴリラ、やはり、お前は俺の研究サンプルになる運命のようだ」

「げっ！？　お前はいかれた科学者！？」

理音は雄二の顔を見るなり、邪悪な笑みを浮かべると雄二はその時、理音に初めて気づいたようで顔を引きつらせるが、

「理音、今は止めておけ。このゴリラは怜生くんを守ってくれたしな。それに今、戦力が減るのは遠慮したい」

「仕方ない。怜生に免じて今回は許してやろう」

「俺か？　俺が悪いのか？」

大貴は『いかれた科学者モード』になりかけている理音を止めると理音は雄二に怜生を守って貰った事を恩義に感じているようでしぶしぶ頷くと雄二は納得がいかなさそうに声を上げる。

「理音に悪鬼羅刹、そろそろ片付けるぞ。これ以上、集まってくるとお前の花火も足りなくなるだろ」

「ん？　別にこの程度だと花火を使う必要もないからな。やるなら、二度と立ち上がらない程度に打ちのめしても良いとは思うんだが……」

「いや、優子や支倉、怜生くんもいるしな。長引くと面倒な事になる」

大貴は援軍が来る前に終わらせたいと言った時、

『おい。カラスに悪鬼羅刹、それにそこの男も止まれ』

「……こうなるんだよ」

不良達数人がひばり、怜生、優子を人質に取り理音達に止まるように言い、大貴は考えていた最悪の状況に舌打ちをする。

第９６問（後書き）

どうも、作者です。

圧倒的な破壊力の前にひばり、怜生、優子の３人を人質に取った不良達、書いてる人間が言うのもなんですがゲスです。

理音、大貴、雄二の３人は人質を取られた事でどうするんでしょうか？

明久（ヒーロー）は遅れてやってくる？（悪笑）

第９７問

『形勢逆転ってヤツだな』

「……そうみたいだな」

不良の１人は理音達に向かいゲスな笑みを浮かべると大貴はこの状況をどうにかしようと考えながらも３人を危険な目に遭わせるわけにもいかないためか小烏丸を地面に置き手を上げると、

『カラスは今日はずいぶんと素直じゃねえか？　おい。そっちの男も武器を捨てろ』

「……ひばり、怜生、木下姉、動くなよ」

「う、うん」

不良は理音に向かい花火を捨てろと言い、理音は表情を変える事なく捕まっている３人に動くなと言うと懐にある花火を投げ捨て、

『……こんなにどうやって懐の中にしまい込んでたんだ？』

「……あいつは何なんだ？」

理音の懐から出てくる花火の寮に不良達と雄二は顔を引きつらせるが、

『まぁ、良い。これでこの３人は動けねえな。やっちまえ！！』

『お前らはこっちだ。あの3人が俺達に迷惑をかけた分、しっかりと返して貰うぜ』

不良達は理音達を囲み、ひばりと優子を見てゲスな笑みを浮かべ、

「ちょっと、放してよ!?」

「い、いや!?」

不良達がひばりと優子を連れ去ろうとした時、

『ぐわ!?』

『な、何だ!?』

理音が投げ捨てた花火の全てがひばりと優子を囲んでいた不良達を寸分の狂いもなく撃ち抜き、

『て、てめえ、何をしやがる!?』

「……知らんな。そこら辺にお前らが吸っていたタバコが落ちているから火が点いたんだろ」

不良は理音を怒鳴りつけるが理音は自分のせいじゃないと言い切り、

「死に腐れ!!」

「あ、アキくん!?」

「吉井くん!?」

花火で撃ち抜かれた不良を後ろから明久が殴り飛ばす。

「ひばり、怜生くん、木下さんも無事だよ！！」

「吉井、よくやった。お前ら、人質なんてゲスな真似してくれた事、死ぬほど後悔させてやる」

明久は理音達に向かい笑顔を見せると、大貴は今の不良達の行動に余程、頭に血が昇っていたようで小烏丸を広い、自分達を囲んでいる不良達に小烏丸の先を向けて言うが、

「アキ、3人を連れて行け。大貴、ゴリラ、お前らも行け。巻き添えになりたくないだろ」

「おい。理音、冗談言ってるなよ。この状態で1人で……」

「ちょ、ちょっと待て！？　あいつを見捨てるのか？」

理音は明久に3人を連れて行けと言うと大貴と雄二にも行けと言うが大貴は理音の言葉に反論しようとするが、今の理音に彼の中にある何かが逃げろと警笛を鳴らしており、大貴は雄二の手を引っ張ると雄二は当然、声を上げるが、

「……早く消えてくれませんか？　邪魔ですよ」

「お、おい。あいつは何なんだ！？」

「し、知るか！！　今はここから離れる事を考えろ」

理音の口元は今までとは違う笑みで歪んでおり、その理音の口から出た言葉に大貴と雄二の背中には冷たいものがつたい始め、全力でその場から離れる。

『おい。カラスと悪鬼羅刹はお前を見捨てたぜ。仲間じゃなかったのか？』

「……仲間？　私にそんなものはいませんよ。私は化け物ですから」

不良達は大貴と雄二が理音を生贄にして逃げたと思っているようで理音に向けて高笑いを上げるが、理音はくすりと笑うと自分を『化け物』と言い切り、

「……基本的に私もあいつも誰かが壊れようと興味はないんですが、ただ、ひばりさんと怜生くんに手を上げた事だけは許しませんよ」

冷たい笑みを浮かべたまま、そこに存在していた不良達を生きたまま壊していく。

第９７問（後書き）

どうも、作者です。

第９４問の明久の言葉で予想していた人も多いでしょうが、理音の壊れた部分の登場です。

こっちの引き金はたぶん、ひばりを傷つける相手にでしょう。
本編では壊れた部分が生まれた時は明久しかいなかったと思いますが、こちらではきっとひばりもいたはずです。

こちらの理音の壊れた部分は本編とは違い、明久とひばりは何が原因か覚えているでしょう。本編では明久自慢の防衛本能で忘れていますから。（爆笑）

第９８問

「支倉、吉井、あれはなんだ！！」

大貴はひばり達に追いつくなり、理音にあった変化を教えろと明久につかみかかる。

「ちょっと、ヒロ、どうしたのよ？　落ち着きなさいよ」

「答えろ。理音に何があったんだ！！」

優子は理音の変化に気づいていないようで大貴の様子に慌てて大貴と明久の間に割って入るが、大貴は理音の異常な変化を見せつけられたためか引く事はない。

「……ごめん。言えない」

「支倉！！」

「……」

明久は首を振ると大貴はひばりに答えろと言うが、ひばりの顔は青ざめてきており、

「おい。無理に聞きだす事でもないんじゃねえのか？」

雄二は大貴の肩をつかみ、大貴に止まるように言うと、

「あれ？　坂本くん」

「ん？　吉井か？」

その時、明久は初めて雄二が同じクラスだと気づいたようで雄二を呼ぶと雄二も明久と同じ反応をする。

「お兄ちゃん、大丈夫ですか？」

「あぁ。がきんちょ、巻き込んで悪かったな。吉井、このがきんちょはあいつの弟か？」

明久と雄二が顔を合せていると怜生が雄二に駆け寄り、雄二は怜生の頭を一見乱暴に見えるが優しい笑みを浮かべて撫でると明久に怜生の事を聞くと、

「そうだよ。ごめんね。迷惑をかけちゃったみたいで」

「まぁ、気にするな。だいたい、元々は俺の問題だったんだからな。むしろ、謝るのは俺だしな」

明久は怜生と雄二の様子に雄二が悪い奴では無いと感じ取ったようで苦笑いを浮かべて謝ると雄二は悪いのは自分だと言った時、

「アキくん、あたし、理音くんのところに戻るね」

「えっ！？　ちょっと、支倉さん！？」

ひばりは顔を青くしたまま、何かを決意したのか理音のところに戻ると言い始め、優子はひばりの様子に何か危ういものを感じて慌ててひばりを止めるが、

「離して！！　あたしのせいなの！！　理音くんを止めなきゃ！！」

ひばりは優子の腕の中で暴れて、理音の元に行こうとする。

「ひばり、落ち着いて」

「アキくん、お願い。いやだよ。このままじゃ、また、あの日みたいに……」

「あいつが壊れると言いますか？」

明久はひばりの様子にひばりを落ち着かせようとするが、ひばりはボロボロと涙を流しながら過去を悔やむように言葉を吐きだすと何事もなかったように冷たい笑みを浮かべた理音が声をかける。

「理音！？」

「ちょ！？　お前、いつの間に！？」

大貴と雄二は気配を感じさせる事なく現れた理音に驚きの声を上げるが、

「お兄ちゃん」

「はい」

怜生は当たり前のように理音の足に駆け寄り、理音も当たり前のように怜生の頭を優しく撫でる

「理、理音くん？」

「何ですか？　ひばりさん」

「リオ、大丈夫なの？」

ひばりは理音が怜生の頭を撫でている姿にわけがわからなくなっているようで目を白黒させると明久が理音に向かい大丈夫かと聞くと、

「まぁ、あくまで私が出てきたのはあいつを暴走させないためですから、安心してください。私もあいつもあなたを悲しませるような事はしませんよ。私もあいつもあの日とは違うんです。だから、自分を責めないでください」

理音はくすりと笑うとひばりの頬を伝う涙を指で拭う。

第９８問（後書き）

どうも、作者です。

理音、明久、ひばりの中にあるもう１人の理音が生まれた時のこと。ひばりは何を責めてるんでしょうか？　まあ、ＧＡＵさんに怒られない程度に話を組んで行きたいと思います。（悪笑）

そして、本編のもう１人の理音より、ちょっと残虐性が薄い気がするのはひばりの影響なのかな？

第９９問

「理音くん？」

「どうかしましたか？」

ひばりは理音の行動にきょとんとした表情で理音の名前を呼ぶと理音はくすりと笑いながら聞き返す。

「ねえ。リオ、リオに戻らないの？」

「……吉井くん、何をわけのわからない事を言ってるの？」

明久は理音とひばりの様子に苦笑いを浮かべて聞くと優子は明久の言葉の意味がわからないようで眉間にしわを寄せながら聞くが、

「そうですね。わからない人もいるようですし、説明をしてあげたいのですが、説明は私には向かないですし、あいつに任せたいところなんですがあいつから私に切り替わるのは割と簡単にできるんですが私からあいつに切り替わるのは時間だったり、衝撃だったり、割と条件が曖昧なんですよね」

理音は優子の言葉を気にする事なく、明久の言葉に少しだけ困ったように笑う。

「……なぁ、とりあえず、理音が説明するって事で良いのか？」

「……何か、頭がこんがらがってくるな」

大貴と雄二は優子よりは今の理音の状態に察しが点いたようで頭を押さえて言うと、

「支倉、とりあえず、物は試しだ」

「えーと、烏丸くん？　さすがに今は当たらないんじゃないかな？」

「大丈夫だ。何となくだが、こっちの理音も支倉の攻撃なら当たる」

「うん。何となくだけど、ボクもそう思う」

「お姉ちゃんなら、大丈夫です」

大貴はひばりに小烏丸を差し出し、ひばりは今の理音には当たる気はしないと言うが大貴は根拠はないがひばりの攻撃なら絶対に当たると言い切り、明久と怜生までが納得をする。

「えーと、理音くん、避けない？」

「わかりません。基本的に私もあいつも回避・反撃能力はオートなので」

ひばりは小烏丸を手に少し怯えたように理音に聞くが理音は自分でもわからないと首を振ると、

「ただ、あいつは出てきてないだけでちゃんとここにいますから、ひばりさんの攻撃は当たるでしょう」

「愛だな」

「そうですね」

理音は何となく当たると言い、大貴はニヤニヤと笑いひばりをからかうように言うと理音は表情を変える事なく頷き、

「2人とも何を言ってるの!?」

ひばりは顔を真っ赤にして小烏丸を素早く理音と大貴に振り下ろし、

「……やっぱり、当たるのね」

「……意味がわからん」

理音と大貴は小烏丸を避ける事なく小気味の良い音が2発響き、優子は3人の様子にため息を吐き、雄二は頭を押さえる。

「リオ、戻った?」

「いえ、戻ってませんね」

「しかし、冗談で言ったんだが、本当に当たるんだな」

明久は理音に戻ったかと聞くが、理音は元に戻っておらず、大貴はこっちの理音でもひばりの攻撃が当たる事に苦笑いを浮かべると、

「そうですね。元々、同じ存在(もの)ですから、あいつが愛している人は私も愛してますから」

「突然、何を言うの!?」

理音は表情を変える事なく、ひばりを愛していると言うとひばりは背中からとーるはんまーを抜き取り、理音へ向かい振り下ろすが、

「あれ？」

「ひばり、危ない！？」

ひばりは抜き取る所からの攻撃はなれていないようでバランスを崩し、明久は慌ててひばりに手を伸ばすが手は届かず、前のめりに倒れそうになる。

第９９問（後書き）

どうも、作者です。

改めて、理音がひばりの攻撃を喰らうのは『愛』です。（爆笑）

そして、それはすでに周知の事実です。

理音の防御は完全オート、ひばり以外の攻撃は勝手に反撃します。

第１００問（前書き）

祝１００問です。
内容はＧＡＵさんに怒られそうな内容です。（苦笑）

第１００問

「……あれ？　理、理音くん、どこに手を回しているの！？」

「ん？　ひばり、外して良いか？　」

ひばりは地面にぶつかるのを覚悟したようで目を閉じるがいつまでたっても衝撃が来る事はなく、代わりに自分の胸に触れる感触があり、恐る恐る目を開くと理音が自分の胸に手を伸ばして自分の身体を支えている。

「外して良いわけがないでしょ！？」

「良いツッコミだ」

「……ヒロ、他に言う事はないの？」

ひばりは顔を理音から慌てて離れると直ぐにとーるはんまーを理音に振り下ろし、大貴はひばりのツッコミに感心したように言うと優子は大貴をジト目で睨む。

「……ひばり、成長したか？　やはり、とーるはんまーは調整が必要だな」

「何を言ってるの！？」

「……え？」

理音はひばりの胸に触れた手を何度か開くと真剣な表情でひばりに

聞き、ひばりは理音の言葉に顔を真っ赤にして何度もとーるはんまーを振り下ろすと優子の目はひばりの胸に集中し、

「優子、そんな風に親の仇を見るような目で支倉の胸を睨みつけ…　…や、止めろ!?　優子、俺の腕はそっちには曲がらない!?」

「……ヒロ、あんたは行っちゃいけない事を言ったわ。死になさい。死んで、あたしに言った事を後悔しなさい」

大貴は優子の肩を叩くと彼女を慰めるように首を振って言うが、その言葉は当然、優子の怒りを買い、優子得意の関節技をかけられ悲鳴を上げる。

「……これは何なんだ?」

「えーと、何かいろいろとごめん」

雄二は目の前であれだけの不良の相手をしていた大貴が簡単に痛めつけられている様子に顔を引きつらせると明久は苦笑いを浮かべて謝り、

「ん?　ゴリラ、怜生を守ってくれたようだな。礼を言う」

「おい。それが謝る態度……つう」

理音はひばりが自分にとーるはんまーを振りおろしている事など気にせずに雄二に怜生の事で礼を言うがその言葉は雄二をバカにしかしておらず、雄二は理音を睨みつけようとするが、緊張が解けたのか怜生を庇って鉄パイプで殴られた背中が痛みだしたようで顔を歪めると、

「坂本くん、大丈夫!?」

「……あぁ。大丈夫だ」

明久は慌てて雄二に駆け寄り、彼の身体を支えようとするが雄二は明久の支えなどはいらないと言いたげに手で明久を静止する。

「ん？　ちょっと、見せろ」

「って、お前、何をするんだ!?」

「ん？　怜生を庇って受けたキズだろ。それなら、このキズは俺に責任がある……打身に骨には異常はなさそうだな。これなら……」

理音は雄二の顔が歪んだ事に雄二の制服のシャツを背中からめくり上げようとすると雄二は理音のいきなりの行動に驚きの声を上げるが、理音は気にする事はなく雄二の傷の状態を見てぶつぶつ言い始めると、

「アキ、カバンを任せるぞ。ゴリラ、手当をするのに俺の研究所に行くからな。ひばり、いつまでも遊んでいるな。清瀬と木下弟、本宮に怜生が見つかった事を連絡してくれ」

「ちょっと、理音くん、悪いのはあたしじゃない!!」

「お、おい。待て!?　俺は歩けるぞ!?　これは何の辱めだ!?」

理音は次の行動に移るようで雄二を抱きかかえて研究所に向かって歩きだし、ひばりは理音を追いかけて行き、

「えーと、とりあえず、秀吉達に連絡かな？　烏丸くん、木下さんもキズの手当があるし、研究所に行こうか？」

「そうね」

「……」

明久は怜生の手を握ると大貴と優子に研究所に行こうと言うが、大貴は泡を吹いており、優子は大貴を痛めつけた事で気が晴れたのか爽やかな笑顔を浮かべて明久の言葉に頷く。

第１００問（後書き）

どうも、作者です。

前書きにも書かせていただきましたが第１００問目です。内容はひばりへのセクハラ。（爆笑）

ＧＡＵさん、怒らないでくださいね。

そして、雄二をお姫様だっこで走る理音を追いかけるひばり……なんだ、この絵？

第１０１問

「リオ、秀吉と葵ちゃんもここにこないって、清瀬くんもバイトに戻るって」

「そうか。それなら、明日にでも礼を言うさ」

明久は怜生を探すのに協力してくれた大樹、秀吉、葵の３人に連絡を入れると３人とも研究所には顔を出さないと言ったようで理音は明久は明日３人に礼を言うと言い、

「……こんなもんか？　骨には異常がないからな。まぁ、腫れは２、３日でひくだろう」

「あぁ……」

雄二の治療を終えたようで雄二に声をかけると雄二は立ち上がり身体を軽く動かすと、

「流石はゴリラだな。頑丈にできている」

「てめえ、まだ言うか？」

「理音くん、いい加減にして、坂本くんに失礼でしょ！！」

理音は雄二をまだゴリラと認識しているようで感心したように言うと雄二は理音を睨みつけ、２人の様子にひばりは理音を叱りつける。

「冗談だ。さっき、擦り傷から血液を採取して分析した。残念なが

ら人間だと言う事が証明された」

「リオ、治療の合間に何をしてるの？」

「てめえ、ふざけてるのか？」

理音は治療の時に採取した雄二の血液を分析していたと言うと明久は苦笑いを浮かべ、雄二は頭にきたようで理音の胸倉をつかもうとするが、

「冗談に決まってるだろ。バカの相手をしたからな。おかしな細菌類に感染してないか調べただけだ。一応、血液の分析データだ。見るか？」

「……見ても俺は何もわかんねえよ」

理音は雄二の手を払うと雄二の血液のデータをプリントアウトした紙を手に言うと雄二はため息を吐く。

「次は大貴か？　これは俺が治療する必要があるのか？」

「どちらかと言えば、木下さんにやられたって言った方が正しいしね」

理音は雄二の事など気にする事なく、大貴を見て言うと明久は苦笑いを浮かべて言い、

「な、何を言ってるのよ。ヒロのキズはさっきのケンカのキズよ」

「……優子、どの口がそんな事を言うんだ？」

「ヒロ、黙りなさい」

優子は自分は何もしていないと言い、大貴は優子のせいでケガをしたと言いたげな表情をするが優子は笑顔で大貴を脅す。

「まぁ、怜生を探すのを手伝ってもらったからな。治療はするが……木下姉、あまり、何でも触るなよ。下手なものを触ると爆発するからな」

「……まだ、海谷くんの作ったものがあるの？」

理音は大貴の治療を始めると優子は大貴のそばを離れる気はないようで部屋の中をきょろきょろ見ていると理音はおかしな物を触るなと言い、理音の言葉にひばりはため息を吐く。

「あぁ……ひばり、アキ、悪いが夕飯を何か適当に作ってくれるか？　大貴の治療を終えたら簡単にあいつの事を説明するから、簡単にと言ってもそれなりに時間はかかるだろうからな」

「うん。わかったよ。7人分だし、頑張るよ」

「おい。ちょっと待て。俺の分もか？」

理音はひばりのため息に特に反応する事なく、ひばりと明久に夕飯の準備を頼むとひばりは理音の言葉に頷き、気合いを入れるために腕まくりを始めると雄二は自分も頭数に入っている事に驚きの声を上げ、

「坂本くん、何か用事があるの？」

「いや、そう言うわけじゃないんだけどな」

「お兄ちゃん、ダメですか？」

ひばりは雄二に何か用事があるかと確認すると雄二は自分は何となく場違いだと思っているようで苦笑いを浮かべると怜生が雄二の制服をつかみ、悲しそうに雄二の顔を見上げる。

「……あぁ。わかった。ごちそうになる」

「はい」

「うん。それじゃあ、あたしとアキくんはキッチンに行ってるね」

「ん？　そうだ。ひばり」

雄二は怜生の表情に負けたと言いたげに頷くと怜生は嬉しそうに笑い、ひばりと明久は2人の様子にくすりと笑って部屋を出て行こうとするが理音がひばりを呼び止め、

「忘れものだ」

「……うん。ありがとう」

懐から『ひばり専用踏み台』を取り出すとひばりは納得がいかなさそうだが、踏み台を理音から受け取る。

第１０２問

「……坂本、どうかしたか？」

「いやな。改めて、何で、俺がこんなところにいるんだ？　と思ってな。俺はここにいるメンバーで知ってるのは同じクラスの吉井だけだしな。後は噂で『西橋のカラス』の事は聞いた事があるくらいか」

理音は大貴の治療をしている途中で雄二が居心地が悪そうにしているのに気づき、声をかけると雄二は苦笑いを浮かべると、

「ヒロ、『西橋のカラス』って何なの？」

「……人違いです」

優子は不良達も大貴を『西橋のカラス』と言っていた事を思い出し、大貴に聞くが大貴は優子から目を逸らして自分ではないと言うが、

「１本、行ってみるか？」

「前田、それはなんだ？」

「ん？　ただの自白剤だ」

理音は懐から怪しげな色の液体が入った注射器を取り出し、雄二はなれてきたのか
ため息を着きながら理音に聞くと理音は表情を変える事なく自白剤だと答える。

「ま、待て!?　そんなわけのわからないものを取り出すな!!
それに俺は注射が大嫌いだと言ってるだろ!!」

「ん?　効果は保証するぞ。表に公表できない事件の解決にも使われている。副作用は1つしかないし、安全だ。それにその年で注射が嫌いと言うのは恥ずかしいと思わないか?　なれるために2、300本、打っといた方が良いだろ」

「副作用がある時点で安全なわけあるか!?　だいたい、桁が違いすぎるわ!!」

注射の嫌いな大貴は理音に自白剤など打たれてたまるかと言うと理音は表情を変える事なく、注射になれろと言うが大貴はなれるためだけに注射を打たれる気はない。

「副作用と言っても、個人差はあるが1時間程度、声が男女で入れ替わるくらいだ。生き死に関係あるものじゃないから、安心しろ」

「安心できるか!!」

しかし、理音は大貴の言い分など聞く気はなく、大貴に副作用の事を説明しはじめ、大貴は当然、大声を上げた時、

「なぁ、普通にカラスって言われてた理由を話せばそれを打たれる事はないんじゃないのか?」

「……それもそうだな」

雄二は理音と大貴の様子に苦笑いを浮かべたまま大貴に言うと大貴

は言われて初めて気づいたようで雄二から視線を逸らし、

「わかった、言うから、理音もそんな物騒なものをしまえ」

「そうか？　これがあれば大貴の恥ずかしい過去や好みのタイプ。現状で何を思っているかも聞けるのにな。残念だ」

「……ゆ、優子さん、どうして、俺の手をつかむんですか？」

大貴は自分が『西橋のカラス』と呼ばれていた理由を話そうとすると理音は邪悪な笑みを浮かべて、優子に向けて自白剤を使った時の利点を話すと優子は大貴の腕をつかむ。

「前田、やっぱり、この年の男の子が注射を恐れちゃダメよね」

「そうだな」

「ちょ、ちょっと待て！？　注射嫌い（それ）と自白剤（これ）は別の問題だ！！」

優子は理音の言葉に何か気になる事があったようで理音に大貴に自作剤を打てと言うと理音は邪悪な笑みを浮かべたまま頷き、大貴は当然、声を上げた時、

「いい加減にしなさい！！」

「……止まるんだな」

「うん。リオだからね」

夕飯の準備ができたようで部屋に戻ってくるなり、理音にとーるはんまーを振り下ろし、理音はひばりからの攻撃をうけて止まり、雄二はそんな2人の様子を見て言うと明久は苦笑いを浮かべる。

第１０３問

「それじゃあ、さっきの事、話して貰おうか？」

「あぁ。俺は『解離性同一性障害』だ」

夕飯を食べ始めてしばらくすると大貴は真剣な表情で理音に聞くと理音は隠す気はないようで直ぐに自分が『解離性同一性障害』だと答えると、

「えーと、解離性同一性障害って、確か二重人格とか？　……ちょっと、どう言う事よ！？」

「……木下さん、さっきの理音の変化に気づいてなかったのかな？」

「……木下さんから見ればどっちの理音くんもおかしい人だから、あまり変わらなかったんだよ。きっと」

優子は理音の病名でようやく理解したようで声をあげるとひばりと明久は苦笑いを浮かべる。

「前田、お前、よくそんな風に落ち着いて言えるな。もう少し、ないのか？」

「ないのか？　と言われてもな。事実だしな」

雄二は理音の様子にため息を吐くが理音は特に気にする様子もなく、

「……なぁ、あいつを消す気はないのか？　お前の事だ。その方法

くらいは知っているんだろ？」

「まぁ、知らなくもないが俺はあいつを消す気はない」

「……」

大貴はもう1人の理音に感じた同年代の少年が発するわけのない寒気に何か思う事があるようで理音に言うが理音は首を振り、その様子をひばりは複雑そうな表情で見ている。

「なぜだ？　あんな危険な存在（もの）を良く野放しにしておけるな」

「大貴、お前が何を基準に危険と判断してるかは知らんが俺はあいつを手放す気はない。俺にとってあいつもひばりやアキ、怜生と同じように代わりなどいない大切な存在（もの）だ」

「だからと言って、あいつは」

大貴はもう1人の理音を危険なものと判断しており、理音の考える事は間違っていると言うが理音はもう1人の理音の事を手放す気はないと言うと、

「大貴、お前にならわかるはずだ。俺とお前は似て非なる存在（もの）だからな」

「……」

全てを見透かしたような笑みを見せて大貴に言うと大貴は理音が何を言いたいのか理解したようで押し黙ってしまう。

「とりあえずは、えーと、あいつは危険じゃないのか？」

「あぁ。俺もあいつもちゃんと理性は持っている。一線を越える気はない。俺が暴走しそうになればあいつが止めてくれるし、あいつが暴走しそうになったら俺が止める」

「……支倉、気をつけろよ。お前に何かあったら、たぶん、２人とも暴走する」

雄二は押し黙った大貴を見て、一先ず、話を終わらせようとしたようでもう１度、もう１人の理音は安全かと言うと理音は問題ないと言い切り、そんな理音の様子に雄二は２人の理音が暴走する時の事を考えたようでひばりに向かい言い、

「う、うん。気をつけるよ」

「それが１番、怖いかな」

ひばりは雄二の言葉に頷くと明久は苦笑いを浮かべる。

「……とりあえずは今日、聞いた事は黙っていた方が良いのかしら？」

「ん？　俺はどちらでもかまわん」

「そ、そうなんだ」

「聞いたって直ぐに信じられるような話でもないだろ」

「確かにな」

優子は話について行けないのか頭を押さえながら理音が『解離性同一性障害』と言う事をどうしたら良いかと聞くが理音は好きにしろと言い優子と雄二はどうしたら良いかまだわからないようで苦笑いを浮かべる。

第１０４問（前書き）

今回はクロさんに怒られる可能性が高いです。

第１０４問

「わるかったな。キズの手当だけじゃなく、飯まで食わせて貰って」

「いや、気にするな」

「雄兄ちゃん、また遊びに来てください」

夕飯を終えてしばらくすると大貴、雄二、優子は家に帰ると言い、理音達は3人を見送りに玄関まで見送りに行くと怜生は雄二を気に入ったようで名残惜しそうに雄二に言う。

「坂本くん、ずいぶん、怜生くんに懐かれたね」

「あぁ。何でかわかんねえけどな」

明久は怜生の様子に苦笑いを浮かべながら言うと雄二も理由はわからないためか苦笑いを浮かべながら怜生の頭を撫で、

「あぁ。機会があったらまたくるさ」

「はい」

また遊びに来る事を怜生に約束すると怜生は嬉しそうに返事をする。

「……なぜだ。なぜ、坂本のなでなでの方が怜生くんが喜ぶんだ？　なでなでは俺の特技のはずなのになぜ、あんなゴリラに俺のなでなでの方が気持ちいいはずなのに！！」

「ちょ、ちょっと、ヒロ、どうしたのよ!?　落ち着きなさいよ!!」

「優子、放せ!!　俺は静馬を育ててきたプライドがあるんだ!!　あんな弟1人、育てた事のないゴリラに負けるわけにはいかないんだ!!」

大貴は怜生が自分より雄二に懐いている事が静馬を育ててきた兄としてのプライドを傷つけられたようで不本意だと叫び、怜生の頭を撫でようとすると優子は大貴の様子に尋常ではないと思ったようで大貴を羽交い絞めにして止めようとするが大貴は止まるわけなく、怜生は大貴の異常さに怖くなったようで明久と雄二の後ろに隠れる。

「か、烏丸くん、落ち着いて!?　それ、逆効果だから!?」

「烏丸、お前は何なんだ!?」

「怜生くん、さぁ、俺の本気のなでなでを見せてあげるよ」

明久と雄二は大貴の様子に怜生をかばうように立つが大貴は止まる様子はなく、

「ひばり」

「う、うん。烏丸くん、落ち着いて!!」

ひばりからとーるはんまーが振り下ろされるが、

「大丈夫だよ。あんなゴリラのなでなでより気持ちいいから」

「……どうやら、大貴もしん・とーるはんまーでなければ止まらない領域に足を踏み入れたようだな。いや、あれか。清水の血液から作った薬の影響が残っているのか？　これはまた、面白いデータだな」

「変な感心してないで、理音くんも、烏丸くんを止めてよ！？」

大貴は止まる事はなく理音は大貴の様子に面白いと言いたげに邪悪な笑みを浮かべると直ぐにひばりから大貴を止めるように指示が出る。

「ん？　まぁ、そうだな」

「手をわきわきと動かさないで！？　それ以外、それ以外で！！」

理音は頷くとひばりのブラジャーを外すつもりなのか手を滑らかに動かすとひばりは顔を真っ赤にして理音に言うと、

「お兄ちゃん」

「……そうだな。怜生、まだ、未完成なんだが、お前ならやれるはずだ」

怜生は理音に助けを求めるような視線を送ると理音はようやく本気で大貴を止める気になったのか怜生を呼ぶと懐からハリセン『獅子丸』を取り出し、怜生に渡す。

「お兄ちゃん」

「やれ。大貴を元に戻すのはお前にしかできない事だ」

「……はい」

怜生は渡されたハリセン『獅子丸』に目を輝かせると獅子丸を大貴に向かい振り下ろすが当然、高さが足りるわけもなく、

「あ、あが！？」

「……あれは痛いね」

「そ、そうだな」

ハリセン『獅子丸』は大貴の急所に振り下ろされ、大貴はその場で倒れ込み悶え苦しみ始めると明久と雄二は大貴の様子を見て顔を引きつらせる。

第１０４問（後書き）

どうも、作者です。

大貴、雄二にジェラシー。（爆笑）

そして、怜生専用ハリセン『獅子丸』に股間を打ち抜かた大貴に合掌。

第１０５問

「……大貴、生きてるか？」

「……な、何とか」

「……ヒロ、あんたは何がしたいのよ？」

理音は悶え苦しんでいる大貴に声をかけると大貴は消えそうな声で返事をし、優子は呆れたようで大きなため息を吐くと、

「木下姉、もっと心配してやれ。今のが原因で不能になったら困るのはお前だぞ」

「前田！？　あんたはいきなり何を言うのよ！？」

「何だ？　違うのか？」

理音は優子の様子に表情を変える事なく、大貴を心配するように言うと優子は内容が内容だけに顔を真っ赤にして理音を怒鳴りつけるが理音の表情が変わるわけがなく、

「何だ？」

「理音くん、どうして、直ぐにそんな話をするの！！」

「男性機能は種を残すのに必要な事だろ。別におかしな事を言ってるつもりはないんだが」

「そうじゃないでしょ！！　どうして、いつも、いつも、理音くんはそんなデリカシーのない事を言うの！！」

「デリカシー？」

当然、下ネタ発言にはひばりのとーるはんまーが飛び、ひばりは顔を真っ赤にして理音を叱るが理音は意味がわからないと首を傾げ、ひばりは理音の様子に何もわかっていないと理音を怒鳴りつけるが理音はひばりがなんで怒っているかわからないため、眉間にしわを寄せながら頭を押さえる。

「……吉井、これは直ぐに決着がつくか？」

「……たぶん、つかないと思うよ」

雄二は言い合いを始めた理音とひばりを見て、明久にこの言い合いはどれくらいかかるかと聞くと明久は苦笑いを浮かべてまだ終わらないと言い、

「怜生くん、そろそろ、おばさんも帰ってくるし、帰ろうか？」

「はい」

時間を確認して怜生に帰るかと聞くと怜生は頷く。

「烏丸くんと木下さんも終わるのを待ってると時間もかかるし帰ろう」

「……そうだな。あまり遅くなると爺がどんな罠を仕掛けるかわからないからな」

「でも、2人をそのままにしてて良いの？」

明久は大貴と優子に声をかけると大貴は腰を叩きながら立ち上がり、優子は理音とひばりのやり取りに苦笑いを浮かべながら2人をそのままにして良いのかと聞くと、

「まぁ、大丈夫でしょ。遅くなってもリオがひばりを送るし」

「……そうじゃなくて、支倉さん、前田くんに襲われない？　前田くん、一見、科学者タイプで理性的だけど絶対に本能で動くタイプでしょ？」

「……そうだな」

明久は苦笑いを浮かべながらひばりは理音が送って帰るから問題ないと言うが優子の心配は他の事であり、雄二は優子の言葉に納得する事が多いようで大きく頷く。

「確かに理音は本能で動くタイプだけど、大丈夫だよ。きっと」

「……ずいぶんと根拠のなさそうな返事だな」

「まぁ。あいつらなら問題ないだろ。2人にすればそれなりに進展もするだろ」

明久は言い合いをしている2人を見て頷くと明久の言葉には根拠はなく雄二はため息を吐き、大貴は2人なら何が起こっても問題ないと言い切り、

「大丈夫。大丈夫。理音はひばりを泣かせるような事はしないから」

「……前田くん、この間、支倉さんのブラを外して泣かせてたわよ」

「……きっと、大丈夫だよ」

明久は苦笑いを浮かべて理音はひばりを泣かせるような事はしないと言うが、優子は理音が先日、ひばりを泣かせた事を話すと明久は優子から視線を逸らすが、

「大丈夫です。アキ兄ちゃん、帰りましょう」

怜生は2人なら問題ないと言うと明久の手を引っ張り、怜生、大貴、明久、雄二、優子の5人は理音とひばりを置いて帰路につく。

第１０６問（前書き）

今回も例の如く、ＧＡＵさんに怒られるかも知れません。（爆笑）

第１０６問

「……」

「理音くん、聞いてるの！！」

ひばりは明久達が帰った事にも気付かずに理音に説教を始めて軽く２時間が過ぎた時、

「……」

「いきなり、何をするの！？」

理音は説教など気にする事なく、ひばりのブラジャーのホックに手を伸ばし、ブラジャーを制服から抜き取ると、とーるはんまーの力は解放され、ひばりのポテンシャルを極限まで引き出された『しん・とーるはんまー』が理音の顔面を打ち抜き、さらに休む暇もなくひばりは連撃体勢に入ろうとするが、

「あれ？」

「……無理をするな」

ひばりからは２撃目が放たれる事なく、ひばりはバランスを崩し、理音は彼女の小さな体を受け止めて優しい声で言うと彼女を抱きかかえる。

「ちょ、ちょっと、理音くん！？　何！？　何があったの！？」

「……静かにするか、押し倒されるか、選ばせてやる」

「……静かにする」

「そうか。残念だ」

ひばりは理音の行動の意味がわからずに理音の腕の中で暴れると理音は淡々とした口調でひばりに2択を迫り、ひばりは選択肢の一方に身の危険を感じたため静かにすると言うと理音は残念そうに頷くと、

「……ひばり、前にも言ったが、サイズに合うものを付けろ。長時間、無理に抑えつけてるから、所々に不調が出てきてるだろ」

「……」

理音はひばりがコンプレックスで自分の胸を押さえつけている事で身体にわずかに現れてきている不調を見逃しておらず、ひばりに言うがひばりは理音から目を逸らし、

「ひばり」

「……ヤダ」

理音はひばりの様子に少し語尾を強めて彼女の名前を呼ぶがひばりは小さく首を振る。

「……とりあえず、今日は休んで行け」

「な、何を言ってるの!?　そんなわけにいかないよ!?　あ、あ

たし、帰るよ」

理音はひばりの様子にため息を吐くとひばりを自分が休憩用に使っている部屋まで運ぶと彼女をそこでおろして言うが、ひばりは理音のいきなりの言葉に顔を真っ赤にして慌てると、

「……今の時間で1人で帰るって言うのか？」

「……こ、この時間なら、あたしは1人で帰れるよ」

「……お前に何かあったら、俺はおじさんになんて謝ったら良いんだ？　それに、仮に1人で返して小学生がこんな時間に歩いてと補導されると面倒だ」

「あたし、そんなにちっちゃくないよ！？」

理音は時計を指差して言い、ひばりは1人ででも家に帰ると言うが理音はこのまま帰すと何かあった時の事を考えており、その言葉にひばりは不満そうに声を上げる。

「とりあえず、着替えろ。押さえつけてた分、ゆったりした服の方が楽なはずだ。帰るにしてもそれからだ。それとも、手伝わないと着替えられないか？」

「き、着替えるよ！？　だ、だから、出て行って！！」

理音はひばりの様子に1度、ため息を吐いた後、彼女との距離を縮めるとひばりの制服からネクタイを抜き取り、ひばりは理音の行動に顔を真っ赤にして理音に部屋から出て行くように言うと、

「あぁ。俺はキッチンで片づけをしてるからな。間違っても1人で帰ろうとするなよ」

「う、うん。わかってるよ」

理音はひばりの反応にいつもとは違う無邪気な笑みを浮かべて部屋を出て行き、ひばりはそんな理音の表情を直視してしまったようで先ほどとは違う熱さが彼女の顔の赤みを濃いものに変え、

「……理音くん、ありがとう」

ひばりは少しデリカシーにかけるが理音の優しさに彼が閉めたドアを見つめて呟く。

第１０６問（後書き）

どうも、作者です。

理音、ひばりに怒られてるのに彼女の怒りに油を注ぐ。（爆笑）
ホックを外すからブラジャーを抜き取ると理音は確実に『レベルアップ』しています。

ひばりの胸のコンプレックス。男の理音に言われても解けないと思うんですよね。
瑞希と葵に頑張って貰うしかないのかな？

まあ、とりあえず、ひばりはお着替えタイム。
……部屋に盗撮カメラは仕掛けられてるのか？
……ひばりが理音のぶかぶかのＹシャツを着るのかは考えていません。
わりとだいぶ前からぶかぶかのＹシャツは考えてたけどＧＡＵさんに『夜の帳と野良猫と堕天使』でやられたから二番煎じぽいしな。
（苦笑）

とりあえず、２人っきりはもう少し続きます。（悪笑）

第１０７問（前書き）

今回も例の如く、以下省略。

第１０７問

「理音くん」

「……わかっていたが、でかいな」

ひばりは理音のタンスから上下のスウェット選び、着替え終わるとキッチンに戻ってきて理音に声をかけるがやはり、理音の服はひばりには大き過ぎたようで何重にも腕と裾はまくられており、

「し、仕方ないよ。理音くんは男の子なんだし」

「まぁ、ひばりは小さいから仕方ないか」

「あたし、そんなにちっちゃくないよ!?」

ひばりは男物の服だから仕方ないと言おうとするが理音は表情を変える事なく、ひばりが小さいせいだと言い切り、ひばりは定番になりつつある声を上げるが、

「ほら、やけどするなよ。とりあえず、ここに立ってる必要はないから居間に移れ」

「あ、ありがとう。そうだよね」

理音は気にする事なく、ひばりにホットココアの入ったマグカップをひばりの前に差し出すとひばりはそれを両手で受け取り、理音は自分の分もマグカップを持つとひばりと2人で居間に移動する。

「……」

「……どうかしたか？」

理音とひばりはソファーに腰を下ろし、しばらく沈黙が続くなか、ひばりは沈黙に耐えきれないのかちらちらと理音の顔を見ると理音はひばりの様子に首を傾げると、

「だ、だって、理音くんと2人っきりなんて滅多にないし」

「そうだな。だいたいは怜生かアキがいるからな。2人と言うのは戻ってきて初めてかも知れないな。真面目な話はしても隣の部屋にはばばあや怜生達がいたからな……ひばり」

「な、何!?」

ひばりは理音と2人になるのは滅多にないためか、緊張と言うか理音に襲われないか警戒しているようであるが、理音はひばりの言葉に納得した後、彼女の顔をしばらく見つめてからひばりの名前を呼ぶと彼女はびくっと身体を強張らせる。

「……そんなに警戒するな。今のお前の状況では襲う気にはならない」

「ほ、本当に？」

「あぁ……悪いな。俺が怜生から目を逸らしたから、お前にイヤな思いをさせた」

理音はひばりの様子にため息を吐いた後、ひばりに警戒を解くよう

に言うとひばりは理音の言葉を信じたいのか不安そうに聞き返し、理音は今はひばりを押し倒す事より、ひばりが不安に思っている事を払拭したいのかひばりに今日の事を謝りながら彼女の頭を優しく撫でる。

「そ、そんな、謝らないでよ。理音くんだけのせいじゃないよ」

「……違う。俺が言いたいのはそれじゃない。無理をするな」

「り、理音くん!?」

ひばりは慌てて理音のせいだけではないと言うが、理音はひばりのなかにある何かを感じ取っているようで彼女を抱きよせるとひばりは驚きの声を上げると、

「……大丈夫だよ。今日のは先輩の時とは違うから、今日はアキくんも理音くんもみんながいてくれたよ。1人じゃなかったから大丈夫だよ」

理音はひばりを抱き寄せたまま、もう1度、彼女に謝るとひばりは理音が自分に何を謝りたかったのか理解出来たようで理音に笑顔を見せようとするが、理音が何を謝りたかったか理解した事で周りに心配をかけないように抑えこんでいたものが溢れ出してきたようで彼女の声は震え、表情も強張って行き、理音はひばりの不安を和らげるために彼女を強く抱きしめる。

「……無理をするな。不安なら不安だと言って良い」

「……でも、理音くんの迷惑に」

「ならない」

「そっか」

理音はひばりの耳元で優しげな声で言うとひばりは理音に迷惑をかけたくないと言おうとするが、理音はひばりの言葉の途中遮るとひばりは少しだけ安心したようで笑顔を見せる。

第１０７問（後書き）

どうも、作者です。

理音とひばりの２人っきりの空気……書いててひどくテレます。（苦笑）

たぶん、今まで書いた中でない空気？……いや、自サイトで書いてるリトバスの二次創作でやってるかな？いや、やっぱり、違う気がしますね。

ひばりを抱きしめる理音。彼は本能を抑えきれるのか？（爆笑）

理音がひばりを抱きしめたまま、次回に続きます。

……朝になってたら、どうしよう？（爆笑）

第１０８問（前書き）

今回も、ＧＡＵさんに以下略。

後書きに理音と怜生の母親のデータを載せます。

今回はいつもより長めでぐだぐだかも知れません。（苦笑）

第１０８問

（ど、どうしよう！？　あ、あたし、何で、あんな事を、ぜ、絶対に理音くんはそ、その気になってるよね）

ひばりは理音に抱きしめられ、安心したのと１人で居たくないと言う思いから研究所に泊まると言ってしまい、現在は理音と別れて浴室に移動すると、この後、起きてしまうであろう事を考えてしまい顔を真っ赤にして浴槽に浸かっている。

（で、でも、理音くんは今のあたしは襲わないって言ったし、大丈夫だよ……きっと、そうだよね。大丈夫だよね）

ひばりは先ほどの理音の言葉を思い出し、自分に言い聞かせるがやはり、不安を取り除けるわけはなく、

（どうしよう？　理音くんも泊まって行けとは言ったけど、決めたのはあたしなんだから、やっぱり、そうなっちゃうよね）

ひばりはどうしたらいいかわからないのか考えを振り払おうと大きく頭を振ると、

（……１人じゃ、考えがまとまらないよ。でも、瑞希ちゃんや葵ちゃんに相談するわけにもいかないし）

浴室に持ち込んでいた携帯電話を手に取り、相談できる相手を探すが当然、友人である瑞希や葵に相談する事などできるわけもない。

（……どうしよう？　おばさんは？　そ、それこそ、無理だよ。お

ばさんは理音くんのお母さんなんだし……おばさんなら、理音くんに何もしないように言ってくれるかな？）

ひばりは理音と怜生の母親の『前田　怜奈』に電話をかけようと思ったようでアドレスから怜奈の電話番号を選び発信し、

（おばさん、もう寝ちゃってるかな？）

「ひばりちゃん、どうかした？」

数回、呼び出し音が鳴ると怜奈が電話を取る。

「おばさん、今、お時間良いですか？」

「良いわよ。ひばりちゃんのお話なら何時間でも聞いちゃうわよ。だって、ひばりちゃんは理音のお嫁さんだもの。だから、おばさんじゃなくて、『お義母さん』って呼んで♪」

「……えーと」

ひばりは怜奈に時間も遅いため、時間を確認すると怜奈はひばりのためなら何時間でも時間を割く気であり、楽しそうな声で言うとひばりは怜奈の高いテンションに少しだけ電話をかけた事に後悔しながらも、

「あ、あの。あたし、今、理音くんの研究所にいるんですけど……」

「ひばりちゃん、報告ありがとうね。明日の夕飯はうちに来て、お赤飯炊くから」

自分では答えもでないため、理音と2人っきりだと言う事を怜奈に相談しようとするが、怜奈は話の途中ですでに事後報告だと思ったようで嬉しそうする。

「ち、違います!?　ま、まだ、何も起きてません!?」

「……理音、何で、まだ手を出してないのよ。そんなところはあの人に似なくて良いのよ」

「お、おばさん!?」

ひばりは怜奈の言葉に慌てて否定すると怜奈は舌打ちをし、ひばりは怜奈の反応に声を上げるが、

「冗談よ。それで、ひばりちゃんはどうしたいの？　女の子から積極的になって襲っても良いとおばさんは思うんだけど、むしろ、チャンスよ。襲っちゃいなさい」

「襲いません!?」

怜奈はひばりの反応が面白いようで電話口でくすくすと笑うとひばりと理音の中を煽り、ひばりは顔を真っ赤にして叫ぶと、

「ねえ。ひばりちゃん、ひばりちゃんは理音が嫌い？」

「そ、それは……す、好きだと思います。でも……」

「美空さんが居なくなってしまった時みたいに大切な人がいなくなるのが怖い？」

怜奈はひばりが何を不安に思っているかを全て理解しているようで先ほどとは違う優しげな声でひばりに問いかける。

「……それもあると思います。理音くんはまたどこかにいなくなっちゃいそうだから」

「そうね。あの子はあの人の背中を追いかけてるから、もしかしたら、勝手に難民キャンプとか国境のない医師団とかに入ってしばらく顔を出さなくなる可能性があるわね。そして、2度と会えなくなる事も……でもね。怖がってても何も始まらないの。ひばりちゃんは、美空さんを失った事を自分のせいだと思ってる。あの子もひばりちゃんと一緒。2人は似すぎてるからね。ひばりちゃんの事は理音が1番良くわかるし、理音の事もひばりちゃんが良くわかってるでしょ？」

「そうなんですかね？」

「そうよ。それにね。美空さんはひばりちゃんを責めるような事は思ってないわ……違うわね。ひばりちゃんがいつまでも自分達の死を引きずっている事に怒るでしょうね。だって、美空さんはひばりちゃんを愛してるんだから、もちろん、ひばりちゃんのお父さんもね。美空さんがいなくなってしまった事は悲しい事よ。でも、美空さんの想いは繋がってるの。だから、ひばりちゃんがここにいるって事を忘れないで」

「……はい」

怜奈の言葉にひばりの何かを刺激したようで彼女の瞳からは大粒の涙が溢れ出し、ひばりは小さな声で返事をする。

「ひばりちゃんはね。もっと自信を持って良いの。だって、私が放してしまった理音の手をもう1度、握らせてくれたのはひばりちゃんとアキくんなんだからね。私は2人に言葉で言い表せないくらいに感謝してるのよ」

「そ、そんな事は」

「あるの。だから、私はひばりちゃんが幸せになるためなら、何でも協力するわよ。まずはあの子はあの人に似たみたいだから、先手必勝よ。ベッドに連れ込んで理音が何か言う前に押し倒しちゃいなさい」

「押し倒しません!?」

「あ、でも、ちゃんと避妊はしてよ。理音は桁違いの収入は持ってるけど、流石に子供はいろいろと問題あるから」

「……おばさん、お休みなさい」

怜奈は真面目な話をしたのが気恥ずかしくなったようで、ひばりをからかい始めるとひばりは顔を真っ赤にして叫ぶが怜奈のひばりいじりは止まる事はなく、ひばりは強制的に電話を切るが直ぐに怜奈から電話がかかってくるため、ひばりは携帯電話の電源を落とし、

「……どうしよう?」

怜奈から許可が出た事でさらに追い詰められたのか大きなため息を吐く。

第１０８問（後書き）

どうも、作者です。

ひとまずは理音と怜生の母親のデータから

前田（マエダ）　怜奈（レナ）

理音と怜生の母親。現在は友人が経営するアパレル関係の会社で働いている。理音と怜生の事を大切に思っているが、最近は怜生が理音に懐き過ぎているため、若干、納得がいかない。基本的には器用に何でもこなすが寝起きは少し悪く、起きても３０分は起動しない。ひばりや明久にも理音や怜生と同じように大切に思っており、中でもひばりは彼女の中では既に理音のお嫁さんと認知されている。

怜奈母さんはあおります。（爆笑）

書いてる途中で濃いキャラになったなと思いました。

本編で妖怪ばばあ長が理音の父親は手が早いと言ってましたが、押し倒したのは『怜奈』です。怜奈のキャラクター像は決まっていませんでしたが、ここだけはイメージでありました。（爆笑）

怜奈さんはどんな騒ぎを起こすんでしょうか？（悪笑）

そして、ひばりは理音を押し倒すのか？

もう1問、はさむと思います。個人的にはまだ早いかな？　と思いながらも皆さんはどう思います？

第１０９問

「……ずいぶんと時間がかかったな」

「う、うん」

ひばりが風呂からあがって来たのを見て、理音がひばりに声をかけるとひばりは浴槽の中でいろいろ考えすぎてのぼせたようで足取りはおぼつかない。

「のぼせたか？」

「……うん。ちょっと」

「……まったく、何をしているんだ」

「り、理音くん！？」

理音は立ち上がるとひばりを抱えてソファーの上に下ろし、ひばりは浴槽で色々と頭の中でよぎった展開になってしまうと思ったようで声を裏返して理音の名前を呼ぶが、

「そこでしばらく休んでいろ。タオルを水に濡らしてくる」

「う、うん。ありがとう」

理音はのぼせたひばりへの対処をするためにキッチンに歩いて行き、

（……あれ？　あたしの考えすぎなのかな？　って、なるとあたし

だけがエッチな事を考えてたの！？）

ひばりは理音の様子に自分が考えすぎなのかと思ったようで、１人でいろいろと考えていた事が恥ずかしくなってきたようで１人でソファーの上で悶え始めると、

「……ひばり、お前は何がやりたいんだ？」

「ひゃう！？　り、理音くん、突然、何をするの！？」

「何をするも何も、俺はタオルを水に濡らしてくると言ったはずだが」

「そ、そうだよね。ありがとう。理音くん」

理音は濡れタオルをひばりの頭にのせるとひばりは驚きの声を上げるが、理音は表情を変える事はなく、ひばりは理音に礼を言う。

「……動くな。後は水と足にもだな」

「で、でも」

「良いか。のぼせた時に下手に動こうとするな。倒れて頭をぶつける可能性もあるからな」

理音はひばりに動かないように言うとコップに入った水を渡し、ひばりの足の上にも濡れタオルを置く。

「ごめんね。心配かけちゃって」

「別に謝られる事をしたつもりはないんだが、まぁ、ひばりがゆっくりと風呂に浸かっていた理由も何となく理解できるしな」

「そ、そうなの？」

ひばりは理音に謝ると理音はひばりの風呂が長かった理由は理解出来たようでため息を吐くとひばりの顔は赤くなって行く。

「……ひばり、頭に血液をあげるな」

「う、うん。でも」

「……ひばり、言っておくが、俺はお前に泊まるようには言ったが、同じ部屋で寝るとは言った覚えはないんだが」

「へ？」

理音はひばりの様子にため息を吐くと今回はそんなつもりでひばりに泊まれとは言っていないと言うとひばりは考えていなかった理音の答えに呆気に取られたような表情をする。

「……ひばり、お前は俺を何だと思っている？　現状で言えば、俺はお前から答えも貰っていないんだ。無理に押し倒して良いわけがないだろ」

「そ、そうだよね。あ、あたし達、まだ、つ、付き合ってるわけじゃないんだよね」

理音はもう1度、ため息を吐き、今の2人の関係を冷静に言うとひばりは頷き、理音の言葉を繰り返すと、

「……そうだよね。あたし、まだ、理音くんの気持ちに答えてもいないんだよね」

理音に聞こえないように小さな声で呟く。

「ひばり、俺のベッドはお前が使え」

「え？　そ、それなら、理音くんはどうするの？」

「俺はソファーで寝る。流石に怜生の……ひばり、怜生が泊まる時のベッドで寝れるか？」

「あたし、そんなにちっちゃくないよ！？」

理音はそんなひばりの事を気にする事なく、ひばりに自分のベッドを使うように言うとひばりは理音がどうするかと聞き返し、ひばりは理音にからかわれる。

第１１０問（前書き）

今回も例の如く、ＧＡＵさんに（以下略）

第１１０問

「……なぁ、ひばり、これはいったいどう言う状況だ？」

「だ、だって、あたしが悪いのに理音くんをソファーで寝かせるわけにはいかないでしょ！？」

なぜか、理音はひばりと一緒に理音のベッドに横になっており、理音はこの状況の意味がわからずに眉間にしわを寄せながらひばりに聞くとひばりは声をあげる。

「……あのなぁ。だからと言ってもな。普通に考えろ。俺はこの状況で何もしない自信はない」

「あ、あたしは理音くんがさっき言った事を信じてるよ……それに」

理音は流石にこの状況ではひばりを襲わない自信はないと言うとひばりは理音の手を取り少しだけ声を震わせながら理音を信じると言うと、

「……善処するが、約束はできない。それだけは覚えておいてくれ」

「う、うん」

理音はひばりの様子に何かあると感じたようで理性が抑えが効かなかった時の覚悟はしてくれと言い、ひばりは小さく頷く。

「……後はひばりが襲ってきたら、遠慮なく襲わせて貰うからな」

「襲わないよ！？」

「そうか。残念だ」

理音はどうにか平静を保とうとしているようでいつものようにひばりをからかいに移るとひばりはからかわれた内容に顔を真っ赤にして否定すると理音はそれなりに傷ついているようで小さな声でつぶやくが、

「だ、だいたい、そう言う事はきちんと手順を踏んでからだよ。結婚の後にする事であって、あ、あたし達はまだ高校生なんだよ。そんな事をして良いわけがないでしょ！！」

「……ひばりを押し倒す上で婚前交渉はないと……生殺しか」

ひばりは理音のつぶやきを聞き逃しておらず、顔を真っ赤にしたまま、高校生でエッチな事はできないと言い切り、理音はひばりの言葉に眉間にしわを寄せる。

「当たり前だよ。生殺しって言ったって、あたしは当たり前の事を言っているの！！

だ、だいたい、理音くんがエッチすぎるんだよ。すぐにあたしのブラを外したがったり、エ、エッチな本とかＤＶＤとか持って歩いたり、怜生くんに悪い影響が出たらどうするの！！」

「……あのな。ひばり、引き離して他から間違った知識を与えた方が不味いだろ。人間、異性に興味を持つのは動物として必要な事だ。理性だ。なんだと言っても人間は動物なんだから抑えが効かなくなる事がある。その時に正しい知識がなくて子供ができてしまったとかになったらどうするつもりだ？　俺は中絶には賛同しかねるぞ」

「そ、それは当たり前だよ。赤ちゃんの命を奪って良いわけがないでしょ！！　だからこそ、きちんと手順を踏まないとダメなんでしょ！！　結婚してきちんと子供を育てれる環境になってから、そう言う事はするべきなんだよ！！」

ひばりは理音がエッチなのが怜生の悪影響になると言うが理音には理音の怜生の教育方針があると言い、ひばりは理音の教育方針は間違っていると言う。

「……ひばり、お前の言う事も間違ってはいないのかも知れないがそれで収まりがつかないのが感情だ。それを理解しないでそのままにしていると問題があった時にどうするつもりだ？」

「で、でも」

「……現に俺は今、理性を抑えつけれるかわからないんだ。ひばりが好きだからな。それくらいは理解してくれ」

「う、うん」

理音はひばりの考えだけではどうでもならない事は必ずあると言うと、

「理音くん、どこに行くの？」

「……仕方ないだろ。さっきも言ったが、俺は自分を抑えつける自信がない。それでひばりを傷つけるわけには行かないだろ。ひばりが今日は1人になるのが不安だと言うのもわかるが俺は今の状況ではお前を傷つける事しかできないからな」

「……ゴメンね。理音くん」

理音はひばりを襲わない自信はないと言い彼女の頭をなでると部屋を出て行き、ひばりは自分が理音にどれだけ大切に想われてるか理解しながらも理音を引き留める勇気も自分が変わる勇気もなく、理音が閉めたドアを見て小さな声で理音に謝る。

第１１０問（後書き）

どうも、作者です。

こっちの理音はヘタレ？

ひばりを襲う事無く退却です。
部屋に取り残されたひばりは１人何を思うんでしょうか？

話の内容は若干、怜生の教育方針と言ったところは無視の方向で。
（爆笑）

第１１１問（前書き）

今回も、ＧＡＵさんに（以下略）

第１１１問

「……理音くんはまだ寝てるよね」

ひばりは朝になり目を覚まし、居間に下りると理音は居間のソファーで目を閉じている。

「……ゴメンね。理音くん、あたし、まだ勇気が出せなくて、もう少し待っててね」

ひばりは理音の頬を何度か指で突き、理音が寝ている事を確認すると自分の想いを口に出すと理音の寝顔を覗きこんだ後、理音との距離を縮め、理音の唇に軽く自分の唇を重ねると、

「……ん！？」

理音の手がひばりの背中に回され、ひばりを抱きしめ、ひばりはその手から逃げ出す事が出来ない。

「……ひばりから、襲ってきた場合は良かったんだよな？」

「り、り、理音くん！？　な、何で、起きてるの！？　そ、それにな、何をするの！？」

理音はしばらくひばりの唇の感触を味わった後、ひばりの背中に回している腕を緩め、ひばりが理音から離れようとするタイミングを見計らってもう１度、ひばりを抱きしめるとくすりと笑いながら彼女の耳元でささやくとひばりは今の状況に頭が付いて行けていないようで顔を真っ赤にして理音に聞くと、

「その質問の答えだが、勘違いするな。起きてるじゃなく、寝てないんだ。それに仕掛けてきたのはお前の方だ」

「理音くん、放して！？　この状況はダメだよ！？」

「……断る」

理音は１つ屋根の下にひばりが寝ていた事で眠れなかったようで寝てないと言うが、ひばりは理音に抱きしめられているこの状況が恥ずかしいようで理音の腕の中でジタバタと暴れるが理音が彼女を抱きしめている手の力を緩める事はないが、

「理音くん、待って。こんなのいやだよ」

「……あぁ。悪い」

ひばりは今の理音が怖いようで彼女は肩を震わせ、弱々しい声で理音に言うと理音はそんなひばりの声で少し冷静になったようで彼女を抱きしめていた手を緩めるとひばりは直ぐに理音から距離を取る。

「……すまない。怖がらせたな」

「そんな事はないよ。だって、理音くんだから、怖くないよ」

理音はひばりの様子に自分が彼女を怖がらせた事を直ぐに理解し、自分の行動に表情の少ないはずの理音の表情が小さく歪むとひばりは自分の行動が理音を傷つけている事を理解しているため、笑顔を見せて理音が怖かったわけではないと言うがその笑顔はやはりぎこちなく、

「……すまない。寝てないせいもあるから、抑えが効きそうにない。少し、頭を冷やしてくる」

「……ゴメンね。理音くん」

理音は立ち上がると頭を冷やしてくると言い、浴室に移動しようとするとひばりは理音の服をつかみ謝ると、

「……ひばり、謝るな。悪いのは俺だ。俺はお前を泣かせたくないんだ。大切にしたいんだ。でも、大切だから、好きだからたまにめちゃくちゃにしたくなる時だってある。前にも言ったが俺はガキなんだ。自分の感情をセーブできる自信はない」

「……うん。知ってるよ。理音くんがあたしをどれだけ大切に想ってくれてるかも、だから、ごめんなさい。理音くんの想いに直ぐに答えが出せない弱いあたしを許して」

理音は平静を保とうとしているがやはり抑えが効かないのか淡々と自分のなかにある黒い感情を吐き出すように言い、ひばりは理音の想いに答えられない自分が心苦しいようで肩を震わせ、痛みを吐き出すように言う。

「……ひばり、そんな顔をしないでくれ。笑って欲しいんだ。ひばりが笑ってくれないと俺は自分を許せなくなるから」

「……うん。そうだね」

理音は肩を震わせているひばりの頭を優しく撫でてひばりに笑って欲しいと言うとひばりはそんな理音に答えるように笑顔を見せる。

第１１１問（後書き）

どうも、作者です。

ひばり、理音を襲って逆襲に遭う。（苦笑）

この２人は書けば書くほど近づいているのか離れているのかわかりません。

ひばりが好きだから抑えが効かなくなる理音と理音の事は好きだけど前に進む事が出来ないひばり。

改めて、恥ずかしくなる２人です。（爆笑）

ひばりの背中を押すのに１ピース足りない感じがしています。

恋愛に積極的な同級生の女の子？って感じの娘ですね。

『サドで邪悪な召喚獣』のｉｆだから、１人自分の中で『弓永　深月』と言うのがいますがあれは深秋と同様にすべてを喰らいつくす暴走娘だから、理音が引っ張られる危険性が高いため、使うのを避けていたんですが、彼女を出すしかないのかな？（悪笑）

第１１２問（前書き）

今回はヒョウガさんに以下略。

第112問

「「……」」

理音が浴室から戻ってくるとひばりは朝食を用意していてくれていたのだが、2人の間には微妙な空気が漂っており、会話は始まりそうになく、

「……なぁ、ひばり」

「な、何!?　理音くん!?」

「……いや、何でもない」

理音は沈黙に耐えきれなくなり、ひばりの名前を呼ぶとひばりは身体をびくっと震わせ
理音はひばりの様子にそこで会話が止まり、無言での朝食が終わりそうになった時、

「な、何!?」

「ん?　こんな時間から誰だ?」

「待って!?　理音くん」

研究所の玄関の方から爆発音が響き、ひばりは突然の爆発音に驚きの声をあげるが理音は今の2人の空気が耐えきれなくなったようで1人で玄関に向かって行き、ひばりは休日の朝に響くわけのない爆発音に不安になったようで理音の後を追いかけて行く。

「……なかなかの装甲力だ。前田が設計しただけはあるな」

「マ、マスター！？　い、いくら、前田博士の研究所で近隣からは距離を取っていると言っても朝からこんな爆発を起こしたら通報されますよ！？」

理音とひばりが玄関のドアの前に立つとドアの向こうからは明らかにおかしな会話が聞こえ、

「り、理音くん、ドアって開けないとダメなのかな？」

「開けないとドアがなくなるだけだろうな」

ひばりは顔を引きつらせながらドアを開けないと行けないかと聞くが、理音はドアの外から聞こえる2人の会話にドアの先にいる人間に心当たりがあるようでため息を吐くと、

「海谷、ポンコツ、今、開けるから爆発物はセットするなよ」

「……ちっ。起きてるのか」

ドアの先にいるであろう陸とマーナにこれ以上おかしな事をするなと言うとドアの向こうからは舌打ちが聞こえる。

「……ねえ。理音くん、開けたら爆発しないよね」

「……確実にタイミングを見計らっているだろうな」

「……ちっ」

ひばりはドアの先から聞こえた舌打ちに顔を引きつらせたまま、不安なのか理音の服をつかみ言うと理音は絶対に爆発すると言うとその声を聞いていたのかドアの先の陸は舌打ちをすると、

「遅い」

「マ、マスター！？」

陸は待ちきれなかったようで再度、ドアの前から爆発音が響き、マーナは驚きの声をあげるが、

「……ちっ、これでも壊れないか。前田、無駄な抵抗を」

「ご主人様、目的が変わってきてますよ！？」

「目的？　俺の目的は爆発以外に何がある！！」

「で、ですけど」

「黙れ。ポンコツ。黙らないなら、お前もろとも爆発させてやる！！」

「マスター、頑張ってください」

ドアは未だに陸の爆発に耐えており、陸のおかしなプライドに火が点いたようで、爆発音が連続で鳴り響きだし、ドアの向こうでは陸とマーナのコントのような会話が始まっており、

「……理音くん、玄関のドア、いつまで持つかな？」

「さあな。とりあえず、裏から回るか？　ドアを開けて爆発の直撃を受けるかドアが破壊されてドアの破片が飛んでくるよりははるかに安全だろうからな」

「そ、そうだね」

ひばりは顔を引きつらせたまま、理音にどうするかと聞くと理音はドア1枚はさんだ先で起きている事など気にする事なく、キッチンにある勝手口に向かい歩きだし、ひばりは理音の後を追いかけて行く。

第１１２問（後書き）

どうも、作者です。

久しぶりの陸とマーナの登場に、理音とひばりの気まずい空気は壊されます。（爆笑）

理音の研究所は無駄に耐久性にすぐれています。でも、陸の攻撃にいつまで耐えきれるんでしょうか？

そして、陸とマーナが理音のもとを訪れた理由は？（悪笑）

第１１３問（前書き）

今回もヒョウガさんに（以下略）

そして始まるいかれた科学者同士の対決。

ツッコミどころは満載です。（爆笑）

第113問

「さぁ、行け。ひばり」

「あ、あたし？　む、無理だよ。あんな凄い爆発させてる人をあたしが止められるわけがないでしょ！？」

理音とひばりは勝手口から理音の研究所に向けて大がかりな爆発物をセットしている陸の後ろに回ると理音は背中からとーるはんまーを取り出し、ひばりに渡すがひばりは流石に今の陸に近づく事はできないと顔を引きつらせて首を振るが、

「大丈夫だ。俺がこの一晩で何もしていないと思うのか？」

「……何をしたの？」

理音はすでにいつもの様子に戻っており、邪悪な笑みを浮かべるとひばりは理音の笑みが酷く不安なようで聞き返すと、

「まぁ、使ってみろ。今はリミットも外されてるんだ。思いっきり、行け」

「む、無理、無理だよ。この距離じゃ届かないよ！？　……あれ？　リミットが外されてる？　……」

理音は良いからひばりに使ってみろと言い、ひばりはその理音の一言で理音から借りた服を着ているため、自分がノーブラだと言う事を思い出し、顔を真っ赤にする。

「り、理音くんのバカぁぁぁぁ！！！！！！」

「待て。俺はまったく悪くないんだが、待て。俺にじゃない。海谷にだ」

ひばりは顔を真っ赤にしたまま、全力の『しん・とーるはんまー』を放つと理音はいつもは喰らうはずの攻撃を交わすと理音が交わした『しん・とーるはんまー』の先の空間には小さな光の弾が現れバチバチと小さな音を立てている。

「理音くん、あれって何？」

「とーるはんまーの元になったものは『雷神の鎚』とも言われていてな。雷神とまで言われるんだ。雷属性の攻撃もできないかと思ったんだが、どうやら、成功のようだな。ひばり、とーるはんまーの叩く部分は絶縁性を上げて電気を通さないようにしてあるから、あの光の弾を陸に向けて打ってみろ」

「そんなの危なくてできるわけがないよ！？」

ひばりは目の前で起きている現象に顔を引きつらせるが理音は気にする事なく、とーるはんまーの改良点を話すとひばりはあり得ない状況に大声をあげると、

「仕方ないな。俺がやるか」

「……今、どうでも良い事を思い出したんだけど、理音くんって昔、野球が大好きだったよね？」

「ひばり、何を言ってる。現在進行形で大好きだ」

理音はひばりの手からとーるはんまー抜き取り、軽く素振りをするとひばりは理音の素振りの鋭さに理音が野球が好きだった事を思い出し、理音が素振りをするたびに空間には小さな光の弾が現れて行き、

「……喰らえ」

「ちょっと、理音くん!?」

理音は邪悪な笑みを浮かべるとちゅうちょする事なく光の弾を陸に向かい撃ちこんで行き、ひばりは驚きの声をあげるが、

「……前田、なかなか、面白い攻撃をしてくるな」

「何、朝に人の研究所を襲撃する爆弾魔を出迎えるには当然の攻撃だろ」

陸は懐から黒い生地を取り出すとその生地で光の弾を弾き飛ばす。

「えーと。これってなんなのかな?」

「マ、マスター、前田博士!?　電気は、電気はダメです!?　ノ、ノイズが!?」

ひばりは目の前で始まったいかれた科学者同志の戦いに顔を引きつらせるなか、陸の隣に置かれていたディスプレイからマーナの鳴き声が響くが、

「「黙れ。ポンコツ!!」」

理音と陸にマーナの叫びは一蹴される。

第１１３問（後書き）

どうも、作者です。

今更ですが、理音と陸、大貴の絡みは書けば書くほど作者が暴走します。（爆笑）

なんだこれ？　とツッコミどころはたくさんありますが気にしないでください。

いかれた科学者同士の戦いに顔を引きつらせるひばりと泣き叫ぶマーナ。

この戦いに終止符はつくんでしょうか？

後は、本編で本当にちらっとしか書いてませんが理音は野球好き。

素振りは科学者とは考えられないくらいに無駄にコンパクトに振りぬきます。

第１１４問

「それで、海谷。結局、お前は何しにきたんだ？」

「あぁ。大学でロボット工学の特別講義をやってくれと言われてな。俺はくるつもりはなかったんだが、所長がいかないと爆発をさせる前に完成間近の全ての研究を取り上げると言うからな。まったく、爆発１つ起こせない講義なんてやる価値すらないだろ」

「……」

理音と陸はあれから１時間ほど人智を超えた戦いを繰り広げた後、２人とも飽きたようで居間に移動すると理音は陸にここにきた理由を聞くと陸は大学での特別講義のためにきたついでに寄ったと言うが、２人の先ほどの戦いを見せつけられたひばりは顔を引きつらせたままである。

「それは所長も酷な事をお前のアイデンティティに関わるものを取り上げようとするとはな」

「まったくだ。この間、研究所のＡ棟を半壊させただけでそこまで言う必要はないだろ」

「……マスター、その程度で済んで良かったんだと思うんですけど」

「半壊？　これは夢、あたしの常識ではありえないから……」

理音は特に気にする事なく、３人分のコーヒーを運んでくると陸は今回の処置に文句があるようだが、実際は文句を言える立場ではな

く、ディスプレイに映るマーナはため息を吐き、理音が所属していた研究所の1部が半壊したと言う事実にひばりは付いて行けないようで小さな声でつぶやき現実から目を逸らそうとしているが、

「それで、前田、さっきから一緒にいるこの小さな生物は何だ？あれか？　召喚システムはオカルトとか言う非科学的なものが混じっていると言う噂も聞くが、『コロボックル』でも捕えて研究材料にしたのか？」

「ころぼっくる？」

陸は先ほどから理音と一緒にいるひばりが何ものか聞くと陸の口から出た聞きなれない言葉にひばりは現実に引き戻され首を傾げると、

「コロボックル。アイヌの伝承に登場する小人。アイヌ語で、『フキの葉の下の人』という意味」

「あたし、そんなにちっちゃくないよ！？」

マーナの映るディスプレイはコロボックルの説明が表示され、マーナの声で説明が読み上げられるとひばりは声をあげる。

「海谷、こいつは支倉ひばり。俺の幼なじみだ。その説も否定できないが現状では日本人と分類されている」

「そうか？　それは面白くないな」

「あたしはそんなにちっちゃくないよ！！」

理音は陸にひばりを紹介すると陸はひばりに興味がなくなったよう

でつまらなさそうにコーヒーに口を付けると、ひばりは流石に『とーるはんまー＝ばーじょんつう』は扱うのが怖いようでぽかぽかと理音を叩くが理音も陸も気にする事はなく、

「ん？　そうだ。前田、この間、お前が送ってきた、美春の血液のデータ何だが」

「何かあったか？」

「いや、俺が調べた時とは違うアプローチをしているからな。面白いと思っただけだ。お前のデータを基にすれば美春の父親を止める手立ても見つかるかも知れないな」

理音と陸は理音が調べ上げた『美春の細胞』の話題になり、

「確か、お前が作ったものは結果的に暴走状態の加速化するんだったか？」

「あぁ、俺の考えでは間違ってはいないはずだったんだが、お前の見つけたこの因子が正しいとすれば俺の薬はあの細胞は完全に異物と認識され、それを駆逐するために過剰反応の起こし、暴走状況を加速させたと推測される。まぁ、過去のデータだから修正しなければいけないがな」

「なるほど、それなら、そのデータをくれ。あの因子が過剰反応する因子を1つ見つけたんだ。それとの類似点、共通点から分析してみよう」

2人は邪悪な笑みを浮かべながら話を続けていく。

第１１４問（後書き）

どうも、作者です。

ひばり、さらに小さいものとして認識される。（爆笑）

そして、理音と陸の会話は『美春因子』に移行する。
美春の血液を採取した時からこの会話は考えていました。まあ、最初は電話でだったんですけど、直接の方が面白いかな？　と思いました。

第115問

「……なるほど、なかなか文月学園には面白いにんげ……モルモットがいるようだな」

「……マスター、どうして、わざわざ悪い方に言い直すんですか？」

理音が『美春因子を大貴に打ち込んだ時』と『大貴の細胞を近づけた時に起こった美春因子』の話をすると陸は楽しそうに口元を緩ませ、そんな陸の様子にマーナはため息を吐くが、

「些細な事だ」

「ですけど」

陸は気にするなと言い切り、マーナはそんな陸の態度に納得がいかなさそうな表情をしている。

「ん？　そう言えば、海谷、ポンコツはいつまでボディを破壊されたまま何だ？」

「あぁ。ボディを与えると動き回ってうるさい時が多くてな。目障りだから、そのままだ」

「そうなんです。マスターは酷いんです。前田博士、ボディがないと不自由です。私にボディを作ってください」

理音は必要な話はすべて終えたため、思い出したかのようにマーナがディスプレイに映っている理由を聞くと陸は表情を変える事なく

良い、マーナは理音にボディを作って欲しいと言うが、

「断る。俺も動き回るポンコツは目障りだからな」

「ちょ、ちょっと、理音くん、言い過ぎだよ！？　マーナさん泣いてるよ！！」

理音は陸の意見に全面的に賛成だと言い、ひばりは理音と陸の言葉にマーナがかわいそうだと言う。

「ひばり、優しい言葉をかける相手はしっかりと見極めろ。ポンコツにそんな言葉をかけるだけ無駄だ。このポンコツはそんな事をしたら調子に乗り、お前を下だと決めつけるからな」

「……ソンナコトハナイデスヨ」

「……」

理音はひばりに向かいマーナに気を使う必要はないを言うとマーナは耳が痛いのか理音から視線を逸らして片言の言葉で答え、ひばりはマーナの様子に顔を引きつらせる。

「小さな生物。前田が言った通り、そのポンコツには気を使う必要はない。作成した俺が言うのもあれだが、本当に役立たずだからな」

「マスター酷いです！？」

「当然の答えだろ。サポートナビとして、たいした役にも立たない。仕事をしないでインターネット三昧。お前を遊ばせるための無駄金を払う必要はない」

「研究所では海谷の爆発に次いで無駄な経費と言われてるからな」

陸はマーナに再度、ボディを与えるとどこかで遊びまわるとしか思っていないようでボディを作り直す気はないと言うと理音もマーナのボディを作る理由がないと言い切り、

「……えーと」

「まぁ、簡単に言えば、迷惑さは製作者の海谷に似たと言う事だ」

ひばりは話について行けないようで頭を押さえると理音は陸とマーナ2人とも迷惑な人間だと言うと、

「……それは言い過ぎじゃないかな？　そんな人だったら清瀬くんが……海谷くん、清瀬くんには会いに行ったの？」

ひばりは理音の言葉にため息を吐き、大樹が苦笑いを浮かべながらも陸の事を大切にしていると言っていた言葉を思い出したようで陸に大樹と会ったかと聞くが、

「いや、行ってないが？　それがどうかしたか？」

「行かなきゃダメだよ！？　ここより、優先して行く場所でしょ！？」

陸はひばりの言葉の意味がわからないと首を傾げ、ひばりはそんな陸の様子に驚きの声をあげる。

第116問

「なぜだ？　俺は今回はヒロにこれと言った用もないんだが」

「そう言う事じゃないでしょ！？」

陸はひばりが大樹に会いに行けと言う意味が理解できないようで首を傾げるとひばりは声を上げ、

「ひばり、俺が言うのも何だが、それはおせっかい」

「理音くんは黙っててて！！」

「……わかった」

理音自身も陸と同様に基本的には何か用事がなければ他人とは関わらない人間のため、ひばりが大樹に会いに行けと言うのはおせっかいだと言おうとするとひばりの怒声が響き、理音は口を閉ざし、

「前田、お前、弱いな。何があった？」

「マスター、前田博士も年頃の男の……前田博士！？　ディスプレイを閉めないでください！？」

陸は理音がどうして口を閉ざしたかわからずに首を傾げる隣りでマーナはニヤニヤと笑うと理音はマーナの言葉がイラっとしたようでマーナが映っているディスプレイを閉じる。

「海谷くん、清瀬くんはいつも君の事を心配してるんだよ。海谷く

んは人付き合いが得意じゃないからあっちで上手くやってるかとかいつも気にしてるんだよ！！　それなのに用がないから、会いに行かないってどう言う事！！」

「……いや、メールでやりとりもしているからな。近況はそれなりに知っているからこれと言って話す事もないんだが」

ひばりは先ほどの陸が爆発させていた事などすでにどうでもよくなったようで陸に説教を始めるが陸は説教などあまりされた事がないようで今の自分の状況がわからずに少しだけ引き気味に答えるが、

「そう言う問題じゃないの！！　清瀬くんにとって海谷くんは大切な幼なじみなの！！　会って話せば、話だって出てくるよ。理音くんとだって今、面と向かって話をしているから、話が進んだんでしょ！！　会えば、話だってあるし、何より、海谷くんの元気そうな顔を見れば清瀬くんが安心するんだよ。海谷くんや理音くんは確かに頭は良いのかも知れないけど、人の心も理解しないとダメだよ！！」

その一言がひばりに火を点け、陸への説教は勢いを増して行き、

「……前田、この小さな生物をどうにかしてくれ」

「……悪いな。こうなるとひばりは止まらない」

ひばりの説教にうんざりしてきたようで陸は理音に彼女を止めるように言うと理音は無理だと首を振る。

「……そうか。悪いな。前田、後は任せるぞ」

「あぁ。とりあえずはひばりの言う通り、清瀬には顔を見せて来い。見せないと次に同じ状況になった時に付いて行くとか言いかねないからな」

「あぁ。この後に寄ってくる」

「2人とも聞いてるの！！」

陸はこれ以上は気いていられないと判断してひばりを理音に任せると研究所から逃げ出そうとすると理音は頷き、日本にいる間に大樹には会って来いと言うと陸が頷いた時、ひばりは2人が話を聞いていないと判断したようで大声をあげるが、

「……わかった。俺は今からヒロのところに行ってくる。朝から前田との時間を邪魔して悪かった」

「ち、違うよ！？」

陸は荷物を急いでまとめると大樹に会いに行くと言い、他意もなくひばりに理音とのせっかくの時間を邪魔して悪かったと言うとひばりの頭の中には昨日の夜から陸が来るまでに起きた事を思い出したようで顔が真っ赤に染まって行き、

「前田、邪魔したな」

「あぁ」

陸はそんなひばりの顔を見てニヤリと笑った後、理音の研究所を後にする。

第116問（後書き）

どうも、作者です。

陸、ひばりの勢いに押されて逃げる。（爆笑）

そして、陸の一言に完全に忘れていた理音とのことを思い出し、顔を真っ赤にするひばりに何か余計な事を思いついたであろう陸。
この2人の絡みもどうなってくるんでしょうか？

そして、陸とマーナがいなくなって2人っきりになる理音とひばり。
気まずい空気は元に戻るのか？

そして、陸、大樹側は書くべきなのか？
たぶん、陸も言っていたけど、これと言って会話はないでしょうしね。（苦笑）

第117問

「……」

「どうした？」

「な、何でもないよ！？」

理音は陸と話をした事で通常運転に戻ったようで顔を真っ赤にしているひばりに声をかけるとひばりは全力で何もないと言う。

「そうか」

「……」

「何だ？」

「……理音くん、ずるい」

理音はすでに平静を取り戻しているため、これ以上は追及する事なく頷くとひばりはそれはそれでさびしいのか不満げな表情で理音にずるいと言うと、

「……意味がわからないんだが」

「……だって、あたしだけ緊張してるみたいだから」

理音は当然、首を傾げるとひばりは理音との事を思い出して自分だけが理音を意識しているのが悔しいと言う。

「……ひばり、勘違いするな。俺は顔に出ずらいだけだ。現に」

「……うん。本当だね」

理音は別に緊張していないわけではないと言うとひばりの手を自分の胸に押し当てひばりは手から伝わる理音の鼓動に少しだけ恥ずかしそうに目を伏せた後、理音を見上げると、お互いに意識している事もあるのか流石のひばりも状況に流されはじめ、理音とひばりの距離は縮まって行くが、

「何これ？　リオ、玄関どうしたの？　……ゴメン。ボク、帰るよ」

明久がインターホンも鳴らす事なく、研究所に入ってきてキスをする寸前の理音とひばりを見て引き返して行く。

「ま、待って。アキくん！？」

「……タイミングが悪いな」

ひばりは明久の登場で我に返り、明久を引き止めようとし、理音はそれなりに気まずいようで頭を掻くと、

「ボクの事は気にしないで、ボクはリオとひばりの事を応援してるから、今日、見た事もおばさん以外には言わないし！！」

「ダメだよ！？　それこそ、騒ぎが大きくなるよ！？　何も、何もないから、待ってよ。アキくん！？」

ひばりは明久に追いつき明久の服をつかみ引き止めようとするが、

明久は勘違い中のため、既にいろいろとてんぱっており、怜奈に報告をすると言い、ひばりは昨日の怜奈との電話もあり、それは傷口を広げる事になると叫ぶ。

「アキ、落ち着け」

「いだっ!?　何をするんだよ。リオ、バカになったらどうするんだよ!?」

「その点に関してはそれ以上、バカにはならないから安心しろ」

理音はひばりを引きずりながらも玄関に向かって行く明久に追いつくとスリッパで明久の頭を撃ち抜くと明久は理音につかみかかり、文句を言おうとするが理音はため息を吐くと、

「一先ずは落ち着け。話が進まない」

「そ、そうだよ」

明久に落ち着くように言い、ひばりは明久に話を聞いて欲しいと言う。

「だって、ひばりは理音の服をきてるって事は昨日はここに泊まって、それでさっきの状況でしょ。2人はボクとは違うところに」

「進んでないから!?　何もなかったから!?」

しかし、明久は今のひばりの格好と先ほどの2人の様子からすでに2人が大人の階段を昇りきったと思っているようで嬉しいような寂しいような複雑な表情をするとひばりは顔を真っ赤にしてそんな事

実はないと答え、

「だって、リオだよ。ひばりが何を言おうと無理やりと言うかひばりだってなんだかんだ言ってリオに押されたら流され……」

「ないよ!?」

「……アキ、お前も俺の印象はそれなのか?」

明久は結局、2人は両想いだと思っているため、2人の昨晩の様子を想像して放し始めるとひばりは全力で否定し、理音は明久にも野獣扱いされている事にため息を吐く。

第118問

「それじゃあ、本当に何もなかったの？」

「なかったよ！！」

ひばりは理音にキスをして抱きしめられた事は明久に隠し、理音が体調を崩した自分を心配して泊まるように言ったと明久に説明すると、

「……リオ、頑張ったね」

「……そうだな」

明久はひばりを襲わなかった理音を誉め、理音も最後の一線で踏みとどまった自分に複雑な気分ではあるようで眉間にしわを寄せて頷く。

「それで、アキ、お前はこんな朝からどうしたんだ？　休みなんだ。ゲームでもしてれば良かっただろ」

「うん。ボクもそのつもりだったんだけど、おばさんが昨日はリオが家に帰ってこなかったから、『様子を見て来てくれ』って」

「……」

理音は明久が休日の午前中から研究所に来た理由を聞くと明久は怜奈に頼まれたと言い、ひばりは怜奈が何を考えているのか理解したようで顔を引きつらせると、

「……アキ、お前、かあさんにはめられたぞ」

「そうなの？」

理音はひばりの様子に怜奈はひばりが研究所に泊まっている事を知っている事に気づいたようでため息を吐き、明久は理音の言葉に首を傾げる。

「たぶん。かあさんはひばりがここに泊まった事を知っていた。その上で自分でひばりをからかいに来るか、アキをここに送った方が面白くなると判断したんだろう」

「……うん。言われてみるとおばさんなら十分にあり得る」

理音は怜奈の考えが手に取るようにわかるのか、もう1度、ため息を吐くと明久も理音に言われて納得が言ったようで苦笑いを浮かべて頷くと、

「……今更だけど、迷惑な人だね」

「そうだな」

3人は家でこの光景を思い浮かべて楽しそうに笑っている怜奈の顔が思い浮かんだようで疲れたように肩を落とす。

「まぁ。元々の原因を作ったのは俺の性格のようだけどな」

「……ゴメンね。理音くん」

理音はひばりを見てため息を吐くとひばりは自分が怜奈に連絡したため、こんな騒ぎになっていると理解しているため、バツが悪そうな表情で理音に謝り、

「まぁ、過ぎたものは仕方ないな。ひばり、アキ、俺は今から玄関を直すから、何もないなら相手はできないから帰れ」

「ちょっと、リオ、結局、玄関はどうしたの？」

理音は特にひばりを責める気もないようで陸が破壊した玄関を直すと言い、居間の隅に置いてある怪しげな工具箱を手に玄関に向かい歩き出そうとするが明久はなぜ、玄関が傷だらけになっている理由がわからないため、理音の後を追いかけて行くと、

「……とりあえず、このままで帰るわけにはいかないよね？」

ひばりは明久が自分の格好を見て勘違いした事もあり、理音の部屋に着替えに戻って行く。

「へぇ、清瀬くんの幼なじみがきたんだ」

「あぁ。今更だが、迷惑な奴だな……まぁ、流石に威力が強いものは持ち込んでこなかったようだな。それとも研究所を半壊させた時に威力の強いものは誘爆してしまったかだな」

「……今更だけど、その人って何なの？」

「ん？　海谷陸。専門はプログラムとロボット工学、この分野にかけては現状で俺が知る限りあいつを超える天才はいない。本来なら、召喚システムの分析、解析も俺よりはあいつの方が向いているんだ

がな」

明久は陸が来た事を聞いて改めて、傷だらけになっている玄関を見て顔を引きつらせると理音は本来の陸の攻撃力ならこの程度ではすまなかったと言うと明久の顔は血の気が引いてくるが理音は気にする事なく陸の話をすると、

「リオ以上？」

「ん？　専攻分野や考え方の違いだ。俺はメインは薬学や医療関係、医療機器の開発にも協力しているから、海谷には医療機器でアドバイスをもらっている事もある。何より、もう結果が出ているものを1から自分で組み立てるのは時間の無駄でしかないだろ」

明久は理音が陸の事を天才だと言うのに少し複雑な表情をすると理音はあくまで力の入れている部分が違うだけだと言い、理音自身、必要な事は専門の人間に聞く事を恥とも思っていないためか明久の様子を気にする事はないが、

「まぁ。俺も専門的なものなら、誰にも負ける気はないがな」

「そうだよね。リオ、ボクにも手伝える事ってある？」

「ん？　それなら……」

自分の専門では誰にも負けないと表情を変える事なく、平然と言い切ると明久は理音の表情に笑顔を見せると理音の作業を手伝い始める。

第１１９問

「理音くん、アキくん」

「ん？　着替えたのか？」

ひばり自分の制服に着替え終わると玄関の修理をしている理音と明久に声をかけると理音はひばりが着替えているのを見て首を傾げ、

「何をするの！？」

「だから、それが身体に良くないと言っているだろ」

理音は直ぐにひばりのブラジャーのホックを外すとひばりは『しん・とーるはんまー＝ばーじょんつう』を理音に向け放ち、

「……リオ、これどうするの？」

「やはり、俺では性能を生かしきれないな」

理音は流石にバージョンアップした『しん・とーるはんまー』の攻撃は危険だと判断しているようでひばりの攻撃をかわすと空を切った『しん・とーるはんまー』は玄関の前に立っていた木を３本なぎ倒し、

「り、理音くん、こ、これ、直ぐに元に戻して！？」

ひばりは全力の『しん・とーるはんまー＝ばーじょんつう』の破壊力に顔を真っ青にして理音にバージョンダウンをするように言う。

「なぜだ？　専用武器とは持ち主とともにパワーアップするものだぞ。大貴や清水と知り合って成長したひばりのツッコミ能力を生かすのに充分な成長じゃないか」

「限度があるよ！？　と言うか、そんな成長いらないよ！？」

理音には理音のこだわりがあるようで専用武器は所有者とともに成長すると言い切るがひばりは顔を青くしたまま理音にやりすぎだと言うが、

「なぜだ？　ひばりのとーるはんまーがパワーアップしたのを見れば大貴は必ず『小烏丸』をパワーアップさせてくる。見たいと思わないか？」

「……リオ、見たいボクと見るのが怖いボクがいるんだけど」

理音はひばりがとーるはんまーのバージョンダウンをしたい理由がわからずに首をかしげ、明久も少しだけ理音の言葉が理解できるのか苦笑いを浮かべる。

「無理、無理だから、こんなもの、振りまわしたら大事件になるよ！？」

「まったく、わがままだな。ほら、スペアだ」

「あたしが悪いの！？　って、スペアがあるの！？」

ひばりは理音にとーるはんまーを押し付けると理音はため息を吐いて背中から、とーるはんまーのスペアを取り出し、ひばりは驚きの

声をあげるが、

「ひばりが使わないならどうするかな？　ひばりのデータを使って……一先ず、ラボの防衛システムに」

「使わないで！？」

理音はひばりの様子を気にする事なく新たな『しん・とーるはんまー＝ばーじょんつう』使用方法を考えはじめ、やはり、武器として使おうとするとひばりからツッコミが入る。

「冗談だ。一先ず、予備電源に使用できるか調整してみてできそうだったら、大規模なものにして召喚システムの予備電源にするか？」

「……召喚システムの予備電源にとーるはんまー？」

理音はとーるはんまーの有効利用を思いついたようでニヤリと笑うとその突拍子のない言葉にひばりは顔を引きつらせるが、

「プロジェクト『Ｂｅ　ｓｔｒｕｃｋ　ｂｙ　ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ』」

「えーと、雷が落ちる？　……ひばりの？」

理音は楽しそうに笑うと明久は苦笑いを浮かべ、

「やっぱりいるか？　それなら……」

「おかしな名前を付けないで！？」

理音はひばりの名前をプロジェクト名に入れた方が良いかと言うと
ひばりは当然、声をあげる。

第１１９問（後書き）

どうも、作者です。

とーるはんまーの有効利用？（爆笑）

理音のセリフで『ひばりの雷が落ちる』を英文にしたかったんですが、作者は学生時代英語は出来なかったので許してください。
そして英訳できる方は教えてください。正式な名前にして理音がひばりにしばかれますので。（爆笑）

第１２０問（前書き）

どうもです。
前回のひばりいじりから時間がたち、今回からは理音達が１年時の清涼祭準備期間になります。
どんな騒ぎが起こるんでしょうか？

第１２０問

「理音、やっぱり、火力は大切だよな？」

「ん？　そうだな。この程度の火力では足りん」

「……ヒロ、前田、あんた達は何をするつもりよ」

理音達が文月学園に入学して最初の学年行事である『清涼祭』の準備期間になり、Ｂクラスは喫茶店をやる事になったのだが、当然のように調理班は女子生徒達のプライドを完全に引き裂いた理音、大貴、終夜、大樹の４人が指揮っており、理音と大貴にいたっては教室に持ち込めるコンロでは火力が弱いと文句まで言い、コンロを改造し始めている。

「まぁ、木下も落ちつけよ。２人の言う事も正しいんだからな。それより、衣装の案でも出してくれよ。可愛くないといやだとかあれはいやこれはいやじゃなくてな」

「……清瀬くん、あなたって、何でもできるのね」

「ん？　家の手伝いをしてるからな。園児達は服は破くはいろいろと騒ぎを起こすからな」

「あぁ。何か、すまん」

大樹は理音テーブルクロスを縫いながら決まっていない接客班の衣装を決めようと言うと優子や女子生徒達は大樹の様子にまたプライドを引き裂かれ、大樹の実家に自分の弟を預けている終夜は苦笑い

を浮かべるが、

「気にするな。子供は元気よく遊ぶのが仕事ってね……完成」

「しかし、よくここまでのものを作れるな」

「そうか？　お前だって瑠衣くんにリュックとか作ってるだろ。あれだけのものが作れるんだ、これくらいできるだろ」

大樹は気にするなと言うと縫っていたテーブルクロスが完成したようで広げると終夜は感心したように言い、大樹もこれくらいなら終夜でも縫えると言い、

「……何かいろいろと自信をなくすわ」

優子と女子生徒のキズはさらにえぐられて行く。

「……理音、これは上げ過ぎじゃないか？」

「何を言ってる？　中華の基本は火力だぞ」

「嫌な。今回は中華喫茶じゃないからな。それにこんなに強い火力だと警報器とかならないか？」

「何を言ってる。この教室と言うか、この階の警報機は俺の花火に反応しないように電源を切っているから、例え、火事になろうが鳴りはしない」

大樹と終夜が女子生徒達のプライドを引き裂いているなか、理音と大貴はコンロの改造を終えたようで天井にまで届きそうな火柱が上

がっており、流石の状況に大貴は顔を引きつらせるが理音は気にする事はなく言い切り、

「それは問題大有りだ！！」

「……俺にそれを向けると言う事は死ぬ覚悟はできているんだろうな」

大貴は理音に向け、愛刀『小烏丸』を振り下ろすが理音は大貴の１撃を交わすと邪悪な笑みを浮かべると、

「理音、烏丸くん、一先ず、火を消したらどうかな？」

「ん？　保科、何かようか？」

Ｂクラスの周りは騒ぎを聞きつけた生徒達が野次馬に来ており、望が理音に火を止めるように言うが、

「なぜだ？　せっかく、火力をあげたんだ。海老チリの１つでも作ろうと思ったんだが」

「……理音の君の懐の中にはもう何も突っ込まないけど、流石に生ものはどうかと思うよ」

理音はせっかくの火力だから海老チリを作ると言い、懐から海老を取り出すと望はため息を吐く。

第１２０問（後書き）

どうも、作者です。

前書きにも書きましたが清涼祭に入ります。
どんな騒ぎになるんでしょうか？
相変わらず、大樹と終夜は女子生徒のプライドを無自覚で粉々にする。（爆笑）

理音の中華料理は無事に完成するんでしょうか？

第１２１問（前書き）

今回はクロさんに以下略。

第１２１問

「それで、保科、何かようか？」

「……本当に海老チリを作り始めるんだね」

理音は望のため息を気にする事なく、海老の下処理を始め出すと望はもう１度、ため息を吐くと、

「不満か？　それなら……天ぷらにするか？」

「……いや、メニューの問題じゃないからね」

理音は望が海老チリに不満があると思っているようで聞き返すと望は肩を落とすが、

「そうか？　一先ず、話の内容はなんだ？　長くなるなら、昼飯を作ってから行くから研究室で待っててくれ」

「……そうさせて貰うよ」

理音はメニューの問題ではないなら話の内容次第で場所を変えようと言うと望はため息を吐きながら教室を出て行き、

「それじゃあ、早いとこ、済ませて行くか。悪いな。これが終わったら、しばらく、空けるぞ」

「……前田、あんたが料理を出来るのは知ってるわ。だけど、あんたが何かするたびに女の子達のダメージが増えるんだけど」

理音は一先ずは料理を済ませて研究室に行くと言うと相変わらずの理音の料理の手ぎわに女子生徒達は膝を付き、優子は眉間にしわを押さえながら、理音に向かい少しは気を使えと言う。

「無理だな。理音だぞ」

「そうだな」

優子の言葉を聞き、大貴と終夜は理音が気を使うわけがないと言うと、

「……意味がわからん。だいたい、俺以上に家事ができる人間などそこら辺に転がってるだろ」

「……そうでもないわよ」

理音は気を使う意味がわからないと首を傾げ、優子は理音の言葉に納得がいかなさそうな表情をするが、

「そうか？　ひばりやアキは俺より、手際も良いし、味付けも上手い。そこの3人は言うまでもない。後は雄二も家事は得意だしな。康太は料理だけなら俺達に並ぶ」

「……支倉さん以外、女の子がいないんだけど」

「ん？　そうか。後は島田は終夜には劣るがそれなりに出来るぞ。本宮もな。後は瑞希は料理以外はまともだ」

理音は優子が納得しないため、例を挙げて行くがそのほとんどは男

子生徒であり、膝を付く女子生徒は数を増して行く。

「……前田、姫路の件が他とは違うんだけど」

「ん？　瑞希の料理か？　あれは俺が現状で知る限りの最強の化学兵器だ」

「化学兵器？」

理音の言葉に大樹は何か違和感を覚えてようで理音に聞き返すと理音は表情を変える事なく、瑞希の料理は毒だと言い切り、終夜は首を傾げると、

「そうだ。大貴、お前も芸人なら、１度位、食ってみろ。あれを喰らえば次からはどんな身体の張ったネタでも幸せに感じるだろう」

「……そんなおいしいものがこの世にあるのか？」

「あぁ。芸人なら１度は通るべきだと思うぞ」

「なるほど、それは面白い」

理音はリアクションや身体の丈夫さを考慮して大貴に瑞希の料理を薦めると大貴は芸人魂に火が点きかけているようで武者震いなのか、彼の本能が瑞希の料理を拒否しているのか身体を震わせている。

「……烏丸、前田の話を聞く限りは避けた方が良いと思うぞ。命に関わりそうだ」

「終夜、それは危険だ」

「芸人にやるなはやれと言ってるものだからな」

「そこまで、言われたら行かないといけないだろ」

大貴の様子に終夜は大貴を止めるが理音と大樹はそれが逆に大貴のプライドに火を点けると言うと、大貴は凄い勢いで教室を出て行き、

「……大貴は逝ったな。悪いな。俺は保科を待たせているから、研究室に行ってくる」

「……ねえ。前田、今、何となくなんだけどニュアンスが違った気がするんだけど」

「ん？　気にするな」

理音は懐から岡持ちを取り出すと自分と望の分の昼食を入れ、教室を出て行くと、

「烏丸くん!?　葵ちゃん、沙耶ちゃん、瑞希ちゃん。烏丸くんはどうしたの!?」

「えーとね。瑞希ちゃんが試作で作った料理を一口食べたら倒れちゃった？」

「瑞希ちゃん、何をしてるの!?　あたしと理音くんがあれだけ、人に食べさせちゃいけないって言ったよね!!」

「ご、ごめんなさい!!」

「ま、まずは蘇生をしないと！？　前田くんか土屋くんからＡＥＤを！？」

隣のＣクラスからは生徒達が慌てる声が聞こえ、

「……姫路の料理、恐るべし」

大樹がぽつりと漏らすとクラスメート達は皆同意見のようで大きく頷く。

第１２１問（後書き）

どうも、作者です。

大貴、散る。（爆笑）

やっぱり、瑞希の料理はネタに使わないといけないかなと。
そして、次回は理音と望のお話です。
何があるんでしょうか？（悪笑）

第122問

「……岡持ち？」

「ん？　どうかしたか？」

理音が研究室のドアを開けると理音の手にある岡持ちを見て望は自分の予想からかなりななめ上を行く理音の行動に顔を引きつらせるが理音は気にする事はなく、当然のように2人前のチャーハン、中華スープ、海老チリを岡持ちから取り出すと理音は昼食を取り始めるが望は状況について行けないせいか顔を引きつらせたままであり、

「食わないのか？」

「いや、食べるけどいくらなんでもこんなにがっつり作ってこなくても」

「ん？　身体を動かすエネルギーは必要だろ。お前の場合は細見に見えても充分な筋肉を付けているんだ。きちんと補給しないで必要な時にエネルギー切れも困るだろ。俺も同じだ。頭を動かすにはエネルギーは必要だからな」

理音は望に飯を食べるように言うと望は出てきた昼食の量に多いと言うが理音は自分と望には必要な量だと言い切ると、

「かもしれないけど……美味い」

望は理音なりの気づかいだと判断したようで苦笑いを浮かべたまま、理音の料理に口を付けると予想していた以上に美味しかったようで

驚いたような表情をする。

「そうか？　それは良かった……ん？　何だ？」

「……いや、ここにきて理音を見てきたけど意外と言うかなんと言うか、俺の中に有った理音の情報とはかなり違うからね」

理音は望が自分の料理を食べて美味いと言うのを見て小さく口元を緩ませるとそんな理音を見て望は苦笑いを浮かべると、

「そうか？　まぁ、それはお互いさまだろ」

「それもそうだね」

理音は直ぐに表情を戻し、それは自分から見た望も変わらないと言い、

「それで、お前が俺のところにきたのは清涼祭の裏で暗躍しているバカどもの事か？」

「あ？　やっぱり気づいてた？」

「あぁ。この間、海谷が土産だと言ってな。怪しい動きをしている奴らのデータを置いて行った」

理音は望が伝えに来た事を言い当てると望は苦笑いを浮かべ、理音は陸から事前に情報を貰っていたと言う。

「……海谷博士か。意外なところから情報が来るもんだ」

「あぁ。ついでだとは言っていたがそれなりに気にしているんだろ」

「……彼にもここにはそれなりに大切なものがいるみたいだしね」

望は理音に陸が情報を持ってきた事に驚きを隠せないようだが理音はひばりに詰め寄られて渋々、大樹に会いに行った陸の顔を思い出しているようでくすりと笑うと望も陸の関係者を調べ上げているようで苦笑いを浮かべると、

「保科、お前が俺にそれを伝えようとしたと言う事は現在は敵にはなっていないと言う事だな？」

「まあね。依頼者しだいって言うのが煮えきらなくて悪いけど、現状で言えば敵には回らないよ。まぁ、信じるかは理音に任せるよ」

理音は望に敵になる可能性を聞くと望は現状では中立だと言うが理音を試すように笑うが、

「そうか。お前が敵に回る事は避けたいから良かった」

「……」

理音は望の言葉を全部信じると言い切り、望は理音の反応に戸惑ったような表情をする。

「どうした？」

「いや、そんな風に直ぐに信じてくれるとは思わなかったからね。自分で言うのもなんだけど俺は胡散臭いでしょ」

理音は望の表情に何かあったかと聞くと望は苦笑いを浮かべるが、

「ん？　友人を疑うとひばりからとーるはんまーが飛んでくるしな。それにアキや怜生にも怒られる」

「そっか。そうだね。烏丸くんを見てるとなかなかの威力みたいだから、俺も喰らわないように気を付けないと」

理音は望を友人として認識しているようでここで望を疑うとひばり、明久、怜生の3人に怒られると言うと望は優しげな笑みを浮かべて理音に改めて敵には回らないと言う。

第１２２問（後書き）

どうも、作者です。

清涼祭の裏で暗躍する影。

竹原かは考え中。

現在で敵役って竹原と大貴の実家ですね。

まだ、大貴の実家は出てきてないけど、望の依頼主もそろそろ考えないといけないかな？と思いながらもう少し保留でやっぱり、望は好きなキャラだから敵に回したくもないですしね。

でも、取り合えず、ＧＡＵさんのとこの大春先輩は血祭りにあげます。

そして、改めて、この小説の中心は理音でなくひばりだと思う。（苦笑）

番宣

以前、活動報告に書かせていただいたバカとテストと召喚獣の二次創作『バカとテストと勤労少年』を投稿しました。こちらと同様に楽しんでいただければ幸いです。

第１２３問（前書き）

今回はあづまさんに怒られるかも知れません。

そして、『秘めた想いと倒錯娘』より、すべてを破壊するかも知れない少女『弓永深月』の登場です。

改めて考えると深月は利光の幼なじみなので望と沙耶とも幼なじみになるんだよな。（苦笑）

第123問

「それじゃあ、理音、ごちそうさま……食器はどうしたら良いの？」

「ん？　気にするな。家に持って帰るから」

「……今更ながら、物理法則とかいろいろな物を無視した制服の中だね」

望は食べ終えた食器をどうするかと理音に聞くと理音は食器を岡持ちのなかに戻すと岡持ちを懐の中にしまい、望はそんな理音の様子に顔を引きつらせると、

「何を言ってるんだ？　これくらい、誰にだってできるだろ。ひばりや大貴だってやってるだろ」

「……とーるはんまーに小烏丸ね。そうだとしても理音の収納量はおかしいからね」

「そうか？　それは片づけができない人間と同じ言いわけじゃないのか？」

理音はひばりや大貴を例えにこれくらい誰にでもできると言うが、望はそうだとしても理音の収納量はおかしいと言い、理音は首を傾げるが、

「まぁ、気にしても仕方ないだろ。そろそろ、帰らないとお互い、うるさく言われそうだしな。戻るか？」

「……そうだね」

気にする事なく、お互いの教室に帰るかと提案すると望は何かあったようで教室に戻りたくはなさそうに頷く。

「クラスの出し物で……玉野がまた何かしたのか？」

「……いや、玉野さんだけなら落ち着けば交わしきれるんだよ。だけど、うちのクラスにはもう1人、彼女レベルがいる。そして、その1人は知り合いの分、彼女以上に質が悪い……」

望の様子に理音は美紀が何かしたのかと聞くと望は美紀に並ぶ強者がいると言うと、

「ここ？　深月ちゃん、ここに望がいるの？」

「必ずいる。ボクの腐女子センサーがここには望と『サド系イケメン』がいると言っている」

廊下から沙耶ともう1人の女の子の声が聞こえ、

「のぞむ――――！！」

「……白石、保科に向かって飛んでくのは止めないが、この部屋では止めてくれ。混ざると爆発する薬品もあるからな」

勢いよくドアが開くと沙耶が望に向かい飛来してくるが望はその飛行物体を交わし、床にぶつかりそうな沙耶を理音は受け止めるとため息を混じりで沙耶にこの部屋では跳ぶなと言う。

「うん。気を付けるよ。マエダっち」

「……その前に沙耶が俺に飛びつくのを止めてくれないかな」

沙耶は理音の言葉に謝ると望は理音の注意は間違っているとため息を吐くが、

「望が運命の恋人である私をちゃんと受け止めてくれないから、マエダっちに怒られたよ」

「だそうだ」

「……違うからね。沙耶が飛んでくるのが悪いんだからね」

「いやいや、1度でも望が沙耶を抱きとめるかお姫さま抱っこでもすれば、状況も……違うね。望はどちらかと言えば『受け』っぽいから、こっちのサド系イケメンくんが望をお姫さま抱っこ？」

沙耶は望が自分を受け止めないのが悪いと言い、望は大きなため息を吐く隣りで沙耶と一緒に研究室に入ってきた女子生徒は妄想に花を咲かせ始める。

「ちょ、ちょっと、深月、おかしな事を言わないで！！」

「そうだよね。こっちのサド系イケメンくん×アキちゃんが主流だよね。望とは利光が人気だし……ヤバい。これだけでおかず無しでご飯3杯はいける！！」

「……保科、白石、こいつはなんだ？」

望は女子生徒の妄想を止めようとするが彼女の妄想は加速し、理音は自分の常識の中にはない人種を見たようで眉間にしわを寄せながら望と沙耶に女子生徒の事を聞く。

第１２３問（後書き）

どうも、作者です。

作者のキャラクターで『僕と歪んだ愛情表現？』の深秋に並ぶ暴走娘の登場です。
深月の物語は完結してないんですけどね。

……だって、出した方が面白そうなんだもん。

出さないといけないでしょう！！（爆笑）

彼女の登場で望とひばりの苦労は『絶対』に増えます。

第１２４問（前書き）

設定やらいろいろに現在登場しているキャラクターのクラス名簿を載せました。

そして、今回もあづまさんに以下略。

第１２４問

「前田っち、この子は私と望の幼なじみの『弓永深月』ちゃん」

「もう１人、男で『久保利光』って言うのがいるんだ。トシも深月も俺と同じＡクラスね」

「そうなんだよ。聞いてよ。前田っち、幼なじみで私だけ別のクラスになっちゃったんだよ。まぁ、ひばりんや瑞希ちゃん、葵ちゃんとお友達になれたんだから良いんだけど、やっぱり、寂しいと思わない？」

「久保利光？　……あの危険男か？」

理音の言葉に望と沙耶が理音に『弓永深月』とここにはいないがもう１人幼なじみがいる事を教えると理音は『久保利光』と言う名前に何か感じたようで眉間にしわを寄せて言うと、

「……沙耶、望、このサド系イケメンくんは鋭いね」

深月は理音の言葉に目つきを鋭くして理音が鋭いと言うが、

「トシが危険？　深月も理音も何を言ってるんだよ」

「……知らないのは本人のみと、それで、沙耶、望、この人、誰？」

望は意味がわからないようで首を傾げると深月はため息を吐いた後、理音の顔をまじまじと見て、理音の事を２人に聞く。

「深月、前田っちは前田っちだよ」

「前田理音。Ｂクラスだ」

「弓永深月です……前田理音？」

沙耶は紹介にならない紹介を深月にすると理音は自分の名前を名乗り、深月も改めて自分の名前を名乗ると理音の名前で何かを考え、

「確か、ひばりの彼氏」

「そうだよ」

「もう、その認識なんだな」

「仕方ないと思うよ」

ある答えに行きついたようでポンと手を叩くと沙耶は深月の答えに頷き、理音は望や他にも同じように言われているようで特に反応する事はなく、そんな理音の様子に望は苦笑いを浮かべる。

「弓永、現状で言えば、俺はひばりの彼氏では無いんだが」

「別にかまわないでしょ。２人は両想いなんだから、ひばりが前に踏み出す勇気がないだけでしょ。後、ボクの事は深月で良いよ。弓永って呼びにくいしね。ボクも理音って呼ばせて貰うから」

「あぁ。わかった」

理音は現状ではひばりとは深月が言う関係ではないと言うが深月は

考えを変える気はないようでひばりの事を勇気がないと切り捨てると理音にお互いに名前で呼び合おうと言い、理音は頷くと、

「深月、支倉さんにも支倉さんの考えがあるんだから、そんなにばっさりと」

「鈍いフリしている望は黙れ。実際、踏み出す勇気がないなんて、相手に失礼だよ。理音はひばりの事を好きだって言ってるのに自分の答えだって出てるのに引きのばして、付き合う勇気がないって言うなら、しっかりと断るのが礼儀でしょ。そうじゃないと告白してきた相手だって次の恋に進めないんだから」

「……深月、それは俺がふられる前提の話に聞こえるんだが」

望は理音と深月のやり取りに苦笑いを浮かべたまま深月を諫めようとするが、深月は望に口を出すなと言い、理音に向かってひばりは卑怯者だと言い切ると理音は深月の言葉に軽いダメージを喰らう。

「別に理音を責めてるわけじゃないって、ただ、ボクはひばりのやってる事が気に入らないだけ、ひばりは友達だけど、良い子でいようとし過ぎてるでしょ。もっとわがままでも良いのに理音はひばりのわがままを聞くくらいの器を持ってる。もしくは持とうとしてる。そうでしょ？」

「あぁ。そうなりたいと思ってる」

「よく言った。頑張れ。男の子」

深月は理音の様子に苦笑いを浮かべると先ほどまでの彼女とは全く違う人物のように真剣な表情になり、理音にひばりの事を本気で好

きかと聞くと理音はそれに関しては誰にも負けないと言いたげに優しげな笑みを浮かべて頷き、深月は理音の答えに満足したようで理音の背中を叩くと、

「望、そろそろ、戻るよ。ボクと美紀とで望の分のメイド服を１０通り、用意したから、もちろん、フルオーダーの特注品だよ。ボクの目で寸分の狂いもなく弾きだした望のサイズで作ったから、サイズはぴったりだからね。遅れたら、のぞみちゃんには清涼祭はフル稼働で働いて貰うからね」

「ちょ、ちょっと、深月、俺の分のメイド服ってなんだよ!?　それに数が多いよ!?」

望をからかうように笑うと１人で研究室を出て行き、望は深月の言葉に慌てて研究室を出て行き、

「……騒がしい幼なじみだな」

「うん。でも、楽しいよ。前田っちもそうでしょ？」

「……あぁ。そうだな」

理音と沙耶は望と深月の後ろ姿に顔を合せて笑う。

第１２４問（後書き）

どうも、作者です。

深月の暴走は周りを巻き込みます。

現状で恋愛に前向きな女の子ですから、ひばりの煮え切らない態度は少し気に入らないでしょうね。

深月はひばりにどんな影響を……ひばり、彼女の勢いに飛ばされるかも。（爆笑）

第125問

（……海谷が持ってきた情報でも俺の調べた情報でも今のところ内部のシステムからの接触はない。まぁ、現状で言えば特に付け入るスキはないからな。問題はここここが繋がった場合だな。現状で言えば烏丸グループもばばあのところの裏切り者も私立も、ばばあを引きずり下ろしたい小者も点で動いている。何かの拍子で接触、同盟が厄介だ。保科の依頼主も正体が見えないのが不気味だな）

理音は教室に戻り、作業を続けながらも陸の持ってきた情報と自分が調べた情報との整合を図っており、

（……まぁ、文月学園をどうするかあちら側でも意思統一ができていないようだからな。清涼祭でガラの悪い奴らを使っての小さな小競り合いが有るくらいだとは思うが警戒はしないといけないな。ウチは試験校で注目もあるからな。外部の奴らが敷地内で騒ぎを起こしても小さな火種は点く、その火種をどこがでかくするかだな。まぁ、現状で利に飛びつきそうなのはウチの小者か？　こいつが1番、欲が深い上に浅はかだから簡単に使われる可能性が高いか。他にはここここ）

現状では気にするレベルではないが警戒はしないといけないと思い、ため息をついた時、

『1年Bクラス、前田理音くん、至急、教頭室まで』

「ん？」

「前田、あんた、また何かしたの？」

校内放送で理音の呼び出しがかかり、優子は理音を疑うような視線を送るが、

「現状で言えば、俺は何もしていない。ただ……いや、良い。ここでお前らには関係ない」

「……」

理音は何か言いかけるがクラスメート達に聞かせる話ではないため、首を振るとその様子に大貴だけは何かを感じ取っているようで険しい表情で理音の顔を見ると、

「大貴、今回は何もないはずだ。現状で動いてくるのは上に昇り詰めようとしている小者くらいだ。俺がいる事でシステムのセキュリティは素人に気が生えた程度の人間には潜入できなくなっているからな。それなりに優秀な人間はまだ何もしてこない」

「……あぁ」

理音は大貴の肩を叩くと大貴は頷くがその表情から険しさが取れる様子はなく、

「……木下姉、大貴が俺をおかしな目で見るんだ。俺はそっちの気はないから、どうにかしてくれ。大貴をまっとうな道に戻すのはお前の役目だろ」

「おい。俺はそんな気はない！！　だいたい、優子にそんな事を言ったら脳内でおかしな!?　や、止めろ!?　優子、俺の腕はそっちには曲がらない!?」

「ヒロ、どうして、あんたは余計な事を言うのかしら?」

理音はくすりと笑って優子の方に大貴を押すと大貴は理音の言葉を全否定しようとするが、その言葉は優子の逆鱗に触れ、大貴は笑顔の優子に関節技をかけられ、

「秋月、清瀬、呼びだしみたいなんでな。少し空ける」

「あぁ。教頭先生からの呼び出しだろ。早く行った方がいいんじゃないのか?」

「こっちは任せて行ってこいよ」

理音は終夜と大樹に教頭室に行ってくると言うと2人は理音が考えている事を知らないため、特に気にする事なく理音を見送り、

(さてと何が出てくるかだな。まぁ、レベルの低いザコだろうがな)

理音は面倒そうにため息を吐きながら教頭室に向かう。

第126問

「失礼します」

「よく来てくれたね。前田博士」

理音は教頭室に顔を出すと竹原教頭が理音を迎え入れる。

「それで、何か御用ですか？　俺もクラスの準備をしないといけないんで、自分の立場も器も測れないバカの相手をする暇はないんですが」

「……入ってくるなり、ずいぶんな態度だね。君は1学生であって、私はこの学園の教頭なんだが」

理音は教頭の相手をする暇はないと言うと理音の態度に竹原教頭は眉間にしわを寄せるが、

「……あんたバカだろ。俺はあくまで文月学園の生徒ではなく、召喚システムの分析、解析を依頼された研究員なんだ。費用は安いがきちんと俺の給料は人件費に入っているだろ。学生の立場や学生からの召喚システムの状況を見るために生徒になっているんだぞ」

「……」

「おい。お前、金の管理をするために文月学園に雇われれるんだろ。自己顕示欲だけの小者はいらないぞ」

理音は竹原教頭に向かい大きなため息を吐くと竹原教頭は黙ってし

まい、理音は予想以上の竹原の小者っぷりに唖然とすると、

「……まぁ、座りたまえ。本題に移ろうじゃないか」

「話を逸らすな。まぁ、時間の無駄な気がするから、それでも良いか」

竹原教頭は自分の分の悪さに話を変えようとし、理音は眉間にしわを寄せて竹原教頭に薦められたソファーに腰を掛ける。

「まぁ、君みたいな人間にいろいろ言っても無駄だろうから単刀直入に言おう。私に協力しろ」

「断る」

「……」

「……おい。続きを考えてないのかよ」

竹原教頭は高圧的な態度で理音に協力をしろと言うが理音は一言でその言葉を斬り捨てると竹原教頭は断られるにしてもここまでバッサリと斬り捨てられるとは思っていなかったようで次の言葉が出てこなく、理音はため息を吐く。

「なぜだ!?」

「当たり前だろ。沈む船に乗るバカはいない。今のまま、あんたが動くと社会的に終わるぞ。今はそれなりに高級額で雇われてるんだ。おかしな事を考えずに働けよ」

「何を言っているんだ!!　あんな経営のけの字も知らないような奴の下で働けるか!!」

「……おい。あのばばあの名前でここにはスポンサーが付いているんだ。ばばあが退陣すればスポンサー収入は確実に減るぞ」

竹原教頭は理音に向かい訳を話せと怒鳴りつけると理音はすでに話す価値はないと思いながらもカヲルをトップにおいている利点はあると言うが、

「それは君の名前で」

「ばばあが退陣すると俺はここに残る理由もないしな。あんたは召喚システムが金になるとは思っているがそれを維持するのに必要な人材がいるとか言って召喚システムを利用したい奴らが研究員を送りこんできて、召喚システムを文月学園から切り離しにかかる。そんな奴らには俺は邪魔だから文月学園にはいらないと言われるだろうな。召喚システムを切り離した文月学園には価値はない。後はここは他の私立に蹂躙される」

竹原教頭は理音の言いたい事が理解できないようで理音を広告等にしようとするが、理音はカヲルがいなくなれば自分は文月学園から去る事になると言うと、

「……」

「言い方が悪いが、現状で言えばあんたはばばあが居なくなれば終わりだ。他の私立から引き抜きもあるかもしれないがな。トカゲのしっぽ切りにあって終わり、今の生活を守りたければ下手な欲は出さない方が良い。理解出来たか？」

竹原教頭は黙り込んでしまい、理音はそんな竹原教頭を見てため息を吐く。

「……しかし」

「それに仮にもあんたはここの教頭だろ。もっと周りを見ろよ。ガキはガキなりに学生生活ってものを楽しんでるんだ。あんたはどうだったんだ？」

「……」

「俺の話は終わりだ。動くなら清涼祭の後にしてくれ。今は盛り上がってるからな。ただ、俺は売られたケンカは買う。あんたがおかしな行動をするようなら、一族郎党、全て潰してやる」

理音の言葉に竹原教頭は状況を理解しようとするが直ぐに頭がまわらないようで眉間にしわを寄せるが理音は気にする事なく立ち上がると邪悪な笑みを浮かべてケンカを売る相手は間違えるなと言い、教頭室を出て行く。

第１２７問（前書き）

今回はクロさんとあづまさんに怒られるかも知れません。

第１２７問

（……あれで、少しでも冷静になってくれれば良いんだが、まぁ、意地になって仕掛けてくるなら単体でならどうにでもなるからな）

「竹原教頭が接触してきたみたいだね」

理音は教頭室を出ると竹原教頭がバカな事をしない事を祈るしかないため小さくため息を吐くと１人のメイド服姿の少女が話しかけてくるが、

「……そうだな。わざわざ放送で呼び出すなんて、レベルが低すぎて裏があるかとも思ったが何もなくて呆れた」

「確かにね。校内放送でどうどうと呼び出されたら学園長先生にもばれるし、理音と学園長先生の繋がりだって教師陣には知られてるんだから、ある程度、頭が回る人間なら絶対にそんな凡ミスはしないはずだからね」

理音は少女の声に振り返る事なく返事をすると少女も竹原教頭の行動は考えが足りないと頷く。

「あぁ。１番、心配していたのは烏丸グループ内で欲深い人間が大貴を傀儡にする事ために竹原を使って接触してくる事だったんだが、竹原単体だったからな」

「確かに、烏丸くんは烏丸グループを裏で牛耳ろうとする人間が出てきたら絶対に手に入れたい駒だよね」

「あぁ、大貴を使って、今、烏丸グループがどうにか手に入れようとしている召喚システムを手に入れれば例え妾腹だろうと大貴の存在から目をつぶるわけにはいかなくなる。２つの駒を手に入れた人間が出てきた場合、烏丸グループの力関係は一気に変わる。長兄だから後継にするとは周りも言えなくなってくるだろうな」

「……そんな事、させるわけにはいかないけどね」

「……あぁ。あいつが本気で烏丸グループを変えたいと思い動き出したなら協力を惜しむ気はないがそれ以外の事では俺は動く気はない。保科、お前の仕事外だがあいつに接触がないか余裕があったら見ていてくれるか？」

理音は現状で最悪だと考えていた事ではないため、安心はしているようだが、不安は拭いきれないようで少女を『保科』と呼び、大貴の周りに注意してくれと頼むと、

「……理音、今更なんだけど、気づいているのにスルーされ続けると俺も傷つくんだけど」

少女は理音の言葉に苦笑いを浮かべる。

「ん？　……結局、着替えさせられたのか？」

「……あぁ、深月と着る、着ないで揉めてる間に玉野さんに後ろから捕まった」

「連携に捕まったわけか」

「……あぁ」

理音は振り返り少女を見ると少女はメイド服に着替えさせられた望であり、理音は望の姿にため息を吐くと望は肩を落として大きなため息を吐くと、

「動きまわるなら、せめて着替えてきたらどうだ？」

「これを着せられた時に深月が俺の制服と体操服を持って逃走したんだよ。それも俺の設置している監視カメラや盗聴器にも引っかからなくてどう動いているかわからないんだよ。」

「……深月、予想以上に厄介な奴だな」

理音は望に着替えて動けと言うが望の制服は深月が持って逃走したと言い、忍者である望を簡単に撒いてしまう深月の存在能力（ポテンシャル）に理音は眉間にしわを寄せ、

「とりあえず、着替えるか？」

「……遠慮なく借りるよ」

懐から予備の制服を取り出すと望は苦笑いを浮かべて理音から制服を受け取ろうとした時、

「前田くん、その人、誰ですか！！」

「ひばりちゃんがいるのにその子は誰ですか！！」

「理音、ワシはお主を見そこなったのじゃ！！」

望を完全に女の子だと判断しているようで秀吉、瑞希、葵の３人は理音と望の様子を見て完全に勘違いしており、理音を非難するように叫ぶ。

第１２７問（後書き）

どうも、作者です。

理音と望のマジ話、だけど、望はメイド服。（爆笑）

そして、バカテスお約束の勘違い。（苦笑）

どうなるんでしょうか？（悪笑）

第128問

「……お前らは何をわけのわからない事を言ってるんだ？」

「えーと」

理音は3人の声に眉間にしわを寄せると望は今の自分の姿もあるため苦笑いを浮かべるが、

「何をじゃないです！！　その人は誰ですか！！」

「そうじゃ、わかるように説明するのじゃ！！」

3人は完全に望を女の子と認識しており、理音に説明を求め、

「……保科、これはどうしたら良いと思う？」

「えーと、よくわからないかな」

理音は眉間にしわを寄せて望に聞くが望もどうしていいかわからないようで首を振った時、

「ん？」

「理音、お主はいきなり何をするのじゃ！？」

「深月！？」

理音は何かに気づき、懐からスリッパを取り出し投げつけるとスリ

ッパは秀吉の顔面スレスレを通り、1人の女子生徒の顔面に命中し、秀吉は驚きの声をあげるが女子生徒は深月であり、望はスリッパを喰らい今の状況を頭で処理しようとしている深月との距離を縮めると彼女の首をつかむ。

「き、汚いぞ。理音、のぞみちゃん、こんなプチ修羅場を作ってボクをおびき寄せるなんて汚いぞ!!」

「……汚いも何もないからね」

深月は今の状況を嗅ぎつけて現れたようで理音と望に向かい汚いと叫ぶが望は大きなため息を吐くと、

「深月ちゃん?」

「瑞希、葵、助けて」

瑞希は深月が捕まっているのに首をかしげると深月は瑞希と葵に助けを求めるが、

「……悪いのは深月だからね。それで、深月、俺の制服をどこにやったんだ?」

「俺じゃと?」

「えーと、前田くん、どう言う事ですか?」

望はため息を吐き、深月に制服を返すように言うと望の1人称を聞き、秀吉と葵は首を傾げて理音に今の状況を聞く。

「保科望。Ａクラス所属。まぁ、今はのぞみちゃんだがな」

「男の子なんですか？」

「うん。今はちょっとわけがあってね」

理音は望の紹介をすると葵は望が男と言う事実に驚きを隠せないようであり、望は一先ずはおかしな誤解は解けたと思い苦笑いを浮かべた時、

「のぞむ――――――！！」

「沙耶ちゃん！？　と、止まって！！」

ひばりを引きずったまま、沙耶が望に向けて飛来する。

「さ、沙耶！？　ちょ、ちょっと、深月、放せ！？」

「ふふふ。ひばりを連れての突進。この突撃を喰らえば望もイチコロだね♪」

「それは違う意味だ！！」

望は沙耶を避けようとするが深月が望の手からすり抜け望をがっちりつかみ、望の逃げ道を塞ぎ、望は流石に交わしきれなく、沙耶が望に直撃しそうになるが、

「あれ？」

「……白石、ひばりを巻き込むな」

「理音くん、ありがとう」

理音が沙耶を捕まえ、望への直撃を止める。

「助かった」

「理音、何で止めるの？」

「決まってるだろ。保科がどうなろうと知った事ではないがひばりを危険な目にあわせるわけにはいかない」

望は理音の行動に安心したように言うが深月は望とは対照的に不満げに言い、理音はひばりの安全を優先したと言い切り、

「愛されてますなぁ。ひばり」

「うむ」

深月は理音の言葉にニヤニヤと笑ってひばりをからかうように見て秀吉は頷くと、

「ち、違うよ！？　深月ちゃん、おかしな事を言わないで！！」

「ん？　俺はひばりを愛してるぞ」

ひばりは顔を真っ赤にして否定するが理音は表情を変える事なく言い切る。

「り、理音くんのバカぁぁ！！　大嫌い！！」

「ひばりん、逃げたね」

「さ、流石に嬉しいけどここまで注目が集まってると恥ずかしいですよ」

ひばりは理音の言葉に耳まで真っ赤にするとこの場から全力で逃げだし、

「理音、追いかけ無くて良いの？」

「望、ダメだよ。理音も今は予想以上にダメージが大きいから」

望は苦笑いを浮かべながら、理音にひばりを追いかけ無くて良いのかと聞くが理音はひばりの『大嫌い』の一言に深刻なダメージを受けており呆然と立ち尽くしている。

第１２９問（前書き）

今回もＧＡＵさんに以下略。

第１２９問

「前田くん、ひばりちゃんを追いかけなくて良いんですか？」

「そ、そうですよ」

瑞希と葵は呆然としている理音の身体を揺するが、

「予想以上のダメージだね」

「そのようじゃのう」

理音はぴくりとも動かずに望は頭を押さえ、秀吉は見た事もない理音の様子に顔を引きつらせると、

「とりあえず、望に沙耶、理音を任せるよ」

「深月はどこに行くの？」

「ちょっと、ひばりを探してくるよ。今回はボクも悪いからね」

深月は望と沙耶に理音を任せると言い、ひばりの後を追いかけて行く。

「深月ちゃん！？」

「姫路さん、とりあえず、深月に任せて、いつもはふざけてばかりだけど、こう言う時は頼りになるからね。沙耶、理音だけど運ぶのは研究室で良いかな？」

「そうだね。木下くん、Ｂクラスに前田っちはもう少し時間がかかるって伝えてきてくれるかな？」

「うむ。わかったのじゃ」

瑞希は深月を呼び止めようとするが望は瑞希を静止すると理音を研究室に運ぼうと言うと沙耶は秀吉にＢクラスに伝言を頼むと望と一緒に理音を支えて歩き出す。

「……さてと、ひばりはどこに言ったかな？　こっちからひばりの匂いがする」

深月はひばりを追いかけるがスタートが遅れたため、既にひばりは視界に映る場所にはおらず、深月は望が認める彼女の勘だけでひばりを追いかけて行くと、

「ご、ごめんなさい。坂本くん」

「……支倉、どうして、お前はいつも、いつも俺にぶつかるんだ？」

ひばりは勢いよく飛び出したせいか、前も見ていなかったようで雄二にぶつかり、頭を下げており、

「ひばり、見つけた♪」

「うにゅあぁぁぁぁ！？」

「な、なんだ！？　……」

深月はひばりの後ろに回り込むとひばりの胸に手を伸ばし、彼女の胸を揉むとひばりは驚きの声を上げ、雄二はひばりの驚きの声を聞き、ひばりを見るがひばりは後ろから深月に胸を揉まれているため、気まずそうに2人から目を逸らす。

「ん？　ひばり、入学時より、成長してないかい？　理音に協力をして貰った結果かな？」

「み、深月ちゃん、何をするの!?　そ、そんな事実ないよ。理音くんはわかってくれたよ!!」

「それはそう言う状況になりかけたと言う事だね？　ほらほら、ボクとそっちの人にも聞こえるように言ってごらん」

「……いや、俺は聞きたくないんだが」

深月はひばりの胸を揉むとひばりの胸（へいき）が成長している事に気づき、原因が理音だと言うとひばりは理音の研究所に泊まった事を思い出したようで顔を真っ赤にして否定するがその言葉は深月の好奇心に火を点けるが、対照的に雄二はどうしたら良いかわからないようで後ずさりすると、

「君、わかってないよ。せっかく、一線を越えちゃったかもしれない友人がいるんだよ。その時の生々しい体験談は根ほり葉ほり聞かないのは礼儀知らずじゃないか!!」

「いや、間違いなく聞いた方が礼儀知らずだ」

深月は雄二の行動は礼儀知らずだと雄二を指差して言うが雄二は深月に関わり合いたくないと思ったようで少しずつ、後ろに下がり、

「すまん。支倉」

「さ、坂本くん!?　み、見捨てないで!?」

ひばりを置いて逃げ出し、ひばりは雄二に助けを求めるが雄二が振り返る事はなく、

「ひばり、2人っきりだね。ここじゃなんだから、屋上にでも移動しようか?」

「ち、ちなみに拒否権は?」

「あるけど、それを行使した場合はまだ、理音も入れた事のないところに指を入れるよ」

「どこに!?」

「聞きたい?」

ひばりは深月から逃げ出そうとするがすでにひばりは深月にとって『まな板の鯉』であり、逃げだす事が出来るわけもない。

第１２９問（後書き）

どうも、作者です。

理音のポンコツ化にとうとう最終兵器（みつき）が動き出す。（爆笑）

まあ、読んでいてくれている方はわかっているでしょうが、深月や深秋のような暴走キャラを書くのが好きです。暴走なんだけど、どこかに信念や仲間を思う気持ちがあります。

さあ、雄二に見捨てられ、深月に捕まったひばりはどうなるんでしょうか？（悪笑）

第１３０問（前書き）

今回もＧＡＵさんに以下略。

第１３０問

「……人はいないね。まぁ、清涼祭の準備時間だし、サボるのは２、３年生のＦクラスくらいか」

深月はひばりを引きずって屋上まで移動すると屋上に人がいない事を確認すると、

「……あ、あの。深月ちゃん」

「何？　指、入れられたい？」

「違うよ！？」

「大丈夫だよ。ボクだってそれくらいは心得てるよ。前は理音のものだって」

ひばりは深月が自分を連れてきた理由を聞こうとするが深月のペースにしっかりとはまっており、ひばりは深月の言葉に顔を真っ赤にして慌てており、

「まぁ、冗談はこれくらいにして……少し真面目な話をしようかな。あんまり、ふざけたばかりいると『わたし』も望や沙耶、利光に怒られちゃうからね」

「……」

深月はひばりの反応を見てくすりと深月は今までとは違う真面目な表情をし、ひばりは深月の変化にどう対応したら良いかわからない

ようである。

「最初に確認しておこうかな？　ひばりは理音の事をどう思ってるの？　もちろん、幼なじみとしてじゃなく、男の子としてね」

「そ、それは……」

「まぁ、その反応を見れば言う必要もないんだけどね」

深月はひばりに向かい理音を好きかと聞くとひばりは耳まで真っ赤にして深月から視線を逸らし、深月は優しげな笑みを浮かべてひばりの理音への想いを確信に替えると、

「ひばりの周りは優しいからね。瑞希も葵も吉井くんも、そして、理音も誰もがひばりに言おうとしないだろうから。わたしが言わせて貰うよ。わたしは優しくするだけが友達だとは思ってないからね。それとも、ひばりは1カ月程度の付き合いの人間や自分の都合の悪い事を言う人間は友達にはならないかな？」

「そ、そんな事はないよ」

ひばりから視線を逸らす事なく聞き、ひばりは深月は友人だと頷く。

「そう。良かった」

「うん。深月ちゃんは友達だよ」

深月はひばりが頷くのを見て嬉しそうに笑うとひばりは自分の気持ちを確認するようにもう1度、深月を友人だと言う。

「なら、遠慮なく言わせて貰うね。ひばり、いつまで逃げるつもり？　理音と付き合う……変わる勇気がないなら、きっぱりと断りなさい。そうしないと理音は前に進めないよ。今、ひばりがやっている事は理音をキープしてもっと自分にとって都合の良い男を探しているようにしか見えないから」

「そ、そんな事は……」

「本当にないって言える？　理音は割と本能で動くタイプ見たいだから、まぁ、そっちの方面に流れちゃうのが怖いかも知れないけど、付き合うってそれだけ？　関係性が変われば今までと同じ事をしていてもきっと違うよ」

「……でも」

「ひばり、理音って頼りにならない？」

「そんな事はないよ」

深月はひばりに向かい理音や自分の気持ちに向き合えと言うが、ひばりは言葉を詰まらせ、深月はひばりの様子に苦笑いを浮かべると理音が頼りにならないかと聞き、ひばりは直ぐに首を振ると、

「理音は絶対にひばりを支えてくれるよ。違う？」

「で、でも」

「ひばりの事だから理音の負担になりたくないとも思ってるでしょう？」

「……うっ！？」

深月はひばりの心の奥にある不安（もの）を見透かしているように優しげな声で聞き、ひばりはバツが悪そうに視線を伏せる。

「ひばり」

「な、何？」

「1度、理音に思いっきり甘えちゃいなさい。沙耶が望に飛んでくみたいに理音に向かってダイブしても良いし」

「へ？」

「女の子なんだから、男の子に甘えて良いんだよ。辛い時は1人で泣かない。1人で泣いてるともっと落ち込んじゃうしね。それに1人で泣かれちゃうと励ましようもないんだよ。泣きたい時は理音の腕の中で泣いちゃえば良いんだよ。1度、泣いちゃえば楽になるよ」

「む、無理だよ。そ、そんな事！？」

深月はひばりに理音に甘えてしまえと言うとひばりの顔は真っ赤に染まって否定するが、

「良いの。良いの。言ったでしょ。『1人で泣くのは辛いんだから』」

「深月ちゃん？」

深月は何かを思い出したようで少しだけ寂しそうに笑うとひばりは

深月の変化に気づき心配そうに深月の顔を覗き込むと、

「ひばりは理音と両想いなんだから、前に進まないとダメだよ。ほら、この胸(へいき)で理音を今まで以上に骨抜きにしたら良いんだよ♪」

「うにゃあああああ!?」

深月はいつものノリに戻り、ひばりの胸に手を伸ばし彼女の胸を揉み始め、ひばりは驚きの声を上げ、

「ひばり、とりあえず、理音に『大嫌い』って言った事を謝るよ。理音、その一言のせいでポンコツ化してるから、ちなみに頷くまでボクはひばりの胸を揉み続けるよ♪」

「謝る!?　謝るから!?　放して!?」

「素直になる？　頷かないと耳を噛んじゃうよ♪」

ひばりは深月の腕の中でジタバタと暴れるが深月の腕から逃れる事はできない。

第１３０問（後書き）

どうも、作者です。

……誰？

と言うツッコミは置いておきましょう。
深月は暴走娘を演じている？
『秘めた想いと倒錯娘』でも出てきてない設定だし、例の如くｉｆで先にやるなよって感じです。（爆笑）

そして、最後は締まりませんが深月の言葉にひばりは何を思うんでしょうか？

第１３１問

「ただいま♪　ひばり、隠れてないで入ってくる」

「う、うん」

深月がひばりを連れて理音の研究室に顔を出すとひばりは理音の様子が気になるのかドアの影から恐る恐る顔を出すと、

「支倉さん、早く、早く、理音を元に戻して」

「望、着替えちゃったの？　もったいない」

「もったいないじゃないかんらね」

望はひばりが来た事に安心したようでひばりに早く入って来いと言うと深月は理音が懐から出していた男子の制服に着替え終えている望を見て不満げな声をあげるが望はため息を吐き、

「支倉さん、後は任せても良いかな？」

「あれ？　まだ、再起動してないの？」

「はい。予想以上のダメージだったみたいです」

研究室のイスに腰掛けながらぴくりとも動かない理音を指差し言うと深月は望の指の先の理音を見て首を傾げ、瑞希は苦笑いを浮かべる。

「愛されてるね。ひばり♪」

「う、うん」

瑞希の言葉に深月はニヤニヤと笑いながらひばりに声をかけるとひばりは顔を真っ赤にして頷き、

「それじゃあ、理音を再起動するためにキスの1つでも行っちゃいなさい♪」

「キ、キス!?　む、無理だよ!?」

深月はそんなひばりの反応に彼女を再度、煽り、ひばりの顔は更に赤みをおびて行く。

「……深月、あんまり、支倉さんをからかわない」

「そうです。こ、こんな人前で、ダメですよ」

望は深月がひばりを煽る姿にため息を吐くと葵は人前でキスはいけないと顔を真っ赤にすると、

「人前で?　みんな、見るつもり?　流石にボクはそこまで常識外れじゃないよ」

深月はニヤニヤと研究室にいるメンバーを見て言うとそこにいたメンバーはバツが悪そうに深月から視線を逸らし、

「ひばり、ほら、突撃だ」

「しないよ!?　しないからね!?」

「しないの？　約束破ったら、どうなるかわかってるよね？」

深月はひばりに理音に抱きつけと言うがひばりは全力で首を振り、ひばりの反応に深月はニヤリと笑い、

「行くよ。沙耶♪」

「うん♪」

「ちょっと、沙耶、深月、何をするつもり!?」

沙耶を呼ぶと沙耶と深月はひばりの横に並び、望は幼なじみ2人が何をするかある程度、予想が付いたようで2人を止めようとするが、

「「突撃♪」」

「ちょ、ちょっと!?　沙耶ちゃん!?　深月ちゃん!?」

沙耶と深月はひばりの腕をつかむと勢いよく、ひばりを理音に押し飛ばし、

「うん。キレイにはまったね♪」

「だね。あそこはひばりの指定席だしね」

ひばりはすっぽりと理音の腕のなかに収まり、深月と沙耶は満足そうに笑う。

「それじゃあ、ボク達は行くよ。望も瑞希も葵も木下くんも行くよ。早くここから出ないと全員にお嫁に行けなくなるような事をするよ♪」

「ワシは男じゃ！？」

「……木下くん、そんな事を言ってると本気で襲われるから早く出るよ。深月は言い始めたら本気でする」

深月は理音の腕のなかにすっぽりと収まっているひばりに手を振ると研究室にいる全員に声をかけ、秀吉は女の子扱いされた事に声をあげるが望はため息を吐くと秀吉を引きずって研究室を出て行くが、直ぐに研究室を覗き込み、

「支倉さん、理音を任せたよ」

「う、うん。じゃなくて、ここから出して！？」

ひばりに理音を頼むとひばりは頷くと理音の腕の中から出られないようで望に助けを求めるが、

「俺も馬に蹴られたくないから遠慮するよ」

「ひばりちゃん、ファイトです」

「頑張ってください」

望はひばりを見捨てると瑞希と葵はひばりを応援し、研究室のドアを閉める。

第１３２問（前書き）

今回は関係者皆様に以下略。

第132問

「えーと、理音くん？」

「……」

ひばりは理音の腕の中から理音を呼ぶが理音の反応はなく、

「ど、どうしよう？」

ひばりはこの状況も恥ずかしいのだが理音がここまでダメージを受けている事に嬉しくもあるため顔を赤くしたまま首を傾げると、

「や、やっぱり、深月ちゃんが言ったみたいに？　キ、キスしかないのかな？」

ひばりは理音の耳には何も聞こえていないと思っており、彼女の顔はさらに赤みをおびて行き、

「……そ、それしかないんだよね」

ひばりは覚悟を決めたようで目を閉じて理音との距離を縮めて行き、ひばりの唇は理音の唇にそっと触れる。

「……ん。ひばり？　お前、いきなり何をしてるんだ！？」

「ど、どうして、直ぐに正気に戻るのよ！？」

理音はひばりのキスで再起動したようでいきなり目の前に現れたひ

ばりにいつもとは違う反応を見せ、ひばりは顔を真っ赤にしたまま声を上げ、

「い、いや。いきなり、そんな事を言われてもわけがわからないんだが」

「そ、そ、そ、そうだよね」

理音はひばりの顔を直視すると理音にしては珍しく顔が赤く染まって行き、ひばりを捕まえていた腕の力を緩めるとひばりはそんな理音の変化に巻き込まれて顔を真っ赤にしたまま理音の腕のなかから飛び出ると、

「り、理音くん、あ、あたしは理音くんの事、嫌いじゃないからね。あ、あれは人前であんな事を言われたからであって、べ、別に嫌だったわけじゃないんだから」

「あ、あぁ」

ひばりは理音を嫌いだと言った事を嘘だと言うと理音の顔は赤くしたまま頷く。

「……あ、あのね。理音くん」

「何だ？」

「あ、あたしね。理音くんが嫌いじゃないよ。あ、あのね……」

ひばりは落ち着こうとしているのか大きく深呼吸をして理音を呼び、理音が振り返るとひばりは何か言おうとするが次の言葉が出てこな

いようであり、

「どうかしたか？」

「う、うん。あのね」

理音はひばりの様子に何か感じながらも冷静になってきたようで無表情に戻るが、ひばりはもう1度、大きく深呼吸をすると、

「あ、あのね。理音くんからの告白の返事なんだけど」

「……あ、あぁ」

「あ、あたしね。り、理音くんが好きだよ。ちゃ、ちゃんと男の子として」

「……」

ひばりは顔を真っ赤にしたまま、理音が好きと告白をするが理音は眉間にしわをよせ、

「な、何で、黙っちゃうの!?」

「……いや、深月との会話の件があるからな。イヤな事の前触れかと思ってな」

ひばりは理音の反応に声をあげ、理音は深月との会話もあったせいかひばりにふられる事が頭をよぎったようで眉間にしわをよせたまま言う。

「深月ちゃんに？　何を言われたの？」

「……言いたくない」

ひばりは理音の様子に首を傾げると理音は首を振り、

「……今のが返事だと言うのは前に進んでも良いって事で良いんだよな？」

「う、うん。まだ、付き合うって言うのがどう言うのかわからないし、そ、それにあたし、弱いし、まだ、いろいろとあるし……」

「大丈夫だ。その時は俺が支える。一緒に強くなって行こう」

理音はひばりの反応に以前に自分がした告白の返事を確認するとひばりは顔を赤くしたまま頷くもまだ前に進むには勇気が出ない小さく肩を震わせてと言おうとするが理音はそんな彼女の肩を優しく引きよせて一緒に進んで行こうと言い、

「それでも良いんだよね？」

「あぁ。俺だって1人じゃ、耐えきれない時だってあるかも知れない。その時はひばりが支えてくれるんだろ？」

「うん。そうだね」

ひばりは理音の言葉に笑顔を見せると自然と2人の距離は縮まって行き、お互いの唇が触れようとした時、

「理音、いつまで遊んでるつもりだ！！　人手が足りないんだよ！

！」

「ま、待つのじゃ！？　今はダメなのじゃ！？」

「そ、そうです。今は邪魔しちゃダメなんです」

「か、烏丸くん、止まってください」

大貴の声が近づいてくる声と秀吉、瑞希、葵の3人が大貴を静止しようとする声が聞こえるが、

「理音、戻るぞ……悪い。邪魔をした。心置きなく続けてくれ」

大貴は3人の制止を振り切り、勢いよく研究室のドアを開けると中の理音とひばりの様子を見てそっとドアを閉め、

「な、何で、みんなは覗いてるの！！！！？？？？？」

「……」

ひばりは勢ぞろいしていてる大貴、望、秀吉、瑞希、葵、沙耶、深月の7人の顔を見るなり顔を真っ赤にして叫び、流石の理音も顔を赤くしてバツが悪そうな表情をする。

「えーと、流石に止めたんだけどね。俺1人じゃどうしようもなかった」

「ひばり、何を言ってるの？　ここまでボクが舞台を整えたんだよ。当然、見る権利があるに決まってるでしょ♪」

「な、生告白でした。素敵でした」

「は、はい」

望は苦笑いを浮かべながら止め切れなかった事を申し訳なさそうに謝るが深月は当然の権利だと言い切り、葵と瑞希は顔を真っ赤にしてうつむき、

「……理音くん」

「……なんだ。ひばり」

「……お仕置きしちゃって良いよ」

「そうか」

ひばりは恥ずかしさのあまり何かおかしなスイッチが入ったようで背後に真っ黒な殺意を漂わせながら理音に攻撃指示を出し、理音はその言葉に頷くと背後からひばりと同様な殺意を漂わせて、

「ま、待て。理音、こいつらはともかく、俺に悪気は!?」

「……まぁ、気にするな。大貴、俺としてはせっかくのひばりとのキスを邪魔をしたお前が1番許せないんだからな」

大貴に銃口を向けると大貴は理音から向けられる銃口と殺意に理音に落ち着くように言うが、理音が止まるわけもなく、

「一先ずは1人目、次は……」

「ま、待て。理音、落ち着こう。み、深月、原因のお前が逃げるな！！」

「望、何を言ってるのかな？　女の子が逃げる時間を作るのが男の子である望のお仕事だよ♪」

大貴を沈めた後、銃口を望に向けると望は自分を置いて逃げ始めている女性陣に声をかけるが、女性陣が振り返る事はない。

「き、木下くん、君も男だろ！？」

「す、済まぬ。ワシも命は惜しいのじゃ！！」

望は女性陣と一緒に逃げている秀吉に声をかけるが秀吉は振り返る事はなく、

「保科、この世から消える覚悟はできているか？」

「できてるわけない！！」

理音は邪悪な笑みを浮かべて望に声をかけると望は全力で理音から逃げ出す。

第１３２問（後書き）

どうも、作者です。

一先ずは理音の想いをひばりは受け止め、『２人』で前に歩みだしました。

この２人で書くと決めた時から、どちらか一方が支えるのではいけないと考えていました。
２人のだした答えはみなさんはどう思ったでしょうか？
やっぱり、男の理音がひばりを支えるべきだと思った人。
この２人ならお互いに支えあっていくべきだと思えた人。
まだまだ、先は長く未熟な２人ですが生暖かい目で見ていただければ幸いです。

……なんかスピーチっぽくねえ？と思いながらも気にしない方向で行きましょう。
他の小説家さんからオリキャラも借りてますし、まだまだ続けていきますが一先ずは理音とひばりが出した答えがみなさんに受け入れられる事を祈りましょう。

さて、次はどこをくっつけるかなあ？（悪笑）

やっぱり、静馬と葉月か？（爆笑）

第１３３問（前書き）

今回はあづまさんとクロさんに以下略。

第133問

「嫌なのじゃ！？　ワ、ワシはそんなものを着んのじゃ！？」

「……リオ、何をして」

「あ、アキちゃん」

「た、玉野さん！？」

理音はそれでも女性陣に攻撃を仕掛けるのは気が引けたようで捕まえた女性陣をひばりに任せるとひばりはとーるはんまーを手に4人に説教を始めているなか、大貴、望、秀吉の3人を捕まえると3人をAクラスにいる美紀に引き渡しているところに明久が理音に声をかけ、美紀は明久を見て目を輝かせるが、

「待て。玉野、今回はこの3人だ。生きている事を後悔するように可愛く飾りつけてやってくれ」

「そうだね。のぞみちゃんにヒロちゃんに秀美ちゃんと今日は良い子がそろってるし、楽しみは後にとって置くね。楽しみにしててね。アキちゃん、りおちゃん」

「そ、そんなものを楽しみにするわけないでしょ！？」

理音はため息を吐きながら美紀を止めると美紀は理音に捕まえられている大貴、望、秀吉を見て目を輝かせるながら言うと明久は身の危険を感じたようで理音の後ろに隠れる。

「玉野、間違うな。俺はそんなものを着る気はない。そう言うのは女装趣味の3人に任せる」

「……趣味じゃないからね」

「理音、お前、俺に何の恨みがあってこんな事を!!」

「そうじゃ!!」

理音は美紀を静止するとここにいる必要はないと言い、美紀に引き渡した3人を見捨てて教室に戻ろうとすると望はすでに諦めに入っているが大貴と秀吉は理音に向かいこの仕打ちはあんまりだと叫ぶが、

「……何か文句があるのか?」

理音は逆らう事は許さないと言う視線を向けて言うとその視線を向けられた大貴と秀吉は顔を引きつらせ、

「大丈夫だ。ちゃんと康太に撮影も頼んでいるからな」

「お前、そこまでの仕打ちをする必要があるのか!? だいたい、準備をサボって支倉といちゃついていたお前が悪いんだろ!! さっきも言ったが、俺は完全にとばっちりだろ!!」

「ひばりといちゃついてた? ……」

理音は表情を変える事なく、とどめを刺す準備もできていると言うと大貴は自分は理音とひばりの様子を覗いていたわけではないため、自分は無実だと叫ぶと明久は首を傾げて少し考え、

「それって、リオ、そう言う事で良いのかな？」

「あぁ……」

「そっか。おめでとう。リオ」

「あぁ」

明久は理音とひばりの事を心から嬉しく思ってくれているようで笑顔を見せて理音の背中を押すと理音も少しだけ照れくさそうに笑う。

「それじゃあ、ボクはひばりにもおめでとうって言ってこないと、リオもいつまでもこんなところにいる必要ないし、ひばりのところに行こうよ」

「そうだな」

明久はひばりにもおめでとうと声をかけたいと言うと理音にひばりのところに行こうと理音の手を引っ張り、理音は頷くと、

「玉野、せっかくだ。任せるぞ」

「うん。任されるよ♪　さあ、のぞみちゃん、ヒロちゃん、秀美ちゃん、お着替えしようね」

「や、止めろ！？　り、理音、この恨み、忘れないぞ。必ず、この恨み晴らしてやる！！」

「た、玉野、止めるのじゃ！？　目、目が怖いのじゃ！！」

３人を美紀に任せて、明久と一緒に歩きだす。

第１３３問（後書き）

どうも、作者です。

大貴、望、秀吉、玉野さんに売られる。（爆笑）

すでにあきらめムードの望と犯行する大貴と秀吉。秀吉はこの時期はまだ女装に抵抗がある？　それとも葵の影響かな？（苦笑）

第１３４問

「そ、それじゃあ、さっきの前田くんを正気に戻した時のキスはファーストキスではなかったって事ですか？」

「う、うん」

「その時の話をボクに話してごらん」

「そ、それはあの。この間、理音くんの研究所に泊まった時に……」

「お、お泊りですか！？」

理音と明久がひばりが女性陣に説教をしていたはずの研究室に着くとひばりは逆に捕まっており、理音との事を根ほり葉ほり聞かれており、

「……アキ、クラスの出し物の準備に戻るか？」

「そうだね。ここはちょっと入りにくいから」

「ちょ、ちょっと、理音くん、アキくん、見捨てないで！？」

理音は一先ず、ドアを閉めると明久にクラスに戻るかと聞き、明久も研究室には入りにくいと判断したようで理音の言葉に頷くがひばりは理音と明久に助けを求める。

「理音、逃げるのは良くないな。『彼女』のひばりが困ってるんだよ。『彼氏』の理音が逃げるのは良くないね♪」

「……深月、お前は中にいたはずだよな」

「知ってる？　乙女の恋愛話への好奇心は常識すら凌駕するんだよ♪」

「……いや、お前の場合は少し常識に捕らわれてくれ。保科の負担が増えるからな」

中に居たはずの深月は教室に戻ろうとしている理音と明久に回り込み、理音に向かい彼氏としてひばりのためにやってあげないといけない事はないかと聞くが理音は深月の常識から外れた深月の動きにため息を吐くと深月はこれくらいは当然だと言い切り、理音はため息を吐くが、

「まぁまぁ、前田っちも座りなよ。マグカップが足りないからビーカーで良いかな？」

「白石、間違えるな。ビーカーが足りないからマグカップを使うんだ」

「……リオ、研究室ができてからずっと言おうと思ってたけど、白石さんが正しいからね」

沙耶は理音と明久を手招きして呼ぶと当然のように理音が常備しているインスタントコーヒーをビーカーに淹れて2人の前に差し出すと、

「……それで、結局はなんでこうなったんだ？」

「え、えーと、何でかな？」

理音は諦めたのか沙耶からビーカーを受け取ると当然のようにひばりの隣に座り、ため息交じりで女性陣に説教をしていたはずのひばりに聞くとひばりは自分でもどうしてかわからないようで首を傾げる。

「理音の旦那、あれですよ。なんだかんだ言って、ひばりは浮かれてるんですよ」

「……深月、お前はキャラを固定する事はできないのか？」

「ひばり、ひばり、『あんたの彼氏』、ノリが悪いよ」

深月は揉み手をしながら理音にすり寄るが理音は深月の様子にため息を吐くと深月はひばりに向かい理音を『彼氏』と強調して言うとひばりの顔は赤く染まって行き、

「ひばりん、可愛い♪」

「ちょ、ちょっと、沙耶ちゃん！？」

沙耶はひばりの反応に沙耶に飛び付き、ひばりは沙耶の突撃に理音の元に吹っ飛ばされ、

「り、理音くん、ありがとう」

「あぁ、白石、その突撃は止めろ。そのうち、怪我するぞ。お前か保科が」

理音はひばりを抱きとめると沙耶に突撃を止めるように言うが、

「前田っち、それはできない相談だよ」

「沙耶の望への突撃は理音がひばりのとーるはんまーを喰らうのと一緒だからね」

「つまりは愛ですね。素敵です。沙耶ちゃん、私、応援します」

「そう言う事だよ。瑞希」

「うん。ありがとう」

沙耶は突撃を止める事はできないと言い切ると深月はひばりをからかうように言うと瑞希は顔を赤らめて沙耶を応援すると言う。

第135問

「……リオ、なんか凄く居づらいんだけど」

「そうだな」

女性陣は沙耶と望の間を応援し始めており、理音と明久がこの場所に居づらさを感じた時、

「そう言えば、深月ちゃんって、好きな人はいるんですか？」

瑞希のその一言で、一瞬、今まで笑っていた深月の空気が凍りつく。

「……リオ、何となくなんだけど、今、姫路さんが爆弾発言をした気がする」

「……あぁ、何となくだが、俺もそんな気がする」

凍りついた空気を明久ですら気づいたようで理音に声をかけると理音は頷くが女性陣は気づいていないようであり、

「うーん。言わないといけない空気かにゃ？」

「えーと、そんな空気かな？」

深月は言いづらいのか苦笑いを浮かべ、ひばりは先ほどまで自分に向けられた視線が深月に移った事で深月は逃げられないと首を振る。

「えーと、ボク、この間、ふられたばかりなんだよね」

「そ、そうなんですか!?　ご、ごめんなさい。深月ちゃん!!」

「す、すいません。弓永さんはキレイですから、そんな事はないと思っていたので」

深月は苦笑いを浮かべて、失恋したばかりだと言うと瑞希と葵は驚きの声を上げて深月に謝るが、

「気にしない。気にしない。ボクがふられたのはみんなが気にする事じゃないよ。ただ……」

「ただ？」

深月は笑顔で謝る必要はないと言うとひばりは深月の様子に何かあると感じたようで聞き返すと、

「想いが伝わるなら、前にでないとね。自分の事もあったから、ひばりにきつい事も言っちゃったし、反省、反省」

「……深月ちゃん、気にしないで、あたしは深月ちゃんのおかげで前に進めたわけだし、あたしは深月ちゃんにお礼を言わないといけないんだから」

深月はひばりへ謝るとひばりは首を振り、深月に顔をあげて欲しいと言う。

「まぁ、そんな事だから、ボクは今はフリーなわけで新しい恋を探しているわけですよ。だから、良い男がいたらロックオンするつもりなのです……吉井くん、ボクと付き合ってみる？」

「ボ、ボク？」

「ダ、ダメです！？　よ、吉井くんにはそう言うのはまだ早いんです！！　それに深月ちゃんのようにきれいな人は吉井くんにはもったいないと思います」

深月は瑞希の顔も見るとニヤニヤと笑いながら明久に自分と付き合ってみると言うと瑞希が明久と深月の間に割って入り、

「……」

「瑞希、アキが落ち込んでいるんだが」

「アキくん、大丈夫？」

瑞希の言葉に落ち込んだ明久を見て、理音は眉間にしわを寄せて言い、ひばりは明久に声をかける。

「よ、吉井くん、そ、そう言う意味じゃなくて」

「良いんだ。どうせ、ボクは……」

瑞希は明久の様子に慌てて弁明をしようとするが明久は涙を流しながら落ち込んでおり、

「あはは。からかいすぎちゃったかな？　だけど、瑞希、ひばりもそうだったけど、逃げてばかりじゃ何も変わらないよ。そんな事を言って、吉井くんを落ち込ませるなら……」

「瑞希ちゃん、逃げて！？」

「このたわわに実った巨乳（かじつ）で誘惑しちゃえば良いんだよ♪」

「み、深月ちゃん！？　止めてください！？」

深月は明久と瑞希の様子にニヤニヤと笑うとひばりは深月の様子に瑞希の身の危険を察するがその時には既に遅く、深月は瑞希の胸を揉みだし、

「……アキ、復活したか？」

「……うん」

「2人とも、まじまじと見ない！！」

明久は瑞希が胸を揉まれている姿を見て復活するとひばりから理音と明久に向けてとーるはんまーが放たれる。

第136問

「まったく、理音くんもアキくんもエッチなんだから」

「理音の場合はひばりが満足させてあげれば良いんじゃないかな？」

ひばりはとーるはんまーを手に理音と明久を正座させて説教を始め出すと深月はニヤニヤと笑いながらひばりが理音の相手をしてやれば良いと言うと、

「な、な、何を言い出すの!?　深月ちゃん!?」

「にゃはは。理音は大変だね。ひばりはお堅いから」

「……まぁ、それでもひばりが良いんだから仕方ない」

ひばりは深月の言葉に顔を真っ赤にして声をあげ、深月はひばりの反応に理音の肩を叩きながら言い理音は表情を変える事なくひばりが良いと言う。

「あぁ。ボクも理音みたいにそこまでボクを好きって言ってくれる人はいないかな」

「……深月、そんな事を言っても、お前も本質は『俺と同じ』じゃないのか？」

深月はひばりが羨ましいと笑うと理音は深月に何か違和感を覚えたようで思った事を口にすると、

「……」

再び、深月の時が凍りつく。

「深月ちゃん？」

「な、何でもないよ」

ひばりは深月の様子に声をかけると深月は何もないと言うがその様子には同様な色は隠せなく、

「そ、それより、そろそろ、ボク達も自分のクラスに帰らないと準備だってあるしね」

深月は慌てて研究室を出て行くとその場にいたメンバーは何があったかわからないようであり、

「リオ、弓永さんがリオと同じってどう言う事？」

「……立ち止まっているのはあいつ自身と言うわけだ」

明久は首を傾げると理音はこれ以上は何を言う事はないと首を振ると、

「それじゃあ、私も自分のクラスに戻るね」

「えっ！？　沙耶ちゃん？　クラスに戻るなら私達も」

沙耶だけは理音の言葉の意味を理解したのか1人で研究室を出て行き、瑞希は沙耶を止めようとするが沙耶は振り返る事はなく瑞希は

沙耶を追いかけようとするが、

「瑞希、追いかけるな。あいつらにはあいつらにしかわからないものだってある」

「で、ですけど」

「今は深月を任せられるのが白石しかいないんだ。保科が居ればどうにかなるかもしれないが……多分、あいつは近すぎる人間の前では冷静になりきれない」

理音は瑞希を止めると沙耶に深月の事は任せろと言い、

「解散するぞ。ここで長い間、溜まっているとクラスの奴らに本気で文句を言われる」

「そうですね。ひばりちゃんがいないとうちのクラスの男の子たちが遊び始めちゃうでしょうし」

「そうですね」

研究室を閉めると言うと葵は教室に戻ろうと言い、瑞希は深月の事が心配なようで不安そうな表情をするが頷く。

「それじゃあ、戻ろう」

「そうだね。だけど、ひばりは他にやる事があるよ」

ひばりは解散しようと言うと明久はその前にやる事があると言うと、

「え？　何？」

「えーと、迷惑をかけた人達にリオとの事を報告しに行く事かな」

「そうですね。ひばりちゃん、頑張ってください」

ひばりは明久が何を言いたいかわからないようで首を傾げると明久はイタズラな笑みを浮かべてみんなに報告して来いと言い、瑞希と葵は頷くと理音とひばりを置いて行き、

「ちょっと待って！？」

「……やれやれ、騒がしいな」

ひばりは顔を真っ赤にして3人を追いかけて行くと理音はため息を吐いた後、４人を追いかけて行く。

第137問

「……大貴、無駄に似合うのも考えもんだな」

「……他に言う事はないのか？」

「えーと、烏丸くん、ごめんなさい」

ひばりは明久達に撒かれてしまい、理音と一緒に教室に戻ろうとした時、女子の制服に着替えさせられた大貴が理音に怒りの小烏丸を振り下ろすが理音は表情を変える事なく、大貴の腕をつかむとひばりは冷静になると大貴は完全にとばっちりだと理解しているようで理音の後ろに隠れながら大貴に謝ると、

「何、支倉が気にする事じゃない。俺は理音を小烏丸の錆びにできればそれで良いんだ」

「聞く耳は持たないようだな」

「当然だ。お前を小烏丸でしばき倒し、俺と同じ目に遭わせてやる」

大貴は理音に復讐する事しか考えていないようで目が血走っており、理音に向けて小烏丸を振り下ろして行くが、理音は小烏丸を交わして行く。

「ひばり、前田は何してるの？」

「……烏丸、悪いな。今まではおかしな奴だとは思ってたんだけど、それでも友人だと思ってたんだけど、今日から他人だ」

「えーとね。話せば、長くなるんだけど」

美波と美波の仕事を手伝わされているのか終夜が3人を見つけて目の前で行われている理音対大貴の対決に終夜は大貴との縁を切ろうとするがひばりは苦笑いを浮かべながら今の状況を説明すると、

「おめでとう。ひばり」

「ようやく、まとまったか。おめでとう。支倉」

「うん。ありがとう。2人とも」

美波はひばりと理音が付き合い始めた事に自分の事のように喜び、終夜はやっとかと言いため息を吐いた後、ひばりにおめでとうと言うとひばりは照れ臭そうに視線を逸らす。

「それはそうと、あれはどうしたら良いんだ？　と言うか、今更だけど、前田って本当に科学者なのか？」

「……それに関してはたまに自信無くなる」

「2人とも運動神経良いわよね。まぁ、何か無駄っぽいけど」

終夜はひばりの様子に苦笑いを浮かべながら、完全にバトルマンガの空気を出している理音と大貴を指差して言うとひばりはため息を吐き、美波がため息を吐いた時、

「お姉さま♪」

「み、美春!?」

「美波、こっちだ」

美春が美波を見つけて美春に飛び付き、美波は美春のいきなりの行動に身体を硬直させると終夜は彼女の手を引っ張り美波を引き寄せ、

「「あだ!?」」

美春は理音と死闘を繰り広げていた大貴に直撃する。

「終夜、ありがとう」

「あぁ……でも、これは」

「……絶対に何か起きるよね」

美波は終夜に礼を言うと終夜とひばりは顔を引きつらせながら、大貴と美春に視線を向けると、

「す、すいません。美波お姉さまに近づく害虫が美春とお姉さまとの愛を邪魔するから……豚野郎!?」

「……また、お前か、ロールパン!!」

美春は最初は自分が女生徒にぶつかったと思ったため、大貴に謝るが相手が大貴だと気づいた瞬間に大貴を罵倒し、大貴と美春の間には無駄な殺意が溢れ出し、2人で睨みあいを始める。

「……相手が烏丸で良かったのか?」

「……ウチは間違いなく最悪だと思うわよ」

「まぁ、大貴は頑丈だから問題ないだろ」

「ウチ？」

終夜と美波は始まった天敵同士の戦いにため息を吐くと理音は先ほどまでの大貴との死闘に呼吸を乱す事なく、大貴が相手なら問題ないと言う隣でひばりは美波の１人称に首を傾げ、

「ひばり、どうかした？」

「う、うん。どうして１人称が『ウチ』なのかな？　と思って」

「あぁ、何か、１番、発音しやすいらしい」

「そうなんだ」

「えぇ、前田のくれた翻訳機を外して練習してると『私』より『ウチ』の方が聞き取りやすいのよ」

終夜と美波は苦笑いを浮かべながら美波の１人称が決まった理由を話す。

第138問

「なぁ、俺が言うのも何だが、今はそれを話す事なのか？」

「そ、そうだね。烏丸くん、清水さん、落ち着いて！？」

理音は緩い空気になりかけているひばり、終夜、美波の3人に声をかけるとひばりは慌てて大貴と美春に落ち着くように言うが、

「不潔ですわ！！　女装をすればお姉さまが振り向くとでも思っているのですか！！　考えが浅はかですわ！！　豚野郎！！」

「誰が好き好んでこんな格好するか！！　だいたい、それで島田が振り向くなら秋月に着せるわ！！」

大貴と美春が落ち着くわけもなく、終夜に飛び火し、

「……悪いな。秋月」

「うん。ゴメンね。秋月くん」

「……謝るな」

理音とひばりは大貴の女装の原因が自分達のため終夜に謝り、終夜は首を振ると、

「終夜、今のってどういう意味？」

「……何でもないから、美波は気にするな」

美波は理音の翻訳機は正常なようで聞きとれているようではあるが終夜の口から2人の言葉の真意を聞きたいようで顔を少し赤らめながら終夜に聞き返すが終夜は理音とひばりの視線もあるためか言葉を濁す。

「……まぁ、島田も気にしてやるな。いろいろ、タイミングと言うのもあるからな。失敗すると大変なんだ」

「……うん。タイミングは大切だね」

「そ、そうなの？　で、でも、ウチは……早く言って欲しいし」

理音とひばりは周りから急かされた感じもあるためか、改めて、タイミングは大切だと美波を説得に入ると美波は終夜をちらちら見ながら言った時、

「ブタヤロウガオネエサマニイロメヲツカウナ」

「こっちに来たぞ!?　烏丸、責任持って止めろよ!?」

完全に人外化した美春が大貴を後に回して終夜に向かってナイフを投げつける。

「おい。よそ見をするなんていい度胸だな。ロールパン!!」

「ダマリナサイ。ミハルノジャマヲスルオマエハコロス。シカシ、オネエサマニイロメヲツカウアノブタヤロウハヤツザキニシテソノニクヘンヲモヤシツクシテヤル」

「そんなものが当たるか！！」

「ちょ！？　し、清水、落ち着け！？」

「コロスコロスコロスコ

し、大貴と美春に向けて構えるとひばりは理音を止めようとするがひばりは間に合わず、

「……前田、これはどうしたら良いんだ?」

「止まっただろ。まぁ、少し焦げたか」

「こ、焦げたかじゃないよ!?」

「大丈夫だ。大貴と清水なら15分程度で復活する」

光の弾が大貴と美春を撃ち抜き、2人は廊下に崩れ落ち、目の前で起きた異常な光景に理音以外は顔を引きつらせていた。

第１３９問

「……前田、それ、何？」

「見てわからないか、大貴と清水だ」

大貴と美春を引きずってＢクラスの教室に戻ると理音の姿を見た優子は眉間にしわを寄せると、

「終夜、支倉、島田、何か美春がまた迷惑かけたみたいだな。すまない」

「いや、確かにそうなんだけど、この状況でどうしてそう割り切れるんだ？」

大樹の中ではすでに美春が迷惑をかけたものだと思い込んでいるようでひばり、終夜、美波に謝り、終夜は大樹の対応にため息を吐く。

「終夜、お前がそれを俺に聞くか？」

「……そうだな」

大樹は昔から美春の行動に巻き込まれているため、美春が悪いと決めつけており、終夜は中学時代を思い出したようで頷く。

「ちょ、ちょっと待ってよ。確かに清水さんは悪いけど」

「ひばり、少なくとも清水の件に関しては俺達は被害者だぞ。大貴はこれがおいしいと洗脳するしな」

「ちょっと、前田!?　何してるのよ!?」

ひばりは終夜と大樹の様子に美春は原因じゃないと言おうとするが理音は大貴と美春の件は別件だと言うと懐から怪しげなヘッドホンと怪しげな機械を取り出して大貴の耳につけると優子は慌てて理音を止め、

「木下、どうかしたか?」

「どうかしたかじゃないわよ!!　帰ってこないと思ったらヒロを消し炭にしてるし、結局は何があったのよ!!　まずは説明しなさい!!」

理音は首を傾げると優子は今の状況を説明するように言うが、

「……女装はおいしい。芸人としては通らないといけない道。むしろ、必須事項」

「前田、何してるの?」

「ん?　洗脳だ」

理音は優子の制止を気にも止める事なく、怪しげな機械のスイッチを入れると大貴は目の焦点が合わずに怪しげな言葉をつぶやき始め、美波は目の前で繰り広げられてる怪しげな様子に顔を引きつらせると理音は『洗脳』していると言い切ると、

「……前田、これって美春にも使えないかしら?」

「そうだな。やってみる価値はあるか」

「……美波、あまり、人の道から外れるような事はするなよ」

美波は美春の突撃に心底疲れているようで美春にも同じ事はできないかと言い、理音はもう1組、懐から取り出し美春に取りつけようとするが終夜は呆れたようなため息をついて2人を止める。

「……前田、それって、効くのか？」

「き、清瀬くん、落ち着いて！？　流されちゃダメだから！？　理音くんもおかしな事をしないで」

大樹は美春の行動を止めるのに疲れてきているようで真面目な表情で言うとひばりは常識的な大樹が流されはじめた事に驚きの声を上げて理音に止まるように言うが、

「スイッチオン」

「どうか、美春がウチの事を諦めますように」

理音は止まる事なくスイッチを入れ、美波は祈るように言うと、

「……美春はノーマル、美春はお姉さまより、男の人が好き、美春は美波お姉さまより……オネエサマオネエサマオネエサマオネエサマオネエサマオネエサマオネエサマ」

「……前田、これって危なくないか？」

「そうだな。やはり、清水は面白い。洗脳方法変えて……これはい

ろいろ不味いか？」

美春は最初は理音の洗脳に反応するが途中から気絶しながらも人外化が始まり、終夜は顔を引きつらせるが理音は楽しそうに笑い洗脳方法を変えようとするが何かが引っかかったようで首を傾げる。

「ど、どうしたのよ！？　このままじゃ、また暴れ出すわよ。終夜に何か……」

「……美波ちゃん、顔を赤くするなら素直になろうよ」

「だ、だって、ウチだってひばりみたいに終夜から告白して欲しいし」

美波は美春の変化にまた終夜が襲われると思ったようだが、言葉の途中で顔を赤くするとひばりは美波の様子に素直になるように言うと美波は恥ずかしそうにちらちらと終夜を見ながら終夜から告白して欲しいと言うが、

「オネエサマニチカヅクブタヤロウ。ミハルノテデヤツザキニ」

「大樹、清水を止めろ！？」

終夜は美春に追いかけられており、美波の言葉は聞いていない。

「……清瀬、使うか？」

「いや、良い。ちょっと説教してくる」

「素手で良いのか？」

「……いや、流石に俺もちょっと頭にきてる」

「そりゃ、自分が好きな女が女の方を見てればな」

美春が終夜を追いかけ回す様子に理音は懐から『とーるはんまー＝ばーじょんつう』を出すが大樹はいらないと言い、

「美春、ちょっとこい」

「ハナセ。ヒロ、ミハルハアノブタヤロウヲ」

「……良いからこい」

美春の首をつかむと人外化した美春を引きずって教室を出て行く。

第１４０問

「えーと、理音くん、清瀬くんは大丈夫なの？　あの状態の清水さんと一緒で」

「と言うか、清瀬以外じゃないと無理だろ」

「確かにな」

大樹が美春を引きずって行ったのを見てひばりが顔を引きつらせながら聞くと理音は表情を変える事なく大樹ではないとダメだと言うと終夜はため息を吐く。

「しかし、秋月、清水は鈍いのか？」

「……いや、この状況で聞く事じゃないと思うけどな。鈍いと言うか……あれだろ。この微妙な距離が居心地が良いと言うか、前に進んで失敗して関係がぎくしゃくしてもいやだし、いろいろとあるだろ」

「そうか……」

「何？」

理音は以前から見えている大樹の想いに美春は気が付いていないのかと２人と付き合いの長い終夜に聞くと終夜は美春が何となく大樹の想いを見ないようにしているのも理解しているようで首をかきながら答えると理音は終夜と美波を交互に見た後、

「秋月、島田、お前達熟年夫婦もそうなのか？」

「理音くん、いきなり失礼な事を言わない！！」

理音の中ではすでに終夜と美波が付き合っているように見えていたようで思った事を口に出すとひばりは後ろから理音の頭をとーるはんまーで撃ち抜き、

「ひばり、何をする？」

「理音くん、前から言おうと思ってたんだけど、理音くんは思った事を口に出しすぎだよ！！　みんな、いろいろと考えてるの！！誰か1人に言って貰いたい事とか、理音くんが言っちゃいけない事があるの！！」

理音はひばりに叩かれた意味がわからないようで首を傾げるとひばりは思った事を直ぐに口に出す理音に説教をはじめ、

「ひばり、待て」

「理音くん……」

「……」

理音はひばりに何かを言おうとするがひばりは笑顔で理音の名前を呼ぶと理音はひばりの笑顔に背中に冷たいものが伝ったようで正座をするとひばりは理音の説教を続けていく。

「……まったく、前田も帰ってきたと思ったら、どうして、支倉さんからお説教を受けてるのよ。秋月くん、作業、手伝って……まっ

たく、清涼祭が近いからって、みんなして何なのよ……ヒロ、いつまで寝てるのよ」

「ぐはっ！？」

優子は理音とひばりを見て仕事にならないと言いたげに終夜に声をかけようとするが、理音の言葉で終夜と美波も微妙に近寄りにくい空気になっており、何となく、今の自分の状況を浮いている事は理解したようで腹いせも込めて洗脳装置が付いている大貴を蹴り飛ばし、大貴は優子の蹴りに目を覚ますと、

「優子、何をするんだよ！！」

「何よ？　遊んでたんだから、早く着替えて作業を手伝いなさいよ」

大貴は優子に蹴り飛ばされる理由がわからないため、優子を怒鳴りつけるが優子は大貴をジト目で睨みつけ、作業に戻れと言う。

「お、俺だけに言うなよ。遊んでいる奴なら他にだっているだろ？」

「……そう思うなら、邪魔してきなさいよ。あたしは馬に蹴られたく無いわよ」

「……あぁ。わかった。俺が働けば良いんだろ」

大貴は自分だけじゃなく理音や終夜にも作業をやらせろと言うが優子は邪魔できるなら邪魔しろと言うと大貴は頷き、優子と作業に戻る様子にBクラスの教室内は『お前らも人の事を言える立場じゃないだろ』と言う空気が流れる。

第１４０問（後書き）

どうも、作者です。

理音の言葉で微妙な空気の終夜と美波にすでにクラス公認になっている大貴と優子にクラスメートは何を思うんでしょうか？

……この状況で教室にいたら馬に蹴られても良いからぶち壊したいと思うだろうな。（苦笑）

宣伝かな？

活動報告には以前書かせていただきましたがツイッターを始めました。やっているかたは「ｍａｓｉｏｎｎ」で登録しているので検索してみてください。

そして、フォローをしてください。つぶやきに反応してください。

微妙に今はさみしいので。（爆笑）

第１４１問

「あはは。そんな事があったんだ」

「……笑い事じゃない」

放課後になり、理音とひばりに明久が合流するとＢクラスの教室であったひばりの理音への説教を聞いて明久が楽しそうに笑うと理音は眉間にしわを寄せると、

「笑い事じゃないよ。だいたい、理音くんが悪いんでしょ。あれで２人が気まずくなっちゃったらどうするの？」

ひばりは理音が終夜と美波に言った言葉が気に入らないようで頬を膨らませるが、

「実際、誰が見てもあの２人は熟年夫婦だろ。休日にあの２人が瑠衣と葉月を連れて歩いている姿を見れば誰だって同じ事を言う」

「葉月？」

「美波ちゃんの妹さんだよ」

理音は休日の終夜と美波の様子を見れば誰もが同じ事を言うと明久は『葉月』と言う聞きなれない名前に首を傾げ、ひばりは美波の妹だと明久に説明する。

「へぇ、そうなんだ。でも、熟年夫婦か？　確かにそう言うのを見ればリオの言う事もわかるかもね」

「アキくんまでそんな事を言うの？」

明久は終夜と美波が子供２人を連れて歩いている姿が目に浮かんだようで苦笑いを浮かべるとひばりは明久の言葉が不満なようで頬を膨らませると、

「だって、リオとひばりが休日に怜生くんを連れて歩いている様子と一緒でしょ。リオとひばりだって熟年夫婦に見えるんだから２人が見えるのは当然でしょ」

「あ、アキくん、な、何を言ってるの！？」

明久は理音とひばりも終夜と美波と変わらないと言い、ひばりは顔を真っ赤にする。

「でも、良いよね。リオもひばりもなんかボクだけ、清涼祭前に１人だよ」

「ん？　一緒に歩かないのか？」

「流石に悪いよ。せっかくの機会なんだから２人で楽しめば良いんだよ」

明久はひばりの様子に清涼祭は２人の邪魔はできないと言うと、

「なら、瑞希でも誘ってやれ。きっと喜ぶぞ」

「姫路さんを？　悪いよ。姫路さんだって葵ちゃんとか友達と約束があるだろうし」

「……アキくん、お願いだから瑞希ちゃんの気持ちに気づいてよ」

理音は明久に瑞希を誘えと言うが明久は瑞希に悪いと苦笑いを浮かべ、ひばりは明久が瑞希の明久への恋心に気づかない事にため息を吐くが、

「ひばり、どうかした？」

明久はひばりのため息を意味もわからないようで首を傾げる。

「……まぁ、アキの場合は今更か」

「でも、理音くん、あたしとしてはさ。瑞希ちゃんはあたしと理音くんの事をあれだけ喜んでくれたし、それに昔からの事もあるから」

「まぁ、わからなくもないがな」

理音は明久が首を傾げるのを見てため息を吐くとひばりは明久と瑞希の関係の進展の全面的なバックアップをしたいと言い、理音は頷くが、

「何、何？　ひばり、リオ、何の事を言ってるの？」

明久本人が意味はわかっていない。

「理音くん、どうしたら良いかな？」

「研究所に惚れ薬とかを研究していた人間がいるんだが、アキに飲ませてみるか？　それで鈍さが少しは抑えられて人並みくらいには

なるだろ」

「うん。確かにアキくんだとそれくらいしないとダメな気もするけど、やっぱり、おかしな薬はダメだよ、効果が切れた時に瑞希ちゃんが傷つくし」

「2人とも何の話をしてるの？」

理音とひばりは明久の鈍さをどうするかと本人の目で話すが明久自身は意味がわからないため首を傾げている。

「気にするな……ん？　坂本？　あいつは何をしているんだ？」

「ホントだ。雄二、そんなところでこそこそと何をしてるの？」

「ちょ、お前ら、静かにしろ。見つかったら、どうするつもりだ？」

理音は明久の様子にため息を吐いた時、視線の先に雄二がいる事に気づき、明久が雄二を大きな声で呼ぶが雄二は何かから隠れているようで理音達に騒がないように言う。

第142問

「見つかったら、どうするつもりだ？　また、何かして西村教諭に追いかけられているのか？」

「雄二はバカだからね。また鉄人を怒らせたのか」

「ちげえよ！！　だいたい、鉄人を怒らせるのは俺より、前田、お前のほうだろ！！」

理音と明久は雄二が西村教諭に追いかけられていると思ったようだが雄二は自分は西村教諭を怒らせるような事はしていないと言い、

「勘違いするな。坂本、俺は妖怪ばばあの神経を逆なでするのは趣味だが尊敬する西村教諭を怒らせるような事はしない」

「リ、リオ、鉄人を尊敬しているってのはどう言う事！？」

理音は西村教諭を尊敬していると言うと明久は今まで理音やひばりが見た事がないくらい動揺して言うと、

「アキ、何を言ってる？　西村教諭はあの『ジョルジーニョ・グラシェーロ』を倒した男だぞ」

「……いや、誰だよ」

「アキくん、わかる？」

「わからないよ」

理音は普段見せた事のないくらいに少し興奮気味で言うが3人の反応は薄く、

「お前ら知らないのか、あれは……」

「リオ、止めて!!　それを想像するのは危険な気しかしないから」

理音は3人に西村教諭の武勇伝を話そうとするが明久は身の危険を感じたようで理音を止め、

「そうか？　あれほどの好勝負はなかなかないのにな」

「……アキくん、あたし、時々、理音くんが遠く感じるよ」

「うん。ボクもそう思う」

理音は残念そうに言うと明久とひばりは苦笑いを浮かべる。

「それで、坂本くんは何をしてるの？」

「お、俺か？　俺は……」

「……雄二、見つけた」

ひばりは改めて、雄二が何をしているかと聞くと雄二は辺りを見回し、自分の安全を確認した後、3人に顔を近づけて何かを話そうとした時、いつの間に現れたのかわからないが黒髪のロングの女子生徒が雄二の名前を呼ぶと、

「しょ、翔子!?　お前、いつの間に現れた!?」

「ん?　坂本、この娘ならお前が『ちょ、お前ら、静かにしろ。見つかったら、どうするつもりだ?』と言った時からお前の後ろにいたぞ」

「うん。居たよ。坂本くんの知り合い?」

雄二は女子生徒の名前を呼び慌てるが理音とひばりは女子生徒は最初からいると言い切り、雄二と女子生徒の関係を聞く。

「あぁ。こいつは『霧島翔子』。俺の幼な……」

「雄二の妻の翔子です。うちの雄二がお世話になっています」

「待て。翔子!!　そんな事実はない!!」

雄二は『霧島翔子』を幼なじみと紹介しようとするが翔子は雄二の言葉を遮り雄二の妻だと言い、雄二は全力で否定すると、

「……雄二みたいなゴリラにこんなきれいな人が?　……どうしよう。リオ、ボクは今、嫉妬で人を殺す方法がないか考えてるんだ」

「待て、アキ。落ち着け。嫉妬で殺すよりは苦痛を与えながら四肢を引き裂いた方が楽しくないか?」

「そうだね。リオ、協力してくれる?」

「理音くんもアキくんも何を言ってるの!!」

明久は雄二に殺意を込めた視線を向けて言うと理音は表情を変える事なく恐ろしい事を言い切り、明久は理音に協力を頼むとひばりから2人に向けてとーるはんまーが飛ぶ。

第１４３問

「……相変わらずの漫才だな」

「そんなつもりは、あ、あの、霧島さん、どうかした？」

雄二は理音と明久をしばき倒すひばりの様子に苦笑いを浮かべるとひばりが２人の常識から外れた行動にため息を吐いた時、翔子は何故かひばりを後ろから抱き締め、

「……雄二、この子、連れて帰っても良い？」

「……おい。翔子、お前は突然、何を言い始めるんだ？」

雄二にひばりを連れて帰って良いかと聞くと雄二は翔子の突拍子のない言葉に呆れたようなため息を吐くが、

「……私と雄二の子供、名前はしょうゆ」

「違うからね！？　あたしは支倉ひばりって名前があるからね！？」

「……ひばり、たぶん、論点はそこじゃないと思うよ」

翔子はひばりのサイズを見て意味がわからない事を言い始め、ひばりは翔子の言葉に驚きの声を上げると明久は苦笑いを浮かべる。

「……霧島と言ったな。ひばりは俺のものだ」

「……私と雄二のしょうゆを奪う気？　許さない」

「……前田、翔子、2人とも確実に言ってる事がおかしいからな」

理音は翔子の言葉に背後に静かな殺意を漂わせると翔子も理音と同じように背後に静かな殺意を漂わせ、雄二はため息を吐くが、

「……雄二からも何か言って、この人が私と雄二の可愛いしょうゆを奪って行こうとするの」

「違うからね！？　あたしは2人の子供じゃないからね！？　と言うか、あたし、そんなにちっちゃくないよ！？」

翔子は雄二に味方するように言い、ひばりは翔子の腕の中からはい出ようと暴れるが翔子の腕から出る事は出来ずにおり、

「……リオ、落ち着いてね。霧島さんは女の子だから、それはダメだからね」

「……わかっている。だが……そうか。霧島がひばりの母親と言うなら」

「前田、また、おかしな事を考え付いたんじゃないだろうな」

理音は静かな殺意では抑えきれなくなったようで懐に手を入れた時、明久は流石に不味いと思い理音を止めると理音は何か考え付いたようであり、雄二は理音の様子にため息を吐くと、

「坂本、霧島」

理音は真面目な表情になり、雄二と翔子の名前を呼ぶ。

「ど、どうしたんだ？　急に？」

「り、理音くん？」

雄二は理音の表情に少しだけ驚いたような表情をし、翔子の腕の中のひばりは何が起きるかわからないようで理音の名前を呼び、息を飲むと、

「お義父さん、お義母さん、娘さんをボクにください。幸せにします……違うな。２人で幸せになります」

「……わかった。その言葉、信じる」

理音は雄二と翔子に頭を下げ、その場の空気は理音と翔子以外、完全に凍りつくが翔子は理音の言葉に嘘はないと感じたようで頷き、

「……私と雄二の大切なしょうゆを幸せにしてください」

「はい。約束します」

翔子は理音に深々と頭を下げて、理音の手を取ると理音は大きく頷くが、

「り、理音くん、霧島さん、こんなところで何をしてるの！！」

「……あれはテレ隠しか？」

「まぁ、そんなところかな？」

ひばりは理音と翔子のボケに2人のとーるはんまーを振り下ろすと
その姿に明久と雄二は苦笑いを浮かべる。

第１４４問

「……なぜ、俺が怒られないといけないんだ？」

「当たり前だよ。あんな恥ずかしい事を言うんだから」

理音は眉間にしわを寄せながらひばりに怒られた事に納得がいかなさそうに言うとひばりは恥ずかしいようで顔を赤くしまま言うと、

「支倉、あまり青筋を立てるな。元はと言えば翔子が悪いんだからな」

「……反省してる」

雄二は苦笑いを浮かべながら、理音をフォローすると翔子は申し訳なさそうに謝る。

「ひばりもそれくらいにしなよ」

「う、うん」

明久は苦笑いを浮かべて、ひばりを止めに入るとひばりは頷き、

「理音くん、今度、こう言うおかしな冗談を言わないでよ」

理音に釘を刺すと、

「わかった。次はきちんとおじさんの前で言う」

「そう言う事じゃないよ!?」

「……何だ？　冗談で言わなければ問題ないんじゃないのか？　俺は本気でおじさんに言いに行くつもりなんだが」

理音は真面目な表情でひばりの父親にひばりを嫁にくれと言いに行くと言い、ひばりはその言葉に顔を真っ赤にするが理音はひばりの言いたい事がわかっていないようで首を傾げ、

「嫁に来てくれないなら、ひばりは1人娘だからな。俺は婿でも一向に構わないぞ。うちには怜生もいるしな」

「……たぶん、問題はそこじゃないと思うぞ」

理音はひばりと一緒になるなら、婿入りでも問題ないと言うが雄二はどこかずれている理音の様子にため息を吐く。

「ん？　なら、問題は何だ？」

「……理音は何も問題ない。雄二も見習って欲しい」

理音は首を傾げたまま雄二に言うと翔子は雄二にも理音くらいはっきりとして欲しいと言うと、

「何度も言わせるな!!　そんな事実はねぇ!!」

「……それは許さない」

「ちょ、ちょっと、霧島さん!?」

雄二は自分と翔子は理音とひばりとは違うと叫び、翔子の指は雄二の頭に伸ばされて雄二の頭を絞め上げ、ひばりは驚きの声を上げるが、

「……なかなか、キレイにはまってるな。お手本になるような素晴らしいアイアンクローだ」

「うん。雄二、ざまあみろ。霧島さんみたいな綺麗な人に言い寄られている罰だ」

理音は翔子のアイアンクローの素晴らしさを見て感心したように言い、明久は雄二が罰を受けている姿を見て笑っており、

「アキ、その件に関してはお前も言える立場じゃないと思うんだが」

「リオ、何を言ってるの？」

理音は明久の言葉に瑞希の事もあるため、ため息を吐くが明久は意味がわからないようで首を傾げる。

「ふ、２人とも落ち着いてないで霧島さんを止めてよ！？」

「ん？　止める必要があるのか？」

「あれって、ひばりのとーるはんまーと一緒でしょ」

ひばりは理音と明久に翔子を止めるように言うが２人は止める意味を理解できないようで首を傾げたまま言うと、

「しょ、翔子、止めろ！？　そ、それ以上は……」

「良いから、止めて!?　坂本くん、大丈夫!?　り、理音くん、これは冗談じゃすまないよ!?」

「……霧島、ストップだ。それ以上やると坂本の頭蓋が砕ける」

雄二はぐったりとし、ひばりはその姿に顔を青くし、理音も雄二の様子を見て翔子を止めに入り、

「霧島さん、やりすぎだよ!!」

「……前田、持ち帰っても良い？」

「ダメだ。ひばりは俺のだ。何度も言わせるな」

「……残念」

ひばりは翔子にお説教を始めようとするが翔子にとってひばりのお説教姿はお気に入りのようで目を輝かせながら理音に聞くが理音はひばりは自分のものだと言い切るとその言葉に翔子は肩を落とす。

第１４５問（前書き）

今回はクロさんに怒られるかも知れません。（苦笑）

第145問

「……どうだ？」

「そうだな。後は料理の腕ってところだろ」

理音とひばりが付き合い始めて数日が経ち、清涼祭の準備も佳境に入るとBクラスは飾り付けや衣装の準備も終わり、理音と大貴が頷くと、

「……なぁ、大樹、もう少し、手を抜けないか？」

「手を抜くも何も俺は当たり前のことをやってるだけなんだけどな」

終夜は苦笑いを浮かべながら調理班のまとめ役になり、調理班の女子生徒のプライドをズタズタに引き裂いている大樹に声をかけるが大樹はおかしな事をやっているつもりもないため、首を傾げ、

「……優子、やっぱり、調理班は止めた方が良いんじゃないか？」

「う、うるさいわよ。負けられないのよ。いろいろとプライドがあるのよ！！」

大貴は大樹にプライドを引き裂かれて膝を付いている優子に声をかけるが優子はプライドがあると言い、優子の後ろでは数名の女子生徒が大きく頷いている。

「確かにわかるんだけどな。今回は時間もないし、できる人間がやった方がよくないか？」

「俺もそう思う。終夜も前田も烏丸も料理ができるんだ？　と言うか、ウチのクラスって全体の割合で女子生徒より男子生徒の方が料理ができると言う不思議」

「別に家事にジェンダーを気にする時代でもないだろ。できる人間がやれば良い」

大貴は優子の様子に苦笑いを浮かべながら言うと大樹は残り数日で料理を教える事に限界を感じているようで苦笑いを浮かべると理音も大樹の意見に賛成だと言うが、

「ダメよ！！　ウチのクラスは男子が売子をするのが売りなの！！」

「木下姉、お前、玉野に毒されて本性がはみ出しすぎているぞ」

優子は男子の売子衣装が売りだと言うと理音は先日、大貴に女装させた件で優子と美紀が繋がってしまった事にため息を吐く。

「そ、そんなわけないわよ。ヒロや前田や秋月くん、清瀬くんの執事服でいろいろと……はっ！？　な、何でもないわ」

「……優子、お前」

優子は理音の言葉に全力で否定しようとするが口を滑らせ、大貴は一歩後ろに下がるが、

『そうよ。前田くん達は執事服で接客しないとダメなの』

『そうよ。うちのクラスは新入生での人気アンケートで上位に入っ

た男子生徒がそろってるんだから、売りにしないといけないの』

「……人気アンケート？」

女子生徒達は拳を握りしめて言い始め、理音は女子生徒達から出た『人気アンケート』と言う言葉に首を傾げる。

「……あぁ。あれか？」

「ん？　秋月は知ってるのか？」

「あぁ、と言うか、それなりに話題になってたのに知らないお前が信じられないよ」

「まぁ、前田はそんな感じだろ」

終夜は思い当たる事があるようで苦笑いを浮かべると理音は終夜に聞き返し、理音の様子に終夜と大樹は苦笑いを浮かべると、

「２週間くらい前かな？　新入生を中心に新聞部が調べたみたいだ。現在、フリーで男子と女子の良い男、良い女って感じのを」

「くだらないな」

「まぁ、やっぱり、気にはなるだろ」

大樹は苦笑いを浮かべたまま言うと理音は興味がないと言い切るが終夜はため息を吐き、

『そこで男子部門トップ１０に前田くん、秋月くん、そして、堂々

の1位に清瀬くん』

「なぜ、俺が入ってないんだ」

『そこはフリー限定だから、それに烏丸くんは顔も悪くないけど見た目、普通だし』

『うん。芸人なわりにはなんか地味』

終夜の言葉を女子生徒の1人がフォローすると大貴は自分が入っていない事に声を上げるが女子生徒達は大貴をバッサリと切り捨てる。

「まぁ、大貴には木下姉がいるからな。清瀬、1位になった感想はないのか？」

「……ガラじゃないから、ウチの中学からは結構、文月に進学しているから女の子の友達も多いし、ウチの実家に弟や妹を預けている人達もいるし、同情票が多いだけだから」

「まぁ、無自覚ってのもあるし、清水がいるから諦めている奴も多い」

理音は大貴が選考外になった事を優子がいるからだと納得すると大樹に心境を聞くが大樹はそんなにもてないと言い、終夜は苦笑いを浮かべる。

第146問

「……確かに、ああ言っているが、清瀬は人気あるだろうな。性格は悪くないし、ウチのクラスは優子が指揮を執っている事が多いけど、優子はどこか抜けてるところが！？　ま、待て、優子、俺の腕はそっちには曲がらない！？」

「ヒロ、あんたは一言も二言も多いのよ」

大貴は大樹が人気のある事は認めると言おうとするがその言葉には余計な一言が含まれており、優子にお仕置きを喰らい始めるなか、

「秋月は清瀬がトップと言う事に何も思わないのか？」

「俺か？　俺は大樹と付き合いも長いし、妥当だと思うぞ。俺も美波と同じでこっちに帰ってきた時は言葉もわからなかったから最初は物珍しさで話しかけてくるけど時間が経って人が寄り付かなくなった時も大樹だけは気にする事なくずっと話しかけて来てくれたからな。照れくさいが大樹がいなかったら、俺はここまで日本の学校に溶け込めていたかもわからない。大樹は同情票って言ったけど、俺の時だけじゃなく、他の奴らにも同じように接するからな。そう言うところもあるから票が入るんだろ」

理音は大樹が人気投票で1位にいる事に終夜は何も思わないのかと聞くと終夜は苦笑いを浮かべながら大樹の1位は妥当だと言うと、

「それで、前田、お前は選ばれた事に何かないのか？」

「……何か？」

大樹は理音と終夜の会話に少し気恥ずかしくなったようで話を変えようと理音に女子生徒から人気があると言う事実を知って何か感想がないかと聞くが理音は首を傾げ、

『何かないの？　嬉しいとか』

「……いや、名誉な事なのかも知れないが、顔も名前も知らない奴の投票なんて興味はない。ただ、ひばりが誰に投票したかは気になる」

「……お前、何となく気づいていたが、支倉以外は目に入ってないんだな」

女子生徒は無表情の理音に何か変化がないか気になるようで食い入るように聞くと理音はひばり以外の投票はいらないと言い切り、終夜は苦笑いを浮かべると、

「……男前だな」

「ん？　意味がわからん。だいたい、その投票自体、俺は何を基準にして選ばれたかがわからん。自分で言うのもなんだが、表情はない、愛想はない、感情もあるようには見えない……秋月のように入部して1カ月足らずでサッカー部のレギュラーとか言うのならわかるがな」

大樹は苦笑いを浮かべて理音を誉めるが理音は自分が選ばれている事が理解できないようで眉間にしわを寄せながら自己分析と終夜との比較を始めるが、

『……ルックス、将来性、その他モロモロ、充分に選ばれる理由だと思うけど』

『支倉さんと正式に付き合う前だったから、さらにね』

「……前田と終夜が一緒に怜生くんと瑠衣くんを迎えにくるとお母さんたち大騒ぎなんだけどな」

女子生徒達は理音が首を傾げている姿に苦笑いを浮かべると大樹はため息を吐き、

『……そこに清瀬くん、騒がないわけがないわね』

「……ええ」

優子を含めたBクラスの腐女子達はおかしな事を考え始め、

『で、実際、上位組の秋月くんと清瀬くんは清涼祭での予定はどうなってるのかな？　やっぱり、清瀬くんは清水さんと秋月くんは島田さんと一緒なのかな？』

『ほら、私達に詳しい話を聞かせなさい』

「ちょっと待て！？　なんで、そんな話になるんだ？」

「そうだ！？　黙秘権を主張する！！」

『2人ともわかってないね。好奇心旺盛な乙女に黙秘権なんて通用しないんだよ♪』

終夜と大樹は女子生徒達に囲まれる。

第147問

「それで、逃げてきたわけだね」

「そう言う事だ」

「……お前ら、ここはたまり場じゃないんだが」

終夜と大樹は女子生徒達から逃げるために理音を引きずり、理音の研究室に逃げ込むと研究室にはすでに望と深月が居座っており、理音は眉間にしわを寄せるが、

「理音、気にしちゃダメだよ。それで人気投票ね……」

「深月、どうして、こっちをじろじろ見るんだよ」

深月は人気投票の件で何か言いたい事があるのか望の顔を覗き込むと望は深月から逃げようとする。

「別に逃げる必要はないよ。望もこんな伊達メガネかけてなければ上位に入れたのにもったいない」

「……メガネを取るな。俺は目立ちたくないんだよ」

深月は素早く望からメガネを取り上げると望はため息を吐きながら深月からメガネ取り返してメガネをかけ直すと、

「いや、深月や白石、玉野に巻き込まれている時点で目立ってるんだ。諦めたらどうだ？」

「……理音、諦めたくないんだよ。できれば平和に過ごしたいんだ」

「……それに関しては同感だな」

理音は望に平穏はないと言うと望はここで味わえる非日常に安らぎを求めているのかため息を吐くと大樹はため息を吐く。

「そう言えば、今更だけど、理音達は女子の人気投票って気にならないのかな？」

「……まぁ、気にならない事もないけどな。さすがに見に行くとがっついてる気もしてな……美波に見つかるとうるさいし」

深月は女子の人気投票の事を終夜は苦笑いを浮かべた後、美波から受けるであろう攻撃に顔を引きつらせ、

「深月、それはどうなってるんだ？」

「あれ？　理音が喰いついた」

理音は深月に女子の人気投票の事を聞くと深月は理音が喰いつくとは思っていなかったようで少し驚いたような表情をすると、

「うーんとね。1位は霧島翔子さん、ぼくは付き合い無いんだけどね。美人で大和撫子って感じだよね」

「……霧島が大和撫子？」

「まぁ、理音はそんな反応だよね」

深月は女子トップを翔子だと言うと理音はこの間、出会った翔子が女子の人気投票になるのを分析しきれないようで眉間にしわを寄せると望は苦笑いを浮かべる。

「霧島？　美人だろ」

「まぁ、遠くから見てればって典型的なのかな？」

終夜は理音と望の言葉に首を傾げると望は苦笑いを浮かべたまま言うと、

「……曲者なのか？」

「ん？　曲者と言うかあれだ……俺と同種の天然？」

「確かにそうかもしれない」

大樹は苦笑いを浮かべて聞き返すと理音は翔子を自分なりに分析したようで『天然』と言い切り、望が頷いた時、

「理音、かくまってくれ！！」

「ん？　噂をすればなんとやらと言う奴だな。まぁ、これでも飲んで落ち着け」

息を切らした雄二が研究室に飛び込んできて、理音は雄二の登場に表情を変える事なく雄二にビーカーにコーヒーを淹れて差し出す。

「えーと、確か、Ｄクラスの坂本」

「噂って、どう言う事だ？」

雄二を見て終夜と大樹は首を傾げると、

「ん？　噂になっていた霧島の婚約者の坂本雄二だ」

「違うわ！！　理音、お前は余計な事を言うな！！」

理音は雄二を翔子の婚約者だと言い、雄二は声を上げる。

第148問

「婚約者？」

「ち、違う！？　おかしな勘違いをしないでくれ！！」

終夜が首を傾げると雄二は全力で否定し始めると、

「坂本、少しの間、静かにしないと霧島さんに見つかるよ」

「……」

望は雄二が翔子から逃げている事を理解しているため、雄二に落ち着くように言い、雄二はその言葉で冷静になったようで無言で頷く。

「えーと、坂本くんだっけ？　君は慌てて何から逃げてるの？」

「……しばらく、黙っていてくれ。理音、翔子がきても俺はここにはいないと言ってくれ」

深月は雄二の様子に首を傾げると雄二は少し説明は待ってくれと言い、理音に翔子が研究室にきても自分はいないように言うように頼み、研究室に置いてある机の裏に隠れた時、

「……理音、雄二を見なかった？」

翔子が研究室のドアを開けて雄二の居場所を聞くと、

「ん？　雄二ならここにはいないぞ。そうだよな」

「あぁ、坂本はここには来てないぞ」

「うん。ボクも知らないな」

理音は表情を変える事なく雄二の事は知らないと言うが雄二が隠れている机を指差し、終夜と深月も何か面白い事が起きると思ったようで理音と同じように机を指差し、

「……確かにいないと言ってるね」

「……終夜も前田も何をしてるんだよ」

望と大樹は3人の行動にため息を吐く。

「……雄二、見つけた」

「お、お前ら、裏切ったな!?」

「ん？　俺達は誰1人もお前がここにいるとは言っていないぞ。霧島、悪いな。ビーカーが足りないんだ。マグカップで良いか？」

翔子は雄二を見つけて雄二に抱きつくと雄二は理音を非難するように言うが理音は慌てる事なく、翔子の分のコーヒーをマグカップに注いでおり、

「……ありがとう。理音」

「……いや。そろそろ。マグカップを人数分、そろえようよ。だいたい、ビーカーはコーヒーを飲むものじゃないからね」

翔子は雄二を理音達のところまで引きずってくると理音にお礼を言い、望はため息を吐きながら理音に言うと、

「そうなのか？　学校で飲むコーヒーはビーカーだと」

「前田、保科の言い分が正しいからな」

「うん。ボクも望に賛成」

理音は首を傾げると終夜と深月は苦笑いを浮かべ、

「……そうか。だから、ひばりがこんなに俺にマグカップを渡したわけか？」

「……相変わらず、お前の制服には何が入ってるんだ？」

理音は納得がいかないと言いたげにひばりに持たされたのか懐からマグカップを１０個ほど取り出して置いてある食器棚に並べて行き、大樹は理音の制服の中に苦笑いを浮かべる。

「ん？　気にするな。それで、雄二はなんで霧島に追いかけられていたんだ？」

「……別に良いだろ」

理音はマグカップを並べ終えると翔子が腕に抱きついている雄二に声をかけるが雄二は不機嫌そうに答え、

「えーと、霧島さんって言ったよね。何で、坂本くんを追いかけて

たの？」

「……雄二が素直じゃないから」

深月は翔子に雄二を追いかけていた理由を聞くと翔子は雄二が素直じゃないのが悪いと言うと、

「これが今、流行りのツンデレか？」

「……そうかも知れないけど、理音はそう言う知識をどこから持ってくるんだ？」

「……前田の知識は偏りすぎてる気がするのは気のせいか？」

理音は表情を変える事なく雄二を『ツンデレ』と言うと望と終夜は理音の知識の偏りにため息を吐く。

第１４８問（後書き）

どうも、作者です。

理音の知識は偏っている。誰の影響なんだろうと思いますね。
そして、理音はひばりの言う事はある程度、素直に聞く。（苦笑）
雄二と翔子を加わり、研究室はどうなるんでしょうか？

第１４９問

「ん？　そうか。まぁ、偏りがあるならそれ以外を学んで行けば良いだけの事だ」

「それを言い切れるお前は凄いよ」

理音は知識が偏っていると言われるが理音本人は気にする様子もなく、足りない事を学べば良いと言うと大樹は苦笑いを浮かべると、

「そうか？　まぁ、良い。それで今更なんだが、ここはお前らのたまり場でも駆け込み寺でもないんだが」

「……本当に今更だね」

理音はいつの間にか人が集まってきている研究室は本来は違う目的のものだと言うと望は苦笑いを浮かべるが、

「そう思うなら、望に合鍵なんて渡しちゃダメだよ……あれ？　何で、望はこの部屋の合鍵何か持ってるの？　まさか、望と理音はただれた関係！？　ひばりはフェイク！？」

「深月、おかしな事を言うな。保科には少し手伝って欲しい事がある時があるからな。それで鍵を渡しているだけだ」

深月は望と一緒に研究室に入ってきたようで、望が合鍵を持っている事に首を傾げると彼女の頭はおかしな方向に進み始め、理音はため息を吐く。

「……理音、私と雄二に誓った『ひばりと一緒に幸せになる』と言うのは嘘だったの？　許さない」

「翔子、何で、お前が怒るんだ？」

「……ひばりは私と雄二のかわいい娘」

翔子は深月の話におかしな勘違いを始め出したようで背中に黒いオーラをまとい始めると、

「……前田の言いたい事は理解出来た。とりあえず、霧島は他人の話を聞かないタイプの人間だ」

「俺達の周り、全員がそんな感じだろ」

「……否定できないのが痛いね」

大樹は翔子が理音の言いたい事がわかったと言うと終夜と望は苦笑いを浮かべ、

「霧島さん、悪いんだけど、おかしな勘違いをしないでくれるかな。俺も理音もノーマルだからね」

「……まったくだ」

理音と望は2人で翔子の勘違いを否定するが、

「……証拠を見せて」

「そうだよ。まずは望の好みのタイプから吐いて貰おうか！！」

翔子は証拠を出すように言うと深月は望に女性のタイプを話せと言う。

「……深月、反省って言葉を知ってる？」

「い、いひゃい。いひゃい。ほっぺひゃ、ちゅねりゃないりぇ」

望は額に青筋を浮かべながら、深月の頬をつねり、

「証拠か？　深月、さっきの話の女子の人気投票でひばりに投票した奴をわかる限り教えろ。霧島の答えになるかわからんがひばりに近づく害虫全てを排除してこよう」

「……理音、よくわからないがそれは支倉に確実に怒られるぞ」

理音は証拠になるかわからないがひばりに近づく害虫を駆除してくると言い、研究所を出て行こうとするが雄二が理音を引き止め、

「……ひばりに怒られるのか？　それなら、他を考えないといけないな」

「……こんな感じだから、霧島さん、信じて貰えないかな」

理音は眉間にしわを寄せながら他の方法を考えると言うと望は今の理音を見て納得して欲しいと翔子に言うと、

「……わかった。でも、理音、おかしな噂が出るのは理音にスキがあるから、ちゃんとひばりだけを見てないとダメ」

「わかった」

「……あれ以上、見られると支倉が疲れるんじゃないか？」

翔子は理音にひばりをずっと見ていろと言い、理音は頷くが2人の会話に終夜は不安しか感じないようで大きなため息を吐き、

「まぁ、愛されてるって事で納得しておこうよ」

「そうだな」

望は苦笑いを浮かべながら言い、終夜は頷き、

「のりょむ、はなひて」

「反省した？」

「ひた、ひた。ぼくらって、りおがひばりいふぁいに目がいきゅなんておもってないりょ」

深月は涙目になりながら望に開放を請うと望はため息を吐きながら深月の頬をつねっていた手を放す。

第１５０問

「……それで、女子の人気投票の話だったかな？」

「あぁ」

深月は頬をさすりながら、話を女子の人気投票に戻そうとすると理音は頷き、

「１位はさっき言った通り、霧島さんね」

「……雄二、嬉しい？」

深月は改めて、１位は翔子だと言うと翔子は雄二に感想を聞きたいようで雄二の顔を覗き込むが、

「俺に聞くんじゃねえ。俺はお前なんかに興味はぁぁぁ！！！？？？」

「……それは許さない」

雄二は翔子から視線を逸らして翔子の事など知らないと言おうとすると翔子の手は雄二のこめかみをつかみ、アイアンクローがきれいに決まり、雄二の頭蓋骨がきしむ音が聞こえる。

「霧島さん、今の坂本が言いたいのは人が付けた順位なんて坂本には関係ないって事だから」

「……雄二、本当に？」

「……霧島、とりあえず、手を離した方がよくないか？　坂本、白目をむいてるぞ」

望は苦笑いを浮かべながら、雄二の本心を代弁すると翔子は顔を赤らめながら雄二に聞き返すが雄二はすでにぐったりとしており、終夜は翔子に手を放すように言うと、

「……これを処置するのは俺なんだな」

「……だろうね」

翔子は雄二の頭から手を放し、理音は反応のない雄二を見てため息を吐くと大樹は苦笑いを浮かべ、

「話、進まないね」

「……深月がそれを言わない」

深月は雄二の処置を始め出す理音を見て苦笑いを浮かべると望はため息を吐く。

「……それじゃあ、話を戻すね」

「……邪魔をしてごめんなさい」

理音は研究室の一画から簡易ベットを取り出し、処置を済ませた雄二を寝かせて戻ってくると深月は3度、女子の人気投票に戻ると言い、翔子は悪い事をしたと思っているようで5人に頭を下げ、

「まぁ、気にするな」

「そうそう。それじゃあ、このメンバーが知ってそうな人間だと…
…上位には瑞希、沙耶、後、葵と木下くんはカップルで上位組入り」

「……待て。木下姉じゃなく、秀吉がランクインなのか？」

女子人気投票の結果を発表し始めると何故か秀吉がランクインされており、理音は眉間にしわを寄せると、

「……噂じゃ、木下さんより、木下くんの方がかわいいって話があってね」

「……それはなんて言ったら良いかわからないが、烏丸と木下の弟は木下に関節技を喰らう気がするな」

望は苦笑いを浮かべ、終夜は機嫌が悪そうな表情で大貴と秀吉に八つ当たりをしている優子の様子が目に浮かんだようでため息を吐く。

「後は、ひばりも入ってるよ。理由は理音が怒りそうな理由もあるから伏せておくけど」

「……そうか」

深月はひばりが上位に入っている理由にひばりが抱えているコンプレックスの部分を気に入っている人間の投票もあるのだが、理音には伏せると理音は深月の言いたい事が理解できるようで眉間にしわを寄せながら頷くと、

「……理音、ダメだよ。理音は気にしないだろうけど、容姿は恋愛

に必要な事なんだから、人を好きになるきっかけなんてのは人それぞれなんだからね。そんな理由で投票したかも知れないけど、それを責めるのは違うよ」

「わかってる」

深月は理音にブレーキをかけると理音は深呼吸をし、

「理音はもう少し余裕を持ちなよ。両想いなんだしね。理音に余裕がなくなるとひばりが不安になるよ」

「……余裕か？　気を付けよう」

深月は理音を見て余裕を持てとアドバイスをすると理音は頷く。

第１５１問（前書き）

今回はあづまさんに怒られるかも知れません。

第１５１問

「そうしなよ」

「失礼するよ」

「ん？　トシ、どうかした？」

深月が理音の返事に苦笑いを浮かべると研究室のドアをノックする音が響き、望と深月の幼なじみの１人である『久保利光』がドアを開ける。

「望くん、どうかした？　じゃないよ。弓永さんも望くんもそろそろ、クラスの方に戻ってくれないかい？」

「そうだね。少し、息抜きしすぎたかな」

「そうだね。それじゃあ、望、ボク達は戻ろうか？」

利光は望と深月にクラスの仕事に戻って欲しいと言うと望は苦笑いを浮かべ、深月はイスから立ち上がると、

「それじゃあ、早めに頼むよ」

利光は１人で先に教室に戻って行く。

「……保科」

「ん？　何、理音」

「……あの男には気をつけろよ」

理音は利光の望に向ける視線に何かを感じたようで眉間にしわを寄せ、

「何が？」

「望は気にしないの。悪いね。ボク達は戻るよ。理音達もそろそろ戻りなよ」

「ちょ、ちょっと!?　深月!?」

望は首を傾げるが深月は望の腕を引っ張って研究室を出て行き、

「……深月、少しおせっかい過ぎない？」

「何が？」

望は廊下に出るなり、深月が理音にアドバイスしたのを深月らしくなかったと言い、深月は苦笑いを浮かべると、

「……わたしもいろいろと考える事もあるの。理音とひばりは見てて痛々しいから、お互いを大切に想ってのはわかるけどこのまま2人で歩いていると、いつかどこかで心に壁を作るよ。お互いがお互いを大切に想ってるから、どこかで飛び込めないところって必ず出てくるよ。特にひばりはね。それって悲しいじゃない？　だから、わたしにできる事をわたしはするよ。ひばりも理音も大切な友達だから、望や沙耶と同じくらいに大切なね」

真剣な表情になり、望に言う。

「……まったく、付き合いが長いけど、深月だけはわからないよ。どうして、そうやってもう1人の自分を演じる必要があるの？」

「知らないの。女の子は生まれながらの女優な上に秘密がいっぱいなんだよ。それにね……隠し事をしてるのは望も一緒でしょ」

「……」

深月の様子に望はため息を吐くと深月はくすりと笑った後に真っ直ぐと望の瞳を見て言い、深月の様子に望は全てを見透かされたような感覚に捕らわれたのか一瞬、息を飲むと、

「望の事は信頼してるよ。望は1人でも何でもできるしね。わたしの手助けなんていらないと思うのもあるし、何かあった時にわたしや沙耶を巻き込まないようにしているのもね……でも、たまにはくだらない事でも良いから、頼って欲しいな。って思うよ。幼なじみなんだからね」

「……深月」

「望が思ってる以上に人って成長するんだよ。友達のために大切な人のために自分のために沙耶だって利光だって成長してる。もちろん、わたしもね。だから、いつか、望の抱えてるものも教えて欲しいな」

深月は望が自分達に隠し事をしている事に気づいているようで望の抱えているものを教えて欲しいと言い、

「……俺が隠しているものが、深月や沙耶が軽蔑するような事であっても？」

「うーん。その質問は卑怯だよ。って言いたいところだけど……望はそんな事はしないよ。さっきも言ったよね。わたしは望を信頼してるから」

望は深月に良いように言われているのが少ししゃくだったようで意地悪な質問をするが深月は真っ直ぐと望を見て言う。

「……良くそんな恥ずかしい事を言えるね」

「伝えたい事は言葉にしないとね。必要だし、後悔しないために、それにわたしの知ってる望はわたしや沙耶が困ってたら、見捨てるような事はしないから」

望は深月の返事にため息を吐くが深月は望の姿を見てくすりと笑い、

「……そうだね。深月の場合は見捨てたらうるさいだろうしね」

「うん。ボクはうるさいよ。そんな事をしたら、毎日の登下校はのぞみちゃんになると思ってね」

「……どんな罰だよ」

望は深月との口論は分が悪いと判断したようで苦笑いを浮かべると深月はいつもの様子に戻り、望はもう1度、ため息を吐く。

第152問

「……教室、落ち着いてるかな？」

「さあな。とりあえず、戻るぞ。そろそろ、大貴の治療をしないといけないころだ」

理音達は研究室から出ると雄二と翔子から別れ、Bクラスの教室に戻ろうと歩いていると、

「待ってよ。もう時間がないんだから、真面目にやってよ」

「そうです。もう時間が」

『うるせぇな。たかだか学祭だろ。やりてえ奴らが準備すれば良いだろ。俺達はクラスの展示なんか面倒な事はやる気はねえんだよ』

Cクラスの教室前の廊下で男子生徒が展示物の手伝いをしないようでひばりと葵が男子生徒と揉めている声が聞こえ、

「終夜！！」

「わかってる」

「……」

大樹と終夜は理音がまたおかしな行動に移ると感じ取り、理音の腕をつかむが理音は足で器用にドアを開けると2人を引きずったまま、Cクラスの教室に入り、

「ま、前田くんに秋月くん、清瀬くん？」

『支倉、お前、汚いぞ。俺達が仕事しないからって、前田の力を使って無理やり言う事を聞かせようって事か！！』

瑞希は理音達の登場に驚きの声を上げ、男子生徒達は自分達の身の危険を感じたようでひばりを非難するように言う。

「前田、落ち着け。これはクラスの問題なんだからな」

「そうだぞ。それをやると支倉の立場が」

「……秋月、清瀬、勘違いするな。俺はあんな屑どもに興味はない……」

「り、理音くん？」

大樹と終夜は理音に落ち着くように言うが、理音は自分は落ち着いていると言うと2人がつかんでいた手を引き抜き、ひばりの前に立ち、ひばりの顔を見てしばらく何かを考えるような表情をし、ひばりは理音の行動に何があったかわからないようで一瞬、呆気に取られると、

「……帰るぞ。ひばり」

「ふ、ふぇっ！？　ちょ、ちょっと、理音くん！？」

理音はひばりを抱きかかえ、理音の突然の行動にひばりは意味がわからないようで驚きの声を上げながら、理音の腕の中でジタバタす

るが、

「瑞希、本宮、白石、ドクターストップだ。ひばりは休ませる。早退の手続きをしてくる」

「そ、そうなんですか？　わ、わかりました。す、すぐに、ひばりちゃんのカバンを用意しますね」

「あぁ。頼む」

「ひばりん。風邪なの？　大丈夫？」

理音はひばりの様子にひばりがこのままでは体調を崩すと判断したようでひばりを連れて帰ると言うと瑞希は慌てて、ひばりのカバンを取り、沙耶は心配そうな表情でひばりの顔を覗き込む。

「り、理音くん、何を言ってるの！？　あたしは大丈夫だよ。風邪なんてひいてないよ！？」

「……ひばり、静かにしろ。俺の診断が間違っているわけないだろ。現に今のお前の体温は通常時より2度1分上昇している。今朝は怪しかったから様子を見ようと思ったが、ここまで悪くなっていているなら、別だ」

ひばりは理音に自分は大丈夫だと言うが理音はひばりの口から出る『大丈夫』は信用しないと言い切り、

「……少なくとも体温の上昇は今の状況もあると思うぞ」

「だろうな。前田、すぐに職員室に行け。お前のカバンは取ってき

てやるから」

「あぁ。すまない。清瀬」

終夜は理音とひばりの様子に苦笑いを浮かべると大樹は理音のカバンを取りに教室に取りに行くと、

「……別にお前らが学祭に何も感じないのは勝手だが、真面目にやっている奴らの邪魔をするな」

『……』

瑞希からひばりのカバンを受け取り、ひばりを抱きかかえたまま振り返る事なく、ひばり達と揉めていた男子生徒達に言うと教室を出て行く。

第153問

「理音くん、あ、あたし、1人で帰れるよ。だから、理音くんはクラスに戻って」

「……良いから黙っていろ」

ひばりは理音に抱きかかえられているのが恥ずかしいため、自分1人で帰ると言うが理音がひばりの言う事を聞くわけもなく職員室に向かって歩いていると、

「リオ、ひばり、何してるの？」

「アキくん!?」

「ん？　ひばりの風邪が悪化したんでな。職員室で早退届を出してくる」

Dクラスの教室から明久と秀吉が顔を出し、理音はひばりが体調を崩している事を告げ、

「うむ。そう言われると少し顔が赤いようじゃが……」

「秀吉、それはこの格好だからじゃないかな」

秀吉はひばりの顔を見て納得したように頷き、明久は苦笑いを浮かべる。

「アキくんからも言ってよ。理音くんがあたしに付いて帰るって言

うんだよ」

「そうなの？　リオ、ひばりの事は任せるよ。ボクも学校が終わったら様子を見に行くから」

ひばりは明久に理音が帰ると言うのを説得して欲しいと言うが明久は理音にひばりを任せると言い、

「あぁ……アキ、ひばりは俺の研究室に連れて帰る。今日はおじさんは家に帰ってこないようだからな。ひばりを1人にするわけにもいかないし」

「それなら、怜生くんはどうするの？　今から迎えに行くのは早いよね。ボクが迎えに行こうか？」

「あぁ。それはかあさんに連絡しておく。怜生に風邪をうつすわけにもいかないからな。かあさんが無理だったら、改めて、連絡を入れるから、その時は頼む」

理音は明久にひばりを研究室に連れて帰る事を話すと明久は怜生を迎えに行ってくれると言うが理音は怜生の事を怜奈に任せると言うと、

「了解。そうだよね。怜生くんに風邪をうつすわけにはいかないもんね」

「それじゃあ、俺とひばりは行くぞ」

「うむ。引き留めて悪かったのじゃ。支倉もゆっくりと休むのじゃぞ。本宮が支倉は頑張りすぎじゃと心配しておったのじゃ。心配し

てくれる本宮や明久、理音のためにもしっかりと休む時は休むべきなのじゃ……どうかしたかのう？」

明久は理音の言葉に頷き、理音はひばりを抱きかかえたまま職員室に行こうとするが秀吉の言葉に理音、明久、ひばりの視線は秀吉に集まり、秀吉は意味が3人が自分を見ている事に首を傾げる。

「あ、あのね。木下くん、前から聞きたかったんだけど、葵ちゃんと木下くんってお付き合いしているのかな？　って」

「は、支倉、な、何を突然、言いだすのじゃ！？」

ひばりは今まで見ていた秀吉と葵の様子に以前から思っていた秀吉と葵の今の関係について聞くと秀吉は顔を真っ赤にして慌てはじめ、

「……なるほど、自覚はあるが今の状況が居心地が良いため、告白して玉砕した時の事を考えて前に進めないと言うところか」

「ひ、秀吉、ダメだよ！！　女の子同士だなんて！！」

「明久、何度も言わせるでない！！　ワシは男じゃ！！」

理音は秀吉と葵の関係を的確に読みよる隣で明久は秀吉を女の子扱いすると秀吉は全力で自分は男だと主張するが、

『よ、吉井、木下が女子生徒と付き合っているとは本当か！？』

『本宮？　Ｃクラスの本宮か？　メガネっ娘の美少女だろ？』

『美少女同士の絡み合い？　サイコーだ！！！！！』

理音達の会話をDクラスの男子生徒は盗み聞きしていたようで歓喜の声を上げ出し、

「……理音くん、これ、どうしようか？」

「知らん。俺には木下弟を女として認識する意味がわからんからな。それより、アキ、木下弟、俺とひばりは行くぞ」

「うん。また後でね」

ひばりは自分が理音に抱きかかえられている事より、目の前で歓喜の声を上げている男子生徒達の方が気になるようで顔を引きつらせるが理音は気にする事なく、明久にひばりを連れて帰ると言い職員室に向かって歩き出す。

第154問

「……理音くん」

「ん？　どうかしたか？」

「あ、あのね……おろして、歩けるから、ちゃんと理音くんの言う通りに帰るから」

理音がひばりを抱きかかえたまま職員室に向かっているとひばりは周りから向けられる視線にすでに限界であり、理音におろして欲しいと言うが、

「ダメだ」

「何で？」

理音は一言でひばりを言葉を斬り捨てるとひばりは不満そうに聞き返すと、

「決まってるだろ。俺がこうしていたいからだ」

「理音くん！！」

理音はひばりを抱きかかえていたいと言い、ひばりが声を上げた時、

「……あんた達はいったい、何をやってるんだい？」

「ん？　妖怪ばばあに……沢渡？　研究所の仕事か何かか？」

学園長は理音とひばりを見てため息を吐くと理音は学園長の隣に『沢渡美咲』が立っている事に気づく。

「そうなんだけど……」

「……理音くん、おろして」

「断る」

美咲は理音の言葉に頷くが理音の質問より、理音の腕の中に抱えられているひばりの事が気になるようであり、ひばりは美咲の視線が気になるようで理音に改めておろして欲しいと言うが理音は断り、

「ばばあ、俺とひばりは早退するから、届け出を書いておけ」

「……くそじゃり、あたしはあんたの駒じゃないよ。それくらいは自分でやってきな」

「……ちっ、使えないばばあだ」

理音は学園長に早退する事を担任に上手く伝えておけと言うが学園長は理音の態度にため息を吐くと理音は使えないと舌打ちをする。

「ねえ。理音くん、どうして、小学生を抱きかかえているの？　まさか、『ロ』の人だったの？　って言うか、どうして小学生が文月にいるの？」

「あたし、そんなにちっちゃくないよ！？」

美咲は理音の腕の中にいるひばりの事を理音に聞くが美咲はひばりを小学生だと勘違いしており、ひばりは声をあげると、

「ん？　そうだった。紹介が遅れたな。ひばり、こいつは沢渡美咲。ばばあの研究所の研究員の1人だ。沢渡、こっちは支倉ひばり。俺の幼なじみ兼彼女だ」

「……沢渡さん？　えーと、美波ちゃんの翻訳機の？」

「あ。あれを知ってるんだ。聞いてよ。最初に理音くんが作ったの。無機質で可愛げのないものだったのよ。女の子が付けるって言ってるのにつまらないわよね？　……彼女？」

理音はひばりに美咲を紹介するとひばりは美咲の名前に聞き覚えがあるようで首をかしげ、美咲はひばりの言葉に自分の考えが間違っていない事を同意して欲しいようであるが、理音の言葉に何かに気づき首を傾げ、

「あ、あの。支倉ひばりです」

「沢渡美咲です」

ひばりは流石に理音の腕の中では失礼と思ったようでなんとか理音の腕の中からはい出て美咲に頭を下げると美咲も慌ててひばりに頭を下げ、

「理音くん、この娘が前に言ってた幼なじみ？」

「あぁ」

美咲は以前に理音から聞いた事のあるひばりと今のひばりが合致しないようで理音に聞くが理音は頷くだけであり、

「……理音くん、この娘に頭が上がらないの？」

美咲は信じられないと言ったような表情をする。

「あぁ。それで何か急ぎの用事があるのか？　ないなら、ひばりが風邪をひいているんだ。俺達は帰るぞ」

「ん？　確かに、顔が赤いね。熱も……あるね」

理音は美咲の事など気にすることなく、帰りたいと言うと学園長はひばりの顔を覗き込んだ後ひばりの額に手を当てて熱を測ると、

「早退届を書いてきな。あたしはこの後に外出するから、あたしの車で送ってやるよ」

「い、良いんですか？」

「あぁ。ついでだし、あんたには前に仕事を手伝ってもらったしね」

学園長は理音とひばりを送ってやると言うとひばりは学園長の言葉に驚きの声を上げるが学園長は以前に理音と一緒に手伝った作業の礼だと言い、

「ひばり、行くぞ」

「ま、待って。理音くん、あたし、歩けるよ！？」

理音はひばりを引きずって職員室に向かい歩き出す。

第１５５問

「で、沢渡は結局、何しにきたんだ？」

「えーと、ちょっと研究所のシステムにいくつかバグとは言いきれないんだけど不明な点が出てきてね。それを所長に見て貰おうと思ってね。まぁ、理音くんが見てくれるなら手伝ってくれても良いんだけど……まぁ、今日は無理そうだけどね」

理音の研究所に向かう途中に学園長の車の中で理音は美咲が文月学園に来た理由を聞くと美咲は研究所の方で問題が起きていると言うと、

「理音くん、それなら、研究所に行ってよ。あたしは大丈夫だから」

「支倉、あんたはくそじゃりの彼女なのに何もわかってないね。このくそじゃりは器用に見えて不器用さね。１つの事しかできないんだ。あんたが風邪を治さない限り、まともに動きはしないよ」

ひばりは研究所の方が大変だと思ったようで理音に研究所に行くように言うが学園長はため息を吐きながら、今の理音は足手まといだと言い、

「一応はバグのデータとあたしが解析した所見だよ。ヒマな時にでも見ておきな。後はできればで良いんだけど、あんたが所属していた研究所の口の堅い研究者にも見て貰ってくれるかい？」

「……あぁ。海谷にでも連絡しておくか。現状で言えば、プログラム関係はあいつ意外にいないしな。それに……この間、研究所のＡ

棟を半壊させた件で研究場所がなくて暇をしているらしいしな」

「研究所を半壊？　海谷博士は何をしてるの？」

学園長は理音にバグのデータを渡すと理音は先日、研究所を半壊させたため時間を持て余している陸に意見を求めると言うと美咲は陸が起こしたけた外れの行動に顔を引きつらせるが、

「ん？　あいつにとっては日常茶飯事だ。気にするな」

「……理音くん、気にし無さ過ぎるのもどうかと思うよ」

理音は表情を変える事なく気にするなと言うとひばりはため息を吐く。

「問題と言えば、情報の漏えいだが……」

「何？　海谷博士って口が軽いの？」

しかし、理音はひばりのため息混じりの言葉などは気にする事なく、陸以外に適任者はいないようだが心配事があるようで首を傾げると美咲は陸の事を口が軽いのかと言うと、

「いや、海谷はそんな事はしないが問題はポンコツだ」

「ポンコツ？」

「マーナさんだね」

理音は陸ではなく、陸のそばにいるマーナが重要な情報を話すと言

い、美咲はマーナを知らないため首を傾げ、ひばりは苦笑いを浮かべる。

「マーナさん？」

「海谷が作ったサポートプログラムだ。基本的にポンコツにサポートされないと研究ができないような人間は研究所にはいないからな。完全な役立たずだけどな」

「……サポートプログラムが役に立たない？　天才が集まる最先端の研究所とは言え、そんな事があり得るの？」

理音が美咲にマーナの事を説明すると美咲は顔を引きつらせるが、

「あるから、役立たずなんだろ。後は学習プログラムも積んであるが、余計な事しか学習しないからな。最終的にあのポンコツが学んだ事は自分は研究所や陸に寄生して自堕落に暮らして居れば良いと言う事だ」

「……何？　それって技術力を無駄に使い過ぎてない？」

理音は興味無さそうにマーナは役立たずだと言うと美咲は無駄でしかないマーナの能力にため息を吐くと、

「まぁ、一般人から見れば高度なプログラム化も知れんがその分、人を見下すように成長しているからな。人の堕落する部分のサンプルとして見るのには役立つかも知れんがな」

「……理音くん、言い過ぎ」

「事実だ」

理音は改めてマーナは役立たずだと言うとひばりはため息を吐くが理音は気にする事なく言い切った時、

「くそじゃり、着いたよ」

「ん？　すまないな。ばばあ」

「礼を言うなら、言葉づかいを考えなよ。くそじゃり」

車は理音の研究所の前に到着し、学園長は理音に降りるように言うと理音は理音なりの言葉で礼を言うがその言葉は目上の人に言う言葉ではなく学園長はため息を吐きながらも言うだけ無駄だと思っているようであり、

「学園長先生、ありがとうございました。ほら、理音くんも頭を下げて」

「……」

ひばりは学園長に頭を下げると理音にも頭を下げるように言い、理音はしぶしぶ頭を下げ、

「……本当に理音くんは支倉さんには頭が上がらないのね」

美咲は2人の様子に苦笑いを浮かべる。

第１５６問（前書き）

今回は書いてて、ひどくテレました。（苦笑）

第156問

「えーと、おじゃまします」

「ひばり、部屋で着替えて布団に入っていろ。薬用意してくる……ひばり、昼は食えたか？」

理音の研究室に入ると理音はひばりに飲ませる薬を調合しようと急いで奥に入って行こうとするが薬の用意をするためにひばりが昼食を食べる事ができたかと聞くと、

「……えーと、食べてない」

「そうか。食欲はないか。まぁ、薬を飲む前に何か用意するから待ってろ」

「う、うん」

ひばりは食欲はあまりないようで昼食を食べていないと言うと理音は少し考えると奥に入って行く。

「……相変わらず、シンプルな部屋だな」

ひばりは理音が研究室に泊まる時に使っている寝室に移動すると必要最低限のものしか置いてない理音の部屋を見回しながら、理音の部屋着に着替えてベットの中に潜り込む。

（……理音くんの匂い）

ひばりは理音のいつも使っているベットに潜り込んでそんな事を思うが、

（あ、あたしは何を考えているの！？　こ、これじゃあ、変態さんだよ！？）

直ぐに自分がおかしな事を考えてしまった事に気づき、顔を真っ赤にしながら首を振っていると、

「ひばり、入るぞ」

「う、うん」

理音が部屋のドアをノックし、ひばりは直ぐに返事をする。

「ん？　顔が赤いな。熱が上がったか？」

「だ、大丈夫だよ」

「そうか……とりあえず、これなら食えると思ったんだが、桃缶とリンゴ。どっちが良い？」

理音は布団から恥ずかしそうに顔を出すひばりを見て心配そうに彼女の顔を覗き込むとひばりは大丈夫だと答え、理音は頷くとひばりに桃缶とリンゴどっちが食べたいかと聞くと、

「リンゴかな？」

「あぁ……ん？　すりおろした方が良いか？　うさぎさんが良いか？」

「……ぷっ」

ひばりはリンゴが良いと答えると理音は持ってきた果物ナイフで器用にリンゴの皮を剥こうとしながらも表情を変える事なくひばりにリンゴの形をどうしたら良いかと聞くが、ひばりは理音の口からでた『うさぎさん』と言う言葉に吹きだしてしまうが、

「俺は何かおかしな事を言ったか？」

理音はひばりが笑っている理由がわからないようで首を傾げる。

「だ、だって、うさぎさんって」

「ん？　何かおかしいか？」

「理音くん真顔でうさぎさんなんて言うから」

ひばりは理音の様子がつぼだったようで笑うが理音は意味がわからないため首をかしげていると、

「そうか？　風邪をひいた時はとうさんがいつもこうしてくれたから当たり前なんだと思っていたんだが」

「うん。そうだったね」

理音は記憶に残る父親の姿を思い出して少しだけ照れくさそうに笑うとひばりもその時の理音の父親の姿を思い浮かべたようで理音に微笑みかける。

「それだと、普通に向いた方が良いか？　それとも栄養面を考えると皮つきですり下ろすか？」

「今日はうさぎさんでお願いできるかな？」

「あぁ」

理音はひばりの様子に少しだけ恥ずかしくなったようで視線を逸らして言うとひばりは『うさぎさん』をリクエストし、理音はリンゴをうさぎの形に器用に剥いて行き、

「ほら、できたぞ。食えるか？」

「うん」

皿の上にのせたリンゴをひばりの前に出すとひばりは起き上がり、リンゴを食べ始める。

第１５６問（後書き）

どうも、作者です。

いちゃついている2人は無視して感想の話です。今まで更新時に感想の返信をしていたのですが感想を読ませていただいたときに返信する形に変更させていただきたいと思います。ご了承ください。

第157問

「……すう」

（……寝たな。一先ず、ばばあのデータでも）

ひばりは薬が効き始めてきたようで小さな寝息を立て始めると理音は学園長から渡されたデータを見るために立ち上がろうとするが、

（ん？　これだと動けないな）

ひばりは安心するのか理音の右腕をしっかりと握っており、理音はひばりの様子を見て苦笑いを浮かべると、

（一先ずはかあさんに怜生を迎えに行けるか連絡しておくか？　動くわけにもいかないしな……出るか？　メールの方が良いか？）

左手で自分のポケットにしまっておいた携帯電話を取り出すとアドレスから怜奈の電話番号を選び、電話をかけると数回の呼び出し音が鳴った後、

「もしもし、理音、こんな時間にどうかしたの？　急用？」

怜奈は学校にいるはずの理音からの何か急用だと思ったようで直ぐに用件を聞く。

「あぁ。今日なんだけど、かあさん、怜生を迎えに行けないか？」

「怜生を？　無理よ。今日は日帰り出張で遅くなるって言ってたで

しょ。忘れてた？」

「……あぁ。忘れてた」

理音は怜奈に怜生を迎えに行けないかと聞くが怜奈は今日は仕事が遅くなると言うと理音はすっかり忘れていたようでため息を吐き、

「何？　理音もどこかに行かないといけなくなったの？」

「いや、ひばりが体調を崩して、研究所に連れて帰ってきたんだ」

怜奈は理音にも急用ができたと思い聞き返し、理音は怜奈にひばりが風邪をひいていると告げると、

「理音、いくらなんでも弱ってる時に襲ったらダメよ。さすがにそれは卑怯だから」

「……襲わない」

「そう？　今は葛藤中ってところね」

怜奈は理音にひばりを襲わないように言うと理音は襲わないと答えるがその解答には少し間があり、怜奈は電話の先で楽しそうに笑う。

「しかし、困ったわね。私がそっちに着くのは9時近いから、怜生を迎えにはいけないわよ」

「いや、無理ならアキに頼むと言ってあるから、良いんだがかあさんがいないと怜生はひばりのそばにいると言いだすだろうからな。怜生まで風邪をひかせるわけにはいかないだろ」

「そうね……まぁ、でも、ひばりちゃんが眠ってる姿でも1度、見せてあげれば怜生も安心するでしょ。その後は大人しくしてるでしょ」

怜奈は自分も理音も怜生を迎えに行く事ができないため、困ったように言うと理音は明久に迎えに行く事を頼んではいるがひばりが風邪をひいている事を知られると面倒な事になると言うが怜奈はそこまで心配する必要はないと笑うと、

「理音は今日はずっとひばりちゃんに付いているつもりなんでしょ。あんたも無理しないでよ。仮にあんたに風邪がうつるとひばりちゃんは自分を責めるからね」

「あぁ。それくらいは理解している」

「それなら良し。帰ったら、そっちに怜生を迎えに行くから、それまでは怜生の相手はアキくんにお願いしてくれる？」

怜奈は理音にも風邪をひかないように言った後、怜生の相手を明久にして貰えるようにお願いして欲しいと言い、

「あぁ。わかった。それじゃあ、切るぞ。アキにも連絡しないといけないからな」

「えぇ。最後にもう1度、言うけど襲うなら正々……」

理音は明久に連絡するために電話を切ると言うと怜奈は最後にもう1度、理音に釘を刺そうとするが理音は面倒になると判断したようで怜奈の言葉の途中で電話を切り、

「アキに電話だな」

アドレスから明久の電話番号を選び、電話をかける。

第158問

「明久、さっきから携帯を気にして何かあったのか？」

「そうよ。作業が遅れてるんだから、集中しなさいよ」

「う、うん。そうなんだけどさ」

明久はひばりの体調が心配のようで携帯電話を気にしていると雄二と美波が明久に集中するように言うが明久は集中しきれないようで苦笑いを浮かべると、

「仕方ないのじゃ。支倉が体調を崩したのじゃ」

「ひばりが？　大丈夫なの？」

ひばりが体調を崩している事を知っている秀吉が明久をフォローし、美波は驚きの声を上げるとひばりの体調について聞き、

「リオが付いてるから、大丈夫だとは思うんだけど」

「理音がついてるなら大丈夫だろ。あいつは薬学とかそっちが専門だって話だし」

「そうなんだけど、ひばりは無理するから、理音を困らせてる可能性もあってさ」

明久は心配なようで苦笑いを浮かべたまま言うと雄二は理音の専攻分野を聞いているようで心配と言うが明久の心配はひばりが大人し

くしているかだと言う。

「それこそ、俺達が心配する事じゃないだろ……まぁ、明久、今日は放課後、残らないで帰れ」

「そうじゃな」

雄二は明久の心配はどうしようもないと笑うと今日は直ぐに帰るように言い、秀吉も同じ意見のようで頷くと、

「あ、あの。吉井くんを呼んでいただきたいんですけど」

「姫路さん」

「瑞希、そんなところで立ってないで入ってきなよ」

瑞希が遠慮がちに教室の中を覗き、明久と美波は瑞希に教室に入って来るように言う。

「し、失礼します。吉井くん、前田くんから連絡ってありましたか？」

「いや、まだなんだよ。ボクのところにくるって事は姫路さんにも連絡が来てないって事だよね？」

「はい」

瑞希は教室に入ってくるなり、明久に理音から連絡はないかと聞き、明久が首を振った時、

「リオ、ひばりは大丈夫？」

「……大声を出すな。ひばりが起きるだろ」

「う、うん。ゴメン」

明久の携帯電話が鳴り、明久は通話ボタンを押すなり理音にひばりの体調を聞くと電話の先からは冷静な理音の声が聞こえ、理音の言葉に明久は声を小さくして謝ると、

「とりあえず、薬を飲ませた。今は薬が効いてきたようで寝ている。清涼祭で頑張りすぎていたようだからな。過労もあるんだろう」

「そう。それじゃあ、大丈夫なんだね」

「あぁ」

理音はひばりは心配ないと言うと明久は安心したようで笑顔を見せると周りにいた４人も安心したような表情を見せる。

「それで、アキ、怜生の事なんだが」

「おばさん、怜生くんを迎えに行けないの？」

「あぁ。今日はかあさんは遅くなるって事を忘れていた。遠出しているらしくて直ぐには帰って来れないらしい」

理音は明久に怜生のお迎えを頼むと、

「うん。わかったよ。怜生くんはボクが迎えに行くから、その後は

研究所で良いんだよね？」

「あぁ。一応、清瀬に話を通してから、迎えに行ってくれ。最近はいろいろと面倒らしくてな」

「わかったよ。それじゃあ、後で……姫路さんと行くから」

明久は怜生を迎えに行った後、研究室に行くと言おうとするが瑞希も一緒に行くと言いたげに明久の制服を引っ張り、理音に瑞希と一緒に行くと言う。

第159問

「清瀬くん、いる？」

「ん？　吉井に姫路？　……って事は怜生くんの迎えは吉井か？」

帰りのＨＲを終えたＢクラスの教室を明久と瑞希が訪ねると大樹はひばりが理音と一緒に帰った事もあるため、２人がきた理由を察すると、

「うん。さっき、リオから連絡がきたんだけど、清瀬くんに話を通してからの方が良いだろうって」

「そうだな。最近はおかしな人も多いし、知り合いだからと言ってってのも怪しいし」

明久は理音から大樹に話を通せと言われたと言うと大樹は苦笑いを浮かべ、

「悪い。木下、烏丸、今日は俺は上がるぞ」

「えぇ。調理指導はヒロにして貰うから、清瀬くんは今日は帰って、吉井くん、姫路さん、支倉さんによろしくね」

クラスをまとめている優子に今日は帰らせて貰うと言うと優子はひばりが早退した事を知っているようで快く了承してくれるが、

「明久、姫路、早く行ってやらないと理音が支倉に襲い掛かるから急げ！？　ゆ、優子、何をするんだ！？　俺の間接はそっちには曲

がらない！？」

「……あんたは何、また、おかしな事を言ってるのよ？　前田だって今日はそんな暇ないでしょ？」

大貴が余計な事を言いだし、優子にお仕置きをされ始める。

「……いや、木下さん、リオの場合は葛藤中だと思うから、烏丸くんを解放してあげてよ」

「……そう？　いくらなんでも今日はないでしょ」

「……いや、弱っている女の子を見るとあいつの場合、狩猟本能が動き出しそうだ」

明久は苦笑いを浮かべながら、優子を止めると優子は流石の理音もひばりを襲う事はないと言うが終夜は理音ならあり得ると言い、

「……否定できないです」

「……そうだな」

瑞希と大樹は苦笑いを浮かべながら終夜の言葉に頷くと、

「木下、俺も今日は上がるぞ。弟を迎えに行かないと行けないんだ」

「終夜、帰るわよ……あれ？　瑞希に吉井、まだ居たの？　早く帰らなくて良いの？」

終夜も今日は瑠衣を迎えに行かないといけないと言った時、美波が

Bクラスの教室を訪れ、先に出たはずの明久と瑞希がいる事に首を傾げる。

「まぁ、色々、あってね。それより、島田さんがきたって事は美春が襲撃してくる前に行くか？」

「そうだな。清水がくると面倒だ。烏丸に任せたいところだが、教室で人外対決が起きると清涼祭までに間に合わなくなるからな」

美波が首を傾げている姿に大樹と終夜は苦笑いを浮かべると自分のカバンを持つと、

「悪いね。姫路さん、何か邪魔しちゃったみたいで」

「そ、そんな事はないですよ！？　きょ、今日はひばりちゃんの様子を見に行かないといけないんですから」

大樹は少しイタズラな笑みを浮かべて瑞希の耳元で明久との2人っきりを邪魔して悪いなと謝ると瑞希は慌てて否定するが顔は真っ赤になっており、

「姫路さん？　顔、赤いよ……まさか、ひばりの風邪がうつったの？　ど、どうしよう？　保健室によって薬を貰って来た方が良いかな？」

「よ、吉井くん、わ、私は大丈夫ですから、落ち着いてください」

「……2人とも落ちつけ」

明久は瑞希も風邪をひいたと思ったようで慌てはじめ、瑞希は顔を

真っ赤にしたまま明久に向かい大丈夫だと言っている姿に終夜はため息を吐く。

第１６０問

「そう言えば、秋月くんも清瀬くんも今日は帰って良いの？　今日はリオもいないし、清涼祭の準備は間に合うの？」

「それはそっちもだろ。まぁ、俺達は予定より大部進んでる感じだし、烏丸が余計な事を言って木下に関節技を喰らう過程で物を壊さなければ充分に間に合う」

「……終夜、余計な事を言うな。明日、登校したら教室の物が大破してそうで怖いから」

５人で歩いていると明久が大樹と終夜にＢクラスの清涼祭の出し物の進捗状況を聞くと終夜は苦笑いを浮かべながらおかしな事が起きなければ間に合うと言うと大樹はその言葉は不吉な予感しかしないとため息を吐き、

「……そうだな」

「でも、話を聞くとＢクラスは１番まとまっているって聞きますから大丈夫ですよ」

終夜は大樹の言葉にため息を吐くと瑞希はフォローをすると、

「そうね。Ｂクラスは上手くまとまってるわよね」

「そうだな……基本的には木下がまとめるけど、足りない部分は大樹が補うし」

美波もBクラスはまとまっているように見えると言うと終夜は大樹と優子が上手い具合にクラスをまとめていると言うが、

「俺にそんな能力はないよ。と言うか、男子は基本的に前田と烏丸がまとめてるだろ」

「……主にエロでな」

「……なんかごめん」

大樹はBクラスの男子生徒は理音と大貴がまとめていると言い、終夜はそのまとめ方に苦笑いを浮かべると明久は2人に申し訳なさそうに謝る。

「まぁ。面白いから良いんだけどね。行きすぎると支倉が止めにくるし……前から思ってたんだけど、支倉は前田が騒ぎを起こしたのを感知できる能力でもあるのか？」

「えーと、無いとは思いますけど」

大樹は苦笑いを浮かべながら明久に気にするなと言うがいつも理音の起こす騒ぎが洒落にならないところで『とーるはんまー』を片手に隣のCクラスの教室から現れるひばりの姿を思い出しながら言うと瑞希は苦笑いを浮かべてひばりにそんな能力はないと言うと、

「なら、愛で良いな」

「そうね」

終夜はひばりの行動も理音と同様に『愛』だと言うと美波は苦笑い

を浮かべて頷き、

「それを聞くとひばりは絶対に否定するだろうね」

「顔を真っ赤にしてな。支倉は前田と付き合い始めたのになんであそこまで照れるんだ？」

「いや、恥ずかしいだろ」

明久は照れ隠しでひばりは慌てながら否定すると言うと終夜はもう少し嬉しがればいいと言うが大樹は苦笑いを浮かべる。

「……でも、前田みたく、きちんと言ってくれるのは羨ましいわよね？」

「……美波ちゃんもそう思いますか？」

明久、大樹、終夜の話す理音とひばりの話に美波は終夜から何かを言って欲しいと言いたげにつぶやくと瑞希は美波の言葉に頷き、

「……当然よ。瑞希だってそうでしょ？」

「……はい」

瑞希と美波の間には共通点もあるようでがっちり握手を交わすが、

「姫路さん、島田さん、どうかしたの？」

「美波、何してるんだ？」

2人の想い人は話をまったく聞いていないようで2人がなぜ握手をしているかわからないようで首をかしげ、

「……終夜、吉井、もう少しどうにかならないか？」

「何がだ？」

「清瀬くん、何の事？」

大樹は2人の反応にため息を吐くが明久と終夜は意味がわからないようで首を傾げる。

第１６１問

「悪いな。ちょっと説明してくるから、直ぐに帰らないでくれ」

「うん」

幼稚園に到着すると明久達を見て怜生と瑠衣が駆け寄ってくると大樹は両親に今日は明久が怜生を迎えに来た経緯を話してくるから待っていてくれと言い、屋内に入って行き、

「アキお兄ちゃん、みずきお姉ちゃん、お兄ちゃんはどうしたんですか？」

「うん。ちょっとね。ひばりが風邪をひいちゃって、リオはひばりの看病をしているんだよ」

怜生は理音がいない事に首を傾げると明久はしゃがみ込み怜生と目線を合わせてひばりが風邪をひいてしまった事を話すと、

「ひばりお姉ちゃん、具合、悪いですか？　大丈夫ですか？」

「うん。瑠衣くんも心配してくれてありがとうね。ひばりはリオが付いているから大丈夫だよ」

瑠衣は明久と怜生の話を聞いて心配そうに明久の制服をつかみ、明久は瑠衣の心配そうな表情に安心させるために柔らかい笑みを浮かべて瑠衣の頭を優しく撫でるが、

「お兄ちゃん、ひばりお姉ちゃんのお見舞いに行きたいです」

瑠衣は明久の制服をつかんだまま、終夜の顔を見上げる。

「えーと、秋月くん、どうしようっか？」

「瑠衣、わがままを言うな。支倉は具合が悪いんだ。お前が行っても邪魔になるだろ。風邪の時は休むのが1番なんだからな」

明久は困ったようで終夜に助けを求めると終夜はため息を吐きながら、瑠衣にお見舞いには行かないと言うが、

「……だって、ひばりお姉ちゃんが」

「……秋月くん、どうしよう？　もの凄い罪悪感が」

「そうですね」

瑠衣は泣きそうな表情で終夜を見て言い、明久と瑞希は瑠衣の様子に苦笑いを浮かべると、

「だけどな。瑠衣に風邪がうつったら、前田はまぁ、どうでも良いとして、支倉に迷惑をかけるだろ？」

「そうね。前田はどうでも良いとして、ひばりは自分を責めそう」

終夜と美波は瑠衣に風邪がうつった場合の時のひばりを心配しているようであり、

「あ、あの。前田くんはどうでも良いんですか？」

瑞希は終夜と美波の会話に苦笑いを浮かべたまま言う。

「アキお兄ちゃん、瑠衣くんもお姉ちゃんが心配です」

「うん。それはわかるんだけど……」

怜生は瑠衣も一緒にひばりの様子を見に行きたいと明久の顔を覗きこんで言うと明久は困ったように笑うが、

「アキお兄ちゃん、瑠衣くんのお兄ちゃん、ダメですか？」

「……いや」

「……何と言うか」

怜生と瑠衣の様子に明久と終夜は2人がひばりの事を本気で心配している事もわかるため、むげには断る事が出来ずにいると、

「怜生くん、瑠衣くん、あんまり、終夜と吉井を困らせるんじゃないよ」

「清瀬くん」

両親と話を終えた大樹がいつも手伝っている時に付けているエプロンを付けながら戻ってきて怜生と瑠衣にわがままを言わないようにと言うと明久と終夜は味方が来た事に安心したような表情をする。

「ですけど……」

「お姉ちゃん」

大樹にひばりのお見舞いを止められた怜生と瑠衣は1度、下を向いた後、視線を瑞希と美波に移し、

「よ、吉井くん、少しなら大丈夫じゃないでしょうか？　前田くんもいるわけですし」

「しゅ、終夜、顔を見たら直ぐに帰るって事にしようか。ウチもひばりの様子が気になるし」

瑞希と美波は怜生と瑠衣の言葉に頷いてしまい、

「……」

「悪いな。吉井」

「うん。結局、ボクも折れそうだったし、仕方ないよ」

大樹は頭を押さえ、明久と終夜はため息を吐く。

第162問

「吉井、インターホンってないのか？　前にきた時はあったと思うんだけど……と言うか、前にきた時と玄関が変わってないか？」

「そうね。前にきた時はここに木が生えてなかったっけ？」

「うん。最近、この研究所には必要ないんじゃないかって話になってと言うか……下手にあると玄関を爆破する人間がいるから知り合いだけに開けれるようにするって言ってさ」

理音の研究所の前に着くと終夜と美波は以前にきた時とは玄関の様子が変わっている事に気づいて首を傾げるが明久は苦笑いを浮かべると依然、陸が着た時に玄関が破壊されそうになったため、理音は玄関の設備を変えたと言うと、

「……玄関を爆破？　そんな事があるわけがないでしょ」

「……えーと、爆破？　……大樹の幼なじみがきたのか？」

美波は普通に考えると玄関が爆破されるような事はないと言うが終夜はその原因が誰か予想が付いたようで顔を引きつらせ、

「う、うん。ボクは会わなかったんだけどね。もの凄い事が起きたみたいだよ。玄関は焦げてたしね。インターホンは完全に破壊されてたから」

「あ、あの。吉井くん、インターホンがないなら、前田くんに電話かけて玄関を開けて貰います？」

明久は苦笑いを浮かべたまま、終夜の言葉に頷くと瑞希は勝手に入るわけにはいかないと思っているため、携帯電話を取り出して理音に電話をかけるようかと聞くが、

「必要ないよ。えーと、確か、ここをこうして……」

明久は首を振ると玄関のドアの隣にあるディスプレイに手を置くと機械的な声で『指紋、声紋、骨格データ……オールクリア。吉井明久と判断します。入場を許可します』と言う声が聞こえ玄関のドアが自動的に開く。

「……凄いんだが、ここまでやる必要はないんじゃないのか？」

「うーん。どちらかと言うとリオの趣味かな？　結局、こんなものを作っても清瀬くんの幼なじみがきたら爆破しようとするって言ってたし、ここに来ることが多くなりそうならリオに頼んでデータ入力をしておくと良いよ。データから自動的にデータも修正してくれるらしいから、合鍵貰うよりは楽だし」

「……いや、普通に電話して開けて貰う」

「……あ、あの。その人って何なんですか？」

終夜は目の前で起きている事に眉間にしわを寄せると明久は苦笑いを浮かべながら、結局は無駄かも知れないと言うと瑞希は顔を引きつらせるが、

「……ボクも知りたいよ」

「……姫路、あまり気にするな。関わりに遭う事なんてないだろうからな」

「そ、そうですね」

明久と終夜は陸と直接会った事がないため、気にするなと言うと、

「お兄ちゃん、お姉ちゃん」

「ひばりお姉ちゃん」

怜生と瑠衣はひばりの事が気になるようで玄関で靴を脱ぐとひばりが寝ているであろう理音の部屋に向かって駆け出して行き、

「ちょっと、瑠衣くん、怜生くん!?」

美波は慌てて2人を呼び止めるが2人は振り返る事はなく、

「なぁ。吉井、部屋では瑠衣や怜生くんが見てはいけない展開になってないよな?」

「……大丈夫だと信じたい」

終夜は理音の行動からひばりが襲われる可能性もあるかと明久に聞くと明久は終夜から視線を逸らすと2人を急いで追いかけて行く。

第１６３問

「理音くん、ご、ごめんね。すぐに避けるから」

「……あぁ」

ひばりは目を覚ますとトイレに行きたくなったようでベットから起きようとするが体調はあまり良くないようでベットの隣に座っている理音に倒れ込むとひばりは慌てて理音に謝り、理音が頷いた時、

「……ひ、ひばりちゃん？」

「……逆は考えていなかったな」

「しゅ、終夜、一先ず、ドアを閉めようか」

「えーと、怜生くん、瑠衣くん、室内に入ったら、先にうがい手洗いをしないとね」

怜生と瑠衣に追いついた明久、終夜、瑞希、美波が理音の部屋のドアを開け、理音とひばりの様子はひばりが理音に抱きついている形であり、４人は気まずそうにドアを閉めると、

「ま、待って！？　勘違いだから、みんな行かないで！？」

「……タイミングが悪いな」

ひばりは顔を真っ赤にして閉じたドアに向かい声を上げ、理音は困ったように首の後ろを指でかく。

「ひばりお姉ちゃん、大丈夫ですか？」

「お熱ありますか？」

「大丈夫だよ。心配かけてゴメンね。怜生くん、瑠衣くん」

一先ず、理音とひばりは誤解を解くとひばりはトイレに行った後、改めて、ベットに横になり、怜生と瑠衣は心配そうにひばりの顔をのぞき込み、ひばりは2人に心配をかけないように笑顔を見せるがやはり、まだ調子は良くないようでその笑顔は少しぎこちなく、

「……お兄ちゃん」

「……大丈夫だから、そんな顔をするな」

怜生は泣きそうな表情で理音の顔を見上げ、理音は優しい声で大丈夫だと言うと怜生の頭を撫でると、

「前田、悪かったな。瑠衣がどうしても支倉の様子が見たいって言って」

「まぁ、話を聞いてしまえば仕方ないだろ。それに怜生や瑠衣くんに心配されるって事を実感してひばりが少しでも自分をないがしろにしないようになってくれれば良い」

「うん。ひばりは自分の健康の事は割と無関心だしね。こうならないとゆっくり休まないし」

終夜は瑠衣を連れてくる形になってしまった事を理音に謝ると理音

と明久は怜生と瑠衣の泣きそうな表情を思い出せばひばりも2人を心配させないようにすると言い、

「……うん。気をつけるよ」

「そうですね」

ひばりは理音と明久の言葉に頷くと瑞希は苦笑いを浮かべる。

「瑞希、ひばりの事を言っているがお前もだ。アキはバカだから風邪はひかないが、お前も風邪をひきやすいんだからな。清涼祭を風邪で休みたくなかったらゆっくりと体を休めるんだぞ」

「は、はい。気を付けます！？」

ひばりの様子に苦笑いを浮かべる瑞希を見て、理音は瑞希もひばりと変わらないと言うと瑞希は慌てて返事をし、

「そうだね。姫路さんも気を付けないとダメだよ」

明久はひばりと同じように無理をする事の多い、瑞希に言い聞かせるように言うと、

「……前田、あの2人って結局、どうなってるんだ？」

「ん？　現状で言えば、友達以上恋人未満と言う言葉が適切だろ。距離は近く、瑞希からの好意は完全にアキへと向かっているがその本人はそれに気づかない。アキは自分の気持ちがどこに向かっているか気づいていないからな」

「……鈍いにもほどがあるな」

終夜は明久と瑞希の様子に改めて2人の関係を理音に聞くと理音は進展していないと言い終夜はその言葉にため息を吐く。

第１６３問（後書き）

どうも、作者です。

活動報告にバカテスの二次創作原案を書きました今度の主人公はＤクラスの女の子です。

第１６４問

「……」

「前田、どこか行くのか？」

理音はひばりが囲まれている姿に優しげな笑みを浮かべると立ち上がり、部屋を出て行こうとすると終夜が理音に気づき声をかける。

「いや、夕飯の準備をしないといけないと思ってな。怜生や瑠衣くんが居てくれるとひばりは素直に寝ていてくれるから、その間に済ませてくる」

「それなら、ボクがやるから、リオはひばりのそばにいてあげてよ」

理音は夕飯の準備をしてくると言うと明久は理音にひばりのそばに居て欲しいと言い、

「それなら、お夕飯は私が」

「……瑞希、死人を出す気か？」

「ひ、姫路さんはここに居てよ。ボクが夕飯作るから、お願いだからひばりを見ててよ」

瑞希は明久に手料理を食べて貰うチャンスだと思い立ち上がるが理音は眉間にしわを寄せて彼女を静止し、明久は瑞希には料理をさせるわけにはいかないと全力で瑞希に座るように言うと、

「……終夜、瑞希に何かあるの？」

「……姫路は料理はできないらしい」

「そうなんだ」

美波は理音と明久の様子に首を傾げると終夜は瑞希の料理で大貴が撃沈しているのを知っているため、美波から視線を逸らすと美波は終夜の様子に何か感じながらもできないと言っても大した事ではないと思っているようで首を傾げており、

「お前らはお前らで清涼祭の準備で疲れているだろ。俺が1番、体力が有り余っている……それに少し落ち着かせてくれ。俺にもいろいろと葛藤があったわけだしな」

「……理音くん」

「……お前、こんな状況でそんな事を考えたのか？」

理音は大貴を筆頭にした人間の予想通り、ひばりを襲うかどうかの葛藤があったようで頭を冷やしてくると言い、ひばりと終夜は理音の言葉にため息を吐くが、

「……ここに帰ってきてから、お前らがくる約2時間の間に137回考えた。今もその思考が止まらない」

「……1分、持たないのかよ」

「……前田、あんたねぇ」

理音は眉間にしわを寄せたまま、ひばりを襲うかどうかを考えた回数を話し、終夜と美波は呆れたように言う。

「……仕方ないだろ。男とはそう言う生き物だ。それに」

「お兄ちゃん、おかしな事を考えたらダメです」

理音は先ほどのひばりを抱きとめた感触が身体に残っているようであり、怜生は理音が何を考えているかは理解できないようだが理音に変な事は考えてはいけないと言い、

「だから、少し冷静になってくる。秋月、島田、お前達は夕飯はどうするつもりだ？」

「俺か？　今日は父さんも母さんも仕事で遅くなるからな。瑠衣、そろそろ帰るぞ」

「いやです。まだ、ひばりお姉ちゃんと一緒にいます」

理音は怜生の言葉に冷静になるのにも時間が必要だと言うと終夜と美波に夕飯をどうするかと聞き、終夜は瑠衣に帰ると言うが瑠衣はひばりからまだ離れるつもりもなく、

「島田、お前はどうする？」

「ウチ？　今日はウチはお母さんがいるし、夕飯を作る必要はないから終夜と瑠衣くんがいるならひばりが心配だし、居ようかな」

理音は終夜と瑠衣が残ると判断し、美波に帰るかと確認すると美波も残ると答え、

「わかった」

「前田、悪いな。ただで居座るのもなんだから手伝うぞ」

「あぁ。それなら頼む」

理音が部屋を出て行こうとすると終夜は理音を手伝うと言って2人で部屋を出て行き、

「待って。ボクも手伝うよ」

明久は何となく部屋に居づらくなったようで理音と終夜を追いかけて行く。

第165問

「瑞希ちゃん、今日はゴメンね。ただでさえ忙しいのにあたし……」

「ひばりちゃん、大丈夫ですよ」

理音達が部屋を出て行くとひばりは清涼祭の準備を途中で抜けてしまった事を申し訳なさそうに瑞希に謝ると瑞希は笑顔で大丈夫だと言い、

「あの後、沙耶ちゃんが中心になってみんなで作業を続けましたから、みんな協力してくれました」

「みんな？」

瑞希はCクラスがまとまって作業をしてくれたと言い、ひばりは首を傾げると、

「はい。みんなです。本当は男の子達も清涼祭の準備に参加したかったんです。でも、高校生にもなって、真面目に準備するのが恥ずかしかったそうです。参加したいけどひばりちゃんに怒られてちょっとムキになっちゃったそうです。そのせいでひばりちゃんが倒れてしまったのをみんな気にしていました」

「そうなんだ……あたし、ダメだね。何も気づいてなかったんだ」

瑞希は男子生徒達の心境の変化を話すとひばりは自分が何も気づいていなかった事に落ち込んでしまい目を伏せる。

「お姉ちゃん？」

「大丈夫ですか？」

そんな、ひばりの様子に怜生と瑠衣は心配そうにひばりの顔を覗き込むと、

「うん。大丈夫だよ」

ひばりは2人の事を心配させないように笑顔を見せるがその笑顔をどこかぎこちなく、

「ひばり、落ち込まないでよ」

「そうだぞ。過程はどうであれ、クラスがまとまったのは支倉のおかげなんだからな」

「秋月くん？　で、でも」

美波がひばりを励まそうとした時、終夜が理音に頼まれたようで飲み物を運んで部屋に戻ってくる。

「少なくともお前が倒れたおかげでクラスはまとまったんだ。気にしすぎるな。それにまとまったのはCクラスだけじゃないんだな」

「え？　どう言う事？」

「そうね」

終夜は苦笑いを浮かべながら、ひばりの体調を崩した事で他のクラ

スもまとまったと言いだし、ひばりは意味がわからずにきょとんとした表情をすると美波は苦笑いを浮かべ、

「うちのクラスもCクラスほどじゃないけど、準備って遅れてたのよ。だけど、吉井が今日は帰らないといけなくなったでしょ。そしたら、坂本がいつもはやる気なんて出さないのに吉井を帰らせるためだとか言いだしてクラスに指示を出し始めてね。最初はみんな戸惑ってたんだけど、指示も的確で作業は大部進んだのよ。木下もいつもは演劇部の方に直ぐに行っちゃうけどキリの良いところまでクラスの準備を進めるって言ってたし」

「Cクラスは聞いた通りだけどな。ウチも木下と烏丸が頑張ってくれてるしな。後はさっき前田の携帯にAクラスの保科からメールがあって弓永が支倉の風邪を心配してお見舞いに行くために今日の予定を直ぐにでも終わらせるって張り切ってて、クラスを指揮ってるんだと、それで作業も大部進んでるから、キリが良いところまで進めたら保科と弓永、後は白石が一緒にお見舞いに来るってさ」

終夜と美波はひばりのために動いてくれている友人がいる事を話すとひばりはどうしたら良いのかわからないようで戸惑ったような表情をすると、

「お姉ちゃん、そう言う時は笑ったら良いと思います」

「はい」

怜生はひばりに素直に喜んだ方が良いと言いたいようで笑顔を見せると瑠衣も頷き、

「支倉、お前がなんでそこまで自信がなさそうにしてるか、俺は良

くわからないんだけど、少なくともうちの学年はお前が中心にいると俺は思ってる。前田とか清水とかいろいろと濃いのが多いけどな。お前の周りに人が集まっているのはお前の才能だよ。もっと自信を持っても良いと思うぜ」

「違うよ。あたしの周りに人がいるのはアキくんや理音くんがいるからであって」

「その2人を繋いでるのは間違いなくお前だよ……と悪いな。お見舞いに来る人間が増えたからキッチンが忙しくなりそうだから戻るな」

終夜はひばりのなかにある不安を感じ取っているようで、ひばりに自信を持てと言うと自分の言葉に少しだけ照れくさくなったようで頭を掻いた後、部屋を出て行き、

「……秋月くん、かっこいいです。美波ちゃんが好きになる理由もこの間の人気投票の結果もわかります」

「……そうなのよ。だから、いろいろと心配なのよ」

瑞希は終夜の様子に納得が言ったと言うと美波は苦笑いを浮かべるなか、

「……自信か」

ひばりは終夜の言葉に何か考える事があるのか小さな声でつぶやく。

第166問

「ここが前田っちの研究室？　大きいね」

「望、望、インターホンがないよ」

「……2人とも落ち着いてくれ」

望が深月と沙耶と一緒にひばりのお見舞いのために理音の研究所の前にくると深月と沙耶は初めて研究所にくるようで玄関を見回し、望は2人の様子にため息を吐くと、

「ん？　保科に弓永、えーと、白石だったか？」

「坂本くんと霧島さんもお見舞い？」

雄二と翔子もひばりのお見舞いにきたようで3人の姿を見て声をかけ、

「……ひばりは私とゆ……」

「……翔子、違うからな」

翔子は当然だと言おうとするが雄二は翔子がまたおかしな事を言いそうになるため、翔子を止め、

「まぁ、目的は一緒って事で」

「そうだな……それで、入らないのか？」

「インターホンが見つからないんだよね。ドアも開かないし」

望は雄二と翔子の様子に苦笑いを浮かべると雄二は研究所の前に立ったまま、中に入ろうとしない事を聞くと深月は理音にドアを開けて貰おうと携帯電話を取り出すが、

「なんだ。保科は登録してないのか？　ここで結構、会ってるから登録してると思ったんだけどな」

「まあね。登録すれば開けれるとは言え、流石に理音がいなかったら、何かイヤだろ」

「まぁ、それもそうだな」

雄二はディスプレイに手を置くと機械的な声が響くなか、雄二は望に聞くと望は自分の立場的に記録の残るものは不味いと判断しており苦笑いを浮かべて誤魔化すと雄二は気にする事なくドアを開ける。

「前田っち、前田っち、ひばりんは！！」

「……理音、ひばりは」

沙耶と翔子は直ぐに靴を脱ぐと研究所に上がって行き、

「坂本くんは良くこの研究所にくるの？」

「あぁ、理音の弟になぜか懐かれちまってな」

深月は雄二がドアを開ける方法を知っていた事に首を傾げると雄二

は苦笑いを浮かべて怜生の相手をしにきていると言うと、

「望、ひばりんのところに行ってるね」

「……雄二、先に行ってる」

沙耶と翔子は理音からひばりの居場所を聞いたようで急いでひばりのいる部屋に向かって行く。

「よく来たな」

「……理音、騒がしくなってごめん」

理音は沙耶と翔子から遅れて玄関にくると望は沙耶の行動に理音に謝るが、

「ん？　まぁ、気にするな。２人なりにひばりを心配してるんだろ」

「そうだね」

理音は気にする事はないと言うと深月は苦笑いを浮かべ頷くと、

「望、坂本くん、ぼくもひばりのところに行ってくるね」

「あぁ、俺も少ししたら行くよ」

深月も沙耶と翔子を追いかけてひばりのところに行くと言い、２人の後を追いかけて行き、

「ん、そうだ。理音、秀吉と本宮から、今日は部活で帰りが遅くな

るからお見舞いにはこれないと思うからよろしく言っておいてくれって」

「奇遇だね。俺は烏丸くんから弟の世話をしないといけないからこれないって、木下さんは烏丸くんの家で料理の勉強だって言うから謝っておいて欲しいと言われた」

雄二は秀吉と葵からお見舞いに行けない事を謝っておいて欲しいと言うと望も大貴と優子から伝言を頼まれたと言う。

「……そうか。大貴は木下姉をお持ち帰りか」

「その表現はやめなよ」

理音は優子が大貴の家に行くと知り、人が聞いたら勘違いしそうな言い方をすると望はため息を吐き、

「しかし、ずいぶんと人が集まるな。他にも見舞いに行くならよろしく言っておいてくれって言われたしな」

「支倉さん、大人気だね」

「……そうだな。お前達は直ぐに部屋に行くのか？　俺はキッチンでアキと秋月と夕飯の準備をしてるからな」

雄二は他にもひばりのお見舞いに行きたいと言っていた人間がいると言うと望は苦笑いを浮かべ、理音は頷くと2人に自分は夕飯の準備をしてくると言うと、

「……部屋は女の子だらけだね」

「……そうだな。理音、俺は少し時間を見てから行く」

望と雄二は女子だらけの部屋に行くのをためらったようで理音を追いかけて行く。

第167問

「……飯ができたぞ。怜生、瑠衣くん、下に居間に降りろ。ひばりはどうする？　ここに運んでくるか？」

「えーと、うん。あたしは風邪をひいてるわけだし、みんなと一緒じゃない方が良いかな？」

夕飯を作り終えた理音が部屋に戻ってきて声をかけるとひばりは自分は風邪をひているから周りにうつすわけにもいかないため、部屋で1人で夕飯を食べると言うと、

「理音、僕の分はここに運んできて、ひばりと2人で少し話したい事もあるし」

「そうか？」

「うん。ひばりに『あーん』ってするのは理音の仕事なのかも知れないけど今日は僕に譲ってよ」

「……それは譲りたくないんだが」

深月は自分はひばりと一緒に夕飯を食べると言い、

「ちょ、ちょっと、深月ちゃん、何を言ってるの！？　理音くんもおかしな事を言わないで！？」

「……深月、理音、あんまり、支倉さんをからかわない。熱が上がったらどうするんだよ」

「何を言ってる。俺は本気だ」

ひばりは深月の言葉に顔を赤くし、望はため息を吐いて2人に言うと理音の表情は変わる事はなく、

「……まぁ、俺の言葉より、ひばりは深月の言葉は割と聞く傾向があるから、深月に任せるか」

「お兄ちゃん、僕もお姉ちゃんと一緒にご飯を食べたいです」

「はい」

理音はひばりが深月の話を聞く事も多い事ため、深月に任せると言った時、怜生と瑠衣もひばりと一緒に夕飯を食べたいと言う。

「……怜生、瑠衣くん、それはダメだ。わがままを言うな」

「そうだぞ。瑠衣、わがまま言うな。これ以上、わがままを言うなら、直ぐに帰るぞ」

理音は怜生と瑠衣の言い分は聞けないと言うと終夜も同じ意見のようでひばりの横になっているベッドの隣に座っている瑠衣を抱きかかえ、

「怜生くん、ひばりの風邪を治すのは休むのが1番だからね。あんまり、ひばりを困らせたらダメだよ」

「うん。怜生くんと瑠衣くんも風邪をひいたら困るからね。だから、お姉ちゃんの話を聞いて」

明久は怜生を抱きかかえるようとするが怜生は抵抗するため明久は苦笑いを浮かべるとひばりは怜生と瑠衣に優しい声で言い、

「……はい」

「……わかりました」

ひばりに言われてしまっては怜生も瑠衣も頷くしか出来ず、

「それじゃあ、行くぞ」

「うん」

明久と終夜は怜生と瑠衣を連れて部屋を出て行き、

「深月、ひばりんをよろしくね。望、わたし達も行こう」

「そうだね。夕飯を作って貰ってなんだけど、そろそろ、沙耶や深月も帰らないといけないだろうし」

「そうだな。それなりに時間も遅いからな」

沙耶は望の手を取ると望は時間を確認して自分や男性陣はまだしも沙耶や深月と言った女性陣の親は心配するだろうと言うと理音も頷き、

「それじゃあ、俺は飯を運んでくるからな。深月、ひばりを頼むぞ」

「わかってるよ。だいたい、こんな状況でひばりも無理はしないで

しょ。怜生くんや瑠衣くんにも言ったんだし」

「……うん」

理音はひばりと深月以外が部屋から出て行ったのを確認して深月にひばりを頼むと深月は先ほど怜生と瑠衣に話をしたひばりが無理はしないと言うとひばりは自分の行動にも問題がある事は理解してきているようで小さく頷く。

第168問

「ひばり、あーん♪」

「食べれるからね！？　そんなことしなくても」

深月は理音が運んできた2人分の夕食を受け取るとひばり用に作ったであろうおかゆをレンゲにのせてひばりの口元に運ぶとひばりは声をあげ、

「風邪ひいた時くらい、甘えれば良いのに」

「……それとこれは違うよ」

深月はひばりの反応にくすくすと笑うとひばりはため息を吐くが、

「それとも、やっぱり、理音が良かった？」

「……もう良いよ。美味しい」

深月はそれでもひばりをからかおうとし、ひばりはからかわれ疲れたようで頬を膨らませながらおかゆを口に運ぶと予想していたより、おかゆが美味しかったようで驚きの声をあげると、

「さっき、望から聞いたんだけど、おかゆはと言うかひばりのは理音の手作りだよ。メニューもほとんど変わらないけど、ちゃんと理音が栄養面とか考えて作ってくれたってさ」

「そうなんだ」

深月は男性陣だけでいた時間の話を望から聞いていたようでひばりに言い、ひばりは少しだけ照れくさそうに笑う。

「ひばり、風邪が治ったらちゃんとありがとうって言うんだよ」

「うん。謝るよ。みんなに迷惑をかけちゃったから」

深月はひばりの笑顔を見て優しげな笑みを浮かべて言うとひばりは風邪をひいた事で多くの人に迷惑をかけてしまったと言うが、

「ひばり、『ゴメン』じゃないよ。ひばりが言わないといけないのは『ありがとう』だよ」

「どう言う事？」

深月はひばりに言い聞かせるように言うがひばりは深月の言葉の意味がわからないようで首を傾げると、

「誰も、ひばりに迷惑をかけられたなんて思ってないから、謝るのは失礼だよ。今日だってこれだけの人間が集まってくれているのはひばりだからだよ。みんなにとってひばりが大切だから、ひばりが好きだから、みんなが集まってるんだよ。烏丸くんや木下さん、秀吉くんに葵、ここにきてなくても同じように思ってくれてる友達（ひと）はたくさんいるんだからね。そんな友達（ひと）に『迷惑をかけてゴメンなさい』は失礼だよ。だから、『心配してくれてありがとう』なの。この違いわかるかな？」

「そうなのかな？」

深月は今日、ひばりを心配してきてくれた友人達への言葉を間違えないで欲しいと言うがひばりは深月の言いたい事がわからないようで首を傾げたままであり、

「誰もひばりが風邪をひいた事を責めてないでしょ。まぁ、理音は直ぐに対応してあげられなかった自分を責めてるかも知れないけど」

「う、うん」

深月は表情には出さないが研究所にいる誰よりもひばりを心配しているのは理音だと言うとひばりもそれは理解できているようで風邪の影響ではない感情（もの）で顔を赤くすると、

「ぼく達は夕飯を食べてしばらくしたら帰るから、ちゃんと今日は理音に甘えるんだよ。意地っ張りのひばりの事だから、こんな時じゃないと甘えられないだろうしね」

「で、でも、あたし、どうやって甘えたら良いかなんてわからないし」

「だから、甘えないといけないの。おかしな意地を張ってるとひばりの心に限界がきた時に『助けて』って言えなくなるから、理音だけじゃない。ひばりの力になりたいって思ってくれる友達（ひと）はたくさんいるからね。どう甘えて良いかわからないなら、一緒に居て欲しいだけでも良いから」

深月はせっかくの機会だから理音に甘えれるだけ甘えたら良いと言うがひばりはどう甘えたらいいかわからないと首を振り、深月はこの間から少しだけ変わったひばりの様子に嬉しそうに笑うとひばりが安心するような優しげな声で言う。

第169問

「また明日な」

「ひばりん、無理しちゃダメだからね」

「うん。わかってるよ。沙耶ちゃん」

夕飯を終えてしばらくすると流石にこれ以上はひばりの迷惑になると考えて、お見舞いに来た人間はひばりに挨拶をすると明久と瑞希以外は順に帰って行く。

「後は……かあさんが迎えに来るだけだな」

「そうだね」

理音はひばりのベットの隣に座りながらも眠くなってきたようでうつらうつらとしている怜生を見て苦笑いを浮かべると明久も理音につられるように笑い、

「リオ、どうする？　おばさんが遅くなるなら、ボクが連れて帰ろうか？」

「いや、一先ずはベットで寝かしつけてくる。アキ、瑞希、お前らも帰るなら帰る準備をしろ。帰る気がないなら着替えろ」

明久は理音に怜生を連れて帰ろうかと言うが理音は怜生を抱きかかえると何となく、明久も瑞希も泊まる気でいる気がしていたようでタンスから服を出して着替えるように言うと部屋を出て行こうとす

ると、

「はい」

「あはは。やっぱり、ばれてた」

明久は理音の言葉に苦笑いを浮かべて言い、瑞希は理音から許可が出たため嬉しそうに頷き、

「当たり前だ。それにお前らがいた方が俺の理性が持ちそうだから助かる」

「……理音くん」

理音は表情を変える事なく、1人だとひばりに襲い掛かりそうだと言うとひばりは呆れたようなため息を吐く。

「……リオ、ボクが言うのもなんだけどさ、もう少し、時と場合を考えようよ」

「……アキ、わかってないな。惚れた相手がベットの上で無防備に横になっているんだ。葛藤しないのは逆に問題がある」

明久は理音の言葉にもう少し考えて話した方が良いと言うが理音は表情を変える事なく言い切り、

「……」

「ひばりちゃん？」

ひばりは照れているのか怒っているのか微妙な感じで顔を赤くしており、瑞希は苦笑いを浮かべながらひばりに声をかけると、

「まぁ、と言う事だから、ひばりの相手を頼む。俺は下を片付けてくる」

理音はひばりの顔を見てくすりと笑うと怜生を抱きかかえて部屋を出て行き、

「えーと、とりあえずは姫路さん、着替えようか。ボクはちょっと廊下にいるから」

「……アキくん、覗いたらダメだからね」

「の、覗かないからね!?」

明久はタンスから自分と瑞希の着替えを取り出すと着替えを持って廊下に出ようとするがひばりは明久をジト目で見て瑞希の着替えを覗かないように釘を刺すと明久は全力で否定する。

「あ、あの。私は吉井くんになら……」

「姫路さんも何を言ってるの!?　覗かないって言ってるよね!?　ボクは着替えた後、リオの手伝いをしてくるから、姫路さん、ひばりの事を任せるよ!?」

「そ、そうですか？」

瑞希は明久になら見られても良いと頬を染めるが明久は瑞希の言葉の意味がわかっていないようで逃げるように部屋を出て行くと瑞希

は明久が部屋を出て行った事にしゅんとすると、

「……瑞希ちゃん、それも違うと思うよ」

「そ、そうですか？」

ひばりは瑞希のどこかずれた積極性に苦笑いを浮かべると瑞希はひばりの言う事がわかっていないようで首を傾げる。

第１７０問

「理音、ただいま♪」

「リオ、おばさん、帰って来たみたいだよ」

「そうだな」

理音と明久はキッチンの片づけを終えてひばりが寝ている理音の部屋に戻りしばらくすると部屋の外から怜奈の声が聞こえ、理音が立ち上がろうとした時、

「ひばりちゃん、大丈夫。理音に襲われなかった？」

「お、おばさん、お帰りなさい」

「ひばりちゃん、違うわ。『お義母さん、おかえりなさい』よ♪」

怜奈が勢いよく部屋のドアを開けるとひばりは怜奈の様子に苦笑いを浮かべながら出迎えるが怜奈はひばりの言葉が気に入らなかったようで訂正を要求し、

「お、おばさん、相変わらずですね」

「……姫路さんは会うの久しぶりだよね」

瑞希は怜奈の様子に苦笑いを浮かべると明久は困ったように笑い、

「あれ？　アキくんと瑞希ちゃんまでいる。これはお土産足りるか

な？」

「お土産？　……なぜだろう。嫌な予感しかしないんだが」

怜奈はその時、明久と瑞希がいる事に気づいたようで困ったように首を傾げると持っていたカバンを漁り始めるが理音は母親である怜奈の様子にいやな予感がするようで眉間にしわを寄せると、

「アキくんと瑞希ちゃんにもこれをあげるから、ちゃんとひに……理音!?　どうして、実の母親を追い出すの!!」

「……黙れ」

怜奈がカバンから何かを取り出そうとするがそのものが出る前に理音は怜奈を部屋の外に投げ捨ててドアを閉める。

「理、理音くん？」

「……ひばり、アキ、瑞希、良いか。お前らは何も見なかった。良いな」

「う、うん」

ひばりは理音の行動に顔を引きつらせるが理音は眉間にしわを寄せて怜奈がきた事は忘れろと言うが、

「何よ。あなた達がちゃんとひに……」

「おかしな事を言うなら、怜生を連れてさっさと帰れ!!　ひばりの熱が上がるだろ!!」

怜奈はドアを叩き、理音達に何か言おうとすると理音はドアを開けると珍しく大声を張り上げて怜奈を怒鳴りつけると、

「前田くんが怒鳴ってる姿って始めて見たかも知れません」

「そう？　割といつも家ではあんな感じだよ」

瑞希は理音の様子が珍しいようで驚いたような表情をするが明久は苦笑いを浮かべて立ち上がり、

「おばさん、夕飯って食べました？　食べてないなら用意しますけど」

「アキくん、優しい。良い子に育ったね。おばさんのところにくる？」

「ダメです！！」

怜奈に夕飯を食べたかと聞くと怜奈は明久の成長を喜びながらも冗談を言うと瑞希は全力で怜奈に明久はあげないと言い、

「姫路さん、おばさんの冗談だからね」

「へぇ、やっぱりね」

「……あ、あの」

明久は怜奈から言われなれている冗談のようでため息を吐くが怜奈は瑞希の様子にニヤニヤと笑っており、瑞希の顔は真っ赤に染まっ

て行き、

「……かあさん、あんた、何しにきたんだ？」

「ひばりちゃんの様子を見にと怜生を迎えにきたに決まってるでしょ。それより、理音、夕飯、食べる時間がなかったから、夕飯の準備よろしくね。私はひばりちゃんとお話してるから」

「あぁ。あんまり、ひばりをからかって熱をあげるなよ。後は瑞希もからかわれるな。基本的に質が悪い冗談しか言わないから聞き流せ。対応するな」

「は、はい」

理音は怜奈の様子にため息を吐くと怜奈はくすりと笑い、理音に夕飯を準備して欲しいと言うと理音は頭をかきながらキッチンに向かおうとするが振り返り、怜奈と瑞希に忠告してからキッチンに向かって歩き出す。

第171問

「……で、ひばりはかあさんと2人なわけか？」

「う、うん」

「はい……」

理音が怜奈の夕飯を温めていると部屋で何かあったのか明久と瑞希がキッチンに下りて来て申し訳なさそうな表情をすると、

「まぁ、いくらなんでも、風邪をひいたひばり相手におかしな事はしないだろ」

「……うん。そう願いたい」

理音は怜奈もそれくらいの常識はあると言うが明久は頷き、

「あ、あの。やっぱり、私、戻った方がいいでしょうか？」

「まぁ、良いだろ。俺達には聞かせたくない話もあるだろ……変な意味じゃなくてな。まぁ、真面目な話が終わった頃にひばりの悲鳴が響くはずだからその前に夕飯の準備を終わらせれば良いだろ」

瑞希はひばりが心配になってきたようで部屋に戻ると言うが理音はおかしな方向に話がそれる前に夕飯の準備を終わらせると言う。

「……ひばりが悲鳴をあげる事は確定なんだね」

「どうも、真面目な話はもって１０分くらいでな」

明久は理音の怜奈の話がそれる事は確定だと言う事に苦笑いを浮かべると理音は母親である怜奈の事も理解しているようで小さくため息を吐き、

「……」

「ん？　瑞希、どうかしたか？」

瑞希は理音の様子を見て不思議そうな表情をしており、理音は瑞希の視線に気づいたようで彼女に声をかけると、

「あ、あの。前田くんが直ぐにひばりちゃんところに行かないのが少しらしくないかな？　って」

「……そうか？」

瑞希は何をしてもひばりを第一に動く理音が直ぐにひばりの元に駆けつけないのがらしくないと言い、理音は首を傾げた後、

「……まぁ、ひばりは人に甘えると言う事を怖がっているところがあるからな。深月あたりがそれではダメだと言ってくれているようだがひばりは素直に聞かないだろ。それなら、まだ、かあさんに任せた方が良いだろ。少なくとも俺やアキ、瑞希はひばりが他人（ひと）に甘えない事に心当たりはあるが……それは無くしていない人間には本当のところはわからないんだからな」

理音は自分ではひばりの助けになれないところもある事は理解しているようであり、

「で、でも。大切な人の亡くしたのはリオだって一緒だろ」

「……あぁ。だけどな。やっぱり違うんだろ。父親と母親は」

明久は父親を亡くした理音にもひばりの気持ちがわかるだろと言うが理音は少しだけ悲しそうに笑い、

「それに……俺にはひばりやアキ、その時に頼れる人間がいた。だけど、ひばりの時は俺は何もできなかった」

理音はひばりが母親を亡くした時に自分は彼女に何もしてやる事は出来なかったと言う。

「リオ、何を言ってるんだよ!?」

「そ、そうですよ」

明久と瑞希は理音の言葉にそんな事はないと言うが、

「事実だ。俺はその時、全てを捨てようとしていたんだからな」

「……」

理音はいつもの表情のない顔に戻ると自分の過去を受け入れているのか淡々とした口調で言い、明久は真っ白な病室で何も映る事のない瞳で無表情に何もする事なくただそこに存在していただけの小さな理音の姿を思い出したようで目を伏せてしまう。

第172問

「……あの時は全てがなくなったと思っていた。とうさんが死んでしまって、全てが壊れてしまったと思った。そして、全てを壊したのは『俺』だったんだ。俺にはそれを受け入れる強さはなかった」

「そ、そんな事はないよ！！」

「そ、そうですよ」

理音は無表情のまま小さな頃の自分の事を思い出しながら話し出すと明久と瑞希は理音の言葉を慌てて否定すると、

「どうして焦る必要がある。事実だろ。過去にあった事、ただそれだけだ。今のひばりはあの時の俺と変わらない。表面では笑顔を見せているがどこかで人と距離を取ろうとしている」

「そんな事ないよ」

理音は全てを捨てようとしていた理音とひばりは共通する部分があると言い、明久は理音の言葉を否定するが、

「なら、アキ、お前はひばりの口から『助けて欲しい』と言われた事はあるか？」

「そ、それは」

理音は表情を変える事なく明久にひばりに頼られた事はあるかと聞くと明久は言葉を濁す。

「まぁ、アキに頼る事になったら、いろいろと終わりか。俺も頼らないしな」

「何それ!?　た、頼ってるだろ。怜生くんの事とかおばさんの事とか、それにほら、あれ……」

「よ、吉井くんは頼りになりますよ」

理音は明久の様子にくすりと笑うと明久は慌てて自分だって頼りになると言おうとするが次の言葉が出てこず、瑞希は慌てて明久を励まし始めると、

「……まったく、アキ、お前はいつになったら気づくんだ?」

「ま、前田くん!?」

理音は瑞希の様子を見てため息を混じりで明久に『瑞希の気持ち』に気づいてやれと言い、瑞希は理音の言葉に顔を真っ赤にするが、

「ひばりは意地っ張りだ。自分から助けて欲しいなんて絶対に言わないからな。だから、大変なんだ」

「うん。ひばりが意地っ張りなのはボクもわかるよ」

理音は瑞希の反応を気にする事なく話を本題に戻すと困ったように笑い、明久は理音の言葉に頷く。

「だから、気づいてやらないといけない。小さな変化や抱えている不安に俺だけじゃ気付けないと思う」

「リオでも気づかないの？　ひばりの変化にはリオが1番敏感だろ。今日だってリオが気づかなかったらどうなってたかわからないよ」

理音はひばりの小さな変化を気づくのは自分だけでは無理だと言うと明久は首を傾げると、

「俺だっていつもひばりのそばにいるわけじゃないだろ」

「でも、そうかも知れませんけどひばりちゃんの変化には前田くんが気づかないといけないと思います」

理音は普通に考えてくれとため息を吐くが瑞希は理音が気づかないといけないと言い切り、

「あのなぁ。瑞希、俺の話を聞いているか？」

「ダメです。前田くんがひばりちゃんのそばにずっといて気づかないといけないんです！！」

「ひ、姫路さん？」

理音は瑞希の反応に眉間にしわを寄せると瑞希は語尾を強くして言い、瑞希の様子に明久は何が起きたかわからないようでおろおろとした時、

「う、うにゃあああ！！？？」

「……行ってくる」

ひばりの叫び声が響き、理音は怜奈の暴走を止めに行ってくると部屋に戻って行き、

「姫路さん、どうかしたの？」

「い、いえ、あの。何となくなんですけど、前田くんがひばりちゃんのそばにいつもいないと言った時、いつか、前田くんが……ひばりちゃんが素直に助けてと言えるようになった時に、その時に前田くんはひばりちゃんの隣にいないような気がして」

明久は瑞希の様子に何があったかと聞くと瑞希は不安げな表情をして理音がひばりから離れてしまう気がしたと言い

「大丈夫だよ。リオはひばりが泣くような事はしないから」

明久は瑞希の不安をぬぐいたいようで笑顔で心配ないと笑う。

第172問（後書き）

どうも、作者です。

次はひばり側の話になると思います。

ひばりの悲鳴が響く前にひばりと怜奈は何を話していたんでしょうか？

第173問

「まったく、ひばりちゃんも無理をしないの」

「ごめんなさい……」

怜奈は明久と瑞希を部屋から追い出すとひばりを優しく叱りつけ、ひばりは申し訳なさそうに目を伏せ、

「ひばりちゃんは誰かに心配させたくないのかも知れないけど、それは余計に心配をかける事になる事も覚えなさい」

「……さっき、深月ちゃん……お友達にも同じような事を言われました」

怜奈はひばりの反応に優しげな笑みを浮かべながら彼女の頭を撫でてひばりの今日の行動について言うとひばりは先ほど深月にも言われていると言い、

「そう。ちゃんと理音やアキくん、瑞希ちゃん以外にもひばりちゃんの事を見てくれてる子がいるのね。安心したわ」

「はい……」

「ひばりちゃんはあの子と一緒で嘘を吐くから、無理しても笑ってるから心配なのよ。まぁ、あの子は表情ないし、余計にわかりにくいけど」

「そうですね」

怜奈はひばりの口から出た深月の名前に安心したようでほっと胸を撫で下ろすと理音の前では見せないような母親の一面を見せひばりは怜奈の様子に苦笑いを浮かべるが、

「ひばりちゃん、聞いてる？　私はひばりちゃんの事も言ってるのよ？」

「そ、そうですね」

「まったく、無理しない。きつい時には笑っている必要はないの。美空さんの時もそうよ。美空さんが死んだのはひばりちゃんのせいじゃないんだから」

怜奈はひばりの頭を撫でながら話を続けるとひばりの母親の名前が出て瞬間にひばりの表情を少しだけ歪む。

「ひばりちゃんは美空さんが死んでしまった事をどこかで自分のせいだと思ってるでしょ？　それがひばりちゃんが人を頼らない事や自分が犠牲になれば良いと思ってしまうひばりちゃんを作り上げている」

「そんな事はないです」

怜奈はひばりの心の中にある闇を見透かしているのか落ち着いた声で言うとひばりは自分の中にある闇を見せてはいけないと思っているようで落ち着いた口調で言うが、

「嘘はダメよ。ひばり、嘘を吐くと罰が当たるのよ」

「！？」

怜奈は真っ直ぐとひばりの目を見て言うとひばりは怜奈の言葉と視線に何かを重ねてしまったようで目を逸らすと、

「……美空さんの言葉が原因か。それは根深いわね」

「ど、どうして？」

「それは理音やアキくんもイタズラして誤魔化そうとしてたら美空さんにそうやって怒られてたからね」

怜奈は小さなため息を吐き、ひばりは怜奈の反応に驚きの声をあげるが怜奈はひばりの母親の美空が良く言っていたと美空の事を思い出しながら笑い、

「でもね。その言葉は確かに正しい事もあるけどね。嘘には『吐いて良い嘘』と『吐いちゃいけない嘘』があるのよ」

「……」

「嘘は怖いわ。自分の大切な人や物を傷つける事もある。でも、同じように大切な人や物を守る事だってできるの」

怜奈はひばりに向かい微笑みかけながら優しい声で言う。

「で、でも、あたしは……」

「ひばりちゃん、嘘って何種類あると思う？」

「……」

ひばりは怜奈の言葉に母親が死んだ日の事を思い出しているようで表情を歪めながら何かを言おうとすると怜奈はひばりに聞き返すがひばりは怜奈の質問の意味がわからないようで続く言葉は出てこない。

第173問（後書き）

どうも、作者です。

怜奈の真面目なお話です。

ぶっちゃけ、これは自サイトで書いてる『誓いの桜』から流用している部分もあります。まあ、こちらでも書いてますが修正箇所が多すぎて現在挫折中ですが。

理音「ぶっちゃけすぎだろ」

嘘は怖い。でも、吐かないといけない時は必ず来ます。それをどうするか『いけない』じゃなく『落とし所』を見つける事、それは子供から大人になる過程で必要な事だと思います。

理音「現実を知って汚れたとも言う人間もいるがな」

本音だけじゃ人間生きていけない出すよ。

嘘と真実、本音と建前、いろいろと面倒です。

理音「まあな」

第174問

「私はね。3つあると思うの。1つ目は『大切なものを守るために吐く嘘』。この嘘は仕方ない嘘。自分の心を守るため、大切な人達を守るために吐く嘘。2つ目は『誰かを責めるために付く嘘』、嫌いな人や自分を傷つける人に抗うために吐く嘘。最後は……『自分と自分の大切な人を傷つける嘘』、これは最悪ね。絶対に吐きたくない嘘。私は吐いてしまった事があるけど……」

「……理音くんの留学の時ですよね？」

「そうね……あの子が傷つくのを理解してて私は嘘を吐いたわ。私じゃ、あの子の守れないと思ったから、憎まれても良い。ただ、どこかで生きていてくれれば」

怜奈は以前に理音を無理やり引き離そうとした時の事を思い出しているようで苦笑いを浮かべて言うとひばりも直ぐに怜奈が吐いた嘘に気づき表情を歪ませると怜奈は頷き、

「……ひばりちゃんが自分の想いを閉じ込めるきっかけになった嘘はどの嘘？　その時に美空さんの顔を覚えてる？　美空さんはひばりちゃんに嘘はいけないと教えてくれた時に吐いてくれた嘘はどの嘘？」

「そ、それは」

「嘘には吐いた人の心がつまっているのよ。美空さんが病気を隠してひばりちゃんと一緒にいる時間を選んだのは何のため？　今のひばりちゃんはその時の美空さんの想いに答えられてる？」

怜奈は美空がわずかな時間をひばりとともにいるために吐いた嘘に何も感じないかと聞くとひばりは目を伏せてしまう。

「責めてるわけじゃないのよ。大人になると言うのはそう言う事、ただ、言葉通りの事を信じてはいけない。自分のために吐かれた嘘には騙されないといけない。その嘘には心がつまっているから、大切な人が吐いてくれた『優しい嘘の中にある真実』を見落とさないで、ひばり、あなたにはそれを理解できる優しい心があるはずだから」

「おかあさん」

怜奈はベッドに腰掛けているひばりを抱き締めて優しい声で言うとひばりは母親の姿を思い出しているのか彼女の頬には大粒の涙が伝い始め、

「ひばりが最初に吐いた嘘はひばりの心を守るために吐いた嘘。誰もひばりを責めないわ。嘘は誰もが吐くものだから」

「で、でも、それを嘘だと認めしまったら、あたしは理音くんをだましてる……そんなあたしは理音くんを傷つけてしまう。それはきっと3つ目の嘘だから……」

「ひばり、理音は気づいてるわ。あの子は全てを自分1人で抱え込もうとするから、全てを理解してそれでもひばりの事が好きなの」

ひばりは自分のキズをえぐるように言葉を吐きだす怜奈は理音は全てを知っていると答え、

「そ、それなら、理音くんはどうして？」

「ひばりは最初に吐いた嘘に縛られている。理音はそれをどうにかしたいんじゃないかな？　美空さんの死んだ時に、あの子は何もできなかった事を悔やんでいるから」

「そ、それじゃあ、理音くんは……」

「そこから先はダメ♪　１度、考えだすとひばりちゃんは悪い事しか考えないから」

怜奈は理音の中にある真実をひばりに話すとひばりは『理音が自分に言った事は嘘』だと言おうとするが怜奈はくすりと笑いひばりの言葉を遮ると、

「ひばりちゃん、嘘を認める事で見えてくる真実もあるのよ。あなたの中にある真実をもう１度、見つめてみなさい。理音の行動、言動。わかりにくいかも知れないけどね。後は最初に好きだったものをいつまでも好きでいられるとは限らないのよね。あなたの理音へ向ける好きは『ＬＩＫＥ』？　それとも『ＬＯＶＥ』？　本当はどっちなのかな？」

「う、うにゃあああ！！？？」

「うわ！？　思ってたより、大きい。この成長は美空さんの墓前に報告しないといけないわね……やっぱり、色も確認しないといけないわよね。さあ、ひばりちゃん、行ってみようか」

ひばりに自分の心と向き合うように言った後にひばりの胸を揉み始め、ひばりは怜奈のいきなりの行動に驚きの声をあげるが怜奈は気

にする事なく彼女のたわわに実った果実を覗こうとした時、

「それは俺のだ！！」

「違うよ！？」

理音が部屋のドアを蹴破り、ひばりは理音の登場に顔を真っ赤にして声をあげる。

第175問

「さてと、理音が着たと言う事は夕飯の準備ができたのかな？」

「あぁ、できた」

怜奈は理音を見てくすりと笑うと理音は不機嫌そうに返事をし、

「それなら、私は夕飯を食べに行くから、理音、ちゃんとひばりちゃんの相手をしてるのよ。ちゃんとひばりちゃんを支えなさいよ。わかってるわね。私は理音より、ひばりちゃんの味方なんだから、ひばりちゃんを悲しませるような嘘を吐いたらぶっ飛ばすわよ」

「あぁ」

怜奈は理音にひばりの相手をするように言うとひばりにウインクをしてから部屋を出て行く。

「……ひばり、大丈夫か？　悪かったな」

「さ、最後のはいらなかったけど、大丈夫だよ。それに、いろいろとおばさんに話を聞いて貰えたし」

「そうか……」

理音は怜奈の背中を見送った後、ひばりが横になっているベットに腰をかけて彼女の頭を撫でながら申し訳なさそうに怜奈の行動を謝るとひばりは怜奈の話にいろいろと考える事もあったようで首を横に振ると理音はひばりの様子に安心したのか表情を柔らかくして笑う

と、

「あっ！？」

「ん？　どうかしたか？」

ひばりはあまり見る事なのない理音の表情に驚きの声を上げ、理音はひばりの様子に首を傾げる。

「い、いま、理音くんが笑ったから」

「……そんな事で驚くな。悪かったな。表情がなくて」

「そ、そうじゃなくて、確かに理音くんは表情は少ないけど、そうやってたまに見せてくれる優しい表情はあたし好きだし」

ひばりは怜奈の言葉に自分が理音の告白を受け入れた事を嘘じゃないと思うために必死に理音の好きなところを確認しようとして行くが、

「……ひばり、落ち着け。無理をするな」

「あ、あたしは落ち着いてるよ。む、無理なんてしてないよ」

理音はひばりの様子に違和感を覚えたようで彼女に無理をするなと言うがひばりは何をないと言い、

「……俺に嘘を吐く必要はない。俺はお前のそばにいる。勝手にいなくなるような事はしない。それに待つと言っただろ」

「で、でも……」

理音はひばりの反応と部屋を出て行った時の言葉から怜奈とひばりの話を推測したようでまっすぐと彼女の瞳を見詰めて落ち着いた声で言うとひばりは理音の瞳から目をそらす事も誤魔化す事もできなかったようで言葉を詰まらせる。

「俺はお前が大切だ。この言葉に嘘偽りはない」

「うん。それはわかるよ。問題はあたしの方だから……自分がわからないの。理音くんが好き。理音くんが優しい言葉をかけてくれるとあたしの事を心配してくれるとここの中が温かくなるのでも……一緒に胸が痛むの。前に深月ちゃんに言われた。あたしはずるいって、その通りなの、あたしは理音くんをアキくんを諦める口実にしてる。アキくんと瑞希ちゃんが上手くいけばあたしはアキくんを諦められるって、そんな事ばかり考えてる」

「知ってる」

ひばりは自分の中にある痛みを吐き出すように理音に言うが理音は怜奈の言った通り、全てを理解しており、ひばりを責めるような事は言わずに彼女を痛みが和らぐように優しく彼女を抱きしめる。

「あたし、ずるいよ。理音くんに好きって言って貰う資格もないのにそれなのに理音くんの事をずっと好きだった葵ちゃんから理音くんを奪ったの。最低だよ。友達なのに」

「あぁ」

「でも、でも、理音くんを渡したくなかった。矛盾してるの。アキ

くんが好きだけど、あたしの中にある理音くんが毎日、大きくなってるの。今日もまた、烏丸くんと一緒に木下さんを怒らせてたとか清水さんに命を狙われている秋月くんを助けてたとか理音くんが笑ってくれたとかそんな事ばかり考えてるの」

ひばりは自分の中にある嫌いな部分を吐きだして行くが理音はそれを何も言わずに聞いて行き、

「自分でもよくわからないの。もし、今、自分の気持ちをあの時の気持ちを否定してしまったら、あたしは何を支えに生きて行けば良いのか」

「……なぁ、ひばり、お前は支えと言ったがそれは本当に必要なものか？」

「どういう事？」

理音はひばりが痛みを吐きだし終わったと感じたようでひばりに1つの聞くとひばりは意味がわからないようで理音の顔を見上げる。

「確かに支える事、支えて貰う事は必要かも知れない。だけど、まずは自分の足で立とうとする事が必要だろ。お前はどうしたい？本当にアキと瑞希が上手く行ったら、アキへの想いを割り切れるのか？」

「そ、それは」

「1つの事に囚われると周りが見えなくなってしまう。確かにお前の中にあるおばさんの言葉はかけがえのない言葉なんだろう。でも、それはおばさんが伝えようとしていた事の1面しか捉えていないん

じゃないか？」

理音はひばりに言い聞かせるように言うとひばりは理音の言葉に耳を傾け始め、

「視野を広く持つ事、その事で見える事はきっとある。お前は今日、秀吉に本宮と付き合っているのかと聞いただろう？　本当に秀吉と付き合うかは別として本宮は前に進んでいないか？　俺は本宮にお前を泣かせると怒るとまで言われているんだ。あいつは立ち上がり前に進む事を選んでいるぞ」

「で、でも」

「……俺は科学者だから心と言うものをよく理解できていないかも知れない。だが、トラウマと言われる心のキズは身体の傷に比べて治りも遅いがキズは癒える。ひばりのキズが癒える事を誰より望んでいるのは誰だ？　お前をアキに渡したくない俺か？　お前自身か？　それとも……」

「おかあさん？」

理音は葵にひばりが好きだと改めて行った日の事を思い出しながら言うとひばりは葵が少し自分より先に進んでしまっている事に複雑な表情をすると理音はひばりに向かいひばりの事を最も心配しているのは誰かと聞くとひばりは美空の顔を思い浮かんだようであり、

「それに支えが必要なら言葉じゃなく、そばにいる人間を頼ってくれ。おじさんはそう言うのには疎い人だから、ひばりはしっかり者だと思っているだろうが真実を知った時に蚊帳の外だったと知るとおじさん泣くぞ」

「さ、流石に泣かないよ」

理音は改めて、ひばりに頼ってくれと言った後、冗談混じりにひばりの父親を引き合いに出すとひばりは表情を小さくほころばせ、

「ひばりは誰かに甘えて良いんだ。今まで1人で頑張ってきたんだから、それくらいのわがままくらい神様だって目をつぶってくれる」

「そうなのかな？」

ひばりは理音から神様と言う言葉が出てきた事にくすくすと笑うと、

「あぁ、許さないと言うなら、俺が神を蹴散らす」

「いや、それは無理だからね」

理音は真面目な表情でひばりのためなら神様にでもケンカを売ると言うとひばりは理音の言葉に呆れたように肩を落とす。

「そうか？」

「うん。でも、嬉しかったよ……ねえ、理音くん」

「どうした？」

理音はひばりの様子に首を傾げるとひばりは理音の名前を呼び、

「……あたし、理音くんが好き、前は自信がなかったところもあるけど、理音くんが笑ってくれると嬉しい。もっと笑って欲しいと思

うの」

「あぁ、俺もひばりが笑ってくれると嬉しいよ」

「まだ、アキくんの事も吹っ切れてないけど、アキくんと同じくらい理音くんが好きです。卑怯だって言われるかも知れない事もわかってる。でも、これが今のあたしの本当の気持ちです」

ひばりは自分の中にある明久への想いを改めて理音に話すと、

「これはわがままです。酷くずるくて汚い事をしてるのはわかってる。これを聞いて理音くんがあたしを拒絶したってあたしは何も言っちゃいけないの。でも、あたしを彼女にしてくれますか？」

「答えなんて決まってるだろ」

ひばりは不安そうな表情で彼氏である理音に彼女にして欲しいと言い、理音はひばりの顔を見て優しげな表情をすると彼女にキスをし、

「言っただろ。２人で強くなろうって」

「うん。そうだね……ねえ、理音くん、１つだけ、わがままを聞いて貰っても良いかな？」

「ん？　何だ？」

「あたしが眠るまで手を握ってて欲しいかな？」

「あぁ」

ひばりは遠慮がちに理音に1つわがままを言うと理音は彼女の手を握る。

第176問

「はい。2人とも逃げない」

「に、逃げるなんてそんな事は」

怜奈はキッチンに到着すると明久と瑞希はひばりの様子を見に行こうとするが怜奈は2人の首をつかんでテーブルに座らせる。

「逃げると2人の成長具合も確かめるわよ」

「……ひばりのは確かめたんですね」

「もちろん」

怜奈は笑顔で2人を脅すと明久は苦笑いを浮かべながら怜奈の対面の席に座り、瑞希も怜奈と距離を取りたいようで明久の隣に座ると、

「2人とも警戒し過ぎじゃない？」

「い、いえ、そんな事はないですよ」

怜奈は2人の様子に苦笑いを浮かべ、瑞希は警戒はしてないと言う。

「まぁ、冗談は置いておいて少し、理音とひばりちゃんを2人にしておいて欲しいの。ちょっと、ひばりちゃんと真面目な話もしたから理音と話をして欲しいのよ。時間を開けちゃうとひばりちゃんは勝手に後ろ向きな事を考えて不安な気持ちを誰にも話さないでしょ」

「は、はい。そうですね……」

怜奈は夕飯を口に運びながら理音とひばりを2人にしといて欲しいと言うと明久は理音も似たような事を言っていたため、理音と怜奈は改めて親子なんだと思ったようで怜奈に視線を向けると、

「アキくん、どうしたの？　おばさんの大人の魅力にメロメロ？」

「そ、そうなんですか！？」

「……違うから、いや、さっき、リオも同じような事を話していたから、やっぱり、親子なんだなと思って」

怜奈は明久の視線に冗談で返すと瑞希は驚きの声をあげるが明久は2人の反応に苦笑いを浮かべて言う。

「そう？　あまり言われた事がないからわからないわね」

「似てますよ……本能に忠実なところとか」

「アキくんも冗談が上手くなったわね。おばさん、アキくんの成長が嬉しくて嬉しくて、玲ちゃんに報告してあげたくなってきたわ」

「ご、ごめんなさい！？」

怜奈は明久の言葉に首を傾げると明久は理音と怜奈が1番似ているところをぽつりと漏らすと怜奈は額に青筋を浮かべて言い、明久は怜奈の口から出た姉の『吉井玲』の名前に慌てて謝ると、

「仕方ないわね。許してあげても良いわ。その代わり……理音とひ

ばりちゃんの進展具合じゃなく、おばさんはアキくんと瑞希ちゃんの進展具合も聞きたいのよね♪　２人は実際どうなの？　お付き合いしたいとかはないの？　理音とひばりちゃんにあてられるとかはないわけ？」

「な、何を言ってるんですか！？」

「そ、そうですよ！？」

怜奈はニヤリと笑うと明久と瑞希に２人は付き合う気はないのかと聞き、明久と瑞希は驚きの声をあげるが瑞希の目線はちらちらと明久を見ており、

「アキくん、前からおばさん、言わないといけないと思ってたんだけど……あまり鈍いと必要なさそうだし、切り落とすわよ」

「な、何をですか！？」

怜奈は明久の鈍いところは充分に理解しているようで早く、瑞希と自分の中の気持ちに気づけと言いたげに言うと明久は驚きの声をあげ、

「聞きたい？」

「き、聞きたくないです」

「そ、そうです。なくなっちゃうと困っちゃいます」

怜奈は笑顔で明久に聞き返すと明久は大きく首を振り、瑞希は怜奈の言葉に顔を真っ赤にして言い、

「うん。そうね。瑞希ちゃんが困っちゃうわね」

「い、いえ、そ、そうじゃなくて」

怜奈は瑞希の反応に楽しそうに笑う。

第177問

「それじゃあ、私と怜生は帰るわね」

「え？　最後にひばりの様子を見なくて良いんですか？」

怜奈は夕飯を食べ終えてしばらく明久と瑞希をからかっていたが、そろそろ時間もあるため帰ると行って立ち上がると怜生の眠っている部屋に移動しようとするが明久はひばりの様子を見て帰らなくて良いのかと言うと、

「私はゆっくりと話をしたからね。それに寝てたら、起こしたら悪いでしょ。ひばりちゃんにとって必要なのはゆっくりと休む事だから、あの子は何かしてないと落ち着かないのかも知れないけど、これで少しは反省してくれたら良いんだけどね」

「でも、ゆっくりとしてるひばりもなんか想像できないですけどね」

「そうですね」

怜奈はひばりに必要なのは休養だと苦笑いを浮かべながら言うと明久と瑞希も怜奈の言葉に頷くがそれでもひばりがゆっくりとしている姿は想像できないようであり、

「確かにそうなんだけどね。だからこそ、こう言う時間を邪魔しちゃいけないと思ってね」

「そう言われるとボクや姫路さんも帰った方が良いかな？」

怜奈の言葉に明久は自分と瑞希も家に帰った方が良いかと言うが、

「2人は居ても大丈夫よ……その代わり、ちゃんと使いなさいよ」

「使いません！？」

「え？　生は不味いわよ。私も一応はアキくんの保護者代わりなわけだし」

怜奈は明久と瑞希いじりを再開させてしまい、瑞希の顔は真っ赤に染まって行き、

「……ボク、怜生くんを連れてきますね」

「お願いね。アキくん」

明久はここにいるのは危険だと判断したようで瑞希を部屋に残して怜生を部屋から運んでくると言って出て行ってしまい。

「わ、私も行きます」

「待ちなさい。瑞希ちゃん、そろそろアキくんとの事を吐いて貰うわよ。私はアキくんのご両親や玲ちゃんからアキくんの彼女の事は報告するように言われているのよね」

「か、彼女じゃないです！？　そ、それは吉井くんの彼女になりたいとは思いますけど」

瑞希はこの場から逃げ出そうとするが怜奈に回り込まれてしまい、逃げだす事は出来ずに顔を真っ赤にしたまま明久と付き合いたいと

言い、

「そうなら、もう少し積極的に行かないとダメよ。アキくん、鈍いからね。ああ言うタイプは押し倒すくらいがちょうど良いの」

「で、ですけど!?　そ、そんな事は」

「良い。そうしないと気付かない人間は絶対に気付かないわ。これは私の経験談よ」

怜奈は瑞希の反応を楽しんでいるのか瑞希にもっと積極的になるように言うと瑞希は怜奈の言葉は行きすぎだと言いたげだがしっかりと怜奈の言葉に耳を傾けており、

「経験談ですか？　前田くんのお父さんもあの、吉井くんと同じだったんでしょうか？」

「そうね。アキくんと同じくらい鈍かったわよ。だから、言える事よ。良い少しくらい積極的になってもアキくんは絶対に気づかないわ。本気でアキくんをものにしたいなら押し倒すくらいの気持ちで挑まないとダメよ」

「や、やっぱり、そうなんでしょうか？　前田くんも同じ事を言っていましたし」

怜奈は瑞希を煽り、瑞希も怜奈に理音と同じ事を言われた事があるため真剣な表情になって怜奈のアドバイス？を聞き始める。

第178問

「リオ、ひばり、入るよ」

「ひばりちゃん、大丈夫ですか？」

明久と瑞希が遠慮がちに部屋のドアを開けるとひばりは理音の手を握ったまま小さな寝息を立てており、理音は動くわけにもいかないようである。

「リオ、ひばり、寝ちゃったの？」

「あぁ、さっきな。ん？　かあさんはどうした？」

「さっき、タクシーで帰りました。ひばりちゃんは寝てるかも知れないし、前田くんがいるから邪魔するのも悪いって言って」

「そうか」

明久と瑞希は寝息を立てているひばりの顔を覗き込むと理音は怜奈がいない事に気づき2人に聞くと瑞希は怜奈が家に帰ったと言うと理音は頷き、

「リオ、ひばりが寝てるならどうしようか？　ここで話してひばりが起きちゃうのも不味いよね？」

「そうだな……」

明久はひばりを起こすのは悪いと言い理音は明久の言葉に頷いた時、

ひばりは握っていた理音の手を離し、

「一先ずはこのままってわけにはいかないだろ。風呂も入ったりしないといけないだろうからな。準備してくるから、ひばりを見ていてくれ」

「う、うん」

「前田くん、お風呂の準備なら私がしてきますから、ひばりちゃんのそばに居てあげてください」

理音は立ち上がると明日も学校に行かないといけないため、明日の準備をするように言うと明久は頷くが瑞希は理音の代わりに風呂の準備をしてくると言う。

「いや、大丈夫だ。と言うか、お前達も疲れてるだろ。俺は途中で帰ってきたからな。少しゆっくりとしていろ」

「で、ですけど……ひばりちゃんが寝ている隣で……」

「姫路さん、どうかしたの？」

「な、何でもありません！？」

理音は瑞希も疲れているだろうから任せろと言うと瑞希は怜奈に何かを吹き込まれたようで明久をちらちらと見ながらおかしな事をつぶやきはじめ、明久は瑞希の様子に首を傾げると瑞希は顔を赤くして何もないと声を上げ、

「……瑞希、静かにしろ。ひばりが起きる」

「は、はい。すいません」

理音は瑞希の様子に何となく、怜奈と瑞希が話した内容を察しながらもひばりを寝かせる事が重要でありため息を吐くと瑞希は声の音量を押さえて謝り、

「準備と言ってもお湯を入れてくるだけだ。すぐに戻ってくる。ある程度したら、明久、先に入れ」

「ボク？　姫路さんが最初の方が良くない？　女の子だしさ」

理音は直ぐに戻ってくると言うと時間を見て明久に最初に風呂に入るように言うが明久は瑞希が最初の方が良いと言うが、

「それは瑞希の後にアキふが風呂に入るとお前、お湯を飲むだろ？」

「飲まないよ！？　それじゃあ、まるでボクが変態みたいじゃないか！？」

理音は明久の変態行動を抑えるためだと言うと明久は大声をあげる。

「ん？　違ったか？」

「違うよ！？　ボクはそんな事しないよ！？」

「……吉井くんの後のお風呂？」

「そうだな。瑞希が先の方が良いな……どちらかと言えば、瑞希の方が危なそうだしな」

理音は明久の反応にくすりと笑った後、瑞希に視線を向けると瑞希はぶつぶつと何かを呟いており、理音は瑞希の様子に眉間にしわを寄せると部屋を出て行く。

第179問

「……理音くん？」

朝になりひばりは目を覚ますと理音がベットの横でノートパソコンを開いたまま、寝息を立てている事に気づく、

「ずっとそばに居てくれたんだ」

ひばりは起き上がり、自分が寝ている間もずっとそばに居てくれたであろう理音の顔を覗き込み、嬉しそうに顔を緩ませると、

「……ひばり？」

「おはよう。理音くん」

理音は目を覚ましたようだが、まだ頭が覚醒していないようで目の前にいるひばりを見て首を傾げ、ひばりはそんな理音の様子にくすくすと笑いながら朝の挨拶をする。

「……あぁ。おはよう。熱は下がったみたいだな」

「うん。おかげさまで、それより、理音くんはこんなところで寝てて身体は大丈夫？」

「あぁ。おかしな体勢で寝るのはなれてるからな……」

理音はひばりに挨拶を返すと彼女の額に手を置き、ひばりの体温を測るとひばりの体調が回復していると判断したようで立ち上がり、

「……飯の準備と風呂の準備をしてくる。まだ時間があるからゆっくりしていろ」

「ご飯の準備ならあたしがやるよ。昨日は迷惑をかけたわけだし」

理音は身体を大きく伸ばした後、学園へ行く準備をしてくると言うがひばりはそれは自分がやると言うが、

「迷惑なんて掛けられてないから、ゆっくりとしていろ。それに昨日は風呂に入ってないんだ。登校前に1番時間がかかるのはひばりだろ」

「う、うん。確かにそうだね」

理音は欠伸をしながらひばりに言いひばりは頷くと、

「……ん？」

「パソコンからだよね」

理音の持っていたノートパソコンが機械的な小さな音を立てひばりはノートパソコンを拾い上げる。

「……えーと、メールみたいだよ。見ない方が良い？」

「別に気にする必要はないが、誰からだ……海谷からだな」

ひばりは理音にノートパソコンを渡すと理音はメールボックスを開き、陸からのメールを受け取ったと言うと、

「海谷くんから？　……また、研究所を半壊させたとか？」

「……あいつだって毎回、研究室を半壊させてるわけじゃない。時には全壊もする。メールの内容は昨日の車でばばあに渡されたデータの解析を海谷に頼んだんだ……まぁ、だいたい、俺と同じ考えだな」

ひばりは陸からのメールと言う事で少し警戒気味に聞くが理音は陸だって毎回同じ事をしているわけではないと言うがその言葉は悪い方向であり、ひばりは顔を引きつらせるが理音は気にする事なく陸からのメールの内容を確認するとノートパソコンの電源を落とし、

「えーと、確か、研究所の方の召喚システムに問題があったって話だよね？」

「あぁ。まぁ、どこからどこまでを問題として良いかはわからないがな。召喚システム自体には不具合が発生するような問題ではないからな。気にする必要はない」

「ほ、本当に？」

「あぁ」

ひばりは召喚システムに不具合が起きたのかと心配そうな表情するが理音は表情を変える事なく問題ないと言い切るが、

「……1つ問題があるとすれば興味深い事例ではあるからな。海谷が実物を見にきて研究所を全壊させないかだ」1

「それは大問題だよ！？」

理音は１つだけ不安要素があるとすれば陸だと言うとひばりは１度だけ見た陸の行動に不安を感じずにはいられないようで大声をあげる。

第１８０問

「おはようございます。前田くん、私も手伝います」

「瑞希、そこから先に足を踏み入れるな」

理音がキッチンで４人分の朝食と昼食用の弁当を作っていると登校の準備を済ませた瑞希がキッチンに来て理音の手伝いをすると制服の腕をまくるが理音は瑞希にキッチンに入ってくるなと言うと、

「ど、どうしてですか？」

「……今日は何の薬品でアキを毒殺するつもりだ？」

「ど、毒殺なんてしません！！」

瑞希は理音の言葉に不満そうな表情をするが理音は眉間にしわを寄せながら瑞希の料理の腕をバカにすると瑞希は声をあげるが、

「そう思うなら、この質問に答えてみろ。硫酸銅五水和物を塩化バリウム水溶液に加えて加熱すると何が生成される。但し、硫酸銅五水和物を塩化バリウム水溶液は全て反応したものとする」

「前田くん、私をバカにしすぎです。そんなのは簡単な料理の問題です」

「……瑞希ちゃん、明らかに料理の問題じゃないからね」

「あぁ、化学の問題だ」

理音は瑞希に１つ問題を出すと瑞希は自信ありげに簡単な料理の問題だと言うがその問題は化学式の問題であり、ちょうど入浴を終えて濡れた髪をバスタオルで拭きながらキッチンに顔を出したひばりにツッコミを入れられる。

「ひばりちゃんも前田くんも酷いです。これはデミグラスソースの作り方だって私だって知ってます」

「……瑞希ちゃん、これじゃデミグラスソースはできないからね」

「できるのは硫酸バリウム、塩化銅、水の３つだ。少なくともデミグラスソースはできん」

しかし、瑞希は理音とひばりが自分をバカにしていると思っているようでなぜかデミグラスソースができると答えるとひばりは顔を引きつらせるが理音は冷静な口調で化学式の反応後にできる物を言うと、

「嘘です。２人して私をだますなんて酷いです」

「……だます以前の問題だ」

「あたしもそう思うよ」

瑞希はだまされないと言うが理音とひばりはため息を吐き、

「ひばり、瑞希を連れて行け……いや、瑞希、手伝いならアキを起こしてこい。そろそろ起きないと時間も不味いだろうからな」

「よ、吉井くんの寝顔を見て来ても良いんですか？」

理音は瑞希の様子に邪魔と判断したためひばりに瑞希を連れて行くように言うがより効果的な方法を思いついたようで瑞希に明久を起こしてくるように言うと瑞希の顔は真っ赤に染まる。

「い、行ってきます」

「瑞希、朝から襲うなよ」

「襲いません！！」

瑞希の思考は明久の寝顔を見る事だけに完全に移行したようで足早にキッチンを出て行こうとすると理音は暴走する気のある瑞希に釘を刺すと瑞希は顔を真っ赤にしたまま叫ぶが振り返る事なく一直線に明久の眠っている部屋に駆け出して行き、

「……瑞希ちゃん、アキくんを襲ったりしないよね？」

「さあな。何かあれば進展もするだろ」

「理音くん、その考えはどうかと思うよ」

ひばりは瑞希の様子に少しだけ心配そうな表情をするが対称的に理音は表情を変わる事なく言うとひばりは理音の態度にため息を吐くが、

「まぁ、それくらいないとあの2人は進展しないだろ。アキは自分がもてないと思ってるしな」

「うん。それはあるんだけど……」

「心配なら見てきたらどうだ？」

「そんな事はしません！！」

理音は冷静な口調で明久の鈍さにどうしたら良いかと首を傾げるとひばりは2人の様子が気になるようでそわそわとし始め、理音はそんなひばりの様子にくすりと笑い彼女をからかうように言うとひばりは理音の言葉に頬を膨らませて反論する。

第１８１問

「……どうかしたのか？」

「ちょっと避難かな？」

理音が研究室でパソコンのキーボードを叩いているとひばりが遠慮がちに研究室のドアを開けて中に入ってくる。

「避難？」

「うん。ちょっと、昨日、理音くんがあたしを連れて帰ったでしょ。それで、クラスのみんながいろいろとね。瑞希ちゃんも葵ちゃんも助けてくれないし、沙耶ちゃんに至っては先頭を切ってくるし」

理音はひばりが言った避難の意味がわからずに首を傾げるとひばりはクラスの女子生徒達に理音の事を根掘り葉掘り聞かれたようで逃げ出してきたと言うと、

「……別に隠す事でもないだろ。この間から付き合ってる事はそれなりに広まっていたんだから」

「だとしても、それにあたしが風邪を引いたのを自分達のせいだって言って気合入ってる男の子達も多くて、なんか」

「心配されすぎて居心地が悪くなってきたわけか？」

「う、うん」

理音は今更、照れる事でもないと言うとひばりは風邪のせいでクラスメート達が気を使ってくれる事に居心地が悪かったようで苦笑いを浮かべる。

「それなら、ここにいるか？」

「うん……って、理音くんはクラスの仕事をしなくて良いの？」

「あぁ。大方の予想を裏切って大貴が木下姉を怒らせなかったみたいでな。店の物も何も壊れてなくてな。後は調理班は大貴と秋月が見てるし、接客は清瀬が見ている」

「接客？　それこそ、理音くんは覚えなきゃいけないんじゃないの？」

ひばりは理音の近くに椅子を運んで座ると理音にクラスの作業はしなくて良いのかと聞くが理音は自分の仕事は今はないと言うとひばりは理音に欠如しているであろう接客能力をあげなくて良いのかと首を傾げると、

「ん？　意味がわからないんだが、木下姉やクラスの女子達が言うには俺はこのままで良いらしい。萌ポイントがなんだとか良くわからない事を言っていたな」

「そ、そうなんだ」

理音は優子を中心とした女子生徒達から今のままで接客をして欲しいと言われたと言うとひばりは苦笑いを浮かべ、

「それで時間があるからな。ばばあから許可を貰って、清涼祭で召

喚システムの宣伝になるようなものをしようと思ってな。そのプログラムを組んでたんだが」

「召喚システムの宣伝？　何をするの？」

理音は時間ができたため学園長であるカヲルから許可をもらって技術者として何かをするつもりだと言うとひばりは首を傾げる。

「たいしたものじゃない。召喚獣は基本的に操縦者（せいと）の容姿を召喚獣に転送、認識させるんだが」

「うん。確か。召喚獣を個人認識するためだよね？」

「あぁ、それ以外に召喚獣に操縦者から指示を受け取るように個人の認証ナンバーを振り分けて操縦者と召喚獣をつなげる工程があるんだが」

「えーと、あまり難しいのはわかんないかな？」

理音は考えている事を説明するがひばりは話が難しくなり始めてきたため苦笑いを浮かべ、

「あぁ、悪い。その認証と召喚獣と操縦者のリンクさせるプログラムは振り分けるのは時間がかかるから、それをちょっとした道具で作って簡易的に行おうと思ってな」

「それって、その道具で一般のお客さんに召喚システムを体験してもらうって事？」

「あぁ。体験して貰う事で召喚システムに理解を深めて貰う。基本

的にウチは今は試験校と言う形でスポンサー収入で成り立っているスポンサーを増やすためにはイメージや人気と言うものに左右されるからな」

「な、なんかいきなり現実的になったね」

「そうか？　まぁ、必要な事なんだ」

理音の説明にひばりは理音が何をしたいか理解したようだが学園のイメージやスポンサーと言う言葉に1生徒である自分が考える事ではない話しになったようでため息を吐くと理音はそんなひばりの様子に苦笑いを浮かべる。

第182問

「そうなの？」

「あぁ。周りに召喚システムが学習プログラムとして認知されれば他に悪用されにくくなるからな」

ひばりは理音の言葉に首を傾げると理音は召喚システムを学習プログラムと認知させる事が必要だと言うと、

「悪用って、どう言う事？　召喚システムって学習プログラムだよね？　他にどんな使い方があるの？」

「……基本的にはな。だけど、今のところはいないが『観察処分者』と言われる生徒の召喚獣や『教師用の召喚獣』は特殊なプログラムになってるんだ」

「特殊なプログラム？」

ひばりは理音の言いたい事が理解できないようで首を傾げ、理音は苦笑いを浮かべながら召喚システムには特殊なプログラムがあると言う。

「あぁ。この2つは生徒が試召戦争時に使う召喚獣と異なり、『物理干渉』ができる」

「物理干渉？」

「簡単に言えば召喚獣でも物や人に触る事ができるって事だな。ま

ぁ、見て貰うと早いな」

理音は特殊なプログラムは物に触る事ができると言うとひばりに小さな腕輪を渡し、

「こ、これってさっき言ってたもの？」

「あぁ、その試作品だ。腕に付けて召喚してみたら良い。起動ワードは試獣召喚（サモン）だ」

「あ、あたしが召喚するの？　む、無理だよ」

「俺の召喚獣は教師仕様と同程度のプログラムになっているからな。物理干渉ができるんだ。それに召喚した方がわかりやすいだろ」

理音はひばりに召喚獣を呼び出してみろと言うがひばりは無理だと首を振りながら理音に腕輪を返すと理音は使った方がわかりやすいと言うが、

「えーと、理音くんはもう召喚獣を使ってるの？」

「ん？　言ってなかったか？」

「聞いてないよ！？」

ひばりは他のところに関心が言ったようで驚きの声をあげる。

「そうだったか？　まぁ、些細な事だ」

「そ、そうなのかな？」

理音は首を傾げるが特に重要な事とは思っていないようであり、ひばりは納得がいかなさそうに首を傾げた時、

「理音、いるか？」

「ん？　良いところにきたな。大貴（じっけんだい）」

「……おい。今、おかしな事を言わなかったか？」

大貴が理音に用があるのか研究室に顔を出すと理音は表情を変える事なく大貴を実験台を呼び、大貴は眉間にしわを寄せ、

「まぁ、気にするな。些細な事だ」

「……おい。理音、この腕輪は何だ？」

理音は気にする事なく大貴の腕に腕輪を付けると大貴は腕輪を外そうとするが、

「大貴、知ってるか？　今日のタイムサービスはサーモンらしい」

「サーモンか？　刺身は夕飯にするには単価がな」

理音は大貴との共通の話題であるタイムサービスの話をすると大貴は理音のタイムサービスの内容にあまり魅力を感じないようでため息を吐くと、

「……え？」

「り、理音くん？」

「とりあえず、起動プログラムは正常だな。まぁ、腕輪にシステムをダウンロードさせただけだからな」

大貴の足元には機械的な魔法陣が描かれ『ポン』と言う小さな音ともに大貴をデフォルメしたような召喚獣が現れるとひばりと大貴は何が起きたかわからないようで驚きの表情が隠せないが理音は気にする事なく腕輪が正常に起動していると頷く。

第183問

「と言う事で説明の続きだがな」

「おい。まずは俺に説明をするのが筋って奴じゃないのか？」

「何、些細な事だ。一般的な生徒の召喚獣は物理干渉ができないため、触る事はできない」

ひばりと大貴の2人は目を白黒させているが理音は気にする事なく、ひばりに説明の続きを話そうとすると状況の理解できないため、理音に詰め寄るが理音は気にする事なく大貴の召喚獣に手を伸ばすが理音の手は大貴の召喚獣をすり抜けて行き、

「これはこれでイヤな絵だな」

「そ、そうだね」

はたから見ると大貴似の小さな子供の腹を理音の手が突き抜けており、ひばりと大貴は顔を引きつらせるが、

「ん？　そうか。それで物理干渉ができる方は試獣召喚（サモン）」

理音は気にする事なく自分の召喚獣を呼び出すと大貴の時と同様に機械的な魔法陣が描かれ『ポン』と言う小さな音ともに理音をデフォルメしたような召喚獣が現れる。

「烏丸くんのと特に変わらないよね？」

「あぁ。今は装備の設定前でもあるからな。制服に武器なしだしな。見た目は基本的に召喚者をモチーフにしてるくらいだ」

「なあ、理音、支倉、結局は何をやってるんだ？」

ひばりは理音の召喚獣と大貴の召喚獣を見比べて特に特出した違いはないと言うと理音は頷くが大貴は説明を求めると、

「見てればわかる」

「ホントだ。理音くんの召喚獣は触れるんだ」

「持ち上がったな……もう少し、持ち方はないのか？」

理音は自分の召喚獣の首をつかみを持ち上げ、ひばりと大貴は驚きの声を上げるが理音の召喚獣は理音に持ち上げられた事に手足をばたばたさせているため、大貴は苦笑いを浮かべ、

「ん？　そうか。まぁ、こう言った感じで教師仕様と同程度のプログラムを持っている召喚獣は人や物に触れる事ができる」

「……おい。理音、どうして、お前の召喚獣を俺に向ける？」

「何、今はひばりに召喚獣の物理干渉が悪用される可能性の話をしてたわけだが」

「それはあれか？　お前の召喚獣で俺を攻撃するつもりと言う事か？」

理音召喚獣を下ろすと理音の召喚獣は真っ直ぐに大貴を見据え、大

貴は召喚獣の視線に何かを感じたようで1歩後ろに下がり、

「ん？　別にそんなつもりもなかったんだが、期待されているならそうしてやろう」

「ストップ！？　理音くん、ダメだよ」

理音は大貴の芸人魂に答えてやろうと言うがひばりは理音を止めに入る。

「冗談だ。一応は召喚獣は見た目はこれだが人の何倍も腕力があるからな。遊びで使うほど俺もヒマじゃない」

「いや、お前、本気で使おうと思ってただろ？」

理音はひばりの言葉に冗談だと言うが大貴は疑いの視線を理音に向けているが、

「まぁ、今も言ったように召喚獣は人の何倍、まぁ、設定をいじれば何十倍、何百倍も力が上がる。それに物理干渉をつけてどこかの国に大量投下してみろ。侵略も良いところだろ」

「そ、そうだね」

理音は気にする事なく、ひばりに召喚システムが悪用される危険性を説明するとひばりは事の重大さに気づいたようで顔を少し青くしながら頷き、

「それを悪用させないために枷を点ける。クリーンなイメージや言い方は悪いが独占する。周りが複製品を作ったとしてもそれに気づ

き、対処する事、それが求められる事だな」

「そうだね」

「……」

理音は大貴の腕から腕輪を取り外して召喚システムを学習プログラムととして確立する意味を話すとひばりは大きく頷くが大貴は理音の言葉に何かあるのか難しそうな表情をしている。

第１８４問（前書き）

今回はクロさんに怒られるかも知れません。（苦笑）

第184問

「烏丸くん、どうかした？」

「い、いや、何でもない」

ひばりは大貴の表情に気づき、大貴に声をかけると大貴は直ぐに誤魔化すように何もないと否定するが、

「ひばり、気にするな。召喚システムを狙っているのが大貴の実家なだけだから」

「「……」」

理音は大貴の考えている事を気にする事なく腕輪を片付けるとあまりに理音があっさりと大貴の家の事を言ったためかひばりと大貴は頭が付いて行かなかったようで一瞬、呆気に取られるが、

「り、理音くん、いきなり何を言ってるの！？」

「……理音、お前、どう言う事だ？」

直ぐにひばりは理音の言葉に声を上げ、大貴は理音を睨みつける。

「事実だろ。現にお前の親父の手のものとお前の親父を失脚させたい人間、どちらからも俺のところに接触しにきてるしな」

「……」

「り、理音くん、そんな事を話しちゃって良いの？」

理音は烏丸グループからの接触があったと言うと大貴の目つきはさらに鋭くなり、理音を睨みつけ、ひばりは大貴の様子に理音に話すのをやめた方が良いと言うが、

「そんな話？　これは大貴が知っておかないといけない話だ。目をそらすのも向きあうのも大貴だしな。まぁ、そんな目で俺を睨みつけているうちは何も見えてこないだろうけどな」

「……理音、てめえ」

理音は大貴が知っておかないといけない事だと言い切ると大貴は理音の胸倉をつかむ。

「知ってるか。憎悪とは最も愛情に近い感情だと言われている。お前の中にある闇の中にあるのは闇だけか？　闇だけだと言うなら、なぜ、お前は烏丸を名乗っている？」

「お前に何がわかる？　俺がどんな思いをしてきたか、お前にわかるわけがないだろ！！」

「烏丸くん！？」

しかし、理音は表情を変える事なく大貴の目を見据えて言うと大貴の理音の首をつかむ腕にはさらに力が込められて行き、ひばりは大貴を止めようと大貴を呼ぶが大貴が止まるわけはなく、

「そうだな。お前が痛みを隠してるうちは俺は何も知らない……事にしておく、ただ、少なくとも話したいと思う相手ができたなら、

向き合う努力はするべきだ。目をそらすだけでは何も進まない。ひばり、お前もそう思うだろ？」

「そ、そうだけど、それを理音くんが言っても良いの？　ま、前に理音くんは」

理音は表情を変える事なく、大貴の腕をつかんで自分の首から外すと理音は大貴の中に新しく芽生えた想いをも見透かしたように言うとひばりに同意を求めるがひばりは理音が大貴の場合は時間が必要だと言っていたためか言葉を濁すと、

「痛い時は痛いと言え、少なくとも俺はお前の力になるつもりだ。1人で痛みを抱えられるほど人は強い生き物ではない」

「……お前は俺の中の闇が見えてるんだろ。それなのにそんな言葉を吐くか？」

「あぁ。それに少なくともお前はこれから文月学園に起こる事を見定めないといけないはずだ。烏丸を名乗っているのだからな。お前はその時に何を選ぶ？」

大貴は理音の言葉を戯言だと言いたげに言うが、理音は烏丸の名前を名乗っている大樹には責任があると言う。

「……俺が選ぶ答えがお前の意思に反する事だったとしたらどうするつもりだ？」

「そうだな。その時は全力でお前をぶっ飛ばして止める。知ってるか。俺は友人が少ないんだ。そいつが間違っている方向に進む気なら全力で止める。それに止めないとひばりやアキに怒られる」

大貴は理音の質問に質問で返すと理音は表情を変える事なく言い、その言葉の中には大貴の事を心配している事が見え、

「……ずいぶんと恥ずかしい事を言うな」

「事実だ。俺にはコミュニケーション能力が欠落しているからな。それでも、俺のそばにはひばりやアキがいてくれた」

大貴は理音が自分を友人だと言った事に驚いたような表情をすると理音はくすりと笑い、

「……そうだな。その時は力を貸して欲しい」

「あぁ」

大貴は理音の言葉に照れくさいのか理音とひばりから視線を逸らして頷くと研究室を出て行き、理音は大貴の背中を何も言う事なく見送り、

「あ、あのさ。理音くん、何かきれいにまとまったのかも知れないけど、烏丸くんって理音くんに用があったんじゃないの？」

「……まぁ、気にするな」

ひばりは理音が今日、大貴に話をした事に意味があったと思ったようだが大貴は何しにきたのかと言うと理音は少しだけ気まずそうに返事をする。

第185問

「……ねえ。理音くん、烏丸くんの用事って良いのかな？」

「ん？　そうだな。戻ってこないのは考える事もあるかも知れないがたいした用事でもなかったんだろ……もしくは、木下姉に怒られて教室で正座をさせられてるかだな」

「……最後の可能性があるなら、確認しに行こうよ」

大貴が戻ってこない事にひばりは理音に大貴の用事は何だったのかと聞くと理音はたいした事ではなかったんだろと言いながらも時間をかけたわりに何もしてこなかったために大貴が優子に怒られている可能性もあると言うとひばりは理音の様子にため息を吐くが、

「……となると……状況……弱いか？　となると……を……する事で」

「あれ？　理音くん？　……集中しちゃた？　あたしもそろそろ戻ろうかな？」

理音は続けていた作業で何かを思いついたのかぶつぶつと何かを言いだし始め、ひばりは理音が考え事を始め出し、周りの音を排除している事に苦笑いを浮かべてそろそろほとぼりも冷めたと思ったのか教室に戻ろうと研究室を出た時、

「ひばり♪」

「う、うにゃぁぁ！！！？？？」

「……深月」

まるでタイミングを見計らっていたかのように深月が現れ、ひばりの背後から彼女の胸を揉み始め、一緒にいた望は深月の様子にため息を吐く。

「み、深月ちゃん、放して!?　ほ、保科くんもため息を吐いてないで、助けて!?」

「何？　昨日は理音とお楽しみだったんでしょ。それなら、ボクにも!?」

「……冗談にしては悪質な事を言わない」

ひばりは深月の突然の行動に声を上げて望に助けを求めると深月は成り行きとはいえ理音の家に泊まったひばりをからかおうとすると望は深月の頭にチョップをし、怯んだ深月をひばりから引き離すと、

「ちょ、ちょっと、望、女の子に何をするの？」

「……その言葉、深月にそっくり返すよ。だいたい、こんな研究室の近くでこんな事をすると」

「……うん。ゴメンね。ひばり」

深月は痛くはないがわざとらしく頭を押さえながら、望を責めるように言うが望はため息を吐きながら、研究室を指差して場所をわきまえろと言うと深月は理音からの花火がくる事も考えられるため、望を盾にするようにしながらひばりに謝り、

「……謝るなら、お願いだから止めてよ」

「支倉さんの言う通りだよ。支倉さん、本当に深月がいつも迷惑をかけてゴメン」

ひばりは深月から自分の胸を隠すように言い、望はもっともだと言いたげに肩を落とすとひばりに深月の事を謝る。

「う、うん。それで深月ちゃん、どうかしたの？」

「別に特に用はないんだけどね……ひばり、理音に甘えられた？」

「う、うん」

ひばりは深月が自分に何か用があるのかと思い、深月に声をかけると深月はひばりの顔をのぞき込みながら、昨日は理音に甘える事が出来たかと聞くとひばりは少し恥ずかしそうに頷くと、

「そう……うん。嘘は吐いてないね。ひばり、おめでと。じゃあ、ボク、行くね」

深月はひばりの顔から嘘は吐いていないと判断したようで笑顔でひばりに『おめでとう』と言うとひばりと望を置いて廊下を駆け出し、

「み、深月ちゃん!?　あ、あの、保科くん？　深月ちゃん、何かあった？」

「……何もないよ。ただ、深月も昨日までの支倉さんと一緒で自分に嘘を吐いているから、支倉さんが変れたのが嬉しかったんじゃな

いかな？」

ひばりは深月の様子に何かを感じたようで望に声をかけると望は苦笑いを浮かべると、

「あ、あの。保科くん、どうして、それを？」

「うーん。それは似てるのがそばにいるからね」

ひばりは望の口から出た自分と深月が一緒だと言う事が気になったようで望に聞き返すと望は小さくため息を吐き、

「だから、深月が迷ったら支倉さんが助けてあげてよ。俺にはできない事だから」

「う、うん」

望は少しだけ寂しげに笑うと深月の事をひばりに頼むとひばりは望の様子に頷く事しかできなかったようで大きく頷く。

第１８６問

「結局、烏丸くんの用事ってなんだったのかな？」

「さあな。清瀬も木下姉も知らないと言う事は個人的な用事だろう。そこまで責任は持てるか」

「いや。責任って、理音くんのせいだとも思うんだけど」

放課後になり、理音とひばりは廊下を歩いていると、

「待たんか！！　吉井、坂本、烏丸！！」

「ちっ、良いか。明久は鉄人を油断させるために待機。俺とヒロはこのまま明久を囮にして突っ切るぞ」

「わかった。任せたぞ。明久」

「待て、雄二。ヒロ、それは確実にボクを囮にして逃げる気だろ！！」

「「ちっ、気づいたか、明久（バカ）のくせに」」

西村教諭に追われている明久、雄二、大貴の姿が目に入り、

「……今度は何をしたのかな？」

「さあな。とりあえず、捕まえてみるか」

ひばりは大きなため息を吐くと理音は懐から網を取り出し、

「「「って、なんじゃこりゃ！？」」」

「……理音くん」

西村教諭に追いかけ回されている3人を網で捕縛する。

「リ、リオ、ひばり、いきなり、何をするの！？」

「そ、そうだ。俺達はお前と遊んでいるヒマはないんだ」

「この網をどうにかしろ！？」

3人は後ろから感じる西村教諭の気配に声を上げて理音に自分達を逃がすように言うが、

「……まったく、このバカどもが！！」

怒りのオーラをまとった西村教諭が3人の背後まで現れると3人の頭に拳骨を振り下ろし、

「前田、支倉、よくやってくれた。これで主犯の3人を捕まえる事が出来た」

「あ、あの。西村先生、アキくん達は何をしてたんですか？　真面目に清涼祭の準備をしてたはずじゃ」

西村教諭は理音とひばりに3人を捕まえてくれた事を感謝すると理音の網ま3人を引きずって歩きだそうとするがひばりは西村教諭

に今の状況に付いて聞くと、

「……昼過ぎまでは真面目にやっていたんだがな。清涼祭の準備も大方終わったからと言って男子生徒を集めて準備をほったらかしてグラウンドで野球を始めておってな」

「……野球だと」

西村教諭は呆れたようにため息を吐きながら3人が野球をしていたと言うと理音の目つきが鋭くなり、

「リオも誘うつもりだったんだけど、ヒロがふらふらと歩いているうちに人数がそろっちゃってさ」

「そうか。残念だ」

「……理音くん、アキくん、今はそこじゃないと思うよ」

明久は理音に誘えなかった事を謝ると理音は少しだけ残念そうに返事をし、2人の幼なじみの様子にひばりは大きく肩を落とす。

「それで今から説教だ。前田、支倉、気をつけて帰るんだぞ」

「ん。西村教諭、待ってください。その3人が主犯なら……」

西村教諭は理音と明久の会話に頭を押さえながらも関係のない2人には先に帰るように言うと理音は何かを考え付いたようでニヤリと笑うが、

「「違う。主犯は明久だ！！」」

「ちょっと待て！！　雄二、ヒロ、ボクに罪をなすりつけようとするな！！　野球をしようって言ったのは2人だろ！！」

3人は往生際が悪くお互いに罪をなすり付けはじめた時、

「前田、ひばり、終夜を見なかった？　瑠衣くんを迎えに行かないといけないはずなのにBクラスにいないのよ。途中から準備をサボって居なくなったって木下さんも怒ってるし、見つけてとっちめないと」

終夜を探しているようで美波が駆け寄ってくる。

第187問

「秋月か？　そう言えば、教室にはいなかったな」

「うん。秋月くんはサボって野球をするようなタイプじゃないし」

理音とひばりは終夜の居場所に心当たりがないと首を振ると、

「終夜なら誘おうと思ったんだけど」

「吉井、終夜がどこにいるか知ってるの？」

明久は終夜のいる場所に心当たりがあるようで苦笑いを浮かべた時、

「お姉さまに近づく豚野郎！！　美春の手で八つ裂きにしますわ！！」

「お、落ち着け。フォークを投げつけるな！？」

廊下の先から美春に追いかけられた終夜がこちらに向かって走ってきており、

「ボクらが野球を始めようとした前から清水さんに追いかけ回されてるよ」

「……今度は秋月と清水か？　お前達の学年はまったく」

「西村教諭、あれに関しては秋月は悪くないと思うんですが」

明久は苦笑いを浮かべたまま、終夜は美春にずっと追いかけ回されていると言うと西村教諭は頭が痛いのか頭を押さえるが理音は終夜は悪くないと言う。

「コロス、コロス、コロス」

「ねえ。理音くん、今、ここに清瀬くんがいない状況で、烏丸くんと秋月くんがそろったって事は」

「それに島田。確実に人外化する。確定事項だ」

「だ、だよね」

美春の視界には大貴と美波が入ったようで先ほどまでは純粋な終夜への殺意だったが天敵『烏丸大貴』と想い人『島田美波』を見つけ、その背後には欲望や殺意と言った様々な感情の混じった黒い気配が浮かび上がり、理音とひばりは美春の変化に気づきため息を吐くと、

「ちょ、ちょっと、どうして、2人は落ち着いてるのよ!?　み、美春を止めてよ!?」

「いや、止めるべきはこっちだ」

「あだ!?」

美波は自分と終夜の身の危険を感じ取り、理音とひばりに助けを求めるが理音は最初に止めるのは別の人間だと言うと懐からスリッパを取り出して大貴の頭を叩き、

「えーと、清瀬くんに電話かな？　もしもし」

「どうした？　帰るんじゃ無かったのか？」

「うん。そうなんだけど、今、昇降口の近くでちょっと困った事になってて」

「……直ぐに行くから持ちこたえてくれ」

「うん。理音くんのスイッチが入る前にお願いします」

ひばりは携帯電話を取り出して大樹に電話をすると大樹は電話の先から聞こえてくる美春の声に全てを察して美春を止めに来てくれると言い、電話を切る。

「て、てめえ、理音、何をしやがる！！」

「俺がやるから落ち着いていろ。お前と清水が暴れるとせっかく準備しているものが破壊される恐れがある」

大貴は理音に頭を叩かれた事で理音に敵意を向けるが理音の行動は大貴の敵意を美春から逸らすためであり、

「さてと、清水、俺が相手をしてやろう……ん？　そう言えば、網は使ったんだったな」

「ブタヤロウ、マズハキサマカラヤツザキニシテクレル」

「仕方ない。清瀬が車で少しだけ付き合ってやる」

理音は終夜と美春の間に割って入り、網で美春をからめ取ろうと懐

から網を取り出そうとするがすでに網は使用中であり、理音は首を傾げると美春の殺意は一気に理音に向けられ理音に向かいフォークやナイフが投げつけられるが理音はそれを難なく叩き落とし、

「……お前達はおかしな事しかできんのか？」

「えーと。とりあえずは少し待ってください。清瀬くんが清水さんを回収しにきますから」

西村教諭は目の前で繰り広げられ始めた理音と美春の戦いに呆れかえっているようで大きく肩を落とし、ひばりは申し訳なさそうに西村教諭に頭を下げる。

第188問

「申し訳ありませんでした」

「ヒロ、ちょっと良いかしら？」

「ま、待て。優子、俺の腕はそっちには曲がらない！？」

大樹とともに優子も一緒に現れると大樹は人外化している美春の頭を抑えつけながら西村教諭に頭を下げさせ、優子は準備をサボり野球を始めていた大貴に関節技をかけ始め、

「……とりあえずは助かったのか？」

「そうね」

美春からの攻撃が落ち着いたため、終夜は安心したようでため息を吐くと美波は苦笑いを浮かべ、

「雄二、逃げるなら霧島も呼ぶが」

「アキくんも逃げたらダメだよ」

「り、理音、お前、余計な事を言うな！？」

「ひ、ひばり、何を言ってるのさ。ボ、ボクが逃げるなんて事をするわけがないじゃないか」

明久と雄二は西村教諭の目が大樹と美春に向かっている事をチャン

スだと思ったようで逃げ出そうとするが理音とひばりはそんな2人に声をかけ逃げ道をつぶし、

「前田、支倉、よくやってくれた。まったく、お前達は反省と言う言葉を知らんのか？」

「そ、そんな事はないぜ」

「そ、そうだよ。言葉くらいは知ってますよ」

「まぁ、行動に移す気はないがな」

西村教諭は額に青筋を立てながら明久と雄二を睨みつけると2人の額には脂汗がにじみ始め、理音は2人の行動にため息を吐くと、

「西村教諭、こいつらの処罰は俺に任せて貰えませんか？」

「ちょ、ちょっと、理音くん、いきなり何を言い出すの？」

理音は何か考えがあるのか騒ぎを起こした明久達の処罰を自分に任せて欲しいと言い、ひばりは理音のいきなりの言葉に声を上げる。

「前田、どう言う事だ？　まさか、このバカどもを助けようとしているのか？」

「いえ、ちょうど良い実験台ができたと思っただけです」

「そうか。それなら、任せるか」

西村教諭は理音が騒ぎを起こした明久達を預かると言った理由がわ

からないため、首を傾げると理音は何か考え付いているようで口元を緩ませると西村教諭は大きく頷き、

「ま、待って。鉄人、ダメだよ!?　この笑い方をしているリオはおかしな事しか考えてないから!?」

「て、鉄人、鉄拳制裁でも鬼の補習でも受ける!!　だから、置いて行かないでくれ!?」

明久と雄二は西村教諭とは対照的に自分の身の危険を感じ取ったようで西村教諭に泣きつくが、

「何、心配するな。ヒマだから野球を始め出そうとするんだ。それもこの俺を誘わずに」

「理音くん、野球を始めたりしたらダメだからね」

理音は口元を緩ませたまま言うが野球がやりたかったのか小さな恨みごとが混じっており、ひばりは大きく肩を落とすと、

「理音くん、それって今からやらないといけない事?　そろそろ、怜生くんを迎えに行かないと」

「ん?　そうだな。明日でも良いな。と言うか、今からじゃ調整は難しいからな。わかっていると思うがお前ら逃げるなよ」

「……前田、1つ、聞いて良い?　それってウチらもひょっとして入ってる?」

ひばりは理音に怜生を向かえに行く時間だと言うと理音は明日にす

ると言って帰ろうとするがその言葉に美波は何か引っかかったようであり、質問をし、

「当然だ。野球を始めた3人と廊下を爆走した秋月と清水、その原因の島田に清水の保護者の清瀬。木下姉はこの状況を見れば理解出来るだろ」

「……そうだな。俺が言うのもなんだが、やりすぎだ」

理音は当然とここにいる人間は騒ぎを起こして罰を受ける身分だと言い切ると西村教諭は大貴が白目を剥いてぴくぴくと痙攣している様子を見て優子にも罰を与えるべきだと頷く。

第189問

「……まったく、わからないな」

「お兄ちゃん、これが欲しいです」

「あぁ」

明久も合流して怜生を迎えに行った後、理音は商店街のCDショップに入り、流行りのポップスのCDを物色するがあまり音楽を聴かない理音は何を買ったら良いかわからないよ応で眉間にしわを寄せると怜生は最近、よく見ていて特撮物の主題歌のCDを持ってくる。

「ねえ。理音くん、何を探してるの？」

「……なぜだろう。リオがCDショップにいると言う事に酷く違和感がある」

ひばりと明久は理音がCDショップに行こうと言いだした意味がわからないようで首を傾げていると、

「ん？　ちょっと入用でな。流行の曲でアップテンポのダンスナンバーが良いんだが……洋楽だと覚えられないだろうしな」

「覚える？」

「ダンスナンバー？　……リオ、踊るの？」

「あぁ。お前らがな」

理音は明久をかわいそうなものを見るような目で言うが理音の視線よりひばりと明久は理音の言葉が気になったようで首を傾げたままでいると理音は1枚のCDを手に取りながら自分ではないがダンスの曲に使うと言い、ひばりと明久は頭が処理しきれないようで少し考え込んだ後、

「ど、どう言う事!?　理音くん!!」

「そ、そうだよ。ボク達がどうして踊らないといけないのさ!?」

「心配するな。ひばりの体力で踊れなんて酷な事は言わん。踊るのは今日、バカをやった奴らだ。見せしめの意味と召喚システムの宣伝の2つを同時に済ませようと思ってな。召喚者と召喚獣が曲に合わせて踊る。清涼祭の出し物としては悪くないだろ」

2人は驚きの声を上げるが理音は西村教諭に提案した処罰に清涼祭で一肌脱いでもらうと言う。

「ちょ、ちょっと待ってよ!?　リオ、それは待って、それは明らかに見せ物だから、それに召喚システムの宣伝って、ボク達1年はまだ召喚システムの説明も受けてないんだよ。設定とかいろいろと問題があるだろ。そんな事ができるわけないでしょ!!」

「大丈夫だ。それくらいは些細な事だ」

「で、でも、理音くん、召喚システムの調整って時間がかかるんじゃないの?　……あ?　あの腕輪?」

明久は理音の言葉をようやく理解したようで全力で否定しようとす

るが理音が明久の反論を些細な事だと切り捨てるとひばりは明久の言葉に納得できる事があると言いかけるが理音の研究室にあった腕輪を思い出し、

「ちょっと待って。理音くん、あの腕輪があれば調節は簡単のなのかも知れないけどあれも新技術ではあるんだよね？　そんなに数もないよね？」

「ん？　外装はばばあが作ったものが余ってるからな。システムをダウンロードすれば終わりだ。まさか、思いついたその日に強制参加させれるバカどもが見つかるとはな」

ひばりは腕輪の数がないだろうと言うが理音は別にたいした手間ではないと言うと、

「アキ、おかしな曲で恥をかかせられたくなければ真剣に選べ。恥をかくよりは成功して女子生徒に声をかけられた方が良いだろ？」

「ちょっと待って。リオ、それってどう言う事？」

「宣伝の意味も込めているからな。見学者は多いだろう。成功させれば学内では有名人だ……まぁ、お前らの場合はすでに問題児で知れ渡っているわけだが」

「それはボクにも彼女が！？　い、いたい、ひばり！？　耳を引っ張らないで！？」

「アキくん、これは清涼祭の準備をサボった罰なんだから、おかしな事を考えない。だいたい、そんな事を言う前に……アキくんは瑞希ちゃんの想いに気づくとかしないとダメでしょ」

理音は明久をやる気にさせるために女子にもてると言うと明久は掌を返したかのようにやる気を見せるがそんな明久の様子にひばりは頬を膨らませながら明久の耳を引っ張りながら鈍感な明久に聞こえないようにぶつぶつと瑞希の想いに気づけとつぶやくが明久の耳にはひばりのつぶやきは届かない。

第１９０問

「と言う事でこれを覚えて貰って清涼祭で召喚獣と一緒にやって貰う」

「できるか！？」

「……う、歌？　歌はダメよ。せっかく、ここまで作りあげてきたのに」

翌日、昨日のメンバーを集めると理音は明久が選んだ少し前に流行ったアップテンポのダンスナンバーをかけると無表情なまま完璧に歌いながら踊りあげ、清涼祭でこのメンバーに踊って貰うと言うと雄二は直ぐに声を上げ、優子は何かあるのかぶつぶつと何かを呟いている。

「前田、お前、よく覚えたな」

「ん？　昨日、帰ってから練習したからな。指導するなら、自分が覚えないといけないだろ」

「……1日で完コピ」

終夜は半ばあきらめているのか絶対にダンスをするようでもない理音が完璧に踊っている姿に感心したように言い、理音は表情を変える事なく当然の事をしていると言うと美波は顔を引きつらせると、

「と言う事だ。時間はないぞ」

「待て。時間はないって言うなら、こんなもんじゃなくてせめてもっと簡単にしろ」

「何だ？　大貴、できないのか？　知ってるか？　最近の芸人は笑いだけじゃなくマルチに何かをできないといけないんだ。それもできないなんて、お前、芸人として三流だな」

「それくらい。できるに決まってるだろ！！　見てろよ！！」

理音は時間がないから練習を始めると言うと大貴はできるわけはないと言いだすが理音の簡単な挑発にのり、

「……烏丸くん」

「ヒロ」

明久と心配で見に来ていたひばりは大貴の様子に苦笑いを浮かべる。

「後は、清水、大貴はできると言っているのにお前はできないのか？」

「豚野郎にできて、美春にできないわけがありませんわ」

「あ？　やるのか？」

「当然ですわ！！」

理音は大貴を引き合いにして美春を挑発すると美春も簡単に挑発に乗り、大貴とにらみ合いを始め出し、

「まぁ、やるか？」

「そうだな。今更、騒いでもどうせ無駄だし」

「……終夜も清瀬もどうして簡単に割り切れるのよ？」

大樹と終夜は苦笑いを浮かべたまま、練習を始めようとすると美波は2人の様子にため息を吐くと、

「いや、俺と大樹は去年の中学の学祭でクラスの出し物でこの曲やったしな。前田が少し簡単にいじってるから、たぶん、踊れる」

「……問題は一緒に歌だから、合わせれるかだな」

「後は召喚獣を使えるかだよな」

大樹と終夜は以前に踊った事があると言い、

「それって卑怯よ！？　それなら、恥をかくのはウチ達って事でしょ！？」

「ん？　別に島田は運動神経が悪いわけじゃないから直ぐに覚えれるだろ……踊れないなら、秋月に個人レッスンをして貰え」

「な、何を言ってるのよ！？　前田！！」

美波は確実に自分は恥をかくと言うと理音は美波の運動神経なら大丈夫だと言った後にくすりと笑うと美波に耳打ちをし、美波は顔を真っ赤にして理音を怒鳴りつけるが、

「始めるぞ。木下姉、さっさと準備をしろ」

「理音、そうだ。言い忘れてた。優子なんだがな!?」

「ヒロ、何もないわよね？　問題なんてないわよね？」

理音は美波の事など気にする事なく、練習を始めようとすると大貴は何かを思い出したようで理音に何かを教えようとすると優子は大貴の腕をつかみ関節技をかけ始め、大貴の叫び声が響くなか、

「雄二、逃げるなら、雪乃さんに雄二が清涼祭でダンスを踊るとメールを送るぞ」

「ちょっと待て!?　お前はどこで俺の母親と知り合った!?」

「ん？　先日、商店街に言ったら魚屋でたわしを売って欲しいと言っていた自称女子大生がいてな」

「あたしもあったよ。坂本くんのお母さん、キレイな人だったね」

「待て!?　いろいろと突っ込みたいがあいつに会った事は忘れろ。いや、何でも言う事を聞くから忘れてください!!」

理音は雄二に先日、雄二の母親の『坂本雪乃』に会った事を話すと雄二は触れられたくない事だったようで理音に土下座をする。

第１９１問

「……」

「ヒロって運動神経も良いし、器用だから大丈夫だと思ってたんだけどね」

「い、意外ね」

「豚野郎、哀れですわ。今のあなたは美春が八つ裂きにする価値すらありませんわ」

理音は一先ずは召喚獣の操作を教えようと思ったようでメンバーに腕輪を渡して簡単な操作をさせてみたのだが、大貴は集まったメンバーで１人だけ極端に操作がへたくそであり、美春でさえ、大貴をかわいそうなものを見るような目で見ると、

「俺をそんな目で見るな！？」

「……まぁ、大貴は召喚獣の操作を諦めるか」

「……無難な判断だな」

大貴は事実を受け入れたくないのか声をあげるが理音はすでに大貴が召喚獣を操作できないと見限り、雄二も理音と同意見のようで眉間にしわを寄せる。

「理音くん、でも、それで良いの？　それだと宣伝にならないんじゃないの？」

「ん？　気にするな。元々、全員が全てをできるとは思っていない。必要なのは召喚獣が生徒と一緒に歌を歌って踊ると言う事、全てをできる人間がいればベストだが最低、この中で、歌、ダンス、召喚獣の操作の３つのグループに分かれれば良い」

「そうなの？」

ひばりは大貴の様子に苦笑いを浮かべながら、理音に宣伝にならないんじゃないかと聞くと理音は最初から全てをまかなう気はなかったようであり、理音の言葉に明久は首を傾げると、

「……俺だって、そこまで鬼じゃない」

「嘘ですわ。前田理音、あなたを鬼以外に何と言うのですか！！」

「……いかれた科学者だろ」

「そうね」

理音はそれなりに無茶をさせている事は理解していると言うが美春はその言葉にかみつき、理音と美春の様子に終夜と美波はため息を吐く。

「前田、それなら、一先ずは適性を見るってことか？」

「そうだな。一先ずは召喚獣の操作は大貴が壊滅的な事以外はまぁ、横並びだしな。残りのダンスと歌だな」

「何々、面白い事をやってるって聞いたけど、歌って、カラオケで

も行くの？」

「カラオケ？　私も行く♪」

大樹は理音の言葉に３つの内から練習するものを選ばないといけないかと聞くと理音は残りの歌とダンスもやってみるかと言った時、理音達が何かをやっていると聞きつけたようで深月と沙耶が顔を出し、勝手にカラオケに行く話を始め出すと、

「……」

「木下さん、どうかしたの？」

「な、何でもないわよ」

歌の話題になり始めた時から、優子の顔色は徐々に悪くなってきており、ひばりは優子の様子に気づき声をかけるが優子は何もないと首を振るが、

「優子は音痴だ!?　ま、待て。俺の腕はそっちには曲がらない!?」

「ヒロ、余計な事を言うんじゃないわよ!!」

大貴は自分だけ早々にリタイアしたものがあるのが悔しいようで巻き添えを作り、優子は大貴にお仕置きを始め出し、

「……木下姉の歌はダメと大貴、木下姉、どこからダメなんだ。リズム感がないのか音程が取れないのか？　リズム感もないならダンスもダメだろ」

「理音くん、先に烏丸くんを助けようよ!?　き、木下さん、ストップ!!　烏丸くん、白目をむいているよ!!」

「良いのよ。このバカにはこれくらいのお仕置きが必要なのよ!!」

理音は大貴が優子にお仕置きされている姿など気にすることなく、優子の音痴はどこまで酷いのかと聞くとひばりは大貴を助けようと優子に声をかけるが優子が止まるわけもなく、

「こう言う愛情表現もあるんだから、止めちゃダメだよ。ひばり♪」

「う、うにゃあああ!!!??」

深月は大貴と優子がいちゃついているだけだと言うとひばりの背後に回り込み、彼女の胸に手をのばしてひばりを止め、

「愛情表現なんだ……」

「……豚野郎、殺しますわ」

美波は深月の言葉に優子の行動をおかしく理解したようで終夜をチラチラと見るとそんな美波の様子に美春の終夜への殺意は一気に膨れ上がって行き、

「……大樹、何かイヤな予感しかしないんだけど、どうしたら良いと思う?」

「……まぁ、頑張れ。俺も頑張るから」

大樹と終夜はこれから起きるであろう惨劇に大きなため息を吐く。

第１９２問

「へぇ、召喚獣と一緒に歌とダンスか。面白そうだね」

「楽しそうだね」

取りあえずの混乱が落ち着き、理音は深月と沙耶に現状を説明すると２人は興味があるようであり、

「何なら、やってみたら、どうだ？　現状で、２人の脱落者が出ているわけだしな」

「……あたしはやればできるわ。そうよ。日が悪いのよ。そうに決っているわ」

「な、何で、思い通りに動かないんだ！！」

雄二は召喚獣をまともに動かす事が出来ずに声を上げている大貴と音痴を認めたくない優子を見てため息を吐くと、

「召喚獣の操作はわかんないけど、音、ちょうだい♪」

「え？　深月ちゃん、踊れるの？」

「まあね♪　去年のクリスマスに出し物として覚えたからね。完璧だよ♪」

深月はダンスを明久、美波、美春の３人に教えている大樹と終夜の前に移動すると自分も踊ると言い、ひばりは驚きの声をあげるが深

月は余裕と言いたげであり、

「えーと、どうする？」

「まぁ、一先ず、やってみようか？　踊れるなら、協力して貰えるし。一先ずはちょっと合わせてみるか？」

大貴と終夜は深月の様子に明久達を下がらせ音楽を流し、頭から踊り始めると深月の歌とダンスは彼女の言った通り、完璧であり、

「うわぁ。深月ちゃん、凄いよ♪」

「……ウチ達が覚える意味があるのかな？」

「……納得がいきませんわ。ヒロと言い、豚野郎と言い、なぜ、ここまで踊れるのですか？」

「あれ？　そう言えば、清水さんも終夜や清瀬くんと同じ中学じゃ」

「話しかけないでください。豚野郎！！　殺しますわよ！！」

ひばりは深月の様子に目を輝かせるが美波と美春は納得がいかなさそうな表情をする。

「大丈夫。大丈夫。島田さんも清水さんも直ぐに踊れるようになるって、後は……ひばり」

「へ？　む、無理、あたしは無理だよ！？」

「無理と言ってると何もできないよ。無理じゃなく、やってみる。

話を聞いた限りじゃ、全部をやる必要はないんだから、歌でも召喚獣の操作でも良いわけだし」

深月は踊り終えるとこれくらいなら直ぐに覚えれると言うとターゲットをひばりに替え、ひばりは深月の言葉に自分には無理だと言うが深月はどれか1つだけで良いと言うと、

「ダンスは期待しないんだね」

「……体育を見る限り、ひばりのダンスは絶望的だからね」

「そ、そんな事はないよ！？」

明久は深月がさりげなく、ひばりの選択肢からダンスが外されている事に苦笑いを浮かべると流石の深月も言いにくそうにひばりには運動神経がないと言い、ひばりは声をあげるが、

「……ひばり、人には向き不向きと言うものがあってな」

「支倉、お前もこっち側だろ」

「そうよ。支倉さん、こっちにいらっしゃい」

理音は彼にしては珍しく言葉を濁し、すでに落ちこぼれの烙印を押された大貴と優子はひばりを仲間に入れようと手招きをしている。

「い、行かないよ！？　だ、だいたい、あたしがこの出し物に出る理由がないよ！！」

「え？　彼氏の前田っちが頑張ってるのに、彼女のひばりんは協力

しないの？」

「あう」

ひばりは自分は出し物には出ないんだから運動神経が悪くても関係ないと言うが沙耶はひばりの言葉に心底不思議そうな表情をするとひばりは沙耶の言葉に気まずそうに視線を逸らす。

第193問

「支倉を巻き込むって事は弓永と白石も参加で良いのか？」

「ボクは良いよ。3つにメンバーを分けるなら、それなりに人数は確保しといた方が良いでしょ。手伝うよ」

「私も良いよ。召喚獣も動かしてみたいし……前田っち、前田っち、召喚獣の操作、プログラムってどうなってるの？　この人数で使えるようにしてあるの」

雄二はひばりの様子に苦笑いを浮かべながらも深月と沙耶に協力してくれるのかと聞くと深月は迷うことなく返事をし、沙耶も頷くがそれ以上に召喚システムに興味があるようで理音に突撃して行き、

「ん？　見たいのか？」

「うん♪」

「……あれだね。保科くんは白石さんを避けるけど、リオは首根っこをつかむんだね」

理音は沙耶の突撃を交わすと彼女の首根っこをつかみ彼女を持ち上げると沙耶は理音に持ち上げられ、床に足が付いていない状態で右手を上げて返事をするとその姿に明久は苦笑いを浮かべると、

「理音が受け止めるのはひばりだけだし仕方ないよ」

「愛だな」

「そうね」

深月は明久の言葉にニヤニヤと笑いながらひばりをからかうように言うと終夜と美波はすでに否定する事ではないため頷く。

「ち、違うよ！？」

「ん？　俺はひばりを愛しているぞ」

「だから、こんなところで何を言うの！？」

ひばりは顔を真っ赤にして声をあげると理音は沙耶を持ち上げたままひばりを愛していると言うとひばりからテレ隠しのとーるはんまーが放たれるが、

「前田っち、前田っち、早く、早く」

「あぁ。こんな感じだが白石、無駄なところはないか？」

理音は気にすることなく、沙耶を持ち上げたままパソコンのディスプレイの前に移動すると召喚システムのプログラムを沙耶に見せて沙耶にプログラムについて意見を聞く。

「えーと、白石さんに見せても良いのかってのもあるけど見てわかるのか？」

「……」

「白石さん？」

大樹は簡単に召喚システムのプログラムを見せる理音に苦笑いを浮かべると沙耶にも見ても仕方ないと声をかけるが彼女は大樹の言葉に反応する事なく、プログラムを食い入るように覗きこんでおり、美春は沙耶の様子に首を傾げると、

「清水さん、気にしなくて良いよ。沙耶はああ言うの得意だから」

「得意？　だとしても理音が作るようなものに口を出せるレベルなのか？」

「ホントよ。召喚システムって世界最先端の技術なんでしょ」

深月は大樹と美春に気にしないように言うが深月の言葉を誰も信じる事ができないため、大貴と優子は流石に無理だと言いたげに言うが、

「前田っち、前田っち、ここここはいらないんじゃないかな？見る限り、清涼祭の出し物には関係なさそうだよ」

「ん？　そうか。なら、消すか。あまり、プログラムをややこしくしても後で使う人間が困るからな。デリートと」

「ちょっと待て！？　そんな簡単に消して良い物があるのか！？」

沙耶はディスプレイに映るところでいくつか不要なものがあると言うと理音は躊躇することなくその部分を消し、雄二は理音の行動に驚きの声をあげるがパソコンからは機械的な声で『デリート完了しました』と聞こえる。

第１９４問

「必要ないよ」

「おい。理音、本当なのか？」

沙耶は雄二が疑問の声をあげる理由がわからないようで首を傾げると雄二は沙耶では話にならないと思ったようで理音に聞き返すが、

「白石が必要ないと言うなら必要ないだろ。こっちは俺より、白石の方が専門だ」

「沙耶ちゃんの専門？」

理音は沙耶のいらないと言った部分を消しながら、沙耶は専門家だと言うと理音の口から出た意外な言葉にひばりは首を傾げる。

「……白石は計算やプログラミングに関しては天才と言われる人間だ。もしかしたらプログラミングに関しては海谷と同等以上の天才だ。プログラミングで海谷と話をさせると面白い事になるかも知れないな」

「陸と同等？　止めろ。白石さんに悪影響が出る」

「まったくですわ。あんな爆発魔に白石さんを合わせるわけにはいきませんわ」

理音は沙耶を天才だと言い切り、沙耶と同様にプログラミングを専攻分野にしている陸とあわせると面白いかも知れないと言うが陸の

幼なじみである大樹と美春は直ぐに反対し、

「ちょっと待て!?　その海谷ってヤツは知らないがどうしてお前が天才だと言うような人間がこんなところにいるんだよ!!」

「事実を事実と認めろ。だいたい、霧島の記憶能力だって天才と言われる分類になる。天才とは字の通り、天から才能を与えられた人間の事だ」

雄二は理音の言葉に声をあげるが理音は淡々とした口調で事実を認めろと言うと翔子も天才に分類されると言う。

「でも、理音はそれで良いのか？　お前、プライドとかはないのか？」

「ん？　プライド？　そんなものが何の必要がある？　俺は専門は医療関係だしな。そんなくだらないものを持って意地になり、人の命を零れ落とすよりは才能のある人間に協力して貰った方が効率的だ。何より、俺は白石に比べれば数学の能力は圧倒的に低い」

「……天才だから言える事なのかしら」

「いや。ここまで言えるのは前田の才能だろ。普通は割り切れない」

大貴は理音が自分以外の人間の才能を簡単に認める理音の事が信じられないようで眉間にしわを寄せるが理音はプライドなんかよりも優先されるべきものがあると言い切り、優子は理音の言葉が信じられないようで小さな声でつぶやくと終夜はそこまで割り切れるのは理音の才能だと言うと、

「意味がわからんな。白石、ここは改良の余地があると思うんだが、直せないか？」

「見せて、見せて」

理音は終夜の言葉の意味がわからないようで首を傾げると自分でも改良の余地があると思っているプログラムを沙耶に見せ始め、

「おい。明久、支倉、今更だけど、理音はなんの天才なんだ？」

「えーと、ボクはよくわからないよ」

「うん。あたしも良くわからない。頭が良いのはわかるんだけど」

雄二は理音の『天から与えられた才能』がわからないようでひばりと明久に聞くが2人とも理音の才能には心当たりがないと言うが、

「ボクは理音の才能、何となくわかるよ。理音の才能はきっと柔軟性と発想力。そして、それを実行に移す。行動力って感じ」

「……何か、そう言われるずいぶんと安い才能だな」

「そうかな？　発想力があれば新たな道が開ける。柔軟性も常識に囚われないって事は同じでしょ。理音が医療関係に進んだのは正解だと思うよ」

「「……」」

深月は自分が思う理音の才能を話すと雄二は理音の才能は安っぽいと言うが深月はそんな事はないと言うとひばりと明久は理音が医療

関係に進んだ大きな理由を知っているため、２人で目を伏せた時、

「……なるほど、今からプログラムを修正するには人手か時間が足りないわけだな」

「うん。私も頑張るけど練習時間もあるからちょっと難しいと思うよ。私と前田っちと後、もう少し専門的な事ができる人が居れば間に合うと思うけど」

「……人手か？　……海…は流石に無…だな。ばばあは……やる事が……し、となると該当者は１人だな。白石、行くぞ」

「うん。よくわからないけど、前田っちに協力するよ」

理音は沙耶から聞かされた修正点を考えると時間が足りないと言うと理音は直ぐに強制的に協力させる人間に思い当ったようで沙耶の首根っこをつかみ彼女を持ち上げると沙耶は右手を上げて理音に協力すると言い、２人で研究室を出て行き、

「えーと、前田と白石さんはどこに行くの？」

「まぁ、気にしないで、それより、時間もないし、練習。ひばり、逃げない」

「……」

美波は理音と沙耶の行き先が気になるようだが深月はこっちはこっちでやる事をしておこうと言うと逃げ出そうとするひばりに声をかけ、ひばりは先を読まれた事にバツが悪そうな表情をする。

第１９５問（前書き）

今回は本気であづまさんに怒られるかも知れませんが反省はしても後悔はしない。

第１９５問

「……まったく、弓永さんはまた、どこで油を売っているんだろうね」

「トシもそう言わない。深月は自分のやるべき作業はやって行ったわけだしさ。まさか、クラス全体の料理のレベルが上がるとは思ってなかったよ」

望は幼なじみの『久保利光』と一緒にクラスの出し物に必要な荷物を運んで廊下を歩いていると、

「そう言えば、トシはどうして、深月の事を学園でだと名前で呼ばないんだい？　家に帰れば昔と同じように名前で呼んでいるんだろ？　深月とトシがケンカをしたんじゃないかって、良光くんが心配していたよ」

「……この年にもなると学校とかでは呼びにくくないかい？　それに僕と弓永さんにもいろいろとあるんだよ」

「そうかな？　昔からの呼び方だし気にしなくて！？　な、何？」

望は利光の弟の『久保良光』から利光と深月の事を相談されたようで深月の呼び方について聞くと利光は深月に対して何か罪悪感があるようで話を誤魔化そうとし、望は何かに気づいたようではあるが踏み入ってはいけないとも思ったようで小さく首を傾げた時、望に向かい廊下の先から花火が向かってきて、望はその花火を何とか交わすがその着地点を狙ったかのように更なる追撃が望に仕掛けられ、望はその花火も何とか交わす。

「望くん、大丈夫かい！？」

「トシ、離れてくれ。これは俺を狙っているみたいだ」

利光は何があったかわからないようで望に駆け寄ろうとするが花火での攻撃は治まる事はなく、全て望がよける場所を狙い花火は撃たれているようで望は利光を静止し、止まらない花火を交わし続け、

（花火を使ってくるって事はあっちの理音じゃない。その場合は殺気みたいなものがないから気配を察知しずらいんだよな。花火が向かってきた方向にいるとは限らないし）

望は理音が自分に花火を向けてきた理由はわからないが現状を打破しようと現状を整理しようと集中力を高めた時、

「のぞむ♪」

「さ、沙耶！？」

沙ロケットが望に向かい飛来し、望の集中力は予想していなかった攻撃に驚きの声を上げながらも沙耶なんとか交わすが望に避けられて飛んで行った沙耶の先にはなぜかゴムボールのようなものが転がっており、そのボールに突撃した沙耶は望が避けた方向に反転し、再び、望に突撃して行き、

「のぞむ♪」

「2段構え！？」

「あれ？」

この突撃には流石の望も反応しきれないと思ったようで沙耶は満面の笑顔で望に手を伸ばすが望はその攻撃も何とか交わし、彼女の手は虚空をつかむ事になり、完全に望に抱きつくつもりだった沙耶は自分の腕の中に望がいない事に首を傾げたまま、廊下の壁に突撃しそうになるがそんな彼女の先には先ほど沙耶をはじき返したゴムボールと同じ物が転がっており、望は瞬間的に次の行動に身を構えるが沙耶の突撃を今度はゴムボールは完全に吸収し、沙耶が跳ね返る事はなく、

「……何？　って、本当に何！？」

「のぞむ♪」

「ぐほっ！？」

望の頭は今の状況を処理しきれなくなったようで一瞬、呆けた時、彼の頭の上から網が落ちてきて彼を捕え、網に捕まった望に追い打ちをかけるように沙耶ロケットが彼を三度襲い、この状況では交わしきれる事が出来ずに望の腹には沙耶の体当たりがキレイに決り、望は沙耶の突撃を受け止めきれずに吹き飛ばされる。

第196問

「……ここで決まったか？　保科なら、後5発は避けてくれると思ったんだがな。他にも閃光弾や煙幕、とりもちと各種取り揃えていたのに残念だ」

「……前田くん、これは君の仕業かい？」

沙耶が望に抱きつき頬ずりしている姿を見て理音が廊下の先から歩いてくると利光は状況を理解しきれないようで眉間にしわを寄せながら理音に聞くと、

「ん？　久保、お前も白石のように保科に頬ずりをしなくて良いのか？　今なら、やりたい放題だぞ」

「ま、まったく、君は突然、何を言い出すんだい？」

理音は利光に視線を移すと沙耶と同じ行動をしなくて良いのかと利光に聞くと利光は口では否定するがその態度には明らかな動揺が見え、

「……俺には全く理解できないんだが、深月の弱さに気づいてやれるのはお前だけだと思うんだが」

「前田くん、君は何を言っているんだい？」

「気づいていない……気づかないふりをしているなら良い。それより、白石、目的の人物（もの）は確保したからな。戻るぞ。時間がない」

理音は利光を観察するような視線を向けた後、沙耶に望を捕まえた事だし戻ると言うが、

「ちょっと待て!?　理音、沙耶、これは何なんだよ!?」

「……保科、空気を読め」

「望、前田っちの言う通りだよ♪」

望は当然、現状が理解できないようで声を上がるが天然2人に話が通じるわけもない。

「……トシ、これは俺が責められる流れなのか？」

「……違うと思うけど」

望は2人の反応に利光に助けを求めると利光は全面的に望の意見に賛成のようではあるが、

「行くぞ」

「クボっち、望を借りて行くよ♪」

理音はどこからが台車を持ってきており、網に捕らわれ、沙耶が抱きついたままの望を台車に載せると、

「……保科、白石、台車を使うと廊下を爆走したくなるのは何故だと思う？　お前達の見解を教えてほしいんだが」

「……理音だけだと思うよ」

「楽しいから♪」

理音は台車を眺めながらおかしなスイッチが入りそうであり、望はそんな考えになるのは理音だけだと言うが沙耶は理音と同じ意見のようで元気よく手を上げ、

「そう言えば、昔はよく、本宮やひばり、瑞希を乗せてアキと一緒に爆走したものなんだが、後は研究所ではタイムアタックも良くしたぞ。海谷の台車は爆発していたがな」

「……いや、明らかに乗せられていた方は恐怖しか感じていないさそうなんだけど、それに理音達は研究室で何をしてたんだよ」

「大丈夫だ。研究所が半壊した程度でたいした被害は出ていない」

「……それは充分にたいした被害だよ」

理音は昔を懐くしむように言うが望は理音の記憶と台車に乗せられていた女性陣の考えは真逆だと言い、彼の次の行動を止めようとするがすでに理音の顔は真剣な表情になっており、望は全てを諦めたようにため息を吐くと理音は台車に望と沙耶を乗せたまま全速力で駆けだし、

「クボっち、また、後でね♪」

「ちょ、ちょっと、理音、これはスピード出しすぎだって!?　他人にぶつかったら人身事故になるよ」

「ん?　大丈夫だ。お前なら、どうにかなる」

「人任せかよ！？」

「……」

沙耶は台車の上から利光に向かい手を振ると理音が何かおかしな事をしている人が駆け出す勢いではない速さで台車はスピードを上げて行き、１人取り残された利光は瞬く間に廊下の先に消えて行った台車を見て顔を引きつらせる。

第197問

「な、何!?」

「理音が何かしたんだよ。ひばりもこれくらいで動じない」

「……明久、何で幼なじみのお前や支倉より、弓永の方が理音の行動を受け入れるのが早いんだ?」

「ど、どうしてかな?」

研究室で練習をしているといきなり、警告音が響き、ひばりはいきなりの事で驚きの声をあげるなか、深月は落ち着いており、2人の様子に雄二はふと疑問に思った事を明久に言うが明久も警告音に驚いているようでそわそわとしていると、

「ただいま♪」

「……ドアが開くだけか?　……誰?」

理音に押された台車に沙耶と拉致(ドナドナ)された望、そして、望の腕の中には1人の少女が収まっており、少女を見た大樹は首を傾げる。

「保科がそこでお持ち帰りを決めた美少女Aだ」

「やるね。望、こんな美少女をお持ち帰りにする気だなんて」

理音も少女の名前は知らないようで台車を研究室の中に運びながら言うと深月はニヤニヤと笑いながら望をからかうように言うと、

「違うからな!?　理音が台車を暴走させるから、危なく、この子をひくところだったのが悪いんだからな!?」

「言っただろ。俺は保科ならどうにかすると信じているとだからこそ。トップギアまで上げられたんだ」

「そんな信頼いるか!?」

「理音くん、何をしてるの!?」

望は自分ではなく理音が原因だと言うが理音は望がいたからこそできた事だと言い切り、その言葉に望は声を上げ、ひばりからは理音に向かいとーるはんまーが放たれ、

「……どうしてだ?　この状況が当り前に思えてくるのはどうしてだ?」

「ほら、俺や大樹はあれ」

「あぁ、納得が言った。俺の場合はおじさんや陸もいるしな」

「……ヒロ、豚野郎、どう言う意味ですか?」

目の前で起きているおかしな状況に大樹は眉間にしわを寄せながら、入学して1カ月近く経ち、自分が理音の常識から外れた行動になれてきている自分が信じられないと言うが終夜は美春を指差して原因がいるからだと言うと大樹は終夜の言葉に頷き、美春が大樹と終夜を睨みつけるなか、

「なぜだ？　どうして、あいつは笑いの神に愛されているんだ？」

「……まぁ、芸人は考えすぎて気が点いたら面白くない芸でも笑ってると言う事もあるし、ヒロは考え過ぎなんじゃないかな？」

「ナチュラルハイってヤツだね。烏丸くんも良い天然（そしつ）を持っているんだから、その才能を生かすべきだよ」

大貴は理音の周りに起きる事がらに悔しそうに床を叩くと明久と深月は今、大貴は芸人としての分岐点に立っていると言い、もっと、気を楽にするべきだと言うが、

「……この状況は何なのかしら？」

「さあ？　それより、保科、いつまでその格好でいるつもり？」

「「……」」

優子は理音達が戻ってきた事に一気にまとまりがなくなったメンバーにため息を吐くと美波は少しだけ言いにくそうに未だに望の腕の中にすっぽりとはまっている少女を指差して言うと望はすっかり忘れていたようで腕の中の少女を見ると2人は気まずいようで視線を逸らし、

「ご、ごめん」

「……一先ず、降ろしてくれないかしら」

「う、うん」

望は少女に謝ると少女を床に下ろす。

第１９８問

「あれ？　よく見たら、小山さんじゃない」

「……弓永さん、それは失礼じゃないかしら」

深月は望が誘拐（ドナドナ）してきた女子生徒を知っていたようで女子生徒を『小山さん』と呼ぶと深月に小山さんと呼ばれた女子生徒は少しだけ不機嫌そうな表情になる。

「深月、知り合い？」

「うん。この間、部活の説明会で知り合ったんだけど、『小山友香』さん、Ｅクラスで女バレと茶道部を兼任してるんだ」

「小山です」

望は深月に紹介して欲しいと言う視線を向けると深月は女子生徒を『小山友香』と呼び、友香はこの状況が理解できないようだが一先ず、頭を下げ、

「それで、弓永さん、これは一体、何の集まり？　見る限りは問題児がずいぶんいるようだけど」

「待って、小山さん、今、ボクと雄二、ヒロ、清水さんを見て問題児って言ったよね！？　勘違いしないで！！　問題児は雄二とヒロ、清水さんの３人だよ！！　ボクは問題児じゃないよ！！」

研究室に集まっているメンバーを見てため息を吐くと明久は友香の

評価に不満だと言いたげに声をあげるが、

「誰が問題児だ！！」

「そうだ！！」

「豚野郎！！　殺しますわよ！！」

明久の言葉に大貴、雄二、美春の３人が反応する。

「……吉井の言う事も変わらないだろ」

「は、放しなさい！！　ヒロ！！　美春はあの豚野郎を八つ裂きにしないと気が済みませんわ！！」

「……だから、それは犯罪だ」

大樹はため息を吐きながら今にも明久に襲い掛かりそうな美春の首根っこをつかみため息を吐くと、

「てめえ、明久、ずいぶんと勝手な事を言ってくれるじゃねえか？」

「事実だろ」

「なら、それを受けてみるか？」

雄二は拳を鳴らし、大貴は背中から相棒のハリセン『小烏丸』を抜きだし明久に襲いかかろうとすると、

「……待て。悪鬼羅刹に西橋のカラスと呼ばれて喜んでいた。失笑

の塊の２人」

「「好きで呼ばれていたわけじゃねぇよ!!」」

理音は大貴と雄二がしばらく前まで呼ばれていた通り名で２人を呼ぶと大貴と雄二の声はキレイに合わさり、

「ん？　そうか、それより、保科、早く手伝え」

「理音、まずは説明をしてくれないとどうしようもないんだけど、と言うか、この状況を何も気にしないのはどうなんだよ!?」

理音は大貴と雄二の事などどうでもいいようで望に手伝えと言うが状況の説明などないため、望は声をあげる。

「ん？　メンバーを見ればわかるだろ」

「メンバー？　いつものメンバーだけど、音楽が流れていてダンスをしてた？」

「理音、どうするの。望だから、３つ同時？」

理音はパソコンの前に座り、自分で考えろと言うと望はダンスの練習をしていた事は理解するがそれまでの過程がわかるわけもなく首を傾げると深月は望なら全てをできると言うと、

「待て。深月、おかしな事に巻き込まれている気しかしないんだけど」

「この男も参加するのですか？　あの豚野郎と一緒で地味なメガネ

ですわ。役に立つとは思えませんわ」

望は状況が理解できないと言うと美春は望では役に立たないと言うが、

「ふふふ。清水さん、わかってないね」

「ちょ、深月!?」

「望はメガネを取ると美少年と言うお約束なキャラなんだよ♪」

深月は悪役のように笑うと音もなく望の背後に回り、望のメガネを取ると望は慌てて深月からメガネを取り返そうとする姿に、

「あっ!?」

「……今、フラグが立った気がするな。しかし、深月のキャパシティは侮れないな」

「理音くん、また、何、おかしな事を言ってるの?」

友香は望のメガネを外した姿に見とれてしまったのか小さな声を漏らすと理音は野生の勘でそれに気づくがひばりは理音が何を言っているのかわからないためこの状況に大きく肩を落としてため息を吐く。

第１９９問

「……まったく」

「た、叩く事、無いじゃないか？」

望は深月からメガネを取り戻してため息を吐くと深月は望に軽いお仕置きをされたようで頭の上を両手で押さえており、

「……そこまで強く叩いてないだろ。だいたい、こんな事をして何が楽しいんだよ」

「それは望の幼なじみのボクとしては引いたところから傍観を決め込んでいる望に騒ぎを届けたいじゃないか？」

「……深月の幼なじみってだけで充分な騒ぎに巻き込まれてる。すでに充分な被害者だよ」

望は深月の行動に少しだけ不機嫌そうに言うが深月は笑顔で望を巻き込みたいと言うと望はすでに被害者だと大きく肩を落とす。

「まぁ、被害者ついでに手伝え」

「だから、何を」

理音は望に早くしろと言いたげに自分の作業を手伝うように言うが望は拉致（ドナドナ）からここまでに何を説明がないため、改めて説明を求め、

「清涼祭で行う召喚システムの宣伝の準備、本番だ」

「……説明が足りない」

「えーと、理音くん、手伝いを頼むなら、もっと詳しく説明しないと」

理音はもの凄く簡潔に説明するが望は状況について行けないようでため息を吐き、望の様子にひばりは理音にキチンと説明するように言うと、

「ひばりが言うなら、詳しく説明しよう。フィクションを交えての長編ストーリーで3時間、3部作になるが良いな？」

「……いや、そこまでいらないよ」

「何で！？　望、せっかくだから聞こうよ♪」

理音がひばりが言うならと頷き、研究室の天井からは大きなスクリーンが下りて始め、望はそこまでの説明はいらないと言うが沙耶は理音の説明を聞きたいようでスクリーンの前で正座をしている。

「……理音、時間がないんじゃないのか？」

「ん？　あの後に白石と保科を巻き込んだ事で作業にかかる時間を計算し直すと9時間と18分、28秒までは遊べると出てな」

「……それなら、先に終わらせてよ。他の人達は練習する時間があるんだから」

雄二はスクリーンの前に立つ理音に時間は良いのかと言うと理音は

大丈夫だと涼しげな顔で言い切り、ひばりは理音の様子に大きく肩を落とすと、

「仕方ない。これに関しては後で白石と共同研究と言う事で正式にスポンサーに発表するか」

「ちょっと待て!?　どんな規模のでかい話だ!?」

「……私はどうしてここにいるのかしら?」

理音はスクリーンを戻して少しだけ残念そうに言うが理音の口から出た言葉に雄二は1学生の自分達が聞く話ではないと声を上げ、完全に巻き込まれた友香は自分がいる意味がわからないようでため息を吐くが、

「簡単に言えば、召喚獣と一緒に歌とダンスを披露しようと思ってな。白石とプログラムの話をしていたら、修正箇所が結構あったから、その修正、その他、もろもろを保科に手伝わせようと思ったわけだ」

「……待て。今回は簡潔で分かりやすい説明だけど、どうして、俺が召喚システムのプログラムを修正できる事が前提何だ?　できるわけがないだろ?」

「何を言ってる。基本はそこら辺の大企業にハッキングするより簡単だ。に……」

「わかった。協力するから余計な事は言うな」

理音は改めて、重要点だけを押さえて望に説明するが望はできない

と言おうとするが理音が余計な事を言おうとするため、警戒しないといけないと思ったようで折れ、

「そうか。助かる。持つべきものは友人だ」

「……若干、脅迫まがいな気がするんだけど」

理音の望からの協力を取り付けた事で少しだけ表情を緩ませると望は理音の表情に苦笑いを浮かべる。

第２００問

「……理音くん、脅迫まがいってどう言う事？」

「ん？　別にそんなつもりはないぞ。保科が『忍者』と言うのは事実だしな」

ひばりは理音と望の様子に理音が望に迷惑をかけていると思ったようで目つきを少し鋭くして聞くと理音は表情を変える事なく望が忍者だと言い、望は理音があっさりと話す姿に一瞬、何が起きたかわからないようで反応する事はできないが、

「……まったく、おかしな事を言わないでよ。忍者なんかいるわけがないでしょ。理音くんがおかしい事を言うのに保科くんを巻き込んだらダメだよ」

「へぇ、保科は忍者か？　炎とか吹けるのか？」

「雄二、忍者なんかいるわけないでしょ。だいたい、そんな身体を張ったネタは保科くんには似合わないよ」

「あっ！？　でも、ボク、望の忍術を知ってるよ。忍法『のぞみちゃん』って術を」

「違うからね！？　あれは忍法でも何でもないからね！？　深月や沙耶の悪のりだからね」

ひばりは理音がまたおかしな事を言っていると思っているようで大きなため息を吐き、他のメンバーも現代社会の中に忍者などいるわ

けないと思っているため、理音の望が忍者だと言う発言は冗談扱いされるなか、

「……炎を吹く？　いや、流石にそれは、しかし、ここまで笑いの神に愛されている奴らがいるなかで芸人としてのプライドを保つためには」

「……ヒロ、あんたは何を考えているのよ。前田、練習に戻りましょう。時間もないわけだし」

大貴は芸人として行き詰っているようでぶつぶつとおかしな事を言い始め、流石の優子も今の大貴に攻撃を仕掛ける気は起きないようでため息を吐き、話はここで終わらせようとする。

「忍者？」

「どうした、美波？」

「寿司、芸者、富士山（フジヤマ）と並んで日本を代表する文化じゃないの？」

しかし、『帰国子女』の美波にとっては興味深い事だったようで終夜の服をつかんで、少しだけ期待するように言うが、

「島田、勘違いするな。日本の文化に富士山は入らん。考えても見ろ。富士山は場所だ」

「いや、そう言う事じゃないだろ」

理音は美波の言葉の間違いを訂正し、終夜は理音の言葉にため息を吐くと、

「何を言ってるのですか！！　お姉さまの言う事はすべて正しいのです！！　そこの地味メガネ、お姉さまが正しい事を証明しなさい。忍者だと言いたいならそれを証明しなさい！！　証明できないなら美春が地味メガネを八つ裂きにしま！？」

「……おかしな事を言うな」

美春は美波が正しい事を証明しろと言いながら、望を罵倒すると大樹はこれ以上は美春に時間をかけられないと思ったようで以前に、理音から預かった麻酔銃を躊躇することなく美春に撃ち込み、

「保科、迷惑をかけた。謝るよ」

「あ、あぁ」

望に頭を下げると望は大樹は常識人に思っていたようで大樹のいきなりの行動に顔を引きつらせ、

「……ここの人って何なの？　今なら、帰っても良いわよね」

「ん？　小山、どこへ行くつもりだ？」

友香は自分の常識から信じられない行動ばかり起きるこの場所に居てはいけないと判断してゆっくりと気付かれないように研究室を逃げ出そうとするが理音の魔の手からは逃げ出せるわけがなく、

「な、何？　私は関係ないでしょ」

「まぁ、そう言うな。今なら」

「ん？　こう？」

友香は関わってはいけないと判断しているため、自分には関係ないと言おうとすると理音は深月に目配せをし、深月は何を思ったのかスカートを少したくしあげて健康的な太ももを見えるようにするとどこからともなくカメラを構えた１人の男子生徒が現れる。

第２０１問

「「「ム、ムッツリーニ、その写真、売ってくれ！！」」」

「土屋？」

突如として現れた男子生徒は深月の太ももをシャッターが擦り切れる勢いで写真に撮って行き、その様子を見た明久、雄二、大貴の３人は魂からの叫び声をあげて深月の写真を欲しがり、美波は男子生徒に心当たりがあるようで首を傾げた時、

「何を言ってるの！！　深月ちゃんも止めなさい！！」

ひばりのとーるはんまーが唸り声をあげて、明久、雄二、大貴の顔面を打ち抜く。

「康太、頼みがあるんだが」

「……なんだ？」

理音はひばりが明久達に攻撃している様子を気にする事なく、懐からＵＳＢメモリを取り出して男子生徒『土屋康太』に声をかけると康太は理音の言葉に振り返り、

「保科望のとっておきを小山に」

「……これで良いか？」

「……前田くん、私になんのようかしら？」

理音の一言に康太は懐から数枚の写真を取り出して友香に渡すと彼女はその写真を懐にしまい、理音に自分に何をさせるつもりかと聞く。

「何、今の俺達の状態は聞いていただろ。小山にもそれに協力して欲しいんだ」

「……召喚獣と一緒に出し物だったかしら？」

「あぁ。言い方は悪いが多くの人の目に止まる事だからな。容姿の良い女子には協力を願いたい」

理音は友香にも手伝ってもらいたいと言い、友香は少しだけ悩むような素振りをする。

「おーい。そこ、あまり、裏でおかしなやり取りをするなよ」

「それにできるだけ複数の事をできる人間が欲しいからな。俺と康太調べの1学年運動部女子生徒人気トップ3の小山には手伝って貰いたいんだ」

「えっ！？　わ、私、そんなのに選ばれてるの？　うーん。どうしよっかな？　これだけ良いもの貰ってむげにするわけにはいかないし、それに前田くんから誉められるのは悪い気がしないし」

「……前田、あんたは何を調べてるの？」

理音と友香の姿に終夜が声をかけるが理音は友香の性格を読みきっているようで彼女の持ち上げると友香は少しだけ照れくさそうに笑

い、美波は理音の口から出た言葉にため息を吐くが、

「因みに終夜にも意見を貰った。人気はあるのは深月、小山、もう1人は『中林宏美』と言う生徒だ。深月以外は『ちょっと気が強いけど、可愛い女のランキング』でも上位に入っている。だから、人気のある女子生徒は引き込みたい」

「へぇ、終夜は誰に投票したのかしら？」

「ま、待て。美波、落ち着くんだ！？」

美波は理音の口から出た言葉で嫉妬混じりの視線を終夜に向けると彼女の視線に終夜の背中には冷たい物が伝い始め、美波から距離を取るように後ずさりをして行く。

「理音、何で、そんなものを調べる気になったの？　理音はあんまり、そう言うの興味無いでしょ」

「ん？　決まってるだろ。いろいろなジャンルを調べる過程でひばりに色目を使う男どもをぶちのめすためだ」

「そう。ひばりへの『愛』か。納得したよ」

深月は理音は前に女子の人気ランキングにはあまり興味を示していなかったため、理音が女子の人気を調べている事に首を傾げるが理音はひばりに他の男を近付かせないためだと言い切ると深月は納得が言ったようで大きく頷くが、

「……いや、その愛は重たいだろ」

「そう思う」

望と大樹は大きく肩を落とす。

第２０２問（前書き）

今回は関係者各位に怒られる気がします。

第２０２問

「それじゃあ、練習を再開させようか？　一先ずは小山さんは望と召喚獣の操作をしてみる？」

「……いや、まず、俺は理音と沙耶と一緒にプログラムをどうにかしないといけないんじゃないのか？」

深月は練習を再開させようと言うが望は目立ちたくない事もあるようで、プログラム調整に逃げようとした時、

「ん？　お前ら、伏せろ」

「伏せろ？」

「良いから伏せろ」

「り、理音くん！？」

理音は何かに気づき、研究室にいるメンバーに伏せるように言うとひばりは意味がわからずに首を傾げるが時間がないようで理音はひばりを引き寄せて彼女をかばうような体勢を取ると研究室のドアが開き、それと同時に小さな炸裂音が響く。

「ちょ、ちょっと待て！？　こ、これはなんだ！？」

「爆発！？　り、陸！？」

「ん？　何だ？　ヒロもいるのか？」

いきなり襲った炸裂音にこの場にいたメンバーは意味がわからずに声をあげるが大樹だけはこの炸裂音に心当たりがあったようで常識から外れた行動をとる幼なじみ『海谷陸』の名前を呼ぶと煙の先から陸の声が聞こえる。

「う、海谷くん!?　な、何をしてるの!?」

「ん?　この間、前田から面白い物が送られてきたからな。本物を見にきたわけだが、せっかくだから、前田を襲撃しようと思ったんだ。この間は全て防がれたしな」

「……せっかくの意味がわからん」

ひばりは煙の先から聞こえる陸の声に驚きの声をあげるが陸は気にする様子もなく、理音は陸の言葉にため息を吐くと窓を開けて研究室に充満している煙を屋外に出し、

「えーと、こいつが大樹と清水の幼なじみの海谷陸?」

「……ん?　お前が秋月終夜か?　ヒロから良く話を聞いているぞ」

「えーと、秋月だ!?　ど、どうした、前田?」

終夜は煙が晴れた先に立っている陸を見て、顔を引きつらせると陸は気にする事なく終夜の目の前まで移動して、彼の顔をまじまじと見た後、終夜に向けて右手を差し出し、終夜は陸の手を握ろうとするが理音が終夜の手をつかむ。

「いや、こいつの場合は何かを隠している可能性もあるからな」

「……いや、流石にそれはないだろ」

「……出会いを祝福したクラッカーを用意したんだが残念だ」

理音は陸が何かを仕掛けていると判断したようであり、終夜は苦笑いを浮かべるが陸は理音に先を読まれた事に舌打ちをすると、

「あ、あんた、終夜に何をするつもりだったのよ！！」

「う、海谷くん、こんな人が大勢いるところで危ない事をしないで！！」

「……そうだ。日本（ここ）では設備をそろえるのに時間がかかるんだ。設備が壊れたらどうする？」

「ん？　そうだな。そう考えると研究に適しない国だな」

ひばりと美波は陸の行動に声をあげるが理音と陸は設備の事しか気にしていなく、

「……おかしいのが増えたわ。ここって何なの？」

「えーと、小山さん、ごめん」

友香は陸の登場で理音に懐柔された事を後悔するように肩を落とすと望は彼女を巻き込んだ原因が自分にもあるため、頭を下げる隣りで、

「……爆発まで？　文月学園（ここ）で笑いを取るのは俺には無理なのか？」

「……烏丸くん、路線を変えてみる？　ボケが多すぎるから、小烏丸ってハリセンもあるわけだし」

「……ダメだ。ツッコミに関しては支倉がいるから、俺では天下を取れないんだ」

「……確かに15年間、理音と吉井くん、瑞希、葵の天然軍団にツッコミを入れ続けていたツッコミサラブレッドのひばりには勝てないかもね」

大貴は笑いの神の無情さに膝を付き、その様子に深月は苦笑いを浮かべる。

第２０３問

「なるほど、召喚獣でのプレゼンか？　客引きにはちょうど良いか？」

「まぁ、そう言う事だ」

「前田っち、前田っち、そこにおかしなプログラムを混ぜられたよ」

「……ちっ」

理音はとりあえず、沙耶と組み立てなおしたプログラムの入力を陸に手伝わせていると、

「……一先ず、あそこの空気は完全におかしい事はわかる」

「だよね」

３人は軽口を叩いているがパソコンのキーボードを叩いている速度は完全に常識から外れており、雄二と望は顔を引きつらせる。

「望、清瀬くんと清水さんの幼なじみくんがあっちを手伝ってくれてるんだから、望はこっちの練習、小山さんも」

「……いや、俺は見世物になりたくないんだけど」

「それなら、のぞみちゃんで踊る？」

「……普通に踊るよ」

深月、大樹、終夜の3人は完全にダンスレッスンの指導組になっており、練習を開始するように言うが望は歯切れが悪く、その様子に深月は携帯電話を取り出し、美紀のアドレスをチラつかせると望はしぶしぶ頷き、

「それじゃあ、歌はひばりに任せて良いよね？　木下さんの指導、よろしくね」

「確かにひばりは歌上手いし、木下さん、コツでも教えてあげたら良いよ」

「あ、あたし!?　む、無理だよ」

「……あたしには歌を教えるのも無駄って事？」

「ち、違うよ!?　木下さん!?　落ち込まないで!?　教える。あたしがどれだけ力になれるかはわからないけどあたしも頑張るから!?」

歌のレッスンはひばりに任せる流れに持って行かれる。

「……深月」

「良いの。ひばりに必要なのは自信だよ。それも偽りじゃないホントのね。どんな事でもそれを手に入れる機会があるなら進んで貰わないとね。たぶん、理音もそれを望んでいるわけだし」

「……そう言ってる本人はいつまで偽っているのやらね」

「ん？　何か言った？」

「何も……厄介な事に巻き込まれたと思ってさ」

望はひばりを本格的に巻き込んだ深月の様子にため息を吐いた後、彼女が気にかけている少女と同様に周りに本当の自分を偽っている幼なじみを心配するようにつぶやく。

「なぁ、弓永さん、ダンスは俺達で教えられるけど、他に歌を教えれる人間に心当たりってないか？」

「何？　ひばりだけじゃダメ？」

「そうじゃなくてな。俺と終夜、弓永さんで教えれるけど、歌は支倉さんだけだろ。正直、前田は人に物を教える感じじゃないだろ」

「……確かに天才ゆえに感覚で動く人間の代表みたいなのが理音だからな」

「まぁ、本音は小山さんや保科が増えた事で被害者を増やせば恥ずかしさが減るかなって事で他にも生贄を探そうと思ってな」

大樹と終夜は指導する人間のバランスが悪いため、歌を指導できる人間を探すという建前で被害者を増やす事を提案すると、

「確かにな。恥をかくのが俺達だけって言うのは納得がいかないしな」

「そうだね」

「……本音を漏らしすぎよ」

最初に野球をしていて理音に捕まった自業自得であるはずの大貴、明久、雄二の３人は頷き、友香は呆れているのか大きく肩を落とす。

第２０４問

「それじゃあ、まずは誰を巻き込む？」

「１人は簡単だよ」

明久、雄二、大貴、終夜、大樹の５人は巻き込む人間の相談を開始すると明久は１人は直ぐに捕まると携帯電話を取り出し、

「待て！？　明久、お前の今の行動は悪意しか感じないんだ！？」

「雄二、何を言ってるんだよ。霧島さんなら見た目も問題なしだし、運動神経も良いでしょ」

「確かに雄二を釘バットで追いかけ回しているのから見ても運動神経も良いな」

「後はあの流れるような流麗な目潰しを見ても舞台には映えそうだ」

「何より、雄二が野球をするって言わなければボクとヒロはこんな事にならなかったんだから」

雄二は明久が携帯電話を取り出した事で何かを感じ取ったようで明久に手を伸ばすが大貴と終夜は翔子なら華があるからと雄二への嫌がらせの２つの理由があると言い、

「お前達、ふざけるな！？」

「あっ、霧島さん、ちょっと、お願いしたい事があるんだよ。もち

ろん、雄二もいるから」

「……直ぐに行く」

雄二が叫ぶなか、無情にも明久の携帯電話は翔子に繋がり、

「すぐに来てくれるってさ」

「これで1人だな。後は……」

「……みんなは何をしてるのかな？　真面目に練習をするつもりはないの？」

次のターゲットを探そうとした時に額に青筋を浮かべて右手にとーるはんまーを手にしたひばりが5人に声をかける。

「ま、待って。ひばり、落ち着くんだ。これは必要な事であって」

「そうだ。最悪、全員、どれか1つだと人数が少なくてパッとしないだろ。それだと宣伝効果も薄いじゃないか」

明久と大貴はひばりからとーるはんまーを喰らい慣れているせいか、ひばりの様子に後ずさりを始めながら必死に言い訳をするが、

「本音は？」

「「「「「犠牲者は多い方が恥ずかしくないから！！！！！」」」」」

深月は5人の背後に回り込み、耳元でささやくと5人は本音をだだ

漏らしにし、

「そんな事を言っているヒマがあるなら、練習をしなさい！！」

「……あの動きだけを見てると支倉さんに運動神経がない事が信じられないんだけど」

「た、確かにね」

ひばりはとーるはんまーを振り下ろすとほぼ同時に5人の顔面を打ち抜き、望と美波はひばりの中にある潜在能力（ポテンシャル）に苦笑いを浮かべる。

「……その前に弓永さんの動きに付いては何も言わないの？　弓永さんだっておかしな行動をしてるわよ」

「……小山さん、深月の動きに突っ込んじゃいけないんだよ。基本的に何かがずれているから」

友香は目の前でいつの間にか5人の後ろに回り込んだ深月の動きの方が気になるようだが望は深月の動きにツッコミを入れてはいけないと首を振り、

「まぁ、深月の場合は感覚的なもので動く事が多いからな」

「……なるほど、なかなか、面白い人間のようだな。どちらかと言えば美春に近いタイプの人間か？」

「いやだな。ボクは清水さんみたいに理性は失わないよ。そんなもったいない事をしたら、こんなものも見れないでしょ」

「深月!?　それは何!?」

「え?　この間ののぞみちゃんの写真?」

理音、陸、沙耶のシステム調整組は休憩に入ったようで深月の動きに感心したように頷くと深月は懐から『のぞみちゃんの写真』を取り出し広げると、

「「……」」

沙耶と友香の手は自然にその写真に伸びて行き、同じ写真をつかんだところでお互いの目が合う。

第２０５問

「召喚獣と一緒に歌と踊りですか？」

「そうなんだよ。姫路さんと葵ちゃんも手伝ってくれないかな？」

ひばりのお説教も終わり、練習を再開し休憩時間になった時に瑞希と葵が研究室に顔を出すと明久は２人を誘う。

「で、ですけど恥ずかしいですし」

「そ、そうですよ」

「でも、姫路さんと葵ちゃんなら絶対に絵になると思うんだ！！」

２人は表に出るような性格ではないため、無理だと首を振るが明久は必死に２人を説得しており、葵は否定しているが瑞希は明久の頼みを断りきれないようでどうするか悩み始めている。

「……こう言うのを見てると天然は有利だと思うな」

「それを前田が言うのはどうかと思うんだ」

「そうね」

理音は３人の様子に小さくため息を吐くと終夜と美波は天然なところの多い、理音を見て大きくため息を吐く。

「しかし、あれだな。気が付いたらいろんなものが渦巻いてるメン

バーだな……と言うか、何か、色々と迷惑をかけてすまない」

「渦巻いてる？　メンバーを見るとぎすぎすした感じがしないのが不思議だね。実際、清瀬くん達の方はどうなってるの？」

「……深月、お前が言うな」

目を覚ますなり陸を怒鳴りつけている美春の姿に大樹はため息を吐いた後に深々と頭を下げると深月はこのメンバーの恋愛事情を冷静に読み取っているようで大樹に食いつくように聞き、望は大きくため息を吐くが、

「良いでしょ。のぞみちゃんの写真で沙耶と小山さんの中にはおかしな友情が生まれているわけだし」

「……凄いな。のぞみちゃん効果」

「……嬉しくないよ」

深月は望の女装写真でおかしな友情が生まれている沙耶と友香を指差すと大樹は苦笑いを浮かべ、望は大きく肩を落とした時、

「わかりました。私、頑張ります」

「……お手伝いさせていただきます」

瑞希は明久の言葉に乗せられたようで葵を巻き込んでメンバーになる宣言し、

「み、瑞希ちゃん、葵ちゃん、大丈夫なの！？」

「は、はい。一生懸命頑張ります」

ひばりは慌てて思いとどまらせようと2人を説得しようとするが瑞希は頑固なところがあるため、1度、言った事を取りやめる事はない。

「……なぁ。理音、あの2人は大丈夫なのか？」

「……とりあえず、ひばりと一緒で踊りはできないだろうな。運動神経を評価するとひばりが1、瑞希と本宮は2だ」

「10点満点でそれは酷いな」

「……勘違いするな。100点満点だ」

大貴は理音から聞かされる3人の運動神経のなさに顔を引きつらせると、

「……確かにね。Cクラスの女子とは体育は一緒だけど、お世辞も言えない」

「納得してくれる人間がいると説明が楽で良いな」

「……いや、それでも100点満点で1や2はないだろ」

美波は3人の体育の様子から理音の評価に納得したようで目をそらすと終夜はそこまで酷くはないと言おうとするが、

「秋月くん、君は今まで見た事のない未知の領域を覗く事になるよ」

「逆ゾーンだな。たぶん、一緒に踊ると自分達のペースを完全に破壊され、修復が効かなくなる」

「……それは酷くない？」

深月は笑顔で終夜の肩を叩き、理音は表情を変える事なく、ただ３人の運動神経のない３人が作りだす空間をバカにするように言うと終夜は顔を引きつらせる。

第２０６問

「……秋月、良い事を教えてやろう。小学校６年の運動会に男女で６学年でフォークダンスがあったんだが、練習の時点でな。あの３人と踊った人間は音を合わせる事が難しくなり、３人を通り過ぎた後は男子全員がポンコツ化していた。そのため、フォークダンスは中止だ。そして、中にはしばらく歩行障害を起こした者もいると言う噂だ」

「……あの３人がまとまって何かをすると体育は先生も含めておかしくなるから、事業を３つに区切って３人が一緒に何かをやらないようにウチ達も気を使ってるのよ。終夜、絶対にあの３人にダンスを教えようと思っちゃダメよ。そんなことしたらせっかく、頑張って取ったレギュラーもダメになっちゃうんだから」

「わかった。一先ずは触れないようにしておく」

理音と美波は経験談を話し、ひばり、瑞希、葵を絶対に３人で踊らせてはいけないと言うと終夜は信じられないようだが美波が自分の事を心配している事がわかるため、大きく頷く。

「前田くん、秋月くん、清瀬くん、深月ちゃん、私と葵ちゃんにダンスを教えてください」

「そうか。瑞希、お前は歌か召喚獣の操作で頑張ってくれ」

「どうしてですか！？」

瑞希は努力家であるため、全てをやろうと思っており、ダンスを教

えて欲しいと頭を下げるが理音は当然、瑞希の言葉を間髪入れる事なく却下すると瑞希は驚きの声をあげる。

「あ、あの。瑞希ちゃん、私と瑞希ちゃんは運動神経が良いわけではありませんし、無理はしない方が」

「そ、そうだよ。瑞希ちゃん」

ひばりと葵は自分達の運動神経のなさを理解しているようで瑞希を説得しようとするが、

「……相手の運動神経を狂わせるのか？　それはそれで見てみたいな。何か特殊な電波（もの）が出ている可能性もある」

「海谷、止めておけ。当時であれだ。今なら下手をしたら呼吸障害や心臓の筋肉すら動きを狂わされそうだ」

「……そうか。とりあえず、あのポンコツに見せて見るか。データが飛んでもかまわないしな」

「あぁ。それなら別にかまわん。人間の動きは結局、電磁気力だからな。あれだけ影響があるなら、あのポンコツにも何かしらの影響はあるだろうし、データが取れるなら何かの対処法もあるかもしれないしな」

陸は興味を持ったようであり、楽しそうに笑うと理音は止めるがいかれた化学者達の発想はおかしな方向に飛び始めて行く。

「マスター！？　おかしな事を言わないでください！？」

「え？　な、何？　何の声」

理音と陸の話に陸の荷物からは声が響き、美波は突如として聞こえた声に驚いたようで終夜の後ろに隠れると、

「陸のカバンの中からですわね。ヒロ、見て来なさい」

「押すな。だいたい、この声はマーナさんだよな」

美春は陸の荷物の中におかしな物があると判断したようで大樹の背中を押し、大樹は声に心当たりがあるようで陸の荷物に近づいて行き、

「大樹、大丈夫なのか？」

「まぁ、おかしなものに触らなければ大丈夫だろう」

終夜は大樹に声をかけると大樹は苦笑いを浮かべながら陸の荷物からノートパソコンを取り出す。

第２０７問

「ようやく話せます」

「大樹、この人って」

大樹が陸のノートパソコンを開くとサポートプログラムであるマーナの姿がディスプレイに映り、終夜は大樹にマーナの事を聞く。

「えーと、マーナさんは陸が作ったサポートプログラムらしいんだけど」

「サポートプログラム？」

「研究所でマスターや前田博士をサポートするための任を任せられています！？　い、いきなり、何をするんですか！？」

「黙りなさい！！　お姉さまをバカにするような態度を取るなんて陸程度が作ったプログラムのくせに生意気ですわ！！」

大樹は詳しくはわからないようで苦笑いを浮かべながら、マーナの事を話すと美波はいまいち、理解できていないようで首を傾げる姿にマーナは美波を少し小バカにするように話すと美春はマーナの態度が気に入らなかったようで勢いよくノートパソコンを閉じ、

「……なぁ、海谷って天才なんだよな。それを清水は程度って言えるのって凄いよな？」

「……美春にとって陸はただの爆発犯でしかないからな」

美春の行動に終夜は眉間にしわを寄せると大樹は苦笑いを浮かべると、

「まぁ、海谷が作ったにしてはポンコツは役立たずだけどな」

「俺もここまで使えないとは思っていなかった」

「マスターも前田博士も酷いです!?」

理音と陸の天才2人はマーナを役立たずだと表情を変える事なく言い切り、閉じられたディスプレイからマーナの声が響く。

「……理音くんも海谷くんも相変わらず、マーナさんの扱いが酷いね」

「ん？　支倉はこのおかしな物を知ってるのか？」

「な、何をするんですか!?　バランスが悪いです。変に持ち上げないでください。精密機械なんですから!?」

ひばりは2人の様子にため息を吐くと雄二はマーナの拠り所になっているノートパソコンを粗雑に持ち上げてディスプレイを開くとマーナは驚きの声をあげ、

「バランスが悪いのに気づくのね？」

「まぁ、水平を確認できるプログラムも混ぜてるしな」

「……無駄に高性能だな」

「そんなプログラムも入ってるんだ。凄いね。りっくん、りっくん、私、マーナさんのプログラムを見てみたい」

優子はマーナの声に眉間にしわを寄せると陸は表情を変える事なく頷き、終夜は自分では理解できないであろうマーナのプログラムに苦笑いを浮かべる隣りで沙耶は興味が湧いたようで手をあげるが、

「あまり、研究する価値もない。作った本人が言うのもなんだが。ポンコツの上に役立たずだ」

「白石、あのポンコツには関わるな」

「ど、どうして、そんな事を言うんですか!?　そこのゴリラ、あのいかれた科学者2人の元まで運びなさい!!　今日こそは私の価値を思い知らせてやります!!」

理音と陸は沙耶が研究するほどの価値はマーナにはないと言い切り、マーナは声をあげる。

「……雄二、近寄るな。白石におかしな物が感染した困るだろ」

「何で、細菌や病原体扱いですか!?」

「その前に俺をゴリラ扱いした事に何も言わないのか?」

「……雄二をバカにしたのは許せない」

理音は雄二にマーナを持ってくるなと言い、理音の言葉にマーナは声をあげるがマーナは雄二と翔子の怒りを買っており、

「マ、マスター、前田博士!?　た、助けてください!?」

「知るか。2人ともパソコンは壊すなよ。まぁ、簡単には壊れないようにはなっているがな」

「そ、そうです。このパソコンにいる限りは!?　ま、前田博士!?　な、何をするつもりですか?」

「ん?　そう言えば、お前も酔うのかと思ってな」

マーナは自分が迂闊な事を言った事を後悔しながら、先ほどまでケンカ腰に話をしていた理音と陸に助けを求めるが2人は当然、助ける気などなく、理音はおかしな機械にマーナを取りつけると機械を中心にマーナは回転させられ始め、研究室にはマーナの悲鳴が響く。

第２０８問

「しかし、あれだな。今日１日、練習をしてみてわかった事は木下姉にはセンスが感じられないと言う事だけだな」

「え、えーと、理音くん、もう少し言葉を柔らかくした方が良いと思うんだけど」

１日目の練習を終えると理音は練習の内容を確認して眉１つ動かす事なく優子にはセンスがないと言い切るとひばりは理音の言葉に言葉を選べと言うが、

「そうだぞ。理音、優子は音痴でリズム感が皆無だったから、踊りも合わなくて召喚獣もリズムに合わせて動かす事が！？」

「……ヒロ」

大貴が余計な事を言って優子にお仕置きをされている。

「まぁ、木下さんはまだしもそれなりにはいけそうだな」

「そうだね。１つか２つは各自行けそうだしね……もちろん、のぞみちゃんは３つ、全部」

「待て。どうして、俺は女装で恥をさらさないといけないんだ！！」

大樹は大貴と優子の様子に苦笑いを浮かべると深月は練習の状況を見て、どうにかなりそうだと笑うが望は深月の言葉に声をあげるが、

「それは需要があるからかな？」

「需要と供給がバランスが良いのは良い事だな」

深月は沙耶と友香が喜ぶからと言いたげであり、陸が深月の言葉に頷く。

「ん？　そう言えば、海谷、お前は研究所のプログラムを見にきたわけだろ。その間はどこにいる気だ？　俺の研究所にくるか？」

「そうだな。研究設備もあると考えると前田の研究所が良いか？」

理音は陸の実家がすでに日本にはないため、滞在期間はどうする気かと聞くと陸はまったく考えていなかったようで理音の言葉に頷こうとするが、

「陸、遊んでないでマーナさんを片付けておけよ。俺と美春はカバンを取ってくるから」

「ん？」

大樹は陸を自分の家に泊めるつもりのようであり、理音のおかしな機械で振り回され、いつからか大人しくなったマーナを片付けるように言うと研究室を出て行き、

「海谷くん、とりあえずは今日は清瀬くんの家に泊まってあげてね」

「……あぁ」

ひばりはにっこりと笑いながら陸に大樹の言葉に甘えるように言う

と陸は以前にひばりに威圧された事を思い出したようで苦笑いを浮かべる。

「……このままじゃ、ダメよ。確かにあたしは歌は苦手だと言え、このまま、何もできないでいあるなんてあたしのプライドが許さないわ。どうする？　木下優子、考えるのよ」

「……いや、諦めも肝心だろ」

優子は大貴を静めた後、役立たずのレッテルをどうにかしたいようでぶつぶつと呟いている姿に雄二がため息を吐いた時、

「意外だよね。秀吉は歌とかダンスは凄く美味いのに双子でも違うんだね」

「……秀吉？　双子？」

明久は優子の双子の弟である秀吉の名前を出すと優子は何かを思いついたようで目つきが鋭くなり、

「あたし、ちょっと用事を思い出したわ」

「木下さん！？　烏丸くんはどうするの！？」

優子は急いで研究室を出て行き、ひばりは優子に沈められて白目をむいている大貴をどうしたら良いのかわからないようで声をあげると、

「とりあえずは研究室は閉めるから、大貴を教室まで運ぶか？　ん？　白石も乗るか？」

「うん♪」

理音は大貴を教室に運ぶとために研究室の隅に置いておいた台車の上にのせると沙耶は台車の上に乗り込み、

「……前田、これは勝負の流れか？」

「ん？　やるか？」

「面白い。あの日の決着をつけてやろう」

陸は台車が出てきた事に口元を緩ませると理音は陸が何か言いたいか理解出来たようでもう1台の台車を引っ張り出し、2人の間には小さな火花が散るが、

「おかしな事をしないで！！」

理音と陸が何をするか理解したひばりから2人の頭に向かい、とーるはんまーが振り下ろされる。

第２０９問

「……前田」

「何だ？」

解散になり、怜生と瑠衣を迎えに向かうために理音、ひばり、明久、陸、終夜、大樹、瑞希、美波、美春の９人になり、大樹の両親の幼稚園に向かっている途中で後ろを集団の後方を歩いていた陸が同じく後方を歩いていた理音を呼ぶ。

「……お前の周りは何なんだ。お前だけじゃなく、精神病患者の集まりか？」

「気づいたか？」

「支倉は身体が成長を拒否し、白石は心が成長を拒否しているように見える」

陸は少しだけ歩く速さを緩めると理音も彼の歩く速さに合わせて歩きはじめ、陸は初めてひばりに出会った時に感じた違和感と今日、会った沙耶に違和感を覚えているようであり、理音に自分の持つ推測を述べると、

「……よくある話だろ」

「まあな」

理音も陸の推測と同様の意見を持っているようであり、表情を変え

る事なく頷く。

「それ以外にもずいぶんと歪んでいる人間が集まっているようだが」

「それはお前の幼なじみには言われたくないんだが」

「……確かにな」

陸はひばりと沙耶以外にも集まっていたメンバーに何か感じたようであり、理音は美波を恋愛対象にし、毎日のように追いかけ回している美春に視線を移すと陸は理音の言葉に苦笑いを浮かべると、

「まぁ、歪んではいるがまだ歯車が回っているだけマシか？」

「そう言う事だ。だいたい、お前も歪んだ歯車の1つだろ？」

「違いないな」

理音と陸はそれ以上はその話題に触れる事なく、7人の後を追いかけるように歩いて行く。

「しかし、時間は間に合うのか？」

「確かにな。1番重要なのは召喚獣の操作だろ。前田と白石……陸はいつまで手伝うんだ？」

「ん？」

終夜と大樹は召喚獣の操作は歌やダンスより、いまいち感覚がつかめないようであり、召喚獣の操作性が上がる事を期待しているよう

で多少問題はあるが陸に協力をして貰えれば楽になると思ったようで陸に声をかけると陸は首を傾げ、

「俺は今、ヒマだからな。しばらくはゆっくりとできるんだが」

「ヒマ？　また、研究所でも半壊させたか？」

「いや、今回は研究所の自家発電装置を破壊しただけだ。それで、電力が足りなくなってな。修理が終わるまで研究所から出て行けと言われてな」

陸はヒマだから召喚獣のダンスチームを支援しても良いと言うが理音は陸がヒマだと言う事に首を傾げると陸はまた研究所の設備を破壊したようであり、理音と陸以外は陸の口から出る信じられない言葉に顔を引きつらせると、

「なるほど、無駄に電気を食う奴もいるしな」

「そうだな」

「マスター、前田博士、何を言ってるんですか？　私はそんなに電気を食いません。心外です。これでも最先端技術です。エコです」

理音と陸はマーナに電気を使うのがもったいないと言い切り、陸の荷物の中からマーナの言葉が響くが、

「何を言っている。生産性を考えると無駄でしかないだろ」

「まったくだな……ん。そうだ。海谷、これなんだが、研究所の予備電源に使えないか？　お前ならパワーをあげる事も可能だろ」

理音と陸はマーナの言葉などは聞く気はなく、彼女の言葉を却下した時に理音は何かを思い出したようで懐から『とーるはんまーばーじょんつう』を取り出し、

「あぁ。この間の電撃を生み出す。ピコハンか？　取りあえず、設計図をくれ。使えるものがないか確認して使えるか試してみよう」

陸は現物よりは設計図をくれと言い始め、2人を抜かしたメンバーはこれ以上、いかれた科学者2人の話に巻き込まれたくないようで歩くスピードを上げる。

第２１０問

「……で、秀吉、お前は何がしたいんだ？」

「ワ、ワシだってこんな事はしたくなどないのじゃ」

練習２日目になぜか秀吉は女子の制服に着替えさせられ、ダンスチームに合流するが当然、理音には優子と入れ替わっている事に気づき、秀吉は葵もいるため酷く恥ずかしそうに目を伏せるが、

「やっぱり、秀吉は美少女だよ」

「……」

その姿に明久は血涙を流しながら拳を握りしめ、どこからか現れた康太はもの凄い勢いで秀吉を写真に撮って行く。

「それで、秀吉、木下姉は何がしたかったんだ？」

「……あ、姉上は見栄っ張りじゃから、恥をかくなど絶対にしたくなかったようなのじゃ」

「あぁ、そんなくだらない理由か、だいたい、あいつが被っている猫の数百匹などここのメンバーの半数は気づいている」

理音は秀吉から優子が身代わりを仕立てた理由を聞くとくだらないと吐き捨て、

「何百匹は言いすぎだって」

「……そうだよ。それに誰だって恥ずかしい思いはしたくないよ」

「確かにそうですね」

望は理音の言葉に苦笑いを浮かべるとひばりもやはり恥ずかしいようで目を伏せると葵も同意見のようで小さく頷くと、

「まぁ、それはそれで良いとして、深月、練習を見ていてくれ。俺はちょっと出てくる」

「うん。ぼくは問題ないけど、理音はどこに行く気？」

「ん？　ちょっと、逃げだした木下姉を捕まえてこようと思ってな……海谷、これとこれ、どっちが効率的だと思う？」

理音は研究室にあるおかしな物を置いてある一画から、怪しげな道具を取り出し、陸に何かを相談し始め、

「そうだな。派手さで言えば、これなんかどうだ？」

「新作か？　しかし、お前の道具だとせっかく、準備している清涼祭の展示物事破壊する可能性があるからな。責任は逃げ出した木下姉に全てなすりつけるが流石に気が引ける」

「気が引ける？　口先だけでも体裁を保とうとするな。らしくないぞ」

「それもそうだな。別にどうでも良いか」

陸は口元を緩ませ、怪しげな道具を懐から取り出すと2人の空気は完全に怪しげな会話になっており、

「ほら、大貴、お前も芸人なら、あの2人のところに突っ込んでこいよ」

「む、無茶を言うな。流石にあそこはダメだ。芸人は笑いを取るために動くのであってその中には必ず、死なないと言う鉄則があるが、あそこは死と確実に隣合わせだ」

「……むしろ、死んでも無理やり生き返らせられてエンドレスで実験させられる」

雄二は近寄りがたい理音と陸の様子に大貴の芸人魂をくすぶろうとするが大貴はあれは笑いにつながるものではないと首を横に振り、その様子に大樹は顔を引きつらせるが、

「ちょ、ちょっと、理音くんに海谷くん、何をするつもり!?　他の人に迷惑をかけたらダメだよ!?」

「陸、変な事をするんじゃありませんわ。陸のせいで美春やヒロに迷惑をかけるつもりですか!!」

ひばりと美春はいかれた科学者をそのままにするわけにもいかないため、2人を止めようとし、

「ほら、烏丸、先を越されたぞ」

「これがツッコミマスターひばりと烏丸くんとの差だね」

「ちくしょう」

雄二と深月は大貴がためらった事に芸人としてのダメだしをすると大貴は悔しかったようで研究室を出て行ってしまい、

「ちょ、ちょっと待て、烏丸、お前も出て行くと前田と海谷の捕縛対象に！！」

「……まぁ、ヒロは芸のために身体を張るからね」

終夜は大貴を呼び止めるがすでに遅く、明久はこれから起きるであろう惨劇に顔を引きつらせる。

第２１１問

「まったく、どうして、理音くんも海谷くんもそんなに好戦的なの？　きちんと話を聞いて考え直して貰うって考えられないの？」

「……話し合いをするにも捕まえないと始まらないじゃないか？　木下姉はきっと逃げるぞ」

「その捕まえる方法に問題があるから、逃げられるんだよ！！」

周囲がこれから起きるであろう惨劇を想像するなか、予想に反して理音はひばりに正座をさせられ説教を受け始め、陸は興味がなくなったようでお怒りのひばりと美春の事などどうでも良さそうに召喚システムのプログラミングに戻り、

「……支倉最強説」

「……ひばりが優しい子に育ってくれたのが嬉しい。私と雄二の育て方は間違ってなかった」

「だから、どうして、支倉を自分の子供にしたがるんだ！？」

「……違う。雄二と私の娘」

ひばりの様子になぜか翔子は雄二に襲い掛かり始め出し、

「……まともな練習にならないのね」

「確かにね」

新たに始まった幼なじみの争いに友香はため息を吐き、望は苦笑いを浮かべると、

「それじゃあ、練習始めようか？　優子の弟くんはどうする？　一緒にやる？　……ここは葵との距離を縮めるチャンスかも知れないよ」

「う、うむ。しかし、ワシは演劇部の方もあるのじゃ。そ、それに、ワシがワシとして出ると姉上に殺されてしまうのじゃ」

深月は秀吉は戦力になると思ったようであり、秀吉が葵を恋愛感情を抱いている事を利用して仲間に引きずり込もうとするが秀吉は葵との距離が縮まる事は願ってもない事なのだが優子から受けるであろう折檻を思い浮かべて顔を青くしながら葛藤し始める。

「わかった。ひばり、一先ずは木下姉を捕える事は止めよう」

「……なら、何をするつもり？」

「そうだな。木下姉はリズム感も音感もないが容姿としては外すのはもったいないからな……ん？　海谷」

「何だ？」

理音はこれ以上はひばりの説教を受けるのはきついようであり、優子を力づくで捕える事は考え直すと言うがひばりは理音がまた、おかしな事を考えていると思ったようで彼をジト目で見ると紫音は陸を呼び、

「……今から木下姉のアニマトロニクスを作るとなるとどれくらいの時間がかかると思う？」

「アニマトロニクスか？　……そうだな。確かにあのリズム感や音感のなさを考えると代替を用意するのは悪い案じゃないな。実際、本人も双子の弟をそれに使おうとしたわけだしな。俺とお前なら出来なくはないと思うが問題は」

「部品調達か？」

「後は木下姉の詳細なデータだな」

「それは問題ない。身長体重から、新たに手に入れたリズム感や音感。その他モロモロ」

いかれた科学者2人はまた、おかしな事を考え始めて口元を緩ませ始め、

「アニマトロニクス？」

「えーと、確か、映画とかで使われる生き物そっくりの動きをするロボットでしたよね？」

「うむ。合っているのじゃが……姉上は逃げた事でもっと飛んでもない事になっている気がするのじゃ」

ひばりは理音と陸の口から出る聞きなれない言葉に首を傾げると葵は自信なさげに話すと秀吉は演劇を勉強しているためか理音と陸の話しているものを知っているようで頷くが秀吉はこれから優子に起こる事が理音と陸に捕まる以上におかしな事になるのではないかと

顔を引きつらせる。

第２１２問

「まぁ、とりあえず、今は材料もないからどうしようもないから練習に戻るか？」

「リオ、ヒロは良いの？」

「ん？　大貴は運動神経も良いし、問題ないだろ。リズム感も悪くないしな」

理音は部品もないから、優子のロボットを作るのは後回しにすると明久は逃げ出した大貴を探しに行かなくても良いのかと聞き、理音は少しだけ考えると大貴なら心配ないと言い、

「確かにな。悪いのは召喚獣の扱い方だけってのもな」

「まぁ、身体を使う事って考えれば大貴はこの中でも……ずば抜けてる」

「理音、こっちを見て言われると悪意しか感じないんだけど」

「ん？　それは気のせいだ」

終夜は文句も言いながらもすでにダンスは良いところまできている大貴の事を思い浮かべて苦笑いを浮かべ、理音は望に視線を向けた後に大貴の運動能力を誉めると望は眉間にしわを寄せる。

「一先ずは練習に……いや、今日はここまでか？」

「どうかしたのか理音」

理音は練習に戻ろうと言いかけるが彼の視線は窓の外を見て止まり、練習を切り上げるかと聞き、雄二は理音の言葉に首を傾げるが、

「雨？　それも結構強いね。いつから降ってたんだろう？」

「本当だ。いつの間にか真っ暗になってるね」

ひばりと明久は理音の視線を追いかけると窓の外は真っ暗になっており、

「マスター、前田博士、天気予報ではこの雨はもっと強くなるそうです。明日の朝まで続くようなので早く帰りましょう」

「インターネットの天気予報など信じる価値などない」

「いえ、研究所へ連絡を取りました」

マーナはこの雨が一時的なものかを調べたようで理音と陸に声をかけると陸は基本的にマーナは役立たずと思っているようで彼女の意見を切り捨てようとするがマーナも自分の意見が直ぐに受け入れられないのは理解しているようで裏付けは取ってあるようであり、

「なら、降るな」

「そうだな」

理音と陸は研究所の一言に大きく頷くと、

「……研究所って出るだけで意見が変わるのはどうかと思うけど、確かに女子も多いし、何かあったら困るしな」

「そ、そうですね！？」

終夜と瑞希はダンスチームを見て女子生徒が多い事もあるため、理音の言葉に頷いた時、雷が鳴り響く。

「……雄二、怖い」

「しょ、翔子！？　嘘を吐くな」

翔子は雷の音が怖いと言うと雄二に抱きつき、雄二は翔子から必死に逃げだそうとする。

「望、私も怖い♪」

「……白石、ここでダイブは止めろと言っているだろ」

「酷いよ。望、避ける事ないじゃないか」

沙耶は翔子の様子に自分も望に抱きつこうとするが望は沙耶の突撃を交わし、沙耶は顔から床にダイブしそうになるが理音が彼女の首根っこをつかみ、沙耶を安全に床に立たせると沙耶は頬を膨らませて望に文句を言い始め、

「それじゃあ、今日は解散で良いのよね？」

「そうだな……しかし、雷はどうしてこうわくわくするんだろうな？」

「あれだろ。強いからだろ」

「そうだね。雷は強そうだよね」

友香は窓の外を見てから理音に確認するが理音は頷いた後に何か変なスイッチが入っており、次の雷を待っているようにように見え、陸と明久もその言葉に頷き、

「……どうして、前田と海谷はおかしなところスイッチが入るんだ」

「秋月、何を言ってる？　雷の破壊力は何かに利用できそうじゃないか」

「自然界のパワーは侮れないんだぞ」

「良いから、帰ろうよ。怜生くんも迎えに行かないといけないんだから」

終夜はいかれた科学者2人の様子に大きく肩を落とすと2人は反論しようとするがひばりは長くなりそうだと思ったようで話を切る。

第２１３問

「停電だな」

「そうだな」

手早く片付けを終えると理音、ひばり、明久、大樹、終夜、陸、瑞希、美波、美春の９人は怜生と瑠衣を迎えに行くと雷が鳴り響くと同時に停電になり、女性陣が小さく驚きの声をあげるなか、理音と陸だけは暗闇の中、小さく口元を緩ませており、

「……陸、前田、雷の灯りで子供達が泣くから、表情を戻してくれ」

「ん？　すまない」

雷が鳴るたびに映る２人のシルエットに大樹はため息を吐くと理音は大樹に謝ると、

「しかし、参ったな。停電の復旧もいつになるかわからないしな。とりあえずは灯りをつけたいからロウソクを用意したいけど」

「子供が多いと危ないよな」

大樹は親が迎えに来ていないため、まだ残っている園児達も多いためかロウソクは危ないかなと頭をかくと終夜も頷くなか、

「前田、とりあえず、昨日、貰った自家発電のシステムなんだが」

「ん？　使えるのか？」

「材料しだいだな。前田、これとこれを持っていないか？　できれば、これもあると良いんだが」

いかれた科学者2人は懐から懐中電灯を取り出すと懐中電灯の灯りの下で怪しげな話し合いを始め出す。

「……家に帰った方が良いかな？」

「そうしたいけど、何か無理そうだよね」

終夜はおかしな事に巻き込まれる前に瑠衣を連れて帰ろうとするが怜生と瑠衣は残っている友達の事を置いて行けないようであり、ひばりは2人が友達の事を思ってやれている事が嬉しいようで嬉しそうな表情をすると、

「……ヒロ、とりあえずはホールは無理だが教室1室くらいの灯りなら確保できそうだぞ。どの教室に灯りを点ける？」

「あぁ。ちょっと待っててくれ。とうさん、かあさん、陸と前田が灯りを付けてくれるって言うから」

陸は理音との算段で灯りの確保が出来そうだと言うと大樹は直ぐに両親にどの教室を使って良いかを確認し、直ぐに園児達を連れて教室に移動し、

「……陸、間違っても爆発の明りとかは要りませんわよ。豚野郎、陸がおかしな事をしそうになったら全力で止めなさい」

「わかってる。それくらいは空気を読む」

「俺は海谷と違って爆発物の材料は花火しか持っていないから、このシステムには組みこめない」

美春は準備を始めている理音と陸に釘を刺す。

「アキ、悪いが、懐中電灯でこっちを照らしてくれるか？」

「う、うん。ねぇ、リオ、懐中電灯ってこれだけ？」

「どうかしたか？」

「いや、もう少し灯りがあった方が子供達も安心かな？　と思ってさ」

理音は作業に入るため、手元を照らして欲しいと明久に頼むと明久は懐中電灯が他にないかと聞き、

「あぁ。後、５本あるが、暗闇で懐中電灯は遊びたくならないか？」

「……相変わらず、何で、そんなに物を持ち込んでるんだ？」

理音は懐から懐中電灯を取り出すと終夜はため息を吐くと、

「お兄ちゃん、トイレ、行ってきたいです」

「あぁ。悪いな。誰か付いて行ってやってくれ」

怜生は理音の懐中電灯を手に取るとトイレに行ってくると言い、理音は１人は危ないと思ったようであり、誰かに付いて行って欲しい

と頼むと園児達だけではなく女性陣は懐中電灯を手にぞろぞろと歩き始め、

「……怜生くん、気を使いすぎだろ」

「まぁ、気にするな」

空気を読み切った怜生の行動に終夜は苦笑いを浮かべる。

第２１４問

「あぁ。わかった。そっちも気をつけろよ」

「理音もね。怜生の事を任せるわよ」

発電機を起動させて教室に灯りが点くと理音の携帯電話が鳴り、怜奈は仕事で遠出をしていたようで電車が止まり、今日中に帰れないようである。

「理音くん、おばさんなんだって？」

「今日は帰れないかも知れないそうだ」

「おかあさん、大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。部屋も取れたって言ってたしな」

怜生は怜奈が帰って来れない事に心配そうな表情をすると理音は優しく怜生の頭を撫でると、

「……しかし、凄いな」

「ボク達も今日は家に帰れるかわからないね」

雨と風はさらに勢いを増して行き、明久は自分達も家に帰れるかと苦笑いを浮かべる。

「一先ずは電気が普及しないと近いとは言え、危ないからな」

「そうね」

終夜も美波も理音達と同じく足止めを喰らっているため、苦笑いを浮かべた時、

「あれ？　電気が点いてるです」

「本当だ」

「あれ？　葉月に静馬くん？」

雨に濡れてぐちゃぐちゃになった美波の妹も『島田葉月』と大貴の甥の『沖田静馬』が幼稚園に顔を出す。

「お姉ちゃんもお兄ちゃんもいたですか？　葉月、瑠衣くんを迎えにきたです」

「そう。それより、どうするのよ。こんなに雨に濡れて風邪、ひいたらどうするの？　それにこんな雨の中、無茶したらダメよ」

「前田、タオルとかは持ってないよな？」

葉月は笑顔で終夜と美波に駆け寄ると美波は少し困ったように笑い、終夜は有ったら儲けものくらいの考えで理音にバスタオルはないかと聞くが、

「流石にリオの着替えだと2人には大きくないかな？」

「そうかも知れないけど、着替えないと風邪をひいちゃうし、仕方

ないよ。美波ちゃん、葉月ちゃんの頭をこれで拭いて、静馬くんも」

「葉月に静馬、ホットミルクが良いか？　それともココアか？」

「順番に並んでくださいね」

「まったく、落ち着きなさい」

バスタオルだけではなく、終夜の予想を大幅に超え、着替えと理音はカセットコンロで牛乳を温めて園児達に配り始めており、

「……俺の常識がおかしいのか？」

「……違うと思うぞ」

終夜は眉間にしわを寄せると大樹は苦笑いを浮かべる。

「ヒロ、それで、園児達の保護者はどうなっているんだ？」

「あぁ。やっぱり、迎えにこれなさそうって保護者も多くてな。絶対に行くって言う保護者もいたけど流石に危ないから、待って貰ったけど……当面の問題は食事だな」

「そうか。前田、夕飯は何が作れそうだ？」

陸は残っている園児達の保護者が迎えに来れるかと聞くと大樹は無理そうだと笑い、夕飯をどうするかと頭を抱えていると陸は当たり前のように理音に声をかけ、

「ん？　そうだな。とりあえずはカレーくらいは作れそうだが……

問題はふくしん漬けがない事だ。らっきょはあるんだがな」

「問題は米を炊くには炊飯器が小さい事か？　まぁ、これは何回かに分けるしかないか？」

「そうだな。5台も使うと電気が不足するだろうしな」

「……前田、1度、本気でお前の制服の中を見せてくれ」

理音は当然のように人数分のカレーライスを作る材料と道具を取り出すと陸と電気の確保について話し始めるが終夜は理音の制服の中が気になるようだが、

「……悪いな。秋月、俺にそっちの気はない」

「しゅ、終夜、まさか」

「待て。おかしな事を言うな！？」

理音は終夜の言葉に1歩下がると美波は終夜の言葉に戸惑いの表情が隠せないようであり、終夜は慌てて広がりかけたおかしな空気を振り払う。

第２１５問

「……豚野郎、まさか、それを隠すためにお姉さまに近づいているのですか？　そうなると本命はまさかヒロ？」

「清水、頼むからおかしな事を言わないでくれ。俺はノーマルだからな」

しかし、美春は終夜が必死に振り払おうとしている空気など気にする事無く、頭の中で勝手に答えを導き出し、終夜は大きく肩を落とすが、

「許しませんわ。豚野郎！！　同性愛をバカにするばかりか。その隠れ蓑にお姉さまを利用し、狙っている相手がヒロなんて、美春は絶対に許しませんわ！！」

「……ヒロ、今更だが、美春は悪化してないか？」

「まぁ、島田さんに出会ってから、確実に悪化しているだろうな」

美春の勘違いはさらに暴走して行き、その様子に美春の幼なじみ２人は大きくため息を吐く。

「さてと、とりあえず、遊んでいても仕方ないから、カレーでも作るか？」

「……理音くん、どうして、そんなにマイペースなの？」

「良いだろ。あの様子に子供達は喜んでいるしな。それより、ひば

り、手伝ってくれ」

理音は美春が終夜に攻撃を開始し始めるが気にする事無く、ひばりは大きくため息を吐くが理音は美春の攻撃を交わす終夜の様子に歓声を上げ目を輝かせており、理音は料理を始めようとするが、

「清瀬、海谷、秋月の命が危なくなったら、止めてやれ」

「いや。まぁ、それはそうなんだけど、大丈夫か？」

理音はひばりが文句のありそうな表情をしているため、大樹と陸に美春が終夜を殺さないように頼み、大樹は眉間にしわを寄せると、

「そうだな。先に止めるのは海谷かも知れないな」

「り、陸、お前は何をしようとしてるんだ！？」

「何を？　愚問だな。やはり戦闘には爆発と言った派手さがないといけないだろ」

理音は陸に視線を移すと陸は懐から何か怪しげな爆発物らしき物をセットし始めており、大樹は慌てて陸を引き留め、

「……海谷、爆発はまた今度、晴れた夜にでも花火にして子供達に見せてやれ。流石に室内でお前の爆発物は危険だ」

「仕方ないな。また、今度に……なんだ？」

「瑠衣くん、葉月、危ないから近づいちゃダメよ」

理音は陸の行動を止めると陸は状況が状況だけに理音の言葉に頷いた時、瑠衣が陸の足元に移動して陸の顔を見上げており、美波は慌てて葉月と瑠衣を呼び戻そうとするが、

「お兄さんは花火を作れるですか？」

「花火？　勘違いするな。花火ではない。芸術だ」

「芸術？　良くわからないですけど花火はキレイです」

葉月と瑠衣は花火が見たいようで目を輝かせ始め、２人以外にも園児達が陸の足元に集まり始める。

「……陸、頼むから、子供達におかしな事を教えないでくれ」

「いや、今回に関しては俺は悪くない……前田、支倉、傍観を決め込んでないで助けろ」

大樹は園児達に陸がおかしな事を教えないか心配なようで大きく肩を落とすが陸はこの状況にどうして良いのかわからないようで理音とひばりに助けを求めるが、

「ひばり、始めるか？」

「そうだね」

「前田くん、ひばりちゃん、私もお手伝いします」

理音とひばりは陸を見捨てて夕飯を作り始めようとすると瑞希も手伝うと手を上げる。

第２１６問

「ん。そうか。寝言は寝て言え」

「ど、どうして、そんな事を言うんですか！？」

理音は表情を変える事なく、瑞希の手伝いなど要らないと言い切るが瑞希は理音の言葉に驚きの声を上げ、

「瑞希ちゃん、アキくん、どうしようか？」

「えーと、怜生くん、任せた」

「はい。瑞希お姉ちゃん、遊んでください」

「れ、怜生くん、私はお夕飯を作りたいんです。吉井くんに私の料理を食べて貰いたいんです」

ひばりと明久は瑞希の扱いに困り、苦笑いを浮かべると怜生が瑞希のそばまで移動し、瑞希の手をつかみ引っ張って行き、瑞希は園児達に囲まれ、

「後は美春を封じ込めれば危険物は除去できるか？」

「清水は一先ず、秋月に任せておけば良いだろ。秋月の身体能力を考えれば夕飯ができるまでは逃げ切れるだろ。何かあったら、麻酔銃でも撃ち込めばいい」

「えーと、それで良いのかな？」

大樹は陸と瑞希が園児達に捕まり、終夜を追いかけ回している美春に視線を移すと理音は現状維持でも問題ないと言い切り、ひばりは大きく肩を落とした時、

『怜生くんのお兄さん、人参も入れるんですか？』

「ん？　あぁ。入れるがどうかしたか？」

『人参、嫌いです』

1人の園児はカレーの材料を覗きこんで人参は食べたくないと言う。

「ダメだよ。好き嫌いは良くないよ。好き嫌いをすると大きくなれないんだよ」

『お姉ちゃんは好き嫌いが多かったんじゃないですか？　それなのに』

「あたし、そんなにちっちゃくな……」

ひばりは園児に言い聞かせるように言うが園児はひばりの身長に園児はひばりが好き嫌いが多いと判断したようであり、不満そうな表情をするとひばりは身長の事を言われて条件反射なのか声を上げようとするが、

「……ひばり、子供相手にムキになるな」

「えーと、大きくなりたかったら好き嫌いしないで何でも食べようね。ボク達が君が食べれるように美味しく料理するから」

理音はため息を吐きながら、ひばりを押さえつけると明久が園児と目線を合わせて言い、

「良いか。身体を作るには必要な栄養素と言うものがあってな。中には例外もいるが好き嫌いをすると成長に影響がでる。それに風邪をひきやすくなったり、虫歯にもなりやすくなってな」

『……お注射と歯医者さんはイヤです』

「何を言っている。ドリルはロマンだ」

「前田、そんな事を言っても子供達には理解できないからな」

理音は身体を作るために必要だと言おうとするが園児には難しい話など理解する事はできず、大樹は苦笑いを浮かべると、

「支倉、吉井、料理を任せるぞ。前田が自分より、2人の方が料理が美味いって言ってたからな。この子の人参嫌いを直してくれよ」

「それはちょっと責任重大かな？」

「そうかもな」

大樹は料理には包丁などの刃物を使うため、園児の手を引いて行き、理音と明久は苦笑いを浮かべる。

「一先ずは人参の形がない方が良いか？」

「でも、もう人参があるのはばれてるし、良いんじゃないかな？」

理音は人参を摩り下ろそうとするとした時、

「理音くん、人参はこれしかないの？」

「ん？　あまり人参だけあっても仕方ないから出していないだけだぞ」

「それじゃあ、キャロットケーキを作るから材料を出して」

ひばりは身長をバカにされた事もあるのかおかしなスイッチが入ったようで人参嫌いを絶対に直すと気合いが入っており、

「ひばり、理音だって何でも持っているわけじゃないんだから」

「まぁ、無い事もないんだがオーブンは電気を使うんだが、ただでさえ、炊飯器で電気を使うんだが」

「理音くん」

理音は材料を取り出すが電気が足りないと言うがひばりは笑顔で理音の名前を呼ぶと、

「アキ、ここは任せるぞ。俺は今から風力発電用のプロペラを取り付けてくるから」

「ちょ、ちょっと、リオ、ストップ！？　ひばりも落ち着いて！？」

理音は電気の使用できる量を増やそうと外に出て行こうとするため、明久は慌てて理音を引き止め、ひばりに考え直すように叫ぶ。

第217問

「前田さん、ありがとうございました」

「あぁ。大貴は無事に家に着いていたか？」

「はい。途中で街頭が消えたせいで、優子さん達と一緒に家にいるみたいです」

静馬は家に帰れる状況ではないため理音から携帯電話を借りて大貴と連絡を取ると優子、秀吉、葵の3人は停電になった後にどうやら大貴の家に避難したようである。

「そっか。烏丸くん達は無事なんだね。良かったよ」

「一応、他のメンバーにも連絡を取ってみるか？」

「まぁ、子供じゃないんだ。大丈夫だろ。だいたい、危ないのはここにいるからな」

「……ヒロ、それはどう言う意味ですか？」

ひばりは大貴達の無事に安心したようで胸をなで下ろすと大樹はみんなそれくらいの常識は持ち合わせていると苦笑いを浮かべ、美春は大樹の言葉にとげがあると思ったようで大貴を睨みつけると、

「そうか。停電のなか、大貴の家か……」

「リオ、どうかしたの？」

「ん？　いや、以前に計算すると長い間、停電になった年は出生率が」

「こんなところで何を言うつもり！？」

理音は首をひねりながら何かを言おうとするがひばりのとーるはんまーで遮られるが、

「まぁ、電気も何もないから他にやる事は盛るくらいだな。文明や科学が進んだと言っても人間も動物だと言う事だ」

「……陸、頼むから園児達がいる場所なんだから、もう少しオブラートに包んでくれ」

陸は理音の言葉に頷き、大樹は大きくため息を吐く。

「……ヒロの家に木下さんと秀吉、葵ちゃんまで、ヒロめ、ハーレム状態だと」

「あ、あの。吉井くん、どうしたんですか？」

「何でもないよ。ちょっと、ボクはヒロを血祭りにあげるって言う大事な仕事を思い出しただけだよ」

そんななか、明久は今の大貴の状況を勝手にハーレム状態と認識したようでゆっくりと立ち上がると大貴を血祭りにあげるためだけにこの暴風雨の状況でも外に出て行こうとし、

「明久、落ち着け！？」

「放して。終夜、許せないんだ。ヒロのくせに木下さんに秀吉、葵ちゃんの美少女3人に囲まれてるんだよ。秋月くんは許せるのか！！　男だったら絶対に許せないはずだ！！」

「いや、待て。秀吉は男だからな！？」

終夜は明久を止めるが明久の勢いは納まらず、終夜を引きずったまま外に出て行こうとするが、

「落ち着け」

「いだっ！？　リ、リオ、何をするんだよ！？」

「頭がカラだから良い音がするな」

「まったくですわ」

理音は懐からスリッパを取り出すと明久の頭を思いっきり叩くと小気味の良い音が響き、陸と美春は明久の頭を叩いた音に相応しい音がしたと頷き、

「ちょっと、それは酷いからね！？」

「いや、酷くなどない。もう少し考えろ」

明久は声をあげるが理音は眉間にしわを寄せる。

「吉井、この雨の中だと遭難するぞ」

「そうなんですか？」

「……瑞希、悪い。本気でぶっ飛ばして良いか？」

大樹は苦笑いを浮かべながら外は危ないから明久に考え直せと言うと瑞希は街中で遭難などあり得ないと思っているようで首を傾げると彼女の天然が爆発し、理音は眉間にしわを寄せるが、

「ど、どうしてですか！？　私、何もしてないですよ」

「そ、そうだよ。理音くん、いきなり何を言ってるんだよ」

ひばりと瑞希は発言の重要さに気づいていないようで慌てはじめ、

「支倉さん、前田だと危ないからいつものあれで姫路さんにツッコミを入れるべきだよ」

「そうだな。ここはツッコミを入れるところだな」

「ど、どうして！？」

大樹と終夜はひばりの肩を叩いて瑞希にツッコミを入れろと言う。

第２１８問

「『遭難』と『そうなんですか』がかかっているから、ここはボケになり、ツッコミが必要なんだ。ひばり、瑞希、、わかるか？」

「うん。何となく」

「そ、そうだったんですか。そうとは知らずに、す、すいませんでした」

理音はひばりと瑞希に先ほどの事を説明すると瑞希は慌てて謝っているが、

「……改めて、オチを説明するなんて烏丸が見たら説教ものじゃないのか」

「普通は説明なんてしないだろうからな」

３人の信じられない光景に大樹と終夜は苦笑いを浮かべると、

「ひ、ひばりちゃん、私はボケてしまったみたいなのでお願いします」

「えっ！？　ちょ、ちょっと待って、ど、どうしてそうなるの！？」

「だ、だって、必要な事なんですよね？」

瑞希は自分がボケたのでひばりに面と向かってツッコミを入れて欲しいと頼み込む暴挙に出始め、

「……天然は恐ろしいな」

「そうだね。あれは完璧なツッコミつぶしだよね」

理音と明久は瑞希の行動に眉間にしわを寄せる。

「前田、ご飯が炊けたみたいだけど、子供達に食べさせて行っても良いのよね？」

「ん？　あぁ。すぐに第二陣の用意をする……なぁ。今更何だが、カレーうどんにする人間はいるか？　こっちの方が速いぞ」

「……本当に今更だな」

美波はご飯が炊けたため、炊飯器の容量もあるためか先に園児達の夕飯の準備を始めると理音は何かに気づいたようで懐から乾？のうどんを取り出し、終夜は大きく肩を落とすが、

「……どうでも良い事なんだが、素麺や冷麦の色が付いている麺があるだろ」

「うん。赤とか青の何本か入ってる奴だよね。あれを見つけると嬉しくなるよね」

「……はい」

理音と明久は本当にどうでもいい話を始め出し、明久の言葉に怜生と瑠衣を筆頭に多くの園児達が頷く。

「豚野郎どもそれは今、話す事なのですか？」

「まぁ、聞け。その何本か色が付いているのを見つけるのが少しわくわくするのは否定しないだろ？」

「……ええ。豚野郎に共感するのは一生の恥ですが、確かにわかりますわ」

美春は理音と明久の会話に大きくため息を吐くが理音の言葉に悔しいそうに頷き、

「この間、タイムサービスで全ての麺に黄色や緑と言った他の色も混じっているものを見つけたんだが、趣にかけるよな？」

「……前田、その工場をつぶしに行くか？」

「待て！？　陸、お前まで何を言い始めるんだ！？」

理音は大好きなタイムサービスで許せないものを見つけたと言うと陸は眉間にしわを寄せて立ち上がり、陸の様子に大樹は慌てて彼を止めるが、

「……それは許せませんわね」

「だろ。白い麺の中に数本ある青や赤の麺。あのバランスがあるからこそそのもののはずだ」

「うん。全部が色付きなんてそんなのはボク達が求めているものじゃないよ。そんなものにはロマンはない！！」

大樹の心配以上に色付き麺は重要な事のようで騒ぎは感染拡大しており、

「……支倉、頼む。俺にはあれだけ盛り上がれる理由がわからない」

「そ、そうだよね。秋月くんは海外生活が長いからわからないよね」

「……ひばり、ひょっとして、ひばりもあの騒ぎの言い分がわかるの？」

「ちょ、ちょっとだけ」

終夜と美波は色付き麺に対してあまり思い入れがないのか眉間にしわを寄せてひばりにツッコミを入れように言うがひばりは少し理音達の言う事もわかるようで2人から気まずそうに視線を逸らす。

第２１９問

「しかし、止まないな」

「そうだね」

夕食を終えて理音とひばりは食器を片づけていると、

「失礼する。竹原と言います。孫を迎えに来ました」

「ん？　竹原？」

この雨の中、園児の保護者が迎えにきたようであり、大樹の両親と話をしている声が聞こえると理音は聞こえた名前に首をかしげ、

「竹原って教頭先生だったりして」

「まぁ、それなりに良い年だからな。あの妖怪にだって孫がいるんだ。おかしくはないだろ」

「理音くん、学園長先生の事をそんな風に言ったらダメだよ」

ひばりは竹原教頭かもと苦笑いを浮かべると理音は特に否定する事はないが理音の言葉には問題もあるため、ひばりは大きくため息を吐く。

「前田、タオルってもうないか？　教頭先生が雨の中にお孫さんを迎えにきたんだけど、雨でぐちゃぐちゃなんだよ」

「あぁ。それで飯は食ったのか？」

「いや、学園から直接、来たらしい。飯なんて食うヒマはないだろ。仕事熱心だよな」

来客は理音とひばりの予想通り、竹原教頭だったようで大樹が理音にタオルの予備がないかと聞きにくると理音は懐からタオルと服を取り出し、大樹に竹原教頭の状況を聞くと大樹は竹原教頭の野心を知らないためか感心しているようであり、

「そうか。なら、うどんでも茹でるか。米を炊くには時間がかかる」

「あぁ。頼むよ」

理音は気にする様子もなく、懐からうどんの乾麺を取り出すと大樹はその様子に苦笑いを浮かべて理音から受け取ったタオルを持って戻って行き、

「理音くん、良いの？　教頭先生って、学園長先生の敵になるんじゃないの？　それに烏丸くんの事も……」

「別に気にする必要はないだろ。それに子供達の前で何かをするわけにもいかないし、あいつも仕掛けてこないだろ。仕掛けるような人間ならこんな雨の中、わざわざ、孫を迎えには来ないだろうしな。何より、あの男は迂闊で頭脳派を気取っているが不意のアクシデントに弱い。この状況では何もできない」

「その言い方はどうかと思うけど、そうだね。お孫さんの前ではおかしな事はしないよね」

ひばりは竹原教頭が召喚システムの事を狙っている事を理音から聞いているため、不安そうな表情で理音の服をつかむが理音は特に気にする様子もなく、ひばりは理音の言葉に不安を振り払うように頷くと、

「それじゃあ。おうどん、茹でちゃおうか」

「あぁ……爺だから、カレーうどんはきついか？」

「その言い方はどうかと思うけど、ちょっと重たいかな？　普通におうどんのつゆって作れる？」

「あぁ」

理音とひばりは竹原教頭の夕飯を作り始めた時、

「どうも。すいません……ま、前田！？」

「竹原教頭、お疲れさまです」

「お疲れさまです」

竹原教頭は大樹からタオルと替えの服を借りたため、貸してくれた人間に礼を述べに来て理音の顔を見て驚きの声を上げるが理音とひばりは気にする事なく挨拶を交わし、

「竹原教頭、爺だからカレーうどんは重たいか？」

「理音くん、聞き方に問題があるよ」

「な、なぜ、お前がここに？」

理音とひばりは竹原教頭が顔を出したため、夕飯のメニューを聞くが不意打ちで理音に遭った竹原教頭はそれどころではなく慌てて理音がここにいる理由を聞く。

第２２０問

「なぜ？　意味がわからん」

「理音くん、意味がわからないじゃないよ。教頭先生、理音くんはここに弟の怜生くんが通っているんです。あたし達は怜生くんを迎えにきた時に停電にあって」

「この幼稚園だけに電気が点いているんだ。ある程度、予想できるだろ」

「そんなのできるわけないでしょ。普通は制服の中から発電機の部品は出てこないからね」

竹原教頭が慌てる意味に理音は興味などないようだが、ひばりはため息を吐きながら竹原教頭に自分達がこの場所にいる理由を話すと、

『おじいちゃん』

「どうかしましたか？　……何かあったのか？」

竹原教頭の孫なのか小さな女の子が駆け寄ってくると竹原教頭はだらしなく表情を緩めた後に理音とひばりの視線に咳を１つして表情を戻すが、

「……孫バカか？」

「理音くん、そんな事を言ったら教頭先生に失礼だよ。だいたい、理音くんだって、怜生くんに甘いでしょ」

「まぁ、否定はしないが怜生に甘い事はひばりには言われたくはないんだが」

理音は表情を変える事なく頷き、ひばりは理音の言葉に大きく肩を落とすが理音は怜生に甘いのは自分だけではないためか納得がいかなさそうであり、

「それで、竹原教頭、カレーうどんと普通のうどん、どっちが良いんだ？　……カレーうどんだと俺のシャツがダメになるな」

「カレーのシミはなかなか落ちないからね」

理音は竹原教頭にもう1度、夕飯のメニューを聞くと竹原教頭に貸した自分のシャツにカレーのシミが付く事を危惧して眉間にしわを寄せ、ひばりは大きく頷き、

「白スーツに付いたカレーの汚れを落とす洗剤を作れば売れるか？」

「……どうして、そんなピンポイントの汚れに食いつくの？」

「……普通のうどんにしてくれ。わ、私はこの子と一緒にいる」

理音は何か思いついたようで目を輝かせるとひばりはため息を吐くが竹原教頭は理音におかしな姿を見せると弱みを握られると思ったようで普通のうどんを頼むと孫娘を連れて部屋を出て行く。

「理音くん」

「待て。俺は悪くない。だいたい、竹原教頭だってこの場所では何

もできないだろ……いや、せっかくのこの状況だ。孫娘を捕まえて、おかしな事をしないように脅迫するのは悪い手ではないか？」

「理音くん、おかしな事を言わないでよ。ここの子供達には関係のない話なんだから、巻き込んだらダメだよ」

ひばりは竹原教頭が逃げるように出て行った様子に理音を軽く睨みつけるが理音は自分が悪くないと言いつつもその思考はおかしな方向に傾いており、ひばりは大きくため息を吐くと、

「冗談だ。だいたい、そんな事をしなくても負ける予定もないんだ。勝手に自滅する人間相手に動くのは無駄な労力を使うだけだ。俺はそんなにヒマじゃない」

「その答えもどうかと思うんだけど」

「まぁ、気にするな。それより、身体を拭いたとはいえ、年寄りだし体温は下がっているし、煮込むか？」

「鍋焼き？　うん。そうだね。雨に濡れたわけだし、温かい方が良いよね」

理音はやはり竹原教頭の事などたいした脅威だとは思っていないようであり、対応はただの年寄り扱いである。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2587p/

サドで邪悪な召喚獣if～サドとちっちゃな幼なじみ～

2012年1月15日01時46分発行